

仮面ライダービルド × Fate/NEW WORLD

おみく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

過酷な戦いの果てに新世界へとたどり着いた桐生戦兔は、何者かの策略によって、第四次聖杯戦争下の冬木を再現した仮想空間^{ゲームエリア}へとその意識を取り込まれてしまった。

果たして、戦兔は無事に聖杯戦争を勝ち抜き、元の世界に帰ることができるのか？

聖杯戦争を舞台に、仮面ライダービルドの新たな戦いがはじまる！ 的なお話。

※ Fate/Zeroの物語に仮面ライダー要素をぶち込んでついでに参戦サーヴァントも改変しちゃった系の小説です。原作改変モノやクロスオーバーモノが苦手な方はブラウザバック推奨。

目次

第1話「ゲームの世界へ」	1	第9話「街に潜むシャドウ」	189
第2話「そして始まるフェイト」	22	第10話「もうひとりのドリフター」	221
第3話「胸に秘めたジャステイス」	45	第11話「燃えろドラゴン」	250
第4話「八華のランサー」	68	第12話「同盟のセオリー」	285
第5話「再演のソードレジェンド」	89	第13話「勝利へのタクティクス」	314
第6話「サーヴァント参集」	115	第14話「忠節のブロークンナイト」	343
第7話「エルメロイ会談」	137	第15話「明かされるトゥルース」	372
第8話「動き出すアウトサイダー」	160	第16話「深層のデザイナー」	412
		第17話「誰が為のヒーロー」	442

第18話「嗤うプリースト」	—	—	481
第19話「戦場のリユニオン」	—	—	520
第20話「ハザードを乗りこなせ」	—	—	805
651			
第21話「キングが斬る！」	—	—	588
第22話「皇帝・ゴールデンファイバー」	—	—	617
第23話「レイドバトル開幕」	—	—	647
第24話「決戦へのレゾリユーション」	—	—	909
680			
第25話「カオスは加速する」	—	—	710
第26話「追想のデイスペア」	—	—	739
第27話「救済のアイ・ベグ・ユウ」	—	—	976
第28話「旅立ちのベルが鳴る」	—	—	770
第29話「渋滞するアルゴリズム」	—	—	842
第30話「凍りついたメモリー」	—	—	879
第31話「裏切りのアサシネイト」	—	—	940
第32話「レゾンデートの祈り」	—	—	976
第33話「終わりのクロニクル」	—	—	976

第34話「ログ新生」



第1話 「ゲームの世界へ」

檀黎斗神は、無数に建ち並んだ高層ビルよりも遥かに高い空に、ひとり、ぼつんと浮かんで街を見下ろしていた。

眼下に広がる鉛色のビルの群れは、視線の先でぱたりと途切れている。青い川が街を分断するように流れているからだ。川によって分断された街の西側と東側を、真紅の大桥が繋いでいる。橋はこの街にたったひとつしか存在しない。

未だ発展途上の地方都市、冬木。

生前の黎斗がとある記録を元にして、当時の街の状況を住民含め可能な限り細密に再現し作り上げた仮想世界^{ゲームエリア}、それが眼下の冬木市だった。

この世界が完成したとき、始めこそその会心の出来にうっとりとしたものだが、その感動も今やすっかり摩耗して、今はもう、己の神にも等しい才能に酔い痴れる以外の感嘆はない。

どんなに素晴らしい世界を創造したところで、攻略しようと挑む挑戦者^{プレイヤー}がいなければ虚しい夢に過ぎない。物語を始めるものが現れなければ、ゲーム世界はただ、プログラムミングされた通りに変わることのない日常を繰り返すだけだ。眼下に溢れる無数のN

PCは誰ひとり黎斗を認識せず、せつかくの神の才能は行き場を失くしてさまよっていた。

経過時間のカウントすら進まない無間の空間で、何ヶ月、あるいは何年に及ぶかもわからない静寂が続いた。既に消滅した現実世界の檀黎斗神が遺したこのゲームエリア内で、オリジナルの檀黎斗神が遺した分身バッドアップは、この世界の案内人ナビゲーターとして、いつか来る挑戦者プレイヤーを待ち続けていた。

あるとき、赤い光が街に降り注いだ。つられて黎斗は空を見上げる。黎斗が創造したこの世界で、黎斗の意思に関係なく変化が訪れることなど、ありえない。外部から何者が干渉してきたと考えるのが筋だ。

赤い光はやがて靄となった。靄は蛇のようにうねり、尾を引きながら高層ビルの屋上へと集積してゆく。黎斗も空を飛び、靄の隣へと降り立った。降り積もった靄は少しずつ実体を持ち、それは徐々に、ひとのかたちを形成してゆく。黎斗の眼前に、赤いボディスーツと装甲に身を包んだ人影が姿を現した。胸にはエメラルド色のコブラに似た衣装が輝いており、瞳を覆うバイザーも同様にエメラルド色をしている。

「やれやれ、仮想世界ですらこの姿が限界か。我ながら、随分と手ひどくやられたもんだ」

老獪さを感じさせる低い男の声だった。黎斗は現れた赤い男に人差し指を突きつけ、

誰何する。

「なんだおまえは。この神の領域に無断で足を踏み入れるとは無礼者め……名を名乗れエー！」

「お前がこの世界の案内人か。そうピリピリするなよ、敵意はない。俺の名はア……そうだなあ、ブラッドスタークとでも名乗っておこうかア。親しみを込めて『スターク』とでも呼んでくれ！」

スタークと名乗った男は、指先まで赤に覆われたその手を頭の横で軽く振ってみせた。敵意はないということは伝わったが、歓迎するのはまだ早い。黎斗は考えるように腕を組み、うつむきがちに己の顎に指を添えた。

「そのスタークとやらが、いったいどうやってこの世界に干渉してきた」

「恥ずかしい話だが、現実世界の方でやらかしちまってねえ。俺の本体はとつくに消滅しちまったが、意識だけはかろうじて残ったんで、完全に消滅する前にこっちに逃げてきたってわけだ」

「逃げてきた？ 見たところ、貴様はバグスターでもなければ仮面ライダーでもなささうだが」

黎斗は目を細め、スタークをつま先から頭まで舐めまわすように眇めた。対するスタークは特段気分を害した様子もなく、余裕ぶって笑うだけだ。

「ま、似たようなもんさ。尤も、今の俺は、そのバグスターってのに近いんだろうがな」
「貴様、バグスターを知っているのか」

「知つてるとも、俺の世界にもバグスターウイルスを研究している人間がいたからなあ」
どこからか取り出した銃型のアイテムを軽く掲げ、スタークは装填されていた小さなポトルを取り外した。同時に赤い装甲のデータはピクセル化し、霧散してゆく。

一瞬ののち、スタークの装甲の下から、柄物のワイシャツの上にベージュ色のジャケットを羽織った男が姿を表した。鼻の上には丸眼鏡型のサングラスが乗せられている。人間としての姿は、黎斗よりも二回りほど年上の中年男性のように見受けられた。変身を解除した途端、男の声のトーンは高くなり、まさしく別人の声に変わった。

「ここに逃げ込むのは中々骨が折れたよ。まず手始めにそこらの一般人に俺の意識を憑依させ、そいつの記憶を辿ってガシャットの存在を知った俺は、その技術に再起の可能性を懸けることにした。まったく、憑依したのがあんたの会社の社員でよかったよ」

「お前の話はわかった。だが、このガシャットを見つけ出すのは簡単な話ではなかったはずだ。なにしろこのゲームはいずれ宝生永夢に挑む為に創られた神のゲーム、まだ誰にも知られず封印されていたはず」

「ああ、簡単じゃなかったとも。だが、そういう、封印されてるゲームだからこそいいんだ。誰にも見つかってないってのは、誰の邪魔も入らないってことだろ」

黎斗は、ふむ、と一言唸ると、儼然とした様子で眉根を寄せた。スタークを名乗るこの男がどこまで黎斗のことを知っているのか、探りを入れてみたくなかった。

「ということは、この檀ツ黎斗神の神の才能についても当然知っているんだろうな」

「ああ、知つてるとも！ あんた、過去にも何度かデータ化した自分自身を現実世界に復活させるためにゲームを仕組んだことあるだろ。大した才能だよ。到底真似できるもんじゃない。その神の才能を、今回は俺にもほんの少しだけ分けて欲しいって話をしてきたのさ」

「なんだと」

「あんた、俺と一緒にこのゲームを盛り上げてみる気はないか？」

スタークが変化した中年男は、その顔に深く皺を刻みながら、人懐っこそうに微笑んだ。

パソコンモニターから視線を外し大きく息をついた桐生戦兎は、デスクの上に置かれた銀色の機械に目を向けた。犬の形をしたロボットの外装だ。銀色ののつぺりとした本体には、まだ塗装すらなされていない。パソコンの画面に表示されているのは、戦兎が造ったペットロボットの行動を制御するためのプログラミング画面だった。まだまだ調整が不十分で、誤作動の可能性が大きい。戦兎の理想は、本物の犬と同等の知能を

もって、飼い主と遊び、ともに成長できる高性能AIロボだ。課題は多く、完成は当分先になりそうだった。長期戦が予想される。

「おう戦兔、今度のガラクタはどんなんだ」

「ガラクタじゃねえよ。俺はね、いま、お前のクロースドラゴンよりも高性能なペットロボットを造ってる最中なの」

「（こいつがア？）」

万丈龍我は、胡乱げな眼差しをロボットの外装に向けながら、その胴体を掴み上げた。しばしロボットの顔とにらめっこをしたのち、指先で手足について遊び始める。その姿が、戦兔には人形で遊ぶ子供のように感じられて、思わず笑みを零した。

「そ。売り物なんだから、遊んで壊すなよ」

「壊さねーよ」

いつも通り子供をあしらうように対応しながら、戦兔はここまでのプログラミングデータを保存して、席から立ち上がる。

この新世界において、桐生戦兔と万丈龍我のふたりに市民権はない。そもそも住民としての登録もないので、定職に就くこともできない。生きていくために、戦兔は己の持っている技術を用いて、戦争に使われることのない発明品を生み出し、それをフリーマーケットで売り出す生活を続けていた。

戦兎ほどの才能と実力があれば、己の発明品を自らこの世界の企業に売り込み、技術職で雇って貰うことも不可能ではないのかもしれない。例えば、ゲーム会社の『幻夢コーポレーション』あたりであれば、戦兎の天才的な能力を活かせないこともないだろう。だけれども、万丈を差し置いて自分一人だけが定職を手に入れるのは憚られるし、そもそも自分の稼ぎひとつで万丈を養っていくというのは、いささか気持ち悪い。

現状の生活には満足している。この世界にスカイウォールは存在せず、元の世界で不幸な人生を辿った人々も、この新世界では人並みの幸せを謳歌しているのだ。その中で、戦兎が発明品を造り、万丈がフリーマーケットで売り出し、稼ぐ。決して大金は得られないが、ふたりで細々と暮らしていくのは、これはこれで悪くないと戦兎は思っている。

自分専用のマグカップにコーヒーを注いでデスクへと戻ると、パソコンモニターの端で、メールソフトのアイコンが未読メールの存在を示す点滅を繰り返していた。

「なんだ、誰かからメールが来てるぞ」

「お前いつの間にメル友なんか作ったんだよ」

眉根を寄せて、その大きな瞳を見開いてパソコンモニターを食い入るように見つめる。万丈の軽口も耳を通り抜けていった。

考えられない、ありえないことが起こっている。この新世界に戦兎の連絡先を知って

いる人間など存在するはずがない。一瞬、俯きがちに視線を泳がせ黙考した戦兔だったが、考えても仕方がない。アイコンにカーソルを合わせ、受信したメールを開く。

差出人は。

「エボルト」

画面に表示された、たった四文字の短い名前を、戦兔は淡々と呟いた。

戦兔たち仮面ライダーの宿敵にして、人類の、ひいては星の天敵たる地球外生命体の名前を。

「はア!？」

がしヤン、大きな音を立てて戦兔が造ったロボットの外装が地面に落ちた。戦兔の肩に手を乗せて、万丈もまたパソコンモニターへと身を乗り出す。

新着メールは一件。

差出人はエボルト。

メール本文は空白だが、代わりに添付データが貼り付けられていた。

ふたりの間に無言の間が流れる。怪訝な面持ちのまま、正体不明の添付データにゆっくりとカーソルを合わせる戦兔に対し、万丈は不安げに画面と戦兔の顔を幾度も見比べている。戦兔はちらと万丈の顔を見ると、肺に溜まった空気を鼻から押し出した。こういうとき、知識の面で万丈がまるで役に立たないことを戦兔は知っている。

「なんか添付されてるな……見たことない拡張子っぽいが」

添付データは随分と容量が大きいらしく、圧縮ファイルに変換されていた。ファイルをダウンロードし、解答する。再構築されたデータは、一見、なんのデータか判然としなかった。少なくとも、戦兎の知らないプログラムだ。

「おい戦兎、なんなんだよこれ、なんでエボルトからメールが来てんだよー」

「俺が知るわけないでしょうが」

にべもなく切り替えされ、万丈は懺然として押し黙った。

「……なんにせよ、差出人が本当にエボルトなら、まずはこのデータを解析する必要がある」

「俺はどうすりゃいい!?!」

戦兎の肩に手を乗せたまま、困惑の色を濃く顔に滲ませている万丈を安堵させるように、戦兎は努めていつも通りの様子で頬を緩めた。

「今日の分の売り出しにいつてこい」

万丈の額を指先で軽く小突く。万丈は数歩よろめきつつも、戦兎の意図を汲み取ったのか単なる馬鹿なのかは知らないが、戦兎が今日まで造ってきた発明品を抱え、早々に飛び出していった。万丈が去ったあと、地面に置き去りにされたペットロボットの外装に視線を向ける。脚が取れていた。

「つたく、あれだけ壊すなって言ったのに」

軽く肩を竦め、戦兎は笑う。この生活を、これはこれで気に入っているのだ。せつかく到達した新世界を、再びエボルトに脅かされるわけにはいかない。このメールがエボルトからの挑戦状というのならば、天才物理学者の戦兎が解いてみせるしかない。戦兎は息抜きに淹れたコーヒを一口胃に流し込みつつ、パソコンモニターに向かい合った。

あれから数時間ののち、万丈は、エボルトから届いた添付データの解析を戦兎ひとりに任せたことを強く後悔した。今日もいつも通り戦兎が借りた埃っぽいラボへと帰宅し、大した売上にならなかつたぞ、お前の発明どうなつてんだ、などと茶化しながら戦兎と笑い合う、いつも通りの日常が待っていると心のどこかで思っていた。エボルトから連絡が来たとはいえ、それが本当にエボルトの復活に直結するだなどと思うはずもない。

「戦兎！ おい戦兎、返事しろ戦兎ッ！ 起きねエとまた顔に落書きすぞー！」

パソコンモニターの前で、デスクに突つ伏すようにして意識を失っている戦兎を抱き起こし、強く揺さぶる。口汚く罵つても、頬を叩いても、戦兎はまるで死んだように反応を示さない。これがただの熟睡でないことは、流石の万丈にだってわかる。エボルトから連絡が来た直後に意識を失うなど、普通であるわけがない。

「ツ、そうだ、エボルトからのメールはどうなったんだ」

そこで万丈ははたと思い出した。戦兎はエボルトから届いたデータを解析すると言っていた。パソコンモニターに視線を向けるが、モニターは既ににも映し出してはいない。電源が落ちている。

「ちくしょう、どうなつてやがんだ!」

誰にともなく怒鳴り散らしながら、万丈はパソコン本体の電源ボタンを押し込んだ。ぶうん、と羽虫が飛ぶような短い駆動音を鳴らして、電源ボタンのランプが点灯する。一瞬ののち、モニターに起動画面が表示される。けれども、様子がおかしい。画面の中のピクセルが、ところどころ、モザイクでもかけられたようにぼやけている。やがてパソコンの起動が完全に完了したとき、万丈はようやくその異常の正体に気付いた。

「こいつはツ」

戦兎が解析し、再構築したデータが、画面上に表示されている。まるで生きているかのように、さながらコンピューターの中を自在に動き回るウイルスのように。それを目視し、認識してしまったとき、万丈はふつと意識が遠のくのを感じた。

かくして二人へと仕向けられた罠は正しく作動した。エボルトによつて送り付けられた罠は、新種のバグスターウイルスとなつて二人に牙を剥いたのだった。

「ようこそ。君が新たな挑戦者か。我が珠玉のゲーム『フェイトクロニクルZ』への挑戦、心から歓迎しよう！」

未だ判然としない意識の中、寝ぼけ眼の戦兔を出迎えたのは、尊大な口調で語るひとりの男だった。空から降り注ぐ陽光に目をしかめつつ、戦兔は周囲を見渡す。見覚えのない街だ。戦兔は最前までいた街と比べると、幾らか緑が多い。視界の端には海が見えるが、潮風の匂いはしなかった。

「あんたは」

未だ眠気によって細められたままの瞳で、戦兔は目の前に現れた黒いジャケットを着た男に誰何する。

「私は……神だ！」

「神？」

戦兔は小首をかしげた。

「そう、私こそは、神の才能に恵まれた男、檀ツ、黎斗神……」

「ダン、クロトシン……」

「そしてこの世界は神の想像アイデアによって創造された仮想世界ゲームエリア！ 現実世界に戻る方法は

たったひとつ！ これからはじまる『聖杯戦争』と呼ばれる魔術儀式に、君もマスターのひとりとして参加し『聖杯』を手にすること……」

「ちよ、ちよと待て、いきなりなに言つてんだあんた。神だの聖杯戦争だのマスターだの、俺にどうしろつて言うんだよ、もつとわかるように説明しなさいよ」

「うん？ 天才を自称する割には物分りが悪いな……まあいい。左手の甲をみてみる」
促されるまま、戦兎は左手の甲を掲げる。覚えのない赤のタトウが、色濃く刻み込まれていた。

「なんツだこれ、いつの間に！」

慌てて甲を擦るが、タトウが消える様子はない。擦つても引つ搔いてもタトウは微動だにせず、ただただ手の甲に痛みが走り、肌がじんわりと赤らむだけだった。

檀黎斗が、上体を軽くのけ反らせながら高らかに笑った。

「君の左手に刻まれたそれは『令呪』と呼ばれる、いわば我が聖杯戦争への参加権だ。自らのサーヴァントに対する絶対命令権であると同時に、その令呪を三画すべて失った時点で、サーヴァントへの絶対遵守の命令権は失われる……つまり、サーヴァントが君の制御を外れる可能性がある、ということだ」

事ここに至つて、ようやく状況が読み込めてきた戦兎は、左手に深く刻まれた三画の令呪から視線を外し、檀黎斗を睨め付ける。

「あのメールを送つたのはお前か」

「厳密に言えば私ではない。スポンサーの意向さ」

「スポンサー?」

「ああ。とある事情で開始されることなく埋もれていくはずだったこのゲームを見事ツ、掘り起こしてみせたスポンサーからのたつての希望でね。君は主催者から直々にゲームに招待されたのだよ」

「メールに添付されてたあのデータは!」

「あれはこの私が新たに開発したバグスターウイルス……いわば我々からの挑戦状だ。あの難解なパズルを解いてみせたことには素直に称賛を贈ろう。まあ、あの程度のパズルも解けないようなら、私のゲームに挑戦するなど夢のまた夢だが」

黎斗は腕組みをしたまま、満足気に笑みを深めひとり頷いている。

戦兔の中で、すべての辻褄が合わさった。あのメールの差出人はこの男とエボルトで、添付されていたファイルはそのまま、戦兔へと差し向けられた罠だったのだ。それ単体では機能しないただのジャンクデータを戦兔は自ら組み上げ、現実世界の人間の意識をゲーム世界へと引きずり込むウイルスを完成させてしまったことになる。

今にして思えば、あんな得体の知れないメールは相手にせず無視しておけばよかったのだ。自分自身の天才的な才能が悔やまれる。戦兔は深く吐息を零して、頭を掻き筆つた。

「お前、自分がいったいなにと手を組んだかわかってんのか」

「当オウ然、わかつているとも。だが、だからこそ面白いんじゃないか……誰が最初に聖杯を手にするのか。ゲームマスターである私か、それとも侵略者である彼か……？」

黎斗は不敵に口角を吊り上げ、笑う。短いやりとりで、戦兎は檀黎斗という人間が、話をするだけ無駄な人種であることを悟った。

同時に、檀黎斗が天才的な才能を持った人間であることも理解した。この空間が仮想現実ということも、おそらく事実だ。海に近いのに潮風も潮の香りも感じないことがその証左と考えている。

「はアア……最ツ悪だ」

自分のなすべきことを理解した戦兎は、特大の嘆息を落とし、ぼやいた。

エボルトに聖杯を獲らせるわけにはいかない。この電脳世界のどこかにいるエボルトを倒し、聖杯を獲得したのち、元の世界に戻る。それがこのゲームのクリア条件だ。

戦兎は諦念混じりの決意を固め、黎斗へと向き直った。

「やることはわかった。その上で、一応確認するぞ。この聖杯戦争つてのに現実世界から参戦してるマスターは俺だけか」

「あいにくと、まだすべてのマスターが出揃ったわけではないのでね。きみ以外の何人が現実の人間で、何人がNPCなのか……その答えは、自分の目で確かめてみることだ」

「……そういう答え、一番役に立たねえんだよな」

「感謝するがいい、迷える子羊に道を指し示す神のお告げだ」

「ああ、はいはい。で、その自称神様のアなたはマスターなのか」

「私はゲームマスターだ。一般参加のマスターと一緒にされては困る！」

戦兎は眉根を顰め、再度嘆息を零す。会話にならない。

呼吸を整え、戦兎は問いを変えた。

「わかった、じゃあ、そのサーヴァントってのはどうやって召喚すりゃいいんだ」

戦兎の問いに応えたのは、黎斗ではなかった。戦兎の目の前に、空中に投影されるように半透明のウインドウが表示される。ホログラムだ。ウインドウには、聖杯戦争のルールについて、と見出しが書かれている。他にもいくつか見出しはあったが、ひとまず大体のシステムを理解した戦兎は、ウインドウに表示された文字に指を添わせて、画面をスクロールさせてゆく。こういうとき、仮想空間というのは便利だ。

サーヴァント召喚について、という項目はすぐに見つかった。聖杯のシステムから、サーヴァント召喚のシステム、詠唱のために必要なテンプレート文章などの一覧が確認できる。大きな瞳を見開き、黒目を走らせて読み進めてゆく戦兎を、黎斗はウインドウの奥から見下ろし、ほくそ笑む。不快なので、戦兎は黎斗を視界に入れないように努めた。

「私からの説明は以上だ。それでは、充実した聖杯戦争ライフを送れることを祈ってい

るよ、桐生戦兔」

ややあつて、誇らしげにそう告げた黎斗の体は、空に溶けるようにピクセルの粒子へと変換され、霧散していった。

黎斗が用意したホログラムウィンドウは、いわばゲームの取扱説明書のようなもので、ゲームシステムの簡易説明以外の知識は与えてはくれなかった。だから、戦兔はまず、日が落ちる前に図書館へと赴き、この街の構造と簡単な歴史を学んだ。幸いにも聖杯戦争のマスターとして参加している戦兔には、予めある程度の市民権は与えられているらしく、拠点として使える安アパートの一室も貸し与えられていたので、図書館への入館と本の貸し出しも思っていたよりもスムーズに行えた。時代背景ゆえか、現実世界と違って警備が手薄であったことも大きい。

戦兔の調べによると、冬木市は海と山に面した地方都市で、新都と呼ばれる開発が進んだエリアと、深山町と呼ばれる昔ながらの住宅街エリアに分けられているらしい。戦兔の拠点として用意された安アパートは、このうち深山町側に存在している。

時刻がサーヴァントを召喚するに相応しい深夜帯に差し掛かるまで、戦兔は借りてきた本を自室で読み耽つて過ごした。パソコンとネットが使えれば早かつたのだが、この仮想世界における時代背景は一九九四年と設定されているらしく、戦兔の時代と比べて

インターネットもさほど普及していなかった。それに気付いた時点で、戦兔はパソコンとネットに頼るといふ戦法に早々に見切りをつけた。

幸いにも、ビルドドライバーとフルボトルはこの世界にも持ち込んでいるらしい。使用できるなら戦闘を有利に進めるキーアイテムとなるが、この聖杯戦争におけるサーヴァントシステムの特性上、外部持ち込み品のライダーシステムがどこまで通用するかはわからない。過信は禁物だ。

人気がない山道を進み、開けた空間に出たところで、戦兔は立ち止まった。慣れない山道歩く疲労からか、戦兔の息は既にあがっている。口から漏れる息は白く、その息を月明かりが青白く照らしていた。本来ならばぴりりと痺れるような寒さを感じる季節なのだろうが、この仮想世界において、戦兔の五感には寒さを感じてはいない。おそらく、暑さも感じない。

くつつけた親指と人差指を空中にかざし、勢いよく指を広げる。同時に、戦兔の指先がちようど触れる箇所に、半透明のホログラムウインドウが展開された。

聖杯戦争に関する基礎ルールの画面をスクロールして、召喚画面をタップすると、ホログラムの枠内にサーヴァント召喚に用いられる魔法陣が表示された。画面を長押しすると、戦兔の目の前の地面に、選択した魔法陣が転写される。画面を長押し

「本来なら血や水銀が必要って聞くけど、これなら楽でいいな」

流石にゲームでそんなまなましい部分まで再現されても困ると思いつつも、戦兎は宙に浮かんだ画面の左端に人差し指で触れ、勢いよく右へとスライドさせた。それだけで、画面がひとつ前へと戻る。再びスクロールし、召喚の詠唱画面を表示させる。こればかりは自分の口で読み上げる必要があるらしい。

「それじゃ、いきみますか」

両の掌を軽く打ち合わせ、意気込む。サーヴァントは、召喚を行ったマスターに相應しい英霊が自動的に選択されると聞き及んでいる。天才物理学者の戦兎がマスターになるならば、いったいいかなる英霊が召喚されるのか、想像を膨らませる。こういうとき、戦兎は湧き上がる好奇心を抑えられない。頭頂部の髪の毛が一房、びよんと跳ね上がる。かのニコラ・テスラか。それともトーマス・エジソンか。有名な発明家たちを脳内に思い浮かべるだけで、戦兎の心は昂揚した。

定められた召喚の詠唱は、滔々と淀みなく読み進められる。詠唱が進みにつれ、魔法陣が輝きを宿し、マナの嵐が戦兎の視界を覆ってゆく。まっすぐに前方を見据え続けることが困難に感じられる程の魔力の乱気流に晒されながら、戦兎はそれでも、その大きな瞳に目一杯の力を注ぎ、魔法陣の中心を凝視する。

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

やがて、詠唱の完了とともに、咲き乱れたエーテルの輝きは戦兎の視界を真っ白に染

め上げた。直視し続けることは難しく、思わず両腕で視界を覆う。

魔力の奔流が収束する。再び瞳を開ける。月明かりが淡く照らす静謐な夜の森林に、抑止の力の御座より来たりし英霊が佇立していた。黒いスーツの上に赤い外套を羽織った、細身の男だ。長い黒髪が、風に乗って揺れる。まだそう年老いてもいないはずのその顔には、若さに不釣り合いな皺が多く刻まれていた。

戦兎は一步、歩み寄った。

「あん、たは」

「サーヴァント、諸葛孔明。此度はキャスターのクラスをもって現界した」

「諸葛孔明……ッ！」

戦兎の瞳が輝く。興奮のあまり、一房隆起した髪の毛ごと、己の後頭部を幾度も掻き
毛る。

諸葛孔明といえば、音に聞こえた天才軍師。発明家ではないが、その存在は戦兎とて当然知っている。身に纏う装束が思いの外現代風なのは予想外だったが、召喚される英霊には座から現代の知識がある程度は与えられると聞いている。なによりこの世界は
ゲームエリア
仮想空間だ。多少のデIFOオルメも気にはならない。

当たりを引き当てた。そう確信し笑みを深める戦兎に、キャスターのサーヴァントは
静かに、その玲瓏な眼差しを向けた。

「問おう。君が私を招いたマスターか」

明らかに舞い上がっている戦兎とは対照的に、キャスターは極めて冷静に、どこまでも冷淡に、戦兎にそう尋ねた。

第2話「そして始まるフェイト」

机の上に広げられた書物と新聞に一通り目を通したキャスターは、顎に指先を添え、思案するように小さく唸った。マスターである戦兎はというと、畳の床に胡座をかいて、胡乱な瞳でキャスターを眺めていた。

新聞はすべて、山を降りた戦兎が街に戻るなり、キャスターの要望で集めさせられたものだ。現代と比べるとそもそもコンビニの店舗数が少なく、まず購入するのに手間がかかった。深夜ともなると店頭に残った新聞も売れ残りばかりで、一店舗目の品揃えで満足しなかったキャスターの要望で、結局戦兎は冬木大橋を渡って新都にまで使いっぱしりをさせられた。その間、キャスターは霊体化したままで一切姿を現していない。移動にはマシビルダーを使ったので、徒歩にはならなかったことだけが救いだっただけだ。

「なんでマスターの俺が……」

「そう腐るなマスター、君はいい仕事をしてくれた」

机に突っ伏した姿勢から顔だけを上げた戦兎は、恨めしさを隠そうともせずキャスターに視線をやった。

「で、こんなに似たような新聞ばっか集めて、お前はなにを調べたいわけ？ そろそろ教

えなさいよ」

キャスターは手にしていた新聞を机の上に放り出した。

「この冬木市で連続殺人事件が起きていないか、それを確かめたかったのさ」

「連続殺人事件？」

手元の新聞をまさぐり『連続殺人事件』の記述を探すが、どの新聞を見てもキャスターの求める内容は見当たらない。紙面に記されているのは、ごく平凡な芸能ニュースや、ありふれた政治の話題ばかりだった。

「そんな事件、見たたんねえぞ」

「どうやらそうらしいな。だが、だからこそ異常なんだ。本来、この時期のニュースは冬木市で起こった連続殺人事件の話題でもちきりのはずなのに」

「連続殺人事件がないからどうだっていうんだよ。街が平和なのはいいことでしょうが」

「街としては、そうだろうな。だが、第四次聖杯戦争としてはその限りではない」
「……どういう意味だ」

戦兔は訝しげに眉根を寄せた。短い首肯に次いで、キャスターは淀みのない口調で回答した。

「私の知る限り、第四次聖杯戦争において召喚されたキャスターは私ではなく、別の英霊

だ。そのマスターとなった男も、聖杯戦争そつちのけで快樂殺人を繰り返す狂人だったことは既に調べがついている」

「ちよつと待て。つまり、その連続殺人犯の代わりに、いまここに俺たちがいるってことか」

「そう考えるのが筋だろうな。代わりに、本来のキャスター陣営は最初からこの世界に存在しなかったことになっている」

戦兎は顎に指先を添えて、ううむと低く唸った。

「なるほど……歴史の改竄か。史実に基づいたゲーム世界と考えればおかしな話じゃないが……でも、だとしたらどうして。第四次聖杯戦争を再現するための世界を作る上で、本来のキャスター陣営は邪魔だと判断された、ってことか？」

「まあ、そもそもあの主従は聖杯戦争をやる気がなかったからな」

「……まるで自分が経験したような言い方だな、キャスター」

「その通り。この私が自ら経験したからこそ言っているのさ」

キャスターの言葉に戦兎は表情をしかめた。

「諸葛孔明が、なんで一九九四年に起こった聖杯戦争を経験してんだよ」

「ふ、そう怖い顔をするな、マスター。たしかに能力と霊基だけで語るなら、私は中華は三国時代にその人ありと謳われた天才軍師、諸葛孔明に相違ない。ただし、私という人

格そのものは別にあるという話さ」

「別？」

キャスターは、黒いスーツの内ポケットから眼鏡を取り出し、それを装着した。既に赤い外套も脱ぎ払っている現状、目の前にいる男がかの天才軍師とまったくの同一人物であるように、戦兔にはもう思えなかつた。

「私の名前はロード・エルメロイⅡ世……諸葛孔明の霊基にされた、所謂『疑似サーヴァント』という分類に当てはまるサーヴァントさ」

「疑似サーヴァント？ まつとうなサーヴァントじゃないってことか」

「まあ、ある理由で直接サーヴァントになれない者が、人間の体を霊基うつつわにして顕現した存在、とでも考えてくれればいい。要は人間の体を触媒にした、強引な英霊召喚方式だよ」
「ってことは、つまり……キャスター、いや、ロード・エルメロイⅡ世は、諸葛孔明を召喚するための代理人として、この世界に取り込まれちまつた……俺と同じ、現実世界の人間ってことになるのか？」

人差し指を立てた戦兔は、軽くキャスターを指しながら己の思考を整理するように尋ねた。

「君とはまた少し状況が違うがね。私という人間が実在するかと問われれば、答えはイエスだ。私は君と同じ世界に存在し……そして、かつて一九九四年に行われた第四次聖

杯戦争を、この身をもつて経験している」

「なるほどな、あんたは今回の聖杯戦争の生き証人つてわけか」

「そういうことになる。といつても、キャスター陣営が我々に置き換わっている時点で、どこまで私の記録の通りにことが進むかは定かではないがね」

檀黎斗とエボルトが関わっている時点で、キャスター陣営だけでなく、他の陣営にも変化が及んでいることは容易に想像がつく。戦兔以外の人間も現実世界から招かれ、聖杯戦争の参加者に数えられている可能性は考えていたが、英霊として招かれている人間がいるというのは慮外の事実だった。

「つてことは、あんたの元にも主催者からメールが送られてきたつてワケ？」

「いいや。私は正しく、座から招かれたサーヴァントだよ。そういう意味で、私とマスターでは状況が違うと言ったんだ」

「わからないな……仮にキャスターの言うことが事実だとして、その聖杯とか英霊の座とかつてのはなんだ、仮想世界から現実世界に干渉できるものなのか？ いや、そもそも考えてみれば、このゲームで勝ったからつて、消滅したはずのエボルトが現実世界に復活するつて原理も不可解だ。物理法則を無視してる」

キャスターは微かに、くすりと微笑んだ。

「物理法則に捉われたものの見方はいつたん捨てた方がいいぞ、マスター。仮想世界で

も聖杯は聖杯だ。それが完成した暁には、マスターの知る物理法則などは容易く捻じ曲げられるだろう。こうして私という英霊が座から招かれていること自体が、この世界に存在する聖杯が正しく稼働していることの証左になる」

「……あー、だめだ、荒唐無稽すぎる。物理法則を無視するにも程があるんじゃない？」
理解はできるが納得はできず、戦兔は諦念交じりの乾いた笑みをこぼし、髪の毛を掻き毟った。

エボルトは、ふたつの地球を融合させるためのエネルギーとなって消滅したはずだ。そのエボルトの遺伝子がまだ生きていて、ゲームの世界から現実世界に実体化しようとしている。阻止するためには、直接エボルトを叩くのではなく、これから始まる聖杯戦争を勝ち抜かなければならない。今までに戦兔が経験してきた戦いとは、ルールが異なりすぎていて、理解がすぐには追いつかない。

「マスターの語るエボルトなる存在は、完成した聖杯の力を利用して現実世界に顕現するつもりなのだろう。我々は聖杯戦争を勝ち抜き、それを阻止しなければならぬ」
「それは間違いないな。なにせエボルトが復活したら、再び地球が危険に晒されるんだ。もう、あんな悲劇は二度と起こさせてたまるかよ」

戦兔も、エボルトの危険性は既にキャスターに伝えている。どうしてこの戦いに巻き込まれたのかのも、この世界が檀黎斗が創造した仮想空間であることも、ふたりの間で

は既に周知の事実だ。

「そうなるよ、あるいはマスターという存在そのものがエボルトに対する抑止力、と判断されたのかもしれないな」

「ちよ、ちよーつと待て、キャスター。まーた知らねえ言葉が出てきたぞ?」

「もつとも、これは憶測の域を出ないがね。エボルトが現実世界に顕現するということは、そのまま人理の危機に直結すると考えて凡そ間違いはない。最悪の事態を回避するために、聖杯はこの世界に招かれた君に令呪を与えたのだと……そう解釈することもできるといふことだ」

「つまり、俺がエボルトに対するカウンター……つてことか?」

「そうだ。いや、ここが仮想世界であることを差し引いても、魔術回路も持たず、魔術師ですらないマスターが令呪を宿したことに關しては疑問に思っていたんだ。だが、そう考えれば強引に納得することもできなくもない。エボルトを倒す上で君以上の適任はいない、とね」

完全に納得するには無茶な要素の多い話だが、現実がこうなっている以上、もう仕方のないことなのだ次第に思い始めてきた。そう考えると、疑問ばかりを口にするのも馬鹿馬鹿しく思われた。

「はあ、なるほど。つまり俺は、聖杯に選ばれたヒーローってわけね」

こと、と音を立てて、懐から取り出したビルドドライバーとフルボトルを机に置く。持ち込めたのは、いくつかの基本フルボトルとスパークリング、ハザードトリガーとフルフルラビットタンクだけだ。新世界を創造するためにエネルギーを使い果たしたジーニアスはもう存在しない。持ち込めた強化アイテムも、エボルトとの最終決戦で上位フォームから順に消耗させられ、今は力を失っているはずだ。なんとかしてボトルの再調整をする必要がある。

戦兎は使い慣れたラビットボトルとタンクボトルにそつと指先を触れた。一年間の戦いを思い出す。つらい出来事の連続だったが、つらいだけではなかった。思い返すほどに、不思議と前向きになれる。

「もう使う予定はなかったんだけどな。仕方ないから、もうちよつとだけ続けるとしませか……自意識過剰な正義のヒーローを」

「いい意気だ、マスター。では、早速だが私から今後の方針について提案しよう」
「提案？」

「ああ。これから聖杯戦争を戦っていく上で、まず他陣営の情報が必要となることは説明不要だろう。その上で、是非味方につけておくべきだと言える優秀な陣営に心当たりがあつてね……尤も、私の記録通りなら、という条件付きにはなるが」

キャスターは、部屋の壁にかけられたカレンダーに視線を向けた。

「ランサー陣営だ。彼らの初戦が行われる前に、こちらから先手を打ちたい」

城の名前は『檀黎斗城』に決めた。

挑戦者が現れたことでこの世界の時間が動き出したので、今まで『アインツベルン城』と呼ばれていた広大な城にも相応しい名前を付けようという、檀黎斗なりの粋な計らいだった。

「ううむ、なかなか悪くない座り心地だ」

城の本館に位置する最上階の広間に、黎斗は自ら持ち込んだ玉座を設え、深く腰を掛けた。既に広間のあちこちに『檀』と記された金の家紋のタペストリがかけられている。檀黎斗本人もまた、黒と金を基調とした豪華なつくりの羽織を纏っている。かの織田信長を彷彿とさせる和洋折衷の装いだ。

ふいに、物陰から赤い装甲が姿を現した。

「大胆なことするねえ。もともと存在した城を丸ごと乗っ取っちゃうなんて、さすがゲームマスターはやるのが違う」

協力者であるブラッドスタークは、広間の柱に寄りかかり、軽く手を叩いた。

「当然だ。神であるこの私が、そこらの小市民と同じ環境で生活できるものか。ラスボスは城の最深部にいるものと相場は決まっているのだ」

玉座にふんぞり返った黎斗は、ご満悦の様子で深く頷き、笑みを深めた。

「それは？」

スタークが、黎斗の傍らを指差した。

玉座の後方、向かって右手側の壁に、剣の鞘が飾られていた。黄金の地金に、目の覚めるような青の瑠璃で装飾を施されたその鞘は、檀黎斗がゲームマスター権限で取り寄せた全て遠き理想郷と呼ばれる概念礼装だ。向かって左側には、額縁に入った化石が飾られている。この世で初めて脱皮をした蛇の抜け殻の化石と呼ばれているものだ。玉座の間には、他にも様々な物品が所狭しと並べられている。

「これは本来なら聖杯戦争に参加するマスターが英霊召喚の触媒として利用していたものさ。だが、記録通りの英霊を記録通りに召喚されてもつまらないだろう？ だから、ゲームマスター権限でこの私が預からせて貰ったのさ」

「つてことは今頃聖杯戦争のマスターどもは、どいつもこいつも本来の記録とは異なるサーヴァントを召喚してるってわけか」

「その通り！ こうして我が『フェイトクロニクルZ』は、誰も知らないまったく新しいゲームとなるのだ」

「いやあまったく、大したもんだよ檀黎斗神。だがな、仮想空間とはいえ、世界をひとつ構築するのは簡単じゃなかったはずだ。いったいどうやってこんなゲーム創ったんだ」

よくぞ聞いてくれたとばかりに、檀黎斗はふんと鼻を鳴らした。

「時計塔の君主^{ロイド}が記録していた第四次聖杯戦争の記録を元に、そのデータを細密に電腦世界に再現したまでのこと。この神の才能をもってすれば、不可能など存在しない」

「そうは言うが、時計塔の君主^{ロイド}といえはお硬い魔術師の連中だろ？ やつら、揃いも揃って科学を否定しているらしいじゃねエか。それをわざわざ電腦のデータ上に記録を残すとは……君主^{ロイド}つてのは名ばかりの間抜けだったのか？」

黎斗は、スタークの言葉を手で制した。

「彼を間抜けと笑うことなかれ。当然、科学的防壁だけでなく、魔術的防壁も私のクラツキングを阻んだとも……なまやかな人間であれば、この時点で諦めるだろう。しかし、これに関しては相手が悪かったとしか言いようがない。何故なら……この神の才能の前に、不可能など存在しないのだから！ 私はア、この神の頭脳ひとつで、科学と魔術双方のファイアウォールを突破し、見事目当てのデータを盗み出したのだアツ！ ヴェアーツハハハハハハアツ！」

黎斗は高い天井を見上げ、哄笑を響かせる。話しているうちに気分がよくなってきた。

スタークの言う通り、本来時計塔の魔術師の多くは魔術によって記録を残すもの。ただだけでも、第四次聖杯戦争のデータを記録している君主^{ロイド}は、魔術師としての起源が浅

く、己の管理している情報を魔術的要素だけに頼ろうとはしなかった。魔術の世界で考えれば最新の技術を用いた防壁ファイアウォールなのだろうが、黎斗にとってはむしろ僥倖だった。

「だったら、英霊召喚システムの方はどうなんだ。こいつは流石に盗んだデータだけで再現できるような代物じゃあないだろう」

「それを可能にしたのが、私のゴッドマキシマムだ」

「ゴッドマキシマム？ そいつは随分、大仰なタイトルだな」

「ふふん。ゴッドマキシマムとは、生前の私がこの世に産み落とした最ツ高ツ傑作……あらゆる物理法則を超えて、いかなるゲームであろうとも創造する、まさしく神のみに与えられた絶対的な力。私はゴッドマキシマムの能力で、この電脳空間上に擬似的な聖杯を再現し、未完成のまま放置されていた『フェイトクロニクルZ』を完成へと至らせたのだ」

惜しくも現実世界に存在するゴッドマキシマムは敗れ、檀黎斗の本体は既に消滅してしまっただが、それは敢えて口にする必要はない。聖杯戦争に勝ち残り、現実世界にて受肉を果たした暁には、今もCRで保管されているであろうゴッドマキシマムを奪還し、もう一度神として君臨すればいい。現実世界で消滅してなお、黎斗には敗北したという認識はなかった。

「つまるところ、このゲームにおける聖杯は実質、本物と考えて良いってわけだ」

「聖杯だけではない。NPCもまた、本物の人間と遜色ない行動を取るようにプログラムされている。とりわけ聖杯戦争の参加者として置かれたNPCに関しては、限りなく本来の人格に近い行動を取るようにデータ構築をして、自由に行動できるようにした。いわば、私はこの世界の創造主……まさしく、真の意味での『神』となったのだ！」

「いやはや、聞けば聞くほど恐れ入る！ こんな才能を持ったやつを、俺は他に知らない！ どうやら俺もまだツキに見放されちゃあいなかつたらしい」

スタークは、広間に敷き詰められた赤い絨毯の上をゆつたりと歩きながら、大袈裟に両手を広げて黎斗を称える。悪い気はしない。黎斗は肅然と瞳を閉じ、スタークの称賛に聞き入っていた。

「そーいやア、戦兔のやつもマスターになったらしいな。これで、何体のサーヴァントが喚ばれたことになるんだ」

「観測する限り、桐生戦兔による英霊召喚で六体目だ。あとはライダー陣営が決まれば、すぐにでも聖杯戦争は開始されるだろう」

「いよいよか。そのライダー陣営つてのは、本来の記録じゃどういう立ち位置だったんだ」

「第四次聖杯戦争の生き残りであり、今回のゲームの大元になったデータを管理していた時計塔の君主ロードでもある。だが、その男はこの世界には存在しない。そういう人間は、

まったく新しいゲームを創る上で邪魔になるからな」

この世界のシナリオは、大元となったウェイバー・ベルベットなる人物の記録から成り立っている。世界観にゲームマスターである黎斗以外の人間の主観を持ち込むわけにはいかず、黎斗以外の主観が入ったキャラクターを参加者として迎えるわけにもいかない。ウェイバー・ベルベットというキャラクターのデータは、真っ先にこの世界から消去した。

キャスター陣営の記録を消去したのはもののついでだった。ゲームそっちのけで快樂殺人を繰り返す人間など、悪質な遅延キャラクターでしかない。檀黎斗の創る世界観に、そういう手合いは不要だった。

「つまり、ライダー陣営のマスターが誰になるかはまだわからないってわけだ」

「少なくとも、貴様でないことだけは確かだな」

「おオット、こいつは手厳しい。お硬い聖杯サマは、地球外生命体の俺には令呪も認めてくれないってか」

言葉とは裏腹に、スタークは片手で己の額のバイザーを軽く叩き、くつくつと笑う。スタークの物言いに、悲観は見られない。

「ゆえに、貴様が聖杯戦争を勝ち抜く方法はたったひとつ。令呪を授かったマスターをゲームオーバーに追い込み、その令呪を奪い取ること……お誂え向きに、サーヴァント

が一騎、こちらへ向かっているようだ」

「ほおう、そいつは面白い。早速チャンス到来ってわけか」

ふう、と肺に溜まった空気を吐き出した黎斗は、玉座の手すりに体重をかけながら、重い腰を上げた。黎斗の眼前に、ホログラムの窓が開いた。柱に寄りかかっていたスタークも、視線を上げて半透明の窓に投影された映像を見上げる。

窓には、檀黎斗城を取り囲むように生い茂る『檀黎斗の森』の中、城へ向かってまっすぐに進む侵入者の姿が映し出されていた。艶やかな銀の髪をなびかせ進む若い女がひとり、同じく銀髪ながら、褐色の肌を赤い外套で包んだ屈強な体つきの方がひとり。その鷹のように鋭い双眸が、まるでこちらの監視すら見透かしているように、前を見据えている。黎斗は、赤い男の目付きが気に入らなかつた。

「ふん。この檀黎斗城に無断で立ち入るとは畏れ多い！ 人の城を荒らそうという不屈き者には、この私が直々に誅伐を下してやらねばならん」

「痛いねえ、よくもまあそんな台詞が吐けるもんだ。尊敬するよ、相棒」

鬱蒼と茂る木々の合間から、彼方に聳えるアインツベルンの城壁を見上げ、アイリスフィールはこれから始まる戦いの予感に臆をつり上げた。前方を歩くのは、切嗣が召喚したサーヴァント。英霊としての記憶を持たず、真名すらも分からないと宣う赤い弓兵

を、アイリスフィールは護衛として侍らせていた。

「アーチャー。アインツベルン城に、今も敵はいるのね」

「ああ、間違いない。サーヴァントだ。隠しもせず、挑発的に気配をちらつかせているよ。どうやら奴ら、既にあの城の城主にでもなったつもりでいるらしい」

アーチャーは不敵に口角を歪めて笑う。

聖杯戦争に参戦するため冬木にやってきたアイリスフィールだが、来日早々、アインツベルンが所有する拠点のひとつが他の陣営のマスターの根城にされているとは思っても寄らなかつた。今後の立ち回りを考えても、拠点として運用する予定であった城が奪われたままというのはよろしくない。奪還する必要がある。

ほどなくして森を抜けたふたりは、アインツベルン城を臨む開けた場所に出た。豪壮な城門は見慣れた本国のアインツベルン城と酷似している。門を潜り、庭園へと進むと、黒と金の派手な衣装を身に纏った男が両手を広げて佇立しているのが見えた。

「おやおや。人の城に無断で立ち入ろうとは、困ったネズミが紛れ込んだものだ」

わざとらしく間延びした声で、男はふたりを睥睨した。男と比べ、身長はアーチャーの方が明らかに高いが、それでも男はふたりを見下すように顎を上方へとしゃくり、視線だけをこちらへ下ろしている。

決して不用意に接近せず、一定の距離を保ったまま、アイリスフィールは声を張り上

げた。

「それはこっちの台詞です。アインツベルンの城に、どこの馬の骨ともしれない人間を立ち入らせるわけにはいかないわ」

男は、あからさまな態度で特大の溜息を零すと、ゆるくかぶりを振った。

「この城はゲームマスター権限によって、この私、檀黎斗神ダシクロトシが占拠した。今のこの城の名は……檀ツ黎斗城だアツ！」

「なツ……んですつて」

一瞬、アイリスフィールは自分がなにを言われたのか理解が追いつかなかった。

盗つ人猛々しいにも程がある。よく見れば、城のあちこちにタペストリがかけられていた。黒地に金文字で『檀』と描かれた家紋が描かれたものだ。

「人の城で勝手に……！」

袖の内側に仕込んだ銀の針金に、いつでも魔力を通せるように構えるアイリスフィールに、アーチャーが小声で耳打ちした。

「油断するなよアイリスフィール。ふざけた言動をとってはいるが、奴はサーヴァントだ。マスターが近くに潜んでいる可能性がある」

「……それ、本当なの？ いえ、アーチャーが言うからには、そうなんでしょうけど」

一瞬辟易とした表情を浮かべるアイリスフィールだったが、すぐに臍を決し、檀黎斗

を睨め付ける。なにが起こるかわからない聖杯戦争において、思い込みという名の色眼鏡は捨て去るべきだ。

「フフフフハハハハハ、勘違いをされてしまったては困る……ン私にイ、マスターなどという存在は不要オツ！ そう……我こそは神の才能を与えられたゲームマスターにして、裁定者のサーヴァントオ……檀ツ黎斗神だアツ！」

耳聴くアーチャーの耳打ちを聞き取った男が、込み上げる愉悦を抑えきれぬとばかりに笑みを深め、懐から緑色のなにかを取り出した。腰に当てると、出現した帯がひとりでに男の腰に巻き付き、ベルトのような形状へと姿を変える。

同時に、アーチャーもまた腰を低く落とし、身構える。一瞬、エメラルド色の閃光が迸った。その両手には既に、白と黒の短剣が精製されていた。陰と陽を司る夫婦剣だ。

檀黎斗と名乗った男が、左右の掌に手のひら大のカセットのようなものを構え、腕を交差させる。電子音が高らかに鳴り響いた。

『マイティアクシオンエーツクス！』『デンジャラスゾンビー！』

「グレードX—0……変身ッ！」

檀黎斗の背後に、半透明のホログラム映像が映し出される。英霊が持つ神秘から凡そかけ離れているとは思えない、ゲーム画面を思わせる映像だった。檀黎斗の周囲を、いくつものデイフォルメされた顔が映し出された窓が取り巻く。檀黎斗は、そのうちの

ひとつをつを叩いた。

『ガツシヤット!』『ガツチャーン!』『レベルアアップ!』

『マイティジャンプ! マイティキック! マイティーアクシジョン……X!』

『デンジャー! デンジャー! デス・ザ・クライシス! デンジャラスゾンビー!』
どこからともなく響き渡った電子音が重なり合い、ふたりの耳をけたたましく聳する。

檀黎斗の姿を覆い隠すように現れたホログラムの窓を、檀黎斗は自ら突き破った。黒い霧が晴れたとき、そこにいるのは既に、檀黎斗ではなくなっていた。白と黒を貴重とした、骸骨のようなマスクで顔を覆い尽くした装甲の戦士。マスクに描かれた赤と白のオッドアイが、昼間であってもなおまばゆい輝きを放つ。低く腰を下ろしたそいつは、指を大きく開いたままその両腕を前方へと突き出し、ゾンビを彷彿とさせる構えをとった。

「ヴェアア……仮面ライダーゲムム、グレードX-0……ゲームマスターとして生まれ変わったゲムムの力、思い知らせてくれるウ……!」

深く、ゲムムが吐息を零す。

返す言葉は不要だ。アーチャーが、力強く一步を踏み込んだ。赤い外套をはためかせ、目にも留まらぬ速度で一気にゲムムとの距離を詰める。同時に駆け出したゲムムの

腕には、濃い桃色の刀身をした一振りの剣が握られていた。

「フンツ！」

「ヴェアアアツ！」

アーチャーの短剣干将と、ゲムムのガシャコンブレイカーがかち合う。矢継ぎ早に、アーチャーは二刀目の短剣英耶を振り下ろす。それが到来するよりも早く、ゲムムは己の刃でアーチャーの一刀目を弾き返し、反撃に打って出た。二刀目も剣で受け、三刀目が振り下ろされるよりも先に、ゲムムは上体を仰け反らせ、ひるがえし、攻撃に転じたことでの隙のできたアーチャーの胴体めがけて後ろ回し蹴りを放つ。

「ハッ」

一歩後方へと跳び退き蹴りを回避したアーチャーに追撃を仕掛けるべく、ゲムムが飛びかかる。上段から振り下ろされたガシャコンブレイカーを、今度はアーチャーの短剣が受け流す。そこから先は、激しい剣の打ち合いだった。アーチャーの攻撃をゲムムが受け、弾き返し、ゲムムの攻撃をアーチャーがいなし、受け流す。激しい剣戟の応酬。剣と剣が打ち合うたびに、火花が散って、突風が巻き起こる。その風に髪を煽られながら、アイリスフィールは固唾を呑んで戦いの趨勢を見守る。

手数はアーチャーの方が多し。互角に見えた高速の打ち合いも、次第にアーチャーが押ししているように傍目には見えた。アーチャーの白と黒の剣が、ゲムムの装甲を斬り裂

き、火花と白煙を巻き上げる。けれども、いくら攻撃を受けようともゲンムに疲労の様子はみられない。剣で切られても、アーチャーの蹴りを受けても、ゲンムはゾンビのように追いつがる。

幾度めかの打ち合いの末に、アーチャーが大きく飛び退いた。ゲンムは上体を仰け反らせ、操り人形のように体を折れ曲がらせながら、最初と同じように構えた。

「……おかしいわ。ダメージが通っている気配がまるでない。全身が装甲に覆われているにしても、あれだけ攻撃を受ければまともではいられないはずよ」

アイリスフィールが漏らしたぼやきを聞いたゲンムが、その白いマスクの下からくつくつと笑みを零した。

「今頃気付いたか……そおうだ、このゲームにおいてエ……裁定者ルーラーのクラスはバーサーカーを除くすべてのサーヴァントから受けるダメージを半減できるウ……！ 最早セイバーが最優といわれた時代はア……過ア去のものとなったのだアー……ッ！
ヴェアー……ッハッハッハッハアー……ッ！！」

アーチャーは、ふん、と鼻を鳴らすと、そつと二振りの剣の切っ先を下ろした。

「なるほどな。どうやら奴は、名実ともにまっとうな英霊ではないらしい」

「私はアア……神だアアアア!!」

ゲンムが剣を振り上げ、駆け出した。

「それは結構」

アーチャーは腰を落とし、手にした二刀を構え、投擲する。放たれた白と黒の剣は高速で回転し、車輪のように空を裂いてゲムムを急襲する。

「ヴェエアアツ！」

ゲムムは気を吐き出し、力いっぱい剣を振り下ろした。閃光が散り、一刀目は叩き落される。けれども、そのための一瞬がゲムムにとつての隙となつた。

間髪入れずに急迫した二刀目へと剣を振り下ろすゲムムだったが、一刀目からの時間的な間隔があまりにも少なすぎた。ろくな構えも取らずに振り下ろした剣では、英霊であるアーチャーの投擲した武器に打ち勝つには敵わない。

二刀目が、ゲムムの剣を弾き飛ばした。

「アーチャー！」

アイリスフィールがその名を叫ぶ。

既にアーチャーの腕には、漆黒の弓が握りしめられていた。黒塗りのいびつな形をした矢をつがえて、アーチャーは短く詠唱の呪文を唱えた。刹那、引き絞られた矢が放たれる。宝具の輝きを纏つて加速した一撃に、ゲムムは対処するすべを持たなかつた。それもそのはず、アーチャーによる干将莫耶の投擲から次の一手までにかかった時間は、僅か五秒にも満たない。ゲムムからすれば、干将から莫耶、そして最後の一手に至るま

で、チャージタイムのない高速の連撃だ。

「いったん退くぞ、アイリスフィール」

どこまでも標的を追い続ける必殺の一撃を放つや、アーチャーはアイリスフィールの腰を抱え、高く跳躍した。アインツベルン城を前にしていったいどういうつもりかと、アーチャーに抗議をしようとしたアイリスフィールだったが、凄まじい加速の最中だ。下手に言葉を発すれば、舌を噛んでしまうだろうことは容易に想像できた。

遠ざり、小さくなってゆくアインツベルン城に、アイリスフィールは諦念の眼差しを向けた。一瞬ののち、アーチャーの放った宝具による閃光が、アイリスフィールの視界を覆った。今の一撃でゲムを葬れたという実感は、どうにも湧いてはこなかった。

第3話 「胸に秘めたジャステイス」

アーチャーが去り際に放った宝具が齎した魔力の閃光に次いで、視界を埋め尽くすほどの爆煙が濛々と舞い上がる。少し離れて、庭園に自生する木の幹に寄りかかって戦いの趨勢を見守っていたブラッドスタークは、敵の気配が去ったのを見計らって泰然と黒煙に歩み寄る。次第に晴れてゆく黒煙の中、赤と白に輝くオツドアイが異彩を放っていた。

「おお、無事だったか。まあ、心配はしてなかったがなあ」

仮面ライダーゲムムは健在だった。抉れた地面の中心に膝をついていたゲムムが、ゆっくと起き上がる。

『Over gauge』

空中に文字が浮かび上がる。

ゲムムの胸元の装甲に描かれたゲージが、青く染まっていた。一瞬遅れて、ゲージの下の薄緑の菱形のアイコンが、弾けて消える。消えた菱形が描かれていた場所の隣には、青、紫と菱形が並んでいた。緑のゲージが尽きて、青のゲージへと変わったのだ。青が尽きれば、今度は紫のゲージが顔を出す仕組みであろうことは容易に想像がついた。

「それもゲームマスター権限か。便利なモンだな」

「ブレイクゲージシステムを搭載した今のゲンムに即死はない。どれ程のダメージを受けようとも、ゲージブレイクの直後、一ターンの間はあらゆる攻撃が無効となる……コ
ンティニュー機能を失ったゲンムに、私がゲームマスター権限で追加した新機能だ」

「しかしそのご自慢の新機能とやらも、宝具の直撃には流石に堪えるってわけか」

なんでもないように笑って、スタークはゲンムの肩を叩いた。

ベルトに装着された二本のガシャットを抜き取り、ゲンムは変身を解除する。滔々と己の開発したシステムについて語るのかと思いきや、黎斗の表情は想像に反して明るくはなかった。

「どうした、いきなりゲージを一本削られたのがそんなに痛いか」

「ルーラークラスのダメージ半減補正を受けていながら、この体たらく。まさか緒戦でいきなり宝具を切ってくるとは思ってもみなかったが……ええい、英霊というものは甘く見ていたらしい」

檀黎斗が開発した聖杯戦争体感シミュレーションゲーム『フェイトクロニクル』において、ルーラークラスのサーヴァントはバーサーカーを除くあらゆるサーヴァントの攻撃に対してダメージ半減補正を持つ、という事実は既にスタークも聞き及んでいる。

セイバーはアーチャーに対して不利属性となり、アーチャーはランサーに対して不利

属性となる。各サーヴァントのクラスを属性に分け、有利不利を設定したらしい。

「そのブレイクゲージってのは、一度削られたらもう再生しないのか」

「変身解除のたび、H ヒットポイント Pの回復はするとも。だが、一度ブレイクされたゲージはゲームをリセットしない限り元には戻らん。これで私の残りブレイクゲージは二本となったわけだ」

「そうか、そいつは災難だったな」

「神たるこの私にイ……気安く触るなア！」

馴れ馴れしく肩を叩いてみせたが、その手は煩わしげに振り払われた。スタークは両手を軽く掲げたまま一歩退がり、笑う。

「おおっと、悪い悪い。そう怒るなよ、神」

「ふん。尤も……ブレイクされるたびに私のH ヒットポイント Pは増幅していく。次も同じ宝具でゲージブレイクまで追い込めると思ったら大間違いだなア！」

「なるほど、転んでもタダじゃあ起き上がらないってわけか。流石だよ、ゲームマスター……で、あれはいつたいどこの英霊なんだ？ 見たところアジア人らしい顔つきはしていたが」

黎斗は、にやりとほくそ笑んだ。よくぞ聞いてくれた、という感情を現すときの笑顔であることを、スタークは短い付き合いで既に把握している。

「やつの素性については既に把握している。直接戦えば、ルーラーとしての固有スキルで対象の真名やクラスなど一目瞭然だからな……だが、フフン。その情報は今しばらく温存しておくでしょう!」

「おおっと、こいつは手厳しい! そう簡単には教えてくれねエってか」

「当然だ、参加者の情報を漏洩するような人間がゲームマスターでは、困るだろう」

ふうむとスタークは唸ってみせる。うまくおだてて情報を引き出そうと思っていたのに、変なところで公正さを出してくるから扱いづらい。

「……だが、そうだな。一応、貴様にはスポンサーとしての義理もある。よって、あのサーヴァントのクラスと所属陣営くらいならば教えてやっても構わん」

「ほう、神様の慈悲ってやつか?」

黎斗は軽く掌を掲げてスタークを制し、満足気に頷いた。こういうところは扱いやすい。

「あのサーヴァントのクラスはアーチャー。所属陣営はアインツベルン……この城の本来的持ち主だ。大方、私から城を奪い返しに来たのだろう」

「――」

スタークは僅かに驚いたが、声を出すことはしなかった。

人の城に無断で足を踏み入れた不届き者だのなんだの言っていたような気がするが、

一応黎斗にも自分が城を奪い取った側であるという自覚はあったらしい。

「そしてあの女はアインツベルンが鑄造したホムンクルス。彼女自身がこのゲームの命運を分ける小聖杯そのもの」

「小聖杯？」

「そうだ。すべてのサーヴァントがその霊基を聖杯へとくべた時、彼女は本来の機能を取り戻す。人としての器を捨て、聖杯としての役割を果たすために」

スタークは再び唸り、黙考する。

聖杯戦争のシステムについては既に説明を受けている。ゲームの根幹部を作り上げた御三家の一角が聖杯を所持していることに対しては、さしたる驚きはない。スタークが興味を抱いたのは、その聖杯が人の形を成して、人として振る舞っているという事実だった。

「——アインツベルンの小聖杯、か」

スタークの脳裏に、あの鮮やかな銀髪が蘇る。燃えるような赤い瞳は、確固たる自分の意思を持つてこの城を奪い返そうと黎斗を睨めつけていた。

「つまり……あの女こそが、ゴッドマキシマムによつて生み出された新たな聖杯を起動させるための鍵、ってことか」

「ふむ？ 貴様にしては理解が早いな。うむ、そう取つて差し支えはない」

「はッ、道具に人の心を持たせるとは……人間つてのはつくづく業の深い真似をする生き物だな」

黎斗はなにを言うでもなく、腕組をしたままスタークを見据えていた。

「ん？ どうかしたか、神様」

「驚いたな。外宇宙からの侵略者にしては、ずいぶんと殊勝なことを言うものだ」

黎斗は訝しげにスタークを眇める。

別段面白いことはなかったが、スタークはあえて破顔一笑してみせた。

「意外か？ お前ら人間が地球外生命体を戯画化しすぎてるだけだと思うけどな」

冬木市を二分する未遠川を深山町の方角へと進むと、昔ながらの家屋が建ち並ぶ住宅地帯がある。同じ市内にありながら、再開発による都会化の進む新都側とは赴きを異にしており、深山町には日本家屋が多い。その中に、広大な敷地を持つ武家屋敷が存在した。衛宮切嗣が、曰くの一ついていた邸宅を相場よりも些か安く購入した物件だった。

家屋の内装は惨憺たる有様で、障子はあちこちが破れたままだし、庭に至っては草が好き放題生い茂っている。切嗣らがやったことといえば、かろうじて各部屋に白熱灯を用意し、最低限居住できるようにした程度だ。切嗣にしてみれば快適な暮らしを求めて購入したわけではないので、別段問題はない。

町内がすっかり寝静まった夜更け、切嗣が用意した拠点となる武家屋敷の居間に、昼間、初戦を切り抜けたばかりのアーチャーとアイリスフィールが集まっていた。家主の衛宮切嗣はというと、室内だというのに黒のロングコートを脱ごうともせず佇立したままで、その傍らには部下である久宇舞弥が控えている。

十三インチのブラウン管テレビに、映像が映し出される。舞弥が、己の使い魔に取り付けた超小型CCDカメラで撮影した映像だ。荒い画質ながら、赤い外套の英霊と、白い装甲を身に纏った英霊^{ゲム}の戦闘の記録が映し出されていた。

「これが裁定者^{ルーラー}を自称するサーヴァントか」

「ええ。あなたはと思う、切嗣」

「アインツベルン城を奪われたこと自体は大した痛手じゃない。あの城は元より遠坂にも間桐にも所在が知られているからね。拠点とするには些か心許ない。問題は、どのクラスにも属さないルール外のイレギュラーが現れた、ということだ」

ルーラーの侵略を、既存の勢力による攻撃と考えるにはあまりにも常軌を逸している。御三家が今更アインツベルンの城を攻め落とすなどという蒙昧を働くとは思えないし、時計塔から参戦しているロード・エルメロイがそういう手段に打って出る人間だとも思えない。

己の真名すら思い出せないと語るアーチャーに、切嗣は視線を向けた。

「アーチャー。奴は確かにサーヴァントで間違いないんだな」

「ああ、奴には確かに靈基が存在していた。実際に戦ってもみたが、神秘の加護すら持たない現代の装甲では、私の攻撃を受け続けて平然としていられたことに説明がつかない。信じがたい話だが、アレは紛れもなくサーヴァントだよ」

「そうか」

必要最低限の事実確認を済ませて、切嗣は再び黙考する。

アーチャーが嘘をついていないなら、アインツベルン城を乗っ取ったあの敵に関して得られる情報はこれ以上ない。考えたところで答えが出るとも思えない。今は情報が少なすぎる。それよりも切嗣が気になったのは、アーチャーの戦術についてだ。

舞弥の録画した映像を見るに、アーチャーは二本の短剣を精製して近接戦闘に及んでいた。その戦闘技術には、弓兵の英霊であることを忘れる程の冴えがあった。かと思えば、退避の際にはどこからともなく弓矢を精製して、宝具の一撃を放っている。一帯を吹き飛ばすに至ったあの威力を見れば、まさしく弓兵の面目躍如といえる。

「アーチャー。初戦を経て、少しでも自分の真名と宝具は思い出せたか」

「いいや、残念なことに記憶らしい記憶はなにも。かろうじて戦い方を思い出せた程度さ……どうやら体に染み付いていたらしい。自分で言うのも憚られる事実だがね」

飄々とした態度だった。自嘲的に口元を緩めて語るアーチャーの言葉が、切嗣には信

用ならない。だが、少なくとも聖杯に願望を託す英霊が、マスターの不利益を働くとも思えない。真名を明かしたくないなら、それでも構わない。アーチャーが正しく道具としての役割をまっとうしてくれるなら、その出自になどさしたる興味はなかった。

「弓矢のみならず、近接戦闘武器の扱いにも長けているとなれば、それはもはや弓兵としての戦術とはいえない。話が変わってくる。近距離戦はどこまでやれる？ 遠距離戦、射撃戦は。狙撃はできるのか。思い出せる限りでいい、お前のとれる戦術を僕に教えろ」

今後の戦略のために、切嗣は詰問から確認へと切り替えた。

衛宮切嗣との情報交換が終わって、既に一時間が経過していた。アーチャーは、切嗣が購入した武家屋敷の中庭にひとりぼつんと立って、夜空を見上げていた。今はすっかり摩耗してしまった昔日の記憶を手繰り寄せる。かつて、アーチャーがまだ人だった頃には見慣れた景色だったように思えるが、今となってははつきりと思いつけない。

切嗣には、嘘をついている。

最初は嘘ではなかった。召喚されて間もない間は、己の真名も、備わった能力も、なにかもが思い出せなかった。不確定な情報を伝えることは憚られたので、アーチャーは己のマスターに記憶喪失であることをありのまま伝えた。だけれども、こうして冬木の地に立ち、かつて見慣れた夜景を見上げ、とつくの昔に忘れた筈の場所に帰って来た

ことで、アーチャーは思い出してしまった。

思い出さない方がよかつたなどと殊勝なことは思わない。ただ、己の置かれた境遇を思えば、もう二度と再会することのなかつた筈の相手との巡り合わせを思えば、この状況はあまりにも酷なものであると思う。

「なにをしているの？ アーチャー」

アイリスフィールの声だった。薄い部屋着の上に、カシミアのコートを一枚羽織つただけの軽装だ。

「別段なにかをしているというわけでもない。ただ、思うところがあつてね。少し、考えごとをしていたのさ」

「自分の出自、記憶のこと？」

アーチャーの隣へ並び、アイリスフィールもまた夜空を見上げた。白く瑞々しい肌に透き通るような銀髪。どちらかといえば幼い顔立ちだとは思うが、彼女の端正な美貌は、月明かりを受けてますます艶を増したようにみえる。記憶の底に根付いた少女の面影が、彼女にはあつた。

「この身は英霊としてマスターに仕える為に喚ばれたものだというのに、蓋を開けてみればこの体たらく。自らの真名すら思い出せないとは、我ながら難儀なものだと痛感していたところさ」

「そう……そうよね。自分のことが思い出せないって、とっても不安なことだと思う」

「君に心配をかけるのも筋違いだね。安心したまえ、記憶の有無にかかわらず、私は私の成すべきことを成すだけさ。必要であれば戦うし、求められるなら狙撃しよう。君たちは、私を如何様にも利用すればいい」

くすりと、アイリスフィールは微笑んだ。

「ねえアーチャー。あなたから見て、切嗣はどういう人に見える？」

「ふむ……私がこの目で見た事実だけで語るなら、冷酷な現実主義者リアリストといった印象だな。だが、物事の優先順位は決して違えない男だ。スマートな思考の持ち主だと評価しているよ」

「ふふ、間違っていないわ。あまり会話をしていないのに、アーチャーはしつかり視てるのね」

「あまり私を見縊らないで欲しい。記憶こそないが、これでも私はマスターのサーヴァントとして回路パスを繋いだ身。召喚されてから今に至るまでの短い期間ではあったが、彼の能力を測る期間としては十分だ」

「そうかもしれないわね。アーチャー、あなたは、その……切嗣のやり方には、賛同しているの？」

やや言いづらそうに、アイリスフィールはおずおずと尋ねた。アーチャーからすれ

ば、特段恥じ入ることもない質問だ。アーチャーは一切の術いなく、至って平常通りに口を開いた。

「マスターの取る戦術が狙撃と暗殺というのであれば、別段異を唱えるつもりもないさ。最小限の被害とリスクで勝利を得られるのなら、これほど合理的な戦術もあるまい」
「そう言ってくれるなら、こちらも少しは気が楽になるわ。……ねえアーチャー。さつき少し言つてたけど、ひよつとして、貴方も狙撃が得意なの？」

「ああ、どうやらそれなりに心得はあるらしい。マスターが望むならば、遙か遠方の標的であろうとも狙い過たず撃ち抜いて見せよう」

アーチャーが言い終えるや否や、アイリスフィールはくすくすと漏れ出す笑みを隠すように、そつと己の口元を掌で隠した。

「私はなにかおかしなことを言つたかな、アイリスフィール」

「ふふ、いいえ、ごめんなさい。英雄つていうからには、自分の能力に自信を持つて然るべきだとは思うけど、仮にも三騎士のクラスで召喚されたあなたが、狙撃や暗殺について得意げに語るだなんて、なんだかおかしくつて」

アーチャーは憮然として肩をすくめた。アイリスフィールに他意がないことはわかる。言い返すのも、大人げないように感じられた。

「……逆に問おう。アイリスフィールから見ても、衛宮切嗣とはどういう人間なのかね」

「私にとつてのあの人は……夫であり、導き手。私の人生に意味を与えてくれた人」
微かに頬を上気させ、アイリスフィールはどこか情緒的な微笑みを浮かべた。

「……ほう」

「あつ、えつと……ごめんさい。あなたが聞きたいのは、そういうことじゃないわよね」

アイリスフィールは申し訳無さそうに微笑を浮かべた。それから、目線を伏せて、語り出した。

「あの人はね、元をただせば優しい人なの。ただ、あんまりに優しすぎたせいで、世界の残酷さを許せなかったのね。それに立ち向かおうとして、誰よりも冷酷になろうとした人。……なんとなく、だけど。あなたは、あの人に似ている気がするわ」

「自分の記憶すら思い出せず、出自も、己の能力すら判然としない私がかね？」

「なんとというか……言葉にしにくいんだけど。大きな理想を追い求めて、その理想に少しでも近付けるようにと、そうあれかしと振る舞っているような……。そばにいてあげたくなるの。私がどこまで彼の助けになるかなんてわからないけど、それでも、できる限り支えてあげたいと思ってしまう」

アイリスフィールは、どこか遠くを見るような瞳で語る。同じ夜空を見上げ、アーチャーもまた、幼い日に憧れた姿を思い起こす。その上で、アーチャーは、ふ、と小さ

く笑みを零した。

「ふむ。君のいうそれは確かに美談ではあると思うが、話がそれているように感じるのは私だけかな？」

「あつ……ああ、ええと、何度もごめんなさいね。いきなりこんなこと言われても、困らせるだけよね」

「いや、気にすることはない。君の信じる衛宮切嗣が私と似ていると言う言葉は、素直に称賛として受けとろう。しかし、私とて己の在り方に解を持たぬ身だ。君の言葉に否定も肯定も返せないことは許してほしい」

「ううん、アーチャーが謝る必要なんてないわ。ただ、そうね……それよりも、約束してほしいの」

「約束？」

アーチャーを見るアイリスフィールの瞳が、変わった。決然と見上げるその表情には、澄んだ美しさがあつた。

「夫を、切嗣を頼みます。危なっかしい人だから……あなたがそばについて、守つてあげて。……そして、聖杯を手に入れると約束して。そのときこそ、アインツベルンの宿願は果たされ、私と娘は運命から解き放たれる。——あなただけが頼りよ、アーチャー」

「……アイリスフィール」

アインツベルンの宿願。アイリスフィールは、それについて決して多くを語るまい。しかし、それでもアーチャーにはアイリスフィールの願いが理解できた。できてしまった。

記憶の奥底に沈んだ少女の顔を思い出す。聖杯を獲る、そのたったひとつの願いをアーチャーに託すしかないアイリスフィールの願いを無下にすることが如何に非道なことであるかを、アーチャーは理解している。

一拍の間をおいて、アーチャーは努めていつも通りに、飄々とした態度で笑みを浮かべた。

「私の成すべきことは、マスターに召喚されたあの瞬間から向こう、変わることはない。ただ必要であることを最小限の徒勞で成し遂げるのみ。マスターが所望するなら、私はマスターの弓となり、剣となるう」

約束はできない。未だしばらくは、衛宮切嗣がどう動くのかを見極める必要がある。だが、その果てに自分自身がどう動くのか、なにを成すのが正解であるのかは、今のアーチャーにはまだ、わからなかった。

「ありがとう、アーチャー」

微笑みというにはあまりにも儂い笑みを、アイリスフィールは浮かべた。

冬木ハイアットホテル。目下再開発中の新都における、最も見晴らしのいいビルだ。その最上階たる三十二階を、大胆にワンフロア丸ごと陣取ったケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、後ろ手を組みながらガラスの向こうに広がる冬木の町並みを俯瞰していた。

ケイネスから見える冬木の街は、度し難いほどに醜悪だった。大した歴史もなく、世界に誇れるような文化も持ち合わせておらず、その瘴外見だけを取り繕って西欧に渡り合おうと背伸びをして見せる田舎町。このホテルにしても同様のことが言える。無闇矢鱈と広い室内に、歴史的な値打ちなど存在するべくもない、ただただ値段が張るだけの品性の欠片も感じられない調度品を適当に並べ立てて、俗物ならではの富民像を演出しようとしただけの豚小屋だ。

つい百年ほど遡れば憲法すら存在しなかった極東の未開国が、まるで文明国の仲間入りを果たしたように振る舞うその醜悪さ、そしてなにより、聖杯戦争に挑むためとはいえ、貴族である自分がこんな田舎に身をやつさねばならないという事実を思うだけで、ケイネスは頭が痛くなる思いだった。

「まったく、嘆かわしい」

ケイネスは幼少の頃より、他の少年たちよりも常に一步抜きん出る存在感を放っていた。勉強にしろ魔術にしろ、いかなる課題であろうとも、他者よりも劣ることなく、常

に他者を見下す側の人生を歩んできた。ゆえにこそ、ケイネスは当然のように自身が天才であることを自覚している。己の意に沿わぬことなど、この世界には存在しない。それがケイネスを取り巻く世界観だった。

完璧なるケイネスの人生において、予期せぬ不都合などあつてよいことではない。仮にもしもそのようなことがあれば、それはケイネスにとつて、断じて許しがたい神の秩序を辱める冒瀆に他ならない。

たとえば、こんな極東の島国までやつて来て、よりにもよつて極東の島国由来の田舎英霊を召喚してしまったことなどが、それにあたる。

メリットを挙げるならば、極東の島国で戦う上では、知名度補正を得られるという利点はある。されど、それがなんだというのか。ケイネスにしてみれば、誇り高き時計塔の花形講師である自分が、名前すら知らない野蛮民族の木っ端英霊を召喚してしまったという事実そのものが度し難いのだ。

窓から街を見下ろし嘆息するケイネスの脳裏に、ふいに別の場所の光景が広がった。

冬木市内に放ったケイネスの使い魔が見せる景色だ。鳥や蝙蝠、鼠などの小動物に至るまで、使えると判断したあらゆる生物を間諜として街に放つておいたのだ。使い魔たちは、もしも他のサーヴァントに動きがあつたならば、すぐに伝えるようにとの指示を与えている。その使い魔が視覚情報を送つてきたということは、聖杯戦争に動きがあつ

たということだ。

「……ほう。サーヴァントがこちらに向かっている、と」

視えたのは、左右で赤と青の靴を履き違った年若い青年がひとり。後方には少し間を開けて黒いスーツの男が侍っている。どうやら、スーツの男の方がサーヴァントらしい。

この場所を知った上で向かっているのか、それとも偶然進行方向がこちらへ向いているだけなのかは判然としない。だけれども、少なくとも英霊としての気配すら隠すことなく堂々と接近してくることは、ケイネスにしてみれば挑発に等しい行為だった。

「身の程を知らぬゴミどもめ……よろしい、ならば戦争だ」

田舎者の魔術師風情がこのロード・エルメロイに挑もうという腹であるなら、それが如何に身の程を知らぬ狼藉であるか、身を以て教育してやる必要がある。

ケイネスは不敵に笑った。

「姿を見せよ、ランサー」

「はい、おそばに」

ケイネスの後方に、魔力の粒子が集う。ケイネス以外に誰も存在しなかった筈の室内に、途端にひとの気配が生じた。寸前まで不可視の領域に存在した英霊が、実体を持ってケイネスの傍らに姿を現したのだ。

振り返ると、いかにも日本古来の武將を彷彿とさせる装束に身を包んだ少女がそこにはいた。長くたなびく袖と腰布はいずれも純白ながら、胴体を覆う鎧は黒い。頭は、装束と同じく白の行人包ですつぽりと覆われている。ちらりと見える髪は、透き通るような銀と、艶やかな黒の二色だった。

少女は、行人包の奥の瞳を見開きケイネスの采配を待つ。その口元は、微妙に歪んでいた。微笑んでいるように見える。どんな会話をしても、なにを尋ねても、眼前の少女の笑顔が決して崩れないことをケイネスは知っている。

「ケイネス殿、いよいよ戦の幕開けでしょうか」

ランサーの声は弾んでいた。まるでこれから始まる戦いを待ち焦がれているかのよう。

「ふん。身の程を弁えぬ鼠が二匹、我が工房へと接近している。ランサー、貴様はこの不埒者どもを徹底的に叩き潰し、何処ぞで盗み見ている他のマスターどもに格の違いをしろしめろ」

「ええ、ええ、私はこのときを待っていたのです。それが我が主よりの主命とあらば、私はそのことごとくを成し遂げてみせましょう」

ランサーは短く首肯する。返答は、笑顔のままに告げられた。本当にケイネスの命令の重さを理解しているのか疑いたくなるほどに軽い返事。そのたった一言を残して、ラ

ンサーは空气中に溶けて消えるようにケイネスの座すスイートルームから姿を消した。

冬木大橋を渡り、新都へと入って間もなく、戦兎は脚を止めた。これからランサー陣営との同盟を結ぶにあたって、堂々と歩いて正面からゆくのが好ましい、というのはキャスターの案だ。

目の前に、行人包をかぶった白装束の少女が立ちふさがるように現れたことで、戦兎はキャスターの迷惑を察した。たとえ話し合いが目的であったとしても、無防備のうちからいきなり懐の内側に入り込むのではないささか心証が悪い。だから、堂々とこちらの存在を明かして進み、向こうから出迎えて貰おうという腹づもりで、キャスターは実体化したまま戦兎に随伴してきたのだ。

「おいキャスター、なんか白いのが出てきたぞ。あいつがランサーのサーヴァント?」

「サーヴァントであることに間違いはないが……私の記憶にはない存在だな」

「おや、あなたがたはランサーのサーヴァントをご所望ですか? いかにも、それはこの私ですが」

少女が、行人包の奥で相好を崩した。柔和な笑みだが、心を感じない。戦兎は直感的に全身が総毛立つのを感じた。あれは、優しさから来るものではない。攻撃性を孕んだ剣呑な笑顔だ。

キャスターが、戦兔に代わって一步前へ進んだ。

「私は此度の聖杯戦争において、キャスターのクラスを得て限界した者だ。真名を名乗れぬ非礼はご容赦願いたい」

少女の表情に変化はない。なおも薄く微笑んだまま、キャスターの動向を伺っている。

「もしも貴殿が名にし負うロード・エルメロイのサーヴァントであるならば、我々は敵対を望んでここに来たのではない。同盟を結ぶ目的で参じた次第である」

「あはははははははっ！　これはこれは、ご好意、痛み入ります。しかし、私もまたひとりサーヴァント。あなたがたの討滅を仰せつかった身としては、その提案を受け入れるわけには参りません」

少女の掌に、空气中から寄り集まった魔力で槍が精製される。それを空中でぶんと音を立てて回転させて、少女は構えた。

「なっ……待て、戦う以外に道はないのか！」

「なにを寝ぼけたことを言ってるんです？　これは聖杯戦争、聖杯に喚ばれた英霊同士が戦わずしてなんとしましょう！」

キャスターを片手で制して、今度は戦兔が前へ出た。

「仕方ねえな。そんなに戦いたいなら乗ってやるよ」

「ッ、マスターー!」

「ただし、場所は選ばせて貰う。ここじゃ町に被害が出るからな」

戦兎は既に、ランサーと戦うつもりでいた。どの道、目の前のランサーはキャスターが求めた相手ではなく、そもその話、こうも正面から敵意を向けてくるような手合いが、このまますんなりと話し合いで同盟を組んでくれるとも思えない。説得するにしても、一度こちらの力を示す必要がある。

なによりも戦兎は、サーヴァントに対してライダーシステムがどこまで対抗できるのか、また、エポルトとの戦いで消耗した今のビルドがどこまで戦えるのかを実地で確かめたかった。キャスターには悪いが、付き合って貰うしかない。

「民への被害を抑えるため、ですか。いいでしょう、そういう提案なら歓迎します。私も無辜の民に被害を及ぼすことは本意ではありません」

ランサーは一瞬瞠目したようにも見えたが、すぐに変わらぬ笑みを浮かべて、戦兎の提案を呑んだ。槍の切っ先をす、と降ろす。思いのほか聞き分けがよかったことに、戦兎は内心で驚いた。

「ただし、場所はこちらで指定します。あなたがたが指定した場所では戦いません。構いませんね?」

「そんなに心配しなくても、畏なんて仕掛けてねえよ」

「だったらなおのこと、どこで戦っても問題ありませんね」

「そりゃ、まあ」

無然として頷く戦兎の姿に満足いったのか、ランサーはにこりと微笑んだ。

「少し歩けば、倉庫街があります。あそこなら、誰かを傷付ける心配もないでしょう」

「……ま、そういうことなら従うとしますか」

戦兎に向けた笑みを崩さぬまま、ランサーの少女は踵を返した。手に握りしめられていた槍は、いつの間にか姿を消している。

軽くキャスターの肩に手を置いた戦兎を、キャスターは恨めしそうに見つめてくる。

戦兎は、諦念を促す首肯でもって返答した。

「ああ、もうッ………なんでこうなるんだ!」

ランサーに続いて歩き出した戦兎の後方で、キャスターだけが不満の嘆きを漏らしていた。

第4話「八華のランサー」

新都側に位置する海浜公園に隣接する形で、無味乾燥なプレハブ倉庫が延々と連なつた倉庫街がある。ランサーの言つた通り、夜ともなれば人通りも絶え、住宅街からも程遠いこの場所は、なるほどサーヴァント同士の戦闘を行うにはうつつけの舞台と思われた。

「この場所は……」

「知ってるのか、キヤスター」

「ああ、少々覚えがある」

戦兎よりもひと一人分ほど遅れて歩くキヤスターの眉間には、いつにも増して皺が深く刻まれているように戦兎は感じた。キヤスターはかつて行われた第四次聖杯戦争の経験者だ。この場所でなにかがあつたのであることは想像に難くない。

「さあ、ここまで来れば邪魔が入る恐れもないでしょう」

戦兎の先を歩くランサーが立ち止まった。戦兎らも、ランサーから十メートルほど距離を置いて立ち止まる。

「俺が勝つたら、キヤスターの話聞いてもらう。いいな、ランサー」

戦兎の提案を受けて、ランサーの表情は笑顔のまま凍りついたように見えた。けれども、それも一瞬だ。ランサーは嬌笑を上げた。

「あはははははははははっ！ 戦の前になにを言い出すのかと思えば、私に勝てる気であるとは面白い。そういうことは勝ってから言うものですよ、キャスターのマスター」

鮮烈な笑顔を浮かべたまま、行人包を取り払ったランサーの銀髪がふわりと舞った。美しく艶やかな銀色に交じる黒が、身に付けた黒の鎧と白の装束が、戦兎の脳裏に荘厳華麗なる白虎を連想させる。ランサーの腕には、既に魔力によつて精製された槍が握りしめられていた。いつでもかかつてこいと言わんばかりに、ランサーは腰を低く落とし、槍を両腕に構える。

キャスターはあからさまに嘆息してみせた。

「どうやらあちらはよほどの自信家と見える。残念ながら、戦闘は避けられなさそうだな」

「まったく問題ない。俺としても、ビルドがこの世界でどこまで戦えるのか実験してきたかった。むしろ絶好の機会と考えるべきだ」

「いいだろう、私のスキルで援助する。マスターは思うさま戦いたまえ」

多分に諦念の籠もった笑みを零して、キャスターは戦兎の後方へと下がる。ここまで来たら、戦闘を回避することは不可能であることを、キャスター自身理解しているのだ

ろう。

「ああ。支援は任せた、キヤスター」

戦兎は懐からビルドドライバーを取り出し、前進する。

キヤスターの持つ固有スキルには、自軍の攻撃力と防御力をそれぞれ上昇させる効果がある。神秘を纏わぬ戦兎のライダーシステムでも、キヤスターの軍略スキルの影響下であればサーヴァントと直角以上に戦えるだろう、というのはキヤスターの見込みだった。

ビルドドライバーを腹部へとあてがうと、バックルから飛び出した帯が、ひとりでに戦兎の腰へ巻き付き、ベルトとしての機能を果たす。次いで取り出した赤と青のポトルを、戦兎は耳元で振った。

「さあ、実験を始めようか」

かしゃやかしゃやか。ポトルに内包された成分が活性化する。戦兎の後方から、空中に描かれた数々の数式が前方へと流れてゆく。

微笑みは緩めぬまま、訝しげにこちらを見やるランサー。物珍しそうに見慣れぬ数式の数々を見上げるキヤスター。その両者に見せつけるように、戦兎は二本のポトルをベルトへと装填した。

『RABBIT!』『TANK!』

『BEST MATCH!!』

ドライバーのボトル装填部の隣に位置する円盤、ボルテックチャージャーが赤と青に発光し、けたたましい変身待機音を掻き鳴らす。ベルトのレバーを掴み、くるくると回転させる。戦兎の前方と後方とを挟み込むように、ドライバーから伸びた試験管が前と後ろで半分ずつ、ひとの形を形成する。試験管の内部を流れる赤の成分と青の成分が、試験管内部を満たして装甲をかたちづくった。

『Are You Ready?』

「変身！」

構えをとった戦兎の体を、前後から試験管によって形成されたひとがたの装甲が挟み込んだ。途端に戦兎の全身がボトルの成分によって形成された赤と青のアーマーに覆い尽くされる。

ベルトの音声が、高らかに鳴り響いた。

『鋼のムーンサルト!』

『ラビットタンク!!』

『イエーイ!!』

「勝利の法則は、決まった！」

倉庫街をまばらに照らす街灯の明かりよりもなお眩く、煌々と蒼銀の輝きを放つ複眼

を、ビルドとなった戦兎は指先でなぞった。

「風花雪月——月下に舞い散る白銀の花。八華のランサー、ここに推参！」

対抗するように、切っ先が六叉に分かれた槍をぶんと振り回したランサーは、再度油断なく構えをとり、名乗りを上げる。ランサーの身から放たれる法外な魔力の波濤を、戦兎はビルドの装甲越しに確かに感じ取った。

「いざ、尋常に……勝負ッ！」

開戦はすぐだった。槍を構え駆け出したランサーは、速い。速度だけでいうなら、エポルトの高速移動にも匹敵するのではないかと思わされた。

ビルドはガンモードに変形させたドリルクラッシュャーを取り出し、引き金を引いた。連続で放たれた光弾は、さながらドリルのように高速回転しながらランサーへと急迫する。そして、戦兎はすぐに異常に気付かされることになった。

「運は天に在り」

「……ッ」

無数の弾丸を放つが、ビルドの放った弾丸は、ただの一発も命中しない。ランサーの間合いに入った時点で、槍に弾かれるでも回避されるでもなく、弾の方からランサーを避けるように軌道が逸れるのだ。

「鎧は胸に在り」

「なんだ、弾が……当たらねえぞ！」

ランサーの槍は既にビルドの前方二メートルほどにまで迫っていた。ビルドは銃撃を諦め、即座にドリルクラツシャーをブレードモードに組み換える。サーヴァントを前にして、武器の変形による隙はあまりに大きかった。

「手柄は足に在りッ！」

「うおッ!？」

上段から振り下ろされた槍の一撃を、ドリルクラツシャーで受ける。柄と刀身を両手で支えるビルドの腕に、一瞬遅れて今の一撃によつてもたらされた痺れが伝播する。みかけによらず、相当な威力の攻撃を繰り出してくることはわかった。

ビルドはドリルクラツシャーで槍を跳ね上げ押し返し、反撃に出ようと踏み込むが、一瞬ののち、仮面の下で瞠目することになった。

「なっ……」

槍を跳ね上げられたランサーが、もう既に次の一手に移っている。右腕には跳ね上げられた槍を掴んだまま、左腕には最前まで存在しなかった刀が握られている。

間髪入れずにランサーの追撃がビルドを襲った。

振り下ろされた刀をドリルクラツシャーで受けると、今度は横薙ぎに槍が迫る。防ぐ手立てを持たないビルドの胸部装甲を槍が直撃し、魔力による閃光と火花が舞い散つ

た。

「ッ、これがサーヴァントの力か、思ってた以上だ。だったらー！」

よろめきながらも後方へと飛び退り、ビルドは二本のボトルを新たに取り出した。紫と黄色のボトルだ。短くボトルを振ったビルドは、それをドライバーへと装填する。

『NINJA!』『COMIC!』

『BEST MATCH!!』

「ビルドアップ！」

二色の試験管からなるひとがたが、追撃をせんと飛び込んできたランサーの行く手を阻む。けれども、それも一瞬だ。紫と黄色、二色の装甲に体を挟み込まれたビルドの姿は、既に異なるフォームへと意向していた。

『忍のエンターテイナー!』

『ニンニンコミック!!』

『イエーイ!!』

ベルトの音声が鳴り止む頃には、既にランサーとの距離は縮まり、互いが互いの合間に踏み込んでいた。右腕にドリルクラッシュャー、左腕に『4コマ忍法刀』を構えて、ランサーの動きに追随するのが目的だ。忍者ボトルの能力で、夜間の戦闘における反応速度がめざましく上昇している。

「はあっ！」

ランサーの槍をドリルクラッシュャーで受け止め、矢継ぎ早に振るわれた刀を忍法刀で弾き返す。同時に、ビルドは忍法刀のトリガーを引いた。

『分身の術！』

忍法刀に描かれた四コマ漫画のうち、分身のコマが発光し、電子音声術の名を告げる。漫画に描かれるイラスト調の煙が三次元に立体化し、ビルドの姿を覆い隠したのもつかの間、瞬く間にビルドは二人に分身を果たした。

「ッ、面妖な技を……！」

ランサーの槍がビルドを突いたかに見えた。そこに手応えがないことは、他ならぬランサー自身が気付いていることだろう。槍を引く頃には、漫画調の煙の演出とともに、三人目のビルドが姿を現していた。その全員が、忍法刀を逆手持ちで構え、腰を低く落としてランサーを睨めつけている。

「なるほど。サーヴァントならざる身ながら、武芸は達者のようですね。しかし、それでいつまでも凌げるなど思われているのであれば……片腹痛し痒し！」

ランサーの間合いへと踏み入ったビルドの忍法刀を、ランサーの槍が難いで払う。そのまま逆方向から飛び込んで来たビルドを刀で制し、薙ぎ払った槍の切っ先はそのまま三体目のビルドの刀を弾き返した。構わず飛び込んで来るビルドを、ランサーはその槍

で、刀で、ことごとくいなしてみせる。

分身したビルドは、巧みに飛び交いランサーを翻弄しながら目にも留まらぬ速度で互いの武器を相克させる。魔力と科学の衝突による衝撃波が、ふたりを起点に暴力的な奔流となって吹き荒れる。軒を連ねるプレハブ倉庫の外装が軋みを上げて歪む。ランサーの振るう槍の切っ先が掠めただけで、外装のトタン材が引き剥がされ、舞い上がる。人知の埒外にある超人同士の衝突のさなか、ビルドの忍法刀に描かれた火遁のコマが輝いた。

『火遁の術！』

「これならどうだい！」

三人のビルドが構える忍法刀の刀身が、ごとと燃え盛る炎に包まれる。一人目のビルドは、ランサーの下方から。二人目のビルドはランサーの上段から。三人目のビルドは後方から回り込んで畳み掛ける。相手が人間の姿をしているからといって手加減をしてよい相手ではないことを、戦兎は既に理解していた。

「甘いッ！」

ランサーの両手に握られる武器は、既に上下両端に刃がついた長大な薙刀へと持ち換えられていた。十全たる魔力の輝きを横溢させるその刃で、ランサーはまず上段と後方のビルドに同時に対処した。ランサーの魔力とビルドの炎がかち合って、轟音とともに

爆煙が舞い上がる。その煙幕を裂いて飛び込んだビルドの攻撃を受け止めたのは、通常の剣よりも刀身の幅が広いばさいけん祭剣だった。

「——でやあああああッ!!」

「ッ、いくつ武器持ってたんだよ!」

ランサーの神々しいまでに輝く魔力をみなぎらせた祭剣と、燃え盛る火遁の刃が激突する。生じた衝撃を利用して、両者後方に大きく飛び退った。ランサーの表情は、さも愉快とばかりに歪んでいた。

「あつはははははッ! なかなかやりますね、マスターの身でありながらここまで私に追いつがるとは」

「お生憎様、こつちもそれなりの修羅場はくぐり抜けて来たんだよ」

なんでもないように笑う戦兎だが、内心は振る舞いに反して穏やかではなかった。

この敵は、生半可な実力では倒せない。おそらく戦闘能力だけで言えば、ハザードレベル四を超えるライダーシステムにも匹敵している。既に三十合以上ランサーの槍と相克して、戦兎はその事実をまざまざと突きつけられていた。エボルトとの戦いでスベックが低下している今のビルドで戦うには荷が重い相手であるように思われた。

——だけでも、戦兎の戦意は決して折れてはいなかった。

「そつちの攻撃速度はわかった。だったら、次はこいつだ」

分身を解除しひとりに戻ったビルドは、構えを解いて新たなボトルを取り出した。コミックよりもやや濃い黄色と、青緑色のボトルだ。耳元で二本のボトルを振ったビルドは、それをドライバーに装填した。

『LION!』『SOUJIKI!』

『BEST MATCH!!』

「ビルドアップ!」

ライオンボトルと、掃除機ボトル。黄色と青緑で描かれた紋章が、ドライバーの前方に浮かび上がった。この戦闘に入ってから披露する、三つめのベストマッチだ。

いつの間にか武器を最初の六叉の槍に持ち換えていたランサーは、その切っ先を地面へ下ろし、涼し気な微笑みをたたえてビルドに流し目を送る。あくまで新たなベストマッチを正面から破るつもりなのだろう。

『たてがみサイクロン!』

『ライオンクリーナー!!』

『イエーイ!!』

黄金の獅子と、青緑の掃除機。新たに精製された二色の装甲に身を包んだビルドが、左腕に装着された掃除機のノズルを軽く掲げ、構えをとった。

「おや、今度は金と青緑ですか。いったいどんな手品を見せてくれるんです?」

「手品じゃない。てんツさい物理学者、桐生戦兎が披露する科学実験さ。お前にも付き合ってもらうぞ、ランサー！」

努めてとぼけた口調で答えつつ、掃除機を模した青緑の複眼と、獅子を模した黄金の複眼でもってランサーを睨め付ける。ランサーは笑顔を絶やすことなく、右手に握りしめた槍を構え直し——踏み込み、跳んだ。

瞬く間に距離を詰めて飛び込んで来た槍の一撃を左腕に装着された掃除機のノズルで受け止め、逆に右腕に装備したドリルクラッシュャーで突く。ランサーはそれを日本刀で受け流し、逆にビルドの胸部へと刀の切っ先を突き出した。

ビルドが数歩後退し、火花と魔力による閃光が舞い散った。けれども、痛みはない。ランサーが撒き散らした魔力の残滓を、左腕の掃除機で吸い取る。すると、肩に装着されたコンバーターが稼働して、魔力だったものがビルドのエネルギーへと変換されてゆく。

「はあああつー！」

構わずランサーは槍による刺突を繰り返した。ビルドはもう、防御の姿勢をとろうとはしなかった。

目が覚めるような魔力の煌めきを撒き散らしながら、ランサーの槍がビルドを襲うが、いかなる攻撃であろうとも今のビルドを傷つけるには至らない。ランサーの攻撃に

よる結果は、ビルドの体が僅かに傾くだけにすぎず、攻撃のたびに舞い散った魔力はビルドの左腕に吸収され、エネルギーへと変換されてゆく。

「ああ、なるほど。そういうカラクリですか」

「今度はこつちの番だ!」

ランサーから吸収した魔力で出力を上げたビルドのドリルクラッシュャーによる一撃を、ランサーは槍を上段に構えることで受け止めた。ランサーはなおも笑っている。既にライオンクリナーの秘密は見抜かれている様子だった。

ライオンクリナーのボディには、かつて英雄ヘラクレスが倒したとされるネメアの獅子の逸話を再現した能力が備わっている。獅子が持つ己の爪以外、あらゆる文明兵器による攻撃を無力化するネメアの獅子。その逸話は、この仮想世界においてもスペック通りの能力を發揮するらしい。

「あははははッ、まったくなんとも卦体けたいな技を」

説明するまでもなく、幾度かの攻撃を経てライオンボディの能力に当たりをつけたランサーが、槍の攻撃を緩めた。数歩分後方へと飛び退り、ランサーは槍の切っ先をビルドのベルトへと向け直した。

「——秘密はその腰帯ベルトにあると見ました」

ビルドを相手取って、一筋縄ではいかなないと判断しているのは、ランサーとて同じ

だった。通常の戦闘であれば、こうも打ち合えば手数が尽きる。けれども、ビルドはボトルを巧みに組み替えて、ランサーの攻撃に対処してくる。これ以上、ボトルを組み替える暇を与えずに、始末する必要がある。

「その仮説が正しいかどうかは、自分で実験してみな？　できるもんならの話だけだな！」

「ふふ、面白い人ですね。そうこなくては……！」

楽しい、と思う。緒戦にして血が滾る。きつとビルドは、ランサーの次なる戦術にも何らかの手を打って、対処をせしめて見せるのだろう。次はどんな姿でランサーの血を滾らせてくれるのか。どんな戦術でランサーをもてなしてくれるのか。それを思うと、悽愴な笑みが漏れる。

『戯れ合いはそこまでだ、ランサー。これ以上、勝負を長引かせるな』

どこからともなく、冷淡な声が響き渡った。

辺りを見回すビルドに対して、キャスターは驚いた風でもなく視線を伏せたままだった。

この場所に、ランサーのマスターが来ている。どこから直にランサーの戦闘を傍観し、直接指示を下している。

「わかりました。我が主がそれを望まれるなら」

他ならぬ主人ケイネス殿の命令であるならば、逆らう道理もない。一切の遊びを廃し、ビルドの

ベルトを破壊しよう。槍の構えを改めて、ランサーは深く腰を落とす。遊びを廃すと判断してなお、ランサーの顔に刻まれた笑みは深まるばかりだった。

対抗するように、ビルドもまた掃除機のノズルと化した腕を掲げ、構える。

「待て、そこまでだ、マスター。ランサーも、矛を収められよ」

一触即発の張り詰めた空気を乱したのは、ビルドのサーヴァントたるキャスターだった。

「ランサーのマスター——いえ、時計塔より参られし客将、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト卿とお見受けする。我々は、貴殿に仇成すものではない」

キャスターの手には、いつの間にか羽扇が握られていた。この場の全員が沈黙する。ランサーも、ビルドも、ケイネスも、誰しもがキャスターの次の言葉を待った。

「我々を味方につけることの有用性、とくとお見せしよう」

手にした羽扇を振るう。キャスターを中心に、赤い魔力の輝きがアスファルトの地面を伝い、広がってゆく。描かれた魔法陣は瞬く間に風水で用いられる奇門遁甲の陣をかたちづくった。ビルド、ランサーのみならず、連なるプレハブ倉庫、デリッククレーン、海面を問わず広範囲を囲い込むように描かれた魔法陣の中で、ランサーは狼狽する。

「これは……」

「奇門遁甲、八門金鎖の陣」

かつて中華の軍師、諸葛亮孔明が用いたとされる伝説上の陣形。地べたに描かれた奇門遁甲の魔法陣は、まさしく伝承に語られた通りの八門金鎖を描いていた。

八門金鎖の魔力光が、この場に居合わせた第三者の影を炙り出す。漆黒のローブに髑髏の面で素顔を覆い隠した英霊が、デリッククレーンの上に佇立し、全員を見下ろしていた。

「ッ、なぜ気配遮断が……!?」

「第四次のアサシンが分裂能力を備え、冬木市をくまなく見張っていたことは調査済みでね。こんな派手な戦闘を起こせば、すぐに偵察に来ることは予測できた」

「デリッククレーンの上に立つアサシンを見上げ、キャスターは不敵に頬を釣り上げた。」

「そして、我が石兵八陣に嵌ったが最後。お得意の気配遮断も意味をなさない」

アサシンは逃走を図るべく、漆黒のローブを翻した。ランサーが追撃をしかけると踏み出すよりも早く、アサシンの動きを掣肘するように、夜空を裂いて真紅の石柱が降り注ぐ。石柱はそのまま八門金鎖の陣をなぞるように反り立ち、アサシンの動きを妨げ

た。

ランサーに緩い笑みを送ったキャスターは、己のマスターへと向き直り、語気を強めた。

「逃がすなマスター。奴を仕留めろ！」

「なーんかよくわかんねえけど、やつちまっついていいんだな、キャスター」

「どうせ倒しても逐次湧いてくる敵だ、気に病むことはない」

ビルドの返事は、短い首肯ひとつだった。

『RABBIT!』『TANK!』

『BEST MATCH!!』

「ビルドアップ！」

ドライバーに装填された赤と青のボトルが輝いた。最初に変じた赤と青の装甲がビルドの姿を覆い隠し、兎と戦車の能力を備えた形態へと変身を完了させる。

『鋼のムーンサルト!』

『ラビットタンク!!』

『イエーイ!!』

ビルドは、ドライバーに装着されたレバーを高速で回転させた。最初に聞いた変身待機音が再度流れる。空中に描かれた見慣れぬ数式が、キャスターの八門金鎖の陣の合間

を流れてゆく。

『Ready Go!』

ラビット
兎の左足が大地を穿ち、ビルドは高く跳躍した。

空中に描かれた数式のグラフが、質量をもつてアサシンを挟み込む。X軸の先端に固定されたアサシンから、月夜に跳んだビルドまでの距離を結ぶようにグラフが展開されていた。

『Vortex Finish!!』

ボルトック・フィニッシュ
「はあああああああああああああッ!!」

タンク
戦車の右足に装着されたキヤタピラが、高速回転する。

グラフの斜線を滑るように加速したビルドの蹴りが、アサシンの胴体に突き刺さった。唸りを上げるキヤタピラが、アサシンの霊基を削り取る。

「うおおおおおッ!!?」

アサシンの断末魔が響く。漆黒のローブごと、エーテルでつくられた体が削り取られ、粒子となって崩壊してゆく。

一瞬ののち、ビルドのボルトック・フィニッシュがアサシンの霊基を爆散させた。燃え上がる爆炎を背にしながら、地面へ着地したビルドは己の複眼から伸びるアンテナをなぞった。

「って、なんだあいつ、ランサーに比べたら全然大したことない敵だったな」

「今のアサシンは群体の一部だ。そういう風に自分を分割して顕現できる能力の持ち主でね。だからまだ息の根を止めたわけではない」

かつ、かつ、かつ。革靴の足音を高く響かせて、キャスターは魔法陣の中を歩く。この陣形の中にいる限り、いかなる気配遮断も意味をなさず、キャスターの前に姿を現す他なくなるのだ。不用意に接近してきたアサシンは片端から仕留めればいい。

『なるほど。どうやら只者ではないようだ。いつたいいかなる手段をもつてそれほどの情報を得た?』

魔術迷彩によって、発生源と主の正体が秘匿された声が淡々と響く。八門金鎖の中に踏み入った時点で、姿を隠すことに意味はないのだが、キャスターとて無理に声の主を炙り出すつもりはなかった。声の主を、キャスターは既に知っていたからだ。

「ケイネス卿。故あって情報の出どころはまだ秘せざるを得ないのですが、少なくとも我らは御身を支援するため馳せ参じた身。キャスターの陣営ではあるものの、アーチボルト陣営に仇成す気概などは毛頭ありません」

『……そんな胡乱な言葉を信じろと?』

「我らは互いに聖杯を求め相争う身、信じられないことも無理はありません。……ですから、まずは我らの持つ情報を開示しましょう。その上で我らを味方につけることの

意義について、じっくりと吟味して頂きたい」

数瞬の沈黙が流れた。キヤスターの言葉を信じるべきかどうか、悩んでいるのだろう。ランサーはただ肅然と槍を下ろし、ケイネスの指示を待つばかり。

「暗殺者のサーヴァントを擁する者の情報。それから、遠坂とアインツベルンの持てる戦力について。その他、私の知る限りの情報をお伝えする」

追撃とばかりにキヤスターは言葉を続ける。

ケイネスの返答よりも先に、黄金の魔力がひとところに集約していくのを、その場の全員が目撃した。英霊として備わった霊感が、凄まじいまでの存在感を放ちながらやってきた第四の英霊に対してけたたましいまでの警鐘を鳴らしている。

キヤスターとランサーが、ほぼ同時に身構えた。

「^{オレ}私の情報を知っているからなんだというのだ」

どこまでも冷たく、極寒の湖面を思わせる凜冽な声音だった。

黄金の霊子が、地上十メートルほどの高さに位置する街灯のポールの頂上に集積し、ひとりの霊基を顕現させる。全身に鎖を巻きつけた黒衣の男。肩からかけた真紅のマントを風になびかせて、溢れる王威を隠しもせず眼下の三人を睥睨している。

キヤスターは困惑した。

あんなサーヴァントは知らない。

腰元には、鎖で結び付けられた剣がさげられている。黒塗りの柄に、黄金の装飾。刀身そのものは、白銀に煌めくステンドグラスのように見える。それがただの剣でないことは、剣そのものが纏った豪壮な装いからも明らかだった。

「キャスター、あいつは」

「わからない……あんなサーヴァントは第四次にはいなかった」

漆黒と真紅に彩られた第四の英霊の口元が、僅かに緩んだ。次いで、男の左右の空間に、ゆらりと黄金のひずみが生じた。水面に生じた波紋のように歪んだ無数の空間から、抜身の剣の切っ先が顔を出す。そのどれもが、男が腰にさげたものと同様の黄金の切っ先だった。

キャスターの知る英雄王の宝具、ゲート・オブ・バビロン王の財宝に酷似している。

「ならば、王の威容を知らぬまま滅びるがいい」

「ッ、マスター、戦闘開始だ！ 油断するな！」

キャスターの周囲に奇門遁甲の円盤が無数に展開される。それらすべてが、キャスターの意思に従って魔力のレーザーを照射する魔力兵器だ。ドリルクラッシュヤーを構えるビルドと、槍を構え見上げるランサーに向けて、男は冷笑すら浮かべながら、極めて酷薄なる処刑宣告を下した。

「キャスター、ランサー……二陣営揃って絶滅だ」

第5話 「再演のソードレジェンド」

夜空に無数に煌めく黄金のひずみの中から顔を出した剣先が、一斉に下方のキャスターとビルド、ランサーへと向けられた。底冷えするような殺意の波濤を総身で受け止めたビルドは、すぐさまキャスターを抱え、ラビットの脚力を活かして後方へと跳び退いた。唸りを上げて射出された剣が寸前までビルドがいた場所を穿ち、コンクリートの破片と砂埃を舞い上げる。地面はクレーター状に抉られていた。

ランサーも同様に跳んでいた。しかし、方向はビルドとは真逆だ。降り注ぐ剣の雨を掻い潜り、時に鉾を振るって剣の軌道を逸しながら、凄まじい速度で黒と赤の英霊が佇立する街灯へと接近し、鉄で出来たポールを根本から薙ぎ払った。ランサーの鉾に切断された鉄柱はバターののように容易く斬り裂かれ、地響きを立てながら倒壊してゆく。

黒と赤の英霊は己の足場が崩壊するよりも先に、身を翻し跳んでいた。漆黒のコートが風に舞う。危なげなく着地した男は、なおも悠然と眼前へと迫るランサーを睥睨する。

「ほう、この我を同じ大地に立たせるか。雑種の分際でよくもやる」

男は——セイバーは笑った。感情を感じさせない、冷徹な笑みだった。

ランサーは既にセイバーの間合いの内側に飛び込み、鉾を振りかぶっている。神速たる勢いで迫るランサーの攻撃に対し、今から腰の剣を抜いて応戦するのでは遅すぎる。はたから見ていた戦兎にもそれはわかった。けれども、セイバーが黙って斬り伏せられるとも、戦兎には思えなかった。

セイバーは、急迫する鉾へ向けて左手をかざした。掌に刻印された蝙蝠にも似た紋章が、闇の波動を放つ。ランサーが振るう鉾は、そこから先には進まなかった。

再び、セイバーの頭上に黄金の波紋が無数に広がった。そのすべてから、黄金の剣が顔を出す。ランサーはセイバーへの攻撃を断念し、後方へと跳び退いた。射出された剣がランサーを追う。ランサーの膂力をも越える圧をもつて降り注ぐ剣すべてを打ち払うことは出来ない。即座に判断したのだろう、ランサーは迎撃よりも回避に徹し、必要最低限の動作で鉾と刀を振るい、降り注ぐ剣の軌道を逸した。

「援護するぞ、マスター。ここでランサーをやられるわけにはいかん」

キャスターの提案に、戦兎はビルドの仮面の下で嘆息した。

「ああもうツ、まだ万全には程遠いビルドで、できればあんなのと戦いたくなくなかったんだけどな」

「奴を倒さなければこの聖杯戦争を勝ち抜くなど夢のまた夢だぞ」

「つたく、仕方ねえな……！　そういうこと言われちゃ、断るに断れないでしょ」

セイバーが現れたときから、きつと戦兎はこうなることが頭のどこでわかっていた。だから、ここで尻尾を巻いて逃げることはしない。

ビルドは、新たに二本のボトルを取り出し、軽く振った。

しやかしやかしやカ。ボトルの成分が内部で攪拌される。ビルドはそれを勢いよくドライバーに叩き込んだ。

『GORILLA!』『DIAMOND!』

『BEST MATCH!!』

「ビルドアップ!」

ボトルから抽出したふたつの成分が、茶色と水色のエネルギーとなって、ドライバーから発生したチューブを通して新たな半ハーフボディ身を形成する。

黄金のひずみが、今まさに姿を変えようとするビルドへとその剣先を向けた。キャスターの奇門遁甲型のビットから放たれたレーザーが剣を迎撃するが、その程度では止まらない。剣は一齐にビルドへ向けて射出された。

「マスターツ!」

剣がビルドを前後から挟み込むように展開されていたスナップライドビルダーへと殺到する。

刹那、炸裂。巻き起こった爆炎の中から、新たな姿へとビルドアップを完了したビル

ドが、右腕に装着した巨腕を振り上げ飛び出した。

『輝きのデストロイヤー!』

『ゴリラモンド!!』

『イーイー!!』

「はあああああああッ!」

駆け出したビルドへ向けて放たれる剣を阻むように、空中に無数のダイヤモンドの壁が形成される。剣はビルドが精製したダイヤモンドの壁にその切っ先を突き刺し、一瞬は速度を緩めた。けれども、壁にはすぐに亀裂が走った。まもなく放たれた剣はダイヤモンドのバリアを打ち砕き、ビルドへ向けて殺到するが、その速度は大幅に低下している。ビルドは腕に装着した巨腕・サドンデストロイヤーで降り注ぐ剣を薙ぎ払い、前進する。ゴリラモンドは、こと物理的な攻撃に対して絶対的な防御力を誇るベストマッチフォームであった。

「ほう」

セイバーがほくそ笑む。けれども、戦いの構えを取ろうとはしない。なんら武器を手にする事もなく、セイバーはただ悠然と佇立して迫るビルドを睥睨するだけだった。

「ハアアアッ!」

ビルドの巨腕が、セイバーの手前で地面を殴り付けた。ゴリラボトルのエネルギーを

叩き込まれたコンクリートの地面は、ビルドを中心に亀裂が入り、地中へと流し込まれた凄絶なる衝撃がセイバー目掛けていくつもの土柱を舞い上げ、奔る。

セイバーは黄金の剣を射出しながら後方へと跳んだ。着地地点には、既に銚を振り上げたランサーが先回りしていた。

「いざ、つかまつるッ！」

「よかろう。ここまで我に追いつがった褒美だ」

未だ空中に滞空したまま、セイバーは微かに笑った。腰にさげていた鞘から引き抜いた白銀と黄金の魔剣を振りかざし、空中で身を翻したセイバーはランサー目掛けて急降下する。刹那、白銀の魔剣とランサーの銚が激突した。互いの魔力が閃光となって散る。

ランサーには、最前までのビルドとの戦闘でやってのけたように、セイバーの一太刀を打ち返すことはできなかった。一撃が、予測していたものよりもずっと、重たく、鋭い。ならばとばかりに、ランサーは両腕で構えた己の銚に魔力を漲らせ、その切っ先に眩い輝きを宿らせる。

ふん、とセイバーが鼻を鳴らした。

「なっ」

ランサーの銚に宿った魔力の輝きが、まるでなにかに吸い上げられるように消失して

ゆく。代わりにセイバーが振るう魔剣の、ステンドグラスを思わせる白銀の刀身が、紅く妖しく煌めいた。

途端にランサーの勢いが削がれた。なおも膂力を弱める気配のないセイバーの剣が勢いを増す。

「先の勢いはどうした、雑種」

これ以上、このセイバーと正面からかち合うことはできない。それはランサーにとって苦渋の決断だった。ついには鉾が押し切られる前に身を翻し、後方へと跳んでセイバーの間合いから離脱する。

「く……ッ」

退避の刹那、押し切られたセイバーの魔剣が、ランサーの胴体を袈裟斬りに浅く斬り裂いた。鎧ごと皮膚の表面を断たれ、滲んだ血が白の装束を汚す。ランサーは膝をついた。けれども、それも一瞬だ。すぐに体内へと流れ込んできた魔力が、ランサーの傷を癒す。マスターであるケイネスによる治癒だった。

やおら立ち上がったランサーは、鉾を構え直し、セイバーの魔剣を睨んだ。あの剣がランサーの身体を斬ったその瞬間、刀身そのものが血を啜るように紅く煌めいたのを、ランサーは見逃さなかった。

おそらく、あの剣は、斬り合った相手の魔力を吸う性質を持っている。正面から力技

でかち合うのは、あまり賢い戦術ではない。

「我が魔剣の性質に気付いたか。ならば次はどうする?」

セイバーは小首を傾げ、頬を緩め笑う。再び空中に穿たれた黄金の穴から、大量の剣が射出され、ランサーへと殺到する。ランサーは飛び退いてかわしながら、その幾つかを魔力迸る鈍と刀で迎撃した。射出された剣は容易く軌道を逸らされ、周囲の地面を抉る。どうやら、複製された魔剣には魔力を吸う機構は搭載されていないらしい。

「はああああああッ!」

横合いから飛び込んでかたビルドが豪腕を振り上げて、セイバーへと挑む。ビルドの豪腕がセイバーの魔剣と激突するが、今度はセイバーの魔剣は輝かなかった。

『——ランサー、我がサーヴァントよ。お前はあの剣をどう見る』

ランサーの脳裏に、直接ケイネスの声が届く。遠距離からの念話だ。

「あれは……どうやら、斬った対象の魔力を吸い上げる性質を持っているようです。まるで剣そのものが獲物の血を吸るように」

『……ふん、忌々しい。やはり最も警戒すべきはセイバークラスだったか』

憎々しげにケイネスはぼやいた。

ランサーの観察する限り、ビルドの豪腕とセイバーの魔剣は幾度かかち合ってはいるが、最前のように魔剣が紅く輝くことはない。おそらく、ビルドが魔力を用いて戦う戦

士ではないからだろう。

だけれども、地面をひっくり返すほどのエネルギーを持ったビルドの豪腕を相手に互角以上に立ち回ってみせるあのセイバーの魔剣は驚異的だ。セイバーの剣術そのものから見ても、手練であることは間違いない。時折セイバーを援護するように空中から現れる黄金のゲートと、そこから射出される魔剣の複製もまた、攻略の難易度を跳ね上げている。

ランサーは、鉾を握り直し、油断なく構えをとった。目線の先に、セイバーと相克するビルドの姿を見据えて。

“ケイネス殿。ここはかの者らの提案を呑み、いったん停戦協定を結ぶというのはいかがでしょうか”

岸壁間際の集積場に積み上げられたコンテナの山の隙間から、切嗣はそつとワルサー狙撃銃の銃口を覗かせ、埠頭で相克する人外たちの剣戟を薄緑のスコープ越しに観察していた。

切嗣は、外部から状況を俯瞰し、戦いの趨勢を見守っていた。

マスターでありながら二色の装甲に身を包み、自ら戦場に躍り出る男と、そのサーヴァントと思しきスーツの男。それから、いかにも時代錯誤な中華風の鎧を身に纏った

白銀のサーヴァント。そして、黄金の魔剣を幾重にも射出する、黒と赤のサーヴァント。少し離れた場所に、倉庫の屋根の上に身を潜めてランサーに指示を出す男——ケイネス・エルメロイ・アーチボルトがいることは既にわかつている。戦場の反対側に陣取った舞弥のスコープも、既にケイネスを標的に収めている。今、切嗣と舞弥が十字砲火を仕掛ければ、まず間違いなくケイネスを仕留めることはできるだろう。けれども、状況があまりにも特殊過ぎる。

英霊であるアサシンを仕留めてみせたあの男の存在もそうだが、見たところ黒と赤のセイバーの戦闘力はあまりにも桁違いだ。キャスター陣営とランサー陣営が徒党を組んで戦っても、勝てるかどうかはわからない。ここでわざわざ切嗣が戦いの渦中に身を投じる必要性は、さして感じられなかった。

「舞弥、アサシンとセイバーのマスターは見つかったか」

『いいえ。恐らく、この場所にいるのはランサーのマスターだけです。アサシンが撃破されても、周囲の人影は動きませんでした』

インコムの向こうから、小さく女の声が返ってくる。切嗣よりも戦場に近い位置に陣取らせた舞弥からの報告だ。キャスターの奇門遁甲の範囲の外に陣取らせたのは僥倖だった。ここで舞弥の存在が衆目に晒されることは切嗣にとっても避けたい。

おそらく、アサシンのマスターは言峰綺礼とみて間違いないだろう。言峰綺礼のアサ

シンによる偵察の上で、遠坂時臣の駒であるセイバーが動く。今回は、アサシンが思いのほか早い段階で仕留められたことで功を焦った遠坂が、一気に決着をつけにきたのかもしれない。まだ七騎の英霊が出揃っていない状態で仕掛けるあたり、遠坂はあのセイバーに余程の自信があるとみえる。

『どうする、マスター。私の宝具であれば、あたり一带纏めて吹き飛ばすことくらいはできるが』

切嗣よりも更に離れた地点に待機させた赤の弓兵からの念話だった。アーチャーは、切嗣や舞弥のように電子機器を使わずとも、己の鷹の目ひとつで戦場の仔細を観察することができる。狙撃には自信があると言うアーチャーを配置につかせたはいいが、当のアーチャーから届いた念話には、嘲りの色が含まれているように感じられた。アーチャー自身も、今自分が進言した戦術が効果的でないことを理解した上で、切嗣を試しているのだろう。

「そのご自慢の宝具で、奴ら全員を仕留めきれぬ自信はあるのか」

『あいにくだが、全員を仕留められるかと問われれば、答えはノーだな。戦場を荒らすことを目的とした狙撃というのであれば、不可能ではないがね。もしくは、誰かひとりを目撃的ターゲットに決めて仕留めにかかるか』

「そうか」

啞えた煙草の煙を冬の夜空に吐き出して、切嗣は冷静にスコープの向こうで相克する英霊たちを観察する。舞弥にも聞こえるように、インコムのマイクをオンにした。

「舞弥、アーチャー。僕らはまだ動かない。少なくとも戦闘が終了するまでは、傍観に徹底しろ。なんなら、緒戦は見送ってもいい」

それが、数々の戦場を渡り歩いてきた衛宮切嗣が下した決断だった。

切嗣が今見極めなければならぬのは、あの三つ巴の決着と、派手な戦闘に誘き寄せられて他の勢力が現れるかどうかだ。漁夫の利を狙うにしても、油断している第三者を狙うにしても、この状況で戦場にくちばしを突っ込んでいくのはあまりにも愚かしい。

案の定、切嗣の銃に装着された熱源センサーが、戦場へと急迫する新たな熱量を感知するまでに、そう時間はかからなかった。

「はは、ははははは」

倉庫街に立ち並んだコンテナの物陰に潜んだ間桐雁夜は、憎悪に血走った隻眼に三つ巴の戦いを捉え、乾いた笑みを漏らした。

一年間に及ぶ地獄のような準備期間は、すべてこの瞬間のためにあつたと言っても過言ではない。己の身を内から外から蝕む蟲の大群に身を沈め、骨の髄まで食い尽くされる生き地獄の中、それでも生き抜いてこられたのは、この瞬間だけを夢見て来たからだ。

遠坂時臣。

葵の夫でありながら、桜の父でありながら、あの母子の人としての幸福を踏みにじった男。間桐雁夜が欲するすべてを手に入れ、そして間桐雁夜のすべてを貶めた、憎んでも呪ってもなお足りぬ怨敵。その時臣が召喚したと思しき英^{サウザン}霊が、今まさに雁夜の刃の届く範囲にいるのだ。

「殺せ……！」

身を焦がす程の憎悪を滾らせて、雁夜は叫んだ。

時臣本人は、この際後回しでいい。まずは時臣が召喚した手駒を粉碎して、聖杯戦争から脱落させる。雁夜が味わった挫折をあつ男にも味わせた上で、葵と桜の幸福を踏みにじった罪を贖わせてやる。それを思い描くだけで、狂おしいほどの興奮が体の芯から湧き上がる。

「殺すんだバーサーカー！ あの時イバーを焼き尽くせッ!!」

瞬間、雁夜の体内の魔術回路が一斉に励起する。それにともなつて、鳴りを潜めていた蟲たちが蠕動を始め、雁夜の体から魔力を吸い上げる。蟲たちは、雁夜の生物としての許容量など構わず、容赦なくその肉に食らいつき、骨を軋ませ、バーサーカーへと魔力を供給させる。その苦痛すらも、時臣の屈辱に歪んだ顔を思えば些事であるように思われた。

激戦のさなか、あらぬ方向から轟と吹き荒れた魔力の奔流は、その場で戦う誰しもが予期せぬことだった。

豪腕と魔剣を競わせ相克しあうビルドとセイバー目掛けて、灼熱の炎が地面を伝い、唸りを上げて急迫する。瞬間に炎は勢いを増し、火柱となって両者を襲う。

「ッ、今度はなんだよー！」

ダイヤモンドの障壁を空气中に精製しながら、飛び退る。

セイバーは、己の魔剣へと自らの魔力を漲らせ、真紅に輝く刀身をぶんと振るった。剣気として放たれた魔力が炎を掻き消す。次に全員が見たのは、最初の炎の到来によって火の海となった四車線道路の上を、青く燃え上がる少女が、炎の尾を引きながらセイバーへと急迫する姿だった。

「シャアアアアアアッ!!」

甲高い声を響かせて、少女は空を自由自在に舞う龍のように駆ける。射出される魔剣の尽くを空中遊泳でかわしながら、少女は己の周囲に無数の青の炎弾を浮かび上げさせた。炎弾もまた、少女と同じように青の尾を引きながら一斉にセイバー目掛けて加速する。

セイバーは呆れた様子でふうと嘆息した。空中に円陣を描くように展開された黄金のひずみから、無数の魔剣が顔を出す。今度は射出ではなく、刀身の半分程度を露出さ

せるだけだった。けれども、炎弾を受け止めるにはそれで十分だ。乱入したサーヴァントの発する炎弾をすべて受け止め、セイバーも自らの魔剣を握り直した。

「ほう、今度は蛇女か。無聊の慰めにはちようどいい」

刹那、セイバーの魔剣と、蒼炎が激突した。蒼炎は魔剣と激突するや、空中で身を翻して、右から、左から、後方からと何度もセイバーを焼き焦がさんと迫る。その都度空中から出現した魔剣に阻まれ必殺のチャンスは逃すが、両者が激突するたびに辺りには炎が撒き散らされるので、戦場が火の海と化するのにそう時間はかからなかった。

「おいキャスター、なんなんだよ、あのサーヴァントは」

「あれも本来の第四次にはいなかったサーヴァントだが、セイバー一点狙いで仕掛けている辺り、あのサーヴァントのマスターにもおおよその予測はつく。おそらく、クラスはバーサーカーだろう」

キャスターの推測の通り、蒼焔の少女は血走った瞳を見開いて、興奮した蛇のように叫びを上げてセイバーへと炎による攻撃を繰り返している。全身に纏った炎のために判別は難しいが、白い和服を身に纏った、薄緑の髪をした少女のように見受けられる。あの火竜の少女でも、セイバーを倒すには至らないだろう。

「どうする。あいつも援護するか」

問われたキャスターは、小さく唸った。

「そなたたちは、あのサーヴァントについてもなにか知っているようですね」

銚を構えたまま、ランサーがキャスターとビルドの隣に並び立つ。最前までのような敵意は感じられない。

「知っているという程でもない。だが、恐らくあのバーサーカーの目的については私の想像の通りだろう。セイバーについては……もしかすると、部分的に知っているかも、程度だな」

虚空から無数の剣を召喚し射出するという戦法に、キャスターは見覚えがあった。あのセイバーの真名自体は予想もつかないが、少なくとも、キャスターも知っている英霊の霊基を部分的に取り込んだ複合サーヴァントの可能性もある。もしもキャスターの予想の通りなら、セイバーがどの部分まであの英霊キルガメッシュの能力を使えるのが懸念事項だ。

ランサーは、銚の切っ先を下ろして、正面からキャスターに向き合った。

「かつて多くの軍を率いて戦乱の世を駆けたそなたの軍略は、手駒の数が多ければ多いほどその真価を発揮するとみました」

「ちよつと待て。あんたキャスターの真名のこと……」

ビルドの仮面の下で狼狽する戦兔を、ランサーは片手で制した。

「あまり私サーヴァントを見縊らないことです。先程の奇門遁甲からなる陣形を見れば、そなたの真名など容易に想像がつく。よもや筋違いなどとは言わせませんよ、中華の軍師どの」

キャスターはふ、と笑みを零した。

「それを見抜いてなおもそのように進言するということは、我々に協力してくれると考
えていいんだな、ランサー」

「ええ、まずはあのセイバーを仕留めることが最優先です。上手くことをなせたなら、そ
なたたちの話を聞いてもよいと、我が主は言っています」

ランサーもまた、不敵に笑った。想定になかった戦闘を介することにはなつたが、こ
れでキャスターの当初の目的は果たされることになる。ケイネス卿は、キャスターの言
葉に耳を傾けることと、聖杯戦争において最大の驚異となりうるセイバーの討滅とを天
秤にかけての結果、キャスターの言葉をとつてくれたのだ。キャスターはそれが嬉しかつ
た。

「ふ、上等だ。時計塔に名高いロード・エルメロイが味方についたとあらば、我らに敗北
はない。やるぞ、マスター、ランサー。ここで可能な限りセイバーを追い詰め、情報を
引き出す」

キャスターは羽扇を振るつた。再び、火の海と化した地面に奇門遁甲の陣が描かれ
る。空を覆う暗雲には、既にキャスターの魔力によって巨石を精製する準備が整えられ
ていた。

「まずはセイバーの動きを封じる」

「だったら、その役目は俺が引き受けますよつと。お誂え向きに、とっておきのベストマッチがある」

ビルドの手には二本のボトルが握られていた。真紅のボトルと、鉛色のボトルだった。両手に握ったボトルを振って、内部の成分を活性化させながら、ビルドは前進する。「ランサー、貴殿の宝具でセイバーを仕留めることは可能か」

問われたランサーは、しばし沈黙した。姿の見えない主と念話でやりとりをしているのであろうことは明白だった。数瞬ののち、ランサーは笑みを浮かべた。

「あのセイバーを仕留められるならば、宝具の開帳を許すと、我が主はおっしゃいました。そして仕掛けるならば、私の宝具は確実に敵を仕留めます。討ち漏らしはありえませんが」

「流石は音に聞こえた天才魔術師とそのサーヴァントといったところか。ならば私も、その采配を裏切るわけにはいかないな」

「ええ、ですがその為には、まずあの魔剣をなんとかしたい」「という」と

怪訝な面持ちでキャスターは問う。ランサーは、セイバーの持つ黄金の魔剣へと視線を送った。

「セイバーの魔剣は、接触するだけで獲物の魔力を吸い上げる性質を持っているようで

す。いかな必殺の宝具といえど、魔力が通らぬでは意味がない。ですから、仕掛けるなら魔剣を封じて確実なる好機を作り……しかるのち、我が宝具で一気呵成に仕留めた
い」

「ふむ……魔力を吸う宝具か。厄介だな」

キャスターは顎に指を添え、小さく唸った。

「ええ、ですがかの高名な軍師であるそなたになれば、その役目を任せてもよいものと睨みました。さて、まさか出来ないなどとは言いませんよね？」

「……ッ」

ランサーの表情は、なおも涼しげな笑顔のままだった。自分の言葉がいかに難題であるかなど斟酌する様子もない。これにはさしものキャスターも眉根を寄せが、しかしここで無理などと答えられようはずもなかった。キャスターは動揺を表には出さぬよう努めて、ジャケツトの襟を正した。

「フン、勝利のために必要あらば、用意してみせるが軍師の務め。その役割、無碍に断つては我が真名が廃るといふもの」

「あつははは！ 流石は中華の軍師どの、そうこなくては！ では、以後の采配はそなたに委ねましょう。なに、心配することはありませんよ。この八華のランサー、軍神の異名にかけて、我が身の栄光に泥を塗るような無様は晒しませんとも」

「……ほう。これは失敗するわけにはいかないな」

呆れ混じりにキャスターは笑みを溢した。軍神、という異名は真名看破に繋がる大きなヒントだが、今はそれ以上にランサーからかけられるプレッシャーが大きい。中華に名だたる軍師のひとりとして、キャスターこそ無様な采配は許されない。肩の荷は重いが、なんとしてもここでキャスター陣営の力を見せ付ける必要がある。

「まったく、こいつは手厳しい限りだ」

「ああ、そうだな」

ビルドの仮面の下から、戦兔の笑みが溢れる。キャスターの肩に手を軽く乗せて、ビルドは前へ歩み出た。

「けど、さっきまでの敵と手を取り合って戦うなんて、こんな熱い展開で、やれないなんて言えますすかつての」

「ああ、その通りだな。やるぞ、マスター」

キャスターも、笑った。

こういう状況でマスターが戦いに慣れていることは、サーヴァントにとつては頼もしいものだ。十年前のライダーのマスターとは大違いだ、などと取り留めのないことを考えながら、キャスターは再び燃える戦場へと目を移した。

眼前で戦う火竜の少女は、手にした扇子に巨大な炎を纏わせて、炎の舞いでセイバー

を翻弄している。空中から幾度となく射出される魔剣をかわしながらの戦闘は消耗も大きいのか、その速度は徐々に落ち始めている様子だった。

「急ぐぞマスター。このままではバーサーカーがやられてしまう」

「了解。ホントのピンチになる前に、俺たちも動くとしますか」

キャスターに急かされるように駆け出したビルドは、二本のボトルをドライバーに装填した。

『PHOENIX!』『ROBOT!』

『BEST MATCH!!』

「ビルドアップ!」

燃える真紅の不死鳥が描かれたボトルと、頑強なる鋼鉄のボディで造られたロボットが描かれたボトルから、ドライバーはそれぞれの成分を抽出し、ハーフボディを形成する。跳び上がったビルドの体を、形成された真紅と鉛色の装甲が前後から挟み込んだ。

『不死身の兵器!』

『フェニックスロボ!!』

『イエーイ!!』

「キャスター、引き続き支援は任せただぞ!」

「問題はない。存分に力を奮え、マスター!」

紅く燃え上がる不死鳥の翼を舞い上げて、ビルドは夜空へ舞い上がった。翼から噴出する炎を推進力にして加速し、火の海となった戦場へと飛び込む。バーサーカーが撒き散らした炎すらも吸収した不死鳥の体は、より熱く、激しく燃え上がる。

空中に穿たれたひずみから、剣が射出された。けれども、射出された剣がビルドへと命中するその瞬間、ビルドの体は炎となつて弾け消えた。刹那のうちに、炎の粒子は一箇所へと集まり、再びビルドの姿をかたちどる。無敵の不死鳥となつたビルドは一気にセイバーとの距離を詰めた。

「はあああああッ!!」

不死鳥の右腕に炎を纏い、セイバーの間合いへと飛び込む。魔剣を振り払ってバーサーカーを追いやったセイバーは、間髪入れずにビルドへとその黄金の切っ先を突き出した。その攻撃も読んでいたとばかりに、ビルドの左腕に装着された巨大なロボットアームが、セイバーの魔剣を横合いから挟み込み、受け止める。

から空きになったセイバーの胴体目掛けて、ビルドは燃え上がる炎の拳を叩き込んだ。

「しつこい男だな、貴様も」

セイバーはなおも余裕の態度を崩そうとはしなかった。左の掌に刻まれた紋章をビルドへと向ける。紋章から噴出した闇の波動が、強烈な風圧を伴ってビルドへと殺到

し、拳に宿った炎を掻き消した。

「なっ、うそーん!？」

「シヤアアアアアアアアアアアアッ!!」

今度は横合いから蒼炎に包まれた少女が飛び出した。ちようどセイバーの退路を阻むように、空からキャスターの巨石が降り注ぐ。退路を断たれ、ビルドへの応戦の為に両腕を封じられたセイバーへと、バーサーカーは蛇を思わせる執念で急迫した。

降り注ぐ剣の洗礼を掻い潜り、その魔剣と紋章による攻撃をも制し、燃え上がるバーサーカーはついにセイバーへと組み付いた。

小さな掌をセイバーの胸板へと叩き付けた少女は、笑う。

「やっど、やっどやっどやっど……やあつと捕まえました」

見開かれた瞳。いびつに吊り上がる頬。狂気すら孕んだ剣呑なる笑み。

少女は高らかに、謳うように声を張り上げた。

「燃えまあーす!」

刹那、轟と唸りを上げて、バーサーカーを中心に極太の火柱が空高く舞い上がった。極熱の火柱は瞬く間にセイバーを飲み込み、ビルドを取り込み、すべてを焼き尽くさん勢いで燃え盛る。

一瞬遅れて、火柱の外側に、炎の粒子が集まった。粒子は再び夜空で翼を羽撃かせる

ビルドの体をかたちづくった。己の体を炎へと分解し、不死鳥のように何度でも蘇る。それが、フェニックスロボの特性だ。炎による攻撃は、フェニックスロボにとってなら驚異にはなりえない。

「離脱しろ、マスター！」

キャスターの叫び声に応え、ビルドは炎の翼を羽撃させた。火柱から距離を取るよう、ビルドの体は空中を滑るように後方へと退避する。

「これぞ大軍師の究極陣地——」

間髪入れずに、夜空に満ちる星々の輝きを覆い隠す暗雲から、キャスターの魔力によつて赤色化した巨大な石柱が降り注いだ。火柱を中心に展開された奇門遁甲をなぞるように降り注いだ無数の石柱は、セイバーとバーサーカーのふたりを奇門遁甲の陣形内部へと封じ込める。最後に、ふたりを隔離するべく、赤塗りの天井が石柱の上を覆った。

「石兵八陣かえらずのじんツ！」

キャスター自身が己の宝具名を宣言することで、大軍師・諸葛孔明の宝具はその真価を発揮する。もはや脱出不可能の迷宮と化した石兵八陣かえらずのじんの内部から、本来上方へと突き抜ける筈だった火炎が行き場を失い溢れ出す。圧倒的な熱量を封じ込めた石兵八陣の内部は、今頃灼熱の窯と化していることは想像に難くない。

「これが、キャスターの宝具……」

「ですが、この程度であのセイバーを仕留めたとは思えません」

ランサーは槍を構えたまま、油断なく時を待つ。ランサーに言われるまでもなく、あの炎熱に満ちた迷宮の中でセイバーが燃え尽きたなどとは、この場の誰もが思うまい。勝負は、キャスターの宝具が破られた、その時だ。

燃え上がる炎の翼を収めたビルドは、ランサーの隣へと降り立つと、いつでもボルテック・フィニッシュを叩き込めるように右手をドライバーにかけ、構えた。

石兵八陣の内部から漏れ出る火炎の色が、徐々に失われていく。

全員が身構えた、その数瞬ののち、異変は起こった。

「なっ……」

石兵八陣を形成する石柱に、光の筋が鋭く奔った。なにかに斬り裂かれたような、一寸の狂いもない直線だ。

刻まれる光の線は加速度的に数を増やし、やがて内側から加えられる斬撃に耐えられなくなった石兵八陣は、光の粒子となって消え去った。

バーサーカーが残した炎が、石兵八陣の中心から殺到する高圧力の魔力の奔流に押し流され、爆風となって拡散する。ビルドも、ランサーも、キャスターも、その場の全員が、反射的に己の腕で頭を覆い隠した。

吹き付ける熱風の余波が過ぎ去った頃、ビルドは顔を上げ、そして己の目を疑った。「あれは……ッ！」

空中に、無数の黄金のひずみが出現していた。そのすべてから、黄金の輝きを纏った鎖が射出され、バーサーカーの全身を絡め取り、空中に吊し上げている。もはやバーサーカーは身動きすら取れず、セイバーの放った天の鎖エルキドゥに拘束され、締め上げられるほかなかった。

だが、しかし。

全員が真に驚愕し、瞠目したのは、鎖の宝具に対してではない。

「馬鹿な、あの姿は」

キャスターが、全員が抱いた狼狽を口にする。

石兵八陣の中心に封じ込められていたセイバーの姿は、既に漆黒と真紅の衣服を纏った亜麻色の髪の青年ではなくなっていた。

己の体から湧き出る魔力ひとつで燃え盛る炎のすべてを吹き消してみせたセイバーの全身は、隙間のない鎧に覆われていた。月明かりを受けて妖しく煌めくマツトブラックとメタリックレッドの装甲。さながら、漆黒の闇を真紅の鮮血で彩ったような鮮烈さすら感じさせられる。

セイバーが放出した魔力の余波で、とうに周囲の街灯の明かりはすべて吹き飛んでい

だ。闇夜の中で、セイバーの顔を覆う仮面の大部分を占める複眼は、煌々と輝くエメラルドグリーンに彩られていた。同様の輝きを放つ宝玉が、胸部装甲には三つ埋め込まれている。

「仮面、ライダー」

その姿を、他ならぬ戦兔が見紛うわけもない。何事もなかったかのように戦場に佇立し、悠然たる姿勢で一同を睥睨するセイバーのその姿は、まさしく仮面ライダーと呼ぶに相応しい鎧姿であった。

第6話 「サーヴァント参集」

間桐雁夜は、倉庫街のコンテナに背中を預けたまま、ずり落ちるように地べたに尻餅をついた。アスファルトには、咳き込むと同時に吐き散らした血液が点々と広がっている。雁夜の体の凡そ半分は、体を内側から食い荒らす刻印虫によって機能不全に陥っていた。既に片目は壊死して視力を失っているし、残った隻眼も、バーサーカーが魔力を消費するほどに視界に火花が散ってちかちかと眩む有様だった。

「バーサー、カー……」

コンテナの物陰から軽く顔を覗かせる。雁夜のサーヴァントは、光輝溢れる鎖に全身を絡め取られ、身動きを封じられていた。あれでは霊体化して逃れることもできまい。だが、それでも少^{バサーカー}女は敵意に満ちた眼差しをセイバーへと向けている。

宝具を解放するか、とも考えたが、あの鎖はおそらく尋常なものではない。宝具を発動したところで逃れることができる保証もないし、なによりも雁夜のコンデイションを考えるに、宝具の不発という展開だけは絶対に許されない。ただでさえ崩壊寸前の体で戦闘に堪えているというのに、その上で宝具発動のための魔力を吸い上げられて、なにも成せずに終わるなど目も当てられない。宝具を発動するのならば、確実にあのセイ

バーを葬れる舞台を用意してからだ。

「くそッ、時臣め……なんてバケモノを引き当てやがったんだ」

雁夜は齒噛みした。

互いが召喚した英霊サレフアクトに、あまりにも戦力差が開きすぎている。魔術師としての素養がこんなところにまで関わってくるのでは、わざわざ狂化の属性を付与した甲斐がない。尤も、ステータスアップの目的で狂化を付与し召喚した雁夜のバーサーカーは、宝具以外のあらゆる能力値が凡そ底辺と呼ぶに相応しいものであった。こんなことなら、狂化属性などはじめから付与しなければよかった。だが、それでもバーサーカーは聖杯戦争にかける唯一の希望だ。ここで失うわけにはいかない。

「背に腹は代えられない、か……」

己の右腕に宿った令呪へと視線を落とし、雁夜は忌々しげに独りごちた。

バーサーカーの放った火炎の直撃を、キャスターの宝具という密室空間で受けて、なおセイバーは一切の疲労を感じさせることなく、悠々と佇立していた。闇のような漆黒と、血のような真紅に彩られた全身装甲を身に纏ったセイバーは、黄金の剣を振り上げる。己の宝具で雁字搦めにしたバーサーカーにトドメを指す気だ。

「まずは一匹」

謳い上げるように、セイバーの仮面から声が漏れた。

「バーサーカー、絶滅だ」

セイバーの鎧の腹部に取り付いた黒と赤の蝙蝠が、セイバーの言葉を引き継いだ。

漆黒のマントを翻し、振り上げられた黄金の剣がawaやバーサーカーを貫こうというその瞬間、捕らわれたバーサーカーを起点に魔力の輝きが吹き上がった。

「ます、たあ」

夜を昼と染め上げんばかりの黄金の輝きの中で、バーサーカーは目線を伏せ、苦しもうに眩いた。さしものセイバーも剣を突き出す手を止め、片手で仮面を覆う。吹き上がった魔力の粒子が夜の大気に溶けて消える頃には、鎖に囚われていたバーサーカーの姿も露と消えていた。

「フン、令呪を使ったか。それもいい、所詮は儂い命……この我が手^{オレ}ずから誅するまでもない」

セイバーのエメラルドグリーンの複眼が、今度はビルドへと向けられた。

刹那、ビルドの装甲の下で、戦兎は全身が総毛立つような感覚に囚われた。完全体となったエボルトと対峙したときと同等か、それ以上の威圧感だ。今のビルドでは、苦戦は免れないだろう。撤退するにしても、あのセイバーを前に逃げおおせることなどできるのだろうか。一瞬とはいえ身動きを封じられたビルドに、セイバーは軽く指を向けた。

「貴様、さつきこの我を仮面ライダーと呼んだな」

「ああ。その装甲はなんらかのライダーシステムによるものだ、違うか」

「雑種風情が、戯けたことを。ソレは所詮、人間どもが造った贋作まがいもの。我が纏うは、原初の

鎧……あらゆる魔族を闇に葬る闇のキバ。貴様らが纏う贋作と一緒にされる謂れはない」

セイバーの嘲笑混じりの酷薄な言葉を耳にした瞬間、ビルドの装甲の下で、戦兔の体からすつと熱が引いていく心地がした。寸前まで眼前の敵に抱いていた畏怖すら鳴りを潜めて、戦兔は深く息をついた。

「……なるほどな。正直俺は、その闇のキバってのがどんなシステムなのかなにも知らない。だが、少なくとも……ひとつだけわかったことがある」

「ほう。なんだ、言ってみろ、雑種」

「確かにアンタの言う通りらしい。アンタは、俺が知ってる仮面ライダーとは決定的に違う」

これまで戦兔が出会ってきた仮面ライダーは、みな自分以外の誰かを守るために戦っていた。なりゆき上戦うことになってしまったライダーもいるが、それでも彼らの心の根底にあったのは、なにかを守りたいという感情だった。それを知っているからこそ、戦兔は言うのだ。当然のことを当然のように、なんの銜いもなく堂々と。

「だから、前言撤回だ。俺は、アンタを仮面ライダーとは認めない。認めるわけにはいかねえんだよ……!」

ビルドは、ドリルクラツシャーを構え直した。戦いの気配を察知し、ランサーもまた鏢の切っ先を上げて構える。黒と赤の鎧に身を包んだセイバーは、別段戦いの構えを取るでもなく、その仮面の下でくつくつと乾いた笑みを溢した。

「なにを言い出すのかと思えば、戯言も甚だしい。闇のキバを纏ったこの我を前に仮面ライダーなどという称号は無意味。今からそれを、証明してやる!」

セイバーの足元が波打った。湯水の如く湧き出たエメラルドグリーンの魔力が、セイバーの足元のアスファルトに巨大な蝙蝠の紋章を描いていた。煌めく闇の紋章は、魔力を漲らせて膨張してゆく。なにが起こるのかは判然としないが、まずい、ということだけはその場の全員が本能的に理解した。

『キングは天の鎖エルキドゥに引き続き、さらに宝具ダイクキバの力を解放するつもりでいます!』

寶石通信機から聞こえる時臣からの報告に、遠坂時臣は頭を抱えた。

戦場となる倉庫街から遠く離れた遠坂邸の地下においても、時臣は状況の把握に不自由はしなかった。斥候として放ったアサシンのひとり¹が仕留められたことは想定外だったが、ならばキャスターに気取られる間合いに入らなければよいだけのこと。倉庫街からは些かばかり離れた新都のビルの屋上に陣取ったアサシンからの報告を受けて、

そのマスターである言峰綺礼と、セイバーのマスターたる遠坂時臣は情報を得ているのであった。

「これは拙いな」

『拙いですね』

時臣にとつての誤算は、自らのサーヴァントが人類史に名高い英雄王・ギルガメツシユと、人類の天敵たる種族・ファンガイアのキングによる複合サーヴァントであったことだ。傲岸不遜極まるセイバーが、いち人間でしかない時臣の制御下に甘んじることによしとするわけがない。案の定、時臣の思惑に反して、緒戦から宝具であるダークキバを開帳したばかりか、天の鎖エルキドゥにダークキバのさらなる能力まで披露しようとしている。このままではセイバーが持つ宝剣の真の能力をも解放しかねない。

「宝具とは本来、必殺の切札。それをこうも早期の段階で繰り返し衆目に晒すなどと、あまりにも軽率に過ぎる」

かつて世界をも滅ぼしかけた闇のキバは、最後の切り札でなければならぬ。確実に仕留められるかと思われたバーサーカーを取り逃した時点で、この戦闘をこれ以上続行させる利点は少ない。これ以上の戦力の開帳は避けるべきだ。

『マスター
導師よ、(バ)決断を』

「……セイバーは十分やった。緒戦の成果としては上出来だ。これ以上の戦闘は、我が

陣營の方針に反する」

どんな時でも余裕を持って優雅たれ——それが遠坂家に伝わる家訓だ。それを肝に銘じてきた自分が、よりもよって緒戦で令呪を一面失うことになるなどと、考えたくもない失態だった。しかし、マスターを尊重する心がけなどかけらも持ち合わせていないセイバーを制御するには、必要な消費だと断ずるほかない。

「令呪をもつて奉る——」

時臣の右手に刻まれた令呪が、赤の輝きを放った。

地面に描いた巨大なキバの紋章をいざ放とうというその瞬間、ふいにセイバーの仮面はその方角を転じた。視線は東南。その方角に遠坂邸が存在する。

「貴様ごときの諫言で、キングであるこの我に退けと？ ふん、大きく出たな、時臣」

闇のキバの仮面の下で、さも不服そうにセイバーは独りごちた。足元に満ち満ちていた魔力の輝きが、すうと消失してゆく。セイバーは興味を失ったようにビルドから視線を外し、黄金の宝剣を下ろした。漆黒のマントを翻して、セイバーは背を向ける。

「命拾いしたな、雑種ども」

数歩、進む。セイバーが踏みしめたアスファルトに亀裂が入り、沈む。刻まれた足跡に炎が灯り、ゆらりと燃え立つ。最後にセイバーは、ちらりと全員を一瞥した。

「次までに有象無象を間引いておけ。我オレと見えるまみるのは真の英雄のみでいい」

最後にそれだけを言い残したセイバーの鎧姿が、闇夜に溶けるように消えてゆく。セイバーが実体化を解いたことで、この場の誰もが予想しなかったかたちで、聖杯戦争の緒戦は幕を下ろした。

「なるほど。どうやらセイバーのマスターは、あのセイバーほど剛毅な質^{タチ}ではなかったようですね」

拍子抜けとばかりにランサーは苦笑するが、一方のキャスターは神妙な面持ちを崩すことはなかった。

「いや、堅実な判断だ。セイバーが強敵であるということは、この一戦で十分に理解できた。これ以上の情報を開示する前に撤退を選んだ引き際の鮮やかさは、見事と言わざるをえない」

事実として、奇門遁甲を駆使したキャスターのサポートさえあれば、この戦闘から離脱すること自体はそう難しいことではなかっただろう。戦闘を続行して情報や能力を露呈させるでもなく、セイバーは計り知れない力を持っている、そういう印象だけを他陣営に叩き込み、一方的に撤退させたのだ。

「今後もあるなやつらと戦うとなれば、ビルドだけじゃ苦戦を強いられることは間違いない。こつちも戦力を整える必要がある」

ビルドドライバーに装填されていた二本のボトルを引き抜くと同時に、戦兔の身を

覆っていた二色の装甲が霧散する。生身を晒した戦鬼の前に、ランサーは手にした鉾の切っ先を下ろした。戦意は感じられない。

キャスターは再び、どことも知れぬランサーのマスターに届くよう、声を張った。

「ご覧の通り、此度の聖杯戦争は一筋縄ではいかぬ猛者揃い。ましてや、セイバーがあれ程の強敵と知れた今、戦いの趨勢を左右するのは、情報と戦略、そしてそれを運用するに足る戦力と心得ます。如何ですか、ロード・エルメロイ」

一泊の間を置いて、魔術迷彩で隠匿された声が辺りに響いた。

『ふむ……よかろう。有能な男は嫌いじゃあない。それが礼を弁えた男とあらば尚更だ。少々、田舎訛りの英^{イングリッシュ}語なのが残念だがね』

「では、ケイネス^{マスター}殿」

ランサーが顔を上げる。なおも姿を表さぬまま、ランサーのマスターは続けた。

『キャスター、いや……中華に名高い策士、諸葛亮孔明とでも呼ぶべきかな？ いいだろう。先程のアサシンを屠るに至った情報、そして強敵セイバーを相手取り、犠牲なく戦いを進めた采配と手際に免じて、この場はこちらも矛を収めよう』

かつ、かつ、と革靴がアスファルトを叩く音が響く。コンテナの影から、後ろ手を組んだ青年が顔を見せた。金髪をオールバックに撫で付けた、厳しい表情の男だ。その男の顔を、キャスターはよく知っていた。

「あれが、ランサーのマスター……」

「時計塔が誇る一級講師、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。神童と謳われた、天才中の天才。それが味方につくとなれば、これほど心強いものはない」

おべっかを並べたてるキャスターの言葉を聞き流しつつも、ケイネスは満更でもなさそうに頬を緩めた。

「よろしいのですね、マスター」

己が主へと向き直ったランサーを、ケイネスは片手で制す。

「策士と謳われた男の口車に乗ることに些かの懸念はあるが、ここまで得体の知れぬ連中となると様子見が得策だ。それに、あのセイバーのような敵もいる以上、今ここで不用意にことを構える必要もあるまい。緒戦はあくまで慎重に、な」

「ケイネス殿がそう仰るのなら、私に異論はありません。まあ、正直なところ、キャスターのマスターとはもう少し楽しんでみたかった、という気持ちもあります」

笑顔のままにしれつと言つてのけるランサーに、戦兔は眉根をひそめた。

「勘ッ弁してくれ、こつちは二度とあんたみたいなのと戦いたくないんだよー」

「あつははは！ まあまあ、そうおっしやらずともよいではありませんか。あのまま続けていればどちらが勝つたのか、興味ありませんか？」

笑顔のまま戦兔に迫るランサーを、マスターであるケイネスが窺めた。

「フ、そう逸るなランサー。これは聖杯戦争。最後の勝者となる陣営はひとつ。そこなマスターとの決着もいずれつけられよう」

「ふむ、確かに。ではキャスターのマスター、その折にはよしなに」

「最ツ悪だ……!」

戦兎はあからさまに肩を落としてみせた。反面、ランサーはにこやかに微笑むばかり。出会ったときから、戦闘を経て、今に至るまで、キャスターはこの少女の笑顔以外の表情を見ていない。そこに些かの狂気を感じるものの、口にするほどのことでもないと思考を切り上げた。

「それでは、ケイネス卿。詳しい話は冬木ニュータワー最上階のスイートで如何か」

「ふん、こちらの所在すら把握済みとなれば、今更秘匿する理由もあるまい。よかろう、貴様らを我が魔術工房へと招待しようではないか」

「痛み入ります」

ケイネスの判断は間違つてはいない。魔術工房とは、魔術師によつて造り上げられた要塞のようなものだ。そこに踏み入るといふことは、すなわち手練の兵隊で固められた城内に踏み込んでいくようなものだ。下手に魔術を行使しようとすれば、たちまちケイネスが張り巡らせた罠トラップの餌食になることを意味している。ビルドへの変身などは以ての外だ。それを理解してなお、キャスターはケイネスの魔術工房を話し合いの舞台に選

んだ。ケイネスが、卑怯な手段で寝首を搔くような手合の魔術師ではないということを知っているからだ。

「では行くぞ、マスター。くれぐれも粗相のないようにな」

やや冗談めかして、キャスターは戦兔の肩を叩いた。戦兔はさも煩わしそうに嘆息した。

マンホールの鉄蓋が、ずっと音を立ててずれる。下水へと続く隙間を押し広げるように、白い和服を纏った少女は、両手で鉄蓋を引きずり動かした。顔の面積の凡そ半分が罅割れた男の姿が見えると、途端に少女——バーサーカーはその表情を輝かせた。

「ますたあ、ますたあ」

下水へと続く梯子に手足をかけて、うつろな瞳で星空を見上げる間桐雁夜の脇に両腕を差し入れて、その体を地上へと引きずりあげる。ふたりは今、戦場となった倉庫街から、三ブロックほど離れた地点にいた。未だ倉庫街から出られてはいないものの、雁夜ひとりでは、移動するだけでも小一時間はかかる。少女の助けを得て、芋虫のように這い上がってきた雁夜を、バーサーカーは抱き留める。

「ごめんなさい、ますたあ。わたくしが至らないばかりに……こんなところで令呪を使わせてしまつて」

雁夜は、バーサーカーの腕の中で悶え、その細腕を振り払った。路上へと転がった雁夜は、夜の冷たい空気を肺いっぱい吸い込んだ。長らく下水の臭気の中にいたので、それだけで生き返ったような心地がした。

彼方から、遠くサイレンの音が響く。戦場となった倉庫街へと押し寄せるパトカーや救急車、消防車による騒音だろう。今この場所には、ふたりの姿を見咎めるものは誰もいない。遠く響くサイレン音も、今の雁夜にしてみれば、外界の出来事のようにだった。

雁夜は冷たいアスファルトに仰臥し、夜空を見上げた。全身が血まみれだった。乱れた息は、当分整う気配もない。

皮膚という皮膚がただれ、じくじくと痛々しく血液を垂れ流す雁夜に、バーサーカーはおそろおそろ触れる。

「ああ、ましたあ……なんとおいたわしい姿でしょう。わたくしの愛で、少しでも癒やして差し上げられたら」

「バーサーカー……おまえは、いったい……なんなんだ」
荒く吐き出される呼気の合間に投げた問いに、バーサーカーはきよとんと目を丸めた。

「……嫌ですわ、ましたあ。わたくしはあなたの清姫ですよ」

清姫。

それが雁夜が喚び出したサーヴァントの真名だ。安珍清姫伝説における化生。愛憎に狂い、蛇の化身と成り果てて、惚れた男を焼き殺した魔性の女。それが、雁夜の喚び声に応えた英霊の本性だ。

戦闘能力は、あのセイバーには及ぶべくもない。生前惚れた男を雁夜と誤認し、自らの歪んだ視点による理想を押し付けてくるどうしようもない女。

いよいよもって、雁夜はとんでもないハズレサーヴァントを引かされたのではないか、という懸念に陥っていた。宝具を解放し、蛇の化生としての能力を発揮すれば、おそらく戦えないことはない。けれども、最低限の戦闘のために宝具の発動が必要となれば、そのたびに雁夜の魔力は食い荒らされることになる。

「いや、駄目だ……俺は、こんなことで立ち止まってられない。あのセイバーを倒さないと……桜は——ッ」

それでも戦うしかない、と、緩くかぶりを振って言葉を発したところで、肺から血液が込み上がってきた。ごほごほと粘っこい咳をして、血を吐き捨てる。喉に絡んだ不快感を吐き出そうと、咳を続ける雁夜の頭を、バーサーカーが抱き寄せた。

「ますたあ」

バーサーカーの白く美しい和服が、雁夜の吐き出した赤黒い血で汚れることも厭わずに、少女は雁夜を包み込むように腕に抱き、その罅割れた肌に柔らかく瑞々しい肌を擦

り寄せた。

「ますたあがあの少女を救うために命を投げ出すというのなら……それを止めるだけの言葉を、わたくしは持ちあわせてはおりません。わたくしはただ、死地へ飛び込もうとするますたあを守るために力を振るうだけ」

「バー、サー、カー……おまえ」

「わたくしは、もう二度と愛する殿方を死なせたくはありません。ますたあがあの少女のために聖杯を獲るなら、わたくしはますたあを救うために聖杯を獲ります。だから、ますたあ……次こそは、宝具の開帳を。ますたあが望むなら……わたくしは醜い蛇の化身と成り果てることも厭いはしません」

確かに、聖杯の奇跡に縋れば、死人同然の雁夜の体を元通りにすることもできなくはないだろう。だが、そんなことはもう、雁夜にとってはどうでもいいことだった。

どうでもよいことだと思っている筈なのに、無意識のうちに、雁夜の手は、自分を抱き寄せるバーサーカーの髪へと伸びていた。指の間に、薄緑の絹糸のような長髪を絡める。バーサーカーは、その雁夜の指にそつと己の小さな手を重ねた。

「今度こそ。今度こそ……わたくしは、愛した人を守り抜きたいのです。だから、ますたあ」

「ああ……くそ」

これより先に待ち受ける戦いの連続を思えば、暗澹たる気持ちに苛まれる。果たして、遠坂時臣を倒すまでに、いったいどれ程の道程を経る必要があるのか。雁夜は己の血で赤く彩られた掌を眇め見た。

たった一回の戦闘でこの有様であることを考えれば、宝具を開帳しての戦闘はどれ程体力を消耗するのか、想像するだけで背筋が寒くなる思いだった。だけれども、雁夜の望む桜の幸福は、その先にしか有りえない。

バーサーカーが雁夜を安珍の生まれ変わりだと思いこんでくれるのなら、それすらも利用して、持てるものすべてを総動員してことに挑まなければならぬ。

衰弱し、弱りきった体に鞭打って、雁夜はバーサーカーの腕からすり抜け、ゆっくりと立ち上がった。

「ますたあー！」

よろめき、路地の壁にもたれ掛かろうとする雁夜の体を、小柄な少女が支える。雁夜は戦場だった地点へと一瞬ちらりと一瞥を送ると、彼方で響くサイレン音から身を背けるように歩き出した。

「帰るぞ、バーサーカー……いつまでも、こんなところにいるわけにはいかない」

「はい、ますたあー！」

立っているのもやつとというほどのコンディションで、それでも雁夜は歩を進める。

バーサーカーが、よろめきながら前進する雁夜が倒れてしまわないよう、そつと傍らに寄り添って支える。薄暗い倉庫街を、ふたりはゆつくりと歩き出した。

切嗣は、スコープから視線を外すと、懐から取り出した煙草にライターで火をつけた。母子への負担を考え、九年もの間禁煙を努めていた切嗣であったが、昔の感覚を思い出すという意味も込めて、かつて愛用していた銘柄を買ってみれば、まるで昨日まで吸っていたように自然と体が動いた。肺へと取り込んだ煙草の煙を、冬空へと吐き出す。

『キャスターとランサーが動き出しました。おそらく、同盟を組むものと思われます……どうしますか、切嗣』

インカムから、舞弥の囁き声が漏れる。

『そのままケイネスを尾行しろ。両陣営の拠点を特定次第、キャスター諸共始末する』
『了解』

短い返事を残して、通信は途切れた。魔術師殺しの右腕としての教育を受けた舞弥には、別段難しい説明も必要なく、最低限の命令だけで必要なことはすべてこなしてくれる。

『いいのか、マスター。この段階でキャスターとランサーを両方始末してしまっても』
『構わない。徒党を組まれるよりはマシだ』

極めて冷淡に、切嗣はこことは離れた場所に待機するアーチャーに返答する。

セイバーが強敵であるという事実は十二分に理解できた。理解できたからこそ、セイバーと真正面からやり合うという選択肢は切嗣の中から消え去った。始末するのなら、マスターである遠坂時臣を直接暗殺する。可能であればその前にセイバーをルーラーにぶつきたいところだが、いずれにせよキャスターとランサーは邪魔だ。いずれ始末する必要のある相手であるなら、徒党を組んで攻略が困難になる前に始末した方がいい。次の方針は決まった。機械的な動作でライフルを組み換え、己の鞆の内側へと収納した切嗣は、漆黒のコートを翻し、次の戦場へと歩を進める。

——聖杯戦争の約定に従い、己がサーヴァントを討たれた言峰綺礼は聖堂教会による身柄の保護を要求する。

茶番もいいところだが、そういう建前の上で、綺礼は冬木教会の地下室に匿われている。背後には、父である言峰璃正神父も同席している。聖杯戦争の監督役としての役目を果たすべく、璃正神父は携帯電話で誰かに指示を送っている様子だった。

璃正神父の指示で動く聖堂教会のスタッフは、既に冬木市のあちこちに配置されている。警察や自治体への根回しも万全だ。あの倉庫街での戦闘による惨憺たる傷痕は、とことん事実を歪曲された上で市井^{しせい}へと広まることだろう。

「いやまさか、冬木に召喚されたサーヴァントが、こうも早い段階でひとところに集結しまおうとはねえ」

璃正神父の傍らに控えていた男が、レンズに色のついた丸眼鏡を人差し指で押し上げながら、ふらりと歩を進める。名を、石動惣一いするそういちというらしい。聖堂教会に所属するスタッフで、今回は特別な事情があつて璃正神父に付き添っている、という話は綺礼も聞き及んでいる。

「これでセイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、アサシン、バーサーカー………そしてルーラー。合計七クラスのサーヴァントがこの冬木に揃つたつてわけだ」

「本来、サーヴァントが七騎出揃う前に戦端を開くことは重大なルール違反だが、今回に限ってはルーラーの参戦によつて、曲がりなりにも七騎揃つてると言い張ることはできる。お陰で我が導師は誰にも咎められることなく聖杯戦争を続行することができる、というわけだ」

あまりにもおざなりな理論だ。詭弁もいいところだろう。綺礼は抑えられず、くつくと笑つた。

未だ姿を見せないライダーのクラスを含めると、此度の聖杯戦争には合計八騎のサーヴァントが参戦している勘定となる。本来、聖杯戦争とは七騎の英霊によつて行われるものだ。規定数を超えたサーヴァントを動員しての聖杯戦争など、異例中の異例であ

る。

石動は狭い地下室をふらふらと歩き回りながら、綺礼に流し目を送った。

「で、ご自慢のアサシンはキャスター陣営擁する仮面ライダービルドによつて撃破。残るサーヴァントは未召喚のライダーと、特別枠のルーラー含めて七騎つてシナリオか……あんまり意味ないと思うけどねえ。あのキャスター、もうアサシンの絡繰りには気付いてんだろ？」

「かといつて、アサシンの脱落を衆目に晒してしまつた以上、教会に身柄の保護を求めぬわけにもいくまい。案ぜずとも、あのキャスターとて、不用意に教会に疑いの目を向けることが己にとつての不利益となることくらいは理解していよう」

「左様。教会はあくまで中立地帯の不可侵領域。その教会にあらぬ疑いをかければ、我ら聖堂教会からの諫言は避けられぬものと知らぬキャスターではあるまい」

電話を終えた璃正神父が、ふたりの会話に横入りする。この場合でいう諫言というのは、令呪の削減や、一定期間の戦闘禁止令といったペナルティを指す。

サーヴァントとは、この時代の知識と、聖杯戦争に関する最低限の情報を聖杯によつて与えられた状態で現世へと喚び出される。おそらくは中華の軍師、諸葛亮孔明と思しきあのキャスターが、自ら教会を敵に回すような愚行を犯すとも思えない。

「万事、ことは抜かりなく進んでいる。アサシンは教会の庇護下におき、今後も水面下で

諜報を続け、ルーラーは聖堂教会所属のサーヴァントとして、聖杯戦争を監督する。なにも懸念はないよ、石動君」

「おお、怖。ゲームマスターによる八百長つてのは、これだから手に負えない。運営側ほど敵に回しちやいけない奴はいないつて、実感させられるよ」

璃正神父に肩を叩かれた石動は、わざとらしく両肩をすくめてみせた。

「だが、念には念を入れておこう。今後あのキャスターに対しては今まで以上に距離をとって諜報を行う必要がある。迂闊にあの陣形の内に踏み入ることのないよう」

綺礼の傍らに、黒い影が立った。どこからともなく現れた、四人目の人影だ。

「はっ、仰せの通りに」

髑髏の仮面をつけた黒衣の女は、綺礼に対し恭しく傳いた。

ハサン・サツバーハ。仮面ライダービルドによって撃破された筈のサーヴァントは、今も五体満足のまま、現世に存在し続けていた。キャスターはどういうわけか既にこの絡繰りに気付いている様子であったが、たとえ気取られようとも綺礼の成すべきことは変わらない。

アサシンの姿が地下室の影に溶けるように消えるのを見届けた綺礼は、踵を返した。

「おっと、もう休むのか」

「ああ。少し休息を頂こう」

ちらりと石動に一瞥し、綺礼は地下室をあとにした。

此処から先は、父である璃正神父にも気取られてはならない隠密行動だ。綺礼の標的と見定められた男は、先の乱戦に姿を見せなかった。けれども、衛宮切嗣という男のこれまでの行動を考えるに、このままなにもせず夜を明かすとは考えにくい。

きつと衛宮は、動く。

ならば綺礼は、追いがり、問う必要がある。

長い旅路の果てに、おまえはいつたいなにを掴んだのか、と。

「念のため、一体のみを教会に残し、あとはすべて冬木市中へ散開させろ。朝を迎える前に、衛宮切嗣はなんらかの動きを見せるはずだ。奴の初動、決して見逃すな」

冷めきつた心に唯一熱を灯す男の存在に期待を寄せて、放浪の求道者は淡々と命令を下す。主の司令を聞き届けた無数の影たちが、足音ひとつ立てず教会の外へと飛び出してゆく。

綺礼にとっての聖杯戦争の真の幕開けだった。

第7話 「エルメロイ会談」

冬木ハイアットのスイートルームに備え付けられたワイドテレビのスピーカーから響く慌ただしい報道が、室内を賑わせている。ブラウン管の画面に映された興奮状態のレポーターを、戦兎はしげしげと眺めていた。

「この時代じゃ、高級ホテルとはいえ流石にまだブラウン管か……いや、液晶ディスプレイじゃないのは当たり前として、プラズマテレビですらないぞ。懐かしいな」

「おい、マスター。余計なことに興味を持つな。ああ、魔術師の工房にある私物に不用意に手を触れるんじゃない」

部屋の主たるケイネスの目を盗んで、テレビ本体に手を触れようとした戦兎の脇をキャスターが肘で小突いた。戦兎は軽く咳払いして、テレビ画面から視線を外す。部屋の奥の一室から、ランサーのマスターたるケイネス・エルメロイ・アーチボルトが姿を現した。傍らにはそのサーヴァントたるランサーも追従している。あいも変わらず涼し気な笑顔をたたえてはいるものの、あのランサーに一切の油断がないことを既に戦兎は知っている。不意を打ってマスターであるケイネスに危害を加えてもしようものなら、先にランサーの一撃を受けることは明白だった。

戦兎はビルドドライバーをテーブルに置いたまま、ケイネスに向き直る。ビルドに変身するための装備は今、戦兎の手中にないことをアピールする目的があった。

「さっきの倉庫街での戦いは、原因不明の爆発事故つてことで片付けられたらしいな」

深夜の番組編成を変更して伝えられる臨時ニュースの内容をそのまま伝えると、ケイネスはさもどうでもよさそうに鼻で笑い、高級ソファに深々と腰を落とした。

「聖杯戦争の痕跡を余人に知られぬように工作する、それが聖堂協会の務めだ。今頃なにも知らぬ警察官どもは、喜び勇んでこれ見よがしに撒き散らされた爆発物の痕跡でも拾い集めていることだろう」

ケイネスの返答を聞き終えて、ひとまず最前の好奇心による眩きを聞き咎められたという可能性がないことに安堵した戦兎は、微かに頬を緩めた。

「そして、その聖堂協会から連絡が入った。アサシンのサーヴァントは先の戦闘によって正式に脱落とみなされ、マスターは教会に保護されたとのことだ」

「茶番ですな。此度の聖杯戦争におけるアサシンは群体のサーヴァント。一騎撃破されたとして、アサシンのマスターにとってなんら痛手にはなりえない」

本来の聖杯戦争の参加者が知り得るはずのない情報を滔々と語るキャスターに、ケイネスは、ふむ、と小さく唸った。傍らに佇立したままのランサーの微笑みにも、キャスターに対する疑念が見える。口元に対し、目元が笑っていないかった。

「キャスターよ。貴様はなぜそうも他陣營の情報に明るいのか、そろそろ納得のいく説明が欲しいのだが」

ケイネスの語尾は上がっていた。詰問の形式に近い。

「その説明をするためには、まず私という英霊の特異性についての説明からしなければなりません」

「三国時代の歴史に名を馳せた軍師、諸葛孔明。貴様という英霊の名は、当然私も聞き及んでいるとも。だが、その真名以上に特異なことがあると？」

「確かに私は仰るとおりの中華の英霊に相違ない。しかし、同時に、まったく異なる人間の知識と記憶も、この霊基には取り込まれているのです」

「なに、まったく異なる人間だと」

ケイネスが怪訝そうに眉根を寄せる。怪しまれていることは明白だった。

「ええ。サーヴァントとは、過去現在未来、すべての時間軸から時空を越えて喚び出される人理の影法師。私という英霊は、この時代からみて未来となる時間軸に存在する人間の魂が、諸葛孔明によって取り込まれたもの」

「ほう……貴様は諸葛孔明そのものではなく、未来人でもある、と。そう言いたいのかね」

「ええ、流石はロード・エルメロイ、話が早くて助かります。英霊にも色々と種類があり

ましてな。今回の場合でいうと、諸葛孔明そのひとは自分自身が直接現界させられることを望まなかった。ゆえに、その知識と記憶、能力、宝具といったあらゆるパーソナルを私に明け渡し、私を新たな英霊……疑似サーヴァントとしたのです」

一拍の黙考ののち、ケイネスは唸るように口を開いた。

「ううむ。にわかには信じがたい話だが……貴様が孔明の逸話からなる宝具を使った以上、その霊基を宿していることは事実なのだろう。だがそうなる、今ここにいる貴様のもう半身とやらは、いったいどこの誰だというのだ」

「それに関しては……現段階ではまだ、秘せざるを得ない」

「ほう」

ケイネスとランサーの視線が一段と鋭くなったのを、戦兔は見逃さなかった。流石に居心地が悪くなってきたが、しかし、戦兔が口を出すわけにはいかなかった。ケイネスとキャスターが会話を始めた時点で、戦兔は一切横槍を入れず話を合わせると事前に伝えられていたからだ。

「私としても、伝えられるものならば伝えたい。しかし、今、この時間軸において誰も観測していない出来事について、未来人である私が言及することはできないのです。話せることは、既に確定した事象、もしくは既に改変された事象のみ。さもなくば、歴史改変とみなされ抑止力を発動させかねない」

「なるほど理屈はわかる。確かに貴様の言葉を嘘と切り捨てるだけの状況証拠を今の私
は持ち合わせてはいない。だが、そうなると貴様は、このロード・エルメロイにどの
誰とも知れぬ馬の骨の言葉に耳を貸し、その言葉に踊らされると……そう言いたいのか
ね」

「我々が敵でないことだけは信じて頂きたい……なぜなら、私もまたアーチボルトの末
裔。今はまだレディ・ライネスの名代、とだけしかお伝えすることはできないが、少な
くとも御身に危害を加えることは、未来の私自身の不利益に繋がるのだから」

「ライネスだと、我が姪の？」

瞠目したケイネスが、毒気を抜かれて僅かに目線を上げた。今度はランサーが口を開
いた。

「英霊の座とは、確かにあまねく時代の英霊を招集するもの。そういうこともあり得る
のかもしれませんが……未来に関する事象は伝えられないと言っておきながら、我がマ
スターの末裔であるという事実は隠さなくてもよいのですか」

「私がレディ・ライネスの名代という肩書を賜るのは、この時代から見て四年ほど後のこ
とになる。この情報だけならば、未来に対する確度は低い」

ケイネスは顎に指先を触れたまま押し黙った。

「聡明なロード・エルメロイなら、ここまで話せばお分かりでしょう。私にとって第四次

聖杯戦争は過去の記憶。私は、貴方が残した輝かしい武勇伝を後の世に伝えるもの。第四次聖杯戦争に参戦した他の陣営について知っているのも、それが理由です」

「なるほど、君の言いたいことはわかった。仮に君の言葉を真実だと定義したとして、私の輝かしい武勇伝、とはいったい如何なるものか。そこまで言うからには、君の知る私は当然此度の聖杯戦争には勝利したのだろうな？」

「ええ、もちろん」

キャスターは一切の淀みなく朗々と語り出した。

「私の知る記録では、勇将ロード・エルメロイは征服王イスカンダルの召喚にこそ失敗するものの、代替として召喚したフィオナ騎士団が一番槍、デイルムッド・オディナと共に戦場を駆け、他の有象無象の尽くを打ち倒し、見事聖杯を掴み取ったものとされています」

「ほおう？」

ケイネスの頬があからさまに緩んだ。思っていたよりも反応が良かったことにまず戦兎は驚いた。キャスターは滔々と続ける。

「それらはすべて、ケイネス卿の卓越した采配と統括あつての成果。今後の貴方と、奥方であるソラウ・ヌアザレ・ソフィア嬢の躍進によって、長らく睨み合っていた時計塔の各派閥はエルメロイの名のもとに統一され、アーチボルト門閥の未来は確かなものと

なる。それが私の知る記録」

「そうか……ふふふ。年を食つてからも大人気なく本気を出してしまうか、私は」

戦兎は瞠目した。時計塔の派閥争いに關してはほぼ無知だが、戦兎にも己がサーヴァントがけつこう無茶苦茶なことを言っているのはわかる。このケイネスという男が、煽てられることに弱いことを戦兎はなんとなく把握しはじめていた。

「ああソラウ嬢といえ、貴方の書齋に恋文の下書きが残されていましたよ。たしか書き出しは『麗しき我が想いの君よ、その瞳には朝露の輝きを宿し……』」

「ええい、やめんか！ もういい！ ケイスター、貴様が未来のライネスの名代であることはよく理解したから、それ以上はもう……！」

血相を変えてケイネスはキャスターの言葉を遮った。奥の部屋のドアへちらちらと視線を送っている。キャスターから聞いたケイネスの情報から考えても、あのドアの向こうにソラウが「いることは明白だった。

キャスターは満足げに頷いた。

「おお、ようやく信じてくれましたか、ケイネス卿」

「ふん。イスカンドルもデイルムツド・オディナもともに本来私が召喚する筈だったサーヴァント。管財科の手違いでかの英雄たちの聖遺物は失われてしまったが、そも、デイルムツドの聖遺物の紛失については身内のみしか知らぬ事実。それをそこまで知

「られている以上、認めぬわけにもいくまい」

「それもすべては私の言葉が事実である証左。といつても、この時間軸におけるケイネス卿のサーヴァントがデイルムツド・オディナでなくなっていたことは私にとつても慮外の事実ではありましたが」

「おや、私では不服ですか、キャスター」

ランサーが庄のある声音で笑った。

「いや、そうは言っていない。ランサーの実力は先の戦闘で身を以て知ったばかり。おそらく、デイルムツドと比べてもなんら遜色はないだろう……そう、戦力だけで言えばなんの問題もない」

「我がサーヴァントがデイルムツド・オディナでなくなつた時点で、君の知る未来からは既に乖離してしまつている、と。君はそう言いたいのだな、キャスター」

「おお、流石はケイネス卿だ、重ね重ね理解が早くて助かる」

キャスターにしてはあからさまな感嘆だったが、ケイネスは得意げに笑みを深めた。

「おそらく、未来人である私がこうして過去に介入したことで、未来は改編され確度を失つていくのでしょう。遠坂陣営のセイバー、間桐陣営のバーサーカーは既に私の預かり知らぬサーヴァントに置き換わり、キャスター陣営にも私というイレギュラーが当てはめられていることがその証左。私の知る本来の歴史ではセイバーを召喚していたア

インツベルンも、まず間違いなく別の英霊を喚び出していることでしょう」

「ふむ、なるほどな。既に未来は異なる歴史へと進み始めているというわけか」

「だが、だからと言ってこの聖杯戦争、アーチボルト陣営以外を勝利者にさせるわけにもいかない。此度の聖杯戦争には、ケイネス卿だけでなく、今はまだ名もなき魔術師ではない私の未来もかかっているのです。というわけで、我々は聖杯戦争の参加陣営でありながらも、御身にアーチボルトの栄光キズハシの階を確実に築いていただくため、馳せ参じた次第であります」

「君の状況については理解した。では、君のマスターの……」

「桐生戦兎だ」

視線を向けられた戦兎は、反射的に名乗りを上げた。

「よかろう、では桐生戦兎くん。君の望みはいったいなんなのだね」

「俺の、望み」

「聖杯戦争に挑むからには、当然あるのだろうか？ 万能の願望機に託すだけの願いというものが」

一瞬、返答に窮した戦兎だったが、問いに対する答えはひとつしか思い浮かばなかった。

「俺は……ラブアンドピースのために戦ってるんだ」

「なに？」

ケイネスに続いて、キャスターも怪訝そうに戦兔に視線を向ける。

「俺は、愛と平和のために仮面ライダービルドになった。それはこの聖杯戦争でも変わらない。私利私欲のために力を使おうとするやつに、聖杯を渡すわけにはいかない……だから、俺はそんなやつに聖杯を渡すくらいなら、キャスターが信じるあんたに聖杯を獲つて欲しい。それが俺の戦う理由だ」

途中から取り繕うように言葉が続けたが、概ね嘘は言っていない。むしろ、ここに至るまでの出来事を考えれば、事実と言つても過言ではない筈だ。嘘をつかずにさすがキャスターが戦兔の言葉を引き継いだ。

「そういうことです。彼は魔術師としては外様も外様。まっとうな魔術刻印すら受け継いでいない素人のようなもの。しかし、その在り方に嘘がないことはこの諸葛孔明が保証しましょう。彼の性質は紛れもなく善です。御身に仇成す存在ではない」

「ふむ……よかろう。君がそこまで言うなら、今は信じるでしょう。しかし、ならば君が使っているそれは一体なんなのだ？ あのアサシンを撃破した、仮面ライダービルドとは如何なる技術で造られている」

ケイネスは、テーブルの上に置かれたままのビルドドライバーを指差した。

「ああ、これは」

「マスター、ここは私が説明しよう」

言葉に詰まりかけた戦兎を、キャスターが片手で制す。

「これは未来のアトラス院において開発された、魔術と科学の複合技術。時計塔からは未来のエルメロイの号令のもと、降霊科ユリフイスと現代魔術科ノーマリツジが投資を行っています。科学によつて開発された近代兵器の攻撃力と、動植物の特性を活かした臨機応変な戦術を強みとした特注の魔術礼装。これこそがプロジェクト・ビルドの産物。私が未来から持ち込んだ理論を、魔術師でありながら天才科学者でもある我がマスターが組み上げたのです」

「ほう、君が」

「ケイネスは感心した様子で頷いた。まためちやくちやなことを言い始めたな、とは思ったが、戦兎はもうなにも言わず、ただ静かに頷くだけにしておいた。」

「とは言うがな、私にアトラス院との繋がりはない。むしろ私はあの偏屈たちを毛嫌いしている。今後どのような未来が訪れようとも、あの悲観主義者たちと手を取り合うことなどない……ないと、思っていたが」

しばしづつづつと独り言を発したのち、ケイネスは笑った。

「いや、あり得ぬ話ではないな!」

戦兎はもう驚かなかった。ケイネスは間違いなく優秀な将なのだろうが、おそらくエ

リート街道をひた走ってきたがゆえに、かえって外敵に騙されるといふ境遇を経験せず
にここまで来た男なのだろう。それを理解しているからこそ、キャスターはケイネスを
最初に味方につけようと考えたのではないかとすら戦慄は疑っていた。

「ふふ、私もそろそろ降霊科と鉱石科だけでは派閥争いの切り札には足りないかなと
思っていたのだよ。なにか別口の研究にも手を付ける頃合いかとね。うむ、しかしまさ
かそんな方向にも才能あつたとはなあ私」

「無論、技術的成果だけでなく、ソフィア家の経済的援助によるところも大です。プロ
ジェクト・ビルドの術式構築に至るまでの莫大な経費が賄えたのも、貴方と未来の奥方
様との仲睦まじい私生活あつてのことです」

「いやあ、フハハ。魔術の求道にばかり専念してきた私が、はたして家庭人として成功で
きるかどうか一抹の不安はあつたのだがね。そうか……そうかあ、フハハハハ！」

「ン、ンンッ」

ランサーが咳払いをした。最前まで笑っていたケイネスの表情が、途端に引き締ま
る。

「いかんいかん、私としたことが、浮かれている場合ではないな。此度の聖杯戦争でも史
実通りに勝利を掴む為には、まずはあのセイバーを討滅する必要があるわけだが。勝算
はあるのかね、キャスター」

「勿論。初見で不覚を取ったとして、二度目の戦闘を無策で迎えるようでは、私という軍師は歴史に名を刻んではない」

「ほう、それは頼もしい限り。して、その策とはいったい」

その時、不意にえ付けの防災ベルがけたたましく鳴り響いた。非常を告げるベルの音は、室内のどこにいても聞こえるように設計されている。耳を弄する騒音に、その場の全員が意識を向けた。

「なんだ、なんの騒ぎだ」

ケイネスの疑問に答えるように、備え付けの電話がベルを鳴らした。部屋の主たるケイネスは静かに受話器を取り、電話口の声へと耳を傾ける。ケイネスを眺めるキャスターの表情は、既に最前までの余裕に満ちた策士の笑みではなく、戦場に身を置く軍師のそれへと変わっていた。

「まずいな。サーヴァントが変わってもやり口は同じか」

「なにか知ってるって顔してるな、キャスター」

「ああ、敵の襲撃だ」

戦兎の問いに短く答えたキャスターは、なかば放り投げるように受話器を置いたケイネスに向き直った。

「ケイネス卿。すぐに退避の準備を。この建物はじき倒壊します」

「なに？ 下の階で小火騒ぎだとは聞いたが……ビルそのものが倒壊する、だと」

「ええ。此度の聖杯戦争には、手段を選ばぬ魔術師が参戦しています。いかに堅牢な魔術工房であろうとも、建物そのものを爆破されては意味がない。ですから、すぐにここを動くのです」

鬼気迫る表情で迫るキャスターに、さしものケイネスも当惑を隠し切れはしなかった。このホテルを失うというのは、すなわち今後の拠点を失うということだ。金額にものをいわせてホテルの最上階を丸ごと貸し切り、魔術師として持てる限りの技術を注ぎ込んで設えた工房を、なんの迷いもなく放棄できるわけがない。

「ねえ、いつたいなんの騒ぎなの、ケイネス」

奥の客室から、燃えるような赤毛の女が顔を出す。

「ソラウ」

「ケイネス卿、ソラウ嬢。もはやことは一刻を争います。工房ならばまた作ればよろしい。今はそれよりも、御身の安全を優先するのです」

状況を未だ飲み込めていないソラウの肩を軽く抱いて、ケイネスは歴戦の魔術師を思わせる玲瓏な瞳をキャスターに向けた。

「ひとつ訊くぞキャスター」

「なんなりと」

「その反応を見るに、君の知る歴史でもこれと同様の襲撃があったのだろうか」
 キャスターは静かに頷いた。

「では、君の知る聖杯戦争において、私はいったい如何なる手段で敵の襲撃を掻い潜ったのかね」

「それ、は」

わずかに視線を伏せ、逡巡したキャスターだったが、一拍の間の後に、重たい口を開いた。

「……ランサーを遊撃に向かわせ、敵のサーヴァントをこのフロアへ誘き出そうとして……ビルの倒壊に巻き込まれる結果に。もつとも、御身こそは月ヴォールメンハイドラグラム霊髓液によって事なきを得たものの、以降、予期せぬ襲撃によって工房を失い、痛手を負ったケイネス卿には苦戦を強いられる局面もあった、と記録には残されています」

「なるほど、後手に回ってしまったということか……このロード・エルメロイともあろう者が、なんたる体たらくか」

自嘲気味にケイネスは笑った。

「ねえ、ケイネス。このキャスターの言うことを信じるの？」

「ソラウ。キャスターの助言なくば、私はまず間違いなく今聞いた通り、敵を我が魔術工房へと誘い込む戦術を取っただろう。この小火騒ぎで他の宿泊客どもが引き払いさえ

すれば、あとはなんの遠慮もなくお互いの秘術を尽くしての競い合いができれば、と考えてな」

「ケイネス卿……」

「だが、その選択まで見透かした上での助言だ。ご丁寧なことに、まだ見せたことすらない我が魔術礼装の特性についても理解した上で、だ。こうなってくると、私には、キャスターの言葉がただの戯言とも思えんのだ」

ケイネスは踵を返し、足早に奥の自室へと歩を進めた。ちらとキャスターに一瞥を送ったケイネスはそのまま振り返ることなく声を張る。

「ソラウ、ランサー！　すぐに移動の準備をしろ。必要最低限の物資を纏めたら出発するぞ。この工房は放棄するが、物資さえ尽きねばもう一度敷設することもできよう。もはや猶予はないものと思え」

「ああもう、わかった、わかったわよケイネス」

ソラウは辟易とした様子でケイネスの後を追う。

「では、私は退路を確保して参りましょう。邪魔な壁や障害物はすべて破壊してしまつて構いませんね」

「ああ、構わない。どうせ壊される運命の建物だ、派手にやっつけてしまえ」

「はい、任されました！」

ケイネスの代わりにキャスターの許可を得たランサーは、新たな遊びを見つけた子供のように明るい笑みを浮かべ、その場から消え去った。あとにはエーテルの粒子による煌めきのみが残されたが、それもじき大気に溶けるように消えた。霊体化し、階下へと向かったのだろう。

「マスター、我々も動くぞ。今回のアインツベルンは、階下の宿泊客の退避が完了次第、容赦なくホテルを爆破してくる。そういう戦術を迷わず選ぶことのできる男だ。のんびりしている時間はないぞ」

「了解。ま、他の宿泊客が逃げるだけの時間はくれるあたり、エボルトよりは良心的……なんて言ってる場合じゃねえな」

戦兎はテーブルに置いたままのビルドドライバーを腹部にあてがった。黄色の帯がひとりでに戦兎の腰に巻き付く。これからなにが起こるかもわからないのだ、万が一に備えて変身しておくに越したことはない。

ポケットから取り出した赤と白のボトルを左右同時に振ることで、ボトルの内部に封じ込められた成分を活性化させる。二本のフルボトルをドライバーに装填すると同時、ドライバーは高らかにボトルの名前を宣言した。

『HARINEZUMI!』『SYOUBOUSYA!』

『BEST MATCH!!』

ハリネズミと消防車。

災害時における救助活動を想定した武装が凝縮されたベストマッチこそ、現状にもつとも相応しいベストマッチであると戦兎は考えた。万が一対比するよりも早くホテルが倒壊することがあったとて、キャスターの信じるケイネスを絶対に守り抜いてやるという強い意思があつた。

『Are You Ready?』

「変身！」

赤と白、半分ずつ形成された装甲が、前後から戦兎の体を挟み込む。白い蒸気を噴出させながら、戦兎の姿は瞬く間に科学によって生み出された装甲に覆われた。

『レスキュー剣山！』

『ファイヤーヘッジホッグ!!』

『イエーイ!!』

「さて。魔術と科学の複合技術とやらの力、存分に発揮するのでしょうか」

ビルドの赤と白の仮面に見据えられたキャスターは、なにも言わず視線を逸した。

ハイアットホテルの屋外駐車場は、深夜だというのに大勢の人間でごった返していた。そのほとんどが、就寝中のところを火災報知器による騒音で叩き起こされた宿泊客

だ。みな、眠気と寒さによる不快感も露わに従業員の誘導に従って居並んでいる。

ホテル従業員が宿泊客に呼びかけ、ひとりひとりの安否確認を行っている。当然、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトもその対象なのだが、既に従業員の持つ名簿には避難済みとチェックを入れられている。切嗣の手回しだ。

ホテルから一区画ほど離れたビルの屋上に陣取った切嗣は、設置したライフルのスコープで宿泊客を監視していた。大方の宿泊客はホテルからの退避を完了した様子だが、未だその中にケイネスの姿はない。スコープから目を話した切嗣は、懐から携帯電話を取り出した。切嗣とは別のビルからハイアットホテル、とりわけケイネスの部屋をピンポイントで監視していた舞弥に連絡を入れる。

「ケイネスの様子は」

『どうやら異常に気付いたようです。キャスターのマスターとともに、自室から出ました』

切嗣は眉根を寄せた。予想外だ。ケイネスほどの魔術師であれば、自分の魔術工房に絶対の自信を持っているであろうことは想像に難くないし、自信があればあるほど、魔術師というものは工房から動くことを避ける筈だ。キャスターがなにか入れ知恵をしたのかもしれない。

「ケイネスが部屋を出てからどれくらい経過した」

『今さつきです。ホテルからの完全退避にはまだ時間がかかるかと』

「なら、下のフロアの宿泊客は。退避はもう済んでるのか」

『はい。ホテル内部には、既にターゲット以外の宿泊客はいないものと思われます』

「了解」

普通の宿泊客ならばフロントから退避指示が出た時点ですぐに荷物を纏めて脱出を図る。ケイネスも最終的にはその判断に至ったようだが、退避までに時間がかかったのは、おそらく己が魔術工房を放棄する判断をつけるまでにかかった逡巡のためだろう。

切嗣は念話のパスを、己の傀儡たるサーヴァントへと繋げた。

「そつちはどうだ、アーチャー」

『こちらはいつでも構わない。あとはマスターの号令次第だ』

「……ホテルの宿泊客の退避は既に完了している」

『そうか、委細了解』

切嗣は、懐から取り出した煙草にそつと火をつけた。煙を肺いっぱい吸い込んだ切嗣は、ふうと白煙を吐き出し、引き金となる言葉を告げた。

「やれ、アーチャー」

ハイアットホテルから遠く離れた小高いビルの屋上に、切嗣のサーヴァントは立っていた。赤い外套の裾を風に靡かせながら、アーチャーはその鷹の目に目標となる建造物

を視認する。距離として、ゆうに一キロ以上は離れている。

この位置からでは街一番の高層ビルも随分と小さく見えたものだが、それでもアーチャーには定めた標的は絶対に撃ち落とせるだけの自信があった。

切嗣からの命令を受けたアーチャーの右手に、赤く燃える魔力の炎が灯る。炎は瞬間にかたちを成した。ドリルのように捻れた長剣へと変化したそれを右手に握りしめたアーチャーは、左手に構えた黒塗りの矢へとつがえる。

「見事な手際だ、マスター。ならば私も、その采配を裏切らぬ程度の活躍はしてみせよう」

誰にともなく独りごちる。

ケルトの英霊たるフェルグス・マック・ロイが用いたとされる宝剣は、アーチャーの手によって限界まで引き絞られ、本来のかたちを失い、ただ一本の矢となつて煌々と魔力の輝きを漏らしている。最後まで螺旋剣カワトボルグだったものは、流し込まれた膨大な魔力によつて、飽和状態の爆弾と化している。

壊れた幻想。サーヴァントの宝具に限界を越えた魔力を流し込み、本来の宝具の威力を越えた一撃を放つ自爆技だ。本来ならば宝具をひとつ失うことになる大技を、しかしアーチャーは一切のためらいなく使う。

「ハッ！」

吐息を吐き出し、引き絞った弓を離す。

刹那、膨大な魔力を孕んだ宝具爆弾は極光を振り撒いて夜空へと飛び上がった。音速すらも容易く突破して、アーチャーの放った一撃は金切り音ソニックブームを響かせながら、雲を裂き、夜の闇を青白く染め上げて、目標へ向け一直線に加速する。

光り輝く魔力の嵐を纏って加速した矢は、冬木ハイアットの三十一階から最上階にかけてをブチ抜いて、巨大な風穴を空けて通過していった。ケイネスによつて何十層と重ねられた結界も、数多の魔術的トラップも、異界化した空間すらも突き抜けて、過程に存在するありとあらゆるものを徹底的に破壊し尽くし、アーチャーの矢は役目を果たして消滅した。

数秒の猶予ののち、冬木ハイアットの最上階が沈み込むようにひしゃげた。三十一階を支えていた柱を丸ごと失ったことで自重を支えきれなくなつたビルは、大量の瓦礫と硝子を撒き散らしながら、上層階から順に押し潰されるように崩落をはじめた。

予定通り、ケイネスが偽カラド・螺旋剣ボルグIIが放つ魔力の乱気流に飲み込まれたとするなら、生存の可能性は限りなく低い。これこそが、衛宮切嗣とアーチャーが考案した、高層ビルを丸ごとひとつ犠牲にした、一撃必殺の一手だ。これをもう一度やるとなると、流石に神秘の秘匿に背く行為と判断され、教会からペナルティを課せられかねない。二撃目の狙撃は不可能だ。

されど、アーチャーは未だケイネスの死体を確認してはいない。ここで勝利を確信してのこのこと帰還するのは、三流の仕事だ。ケイネスがまだ生きているならば、この手で息の根を止める必要がある。

「さて。それでは、仕上げといこうか」

アーチャーは、その人間離れした脚力でもって屋上を強く蹴り、冬木の夜空へと高く跳び上がった。風に靡く赤の外套は、次第に夜の闇に紛れて消えた。

第8話「動き出すアウトサイダー」

人間というのは、いつの時代、どこの世界でも、つくづく面白い生き物だ。

石動惣一は、この十年間を地球で暮らし、人間という生物の本質を間近で見つめながら、そう強く感じ入った。もとはひとつの国の人間が、悪意に支配され、他者を出し抜くことに囚われ、戦争を起こし、同族同士で殺し合う。それがエボルトが見てきた世界であり、この新世界で幾度か行われているという聖杯戦争も、結局のところ本質は同じだ。

本来ならば厳正なる審判のもとで聖杯戦争を執り行う側の聖堂教会が、組織ぐるみでひとりの魔術師を勝たせるために策を巡らせている。彼らにとつては、他者を蹴落とし、聖杯をその手中に収めることこそがもつとも大事なことであつて、他はどうでもいいのだ。この聖杯戦争に厳正なる法などというものは存在しない。

世界をどれだけ新生させたところで、人間の本质は変わらない。

誰だつて、いつだつて、人はみな自分の欲を満たすために戦っている。聖杯戦争などその最たるものだ。人の飽くなき欲望と探究心。欲望が、聖杯戦争を成立させる。

エボルトに言わせてみれば、無欲の人間が聖杯戦争に参加することなどありえないこ

とだ。ただ恩師を勝たせるためだけに己を捨て駒にするようなつまらない人間が、聖杯に選ばれるわけがない。だからこそ、エボルトは言峰綺礼という人間に興味を持ったのだ。

近い未来、己が恩師を不意打ちで仕留め、そのサーヴァントを奪い取り、続く第五次聖杯戦争では黒幕として暗躍したとされる男。彼の情報は、檀黎斗の所持するデータから閲覧させて貰った。

起こった事実だけを並べれば、欲望にまみれた男のように見える。だけれども、エボルトには言峰綺礼が俗物的な欲望に溺れてことを起こしたのだとは、どうにも思えなかった。恩師を殺し、己以外の誰の迷惑にも沿わず、ひとり生き延びた男の行動には、しかし物欲というものが露程も感じられなかった。

いったい今この瞬間、言峰綺礼はなにを思うのだろうか。最初から恩師を殺すつもりで聖杯戦争に挑んだのか。それとも、なにかが彼を歪めてしまったのか。エボルトはそれが知りたかった。満足に足る結論が得られなければ、殺して令呪を奪い取つてもいい。生かそうが殺そうが、それがすぐに己の不利益に直結するものではないとエボルトは判断した。

教会の一階にあてがわれた言峰綺礼の自室の前に立った石動惣一は、木製の扉を軽くノックし、反応を伺う。返答はすぐだった。

「誰だ」

「俺だよ、聖堂教会の石動だ」

短い誰何ののち、部屋の主によつて扉が開かれた。言峰綺礼は、一步身を引くと、視線を室内へと促す。ろうそくの淡い灯りに照らされた、十帖ほどの部屋だ。立派なテーブルとソファが設えられており、壁には絵画、部屋の奥にはデスクもある。キャビネットには決して安物には見えない仰々しいラベルのワインが並べられていた。ひと一人がくつろいで生活する分には十分すぎる環境だという印象を石動は抱いた。

「いったい私になんの用だ」

「用つて程でもないさ。ただ、あんたに興味を持つてね。話をしてみたいと思つたのさ」
ソファに腰掛けた綺礼に倣つて、石動も対面するソファに深く腰掛ける。綺礼は怪訝そうに眉を顰めた。

「私に興味だと」

「あんたも大変だよなア。こんな出来レースのために、下つ端の仕事ばかり任されてんだろ。せつかくの英^{サイヴァント}霊だつていうのに、今も街中にばら撒いて、遠坂のためだけにひたすら諜報活動だけをやらされると来た。俺なら嫌気がさしちまうよ」

「私はべつだん不服は感じてはいない。根源の渦への到達はすべての魔術師の悲願。我が師がそれを成すというならば、弟子として支えになりたいと思うのは必定だろう」

「根源の渦、ねえ」

石動はわざとらしく息を吐いた。

それは、あまねく魔術師たちの最終目的。この世界から逸脱し、次元論の頂点へと至るための第三魔法。魔術師というものは、根源の渦に到達できるならば、死んでも構わないとすら考えているらしい。石動には、理解の及ばない世界の話だった。

「まあ、聖堂教会に所属する立場の者から見れば、根源の渦などという夢想到興味を抱かぬのは当然か。君も正直、そんなものは無意味でつまらないものだと感じているのだから」

石動は苦笑をたたえ、頷いた。

「なんたつて聖杯は万能の願望機なんだろう。その気になれば、世界を思いのままに作り変えることだってできると聞いた。それほど力を、そんな無意味でつまらない目的のために使おうなんざ、勿体ないと思うのも無理はないだろう？」

綺礼が言った、無意味でつまらない、という言葉にアクセントを起きながら、石動は肩をすくめた。綺礼は僅かに瞠目したが、すぐに微かな笑みを浮かべた。

「ほう。君は、その力をもっと別な目的のために使うべきだと、そう言いたいのかね。神に仕える聖堂教会の人間とは思えない発言だな」

「いや、これ言っちゃまっていいのか微妙なところなんだけどさ、実を言うと、俺。聖堂教

会にまっとうに所属してる人間じゃねえんだよ」

「……なに？」

綺礼の表情から、笑みが消え去った。石動は、前屈みになって、口元に手を当てると、いかにも内緒話をしているかのようなで続けた。

「ここだけの話だけ？　今回は利害の一致で、聖堂教会に買われはしたが、俺はあんたたちみたいに心から神様つてのを信仰してるわけじゃない。だから、根源の渦つてのも眉唾モンだが、神様のためにゾーたらこーたらつてのも、俺の本音じゃねえんだよ」

「これは、なんとも……その事実、父上は知っているのか」

「当然知ってるとも。なにしろ、俺を雇ったのはあんたの親父さんだからな」

「父上が、君を……？　いったいなぜ」

「今回は状況が状況だからな。あんたもルーラーのことは聞いてんだろ？　エクストラクラスのサーヴァントが単独召喚されるなんてこと、そうあるもんじゃない。でもな、召喚されたからには理由があつて、やるべきこともある。その理由と目的を遂行するために、今回は俺みたいな男が必要になった。だから、このエリアを監督してるあんたの親父さんと裏で話を通して、聖堂教会の側の人間として立ち回らせて貰ってるって話さ」

綺礼は胡乱げに石動を見た。疑念を抱かれていることは明白だった。

「それは……初耳だな。私はそのような話を父上から聞かされてはいない。しかし、言っていないのだとすれば、言う必要のない事実だからだろう。それを、なぜ君が私に教えるのかね」

「ほら、あの親父さん、固っ苦しくて、腹を割った話なんてできそうにないだろ？ その点、あんたはまだ若いし、見どころがある。だから、この聖杯戦争について、本当のところはどう思ってるのか色々聞いてみたくなったのさ」

石動は努めて砕けた態度で言葉を続けた。

「ま、そう心配すんなよ。俺だつて自分の仕事はわかってるつもりだ。もし冬木の聖杯が根源を求めただけに特化した装置だったなら、聖堂教会は動かなかつた。あんたら聖堂教会は根源なんでものに興味はないし、そもそも話、魔術師なんてのは、本来聖堂教会からしてみりゃ敵だろ。魔術師^{おなかま}同士で血眼になっていくら潰し合おうと勝手にやってくれつて、あんたらはそう思ってる」

「……ああ、その通りだ」

「だが、幸か不幸か冬木の聖杯は万能の願望器だった。世界の外側どころか、内側をも自由に変えられる力を秘めている。だから聖堂教会は遠坂を選んだ。放置できないほど危険なモンであればこそ、それを無意味でつまらない用途に使い潰してくれるなら、互いにとって最も望ましい結果つてワケだ」

綺礼はただ肅然と頷くだけだった。石動は笑みを深め、言葉を続ける。

「俺達の仕事は、聖杯戦争をうまく回して、遠坂に勝ってもらうこと。な、信心はないが、意外と自分の役割は理解してんだろ？」

「ああ、よく理解しているようで安心した。そうとも、此度の聖杯戦争は、我が導師に聖杯を獲ってもらうことではじめて安寧無事に終幕を迎えられる。都合四度目に挑む聖杯戦争を、今度こそ成功のままに終わらせようというのが、我が悲願に相違ない」

「——ま、あんたの親父さんは、遠坂に対しちゃそれとは違う私情も含んでる様子だが」
石動はあえて含みをもたせて、言葉を付け足した。この世界の設定は、既に檀黎斗のデータで閲覧済みだ。知識さえあれば、なんとも口は回る。

綺礼はほんの一瞬目を丸くしたが、すぐに微かな笑みを浮かべ、静かに首肯した。

「なるほど、大した観察眼だ。我が悲願の裏に潜んだ、我が父と遠坂の縁すら見抜いていたか」

「ああ。なんでも第三次の時の先代当主との誓い、とか言ってたか。俺も詳しくは知らないし、そこんところについてはさして興味もないが」

「それはけっこう」

綺礼は笑みをひとつ零し、ソファから立ち上がった。キャビネットから一本のボトルとワイングラスを取り出した綺礼は、ふたり分のワイングラスに赤いワインを注ぐ。安

酒ではありえない芳醇な香りが、石動の鼻孔をくすぐる。

「話はわかった。どうやら此度の聖杯戦争に関わる事情、御三家に纏わる因縁にも精通している様子。君が我が父に迎かれし来客であるならば、私もまた聖堂教会の人間として、邪険に扱うわけにもいくまい。言峰は来客のもてなし方すら知らないのかと要らぬ誹りを受けたくもないのでね。君を疑ったことについても謝罪しよう」

「わかってくれたならなによりだ。それがあんたからの好意なら、ありがたく受け取らせてもらうよ、言峰」

石動は赤ワインの注がれたグラスを手に取り、軽く掲げた。綺礼もまた、元のソファに腰掛けながら、グラスを掲げる。互いに無言のまま軽い乾杯を交わしたのち、石動はグラスに口をつけた。

「……おいおい、こいつは驚いた。美味しいなあ、これ！」

「ふ、そう大したものではないさ」

「まあたそんなこと言って、隅に置けねえな」

石動はくつくつと笑みを漏らしながら、グラスをテーブルに置いた。

「ま、さつきも言った通り、仕事はちゃんとこなすさ。聖杯戦争は成功させる。俺は軽薄に見えるかもしれないが、自分の立場と責任を間違えるほど愚かな男じゃない……」
「とは言いつつも」

意図的に、石動は声のトーンを落とした。

「俺だつて人間だ。人間であるからには、欲つてもんがある。ふとしたときに、考えちゃうんだよ」

「ほう？」

どこか遠いところを見るように、石動は目を細めた。

「もしも俺のこの手に令呪が宿っていたら。聖杯戦争に勝ち進みさえすりゃ、金も、物も、なんでも思い通りなんだろ？ だったら、俺はなにを望もうか……なんてな。詮無いこととはわかりつつも、考えずにはいられない。それをあんたは愚かしいと思うか？」

綺礼からの返答に、迷いはなかった。

「ああ。まったくもって愚かしく、度し難いことだ」

だけれども、綺礼が石動を避難することはなかった。ほんの一拍ほどの間を置いて、綺礼は微かな笑みを零した。

「石動惣一。これは私からの忠告だ。君がいかに俗物的な思考を持つとうが自由だが、その考えは外部では漏らさぬ方がいい。我が父のような敬虔な人間の前では、特にな。下手を打てば、君の立場が危うくなりかねん」

石動は肩をすくめて笑った。

「ご忠告、痛み入るよ。だが、今ここにいるのは、俺と、あんただけだ。ほかに部外者はいない。だから、訊くのさ。実際のところ、あんたはどう思ってるのか、とな」

「これは異な質問をする。私がどう思っているか、とは。君は私になにを言わせたいのかな」

「聖杯つてのは、それを手にするに足る人間を選んで呼び寄せると聞いたぜ。その聖杯に選ばれたあんたが、ただ遠坂に奉仕するだけで、本当に心から満足してるのか。そういう、俗物的な質問だよ」

「——私は」

石動からの質問を受け止めた綺礼は、そこで一瞬押し黙った。

「どうした、言峰」

「……いや。べつだん聖杯に懸ける望みがあるわけでもなし。導師の意に沿うことに、不満などあるわけがない」

「そうかあ？ なんの望みもない人間の手に、そんなもんが輝くのかねえ」

石動の視線の先に見えるのは、綺礼の右手に刻まれた赤い聖痕だ。綺礼もつられるように、己が右腕に刻まれた令呪に視線を落とした。

「それは……私にもわからない。成就すべき理想も、遂げるべき悲願もない私が、なぜこの戦いを選ばれたのか」

「なんの願いもないってか？ ハッ、本当にそうなのかねえ」

石動はわざとらしく腕を組んで視線を泳がせてみせた。綺礼は目線を上げて、真つ向から石動の目を見据える。いまこの瞬間、会話のペースを掴んでいるのは自分自身であるという実感が、石動にはあった。

「どういう意味だ、お前はさつきから、なにを言いたいのだ」

「あんたが心から執着できるもの、本当になにもないのか？ ほら、そこに並んだ高価な酒でもいい。こいつはどれも、集めようと思わなきや集めらんない逸品ばかりだ。そこにはあんたのこだわりがある。違うか？」

「それがなんだと言うのだ。酒を嗜むことがそう大層な意味合いを持つとは、私には思えんが」

グラスを手に取り、軽く揺らす。最前、石動の舌に上品な味わいをもたらした赤い液体が、ろうそくの灯りを捉えて淡く輝く様を、石動は目を細めて眺める。

「酒はひとつのたとえさ。なんなら、もつとちつぽけなことでもいい。なんだっていいんだよ。遠坂にも教会にも縛られず、望むままに動いてもいいとしたなら——？」

綺礼の表情が、僅かに揺らいだ。一瞬、視線が当て所なく彷徨つたのを、石動は見逃さなかった。

「そう難しく考えんなって。あんただってひとりの人間だ。酒を嗜みたいと思う程度に

は、人並みの欲望がある。俺は立場も建前も関係なく、ひとりの人間としてのあんたと話がしたいんだ。なんでも手に入るとしたら、なにが欲しい？ たったそれだけの質問さ」

綺礼は今度こそ押し黙った。

数瞬待つても、綺礼の口は開かれない。

石動には、言峰綺礼という人間のことが、少しずつわかり始めていた。

おそらくこの男は、最初から恩師を殺そうと思っていたわけではない。

現に、いまこうして石動と会話している言峰綺礼という男の中に、恩師を殺して英霊を奪い取るなどという思考は欠片もない。見ればわかる。

言峰綺礼は、純粹に、己の心が真に望むものがなにか、それにまだ気付いていないのだ。

そのいびつさを、面白い、と思った。

この男が抱えた闇は、深く、昏い。

自分の欲望すらまともに直視できぬ求道者が、いずれ恩師を殺し、聖杯戦争を私物化するのだから人間というものはわからない。

いったいなぜ、どうして？

この男を、そばで観察したい。

この男の行く先を見届けたい。

そういう欲望が、ふつつつと湧き上がってくる。

石動がもう一声かけようとしたその時、綺礼の背後に影が蠢いた。二人しかいなかった室内に、前触れなく三人目の気配が現れる。

「綺礼様」

影は人間のかたちをとると、その場に傅き、頭を垂れた。人間の頭蓋骨を模した白亜の仮面の奥から、声が漏れる。

「衛宮切嗣が動きました。綺礼様の予測の通りにございます」

「なに、衛宮が」

刹那、綺礼の目の色が変わった。

勢いよく立ち上がった綺礼は、続くアサシンからの報告に耳を傾ける。その目は、最前までの欲のない求道者のそれではなくなっていた。衛宮切嗣という言葉聞いた瞬間、綺礼の瞳に宿ったギラついた執着を、石動はたしかに感じ取った。

「行くのか、言峰」

「ああ。少し野暮用ができた」

本来ならば、既に敗退し教会に保護された立場にある人間が、続行中の聖杯戦争に介入することは許されない。そういう厳正なるルールを捻じ曲げてでも、言峰は戦場に行

くというのだ。これを押し留めようなどという無粋を、石動は働く気にはなれなかった。

「あんたが戦場に行くつていうのなら、ちようどいい。俺も一仕事こなしてくるとしますかねエ！」

「……というど」と

「ほら、キャスターのマスターだよ。あいつは俺の獲物でもあるんでね。あんたを見ると、俺も動いてみたくなったのさ」

はじめ、石動の言を理解できぬとばかりに眉根を寄せていた綺札だが、やがてふっと笑みを零すと、綺札は踵を返した。

「——それではまるで、私が獲物を前に意気込む狩人のようではないか」

去り際の綺札が残した言葉は、石動を呆れさせ、失笑させるには十分だった。

「そう言つてるんだよ」

上層階をぶち抜かれた高層ビルが柱による支えを失い、その自重じじゆうによつて上から押し潰されてゆく。ビルの壁面をなすコンクリートは瓦礫となつて崩れ、骨組みを形成していた鉄筋は解けて崩壊し、冬木で一番の高層ビルだった冬木ハイアットの上層フロアは、見るも無残な様相を呈していた。今はまだ下層フロアは原型を保っているが、それ

も時間の問題だった。

大地を揺らす騒音の中、未だ崩壊からは免れているビル一階の壁面をくり抜いて、その内側から直径にして三メートルほどの銀の球体がホテル脇の細い路地に姿を現した。宿泊客が退避し、ホテルの崩壊が始まった今、周辺に人影はなく、この路地が最もひと目に付きにくいと判断してのことだった。一瞬遅れて、球体が空けた大穴から、ファイヤーヘッジホッグ赤と白の装甲を纏った仮面ライダービルドが飛び出す。

「なんつとか無事に脱出できたか……おいキャスター、なにが爆弾によるホテル爆破だよ、これって立派な宝具攻撃だろ」

「そうだな。ここと三十三階だけをピンポイントに破壊し尽くす分には、爆破よりもよほど効率がよく、間違いようがない。あと少し判断が遅れていたらと思うとゾツとする」
見上げた球体の中から、聞き慣れたキャスターの声が響く。球体は、天井からどろりと溶けて、流動する水銀へと姿を変えていく。中には、キャスターとケイネス、ソラウの三人が姿を隠していた。みな一様に疲れ切った顔でホテルを見上げている。

姿かたちを自由自在に変える水銀は、三人を包み込んで守りながら、同時に刃を形成し、ホテルの床を三十三階分すべてくり抜いて直通で一階まで移動してみせたのだ。水銀が球形を取るためのスペースは、ランサーが障害物をすべて破壊したことで確保した。ビルドは、球の外側でサーヴァントからの襲撃を警戒しながら、同時に逃げ遅れた

民間人がいないかを確認しながら一緒に降下してきたかたちになる。ランサーも今は霊体化したまま、周囲を警戒しているはずだ。

キャスターは、顎に指先を添えたまま、三人の身を守り抜いた水銀の塊を凝視した。

「さすがはロード・エルメロイが持てる最強の魔術礼装、ヴォールメン・ハイドラグラム月霊髓液ですな。水と風
の二重属性は伊達ではない……やはり何度見ても天才的な技量だ」

「わかりきったことをそう一々口にせずともよい、キャスター」

満更でもなさそうに笑みを深めたケイネスは、軽く掌を掲げてキャスターを制する。

背後に控えていたソラウが、ケイネスの腕に寄り添うかたちをとったまま、青白い顔で崩壊したホテルの上層フロアを見上げた。

「なんなのよ、コレ……魔術の秘匿もあつたものじゃない。もしも呑気に階段やエレベーターなんて使おうものなら、私達、あの爆発に巻き込まれてたわよ」

ケイネスの月ヴォールメン・ハイドラグラム霊髓液がなければ、間違いなく脱出は間に合わなかった。かといっ

て、いかに礼装が優秀といえども、もしも当初のケイネスの思惑通り穴熊を決め込んでいたなら、それはそれで終わっていただろう。魔術礼装ではサーヴァントの宝具の直撃は防げない。

「これが今回のアインツベルンのやり方ということですよ。私の知る歴史よりも、より直接的で暴力的な手段に訴えかけている。もしもひとつでも判断を間違えていれば、今頃

我々は——」

言いかけたところで、視界の傍らに閃光が奔った。同時に、強烈な炸裂音が耳を聳する。突然の襲撃に、全員が身構える。

——否。敵の襲撃に、本当の意味で対処できたのは、たったのひとりだけだった。

「ラ、ランサー……！」

ケイネスが瞠目する。白装束をはためかせて、鉾を下方へと突き立てるように舞い降りたのは、他ならぬケイネスのサーヴァント——八華のランサーであった。

ランサーの切っ先に、赤熱化した黒塗りの刃が叩き伏せられていた。今、ランサーがいなければ、少なくともこの場の誰かがこの刃の犠牲になっていたことは明白だった。

「ケイネス卿、敵の襲撃です。ここは我々が受け持ちますので、すぐに退避を」

「どこに退避しろというのだ、この状況で！ 路地から出た瞬間に狙撃などされては目も当てられぬわ」

言い返しつつ、ケイネスが短い詠唱を唱えると、傍らで丸まっていた水銀が意思を持ったように流動し、ケイネスの周囲を取り囲んだ。月霊髄液は、ケイネスの危機に反応していつでもその水銀の体を作り変える盾と矛、その両方の役割を担っている。

「ゆえに、ここで迎え討つのだ。敵の襲撃に怯えながら逃げ隠れるというのは、私の性に合わん」

「俺も賛成。敵は徹底的にやるつもりだ。このまま大人しく逃してくれとも思えない」

ビルドもまた、ケイネスらを庇うように前へ踏み出した。右腕に装着された、ハリネズミの背を模した手^{モーニングスター}甲を構える。

ランサーの鎧に押し込められていた黒塗りの刃が、鎧を弾き飛ばし、再度加速した。標的は、ケイネスだ。

「つて速ッ」

加速度的に速度を上げた黒塗りの刃を、ビルドは右腕に装着されたモーニングスターで殴り返す。正確には、こちらから能動的に殴ったというよりは、腕を振り上げたところで刃と激突した、といった方が正しい。不十分な体勢で刃と打ち合ったビルドは後方へと弾き飛ばされ、同様に反対方向へと弾かれた刃は、しかし再度方向転換し、ビルドが立ち上がるよりも早く、加速する。

「うそーん!?! もしかして、何度でも俺たちを狙ってくる系宝具?！」

「おそらくは。先程の狙撃からこの急襲、敵のクラスはアーチャーと見て相違ないだろう」

「そんな冷静に分析している場合ですか!」

すかさず黄金の魔力を振り撒いて^{ほさいけん}祭剣を精製したランサーが、器用にも口元に笑み

を残したまま怒声を上げ、人間離れした速度でケイネスと刃の間に割って入った。二度みたび刃を弾き返すが、それでも刃は再加速する。

「ダメだ、破壊しねえと何度でも向かってくるぞ!」

「いや待てマスター、不用意に破壊するのは危険だ。それがサーヴァントの宝具である以上、内包した魔力が炸裂する恐れがある。やるなら上空に弾き上げてからにしろ!」

☒ 祭剣で宝具を打ち返すでもなく、受け止めて抑え込んでいたランサーが顔に脂汗を浮かべて笑った。

「まったく、ずいぶんと簡単に言ってくれます……ねえ!」

宝具を上空に向かって弾き返す。けれども、数メートルほど打ち上がった宝具は、すぐに再度方向転換してその切っ先をケイネスに向けると、今までと同じように加速し、空を裂いて急迫する。それをランサーが打ち返す。

幾度か宝具との繰り返したところで、真紅の影が、地を這う蛇のように低く腰を落とし、速度でランサーへと突撃してきた。

「なにッ!？」

赤い外套のサーヴァントだった。何度でも加速する刃への対応に追われ、反応が一瞬遅れたランサーの懐に潜り込んだ赤のサーヴァントが、目にも留まらぬ速度で両腕に構えた双剣を振るう。

「——その程度でやれると思われているなら、片腹が痛むというものッ！」

されどランサーもさるもの。左腕に構えた匣祭剣で刃を弾き返しながら、右腕には鐔の無い大刀を精製し、地面に突き立てた。予期せぬ大刀の出現に進路を阻まれた敵のサーヴァントが後方へと飛び退ろうとしたときには、ランサーは既に追撃のためリーチの長い鉾を精製し、敵のサーヴァントの喉元へ向けて突き出していた。

「——ッ、ほう、やるな！」

瞠目しつつも小さくほくそ笑んだ赤いサーヴァントが、頭部を僅かに傾けることで鉾の追撃を交わし、そのまま空中で一回転すると、再度地面を蹴って飛び退る。

「ええい、しつこい！」

再度、敵の宝具が加速する。敵のサーヴァントに突き出した鉾に魔力を込めたランサーは、その姿勢からふんと上段を経由して鉾を振り下ろし、反対方向から迫る宝具を叩き落とした。地面へと叩きつけ、そのまま敵の宝具ごと鉾の切っ先をアスファルトへとねじ込む。アスファルトが砕け飛んでもなお、地面の奥へと敵の宝具を埋め込んだ。

地中で赤熱化し、砕けたアスファルトの破片を舞い上げながらも、再度飛翔しようとする宝具をランサーは力づくで抑え込み、叫んだ。

「戦兔ッ！」

「はいはい！」

ランサーの声に答えたビルドは、既に新たなボトルを二本、ベルトに装填していた。

『NINJA!』『DENSYA!』

「ビルドアップ!」

紫の忍者ボトルと、薄緑の電車ボトル。それらの成分を身に纏い、ベストマッチにはなり得ないトライアルフォーム——『忍者電車』への変身を完了させた。紫の腕には4コマ忍法刀が、薄緑の腕には船の錨カインゾクを模した弓ハツシャがそれぞれ握り締められている。

「色が変わった、だと」

敵のサーヴァント——アーチャーは僅かに眼を見開きつつも、油断なく剣を構えたまま、姿を変えたビルドから視線を逸らそうとはしない。戦兎はビルドの仮面の下、努めて不敵に笑ってみせた。

「ずいぶん周到なやり口で攻めてくれたらしいが、まだまだ詰めが甘かったな」

「……ほう? どう詰めが甘かったのか、是非ともご教示願いたいところだが」

「簡単な話さ。このてんツさい物理学者、桐生戦兎と。正義のヒーロー、仮面ライダービルドを勘定に入れて作戦を立てなかった時点で、お前らの勝利の法則はとつくに狂っちまってんだよ」

忍法刀のトリガーを手早く引いて、ビルドは踵を返した。その切っ先を後方に控えるケイネスに向けて振るうと同時、刀から電子音が鳴り響く。ケイネスの周囲を、コミッ

ク調で描かれた煙の演出が覆い隠した。半射的に頭を守るように両腕を構えたケイネスだが、その姿もすぐに煙で見えなくなる。

「なッ」

アーチャーが驚嘆の声を上げる。煙が晴れたとき、最前までそこにいた筈のケイネスとソラウの姿が、影も形もなくなっていたのだ。

「なにかわかりませんが、お見事！　これでケイネス殿は無事退避できたというわけですね……ならばッ！」

称賛の声を張り上げたランサーは、そのまま地面に突き刺した鉾を勢いよく引き抜き、敵の宝具——フルンディング赤原獵犬を力いっばい上空へと打ち上げた。遙か十メートルほど高く舞い上がった宝具は、空中でその切っ先を四方八方へと彷徨わせる。

「マスター。あれはおそらく、一度標的と定めた相手がどこへ逃げようともその場所を指し示す類の宝具。アレがケイネス卿の居場所を指し示す前に勝負をつけるべきだ」

「安心しろよキャスター。あの宝具がケイネスに辿り着くことは、もうない」

ビルドの腕に握り締められたカイゾクハッシャーには、既にエネルギーが充填されていた。忍者電車の半身に備え付けられた踏切遮断器と信号機がけたたましく警告音を掻き立てる。

上空の敵宝具は、間もなくしてケイネスの逃げた方角を特定したのだろう。上空から

降下することなく、加速を始めた。けれども、その行く手を阻むように、空から巨石が降り注ぐ。地面には奇門遁甲。キャスター、諸葛孔明の宝具、石兵八陣だ。

「あとは任せただ、マスター」

「ああ。勝利の法則は、決まった！」

ビルドは弓であるカイゾクハツシャーに装填された矢、ビルドアロー号を引き絞った。電子音が鳴り響く。電車ボトルの能力によって得られた電磁加速装置を通して、高密度のエネルギーが矢に収束されてゆく。

危機を察したアーチャーが地を蹴り、驚異的な速度で飛び出したが、速度の面ではランサーとて負けてはいない。人間の感覚をとうに超越した速度でビルドの前に躍り出たランサーが、鏃を投げ捨て、新たに精製した二本の刀でアーチャーの双剣を受け止め、打ち返す。そのまま双剣同士の苛烈な相克が始まった。

飛び散る火花と魔力の残滓が、戦場で超高速で舞い踊る白と赤を照らし出す。

「お前のクラスは大道芸師か！ 武器に統一性が感じられんな」

「どの口がそれを言いますか。その言葉、そっくりそのままお返ししますよー！」

不敵に頬を釣り上げるアーチャーに対して、ランサーは大口を開けて磊落に笑う。言葉と同時に、互いに眼にも止まらぬ速度で手にした刃を打ち合わせる。一秒間にいったい何往復の突きが交わされたのかは、戦兎にはわからない。戦兎はもう、サーヴァント

のスペックについて論理的に思考することは無駄であると学んでいた。今考えるべきは、ケイネスを付け狙うあの宝具を始末するという思考一点のみだ。

キヤスターの石兵八陣に囚われ照準を見失った敵の宝具へと狙いを定め、ビルドは十分に引き絞った矢から指を離す。

「ハアツ！」

カイゾクハツシャーから放たれた超電磁砲のエネルギーは、空中で電車のかたちをかたどると、鮮やかな輝きを振り撒きながらぐんぐんと加速し、一瞬ののちには視界の彼方で飛翔する敵宝具に命中、炸裂した。同時に、敵の宝具に凝縮されていた魔力が炸裂し、キヤスターが召喚した巨石の表面を焼き焦がす。爆発の衝撃が突風となって狭い路地に吹き込んだ。

「クツ」

アーチャーが飛び退り、距離を取る。敵の目論見を打破したランサーは、口元に笑みをたたえたまま、その双眸をきつと鋭く尖らせて、再度精製した銚の切っ先をアーチャーへと向けた。

「我が主が無事逃げおおせた今、もはや憂いはなくなりました。そなたも人理に名を刻んだ英雄豪傑であるならば、卑劣な手段に訴えるのもこれまでにない！」

アーチャーは双剣を降ろし、肩を竦めて吐き捨てるように笑みを零した。

「やれやれ。まさかホテルから脱出するだけでなく、フルンディング赤原獵犬まで攻略されるとは。確かに我々は君たちを過小評価していたらしい」

かつん、となにかがアスファルトに落下する音が鳴った。

対峙するアーチャーとランサーの間に投げ込まれたのは、パイナップルに似た形状をした、手のひら大のなにかだった。現代の武器に疎いランサーはそれ正体を認識できず、元の世界であらゆる現代兵器を見てきた戦兎だけが、それを認識できた。

「ランサー、伏せろ！」

「えっ」

刹那、投げ込まれた手榴弾が炸裂した。

爆炎が舞い上がり、衝撃がホテルの壁を捲れ上がらせる。手榴弾は周囲に存在するあらゆる障害物を吹き飛ばし、その場の全員の視界を煙幕で塞ぐ。

「くっ、卑怯なッ……」

もつとも、神秘の加護のない現代兵器でサーヴァントを傷付けることはできない。ランサーは至近距離での爆裂に見舞われながらも別段ダメージを受けることもなく、煙幕の中、鉾を構えて敵の襲撃に備えている。けれども、熱源を探知できるビルドの眼には、その場に既にランサー以外の人間がいまいことがすぐに理解できた。

「ランサー！ もういい、敵は逃げた」

「なッ……なんと、拍子抜けもいいところですね」

ランサーは落胆した様子で肩を落とした。

徐々に煙幕が晴れてゆく。アスファルトは粉々に砕け、鉄柵は吹き飛び、ホテルは今も上層フロアから順に崩壊が進んでいる真つ只中だ。惨憺たる破壊の爪痕を眺めながら、変身を解除するべくビルドドライバーに手を掛けた、その時だった。

「随分と派手にやってくれちゃってまあ。後処理に追われる側の身にもなってくれよな、まったく」

聞き覚えのある声が、背後から戦兔の耳朵を打った。弾かれるように振り返った戦兔がビルドの仮面越しに見たのは、ホテル脇の室外機に軽く腰掛けて座るひとりの男の姿だった。その姿を認めた瞬間、戦兔は体から血の気が引いていく感覚を覚えた。

戦兔にとってもよく見知った姿をした中年男は、ことの深刻さなど微塵も感じさせない軽薄な笑みを浮かべたまま、軽く手のひらを掲げ、静かに立ち上がる。

「よう、戦兔。久しぶりだな」

石動惣一の姿に擬態した、許されざる諸悪の根源。

地球外生命体エボルトが、なんでもないような顔で笑っていた。

地響きを轟かせながら徐々に崩壊してゆく冬木ハイアットを遠目に眺めながら、切嗣

は吸い終わった煙草を捨て、靴の裏で火を揉み消した。切嗣は、一区画ほど離れた場所に位置するビルの屋上からアーチャーの仕事を眺めていたのだが、結果を見届けたところで引き上げ、今はひとり冬木の街を歩いてきた。まずはアーチャーの狙撃の制度を計りたかったというのが今回の作戦を思い至った理由としては大きい。

己がサーヴァントの能力には概ね満足していた。アーチャーは切嗣の指示通り、ケイネスの居座るフロアを見事に撃ち抜いてみせたのだ。威力も申し分ない。あまりにも強力すぎるあまり、結果的にホテルは倒壊を初めてしまったが、どのみちアーチャーがいなくとも切嗣はホテルを爆破していた。結果は同じなので、別段問題はない。

大通りは、ホテルから退避してきた宿泊客や、騒音に叩き起こされて表に出てきた民間人で溢れていた。みな、倒壊してゆくホテルを眺めたり、人によってはカメラに撮影しながら、口々に騒動の原因を噂しあっている。誰しもが、テロリストだのなんだとの見当違いな推測を立てていた。

不意に、ポケットのの中で携帯電話のベルが鳴った。舞弥からの着信だ。切嗣はとりたてて慌てることもなく、あたかも街を行く一人の民間人を装い、何食わぬ顔で電話に出た。

「舞弥、首尾はどうだ」

『作戦は失敗です。ケイネスはホテルから脱出。その後、アーチャーが単独で奇襲をか

けるも暗殺には失敗。そのまま交戦中です』

「そうか」

淡々と返答をする。どんな作戦にも失敗はつきものだ。想定範囲から逸脱はしていない。

切嗣の懸念は、アーチャーがランサーに勝てるのか、という一点だ。二段構えの奇襲によつて、戦闘を介さずにケイネスだけを仕留めるのが切嗣にとつての理想的な流れだった。戦闘に持ち込まれてしまうのは巧くない。ましてや、あのランサーの実力は先の戦闘でも確認済みだ。おそらく、セイバーを除けば現状最強のサーヴァントはランサーと考えて相違ないだろう。

「舞弥。もしもアーチャーが苦戦しそうなら、すぐに撤退させてくれ」

『アーチャーを援護する必要はない、と』

「ああ。長期戦になれば、不利になるのはこつちだからね」

『わかりました。では、このまま監視を続けます』

「頼む」

最低限のやりとりのみを終わると、切嗣は電話を切った。奇襲に失敗したということ、アーチャーの手札をひとつ晒してしまったということだ。今後の作戦の立て方もまた考え直さねばならない。

黙考しつつも携帯電話をポケットにしまい込み、もう一度前を向いたとき、切嗣は瞳目し、思わず立ち止まった。

「——ッ」

今回の聖杯戦争において、切嗣が最も警戒し、同時に恐れていた男。あらゆる分野に手を出し、そのすべてにおいて才能を発揮しながらも、ひとつどころに留まることのない、底の知れない相手。出会えば、最大の強敵になるであろうことは明白であった男が、民間人の行き交う雑踏の中、ひとり佇んでいる。

「衛宮、切嗣」

名を呼ばれ、思わず後ずさる。向こうは既に、こちらを認識している。

すぐさま拳銃を取り出したい衝動に駆られるが、ここは多くの人が行き交う大通りのど真ん中だ。下手な真似をするわけにはいかない。

「……言峰綺礼」

切嗣は、己の戦場たり得ぬこの場で、目の前に佇立する最大の難敵の名を呼んだ。

第9話 「街に潜むシャドウ」

崩壊をはじめたホテル脇の路地裏で、石動惣一を睨めつけた仮面ライダービルドは、忍法刀を構えたまま腰を低く落とした。戦闘になればいつでも迎撃するという意思表示だ。

「お知り合いですか、戦兎」

ただならぬ気配を察知したランサーが、両手に鉾を携えたまま、油断なく構えを取る。キャスターも同様に石動を睨んでいる。

戦兎はランサーの問いへの返答に窮した。目の前にいる敵が地球外生命体エボルトであることを伝えることは容易いが、あまりにも突拍子がなさすぎる。キャスターがなにも言わないのは、おそらく状況を察してくれているからだろう。

「俺の名前は石動惣一ってんだ。今は聖堂教会から派遣されてきた雇われの身って立場で通ってる。以後、お見知りおきを」

戦兎が押し黙ったほんの一拍の間を引き継ぐように、石動が恭しく頭を垂れた。

多くの人間を傷つけ、多くの悲しみを生んだ張本人であるエボルトが、今また石動惣一の姿を利用して、やっと到達できたこの新世界で何事もないかのように振る舞ってい

るといふ事実が、戦兎の怒りに静かに火を灯した。

「ふざけるな……、またそうやって人を騙して好き勝手利用するつもりか、エボルト……！」

「おおいおい人聞きの悪い言い方はよしてくれよ。どんな手段だろうと俺はその時その時の役目はまっとうしてきたつもりだ。で、今回の役目は聖堂教会。その聖堂教会の人間に手を出すことがなにを意味するのか、わからねえワケじゃねえだろ、戦兎」

「——、っ」

石動の言葉の意味を理解した瞬間、戦兎の中で、今にも爆発寸前だった戦意に僅かな揺らぎが生じた。それを察したのであろうキャスターの手が、そつとビルドの肩に乗せられる。

「少し冷静になれ、マスター。相手が聖堂教会という肩書を盾にしている以上、聖杯戦争の参加者である我々が手を出す訳にはいかない……たとえ過去にどれほどの因縁があろうとも」

最後の一言には、キャスターも戦兎の状況を汲み取っているという含みがあった。キャスターと石動の顔を交互に眇めたビルドは、そつと忍法刀の切っ先を降ろす。

「なるほど。その方らふたりは因縁持ちでしたか。状況はなんとなく察しました。で、その聖堂教会の石動とやらが、いったいなんの用向きがあつて姿を現したのでしょうか。」

まさか聖堂教会の立場を笠に着て、一方的に戦兔を貶めようなどという狭量極まる魂胆で姿を現したわけでもないのでしょうか」

同じく状況を察したランサーが、言葉を失った戦兔の代わりに一步前へ出た。余裕に満ちた笑みを浮かべてはいるが、同盟を組んだ戦兔の敵である石動に対しては僅かながら棘を感じるの、きつと気の所為ではないのだろう。

「そう身構えるなよ、今日は争いに来たんじゃない。ちよつとした挨拶をしようと思っただけさ」

「挨拶？」

「そ。これはほんの挨拶代わり」

石動は懐から取り出したフルボトルを幾度か振ると、手にしたトランスチームガンへと装填した。短い変身待機音に次いで、石動は歌い上げるように一言を告げる。

「蒸血じょうけつ」

刹那、トランスチームガンの引金を引いた石動の体は、黒々とした煙幕に覆い尽くされた。赤と緑の稲妻が唸り、蟠る黒煙の周囲で雷鳴を轟かせる。

黒煙はすぐに晴れた。石動惣一は既に蒸血へんしんを終えていた。

真紅の蛇を思わせるスーツと装甲を纏った異形の仮面。戦兔の仇敵、エボルトの仮の姿。ブラッドスタークが、自らの装甲の噴射孔から白煙を放出しながら、エメラルドグ

リーンのバイザー越しにビルドを睨めつけていた。

アサシンの諜報活動は、主である言峰綺礼に確かに理想的な報告をもたらしてくれた。

己がサーヴァントに冬木ハイアットを襲撃させた衛宮切嗣は、主である自らの手を汚さずにこの人混みに紛れて撤退する予定であったのだろうが、そうはいかない。衛宮の動向は街中に放たれたアサシンによつて捕捉され、綺礼に阻まれるに至った。

「衛宮切嗣。お前は聖杯戦争でも変わららず、そういう手段を用いるのだな」

一步を踏み出す。衛宮は、眈を決して綺礼を睨め付ける。拒絶の眼差しだ。

衛宮切嗣に警戒の念を抱かせることは、綺礼の本意ではない。敵意がないことを示すため、綺礼はその場で立ち止まった。

「いや、お前が警戒を示すのは当然だろう。私はこの聖杯戦争においては既に敗退した身。重ねて聖堂教会の所属でもある。本来であれば、今宵のお前の行動には諫言を呈さねばならぬ立場にある。しかし、——違う。今宵に限っては、その限りではないのだ。私に、お前を誘ふ意図はない」

衛宮は、なにも言わない。返答のないまま、視界の隅に見える路地を顎で示した。往來では込み入った話ではできないだろうという意思表示だろう。そう綺礼は認識した。

コートポケットに両手を突っ込んだまま黙々と歩き始めた衛宮に、綺礼も追従する。

綺礼には衛宮に害を成そうという危害は微塵もなかった。綺礼を突き動かすのは、ただひとつの疑問。

綺礼は、未だかつて、この世に存在するあらゆる物事に執着を示したことがない。どのような娯楽にも興味を示すことなく、どのような理念にも心からの賛同は示さず、言峰綺礼の行動理念に、およそ目的意識と呼べるものが存在した試しはなかった。

それでも神を信じ、聖堂教会のためと嘯き、修行という名目で自らを責め苛め続けてきた。いつかは真に崇高なるものが理解できる日が来ると思っていた。父の理想が理解できる日がくると思っていた。そう固く信じて過酷な鍛錬を繰り返し、気付いた時には代行者などというエリート座にまで上り詰めていた。

綺礼が己が胸のうちに抱えた欠落をついぞ誰も理解できぬまま、綺礼は過酷な求道の末にこんなところにまで来てしまったのだ。

目の前にいる衛宮切嗣も、きつと綺礼と同じような道筋を辿ってきたに違いない。

聖杯戦争に挑むにあたって、間諜に調べさせた情報によると、衛宮切嗣もまた己の死地を求めるかのように世界中の戦場を渡り歩いて来たのだという。恩師である遠坂時臣は、それを単なる小金稼ぎに過ぎないと断じた。けれども、そうでないことは綺礼に

はわかる。ただの小金稼ぎにしては、衛宮切嗣の行動はあまりに実利に見合っていない。

綺礼には、衛宮の行動が他人事のように思えなかった。

まるで余人には理解の及ばぬ苛烈な戦歴の数々は、或いは綺礼と同様に、見失った己の道を探すための巡礼だったのではないか。綺礼にはそうとしか思えなかった。

だけれども、己の保身とリスクを度外視して繰り返された衛宮切嗣の戦いは、ある時を堺に唐突に終わりを告げた。聖杯を求める北の魔術師、アインツベルンとの邂逅が、衛宮切嗣の戦いを終わらせたのだ。

すなわち、衛宮切嗣は答えを得たのだ。

問わねばならない。あの苛烈な闘争の果てになにを求め、そして衛宮切嗣はなにを得たのか。ただそのために、言峰綺礼は己の立場さえも忘れて、この場へ馳せ参じたのだ。

ひと目のない路地裏に差し掛かったところで、綺礼は今か今かと待ち望んだ瞬間の到来に逸る気持ちを抑えられず、未だ背を向けたままの衛宮に疑問を投げかけた。

「教えてくれ衛宮切嗣！ お前はいつたい、なにを求めて戦場に身を投げかけたのか。その心の空洞を満たすに足るなにかを、お前はあの冬の大地で見つけたのだろうか!？」

返答は、至ってシンプルだった。

コートを翻して振り返った衛宮の手に握られていたのは、キャリコ短機関銃。衛宮切嗣が多くの戦場で用いてきたサブマシンガンだった。

「——ッ」

瞠目した綺礼目掛けて無数の弾丸が殺到する。

綺礼の対応は早かった。即座に腰を低く落とし、地を蹴った。放たれた弾丸の多くを回避しながら、それでも綺礼を追従して放たれた弾丸を、綺礼は両腕で頭部のみをガードしながら受け流す。ケブラー繊維と教会特製の防護呪符によつて隙間なく裏打ちされた綺礼の僧衣は、たかが現代兵器の銃弾ごときで傷をつけられる代物ではない。

降り注ぐ銃弾の雨の中、一步も怯むことなく突き進む綺礼に対し、衛宮が次にとつた行動は——

「Time ^固alter ^有—double ^二accel!」^御_時^制_御^倍_速

常人の反応速度を遥かに超えた加速で飛び込んだ綺礼に対し、半ば脊髓反射の如く紡がれた呪文。

綺礼の腕が衛宮の銃を叩き伏せるよりも素早く、綺礼の反応すらも追い付けぬ加速力でもつて、衛宮は後方へと後退してみせた。

それが魔術によつて得られた加速であることは、魔術を流神行為として取り締まる立

場にありながら、あらゆる魔術を履修し、その尽くを踏破してみせた綺礼には容易く理解できた。衛宮は、己の体内時間を魔術によって加速化させることで、綺礼の常人離れした動きに反応してみせたのだ。それがいかに己の体に負荷をかける魔術であるかなど、想像に難くはない。

「もう一度言うぞ衛宮。私はここに戦いに来たのではない。ただ、長い求道の旅路の果てにお前がなにを手に入れたのか……それが知りたいだけだ！」

もう一度、両腕を広げて敵意がないことを示す。

路地の奥へと距離を取った衛宮へ向けて、綺礼は声を荒げた。

「お前は実利すら度外視して世界中の戦場を巡り、そしてある日突然その戦いの日々に幕を下ろした。私には分かる。お前は、アインツベルンと出会い、その巡礼を終わらせるに足る答えを見出したからなのだろう？ 私はその答えを探し求めて、この聖杯戦争に身を投じたのだ……！」

返答は、待ち望んだ衛宮切嗣の声ではなかった。

「残念ながら、お前がその答えに辿り着く日は来ない」

声とともに、突如どこからか現れた白と黒の双剣が高速回転しながら綺礼へと急迫する。それが魔力を内包した尋常ならざる攻撃手段であることは、考えるまでもなく理解できた。

黒鍵で弾き返すか、回避するか、ふたつの選択肢を思い浮かべたところで、綺礼はそのいずれとも違う選択肢を選んだ。

「アサシンッ！」

ただでさえ薄暗い路地の物陰から、音もなくふたつの影が姿を現した。漆黒のローブを身に纏ったふたりのアサシンが、綺礼へと迫る白と黒の双剣を、それぞれ一刀ずつ、手にした短刀で叩き落とした。

同時に、衛宮切嗣を庇うように、真紅の外套をはためかせながら、白髪のスーヴァントが着地する。

「これは驚いた。既に敗退したはずのサーヴァントがふたり。私は幻覚でも見ているのか？」

「……アーチャー」

綺礼は思わず奥歯を擦り合わせた。二騎のアサシンは、短剣を構えたまま互いの面を見合わせる。当の赤の弓兵は、別段綺礼の返答など待つ様子もなく、ふん、と鼻で笑い飛ばした。

「どうした神父、らしくないな。アサシンの絡線が見抜かれたことが、そんなにも痛いかね」

綺礼は返答に窮した。アサシンの姿をアーチャーに見られてしまったのは失策だ。

時臣になんと申し開きすればよいのか。額を冷たい汗が伝う。

「……答える気はないか。それとも、アサシンの絡繰を見抜かれた咎を責められることでも心配しているのかな？ だったら安心しろ。ここで私が、残ったアサシンもすべて始末する。お前は堂々と教会へ戻ればいい」

「ッ」

言葉を終えるや否や、アーチャーの姿が掻き消える。その初速は、綺礼をして人間離れしていると感じを抱かせるには十分な速度だった。地を蹴ったアーチャーは、瞬く間に綺礼との距離を詰める。ふたりのアサシンが一斉に飛び掛かった。

「ハッ！」

アサシンも、決して遅いわけではない。人の反応を越えた速度で振るわれた漆黒の短刀だが、しかしアーチャーの速度はその上を行つた。即座に腰を落として短刀の軌道から外れたアーチャーは、いつの間にか両手に構えていた白と黒の双剣でもって、瞬く間にアサシン短刀を弾き上げた。まず、一人目のアサシンの胸部から鮮血の華が咲いた。

既に二人目のアサシンが短刀を構えてアーチャーの懐に飛び込んでいるが、駄目だ。速度があまりにも違いすぎる。綺礼がアサシンの敗北を察した次の刹那には、アサシンの短刀はアーチャーの体を掠めることすらなく、二刀目がアサシンの胸部を貫いた。

三人目のアサシンが、綺礼を庇うように眼前に立つ。アーチャーは再度双剣の切っ先

を下ろし、酷薄な笑みを浮かべた。

「なるほど、それがお前のアサシンの絡線か。数を分散させるほどに個々の能力は落ちると見た……下手な鉄砲なんとやらとは言うが、その格言が間違いであることを証明するにはちようどいい機会だな」

かつ、かつ、かつ。ゆつくりと足音を響かせながら、剣呑な相貌とは裏腹に、口元に冷笑を浮かべたアーチャーがゆつくりと歩み寄る。

「——ッ」

今度は左右から挟撃するかたちで、音もなくアサシンが飛び出した。奇襲としては上々だ。並の人間が標的であれば、対応する余裕などあるはずもない。けれども、あのアーチャーが相手では話が違う。アサシンの短刀がアーチャーに触れるよりも先に、アーチャーの双剣がアサシンの霊基を斬り裂くのだ。

例え敵がいかに強大な英霊であろうとも、主が戦場にいる以上、アサシンに敗走はあり得ない。綺礼の前に構えた三人目のアサシンが、アーチャー目掛けて飛び掛かろうとした、その時だった。

「——オオオオオオオオオオッ!!」

アーチャーでも、アサシンでもない第三の咆哮が戦場に響く。

怨嗟に満ちた雄叫びをあげながら月下の空より急降下してきた闖入者は、手にした双

槍をぶんと振り回して、アーチャーの双剣と打ち合わせた。右と左、長槍と短槍を巧みに操って、アーチャーの剣捌きと打ち合わせる。一瞬ののち、相克はすぐに終わりを告げた。

闖入者が振るった漆黒の長槍とアーチャーの双剣が打ち合った、その刹那——アーチャーの双剣を編んでいた霊子が弾け、砕け散った。

「ッ!？」

驚愕したアーチャーはすぐに二刀目を精製するが、闖入者の長槍はアーチャーが精製した武器に触れるや否や、即座にその刀身を粉碎してみせる。力によつて粉碎されたようには綺礼には見えなかった。ただ、アーチャーの刃が、闖入者が振るう槍の穂先に触れるや否や、その形を保てなくなったように見受けられる。

アーチャーは後退しながらも様々な武器を精製して振るうが、そのいずれもが、闖入者の振るう槍とかち合うや否や、即座に砕け散るのだ。闖入者の槍の穂先がアーチャーを追い詰めるのに、さほど時間は掛からなかった。

闖入者は、低く唸りを上げて、アーチャーの奥にいる衛宮を睨め付ける。

その双眸は本来白目である筈の箇所まで真紅で染まりきって、血涙を垂れ流していた。剥き出しの歯を強く軋ませて、憎悪に満ちたその瞳を衛宮切嗣へと向ける。全身に昏く淀んだ影を纏った漆黒の双槍使いが、アーチャーではなく、そのマスターである衛

宮切嗣を狙っていることは綺礼にもすぐにわかった。

深く息を吐いた綺礼は、次の指示を己の傀儡へと送った。

「アサシン、アーチャーを援護しろ。その闖入者を、衛宮に近付けさせるな」

その場の全員が騒然としたのを、綺礼は空気で感じ取った。

今の指示は援護対象を間違えたのではないかとでも疑うように、アサシンのひとりが髑髏の面越しに綺礼を見やる。けれども、綺礼に指示を出し直すつもりは微塵もなかった。

一拍の間ののち、綺礼の指示を受けたアサシンが闖入者へと飛び掛かる。路地の影から、無数のアサシンが一斉に舞い上がった。それらはすべて、アーチャーと闖入者との間を阻むように陣形を展開し、瞬く間に闖入者をアーチャーから引き離す。

一対一で戦えば先程のアーチャーの二の舞だろうが、十騎を越える総数で一斉に躍り掛れば、結果は違う。双槍使いの闖入者の槍捌きもさるものながら、数の有利を押し返すには至らない。闖入者が槍を振るおうにも、それをいなして余りある短刀の反撃が闖入者を襲うのだ。闇夜を駆ける暗殺者の軍勢を前に、闖入者は防戦一方のていを晒していた。

「アーチャー。先程の推測に対し、ひとつだけ解を示そう」

無数の影が舞い踊る戦場の中、綺礼は声を大にして宣言した。

「貴様が如何な手練たれど、アサシンの数を増やせば対処することは容易だった。それをしなかったのは、私にお前たちへの害意がなかったからだ。それをゆめ忘れるな」
「そうか。では肝に銘じておくとしよう」

既に戦場に衛宮切嗣の姿はなかった。

最後に残ったアーチャーが、含みを感じさせざる笑みを浮かべて、大気に溶けるようにその姿を消した。霊体化による撤退だろう。千載一遇の好機かと思われた邂逅は、しかし衛宮切嗣に一言たりとも言葉を発する機会を与えること叶わず、得体の知れない闖入者によって綺礼は機会を奪われた。

衛宮切嗣に口を開かせることは至難の業であろうことは明白だった。せめて、今宵衛宮がアーチャーを失わずに済んだことに恩義を感じてくれることに期待したいが、おそらくそれも叶わぬ願いであろうことを綺礼は理解している。

肺の奥で蠕った息を口から盛大に吐き出しながら、綺礼は双槍使いのサーヴァントに向き直った。

スタークが振り下ろしたスチームブレードと、ビルドの忍法刀が火花を散らしてかち合った。互いの力は拮抗している。互いに剣をぶつけ合い、幾度か相克したところで、スタークは数歩引き下がった。

「なアるほど。今のお前のハザードレベルは……5。2つてところか。こいつは驚いた、随分と弱っちまったなあ戦兔オ」

「……お前、それを測るためにここに来たのか」

スタークは手のひらをひらひらと振りながら答えた。

「まあな。場合によつちや計画を考え直そうかとも思ってたが、その程度のハザードレベルじゃ俺の依代としてもギリギリだ。こりや期待はできねエな」

「うるさいよ。第一、力が弱ってるのは俺だけじゃねえだろ。さっきの攻撃、以前と比べりや随分軽くなつてたぞ」

スタークは、己の腰元を手で叩いて盛大に笑った。

「おオつと、こいつは手厳しい！ 伊達に一年も付き合つてないねえ、戦兔オ！」

「気持ち悪い言い方すんな！ 誰も付き合いたくてお前なんかと付き合つてたんじゃねえよ」

スタークは乾いた笑みを零したように見えたが、その視線はすぐに夜空に浮かぶ月へと向けられた。そのまま、あからさまに嘆息する。

「ま、俺と長ア〜いお付き合いの戦兔から見ても弱体化したと感じるんなら、実際そうなんだろう。随分と面倒なことをやってくれたよ、お前らは」

戦兔の言葉は、決してハツタリではない。スタークの一撃は、対応すままならな

かった初期スペックのビルド時代と比べると明らかに軽くなっている。

エボルトとビルドの最終決戦が行われたあの次元の裂け目は、元来エボルトという存在そのものをエネルギーとして吸収し、新世界を創り出すためのものだった。結果的にビルドも一緒に裂け目に飛び込んだために、新世界創造のためのエネルギーとしてエボルトともども大幅に力を吸い上げられ弱体化したが、両者ともに条件は同じだった。ビルドが弱体化したなら、エボルトも弱体化している。

一時はどうなることかと鉾を構え直していたランサーは、既にその戦闘態勢を解いていた。

「あのー、すみません。どうやら積もるお話もあるご様子ですし、長くなりそうなら私は先にケイネス殿を迎えに行きたいのですが」

「ああ、構わない。どうやらこいつが戦いに来たんじゃないってのは本当らしいし、なにより今の俺達の立場じゃ互いに本気で戦うことはできねえからな」

「そうですか……では、お言葉に甘えて。ケイネス殿を無事退避させたのち、また顔を見せます。落ち合う場所は……まあ、適当に。それでは」

随分とアバウトな提案だったが、ここで口に出して場所を告げる方が危ないと判断したのだろう。ランサーは最後まで心情の読めない微笑みを浮かべたまま、すうと夜闇の溶けるように消え去った。

スタークの身を包んでいた装甲が霧散する。石動が生身を晒したのを確認するや、一瞬遅れて、戦兎もまたドライバーから二本のフルボトルを抜き取り、ビルドの変身を解除した。もう二度と出会うことはないと思っていた宿敵と、素顔の視線をぶつけ合う。

「なんでこんなゲームを開こうと思った」

「なんでって、随分とくだらない質問をするようになったなア、戦兎」

「いいから答えろッ！」

戦兎が声を荒げると、石動は頬を緩めたままさもどうでもよさそうにこくこくと頷いた。

「簡単な話だよ。お前も知つての通り、俺は力を奪われすぎた。もう、現実世界じゃ実体化するだけの力すら残ってない。だから、聖杯の奇跡にでも縋ろうと思ったのさ。我ながら、恥ずかしい話だろ？」

「お前は本来、新世界を生み出すためのエネルギーとなつて消えるはずだった！ こんなゲームを開くだけのチャンスすら残ってなかった筈だ……！」

「その通りだよ。お陰様でこっちは僅かな残留思念しか残らなかつた。そういう意味じゃ、あの戦いは間違いなくお前から人類の勝利さ、完全勝利。だが、俺の運も捨てたモンじゃなかつた。あとは消滅するのを待つだけだった俺の残留思念が、たまたまバグスターウイルスに感染した人間に取り付いたのさ」

「バグスター、ウイルス……」

「そ。お前もよく知ってるんだろ？ 旧世界で最上魁星もがみかいせいが研究してた、アレだよ」

ブラッドスタークが用いるトランスチームシステムの原型、カイザーシステムの生みの親にして、旧世界唯一のバグスターウイルス研究者。バイカイザーとして全並行世界の支配に乗り出し、そして最後には戦兎ビルドと宝生永夢エグゼイドによって撃破された男の名だ。

「バグスターウイルスに感染した人間に俺が取り付いたことで、俺も道連れでバグスターウイルスに感染しちまったのさ。イヤこれが案外快適でねえ。現実世界じゃ消滅寸前でも、データ生命体としてならまだ人の形を保っていられる……！ ほら見ろよ、この世界でならこんなに自由に動き回ることだってできるんだ！」

石動は子供のように無邪気な笑みを浮かべながら、両腕を広げてその場でぐるりと一周してみせた。けれども、その掌に令呪がないことは、戦兎にもすぐに気がついた。

「お前、聖杯戦争の参加者じゃねえのかよ」

ぴたりと動きを止めた石動は、唇をへの字に結んだ。

「生憎と令呪の分配は聖杯サマの独断と偏見に満ちていてね。お硬い聖杯サマは、地球外生命体には令呪はくれねえんだとき」

「当然だ。お前のような人理の危機に立ち向かうために聖杯がその権限を行使することはあり得る話だが、その逆はあり得ない。聖杯はそこまで愚かなシステムではない」

戦兎と石動のやりとりを静観していたキャスターが、ここで口を開いた。

「なるほど、だから戦兎には令呪が与えられたってワケか」

石動はいじけた様子で数歩ふらりと歩くと、再びホテルの壁際に設置されたエアコンの室外機に腰掛けた。

「現実世界で邪魔なお前をこの世界に引きずり込んで、再び俺が実体化したあとの障害を減らしておこうと思ったまではいいんだが、まあさかこんなことになっちまうとはねえ。俺も随分焼きが回ったモンだ」

言葉とは裏腹に、石動の表情には陰りが感じられなかった。嘆いてはいるが、頬は未だに緩んでいるし、微かに笑みを零しているようにさえ見える。

こういうとき、エボルトは必ずなにかを企んでいることを戦兎は知っている。

「お前、今度はなにを企んでるんだ。令呪も持ってねえ癖に」

「さあ？　なにか企んでたとして、それを簡単に話すほど俺がお人好しじゃないってことは、お前はもうよオーく知ってんだろ？」

「……ああ。その言い方から察するに、令呪があろうとなかろうと、お前の計画には関係ないってことは予測がついた」

「いやまあ、手に入るモンなら欲しいよ。だから、隙あらば奪う。そこは変わんねえよ」
石動は指先を鉄砲の形に見立てて戦兎を指すと、軽くウインクをして見せた。

嘆息する戦兎の代わりに、キャスターが前へ踏み出た。

「ならば質問を変えよう。お前は聖堂教会に所属していると言っていたな」

「ああ、言ったとも」

「いったいどういう理由で？ 聖堂教会は、お前のような異分子を雇うような流神的な組織ではなかったと記憶しているが」

「おっしゃる通り！ だが、奴らにとつちや神秘の秘匿も神様への信仰と同じくらい大切なことだ。この聖杯戦争を監督する上で、放つちやおけない驚異がこの街には潜んでいる。それを排除するのが、今回の俺に与えられた役割^{ロール}つてワケ」

「その、驚異というのは」

石動はしばしキャスターの瞳を見つめたのち、ふつと笑みを零した。あからさまに不愉快そうに眉根を潜めるキャスターに語り聞かせるように、石動は滔々と解説を始めた。

「今回の聖杯戦争は、とある時計塔の君主^{ロイド}が残した記録を元に、檀黎斗神が精密に再現した仮想現実だ。だが、再現世界である限り、そこには本来存在したはずの参加者やサーヴァントがいなきやおかしい。そもそも存在すらしなかつたお前らが此処にいるのは……不自然だよな？」

「ああ……少なくともそのために、本来第四次に参戦していたキャスター陣営は丸ごと

消滅していることになる。いや、改変されたのはそれだけではない、各陣営が召喚するサーヴァントもだ。これは最早、過去の第四次からは大きく乖離している」

「そこが檀黎斗神のスゴいところだよ。元々のデータを再現しつつ、今回のゲーム用に調整、改竄したのがこの世界ってワケ。まあ普通に考えて、聖杯戦争そこのだけで快樂殺人に勤しむような主従はゲームとしちゃ必要ねえからな。……とまあそこまでは良かったんだが、問題はここからだ」

「問題？」

「お前らみたいな不自然を押し通すために、本来存在したデータを抹消したんだが、英霊サマのデータってのは思ってたよりもずーっと根が深くてねエ。人理に刻まれた英霊サマってだけあって、その存在が持つ力も強かったんだろう。本来の第四次に存在したサーヴァントのデータは完全に消去するには至らず、バグデータとして残っちゃまった」

キヤスターはやはりあからさまに表情を歪めると、特大のため息をひとつ落とし、片手で己の顔を覆った。

「なんツてことをしてくれたんだ……」

「お、もうなんとなく察してくれたかな？　つまり、ゲーム風に言うると、製品版になる前に消去された筈のバグデータが降り積もって、サーヴァントのなりぞこないになっちゃまったって話。ほら、昔流行ったゲームにもあったろ？　バグキャラの……『けつばん』

だっけ？ ああいう感じ」

石動の言う昔流行ったゲームにじっくり来なかった戦兎は、疑問符を浮かべながらキャスターの顔を見やった。どうやらキャスターはよく理解している様子で、顎に指先を添えたまま深く頷いていた。

「ってわかるのかよ、キャスター!？」

「まあな。……ッて、そんなことはどうでもいい。では、あのセイバーがかつての第四次に参戦していた英雄王の能力を行使したのは」

「まあ、そういうこともあるんじゃないか。強力なサーヴァントはそれだけバグもデカいからな。それが今召喚されてるサーヴァントの霊基に混入して……っつーことはあり得ない話じゃない。製品としちやとんだ不良品だよ」

石動はちらちらとキャスターの顔色を伺いながら続けた。

「元になった第四次の記録を残した君主ロードにとつて、その英雄王とやらはさぞかし強オーい英雄豪傑だったんだろうよ。消去された後のバグデータですら、正規召喚された英霊を変質させちゃうほどの影響力を持ちちゃうんだから」

「——ン、ンンン！」

石動の言葉を遮るように、キャスターは特大の咳払いをした。

「話はわかった。その残留データを処理するのがお前の仕事だと、そう言いたいのだな」

「そういうこと。檀黎斗つてのは、これがかなりの完璧主義でな。自分の作った完璧なゲームに、そういう不純物の欠陥品が混じってることが許せないんだとさ」

「……人の記録を勝手に改竄しておいて、随分と勝手な言い草だな」

キャスターは呆れきった様子を隠しもせずにあからさまに嘆息した。

「まあそういうなよ。やつちまつたことはもう仕方ないだろ？ で、そういう残留物の

バグデータを総称して、俺たちは『シャドウサーヴァント』って呼んでるってわけだ」

「シャドウサーヴァント……そのものそのままサーヴァントの影、ということか」

戦兎もまたキャスターと同様に、顎に指先を添えて深く頷いた。元より人理の影法師でしかない英霊の、さらにあやふやな影となると、どういう存在なのか想像はつく。

「シャドウサーヴァントには大した思考能力はない。本能に従って動くか、かつて抱いた強い目的に沿って動くだけの、言っちゃえば獣みたいなもんだ。戦闘能力も本来持ってたモンとくらべりや劣化してる。だが、それでも奴ら腐つても英霊だ。そこらのハードスマツシユなんかよりは強エンじゃねえか？」

「……お前、なんでそんなこと俺たちに教えるんだ」

警戒心も露わに詰問する戦兎に向かって、石動はにと微笑んだ。

「なーんにも知らないままじゃ、お前らもスツキリしねえだろ？ それに、この程度の情報なら教えたところで俺にデメリットはないからな」

「今度は、嘘はないんだろうな」

「まあ、シャドウは本来の予定には存在してなかったイレギュラーだからな。こつちも手を焼いてる。あわよくばお前らがシャドウをぶつ潰してくれりやちったア仕事が無くなるかな、くらしいの打算は否定しねえよ……つとオ」

言いつつも、石動は両手で膝を支えて立ち上がった。戦兎の肩をぼんぼんと軽く叩き、わざとらしいくらいにこやかに微笑む。煩わしく感じた戦兎は、その手を勢いよく振り払った。

「触んな」

「つれないねえ……ま、仕方ないか」

石動は踵を返すと、戦兎らに背を向けた。最後にもう一度、首だけを回して視線を寄越す。

「今日はお前らの元気そうな顔見れて安心したよ。ここに来た目的がほんの挨拶だけってのはマジだから、そこは心配すんな。情報料も別にいらねえ。せいぜいありがたく思ってくれ」

「ふざけんな、全部自分たちで撒いた種だろ」

石動は戦兎のそっけない返答に満足したように笑みを深めた。

「ま、なんにせよこのホテルはじき倒壊する。お前らもとつとこつから離れるんだな。」

チャクオウ」

石動は軽く掲げた手のひらをひらひらと振って、夜の闇へと姿を消していった。追う気にはならなかった。

地響きをあげて大地を震わせる巨大高層物をちらりと見上げる。今は、このホテルから素早く退避し、再度ケイネスと合流することが肝要だ。キャスターと顔を見合わせた戦兎は、キャスターがその姿を霊体化させるのを確認すると、ビルドフォンにライオンフルボトルを装填し、ビルド専用バイク^{マジンビルダー}を展開させた。

夜の市街地を駆け抜けるバイクの駆動音も、崩れ行くホテルの轟音の前に随分と矮小なささやきであるかのように感じられた。

切嗣が帰路についた時、既に時刻は早朝五時を回っていた。

ハイアットホテル襲撃の任務を終えた舞弥が、切嗣に追従して拠点と定めた武家屋敷の門をくぐる。一日中諜報活動のため動き回り、セイバーが猛威を奮った乱闘から、冬木ハイアットまで一連の任務をこなした直後だというのに、その表情には疲れの色など欠片も浮かんではいない。そういう風に、切嗣が育て上げたのだ。

「舞弥。今日はありがとう。君は先に屋敷に戻って、休息をとってくれ」

「ありがとうございます。切嗣は？」

「僕もすぐに休むさ。心配はいらない」

「そうですか……それでは、お先に失礼します」

軽い会釈ののち、舞弥は切嗣に背を向け、屋敷へと向かってゆく。

舞弥の姿が見えなくなったのを見計らって、切嗣は短く、己の傀儡の名を呼んだ。

「アーチャー」

呼びかけから間もなく、背後に気配が感じられた。

振り返ったとき、切嗣は思わず眉根を潜めずにはいられなかった。

切嗣の背後に立っていたのは、確かにアーチャーだ。赤い外套を身に纏い、仏頂面で立ち尽くしている。そこは平時となにも変わらない。問題は、アーチャーがその身に刻んだ傷の数々だ。

赤の霊衣はどこどころが裂け、その褐色の肌にもいたるところに擦り傷や切り傷が刻まれている。奇妙なことに、切嗣が魔力を流し込んでも、アーチャーの傷が癒えることはなかった。いずれも、先の戦闘であの黒いサーヴァントから貰った傷だ。

本来ならばどうも回復していなければおかしい傷が、時間経過で回復せず、魔力を注いでも癒える様子が見られない。これは異常だ。

「アーチャー。その傷は、すべてあの黒いサーヴァントにやられたものと見て間違いはないんだな」

「ホテルの襲撃に際して、あの白いランサーから直撃を貰った覚えはない。アサシンも同様だ。結果から判断するに、そう考えるほかないのだろうな」

切嗣が見る限り、アサシンとの戦闘においてもアーチャーが傷を負う様子はなかった。

近接戦闘の実力をとつても、アーチャーの性能は申し分なかったと切嗣は評価している。けれども、あの黒いサーヴアントとの戦闘は——あまりにも相性が悪かった。アーチャーの精製する武器はすべて無効化され、打ち碎かれ、アーチャーばかりが槍の攻撃を通してきたのだ。それでも繰り返し武器を精製し、粉碎されながらも致命傷だけは避けながら対応できたのは、アサシンの助力を抜きにしても、ひとえにアーチャーの実力がなせる技であると評価していい。

切嗣は、戦力として運用する上で、己のサーヴアントを高く評価していた。

「マスター」

「なんだ、アーチャー」

だからこそ、本来会話をするつもりなど毛頭なかったサーヴアントに対しても、必要最低限の口を利くことにはさして大きな抵抗はなかった。仕事を的確に実行してくれるなら、それ以上に望むことなどないからだ。けれども、アーチャーの口から出た言葉は、切嗣の予想にないものだった。

「あの神父の言っていた言葉だが」

「気にするな。あんなものはくだらない妄言だ」

「ああ、アレが単なる思い違いであることは承知している。だが、私からも尋ねてみたくなってるね。マスターはいつたい、聖杯に如何なる願いを託して戦うのか」

一瞬、無意識に自分の顔が強張ったのを、切嗣は自覚した。取り繕うように平静を装う。

「……そんなことを聞いてどうする」

「どうもしないさ。言うなれば好奇心、というものだろう。——いや、答える気がないから今の質問は忘れてくれて構わないがね」

切嗣は、押し黙った。

長い間、世界中の戦場を転々と渡り歩き、人を殺し続けてきた頃の記憶が脳裏をよぎる。ひとりでも多くの人間を救うための殺人。救済のため戦争。余人が聞けば、壊れていると謗られてもなんらおかしくはない理想。

切嗣はいつだって、その戦場で散る命の数を天秤にかけて、ひとりでも少ないと判断した皿を切り捨て続けてきた。多数を生かすためには、少数を殺し尽くすほかにすべがないと固く信じてきたからだ。

すべての命に一切の貴賤はなく、老若男女の別け隔てもなく。命をただ数のみで判断

して、切嗣は己を無謬の天秤と定めてきた。

切嗣の信念に、言峰綺礼が言っていたようなわけのわからない利己は微塵も介入しない。いまだかつて、切嗣には己の求道のために戦った試しなど、ただの一度たりとて存在しない。

その殺戮の日々も、もうすぐ終わる。

この世に蔓延る戦いの歴史を、衛宮切嗣が終わらせる。

聖杯を手に入れ、その膨大な力を用いて、この惑星に存在するあらゆる争いを一掃するのだ。それが、切嗣の純然たる願い。

「……恒久平和の実現、と言ったらどうする」

ぼつりと呟き、切嗣はアーチャーをみやる。

傷だらけのアーチャーは、静かにその瞳を閉じた。

「——そうか。それが貴方の願い、か」

アーチャーの表情に陰りが差した。切嗣はそれを見逃さなかつた。

「それがどうかしたのか、アーチャー」

「……いいや、なんでもない。アイリスフィールから断片的には聞いていたのでね。だが、……そうだな。率直な感想を言わせて貰うなら……そんなものは、夢物語でしかないように私には思える」

剎那、切嗣は眉根を潜めた。

「なんだと」

「それを実現させるに足る奇跡など、はなからこの世に存在してはいない。貴方の理想は……魔法よりも遠く、奇跡よりも儂い」

「——ッ、……そうか」

はじめはなにかを言い返そうとした。けれども、言い返すべき言葉は切嗣の中からは出てこなかった。

所詮は己の記憶を持たず、己の在り方さえも判然としないサーヴァントだ。いつの時代、なにを成した英霊であるのかは知ったことではないが、所詮道具になにを語ったところで無駄だったのだ。そう思い至ったとき、切嗣の思考は即座に戦場に立つ冷徹な機械へと切り替わった。

アーチャーには視線を超越することもなく、切嗣は屋敷へと歩を進め、振り返ることなく必要事項だけを淡々と告げた。

「あの黒いサーヴァントについては僕も調査を進めておく。だが少なくとも、お前の武器があのサーヴァントには通用しないと知れた以上、二度と同じ戦法は取らない。お前は土蔵に入って快復に努めろ」

「……了解した」

短い返答ののち、アーチャーの気配は静かに消え去った。霊体化し、土蔵へ向かったのだらう。

この屋敷の土蔵には、土地の霊脈の流れを利用した魔法陣が敷かれている。おそらくアーチャーが負った傷は、魔術的なダメージだ。魔法陣の上でいくら時間を過ごしたところで気休めにしかならないだろうが、なにもしないよりは幾分マシだろうという判断だった。

誰もいない屋敷の庭をひとり歩きながら、切嗣は懐から取り出した煙草に火をつけた。肺いっぱい吸い込んだ煙を、冷たい夜気に吐き出す。しばし切嗣の頭上に蟠った煙草の香りも、切嗣が再び歩き出す頃にはいずこかへ溶けてなくなっていた。後には切嗣が踏み潰した煙草の吸殻だけが残されていた。

理想を追いかけて、ただまっすぐに走り続けることができたあの頃の自分は、もうどこにもいない。

夢を見られるのは、子供の間だけだ。大人になって、この世には正義の味方などというものは存在していないのだと思ひ知らされた。知りたくもない現実をそれでも受け止めるほかになく、見たくもない現実をそれでも直視するしかない。

いかな絶望を突きつけられようとも、走り続けるほかにすべを知らなかった。ただ己

を突き動かす夢に殉じて、ひとりでも多くの人間を救いたい、そんな愚かな理想に陶醉して、最後にはすべてを失い、哀れな姿に成り果てた。

——そんなものは、ない。ないんだよ、爺さん。

——貴方の抱いた理想は、この世界のどこにも存在していなかったんだ。

衛宮切嗣の祈りは、世界の外側へ到達せんとする力をもつてしても、叶わない。奇跡などというものは、この世界のどこにも存在しない。飽くなき戦いの道を突き進んでも、その先に待つのは地獄だけだ。そんなことはもう、他でもないアーチャー自身が痛いほどに知っている。

だけれども、そんな現実を突きつけたところで、今の衛宮切嗣は止まらない。歪んだ理想を胸に突き進む愚者には立ち止まることすらも許されないうことを、皮肉にもアーチャーだからこそ理解できてしまう。

その果てに絶望が待っていても、今更己が原点たる願いを否定し摘み取ることでできはしない。今はただ、愚かで歪んだ理想を胸に戦い続けるほかに、彼らが進む道など存在しないのだから。

第10話「もうひとりのだりふター」

冬木において、深山町はベッドタウンとしての側面が強い。昼は未遠川を渡って新都へ働きに出て、夜は昔ながらの木造建築が立ち並ぶ住宅街が大半を占める深山町へ帰って眠る。深山町で暮らす者の多くはそういった生活を送っている。そのため、深夜ともなれば深山町はしんとした静寂に包まれる。一部の例外はあれど、半数以上の家屋からは既に部屋の灯りが消え、町を照らす灯りは等間隔で並ぶ街灯と、空に浮かぶ月明かりのみだった。

ブラッドスタークは、静謐な深夜の町並みにそぐわぬ怪異の群れを前にして、その仮面の下で特大の溜息を零した。

「おおいおいマジかよ。俺、タコ嫌いなんだよなあ……」

ライフルモードへと変形させたトランスチームガンを肩に担ぎながら、あからさまに項垂れてみせる。スタークの眼前には、青黒い触手にびっしりと吸盤を備え、イカか、タコか、どちらとも取れぬ外観をした奇妙な軟体生物が路上を埋め尽くさん勢いで蔓延っていた。

現状、民間人に見咎められては非常に拙い事態になってはいるものの、この周囲一帯

には協力者である遠坂時臣によって人払いの結果が張られている。速攻で決着をつければ問題はない、とのことだった。

「ええい、一度消去されたにも関わらずウ……この檀ツ黎斗神の神ツ聖なるゲームに無粋な水を差してくれるとは、許し難い狼藉イ！ 気色の悪い化け物どもめ、この神が手ずから始末してくれるウ！」

ブレードモードに変形させたガシャコンブレイカーを携えた仮面ライダーゲンムが、後方からスタークを追い越すかたちで戦場へと躍り出た。最初の一匹目が反応を示すよりも先に、ゲンムの刃が海魔の体を断ち切った。

同時に、空中にアルファベットで『H I T』の三文字が浮かび上がる。このゲーム上に存在するエネミーキャラに対して、ゲンムの攻撃は特別な特攻効果を持っているらしい。聖杯から喚ばれたサーヴァントに特攻効果は乗らないが、ゲーム上で誕生したキャラ、とりわけバグデータの塊であるシャドウサーヴァントに対し、ルーラーであるゲンムの攻撃は絶大な威力を誇る。

ゲンムの攻撃を受けた海魔は一刀の元に切り伏せられ、そのまま血飛沫すらもピクセルの粒子へと変換されて消滅した。後方でさしてやる気もなく眺めているスタークと違って、ゲンムは破竹の勢いで海魔を斬り伏せ瞬く間にその数を減少させてゆく。

「おオつと、出る幕ないねエ、こいつア。ま、その方がありがたいが」

今夜ふたりに与えられた仕事は、深山町に出没するシャドウサーヴァント、キャスターの討伐だった。キャスターの宝具の真髄は、異次元から異形種である海魔を召喚し、使役するというもの。この場所に海魔が出現しているということは、周辺にシャドウキャスターがいるということに他ならない。あとは魔力を感知して追跡するだけなのだが、こうして海魔が道を阻むように立ち塞がるため、追跡は難航していた。

ゲンムが討ち漏らした海魔が、スタークを標的と定めて毒霧を噴出させながらにじり寄ってくる。ヒトデとタコを足したような気味の悪い生物に標的にされるといふ事実が、スタークに生理的な嫌悪を抱かせる。ジーニアスによって感情が付与されたこともあって、海魔の行動は以前にも増して薄気味悪く感じられた。

「はア、仕方ない」

コブラボトルを装填したトランスチームガンを構え、引き金を引く。

『STEAM SHOOT!』

電子音を鳴らしながら、コブラボトルの力を内包したエネルギー弾が放たれる。弾丸は狙い過たず海魔を直撃し、血飛沫を舞い上げながらその体を四散させた。それが拙かった。

海魔の血飛沫と引き裂かれた体の断片が新たな海魔を喚ぶ触媒となり、触手の断片は新たな海魔となってスタークへと迫る。結果的に、スタークの攻撃によって海魔が増え

る羽目になったのだ。それを悟ったとき、スタークの背筋を悪寒が駆け抜けた。

「嘘だろオ、オイ。こいつはちよつと厄介過ぎるんじゃないかア!？」

「んなアアにをやっているウツ、くオの足手まといがアー……ッ!」

スタークの危機に気付いたゲンムが、複数体の海魔を纏めて斬り伏せ欠片も残さず消滅させながら、剣を構えて駆け寄った。下手に攻撃を加えるわけにもいかず、後退するスタークに毒霧を吹きかけていた海魔の群れを、ゲンムの刃が後方から一気に斬り裂く。直撃だ。アルファベットで『GREAT』の五文字が浮かび上がる。

ゲンムの攻撃を受けた海魔どもは、異次元から押し寄せる異形種としてではなく、純然たるゲーム上のエネミー体としてピクセルまで分解され、消滅した。

スタークは脱力した。他のシャドウサーヴァントが相手であれば的確な援護射撃もできただろう。しかし、通常攻撃が効かず、ましてやただでさえ嫌悪感を抱いているタコを更に薄気味悪くしたような異形と戦わされるのは、スタークにしても本意ではない。再び戦場に戻り、次々と海魔を仕留めていくゲンムを見るうち、次第にもう全部あいつひとりでいいんじゃないかなと思えてきた。

スタークはゲンムを見つめたまま踵を返すことなく後方へと後じさり、肩を竦めて笑う。

「悪いな神イ、俺は降りる。今回はちと相性が悪すぎるんでね……他のシャドウサー

ヴァント戦でまた呼んでくれエ！」

「勝手にするがいいツ！ サーヴァントですらない貴様などハナから戦力外だアツ！」

「そうかそうか！ 温情溢れる判断に感謝しよう。そんなじゃ、チャクオ〜」

スタークが軽く手を降ると同時、彼方からスタークの全長をゆうに超える巨大なエメラルドグリーンのコブラが飛来する。コブラがスタークの身を覆い隠すように地を駆け抜けたかと思えば、直後、スタークはその場から姿を消していた。

「——して、シャドウキヤスターは引き続き逃亡を図った、という訳ですな。既に民間人にも被害が及んでいる以上、早急に対応する必要がある」

聖堂教会地下の一室に設えられた蓄音機型の寶石通信機へと、言峰璃正神父が淡々と状況を報告する。通信機の向こうにいるのは、遠坂家にいる遠坂時臣だ。寶石通信機を用いての通話であれば、文明の利器を用いての通話と違って、傍受される不安もない。『なるほど。状況は理解しました。魔術の秘匿に責任を負う者としても、此度のシャドウキヤスターの狼藉は赦せるものではない』

通信機の向こうから、時臣の声が返ってくる。

聖堂教会を時臣に事態の報告を行う璃正神父の後方には、綺礼と石動、それからルーラークラスのサーヴァントである檀黎斗が居並んでいた。石動はばつが悪そうに目線

を伏せているが、檀黎斗は別段悔いる様子もなく笑みを深めるばかりだった。

「いったいどういう流れでシャドウキヤスターを取り逃がすに至ったのかは聞き及んではないが、この二人でも始末しきれなかったことを考えると、一筋縄ではないかない相手であろうことが予測できる。」

「いやだって、まさかあんな戦い方するとは思わねえだろオ？ タコばつか出して来やがって」

「ええい黙れ石動イ！ 誰のせいで奴を取り逃がしたと思ってる」

檀黎斗が、石動の軽口に小声で反論する。

「いや俺のせいじゃねえだろオ。大体、シャドウキヤスター相手じゃ俺はハナっから戦力外だって、おたくもそう言ってたろ？ それに、そんなこと言い出したら敵の戦力をちやアんと計算に入れずに作戦を立てたルーラーの方にも責任あるんじゃないの？」

「ぐっ……、貴様この私を前にしてよくもぬけぬけとオ……そもそも貴様があの時ッ」

憤慨する黎斗の言葉を、なだめるように軽く両手を掲げた石動が遮った。

「はいはい、いつまでも過ぎたこと言ってたって仕方ねえだろ。今回の敵は前に倒したシャドウセイバーとはワケが違うんだ。正面からバカ正直に戦ってくれる手合いじゃあない。次はそれを念頭に置いて作戦を立てるしかないんじゃない？」

黎斗は押し黙った。綺礼と璃正、全員の視線が黎斗を見つめている。

ルーラーと石動が相対するシャドウサーヴァントは、これで二騎目だ。最初に現れたシャドウサーヴァント、騎士王の力を内包した英霊のなり損ないは、既に檀黎斗が仕留めている。

黎斗は軽く咳払いをすると、深く息を吐いた。

「その不遜な物言いは気に食わんが、確かに、シャドウキヤスターの能力の看破などこの私の才能をもってすれば容易かった。しかしそれを凡才の貴様に詳しく語ることを無意味と断じたのは私の負い目でもある。ふん、無能な貴様にも理解を示してやれる私の寛大さに感謝するがいい！」

「ああ、いつも感謝してるよ。神サマ仏サマ檀黎斗サマってな」

割と投げやりに答えた石動だったが、黎斗はそれで満足したらしい。最前までのやり取りを水に流したかのように笑みを深めると、黎斗は滔々と語り出した。

「今回の敵は私の宝具以外では決定打は与えられない。なにしろ、ゲナムの特攻抜きでいたずらに攻撃を加えれば、途端に増殖するような化け物だからな。次はそれを踏まえ、作戦を立てる必要がある」

「……聞いての通りです。時臣くん、君はどう思いますか」

璃正神父が宝石通信機に向き直る。時臣からの返答はすぐだった。

『明確な意思も目的もなく徘徊し、その神秘を露呈させ、聖杯戦争そのものを破綻させか

ねない異分子。それだけに対応は急を要するということは、私にもわかります。ですが、我がサーヴアントはまず間違はなくこの程度では腰をあげてはくれないでしょう』『フン、当然だ。かつて人類を滅ぼしかけた闇のキバが、たかだか人類ごときのために動くものか。黄金のキバならばまだしも、闇のキバなどを喚んでしまうとはつくづく運のない男め』

「ン、ンンツ」

嘲笑混じりに語られる黎斗の言葉を、璃正神父の咳払いが遮った。

『……続けても構いませんか？ 神父』

「ああ、申し訳ない。どうぞ、続けてください」

黎斗が変わって、璃正神父が謝辞を述べる。当の時臣も、流石に遠坂家当主ともなれば、安い挑発に乗ってしまふほど愚かしい男ではない。黎斗の言葉などはなから聞かなかったように、時臣は言葉を続けた。

『可能であればこの事態が参加者間に広く知れ渡る前に、内々に終わらせてしまいたい。今回、シャドウサーヴアントの討滅を目的として聖杯によって招かれた英霊がそう語るのであれば、引き続き彼らに任せるべきでしょう。なんなら、綺礼のアサシンを索敵に当たらせても構いません』

「は。では直ちに冬木中に散会したアサシンにもその旨を伝えます」

恭しく頭を垂れた綺礼の背後に、全身黒ずくめの影がひとり、姿を表した。青い長髪を結わえた女性のアサシンだ。綺礼に従って、アサシンもその場に傅いている。

「アサシン。聞いていたな」

「ぬかりなく。すぐに全員に共有いたします」

必要最低限の返答だけを淡々と告げて、再び闇に姿を消そうとしたアサシンを呼び止める言い含めるように、通信機の向こうの時臣が口を開いた。

『待て。ただし、不要な戦闘は極力避けて欲しい。くれぐれも先日の冬木ハイアットのようなことはないように頼みたい』

「……はい。その節は、私の浅慮ゆえに、申し訳ないことをしました」

綺礼は、先日の衛宮切嗣戦での出来事を掻い摘んで時臣に報告していた。

ただ話をする目的で姿を見せた綺礼にとつて、あのような戦闘が待っていることは慮外の出来事であった。敵にアサシンの姿を晒したことが、結果、アサシンの総力を削られたこと、そのいずれも隠し通したい事実であったが、そういった事実を隠すことで、後々に大きな軋轢となつて跳ね返ってくることでだけは避けたかった。

思い悩んだ綺礼は、聖堂教会の監督役としての立場で、冬木ハイアットの一件を諫めようと姿を現したところで、予期せぬアーチャーの襲撃を受け、更にシャドウランサーまで乱入してきたために、やむを得ずアサシンで対応した、というシナリオを語って聞

かせた。案の定、時臣も璃正も綺礼の言葉になんら疑いを持つことはなかった。

『いや、いいんだ綺礼。それもすべては神秘の秘匿のためを思つての行動。それをどうしてただの浅慮と詰ることなじができればよいか。私は、君のような敬虔な弟子を持たれたことを誇りに思っているよ』

「……勿体ないお言葉です」

『ただ、綺礼。君には今後、不用意に戦場に立つことは控えて貰いたいのだ。アサシンはあくまで間諜の役割のみに徹し、君は必要最低限の報告のみに務めること。これは命令ではなく、君を協力者に選んだ私からの頼みだ。そして、君自身のためでもある。これ以上君が危険な目に合わないためにも……どうか、了承してほしい』

「……分かりました。導師がそう仰られるなら」

『ありがとう。やはり君を協力者に選んだことは間違いではなかったと心から思うよ、綺礼』

恭しく頭を垂れながらも、綺礼は周囲に気取られないように、肺に蟠った空気を鼻から吐き出し、目線を伏せた。要はこれ以上勝手なことをするな、という釘差しだろうが、時臣の人格を考えるに、綺礼の身の安全を祈る気持ちも本心からなのだろう。下手を打てば、アーチャーかシャドウランサーに殺されてもおかしくはなかったのだから。だけれども、その祈りは綺礼にとって素直に喜べるものではなかった。時臣の頼みに

了承で応えるということは、今後、綺礼が衛宮切嗣の前に立つことは難しくなる、ということだ。アサシンの運用に関しても、以前のように自由にはいかなかった。

これでは本当に、ただ時臣のために尽くすだけの道具と変わらない。と、そこまで考えたところで綺礼は己の考えに驚いた。此度の聖杯戦争において、綺礼に与えられた使命は時臣のサポートだ。それをこなせるならば、それ以上に望むものなどなかったはずなのに。

ふいに、綺礼の肩に手が置かれた。見上げると、石動が微かに頬を緩めていた。まるで、お前の気持ちは理解しているよとでも言わんばかりに、しかし誰にも悟られぬように、石動はにっと微笑んだ。

日は西に傾き、ぼつぼつと街の街灯に光が灯り始めた頃、まだ小学生に上がったばかりの遠坂凜は、ひとり新都の冬木駅に到着した。駅前の広場に足を踏み出した凜は、思わずその足を止め、周囲を見渡した。見慣れた昼間の景色とは打って変わって、薄暗い夕闇に沈みかけた冬木の街は、六歳になったばかりの凜の目にはひどく気味悪く映った。

「昼間とぜんぜん違う……すごくイヤな感じ」

ましてや、今は凜の父たる時臣が、この街で戦争を行っている最中だ。街中で行われ

ているのは魔術師同士の抗争、英霊同士の血で血を洗う激闘。聖杯戦争が執り行われている間、時臣は家族全員を妻、遠坂葵の実家である禅城の屋敷へと避難させていた。

聖杯戦争の驚異を知らぬ凜ではないし、時臣からは戦争が終わるまで冬木に近付くことは固く禁じられていた。けれども、凜には聖杯戦争の存在を理解しているからこそ、責任感があつた。

「コトネ……お願い、無事でいて」

首にかけた魔力計を強く握り締めて、凜は誰にともなく独りごちる。

今日、凜の友人であるコトネが、学校に姿を見せなかつた。担任の教師は病欠だと言っていた。心配した凜はコトネの家に電話をかけて、コトネの身になにかが起こっていることを悟つた。

コトネの両親曰く、昨日からコトネは自宅に帰っていないのだという。

凜は、コトネが親の言いつけを破つて外泊するような少女でないことを誰よりも知っている。真面目だが気が弱く、いつだつて凜に頼り切りだつたあの少女が、親にも友にもなにも告げずに姿を消すことなど、尋常ではありえない。

冬木に近寄ることも、夜に出歩くことも、遠坂家では禁じられていたが、友であるコトネが凜の助けを待っているのだとすれば、なにもせず手こまねいているわけにはいかない。友を思い、眠れぬ夜をなにもできぬままに明かすことは凜にはできなかつ

た。

きつと、明日には両親からきつい叱りを受けることだろう。けれども、凧は、既に腹をくくっていた。決して私利私欲のため、恥ずべき目的のために禁を破ったのではない。誇り高き遠坂の一員として、友を救うために凧は屋敷を飛び出したのだ。

「……なにこれ？」

凧はさつそく手持ちの魔力計を開いて、そしてその異常な反応に当惑した。

父、時臣から凧の誕生日に贈られた魔力系は、常に強い魔力を放っている方角を指し示してくれる簡単な魔導器だ。冬木市に立てば、この魔力計がなんらかの怪異が起こっている場所を指し示してくれると思っていた。だけれども、実際に凧が見た魔力計は、針自体が錯乱したかのようにぐるぐると渦を巻いて、めちやくちやな方向を指していた。これではアテにならない。

「こんな反応見たことない。そこら中に魔力の痕跡があるっていうの？」

途方に暮れた凧だったが、ともあれいつまでも駅前に留まっていたでは話にならない。日の沈みかけた町中に、保護者もなくひとり佇む凧の姿を訝しげな目で見る人々もちらほらと現れ始めた。

コトネを探さなければ。それだけを思い、凧はアテもなく駆け出した。

通りを少し外れるほどに、人通りはまばらになっていった。冬の陽は素早く西へ沈

み、夜の闇が訪れたとはいえ、時刻はまだ夕刻過ぎだ。だというのに、街のテナントのおよそ半数はシャッターが降ろされている。見慣れた昼間の景色とは打って変わった町並みに、凧は薄ら寒い違和感を覚えた。

凧は知らぬことだが、夜の冬木市には厳戒態勢が敷かれていた。新都の倉庫街と冬木ハイアットで立て続けに起こった爆破テロは、連日冬木の報道を騒がせている。さしもの聖堂教会といえどもサーヴァントによる戦闘の爪痕を完全に隠蔽することは叶わず、連続爆破テロ事件として処理するほかなかったのだ。警察は市民に夜間の外出自粛を呼びかけ、賢明な民間人はそれに従っていた。

明らかに平時とは様相を違えた薄暗い街をおっかなびつくり進む凧は、街の路地裏に差し掛かったところで聞こえた不自然な物音に足を止めた。がたんツ、と大きな音を立てて、なにかが落下したような音だ。

「なに……?」

心の中には既に恐怖心が広がっているというのに、こういう時、真つ先に逃げるといふ思考に至らないところが、凧という少女の特異性だった。おそろおそろといった足取りではあるものの、路地裏の奥へと歩を進める。

「ツ、いつてエ~~~~……ツんだよ(´;ω´)?」

水色のポリバケツ型のゴミ箱をなぎ倒して、中身を散乱させながら、男が自らの腰を

さすりながら身を起こした。青いスカジャンを羽織った、茶髪の男だ。頭頂部は奇妙な形に編み込まれている。凜にはそれがエビフライのように見えた。

どこかから落下したのであろうその男は、暫し表情を苦痛に歪めながらも周囲を見渡し、凜の姿を認めるや、軽く手を掲げて、不器用ながらも笑顔を見せてくれた。

「よ、よう」

「あ、あなた誰!?　なんでこんなところにいるの!？」

「俺か。俺は万丈……万丈龍我ってんだ!　なんでこんなところにいるのかは、俺が聞きてエ!　つてかどこだここ!?!　知らねエぞこんな場所!　戦兎はどこいったー!?!」

ひとり喚き立てる男を見て、凜は微かに危ない男なのではないかと訝しんだ。けれども、それ以上に、困っているのなら自分が力にならねば、そういう思いが先行した。こんな時こそ、常に余裕を持って優雅たれという遠坂家の家訓を実践する時だと、凜は思った。

「ええと、まず、ここは冬木市。で、私は遠坂凜。まずは、あなたの話を聞かせて貰える?」

新都の公園のベンチに腰掛けて、万丈は己の記憶を辿った。

いつも通り、戦兎の開發したガラクタをフリーマーケットで売り捌き、大した売上も得られずに根城と定めた工場へと戻った万丈が見たのは、パソコン画面の前で意識を失い倒れている戦兎の姿だった。

揺さぶつても怒鳴つても起きない戦兎に業を煮やした万丈は、パソコンを起ち上げ直したところで、モザイクに覆われたような奇妙な画面を目撃し——次の瞬間には、この街でゴミ箱の中に突っ込んでいた。幸いにも遠坂凜と名乗る少女が万丈にこの街の名前を教えてくれたが、冬木などという街は聞いたこともない。いや、例えこの街の名前が冬木でなかったとしても、おそらく自分が住んでいる街以外の名称を、万丈は概ね知らない。街の名前を聞くことは無意味だった。

当惑した万丈は項垂れ、頭を抱えた。隣に座った凜が声をかける。

「でも、ちょうどよかったわ。万丈さんのお家のことはわからなかったけど……今こうしてここで出会えたことは、きっと意味のあることだと思おうの」

「あん？　意味イ？」

「そ。こんな時間に子供ひとりじや、落ち落ち歩いてもらえないもの。行くアテがないなら、一緒にコトネを探すのを手伝ってくれない？　終わったら、お母様に万丈さんのことも相談するわ。お家に帰れなくなってしまうって。そうすれば、きっと万丈さんの問題も解決すると思うの」

凜はなんの迷いもなく、万丈の顔を正面から見つめて高らかに提案した。

お母様云々は置いておくとして、昨日から帰宅していない友人を探すために、親の言いつけを破って単身この街にやってきたという経緯は聞いている。勇気のある少女だと、万丈は素直にそう思い、感心した。

「ああ、心配しないで。もしも危険な目に遭いそうになったら、貴方だけ逃げてくれても大丈夫。ただ、街を歩く間、隣に保護者がいないと怪しまれるし、最悪、警察に見つかつたらすぐに連れ戻されちゃうかもしれないですよ。だから大人に隣にいてほしいの」

「ちよ、ちよつと待て、なに言つてんだお前、逆だろ！ 子供だけを危険な目に遭わせられるかつての。友達を探すなら、俺が最後まで付き合つてやる！」

左の掌に右の拳を打ち付けて、万丈は立ち上がった。

万丈は単純だった。見知らぬ土地でひとり当惑する万丈に街のことを教えてくれた心優しい少女が、いま自分の身の危険さえ顧みず、友のためにひとり立ち上がるうというのだ。万丈にとつて、既に自分の置かれた状況などは関係なかった。ただ、この少女とその友人を無事家に帰してやりたい、今の万丈にあるのは、ただその一心だった。

「ううん、私なら大丈夫だから。それに、私とあんまり長い間一緒にいるのはお勧めしないっていうか……」

「はア？ なんてだよ」

「そ、それは……詳しくは言えないんだけど。きつと、この街で悪いやつに目をつけられるとしたら、万丈さんよりも、私の方だと思うから……」

ベンチに腰掛けた少女は、目線を伏せて口ごもる。なにか、事情があるのだろうか。予測できたが、どういった事情かはわからない。わからないが、別に大した問題ではないと万丈は思った。

凜と目線の高さが合うように腰をかがめた万丈は、その小さな肩を力強く掴んだ。

「いいから、心配すんな！　こう見えても、俺は強エんだ。悪いやつなんか、俺がぜんぶブツ飛ばしてやる！」

「もう、わからず屋ね！　万丈さんがいくら強くても、この街は今……」

その先を、凜は口にしようとはしなかった。なにかを言いかけて、ハツとして口をつぐむ。凜の瞳に強い意思を感じ取った万丈は、すつくと立ち上がって息を吐いた。周囲を見渡すが、まだそう夜も更けていないはずなのに、異常に人通りが少ない。

この少女は、未だ小学校に上がったばかりの幼さながらも、友のために立ち上がるような強い心の持ち主だ。今、この街になんらかの異常が発生しているのだろうか、凜は万丈に負担をかけまいと強情に口を閉ざしているのだ。

「ああそうかよ、だったら勝手にさせて貰う！　お前がなんと言おうと、俺は絶対エーお前とその友達を家に送り届けてやるからな！」

「だ、か、ら……ッ！」

言いかけたところで、凜はまたしても口を閉ざした。訝しんで眉を潜める万丈だったが、凜の視線は万丈を捉えてはいない。その瞳が見開かれる。

振り向いた万丈が見たのは、

「なん、だコイツら……！」

ヒトデのような体に、タコの触手を併せ持つ異形。これまでに万丈が戦ってきたどんな敵とも異なる、真正正銘の化け物が群れをなしてこの公園に集結していた。異形が、ピチャピチャと薄気味悪い舌舐めずりを響かせながら、ふたりを取り囲む。

凜は首にかけたペンダントを握り締めたまま、硬直している。女の子をひとり抱きかかえて逃げ出すには、あまりにも周囲を取り囲まれ過ぎていた。

「いったいどこから湧いてきやがった……！」

ぼやきながらも、彼方から機械音声の小さな咆哮を響かせながら飛来した小竜型の自律行動型ユニット、クローズドラゴンを掴み取り、フルボトルを装填する。腹部にビルドドライバーを押し当てると、ベルトがひとりでに万丈の腰に巻き付いた。

「わ、私のせいだ……きつと、私を狙って」

凜は、うわ言のようになにかつぶやいていた。

この責任感の強い少女がなにか隠し事をしていることは、万丈にもわかっている。

きつと凜にはこの化け物どもに狙われる理由があつて、万丈を巻き込んでしまったことを深く後悔しているのだらう。でなければ、私のせいなどという言葉は出てこない。それを、理性ではなく、心で感じ取った。

「デメエら……」

万丈はもう一度、並み居る異形の群れに一瞥を送る。

こんな小さな女の子を怯えさせ、そのか弱い命を狙う卑劣さに、虫酸が走る思いだった。心の奥底から湧き起こり燃え上がる熱い闘志の炎を、万丈は抑え込むすべを知らない。

戦兎は、もう戦うための力は必要ないと言った。平和になった新世界に、仮面ライダーの力は必要ない、と。だけれども、今、目の前に助けを求める少女がいるのならば、話が違ってくる。

仮面ライダーは、ラブアンドピース愛と平和を守るために戦う戦士の名だ。例え敵がいかな大群で押し寄せとも、今万丈がこの手に持つ力は、守るために与えられた力だ。

ならば、迷う理由はどこにもない。

「戦兎……お前がくれた力で、俺はもう一度戦う。力を貸してくれ……」

今はいない友を胸に思い描き、万丈は変身待機状態のクローズドラゴンをビルドドライバーに叩き込んだ。

ビルドドライバーに備えられた円盤、ボルテックチャージャーが煌々と蒼の輝きを放つ。ベルトのレバーを回転させると、ドライバーから伸びた試験管が前後から万丈を挟み込むように生成された。内部を蒼い龍クローズの成分が駆け巡ってゆく。

戦う準備は、万端だった。

『Are You Ready?』

「変身ッ！」

掛け声とともに、ドラゴンの成分によって形成されたハーフボディが前後から万丈の体を挟み込むかたちで覆い隠した。白煙が噴出する。

『WAKE UP BURNING!』

『GETT! CROSS—Z DRAGON!』

『Yeah!!』

けたたましい電子音声をかき鳴らしながら、最後に龍の頭部と翼を模したアーマーが装着される。身を包む炎を振り払ったとき、万丈の姿は仮面ライダークローズへの変身を遂げていた。

「えっ……ば、万丈さん、その姿、なんでっ」

「凜。お前は俺が守る。なにも心配すんな！」

驚愕し口元を抑える凜にへと振り返った万丈は、ふっと小さく笑みを浮かべた。燃え

る蒼龍をかたどった仮面で表情まで見えはしないが、少しでも凜が不安を振り払うことができたなら、それでいい。

ドラゴンボトルの成分を最大限活用するため、戦兔が造ってくれた剣型の専用武器^{ピートクローザ}を振りかざし、クローズは付近の軟体生物へと斬りかかった。手応えは、軽い。容易く斬り裂かれたその体から血飛沫を舞い上げ、海魔は断末魔の悲鳴を上げる。

「オラオラオラオラアッ！」

クローズの勢いは止まらず、並み居る海魔の群れを片つ端から斬り倒していった。初期スマッシュよりもよほど弱い。どれほどの怪物かと思いきや、その実態はただの標的だった。万丈ははじめ、そういう印象を抱いた。

異常に気付いたのは、一方向の海魔をすべて薙ぎ倒した頃だった。クローズに斬り捨てられた海魔の遺体が蠢き、その断片から新たな海魔が姿を現すのだ。さしもの万丈も目の前で起こっている出来事に驚愕し、戦いの手を止める。

「ゲエ、マジかよ!? なんなんだよコイツらは！」

一瞬立ち止まったものの、今は凜の安全を確保することが先決だ。断片から湧き始めた海魔の群れを剣で薙ぎ払いながら、クローズは凜のいるベンチに戻ると、その小さな体を抱きかかえて走る。

「ちよつと目エ閉じてろ！」

叫ぶや否や、眼前に立ち塞がった海魔の一匹を叩き斬る。血飛沫を舞い上げる海魔から目を背けるように、凜は目と口を固く閉ざした。海魔の群れを掻い潜って、クローズは公園の入り口まで駆け抜けると、その小さな体を地面へと下ろした。

少女の小さな頭に掌を乗せて、軽く撫でる。

「いいか凜、お前はここから動くなよ。悪いやつは、俺が全部ブツ倒してやるからな！」
 「あ、あなた、サーヴァント？ それとも魔術士!? なんにせよ、アレは魔力で動いてる！ やみくもに倒したってダメよ！」

「ヴァーダントだか魔法使いだか知らねエが、だつたら幾らでもやりようはあんだよ！」
 振り返ったクローズは、ベルトからドラゴンフルボトルを抜き取り軽く振ると、そのままビートクローザーの中央部のスロットに装填した。刀身を彩るイコライザー型のメーターが輝き、電子音を響かせる。

『SPECIAL CHUN!』
 「今の俺は……ッ！」

そのままグリップを二回引く。装填されたドラゴンボトルのエネルギーがビートクローザーの内部へと充填され、出力が跳ね上がる。イコライザーのメーターに灯る輝きが、グリーンからレッドラインまで一気に上昇する。

『MIRION SLASH!』

「負ける気がしねエー……ッ！」

ビートクローザーの刀身が、蒼の炎を纏って煌めいた。それをぶんと振り抜くことで、刀身が纏った蒼炎がごとと唸りを上げて海魔の群れへと殺到する。

クローズの放った龍ドラゴンブレスの息吹は尽く海魔へと命中し、燃え上がる蒼炎は海魔の血飛沫を瞬く間に蒸発させた。斬り裂かれた断片にも炎は燃え広がり、そこから再生した海魔にも炎は連鎖する。火の海の中、再生すると同時に焼き尽くされた海魔は、次々と息絶えていった。

「へへっ、やっぱ思ったとおりだ！」

口ではそう宣っているものの、その実、決して深く考えての行動ではなかった。斬つて駄目なら燃やしてみようと、ただ単にそれだけの思考だ。炎に巻かれながらも生き延びた海魔を、駆け寄ったクローズの刃が断ち切る。直接の死因が斬撃でも、炎の中にあつては増殖もできず、海魔は沈黙する。

「うしッ、やったぞ、凜……ッ!？」

振り返った瞬間、万丈はクローズの仮面の下で、驚愕に表情を歪めた。

クローズが公園の入口まで逃したはずの凜は、黒衣を纏った長身の男に抱きかかえられていた。男の周囲へ、別方向からクローズが倒したものと同様の海魔が大挙して押し寄せてくる。

凜は男の大きな手で口元を覆われ、悲鳴すら上げられない状態で、なにかを訴えるようにクローズを見つめていた。凜が人質に取られたかたちになっていることを理解し、クローズは叫んだ。

「テツメ、汚ねエぞ！ 凜を離しやがれッ！」

「おお、ジャンヌ。もう暫しの辛抱ですよ、我が聖処女よ。生贄はたと用意しておりま
すゆえ……！」

「はア!? なに言ってるんだテメエ！」

「ジャンヌ、嗚呼ジャンヌよ。再臨の時は今来たれり！」

男はなにごとかを喚いているが、それが凜やクローズに向けられたものでないことは明白だった。ぎよろりと剥き出しに見開かれた瞳は、錯乱したように瞳孔が右往左往している。正常な会話が成り立つ相手とは思えなかった。

もう一度ビートクローザーから攻撃を放とうかとも思ったが、下手をすれば凜に命中しかねない。遠距離攻撃は諦め、駆け出したクローズを阻むようにどこからか湧いて出た無数の海魔が押し寄せる。

「うおおおどけエツ、邪魔すんなアーツ！」

もはや敵の増殖能力などは万丈の頭になかった。怒声を張り上げながら、クローズは海魔の群れを斬り伏せる。戦う力を持たない凜を狙う、その卑劣さに激怒した万丈は、

怒りに突き動かされるままに目についた海魔を片っ端から叩き斬った。何度復活しようが、凧さえ取り戻せばいいと、そう考えていた。

だけれども、その考えは、海魔の群れを相手取る上ではあまりにも浅慮だった。数瞬遅れて、万丈はそのことに気付く。

視界を埋め尽くすほどの海魔の群れを手当り次第に斬り殺し、死んだ海魔は増殖して復活する。クローズの手足に絡みつく触手の数が、クローズの対処しきれる範囲を超えるまでに、そう時間はかからなかった。

「クツソ……、なんだよ、テメエら、どけよツ、凧が……い！」

ついに、前進を続けるクローズの手足が、海魔によつて絡め取られた。身動きが取れない。考えなしに斬り倒し続けた結果、気づけばクローズは、増え続けた海魔によつて攻撃も前進もままならぬ窮地へと追い込まれていた。

「離せツ、くそつ……凧ツ、凧……ツ！」

名を呼びながらも一度顔を上げた時、クローズは見た。

「——ツ！」

凧がその大きな瞳いっぱいにたたえた涙をつうと零して、男の手に塞がれ満足に動かせぬ口で、なにごとかを叫んだのだ。

「な……なツ」

それが、凜からの最後の別れの言葉であるかのように、万丈には感じられ、絶句した。凜を連れた男の後ろ姿は、押し寄せる海魔の群れに視界を覆われ、ついにその姿はクローズの位置から見えなくなった。すぐに追いかけたかったが、手足に絡みついた海魔が邪魔で、即座に行動することができない。

「う……おおおおああああああああああああああ——ッ!!」

怒りとも悲しみともつかない絶叫を、万丈はクローズの仮面の下で叫んだ。程なくして、クローズの手足に絡みついていた海魔の群れは姿を消した。

クローズの体を食い破ろうと、この体に何度となく牙を突き立てられた。けれども、プロジェクト・ビルドによって造られた装甲は、ただか海魔ごときの牙を通しはしない。結局海魔はクローズを傷付けること叶わず、主である長身の大男が去ったことで、海魔どももいずこかへと姿を消したのだった。

クローズは、膝から崩れ落ちた。

装甲が消失し、生身を晒した万丈は、今しがた自分たちを襲った出来事への理解が追いつかず、茫然自失といった様子で呆けるしかできなかった。

「凜……」

少女の最後の表情が、脳裏をよぎる。

少女の流した涙が、フラッシュバックする。

あの時、あの最後の瞬間、心優しい少女はなにを言おうとしたのか。

「あいつ……あいつッ、最後の最後まで……！」

助けて、とか。死にたくない、とか。そういう類の言葉を告げられたのではない。

いつ自分が殺されてもおかしくない状況で、恐怖に押し潰されそうな心を奮い立たせて。涙に濡れた瞳で海魔に囚われたクロースを見つめて、幼い少女は叫んだのだ。

——あなたは、逃げて！

狙われているのは自分だから、自分さえ犠牲になればそれでいい。それで、万丈はもう襲われることはないから、と。

きつとあの正義感の強い少女は、そんなことを考えて、最後の最後まで万丈の身を案じて叫んだのだ。自分の身がどうなるうが、巻き込んでしまったのは自分だから、と。きつと、そんなことを考えていたに違いない。

その事実が、万丈にとっては、この上なく情けなかった。

「くッ……う、おとおおああああッ！」

腹の底から漏れる嗚咽を堪えきれず、再び叫んだ万丈は両手の拳を地べたに叩きつけた。目頭がじわりと熱くなる。

守ると言ったのに。必ず家まで送り届けると見得を切ったのに。

なにも約束を果たせず、あの心優しい少女が連れ攫われるのを黙ってみていることし

かできなかつた。思えば、凜はきつと、こういうことが起こるとしたら、狙われるのは自分であるとわかつていたのだ。

万丈の瞳に、もう一度闘志の炎が宿る。このままでは、終われない。

「ちくしょう……、ちくしょう……見捨てて、たまるかよッ」

あの少女が最初に口にした通り、危険への対処を凜ひとりに任せて、万丈だけが逃げおおせることなどあつてはならない。

絶対に助け出す。手遅れになどさせはしない。女の子ひとり守れないようでは、今後万丈は二度と仮面ライダーを名乗れない。

万丈は立ち上がり、眈を決して駆け出した。

「待つてろよ、凜……！俺が絶対エ、助け出してやるからな……！」

公園を飛び出した万丈は、誰にもなく、月夜に咆哮した。

「俺はッ、仮面ライダークローズだアアア……ッ！」

万丈の心のうちで蒼く燃え上がる正義の炎は、もう、誰にも止められない。見知らぬ冬木の景色をぐんぐんと追い抜いて、万丈はひた走る。

第11話「燃えろドラゴン」

見知らぬ冬木の街を走り回る万丈に、明確な宛ては存在しなかった。ただ、凜が連れさらわれたと思しき方角へ向かって走るだけだ。

万丈の目に映る街の景色に、あの異形の群れは存在せず、凜を連れ去った大男は影すら見せはしない。体力には自信のある万丈だったが、知らぬ道をがむしやりに走り続けるにも限界がある。凜の姿を見つけること叶わぬまま、何度目かの交差点に差し掛かった時、万丈は足を止めた。

両膝を手で支えながら、荒くなった息を落ち着ける。このまま真っ直ぐ進み続けるか、それとも右か、左か。どちらに進めば凜がいるのか、土地勘のない万丈にはまるで予想がつかない。それでも諦めて立ち止まることはできなかつた。もう一度顔を上げ、宛所なく走り始めようとしたその時、男の声が万丈を呼び止めた。

「ちよつと待てよ、万丈」

聞き覚えのある声だ。振り返った万丈が見たのは、かつて万丈が居候していたカフェのマスター——石動惣一だった。万丈は瞠目し、ふらつく足取りで数歩、歩み寄った。

「マ、マスター……なんでこんなところに」

「おいおい、寝ぼけてんのか万丈。俺だよ、俺」

嘲笑混じりの石動の声に、万丈は歩みを止めた。途端に、双眸をきつと尖らせて、石動惣一の姿を借りて現れた宿敵へと構えを取る。

「……テメエ、エボルトか」

「御名答。なんで生きてんだとか、なにが目的だとか、そういうくだらない質問は後にしろ。あのがキを救いたければ、今は俺の話聞け」

「ッ、凜を連れ去ったあの野郎のこと、なんか知ってんのか!」

気色ばんで石動へと掴みかかった万丈の手を、石動はさも煩わしそうに振り払う。

「ちよっ、おい、掴むなって……シワになったらどうすんだよ」

格闘家として鍛え上げられた万丈の腕力を容易く振り払い、しかし石動はなんでもなように掴まれた襟をはたいて伸ばしている。とぼけた表情をしてはいるが、この男が諸悪の根源、エボルトであることに間違いはない。

万丈は深く息を吸い、努めて冷静さを装った。

「で、結局テメエは凜の居場所を知ってんのか」

「ああ、知ってるとも。俺の仲間がとつくに見つけてる。あとはシャドウキャスターを倒して、あのがキどもを解放すりゃあ万事解決ってシナリオだ」

「あ、あん? シャドウ……なんだって?」

「ほら、お前が仲良く遊んでた女の子を誘拐した男のことだよ。ちなみにそいつの真名は——……ああ、いや。お前に話しても分かんねエか。やっぱ今のナシ」

「なんだテメエ、馬鹿にしてンのか!？」

石動がなにを言っているのかはよくわからなかったが、自分が馬鹿にされていることをなんとなく察した万丈は、とりあえず怒声を張り上げておいた。

「まあまあ落ち着けよ、そうカツカすんなって。今重要なのはそこじゃねえだろ」

万丈の周囲で弧を描くように数歩歩いた石動は、軽く万丈の肩を叩きながら言葉を続けた。

「お前はあのガキを救いたい。だが、シャドウキャスターの居場所がわからないからデタラメに走り回るしかなくて困ってる……、そうだな?」

「……お、おう」

「オーケイ。一方、俺はシャドウキャスターを始末したい。だが、難儀なことに俺にはヤツと戦えないワケがある。居場所を突き止めるまではよかつたんだが、やむにやまれぬ事情があつてねえ?」

ふだん散々馬鹿だ馬鹿だと罵られている万丈だが、ここまでヒントを散りばめられて、その意図を読み取れぬほど愚かではない。一拍遅れて、石動がなにを言いたいのかを察した万丈は、警戒心も露わに石動をきつと睨めつけた。

「まさか、テメエ……俺にそのシャドウなんかを倒せて、そう言いてえのか！」
「大正解ーッ！」

声を張り上げた石動は、勢いよく両手の人差し指で万丈を指した。

「今回に限って、俺とお前の利害は一致してる。だったら、そう悪い話でもないだろう？」

「それは……」

万丈は逡巡した。石動惣一の口車に乗ってよかつたことなど過去に一度もない。この男は、いつだって自分の利益のために他者を利用し、骨の髄までしゃぶり尽くしてきた。己の人生そのものをエボルトに利用されてきた万丈だからこそ、誰よりもこの男の悪辣さを理解している。だが、かといっていつまでもここで手をこまねいている訳にもいかない。こうしている間にも、凜の命は危険に晒されているのだ。

「凜……」

今も万丈の頭を埋め尽くす少女の名を呼び、懊悩を振り払うように、万丈はかぶりを振った。

まだ幼い少女が、恐怖を噛み殺して、万丈を氣遣って、涙を流していた。それを思い出した時、万丈の中からあらゆる懊悩は消え去った。

「わかつた。俺が野郎をブツ倒して、凜を救い出す。とつと居場所を教えろ」

「流石は万丈だ、そうこなくっちゃな」

石動は満足げに笑みを深めると、交差点から続く道の先を指で指し示した。

「このまま道なりに進めば川に行き当たると。川を見つけたなら、今度はデカイ排水溝を探せ。中へ入り、奥へ奥へと遡って進めば、そこにシャドウキャスターの工房があるはずだ」

「川沿いの、排水溝か……おいエボルト、今度は畏じゃねえんだろうな」

当然のように疑うが、石動はさしたる深刻さもなく肩を竦めて笑うだけだった。

「信用ないねエ……畏じゃねえよ。だが、危険であることに間違いはない。ま、俺の仲間も一応助けには入るだろうから、精々死なねエように上手く立ち回ることだな」

馴れ馴れしく肩を叩いてくる石動の手を振り払って、その目をじつと睨み付ける。石動はただ薄ら笑みを浮かべるだけで、その表情に変化はなかった。今は時間が惜しい。

踵を返して駆け出した万丈は、二度と石動へと振り返ることはなかった。

「そうだ、お前はそうするしかない。正義のヒーローが子供を見捨てるわけにはいかねエもんな？」

どんどんと小さくなってゆく万丈の背を見送りながら、石動は独りごちる。

万丈の手に令呪の赤いアザは存在していなかった。桐生戦兎は己のサーヴァントたるキャスターのスキルによる助力を得て神秘纏う英霊とも互角に渡り合っているもの

の、そういった加護のない万丈など、所詮は神秘の加護を持たない現代兵器の使い手ではない。

果たして、万丈がシャドウキヤスターとどこまで戦えるのかは、石動の興味の対象でもあった。シャドウキヤスターを無事倒せるならそれで構わないし、ここで負けて命を失うなら、それはそれで石動にとってデメリツトはない。

「ま、なんにせよ感謝するぜ、万丈。お前は本当に、俺のためによく働いてくれる」
さして熱心さもなく、石動は万丈が走り去っていった方向へ向けて謝辞を述べる。

神出鬼没のシャドウキヤスターの出どころは、街中に散会させた綺礼のアサシンを動員したところで掴みきれぬものではなかった。けれども、偶然というものは起こるものだ。

まず第一の偶然は、体内に上質な魔力を蓄えた遠坂の娘が冬木に来てくれたこと。魔力を求めて徘徊するシャドウキヤスターは、遠坂の娘に釣られて姿を表してくれた。

第二に、戦兎の巻き添えを食らってこの世界に取り込まれてしまった万丈が遠坂の娘を保護したこと。その上、神秘の秘匿もなにも知らない万丈は、後先考えずにクローズに変身し、公園で大暴れしてくれた。あれだけ派手に暴れれば、アサシンに気付かれぬ道理はない。

あとは、遠坂の娘という荷物を抱えたことで霊体化することもできなくなったシャド

ウキヤスターをアサシンに追跡させるだけで済んだのだから、当初思っていた以上に楽に事は進んでくれた。檀黎斗に一応万丈のことを報告して、あの二人が上手くシャドウキヤスターを仕留めてくれたなら、金輪際石動はあの気色の悪い化け物と対峙する必要はなくなる。それを思えば、気分も前向きになるというものだった。

「そんなじゃ、俺は俺の仕事に戻るとしますか」

鼻歌交じりに両手の指を組んだ石動は、頭上でぐつと伸びをしながら、のんびりとした足取りで歩き始めた。

遠坂凜をはじめ、大男に身動きを封じられいずこかへと連れさらわれながらも、それを好機であると考えようとしていた。身を竦ませるには十分すぎるほどの恐怖心をそれでも友を思う心で抑えつけようとしていた。この大男がコトネをさらった犯人とするなら、上手くすれば大男——シャドウキヤスターの根城を突き止めることができるのではないか。だけれども、そういった強い心や勇気と呼ばれる感情は、時間経過とともに摩耗し、縮小していった。

凜は意気地なしではない。友人を見捨てて自分だけ助かればよいと考えるような人間でもない。しかし、自らの命が危ぶまれる極限状況ともなれば、話が変わってくる。今や凜の本能は、友を救いたいという心とは裏腹に、けたたましい音量で警鐘を響かせ

ていた。

「なんともはや、可憐ながら瑞々しい生命力に溢れた少女の生肉か……今こそ！ 君たちという尊い犠牲を糧に、聖女ジャンヌは再びこの地に降臨なされる！」

暗闇の空間にシャドウキヤスターの裂帛の大声が反響する。ぴちやぴちやと、這いずるような、舐めるような湿った物音が、一層苛烈さを増した気がした。

凜の目には、もうなにも映ってはいない。光源のひとつも存在しない地下の最奥部にあっては、目を開けたところで瞳を閉じたときとやら変わりはしない。それでも周囲の状況を理解しようと感覚を研ぎ澄ませるが、鼻をつく異臭と、耳を弄する水音以外に成果は得られなかった。

触感頼りで周囲をまさぐれば、凜以外の子供と思しき肌の感触はあった。しかし、触れたところで反応はない。生きているのか死んでいるのか、それとも気を失っているだけなのかは判然としないが、それを知ろうとすることそのものが恐ろしいことなのだ。凜は悟った。ここへ至ってようやく、凜は己の愚かしさを悔やんだ。

たかだが六歳になったばかりの少女に、戦地となったこの冬木でなにができれば、寶石魔術には多少の心得があれば、それで戦ってゆける程度であれば、父をはじめから冬木への立ち入りを禁じたりはしない。あの誰よりも完璧な魔術師である遠坂時臣でさえ、この街においては常に死の危険と隣り合わせの状況に立たされている。それが現

実だ。

今にも泣き出しそうな心を、それでも精一杯の強がりでも抑えつけ、奥歯を噛み締めて暗闇の中身を縮ませる。もう、周囲の子供たちを連れ出して一緒に逃げ出そうなどという気持ちはすっかり鳴りを潜めていた。

「嗚呼！ 未だ権力者たちの業火に晒され、永遠の苦痛を味わい続けている我が麗しの聖処女よ……！」

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ。男の足が水に濡れた床を踏みしめ、水音を鳴らす。男は誰に聞かせるでもなく、ただひとり喚き続ける。

「少女の身でありながら祖国を救うため、ひたすら矮小な自身の弱さと、欲深な民衆たちの叫びを胸に秘めつ、神を信じ！ 国を信じ！ 正義を信じ！ ついに偉業を成し遂げたその報酬が、ありとあらゆるものからの裏切りだった彼女を！」

凜には、男がなにを言っているのかまるで理解できなかつた。恐怖から逃避しよう、空間中に響き渡る声を聞くまいと両手で耳を塞ぐ。それも、男の特大の音量の前には意味をなさなかつた。

「神さえもツ！ 嗚呼、彼女を救済の徒として利用した神さえもツ、彼女の叫びに応えなかつた！ その死地でさえ！ 主にすべて捧げると微笑み、天に祈りを捧げた、あまりにも愚かな、あまりにも聖なる乙女！ その彼女の魂が煉獄にいるのなら、私が救いゆ

かず誰が救うというのかッ！」

男の叫びに応えるように、ごうと唸る炎の音が凧の耳朶を打った。

燃え上がる蒼炎が、下水道の奥でゆらめいて見える。それは暗闇の中にゆらめく人魂のようにも見えた。けれども、凧には分かる。あれは、そんなものではない。

「……………凧ッ、どこだ！　いるなら返事しろ！」

「あ、ああ……………そんな」

思わず、凧は口元を抑えた。

彼方から聞こえるのは、どこまでも短絡的で、後先考えずに突っ走る、暑苦しい男の声。死すら覚悟しつつあった少女の心に、その優しい声もたらず効果はあまりにも絶大だった。

凧の大きな瞳から、堰を切ったように大粒の涙が溢れ出した。後から後から、今まで我慢してきた涙が溢れ出す。もう、止まらなかつた。

「馬鹿……………馬鹿っ、逃げてって、言ったのに」

魔術に無縁の人間が、自ら危険へ身を投じることもない。だからこそ、誇り高き遠坂の一員として、せめてあの男だけは巻き込むまいとしたのに。遠坂の魔導を次ぐ者として、魔術師ですらない男に助けを乞うなど、あつてはならないことだと、凧の理性はそう理解している。だけれども、今この瞬間、凧の心を満たしたのは、そんな建前ではな

かった。

「万丈さん——！ 私は、ここににいるわ！」

未だ聖女とやらの善性を謳うシャドウキャスターの世迷い言をも掻き消さん勢いで、凜は裂帛の叫びを響かせた。

ありえざる懇願。遠坂として、許されざる願望。だけれども、幼い少女の願いは確かに届いた。

彼方に見える蒼炎が、はたと動きを止めた。剣が纏った蒼炎が、煌めく龍の仮面を照らし出す。危険を顧みず、凜を救うためだけにたつたひとり乗り込んできたヒーローに、その声は確かに届いたのだ。

「そこか……そこにいるんだな、凜ッ！」

仮面ライダークローズは、蒼炎に燃える剣を振り上げ、駆け出した。

道中に立ち塞がる海魔の群れの尽くを炎の剣で斬り伏せて、破竹の勢いで突き進む。クローズに斬り伏せられた海魔が、その異形の身に炎を灯して息絶えてゆく。燃え上がる炎が、クローズの進む道を照らし出す。

シャドウキャスターはクローズへと向き直ると、奇声を上げて憤怒を叫んだ。

「おのれエエエ！ その炎で再びジャンヌを苛もうというのかッ、この薄汚い匹夫ひつぶめがアア！」

空間に息づきわだかまる海魔の群れが、一斉にクローズへと躍りかかる。そのすべてをクローズの燃える剣が斬り裂き、振り払う。

炎に照らされたクローズの体は、赤黒い液体でどす黒く汚れていた。その姿が、ここに至るまで無数の海魔を薙ぎ倒してきたことを証明していた。その醜く傷ついた体を、誰が愚かだなどと誇ることができようか。

凜は祈るように胸にかけた魔力計を握り締めた。

結論として、エボルトの案に乗ったことは間違いではなかったといえる。

下水道のそこかしこに息を潜める海魔の群れを片っ端から叩き斬り、再生など許す間もなく燃やし尽くして、万丈龍我は——仮面ライダークローズは凜のさらわれた地下貯水槽へとたどり着いた。

一切の光源のない暗闇の中ではあるが、ライダーシステムの視覚センサーをもつてすれば行動に支障はなかった。いかな暗闇であろうとも、どこにクローズのシステムは敵が潜んでいるかを的確に感知し、装着者である万丈にフィードバックしてくれる。ビートクローザーに宿る蒼炎は、先刻の海魔との戦闘で得られた戦闘データを元に、クローズのCZシグナルが自動的に選択した戦闘方法だった。

今、クローズの目の前に凜をさらった張本人、黒いローブに身を包んだ大男、シャドウキヤスターが佇立している。その背後には、儀式の祭壇を模したのであろう高台に乗

せられた凜を中心に、同世代の幼子が複数人。高台を取り巻くように海魔の群れが蠢いている。

クローズは燃える剣を構え、シヤドウキヤスターを睨め付ける。

「テムエがシヤドウなんとかか」

「なんと……おお、なんと醜悪なる面構えかッ！ 邪童を身に纏いし悪鬼の化身すらも、我が聖女を苛まんと剣を執る！ 何故だ!? あれだけの裏切りを受けたジャンヌを、神の庭からすらも追放された哀れなジャンヌを、貴様らはそれでもまだ貶め足りぬとッ!?」

「ああ!? なに言ってるんだテムエ!?」

難しい言葉をたくさん使っている様子だが、万丈にはシヤドウキヤスターがなにを言っているのかがまるで理解できなかった。自他ともに認める筋肉馬鹿を甘くみてはいけない。

シヤドウキヤスターは万丈の知能レベルなど斟酌する様子もなく、両手を掲げ、滔々と歌うように続ける。

「宜しい！ ならば我らが味わった絶望と慟哭がどれ程のものか！ 汲めども絶えぬ我が憤怒の波濤で悪しき邪童をも調伏せしめ、ジャンヌを見殺しにしたすべての民衆どもへと知らしめてやらねばなりませんまい！」

「な……ッ」

万丈は瞠目した。咆哮したシャドウキヤスターの体が捻れ、崩れ始めている。さながら、ゲーム上でバグに侵されたキャラクターが、その表示データをピクセル単位で狂わせるように。シャドウキヤスターの体の随所が色を変え、形を変え、原型を崩壊させてゆく。

「お、おい、なんかジグジグしてんぞ、お前！」

バグったポリゴンの塊と化したシャドウキヤスターのピクセルが、バラバラに崩壊しながら周囲の海魔の群れを呑み込んでゆく。海魔は抵抗を示さなかった。シャドウキヤスターの体を構成していたピクセルデータに振れるや、その身を同じくピクセルの粒子へと変換し、海魔とシャドウキヤスターの体が攪拌されてゆく。

「凜……！」

「ば、万丈さん！」

踏み出そうとしたクローズの足元へと、禍々しくピクセルデータの波が押し寄せる。今や貯水槽いっぱいに広がったシャドウキヤスターの残骸は、後退りする凜にも迫る。けれども、貯水槽を満たすバグピクセルの海は、凜のいる高台の上までその水かさを増すことはなかった。

「凜、お前はそこから動くな、いいな！」

クローズに指さされた凜は、こくこくと勢いよく頷いた。

シャドウキヤスターの分解データは、貯水槽に群れをなす海魔に作用した。最前まで触手をうねらせて奇声を上げていた海魔たちの動きが一様に止まる。一瞬ののちには、その体を捻り、分解させてゆく。やがてすべての海魔はピクセルの海へと溶けてなくなつた。

一度は形を失つたシャドウキヤスターに、新たな体の外郭ができる。貯水槽に広がつた海は、再び形を成して、ゆつくりとその巨軀の鎌首をもたげた。

「マ、マジ……かよ」

巨大な敵の頭部と思しき箇所を、クローズは見上げ、絶句する。眼前に顕現したそれは、この地球上に存在するあらゆる軟体生物をないませにしたような巨大生物だった。二十メートルはあろうかという天井ギリギリまでその体軀を伸ばし、大小様々な触手を蠢かせている。巨軀のあちこちに眼球と口腔部を並べたそいつは、全身から粘土の高い体液を滴らせ、咆哮した。

「なんだよ、コレ……なにが起こってんだよ!？」

「ンなるほどオ……自分と同質のエネミーデータを餌として吸収し、巨大化を果たしたというワケか」

「おわっ!？」

突如背後から聞こえる声に、クローズは小さく跳び上がる。後方から白い装甲を身に纏ったオッドアイの仮面ライダーが姿を現した。万丈は、その姿に見覚えがあった。

「あ、あんた……あん時のー！」

かつて最上魁星が開発した平行世界移動装置に巻き込まれ、もうひとつの地球に飛ばされてしまった折に出会った仮面ライダー。現存する戦力ではダメージを与えられないネビュラバグスターに対するカウンターとして、その神の才能で『ビルドガシャット』を生み出し、宝生永夢らの窮地を救ってくれた天才、檀黎斗神だ。

「貴様はいつぞやの……そうか、貴様がスタークの言っていた男か」

「あん？　　つてことは、野郎が言ってた仲間つてのは……お前かあー！」

「ン仲間ではなアアい！　あんな無能と一緒にするなアー！」

クローズに指をさされたゲナムが、その手を上からはたき落とす。

「お、おう……そうか。なんかよくわかんねーが、ともかく今は味方つてことでいいんだよな、神ー！」

状況は見るからに逼迫しているが、万丈はひとまず見知った仲間の参戦に喜びを示した。かつてもうひとつの地球で力を貸してくれたゲナムならば、エボルトよりは幾らか信頼できる。

当のゲナムも、納得したように深く頷いていた。

「フフン……そうか、私を神と認めるか。よかろう、ならば精々戦力として使つてやる。私の足を引つ張るなよ、万丈龍我！」

言うが早いのか、仮面ライダーゲンムは剣を振り上げて駆け出した。

「お、おい、ちよつと待てよ！」

ゲンムに追従するようにクローズも駆け出す。二人の仮面ライダーを最初に迎えたのは、人ひとり押し潰してあまりある特大の触手による打撃だった。地面に叩きつけられる触手を、ゲンムとクローズはそれぞれ横合いへと飛び退って回避する。

「うおッ!」

すかさず蛇の頭部のような触手が迫る。クローズは、対応しきれない巨大な触手のみ回避し、絶ち斬れるものから蒼く燃えるビートクロザーで絶ち斬っていった。万丈は難しい思考こそ得意ではないが、感覚的な戦闘センスはズバ抜けている。この程度の速度でクローズを捉えることはできない。

触手を斬り払いながら前進し、時には断ち斬った触手の残骸すら踏み越えて、クローズは巨大海魔の本体へと距離を詰めんとひた走る。撃破した触手が再生する様子はないかった。

「なあ神、こいつは再生しねえのか!? 俺、前に戦ったときすっげー苦戦したんですけど!」

「フン、このサイズの化け物を暴れさせるとなると、己の存在を保つだけでかなりの魔力を消耗するはずだ。明らかにいちエネミーのデータ容量を越えているからな。そうすると、再生のための魔力リソースの確保も容易ではあるまい！」

「お、おう?」

「フハハハハハハハハハハッ、愚かなバグデータごときが、無駄に背伸びをするからこんなことになるのだア！」

貯水槽を所狭しと跳び回り駆け抜け、触手を斬り裂き前進しながらゲンムは説明する。クローズもまた同様に触手に対処しつつ、ゲンムの語る言葉の意味を考えようと思ったが、しかし二秒後にやめた。

「なに言ってるのか全ツ然わかんねエけど、とにかく再生はしねえってことでいいんだな！」

「まあ、はじめから貴様の理解力に期待などしていない。それでいいから、とにかく攻撃を叩き込めエ！」

「ヘッ、そーいうことなら……負ける気がしねエーッ！」

難しいことを考えるのは苦手だ。ただ、思ったことを思ったりとおりに行動し、目標距離までの最短距離を最高速度で駆け抜ける。それが万丈の本能が選んだ戦闘スタイルだ。

クローズは、ドラゴンフルボトルをビートクローザーに装填すると、素早くグリッブを引いた。電子音が鳴り響き、刀身のイコライザーが出力の急激な上昇を示す。剣が纏った蒼炎の熱量が跳ね上がる。

「うおおおらあああああッ!!」

怒号を上げて、クローズは触手の群れへと斬り込んだ。並み居る触手を燃え上がる炎の剣で斬り倒し、追撃すらも振り切つて、クローズは巨大海魔の傍らで縮こまるようにして震える凧の元へと駆け付け寄つた。

「ば、万丈さん……! ほんとに、ほんとにこんなところまで……っ」

「おう、当たり前だろ! 約束通り助けに来たぜ、凧!」

クローズを見上げる凧の瞳に希望の輝きが宿る。凧は目頭に溜まった涙を袖で拭い去り、立ち上がった。

凧の周囲で意識を失っている子供たちも、クローズのセンサーを通して見る限り、みな無事生きている。ただ気を失っているだけで、全員静かに寝息を立てていた。万丈は心の底から安堵した。

「よっしゃ、みんな無事だな! あとはコイツをブツ倒して、みんなで家に帰るぞ!」

「うん!」

凧が大きく頷いた。

もう一度敵へと振り返ったクローズ目掛けて、無数の触手が殺到する。その尽くを剣で断ち斬り、打ち返し、巨大海魔の攻撃に応戦する。

やがて、ひととき巨大な触手が鎌首をもたげた。クローズに攻撃を仕掛けても無駄だということを学習したのであろう触手の群れが、一瞬、動きを止める。疣いぼのように現れ出た無数の眼球が、一斉に凜たちを凝視した。

「お、おい、まさかッ」

飢えた獰猛な獣の如きその視線に、万丈は戦慄した。黎斗が言った通り、限界に必要なりソースの足りぬまま巨大化した巨大生物が、今まさに子供たちを餌と認識した瞬間だった。

慌てて振り返るが、後方の凜はまだ事態を飲み込めていない様子だった。光源のない暗闇の中、人間の目にこの化け物の姿が見えないのは幸か不幸か。錯乱せずに済む代わりに、凜は自分に及ぶ被害を認識できていないのだ。

触手が、一斉に凜を襲った。

「うおおおおおおおッ!!」

その触手のすべてを燃えるビートクローザーで叩き落とし凜を庇うが、巨大海魔とクローズでは手数が違う。触手の群れは凜のみならず、周囲で意識を失っている子供たちへとその矛先を向けていた。

「や、め、ろオオオッ！」

ビートクローザーを振り上げ、クローズは子供たちと巨大海魔との間に割って入る。はじめのうちは触手を斬り払うこともできたが、その場しのぎだ。自分一人を狙う触手に対応するだけならばどうとでもなるが、複数人の子供を一斉に狙われては、クローズひとりでは手に余る。

「——ッ!？」

触手の一本が、クローズの腕を絡め取るのにそう時間は掛からなかった。子供らへと伸びた触手を斬り払い続け、ついに手数が間に合わない判断し、クローズ自ら子供を庇うように触手へと飛び込んだのだ。利き手を絡め取られ、ビートクローザーを取り落とす。そこから先は早かった。次々と触手の群れがクローズへと絡みつき。ついにはあらゆる動きを封じられる。

地に落ちたビートクローザーは、クローズからのエネルギー供給を失い、その蒼炎を消失させる。あたりは再び深い暗闇に包まれた。

「ば、万丈さん! 万丈さん!？」

「だい、じょうぶだ……凜、俺が、必ず、助けてやるからな……!」

それでも、子供を心配させるようなことだけは、したくはなかった。

全身を引きちぎられそうな責め苦を受けながら、万丈はやせ我慢で笑ってみせる。次

いで、クローズの全長をゆうに越える巨大な触手が、上からクローズを殴打し、叩き伏せた。

「が……アツ」

装甲をコンクリートの地べたへとたたかき打ち付けた万丈は、仮面の下で盛大に呼吸を吐き出す。衝撃はクローズの装甲が緩和してくれたが、それでも全身へと伝播する痺れを完全に殺し切ることはできない。

巨大海魔が、咆哮する。

「ひっ……」

凜は後退った。無数の眼球が、今度はぎよろりとクローズを凝視する。今この飢えた巨大生物は、見事餌を捉えたのだ。

身動きを封じるべく念入りにクローズの体を絡め取った触手は、その蒼い装甲を逆さ吊りに持ち上げる。上下あべこべになった視界で、万丈は見た。

縦に大きく裂けた肉塊が、その割れ目に粘液をたつぷりと滴らせ、これより喰らうご馳走を前にそこかしこに生えた乱ぐい歯を蠕動させている様を。

叫び声を上げる余裕すらもなく、クローズの体はうねる巨大な肉塊にズブリと頭から呑み込まれた。蠢く肉塊がクローズの全身を体内に取り込むのに、さして時間は掛からなかった。

クローズとゲムムによって切断された巨大海魔の触手の断面が、ぽこぽここと泡立つ。触手の内側の肉を蠕動させながら、切断面からは新たな触手が映え揃った。次いで、傷付いた巨大海魔の本体がゆっくりと回復をはじめめる。

「まずいな」

さしもの檀黎斗神も、ゲムムの仮面の下で脂汗を浮かべていた。

クローズを取り込んだ巨大海魔が、全快とはいかないまでも、徐々に体力を快復しつつある。一度人間の味を覚えた巨大海魔は、もはや迷うことなく人を食い殺して巨大化を続け、やがてはこの仮想世界すら押し潰す存在になりかねない。

流石に地上に出れば時臣のセイバーか、冬木ハイアットを倒壊に追い込んだアーチャーの宝具であればこいつを始末することは可能なだろう。だが、それは最後の手段だ。檀黎斗神が創造した神聖なるゲームを、こんなバグ如きに穢されたという事実を残すことは、神としてのプライドが許さない。

「ここで我が宝具を解放するか……？ いや、しかし……！」

ゲムムは逡巡する。ゲームマスターとはいえ、宝具を発動すれば通常の英霊と同様に膨大な魔力を消耗する羽目になる。それで巨大海魔を屠れるならば迷わず発動するが、サーヴァントとして檀黎斗が保有する宝具は、そういう類の能力ではない。

事実として、足止めは叶うだろう。だが、この化け物を消滅させるには、攻撃力があ

まりにも足りていない。裁定者は、敵から受けるダメージを軽減することはできても、自分から与えるダメージはすべて等倍なのだ。攻撃有利判定は得られない。

「ええい……！」

結論として、黎斗は現段階での宝具の使用を断念し、駆け出した。

「たかがバグ如きが私のゲームを破綻させ得る存在になるなどオ……そんな馬鹿なことが許されてたまるものかアアッ！」

襲い来る触手をかわすため貯水槽を所狭しと駆け回りながら、黎斗は仮面の下で吠える。こういうことをするサーヴァントだから、黎斗は魔元帥ジル・ド・レエを召喚させたくなかったのだ。そのおぞましきは時計塔の君主が事細かに記録してくれた通りだった。

なにをするにしても、まずは触手の数を減らす必要がある。

ある程度触手を牽制しながら後退したゲムは、ベルトに装填されたガシャットを引き抜いて、己の剣、ガシャコンブレイカーへと叩き込んだ。キメワザだ。

『CRITICAL FINISH!!』

最前、クローズを叩き伏せたひととき巨大な触手へと狙いを定め、ゲムは跳び上がる。上段に構えたガシャコンブレイカーへとエネルギーが充填され、剣そのものが黒い稲妻を纏った。空中で触手と激突したゲムは、持てる臂力の全力でもって刀身を触手

に突き刺し、そのまま一気に降下する。海魔の肉を縦一線に引き裂いたのだ。演出上、空中に『GREAT』の文字が浮かび上がる。

「……………くッ」

そして、予想通りの結果に、黎斗はゲンムのは仮面の下で表情を歪めた。

今しがた引き裂いた海魔の肉の断面が、その肉をうねらせながら傷口を塞いでゆく。だが、回復は遅い。これ以上、海魔が魔力リソースを得る前に、回復力以上の攻撃を叩き込みたいが、手数が足りない。

巨大海魔は咆哮し、触手を一齐に舞い上げた。強烈な打撃の嵐がゲンムを襲う。その尽くを回避しながら、ゲンムは走る。

「まずい……………」

これにはさしもの黎斗も仮面の下で脂汗を浮かべた。

クローズを取り込んだことで人の味を覚えた触手が、今度は生贄としてさらった子供たちへと伸びる。黎斗はこの時、心底から狼狽した。この状況下で巨大海魔が更に回復量を底上げするようなことがあれば、いよいよ現状の戦力では太刀打ちができなくなる。

「や、やめろオオオ……………」

巨大海魔の触手が、遠坂凜の足を掴んだ。凜の悲鳴が空間に反響して響き渡る。遠坂

の娘ともなれば、魔力を求める海魔にとって絶大なりソースとなることは間違いない。「い、イヤ……嫌っ……」

凜は触手に引きずられ、最初は地べたへとしがみつくことで抵抗を示していたが、その腕も絡め取られ、程なくして凜はあらゆる身動きを封じられる。

黎斗もまた、吠え、走った。極上の魔力リソースである凜を、あの怪物に与えることだけは絶対にあつてはならない。だけれども、巨大海魔はゲムムの行く手を阻むように巨大な触手をうねらせ、その身を叩きつけてくる。どうあつても間に合わない。

「——お願い、助けて……万丈さんッ!!」

体を釣り上げられた凜が、最後の力を振り絞って、その名を呼んだ。

刹那、凜を捕食しようとした巨大海魔の動きがぴたりと止まる。

苦痛の奇声を上げて、巨大海魔は全身の触手をめちやくちやに暴れ回らせる。やがて、触手の内側から、ぼうと蒼炎が燃え上がる。

巨大海魔は甲高い絶叫を響かせ、全身をうねらせる。凜を掴んでいた触手を放り投げ、内側から全身へと燃え広がる蒼炎を振り払おうと悶え、暴れ狂った。

次いで、どこからともなく龍の咆哮が轟き、地下空間を揺るがした。

「なッ……ば、ばかな……」

ゲムムの仮面の下で、黎斗は瞠目し、己の目を疑った。

巨大海魔の胴体を食い破り、焼き尽くし、内側から蒼く燃える龍が姿を現したのだ。

東洋において神龍シエンロンと呼ばれ敬われてきたものに酷似した蒼炎の龍が、稲妻を迸らせて貯水槽の天井へと舞い上がった。龍は再度咆哮し、熱く燃え滾る龍の息吹ドラゴン・ブレスで巨大海魔の触手を焼き払う。とりわけ子供たちを襲おうとしていた触手の群れを念入りに焼き払うと、龍は天井付近でとぐろを巻いた。

全身から蒼と金の輝きを放つ炎の龍のあまりの神々しさに、その場の全員が目を覆った。

燃えるような魔力を滔々とその身に横溢させて、仮面ライダークローズは子供たちを庇うように巨大海魔の前に立ち塞がった。その腕には、空中に放り出された凜が抱きとめられている。

仮面ライダークローズの左手の甲にて、煌々と輝きを放つは赤き龍を描いた紋章。聖杯によって選ばれしものにのみ許される三面の令呪を確かにその手に刻み、万丈龍我は帰還した。

打ち寄せる波の音が、静かに万丈の鼓膜を揺らす。

薄く目を開けると、白み始めた黎明の空の下、万丈龍我は見知らぬ浜辺にひとり横たわっていた。意識には薄く靄がかかっており、どうして自分がこんなところにいるのか

は判然としない。

こんなところで寝ている場合ではなかったような気はするが、いったい何故、どうしてそう思うのかがわからない。

「――」

砂浜に両手をついて立ち上がる。周囲を見渡すが、右を見ても左を見ても、どこまでも砂浜が続いているだけだった。ならば海の向こうはと思ひ至るも、水平線は万丈の思考と同じように白く靄がかかつて見通せない。

しんと静まり返った静寂の中、寄せては返す波の音だけが絶えることなく音を奏でている。不思議と心地がよく、万丈は凧いだ気持ちで潮騒の旋律へと耳を傾ける。

「彼方ト・フイにこそ榮ロ・テイえ在りモ——遠い昔、余が夢想した情景だ」

振り返れば、そこに万丈をゆうに上回る巨軀の大男の姿があった。

燃え立つような赤毛に、炯々と輝く双眸。筋骨隆々とした巖いわおのような体軀が纏うのは、決して重武装過ぎぬ薄手の鎧。肩に羽織った真紅のマントが風に揺られて靡く。

圧倒的な存在感を放つその男に、しかし万丈は不思議と警戒心は抱かなかつた。

寧猛な獣すらも射殺さんばかりの厳しい眼差しで、男は海の向こうの最果てを夢想し、目を細める。敵意を持つて現れた者が、そんな儂い眼差しをするとは思えなかつた。

「あんだ、いったい……」

男は、うむ、と低く唸った。

「もうあまり時間がない。余がしてやれることもそう多くないのでな。よつて、問いはひとつだ。ひとつだけ、お前に問うてやる」

大男は丸太のような足で砂浜を踏み締め、万丈を追い越すと、靄がかつた最果ての海へと向き合つた。振り返ることなく、男は問う。

「お前はなんのために戦う。その力で、なにを成さんとする」

なにを問われるのかと身構えたが、そんなことは悩むべくもなかつた。

迷いながらも戦い抜き、仲間たちの助けを得ながらついで答えを得たのだ。今更そんなことで悩んでいては、仲間たちに笑われる。

「難しい理由なんてねえ。ただ、大切な人たちを守りたい。だから俺は戦うんだ！」

愛と平和を守るため。

そのために戦兎が造ってくれた力で、万丈は戦う。

仮面ライダーに込められた戦兎の願いは、いつしか万丈の願いになっていた。

「——ホオ、それだけか」

「それだけだ！ それだけで、俺は戦える！」

そのための勇氣なら、ここにある。

胸の内から湧き上がる熱い思いがある。

男は万丈に一瞥を寄越すと、そうかと一言を告げ、頷いた。

「なるほどお前の目指すものは王道にあらず。だが、お前の胸のうちに燦然と輝く英雄の氣骨を、余は確かに見届けた。そのお前が勇者として世に雄々しく名乗り上げるならば、余も王として相應の礼をもつて遇する必要があるう」

「な、なにを……つーかあんた、消えかけてんぞ!」

万丈の肩に節くれ立った大きな手を乗せた男の輪郭がぼやけはじめている。金の粒子となつて、男は少しずつ、形を失つてゆく。己の体が消失しようという瀬戸際で、男はさして深刻そうでもなく、頷いてみせた。

「うむ、そうなのだ。どうやら此度の余はじき消えゆく運命らしい。さだめしかしな、ただ消えるのも面白くはなからう。よつて我が靈基、少しの間お前に貸してやろうかと思つてな」

「えっ……貸してやる、つて……」

「お前には力が必要なのであろう? そのちつぽけなりとも氣高き願望を真に叶えんと望むならば!」

男は磊落に笑つて、未だ状況を飲み込めず右往左往する万丈の背中を力いっぱい叩きつけた。

「——つウツ!」

たまらず前方につんのめってよろける。万丈の背中のはほほ埋め尽くすほどの巨腕でもって繰り出された張り手だ。無理もない。

だが、同時に体に熱が灯るのを感じた。男の体は消えつつあるが、逆に万丈の体には力がみなぎってゆく。左手の甲に、熱を伴って赤の輝きが浮かび上がる。それにつれて、徐々に記憶が明瞭になってゆく。意識が覚醒に向かっているという実感があつた。

ふたりを照らす仄かな光が、次第に光度を増して空を白く塗り替えてゆく。もうすぐ夜が明けることは、感覚的にわかつた。男はもう一度笑つた。

「……さあ、もうゆけ。この世に正しく勇者たらんとするならば、まずはお前の助けを待つ幼子を、その手で救ってみせよ」

万丈は決然と頷いた。もはや忘れるべくもない。

自分の身の危険よりも、他者を優先し思いやることができる少女が、今まさに危険に晒されている。少女はあの時、万丈を信じ、その名を叫んだのだ。応える必要がある。

「ありがとうな、おっさん。難しいことはよくわかんねえが、俺が今なにをしなくちやいけねえのかは、思い出せた」

なすべきことを思い出した万丈を祝福するように、男はなにも言わず、静かに笑みを深める。

あの少女を救いたいという強い思いが、万丈の胸のうちで熱く燃え上がる勇気を魔力

へと変える。沸き立つ魔力は、蒼い炎となって万丈の力へと昇華されてゆく。

万丈の強い思いに応え、その手に手繰り寄せられた蒼炎の魔力がビルドドライバーを形成する。万丈の周囲を取り巻く蒼炎の中から、クローズドラゴンが飛来する。

万丈は、ドラゴンフルボトルをクローズドラゴンへと装填し、ビルドドライバーへと勢いよく叩き込んだ。

その胸に、なんのために戦うのかを、仲間たちの姿をもう一度強く思い描く。

「みんな、頼む。もう一度、俺に力を貸してくれ！」

『Are You Ready?』

——戦兔が戦うための力をくれた。

多くの仲間たちが、守ることの意味を覚えてくれた。

名も知らぬ男が、消えかけたこの命にもう一度炎を灯してくれた。

万丈龍我^ヒは決して諦めない。みんなの力を借りて、何度でも立ち上がる——！

「変身ッ！」

『WAKE UP BURNING!』

『GET! CROSS—Z DRAGON!』

『Yeah!!』

「うおおおおおおおおおおおッ!!」

沸き起こる勇氣の炎が、そのまま魔力の蒼炎となってクローズの全身から噴出する。噴出した魔力の炎は雷鳴を伴い、巨大な蒼き神龍となって雄々しい咆哮を響かせる。

ここに、新たな英霊ライダーは降臨した。

男の姿はすでにない。夜は明け、あたたかく眩い陽光が世界を覆う。

「万丈さん、なの……?」

「ああ。待たせたな、凜」

「ごうと唸る蒼炎に巻かれ崩壊を始めた巨大海魔を背に、クローズは凜をそつと地に降ろす。

「今度こそ終わらせて、みんなで帰るぞ……!」

振り返ったクローズは、ベルトのレバーを高速で回転させた。燃え上がる魔力がドライバーへと充填され、蒼い魔力が眩く輝く。クローズの発する魔力の波濤をその身に受けた蒼龍が、咆哮を上げて空中を旋回する。

『Ready Go!』

「オオオラアアアアアッ!!」

跳び上がったクローズの右足に魔力の蒼炎が宿る。

守りたい。ただその願いひとつを糧に燃え上がる灼熱の炎だ。

『Dragonic Finish!!』

蒼龍が、咆哮とともに燃え滾る灼熱の息吹を放出した。膨大な魔力の炎に乗ったクローズは、渾身の一撃を僅かに残った巨大海魔の本体へと叩き込んだ。

「——おおおおおおおおおッ!!」

必殺のドラゴニック・フィニッシュが、確かにシャドウキヤスターの霊核を捉え、打ち砕いた。巨大海魔の全身から急速に力が抜けてゆく。

仕留めた、という実感があつた。上空で舞い踊る蒼龍が、勝利の雄叫びを上げる。

一瞬ののち、巨大海魔は全身を捻れさせ、その身をピクセル粒子へと変換してゆく。出現した時と同様に、巨大海魔は己の身を崩壊させてゆき、やがて跡形もなく消滅した。そこに一切の魔力反応はなく、シャドウキヤスターも、海魔も、再生の余地はない。

仮面ライダークローズの完全勝利だった。

「フフ……フフフハハハハハハハッ!」

あちこちに燃え移った炎に照らされながら、仮面ライダーゲームが笑う。両腕を広げて、大胆不敵に哄笑しながら、ゲームは変身を解除し、檀黎斗としての生身を晒し、クローズへと歩み寄った。

「おめでどう、万丈龍我くんッ! 君は見事、最後の英霊にして、最後のマスターとして聖杯に選ばれた。君が、聖杯戦争最後の参加者だ!」

黎斗の言葉の意味が欠片も理解できず、万丈は返答に窮した。

だけれども、自分がなんらかの新たな戦いに巻き込まれてしまったことはわかる。今自分が戦った巨大な化け物が、その戦いに関係する敵なのであることも予測はつく。

「嘘、でしょ？ 万丈さんが……なんで！」

予想外だったのは、万丈よりも、傍らの凜の方が狼狽えていることだった。

万丈はクロローズの変身を解除し、生身の姿で凜と向き合った。

「そんな、嘘よ……万丈さんが、お父様と戦争しなきゃならないなんて！」

幼い少女が嘆く理由を推し量るには、万丈はあまりにも無知に過ぎた。

第12話 「同盟のセオリー」

冬木市の川沿いに位置する市民公園が、親子の待ち合わせ場所選ばれた。

最初に到着したのは凜の父である遠坂時臣だ。両者の共通の知人である石動を交え、聖杯戦争に参加したばかりで右も左も判らぬ万丈と軽い自己紹介を交わしているうちに、黒塗りのセダンを走らせ、母である遠坂葵も到着した。

凜の無事を確認するや、葵は今にも泣き出しそうな面持ちで我が子へと駆け寄り強く抱き締めた。ふたりの傍らに立つ時臣も柔らかな微笑みをたたえている。心から安堵している様子だった。

「感動の親子の再会ってやつか。無事でなによりだよ。なあ、万丈」

親子の様子を遠巻きに眺めていた万丈の肩に、石動が馴れ馴れしく手を置いた。万丈は不快感を隠すこともせず、肩を振るってその手を振り払う。正体がエボルトと分かった時点で、万丈には石動と馴れ合う気は毛頭なかった。

「この事件も、明日には大きく事実を歪めて報道されることだろう。死傷者が出る前に解決できたのも、聖堂教会としちや不幸中の幸いってやつだね。そういう意味じゃ、お前には感謝してんだ。ちったあ胸を張れよ、ヒーロー」

「うるせえ」

「なんだよ、つれねえなア」

石動は肩を竦めると、感情のない酷薄な笑みを浮かべて嘆息した。

シャドウキヤスターに囚われていた他の子供たちもみな意識を失っているだけで、命に別状はないとのことだった。子供らの保護については、既に聖堂教会の石動が手回ししていたらしく、川沿いにパトカーと救急車が列をなす様子を万丈も目撃している。

「あんだだけ大事おおごとになつて、それでも揉み消せんのかよ」

「その辺の手回しも俺の仕事だ。安心しろよ、魔術の痕跡は跡形もなく消してるし、シャドウキヤスターの断片データも既に全部ルーラーが回収してる。おそらく、下水での戦闘はそのものがなかったことになるだろう」

シャドウキヤスターの残骸を粒子化して紫のバグバグヴァイザーヴァイザーに取り込んだ檀黎斗は、万丈に聖杯戦争に関する簡単な説明だけ寄越すと、やることがある、と告げて足早に立ち去ってしまった。

「ンだよそれ。そんなに簡単なモンなのかよ」

「なんだ、不服そうだな。それとも不安なのは背景設定の方か？ だったら、こういうのはどうだ。誘拐犯の素性は依然不明のまま現在も逃走中。足取りを掴む手がかりは見当たらず……そのうち世間からも忘れられ、事件は無事迷宮入りだ。そうすりゃ角が立

たねえし、聖杯戦争の秘密も守られる」

「ツ、そうまでして、人間同士でまた争わなきゃなんねえのかよー！」

沸き起こる激情に駆られて、万丈は石動の襟首を掴む。やっと元の世界で起こった戦争を終わらせたというのに、どうしてまた人間同士の戦争に加担しなければならぬのか。そういう思いをぶつけたかったが、万丈の腕はすぐに振りほどかれた。

「だから掴むなって、シワになるだろオ〜！」

「デメエ……」

石動は煩わしそうに万丈に掴まれた襟首を叩いて伸ばしながら、あからさまな嘆息を落とすと、声のトーンを一段落とした。

「いいか万丈。お前が巻き込まれたのは、そういう戦争なんだよ。みんな、自分の願いを叶えるために必死なんだ。死にたくないなら、受け入れるしかねえだろ」

「なんでだよ、なんでッ……あの親子だって、あんなふうに笑えんのに！ 凜が助かって良かったって、あんなに嬉しそうにしてんのに！ それがなんで、殺し合いなんて酷いことができんだよ!?!」

「あのなあ……それが人間ってモンだろ？ みんな自分の幸福を守るために戦ってんだ。あの親子が笑ってるのだから、自分の幸福が守られたからだ。人間は昔から、そうやって戦って進化を続けて来た。違うか」

「それ、は……そうかもしんねえけどッ」

万丈は言い淀み、言葉に詰まった。

「聖杯戦争はもう始まってんだ、それは変えられない。お前が望むと望むまいとに関わらず、参加者は容赦なくお前に牙をむく。その時お前は、戦いたくないからって、ただ黙ってやられんのか？」

返す言葉を失った万丈の肩を、石動はもう一度叩いた。万丈の左手に刻まれた三画の赤い龍の紋章を、石動は一瞥する。

「いい加減割り切れよ。その令呪を手にしちまった時点で、お前はもう戦うしかない。それにどのみち、聖杯戦争に勝たなきゃお前だって元の世界に戻れないんだ。ここがゲームの世界だって考えりゃ、少しは気もラクになるだろ？」

「そういう問題じゃねえんだよー」

怒号をあげて石動を振り払う。

仮想世界であろうとも、この世界に生きる人々はみな、自分を本物の人間だと思って一生懸命生きている。凜の涙を見た時、万丈はそれを悟ってしまった。ただのデータと割り切って戦争に乗るには、万丈の心はあまりにも純粹に過ぎた。

「これは、穏やかな雰囲気ではないな。取り込み中だったかな」

玲瓏な紳士の声を耳にしたその刹那、万丈の体から急速に熱が引いていった。時臣と

葵は、この世界が仮想現実であることを知らない。どこまで話を聞かれたのだろうか。一瞬、返答に窮した万丈に代わって、石動が口を開いた。

「いや、大したことじゃないさ。俺がちよつと無神経なことを言っちゃまっただけ。悪かったな、万丈……ま、あんまり後ろ向きに考えすぎないこつた。なつちまったモンは、もうなるようにしかならねえんだから」

軽くとんとんと万丈の肩を叩いた石動は、そのまま万丈の隣を通り過ぎていった。

「それじゃ、俺がいても微妙な空気になるだけだろうから、今日はここらでお暇するとしましようかね。お三方とも、夜ふかしもほどほどに」

最後に振り返った石動は、わざとらしさを多分に含ませて、片腕を腹部に添えながら、恭しくお辞儀をしてみた。

「チャオ〜」

くるりと背を向け、掌をひらひらと振った石動は、当惑している万丈とは対象的に、どこまでもマイペースな步調で夜の闇へと姿を消していった。

「今日は本当にありがとうございました。娘を助けてくださったこと、なんとお礼を申し上げていいか」

依然として表情を陰らせたままの万丈に、凜の母親である遠坂葵は、もう何度目になるかもわからない感謝の言葉を告げて、深々と頭を下げる。心中は決して穏やかではな

いが、万丈はそれを悟られぬよう、努めて口角を上げてみせた。

葵は、万丈が聖杯戦争の参加者となつてしまったことを知らない。彼女に伝えられているのは、万丈は凜の発見に貢献した聖堂教会門下の人間、という偽りの情報だけで、不要な心配はかけないように、という時臣からの提案だった。

「本当に、君には感謝しているんだ。娘が無事に保護されたのも、すべて君のお陰だと聞いている。凜も随分と君を気に入っているようでね、私もひとりの父として、君とは良い関係を築いていきたいと思つている」

「あ、ああ……そりゃ、どうも」

差し伸べられた時臣手を、万丈は困惑しつつも握り返した。時臣の手のぬくもりが伝わってくる。

エボルトの言葉の通りならば、時臣もまた聖杯戦争に参加するマスターのひとり。今は葵がそばにいるから、芝居をしているのだろうかとも疑うが、できることなら凜の父親を悪く思いたくはなかった。あの人間の出来た立派な女の子育て上げたのは、他ならぬこのふたりなのだから。

「さあ、今日ももう遅い。凜は明日も学校だろう。君はそろそろ禅城の屋敷に戻りなさい」

ひとしきり握手を交わしあつたのち、時臣は葵に帰宅を促した。葵は特段反論するこ

ともなく、夫の提案を柔和な笑みを浮かべて受け入れた。最後にもう一度万丈に向き直った葵は、淑女らしい気品溢れる仕草で頭を下げた。

「本当に……凜が無事で済んでよかったわ。随分怖い目にあつた様子だけど、今はもう落ち着いている様子で……それもこれも、万丈さんに勇気づけてもらえたおかげだと思います。本当に、ありがとうございます」

「い、いや。もういいって、あんまり頭下げられすぎつと、なんか……背中が痒くなつてくるっつーか！」

いよいよ背中がむず痒くなつてきた万丈は、片手を背に回して掻き巻る。

「あら。ふふ、面白い方ですね」

片手で口元を隠し微笑む姿は、美しく、たおやかであった。

葵は最後にもう一度礼を言うと、今度こそ踵を返し、車へと戻った。

走り去つてゆく車のテールライトと見送りながら、万丈は手を振った。窓ガラスの奥で、ちらと万丈に視線を送った凜は、一瞬逡巡した様子で瞳を伏せたが、すぐに手を振り返してくれた。

凜には随分と心配をかけてしまった。きつと、万丈が時臣と殺し合わなければならぬ、という事実をひとり胸に秘めて、しばらくは不安に駆られることになるのだと思う。それは、万丈にとつても不本意だった。

「……なあ、遠坂さん」

「なにかな、万丈くん」

「俺、やっぱ凜には笑っていて欲しいんだ。あんない子が悲しむ姿なんて、見たくねえ」

「それは私も同意見だ。魔術師の娘として、きつと凜にはこれから数々の困難が降りかかることだろう。だが、それでも……親である以上、娘の幸福を祈らずにはいられない」
時臣の穏やかな語り口に、嘘があるようには思えなかった。

人間は、自分の幸福を守るために戦うものだと言った。突き詰めて考えればそうなのかもしれないし、実際に時臣もそういう理由で戦っているのかもしれない。だが、それでも、万丈はもう、難しいことを考えて堂々巡りに陥りたくはなかった。だから、もう、後先を考えずに、思ったことをそのまま口にすることにした。

「凜が傷付けば、あんたが悲しむ。あんたが傷付けば、凜が悲しむ。俺とあんたは敵かも知れねえが、それでも俺はあんたを傷付けたくねえ。それが今の俺の正直な気持ちだ」
時臣は、ふむ、と小さく唸った。

「どうやら君は……思っていた以上に優しく、そして純粋な人間らしい。魔術師には不向きだな」

褒められているのか貶されているのか分からず、万丈は押し黙った。

「……いや。事実、君は魔術師ではないのだろうね。本来なら、サーヴァントになるべき人間でもなかったのだろう。その令呪を手にしてしまったことは、まさしく君の不幸だ」

「でも、この力がなきや凜は救えなかった!」

即答する。時臣は一瞬目を丸くしたが、すぐに微笑んだ。

「君は本当に気持ちのよい人間だな。私とて、君のような人間と戦いたくはないと思っている」

時臣が向き直った。万丈と目を見合わせる。

「そこでだ。私と、同盟を組む気はないかね」

「同盟?」

「そうだ。聖杯戦争が終結するまで、我が陣営は君への協力を惜しまない。だから、君も私とともに戦ってはくれないだろうか。そうすれば、凜を悲しませずに済む」

「でもそれなら、今度はあんた以外の人間と戦わなきゃなんねえだろ。それじゃ、一緒なんだよ! 俺はもう誰のことも傷付けたくねえ!」

「それは、仕方のないことだ。これは聖杯戦争なのだから」

「仕方のないことで済ませられつかよ!」

時臣は万丈を宥めるように深く頷いた。

「そう言う君の気持ちもまた、わかる。私もまたひとりの人間だ。他者の命を奪わずに済むのなら、それに越したことはないと思っっている」

「それでも、あんたらは戦争をするんだろ！」

「聖杯戦争は続行する。だがやりようはある」

「ツ……なんか方法があんのか!？」

「君が人を殺めることを躊躇するならば、サーヴァントだけを倒す、という戦い方もある、ということだ」

万丈はハツとして、跳ねるように顔を上げた。

「君が望むなら、私も極力はマスターを害さないよう配慮しよう。召喚されたすべてのサーヴァントを倒してしまえば、誰の命も奪うことなく、聖杯戦争を終わらせることができる」

「——そ、そ、それだアーーツ!!」

思いもよらぬ名案に、万丈は思い切り声を張り上げて叫んでしまった。

サーヴァントというものがいかなるものであるかを万丈は詳しく把握してはいないが、あのシャドウキヤスターのような敵をすべて倒して戦争を終らせることができるなら、それが最良の選択であるように思われた。最前までの淀んだ表情が嘘のように、万丈は嬉々として破顔した。

「それなら確かに、誰も傷付けずに済む！ 凜や遠坂さんたちを守りながら戦うことだってできる！ 遠坂さん……あんた、頭いいなア！」

「大したことではないさ。では、私と同盟を結んでくれる、ということでもいいのかな」
大きく首肯し、万丈が同盟を了承しようとしたその時だった。

「嘘、ですね」

底冷えする冬の湖面のように冷たく、凜とした女の声だった。

振り返る。和服を着た年若く美しい少女と、ぶかぶかのウインドブレーカーを着込み目深にフードをかぶった男が、ゆつくりと街灯の光の下に歩み出た。少女は開いた扇子で口元を覆い隠してはいるものの、微かに揺れる薄緑の髪の毛の奥の眼光には、憎悪に燃える昏い輝きが見て取れた。一方で、男は足に不自由があるのか、少女の後ろをぎこちない足取りで追従していた。

「遠坂、時臣イイ！」

「間桐雁夜とバーサーカー、か。マスターになつたとは聞いていたが……随分と変わり果ててしまったものだな」

「俺がこんな無様な姿に成り果てたのも、すべては今日、この日のためだ。貴様をこの手で倒すため、それだけのために、俺は……！」

雁夜と呼ばれた青年は、フードの奥で憤怒に顔を歪め、憎々しげにその名を呼んだ。

ぶうう、んと羽音を立てて、大量の蟲が一斉に沸き上がる。蟲の群れは街灯の光の中に黒い靄のように蟠り、その全てがこちらに向けて敵意を放っていることを、万丈は本能的に感じ取った。

「な、なあ遠坂さん、あいつらも聖杯戦争の参加者か」

「ああ。魔導を否定し逃げ出したにも関わらず、欲望に駆られ舞い戻ってきた恥知らずだ」

時臣の物言いに、最前までの優しさ温かさは皆無だった。万丈には時臣がなにを言っているのかよくわからなかったが、決して穏やかな間柄でないことだけは十分に察することができた。

「もし、そこのお方」

「……ッ、俺?！」

バーサーカーと呼ばれた和服の少女が、たたんだ扇子の先端で万丈を指した。

「人を信じるのも結構ですが、もう少し疑いの目を持ちなさい。その男の我が子を想う気持ちにこそ嘘はないようですが……あなた様に対しては、話が別です」

「別って、どういうことだよ」

「その男があなた様にかけて言葉は嘘八百。人を殺めずに済めばいいなどと、思っているはずもございません。それどころか、その男は魔導において外様も甚だしいあなた

様を見下してすらいるご様子」

驚いた万丈は、思わず振り返り時臣を見る。時臣は、最前までとんなら変わらぬ優雅な微笑みをたたえていた。

「どうやらマスターに似てサーヴァントも礼儀を知らないらしい。いつたいなにを根拠にそのような言いがかりをつけるのかな」

時臣が口を開いたその刹那、憎悪の炎が一層激しく熱を持った。バーサーカーの周囲を取り囲むように、蒼炎が人魂のように燃え上がり、ごうと灼熱の唸りをあげる。

「わたくしには、嘘が分かるのです。ああ、嘘……嘘、嘘、嘘。なんと醜い言葉でしょう。この世から、嘘がなくなってしまう方がいいのに。いいえ、あなたのような嘘吐きそのものが、この世から燃えてなくなってしまう方がいいのに！」

宙に浮かんだ蒼炎の弾丸が射出された。計六初の蒼炎は、火の粉を振りまきながら一斉に時臣目掛けて急迫する。悩んでいる時間はなかった。

守りたい。

万丈の燃えるような熱い思いに応えて、腹部にビルドドライバーが出現する。バーサーカーの放った蒼炎よりもなお熱く、万丈の蒼炎が燃え上がる。瞬時に蒼龍の戦士への変身を遂げたクローズは、ベルトの電子音が鳴り止むよりも早く、燃え上がる剣を振り払った。

「オオオラアアアツ!!」

放たれた剣気は蒼炎の魔力を纏って、バーサーカーの放った炎と激突する。炸裂した蒼炎が、轟音と熱風を撒き散らした。

「シヤアアアアツ!!」

爆炎をかき分けて、下半身を燃え上がる蒼龍へと変化させたバーサーカーが、宙を高速で泳ぐように駆け抜け、クローズへと躍り掛る。手にした扇子を燃え上がらせ、巨大な炎の鉄扇へと作り変える。

クローズのビートクローザーと、バーサーカーの炎の鉄扇が激突した。蒼の炎と赤の炎がないまぜになって周囲へと振り撒かれる。

「どきなさい! その男は、息を吐くように嘘を吐く男! 生かしておくわけには参りません!」

「どかねえ! 例え俺に言った言葉が嘘だとしても……この人は、凜の父親なんだよ!」クローズの炎の剣が、バーサーカーの燃える鉄扇を押し返した。力いっぱい振り払うと、バーサーカーは大きく後方へと跳ね飛ばされ、空中で静止する。憎悪に燃える瞳をクローズへと向けて、バーサーカーは叫んだ。

「嗚呼……これが、これが嘘吐きの所業! その嘘に騙されるのは、いつの世もあなた様のような正直なお方! それが……それがわたくしには憎くて堪らないのです!」

バーサーカーが再度炎を燃やして加速する。和服の裾から伸びる蒼龍の尾が、より巨大になった。少女の下半身は、既に人間から遠く離れた龍の形状へと変わり果てていた。

「たとえ騙されたとしても！ 俺は俺が信じたものを守るために戦う！ それだけだろうがッ！」

ベルトのレバーを高速で回転させる。クローズの全身から沸き立つ蒼炎の魔力が実体を持ち、巨大な龍を頭上に形作った。蒼龍と化したバーサーカーに対し、クローズの蒼龍もまた正面から激突する。空中でひととき巨大な爆発が炸裂し、両者ともに爆風に煽られて後方へと吹っ飛ばされた。

地べたを転がりながら、土を殴り付けて起き上がる。白く靄のかかった視界の向こうでは、元の人の形を取り戻したバーサーカーもまた起き上がっていた。白い和服はどこどころが黒く煤けてはいるものの、少女そのものの体に怪我は見られなかった。

異変が起こっているとすれば、バーサーカーではなく、そのマスターの方だった。すぐに異常に気付いたバーサーカーは、時臣に対する怒りなど忘れたように、崩折れ血反吐を吐き散らす雁夜に駆け寄った。

「ま、ますたあ!？」

全身の血管が破裂したのか、雁夜は体のあちこちから血液を噴出させながらへたり込

んだ。それでも雁夜の双眸には憎悪と敵意に満ちた焰が未だギラついているように万丈には見えた。事実として、雁夜は未だに舞い上がる甲虫の群れを引つ込めようとはしない。噴出した血で作られた赤々とした霧の中で、雁夜はなおも時臣を睨め付ける。

「ああ、ますたあ……無理はしないでくださいまし！ わたくしのせいで……わたくしのせいでこんなにも」

今にも倒れそうな雁夜の体を、バーサーカーの細くしなやかな両腕が支える。雁夜の咆哮に応えるように、大量の蟲の群れが一斉に時臣へと加速した。

「哀れなものだな。もはや侮蔑を通り越して、憐憫さえ覚える。それほどまでの醜態を晒しながら、なおも魔導に縋ろうとは」

言葉の最後に短い詠唱を続けると、時臣はステッキを軽く振りかざした。それだけで、ごうと唸る火炎が放出され、迫り来る蟲を焼き払う。時臣の作る火炎の壁を、雁夜の蟲が突破できるワケもなく、焼き尽くされた蟲の群れは原型を留めず灰へと変えられた。その間も血飛沫を迸らせる雁夜を押し留めるように、バーサーカーは抱き締めた。

「もう、やめてくださいまし！ どうか戦いならわたくしにお任せになって。これ以上は、ますたあの身がもちません！」

雁夜はバーサーカーの華奢な体を振り払うと、もう一度よろめきながら立ち上がった。

「遠坂、時臣イイ！ 貴様だけは、殺す……殺して、やる！」

時臣は嘆息し、一步踏み出した。

「わからないな。なぜ魔導に背を向け逃げ出した落伍者が、今更になつてそうも聖杯に縋る。その醜態だけでも、間桐の家は墮落の誹りを逃れられまい」

「貴様にはわからないだろうな！ 魔導に取り憑かれ、娘を悪魔に売り渡した人でなしの貴様にはッ！」

時臣は眉をしかめた。

「人でなしは、己の責任すら果たさず目先の娯楽を追い掛け、今また欲に憑かれ醜態を晒す君の方ではないかね。そも、君のような落伍者から、我が子の未来について口出しされる謂れはない」

「貴様はッ、自分の娘の未来を間桐に……あの妖怪に売り渡したんだッ！ あの子が今、どれほどの地獄の中で絶望し続けているかも知らずに！」

なにを言い出すのかと思えば、と呟き、時臣は薄く呆れ笑いを零した。

「魔導の家に生まれ、魔導に生きる道を決定付けられた時点で、その人生にはありとあらゆる苦難が待ち受けているもの。それでも万難を排し、死にも勝る修練を積み重ね、自らの責任を果たしたもののだけが真の魔術師足り得るのだ。それを地獄と切り捨て、自らの責任を放棄した君の怒りは、筋を違えているとしか言いようがない」

「死にも勝る修練だ?!」 ふざけるなよ時臣……貴様、そんな理由で桜をあの妖怪に売り渡したのか!」

「当然だ。それもすべては愛娘の未来に幸あれと願えばこそ」

「な……っ」

雁夜は瞠目したまま、空いた口を塞ぐことができない様子だった。

「魔導の薫陶を拒否した君にはわかるべくもない話だろうが……二子を儲けた魔術師は、いずれ誰もが苦悩する。秘術を伝授できるのはひとりのみ。いずれ一子は凡俗に落とさねばならぬというジレンマに」

「凡俗……? お前は、あの遠い日の母子たちの姿を……ただ凡俗とだけ切り捨てるのか!」

「そうだ。いずれかひとりの未来のために、もうひとりが持つ才能を摘み取り、誇りある魔術師としての未来を閉ざしてしまふなど……親として、そんな悲劇を望むものがあるか。姉妹双方の才能について望みを繋ぐには、養子に出すほか道はあるまい」

「ああ、そうか……そうかよ。今わかったぞ時臣。貴様は——貴様は狂ってるツ! 桜の苦しみを知らず、そんな理由で子供たちの当たり前前の日常を奪った貴様を、俺は許さないツ!」

時臣は深く息を吐きながらゆるくかぶりを振った。

「君のような落伍者に語り聞かせるだけ無駄な時間だったな。魔導の尊さを理解せず、あまつさえ一度は背を向けた裏切り者の君に」

「ほぎけエエツッ！」

「ま、ますたあ……！」

バーサーカーの静止を振り切って、雁夜は叫ぶ。全身の血管が盛り上がり、雁夜の皮膚の下をめちやくちやに這い回る。万丈は、それがただの血管だけでないことを悟った。あの男の皮膚の下には、蟲がいるのだ。

万丈の察したとおりに、雁夜のウインドブレーカーの内側から、再び大量の蟲が這い出て、羽を開いて空へと飛び立った。もうやめろ、と叫び出したい気持ちに駆られるが、先に前へ踏み出たのは、やはり時臣だった。

「君が家督を拒んだことで、間桐の魔術は桜の手に渡った。結果だけを見れば感謝する筋合いとはいえ……それでも私には、君という男が赦せない。血の責任から逃げた軟弱さ、その事実になんの負い目も抱かぬ卑劣さ……」

軽くステッキを掲げた時臣は、二節ほどの詠唱を短く済ませると、それを勢いよく振りかざした。

「間桐雁夜は魔導の恥だ。ここで見えた以上、もはや誅を下すほかあるまい」
ステッキに埋め込まれた赤の宝石が煌めき、特大の火炎が放射された。

咄嗟に雁夜を庇うように前に飛び出たバーサーカーが、大きく息を吸い込み、吐いた。それだけでバーサーカーの吐息は灼熱の龍の息吹となつて、迫りくる火炎を迎え討つ。

バーサーカーが息を吹き込むほどに放射される灼熱は温度を上げて、炎の壁となつた火炎が、時臣の火炎を飲み込み、相殺する。バーサーカーの魔力の行使によつて、蟲の励起によつて既に満身創痍であつた雁夜は深く項垂れ、吐血した。地べたに血液が飛び散り、飛沫をあげる。

「なんと無様な。己の意思で立つことも出来ず、サーヴァントに庇われるに任せるなど……見るに堪えんな」

もはや言葉を発することすらも難しくなつた雁夜の代わりに、憎悪の炎にその双眸をギラつかせながら、バーサーカーが口を開いた。

「ええ、ええ……あなた様からしてみれば、今のますたあの姿はまさしく無様そのものといえましょう。ですが、わたくしにはますたあよりも、あなた様の方がよほど愚かで、滑稽に見えてなりません」

「なに……？」

「あなた様は、間桐の魔術に關してあまりにも無知に過ぎる。今のあの子は、まともな魔術師としての教育など受けてはおりません。いいえ、受けられるべくもない。間桐臓硯の道具として利用され、幼くして女としての尊厳すら踏み躪られ……苗床として生かさ

れているだけの哀れな少女」

「——馬鹿な」

ここへ来て、初めて時臣の視線が揺らいだ。バーサーカーの言葉には、きつと嘘はない。彼女がいかに嘘を憎んでいるかは、先程の激突でひしひしと伝わってきた。

「桜は生まれついてより稀代の才能に恵まれ、魔術師としての教育を受けるべくして生まれられた身。その落伍者とは違う」

「それは、遠坂の才能でしょう。間桐の才能ではありません。間桐臓硯は、最初からあの子を世継ぎを育成するための『苗床』としてしか見てはいない。だからますたあはあの子のいる場所を指して『地獄』と言ったのです。そんなことも知らずに、あなた様という人は……」

「やめろ……、バーサーカー……そんな、人でなしに……なにを言っても、無駄だ。結局、あいつは……骨の髄まで魔術師なんだ。あいつはもう、父親でも夫でもない……!」

息も絶え絶えに、雁夜は顔を上げ、袖で口元に付着した血を拭った。

最前まで余裕に満ちた怜悯な瞳で射抜くように雁夜を見下していた時臣も、流石に言葉を失っている様子だった。万丈には詳しい話はわからないが、事態が当初思っていたほど簡単なことではないということは、なんとなくわかった。

「俺は……桜を、救う。あの子が、どれほどの地獄にいるのかも知らず、のうのうと魔導

にかまけてられるような男とは、違う……違つてやる！」

よろめきながらも、雁夜は立ち上がる。それだけで体中から血が滲み、ウインドブレーカーはもはや血塗れ雑巾のように成り果てている。バーサーカーは己の白い着物が血に汚れることも厭わず、マスターである雁夜に寄り添い立つ。

「時臣様」

不意に、背後に気配を感じた。万丈は飛び上がりそうになる気持ちを堪えて、クロウズの仮面の下、現れた闖入者を凝視する。

全身を漆黒の衣で覆い隠し、顔の大部分を骸骨の面で覆った男だった。

「アサシンか」

「キャスター、ランサー両陣営が、遠坂の管理する土地に置かれた要石を破壊して回っています。目的はおそらく、霊脈の管理権の奪取かと」

「なツ……ん、だと。要石の場所は慎重に秘匿されていたはず。なぜ奴らがその所在を把握している」

「はて、それは皆目見当もつきませぬ。しかし、霊脈を守らんとするならば、一刻も早い対処が必要であることに違いはありませんまい」

必要最低限の情報だけを伝達すると、アサシンと呼ばれた影は霧のように消え失せた。

時臣は絶句して、しばし黙り込んだ。神妙な面持ちで逡巡した時臣は、雁夜とクローズをそれぞれ眇めると、額に指先を添えて嘆息した。

「なぜこうも次から次へと……。すまないが、万丈くん。こちらも事情が変わってしまった。私はすぐに向かわなければならぬ」

「えっ、すぐにつて……。じゃああいづらはどうすんだよ！」

血で出来た水溜りの上で憎悪を滲ませるふたりをクローズは指差した。

「気がかりではあるが、今は保留にせざるを得ない。緊急事態なんだ」

「緊急事態つて……。その桜つて子、あんたの娘なんだろ！ あんたの娘が、今苦しんでんだろ!? 自分の娘より大切なことなんてあんのかよ!?!」

「それについても今は保留としか言いようがない。いや、そもそもその話、あの落伍者とそのサーヴァントの言葉だけを鵜呑みにして、裏付けもなしに事実と決め込んで動くわけにもいくまい。まずは間桐の翁に確認をとる必要がある」

苦虫を噛み潰したような表情で、時臣はバーサーカーに一瞥を送った。未だ敵意に満ちた瞳で時臣を睨み据えてはいるものの、その場ですぐに激怒しないことを見れば、おそらく時臣は嘘をついていないのだろう。バーサーカーの嘘を見破る能力が事実であれば、の話だが。

「嘘じゃ、ねえよな。自分の娘のこと、ちゃんとホントに心配してんだよな」

「本当だ。こと娘たちに関わることで、私が嘘をつくことはない。ふたりとも、私の大切な愛娘だ」

クローズの仮面越しに、万丈はじつと時臣の顔を見る。時臣は視線を逸らさなかつた。決然とまなじりを決する時臣の顔に、嘘があるとは思えなかつた。

「わかつた。だつたら、あんたは今、あんたがやるべきことをやってくれ。俺は、あの一夜とおっさんをなんとかする」

「……なんとかする、というと？」

クローズは声を荒げた。

「なんとかはなんとかだッ！ 安心しろ、悪いようにはさせねえ。あんたのことも傷付けさせねえし、その桜つて子が酷い目にあつてるならそっちも助け出す。誰も傷付けずに、こんな戦争とつとと終わらせてやる！」

しばし返答に窮した様子だったが、やがて時臣は、わかつた、と一言を告げると、踵を返し背を向けた。

「私に用向きがあれば、遠坂の屋敷の門を叩いてくれ。我が娘の命を救ってくれた君の訪問ならば、いつでも歓迎でもって遇すると約束しよう」

最後に振り返つた時臣は、最前までの柔和な微笑みを取り戻し、クローズに笑いかける。額には脂汗が浮かんでいた。無理をした笑顔であることは、万丈にも理解できた。

「待て、時臣イイ……!」

雁夜は去りゆく時臣の背中へと手を伸ばし駆け出そうとするが、体が思うように動かないのか、一步を踏み出す前に前のめりに倒れ込んだ。

「おい、無理すんなおっさん!」

駆け寄るクローズの前に、バーサーカーが立ち塞がる。

時臣に対して見せた程の憎悪は感じないが、それでも警戒ゆえかまなじりをきつと尖らせてクローズを睨んでいる。さしものクローズも動きを止め、ベルトに装着されていたクローズドラゴンを引き抜いた。魔力で精製されたビルドドライバーとクローズドラゴンは、万丈の戦意の喪失とともに消失する。

「あんたらと戦う気はねえ。その桜つて子が苦しんでんなら、俺にも話を聞かせてくれ! 俺にできることをやらせてくれ!」

「だま、れ……時臣に味方する男の言葉など……信用、できるか!」

上体を起こし、血反吐を吐きながら敵意を剥き出しにする雁夜を、バーサーカーが慌てて支える。

「ますたあ。このお方の言葉に嘘はありません。本気であの子を救いたいと願っている様子」

「だからなんだッ! コイツは、時臣を傷付けなと言ったんだぞ……! 時臣に与す

るものはすべて俺の敵だ！」

「おっさん……」

憎しみに突き動かされるままに腕を振るい、血反吐を吐き散らす雁夜のその痛ましさに、万丈は思わず目線を伏せた。この男は、憎しみに囚われている。

不意にエボルトの言葉が蘇る。人は結局、自分の幸福を守るために戦っているに過ぎない、と。本当にそうだろうか。その桜という少女を救い出し、遠坂時臣を殺せば、本当にこの男は救われるのだろうか。それは、どこか違うような気がした。

一拍の間を開けて、万丈は決然と顔をあげた。

「あんた、苦しんでる子供を助けたいって言ったよな。さっきのあんたの言葉は、本気だった。少なくとも、俺はそう感じた！ だから俺は、あんたを信じてみたいと思った……！」

雁夜へと歩み寄った万丈は、雁夜のぶかぶかのウインドブレーカーの襟元を掴み上げた。バーサーカーは、万丈の行動を止めようとはしなかった。顔を近付け、万丈は一際声を荒げる。

「あんたいつたいなにと戦ってたんだよ！ なにがしてんだよ！ 遠坂さんを傷付けたのか、子供を救いたいのか……あんたにとつてホントに大切なのはどっちだよ！」

雁夜は表情を歪め、押し黙った。濁った双眸は、万丈を直視できずに空を泳ぐ。構わ

ず万丈は声を張り上げた。

「もしも桜を救うことよりも、あの子たちから父親を奪うことの方が大切だって言うのなら……！ そんなやつは、俺が今ここでブツ倒してやるッ！」

腹部に再度蒼炎が宿る。どこからか現れたクロースドラゴンが、その小さな身体で咆哮をあげながら飛び回る。その気になればいつでも変身できるという意思表示だった。

雁夜は無言のまま万丈の腕を振り払うと、力なくその場にへたり込み、咳き込んだ。バーサーカーは穏やかな表情のまま、雁夜を抱き起こす。

「……ますたあ。そんなに意固地にならないでくださいまし。今いちばん大切なことは桜を救うこと、でございませう？ それとも、ますたあがこんなになるまで頑張ったのは……あの男を殺すため、なのですか。桜を救いたいと心から願ってくれる方を退けてまで」

「バー、サーカー……」

「ねえ、ますたあ。この方の言葉を信じてみるのは、そんなにも悪いことでしょうか？ ますたあが本当に守りたかったものはなんなのか……どうか忘れないでくださいまし」

とうに艶の消え失せた雁夜の白い髪を、バーサーカーの細くたおやかな指が優しく撫でる。雁夜の全身を駆け巡っていた血管が、徐々にすう、と薄らいでいった。荒い呼吸のまま、雁夜はバーサーカーの腕から抜け出しやおら立ち上がる。今度は正面から万丈

と向き合い、問うた。

「お前……、名前は」

「万丈龍我。ライダークラスのサーヴァント、仮面ライダークロースだ！」

掌に拳を打ち付けて、万丈は決然と名乗った。

「マスターは」

「いねえ！」

「は、はは」

呆れた様子で、雁夜は笑う。気が抜けたのだろう、足元がふらつく。すかさず雁夜の体を、雁夜よりも遥かに小柄で華奢なバーサーカーが支えた。

「こいつはいい……天下の英霊サマが、自分から桜を救いたい、だって？ ああ、悪くない。そういうのも、悪くはないのかもな」

「ただし、遠坂さんを傷付けることには加担しねえ。俺が手を貸すのは、その桜って子を救うため、それだけだ！」

「そいつは難しいな。話はそんなに簡単じゃない。だが、ひとまず事情は教えてやる。その後のことは、ライダー……お前の判断に任せる。それでいいんだろ？」

力なく呟く雁夜の提案に、万丈は強く首肯した。バーサーカーが、につこりと破顔した。

まずは話を聞くことから始める必要がある。凜の姉妹とされる女の子が、どれほどの苦しみを味わわされているのか。どうやればそれを救い出すことができるのか。それは、話を聞いてから考えればいい。

万丈は、バーサーカーとともに雁夜の肩を支え、冷たい風の吹く夜の冬木へと歩み出した。

第13話「勝利へのタクティクス」

新たな工房の敷設は、当初戦兔が考えていたよりもスムーズに実行された。

深山町の外れに位置する工場地帯に目をつけたキャスターは、まずはじめに、その最高責任者を調べ上げた。土地を丸ごと奪い取る必要はない。ただ、書類上、工場が今まで通り正規の働きをしていると示すことができればそれでよかつた。

無事に工場の責任者に暗示をかけ、疑われることなく工場地帯へと潜り込むことに成功したキャスターは、次に無数に存在する倉庫のうちひとつを見繕うと、その周辺に人払いの結界をかけて新たな工房とした。ロード・エルメロイの新工房は、同じくエルメロイの末裔たるキャスターの陣地作成スキルとの相性もよく、冬木ハイアットに敷設された当初の工房と同等の性能を再現するのにさほど時間はかからなかつた。

工場地帯で勤務に従事する作業員は、誰ひとりとして自分たちの職場の倉庫が一棟、丸ごと別の施設へ作り変えられていることになど気付くはずもなく、なんでもないよう

に日常を続けている。工房の移転は成功といえた。

戦兔は空っぽになった倉庫に新たに運び込まれた資材の数々を眺め、手を打ち合わせ

て破顔した。軽い足取りで工房の中を走り回り、感に堪えない喜悦を誰はばかることな

く発散する。

「すっげえ、新しい研究所だ！ これだけの設備があれば、持ち込んだボトルもじゅーっツぶん、再調整できる！」

ケイネスとキヤスターが取り寄せた数々の魔導具の並びの中に、巨大なコンピュターだけでなく、凡人には用途の判然としないカプセルや薬品、一見すると家電製品にしか見えない物品が所狭しと並んでいる。すべて、ケイネスの資金力に頼って戦兎が取り寄せさせた研究機材だった。搬入されたばかりの機材の数々を、戦兎は子供のように瞳を輝かせて物色する。無意識のうちに髪の毛が一房隆起していた。

「キヤスター。君のマスターはいつもこうなのかね」

「ああ、いえ……まあ。お恥ずかしい限りです」

キヤスターは歯切れ悪くケイネスに返答すると、額に軽く手を当て嘆息した。

機材はすべて、ケイネス本人の名義ではなく、偽名を用いて購入している。機材の搬入に従事した作業員を雇うための金を出したのもケイネスだが、その仕事の依頼はあくまで工場経営者の名義でなされている。書類の上にケイネスの名前が出ることはないように徹底しろ、というのはキヤスターの指示だ。当然ながら作業員も全員漏れなく暗示済みなので、今頃ここに荷物を運び込んだ作業員らはみな、自分がここ場所でなんの仕事をしていたのかも思い出せなくなっているはずだ。

アインツベルン
衛宮切嗣

衛宮切嗣に対し警戒の念を強く抱くキャスターは、隠蔽工作には殊更力を注いでいた。二度と冬木ハイアットの最上階スイートを本人名義で堂々と貸し切るような真似はしないようにと、口を酸っぱくしてケイネスに言い聞かせる姿を戦兔も目撃している。実際、フロアを丸ごと貸し切るのは確かにやりすぎだと戦兔も思っていた。目を付けられても無理はない。

「キャ、キャスター！ キャスターはいますか、キャスターッ！」

不意に倉庫の奥から、血相を変えてランサーが飛んできた。それでも笑顔は崩れていない。

「はて、私ならここにいますか」

「な、なんですかキャスター、あの厠かわやは!？」

「は?」

「便器から、こう、水が飛び掛かって……、もしや妖怪!? 妖怪お尻水かけとかでもいるんですか、ここ!？」

ランサーは、身振り手振りでジェスチャーを交えながら自らが体験した異常を全員に伝える。キャスターとケイネスが顔を見合わせ、眉をしかめる。

要領を得ない質問に回答を示したのは、戦兔だった。

「ああ、ウオシユレットなら俺が注文しといた。時計塔の魔術師だったって、ウオシユレッ

トくらいはないと困るだろ？」

「……………ここまで来れば、最早ウオシユレット如きで出費に大した差異もあるまい。好きにするがいい」

諦念混じりに視線を伏せながら、ケイネスは否定も肯定もせず、戦兎らに背を向けた。キャスターが戦兎に代わって、申し訳ない、と言告げて頭を下げる。ケイネスは片手を軽く掲げるだけで、キャスターを責めようとはしなかった。

ケイネスは、後ろ手に手を組んだまま、かつ、かつ、と足音を響かせて新工房内を歩き、ケイネスにとって見慣れた魔道具と、そうでない数々の機材とを、それぞれ見遣った。

「私が……までの出資を許したのも、すべては聖杯戦争に勝利するためだ。私は甘かった。魔術師同士による尋常なる技の競い合いなどを夢想した私が甘かったのだ。それを自覚したからには、勝利に繋がる布石はなんであろうと打つ。今の私にあるのは、ただのそれだけだ」

「ケイネス卿の援助には、我らも大きく助けられています。その判断を後悔させぬよう、必ずや御身を聖杯戦争の勝利者へ押し上げると約束いたしましたよう」

「たわけ、そんなことは言われずとも当然であろう！　今更聖杯戦争の勝利を約束するだなどと……………その程度の大前提、わざわざ改めて約束されるまでもないわ！」

振り返り、唾を飛ばして痲癩を起こすケイネスに、キャスターはただ肅然と頭を下げた。直後、ケイネスは深く息を吸い込み、ゆつくりと吐き出した。落ち着きを取り戻そうと努めているのであろうことは戦兎にもわかった。

「……いや、まあいい。で、キャスターよ。そうまで言うからには、当然、次の策は用意しているであろうな」

キャスターは不敵に口元を歪ませた。

「もちろん既に。マスター」

「はいはい、待ってましたよ」と

呼ばれた戦兎は軽い足取りでキャスターの隣に並ぶと、すつとなにもない空間に手をかざした。戦兎が触れた箇所に半透明に光る長方形の板が形成される。黎斗がプレイヤー専用の能力として与えたホログラムウインドウだ。

「こ、これは」

「驚くことなかれ。これこそが我がマスターにして天才物理学者、桐生戦兎の妙技……！」

「ほ、ほう、そうか。よくわからぬ技術だが、大したものだ」

また上手いこと言ったものだな、と戦兎は思ったが、ことケイネスとのやり取りにおいて余計なことは口にしない方がいいことは既に学んでいる。黙々とウインドウを操

作し、頭上の空間に巨大な冬木市内の地図^{マップ}を映し出した。地図上には、要所要所に赤いマーカーが打たれていた。

「で、これがなんだというのだ。見たところ冬木の地図のようだが」

「ええ。しかし今回重要視すべきは赤いマーカーを打たれた箇所です」

「そう勿体ぶるな、早く話さぬか、キヤスター!」

キヤスターは再度、不敵に頬を緩めた。

「ここに記された場所は、すべて冬木の土地を管理するため、遠坂によって配置された要石の所在です」

「なに……? 要石、だと。土地を管理する魔術師にとっての生命線ではないか」

「左様。まずは手始めにこの要石を片っ端から破壊し、遠坂から土地の管理権、ひいては霊脈の支配権そのものを奪い取ってやろうかと」

「な……ッ!」

瞬間、ケイネスは絶句した。

「はじめ、私は土地の霊脈を把握し、そこに綻びを見出し、付け入ろうとしました。しかし、まっとうな魔術師の管理している土地にそのような妥協は見出だせなかった。であれば、綻びなどと甘いことは言わず、霊脈を守護する要石そのものをすべて破壊し、土地の管理権そのものを掌握してやろうではないか、と」

「ま、待てキヤスター！ それをさせぬように、魔術師は慎重に要石を秘匿しているのであろうが！ それを……それを、よもやキヤスター、君は遠坂が秘匿する要石の所在をすべてを解き明かしたというのか!? そんなことが……」

「ええ、なんら問題なく。霊脈にこそ綻びはなかったものの、長年に渡つてこの土地を支配し続けてきたという、その奢りこそが遠坂にとつての綻びとなつたのでしよう。慢心した者が管理する土地を解き明かすことなど、三国時代の戦の数々を思えば造作もないこと」

羽扇を開き、口元を隠しキヤスターは笑う。かつての三国時代において、地の利を活かし、戦力差で圧倒的に劣る劉備玄徳の軍を幾度となく勝利させた逸話は伊達ではない。伊達ではないことは間違いないのだが、事実がそうでないことを戦兎は知っていた。

「まあた上手く言いくるめたな、キヤスター」
 念話で自らのサーヴァントへと思念を飛ばす。

「嘘はついていない。どのような手段を用いたか、その方法まで詳細に話す気はないがな」

キヤスターは軽く戦兎に一瞥を送り、薄く口元を緩め微笑んだ。

この冬木に存在した本来の聖杯は、既に未来のロード・エルメロイによつて解体され

ている。その際、エルメロイの未来の教え子である遠坂凜の協力を得て、土地の構造を詳細に至るまで把握したのだ。

「つてかお前、けつこうえげつないこと考えるよな。未来の教え子の土地をめちやくちやに荒らし回ろうつてんだから」

「彼女が私の教え子というのは、あくまで未来の話だ。今この時点の遠坂に私はなんの義理も負い目もない」

呆れた戦兎は、あからさまに眉をしかめ、吐き捨てるように笑った。

「そーいうところがえげつないって言つてんだよ。いつかとんでもないしつぺ返しを食らわなきゃいいけどな」

「ふん、遠坂家は冬木の聖杯戦争の発端について責任の一端を担う家門だ。霊脈を失つて素寒貧すかんびんになろうとも、まあ自業自得というものさ。きつと未来の遠坂も理解してくれるだろう」

とんでもない事後承諾であることは明らかだが、戦兎はそれ以上はなにも言わなかった。キヤスターは時折、こうして古い歴史と力を持つ魔術師に対し必要以上に辛辣に当たるふしがある。いったいなにがキヤスターを駆り立てるのか、それも問わない方がいいように思われた。

キヤスターは表情を動かすことなく、今度はその場の全員へ淡々と続ける。

「遠坂家は土地の霊脈を掌握することであらゆる悪霊、災難、霊障の類を跳ね除け、事業のほとんどもを成功させ今の栄光を実現させているのだとか。それらすべて奪い取られたとあつては、さしもの遠坂といえども大打撃は必定。やらぬ手はありませんまい」

「さも涼し気な顔でとんでもないことを言う男だな、君は」

やや引き気味にぼやくケイネスに続いて、ランサーが問うた。

「あのー……私には魔術のことはよくわからないのですが、その要石を壊して霊脈を奪い取る、という行為にはいったいどんな意味があるんです？」

「よくぞ聞いてくれた、ランサー。答えは簡単だ。まずは霊脈の流れを奪い取り、我々が冬木の霊脈を味方につける。まずそれだけでセイバーと我々の戦力差は縮まるだろう。遠坂の圧倒的有利の影に、霊脈の流れが関係しているということは間違いようもない事実だからな」

ランサーはふむ、と唸った。

「なるほど、地の利を活かそうというのですね。確かに、古来より戦において地の利を得るといふのは常套手段ではありませんからな」

「ああ。そしてしかるのち、我々は遠坂から奪い取った霊地に、新たな召喚陣を敷設する」

ランサーとケイネスが、同時に顔を上げた。瞠目するふたりに畳み掛けるように、

キャスターは続ける。

「現状、冬木の霊脈は遠坂の独占下にあるが、それを奪い取ってさえしまえば、我らの取れる選択肢も飛躍的に増える。そこで我々は、あのセイバーを撃破しうる英霊を、あのセイバーを撃破するため、ただそれだけのために喚び出すのです」

「な……っ」

驚いたケイネスは、一瞬言葉を失い押し黙った。

基本戦術がスキルによるサポートであるキャスターを運用する以上、戦兔には魔力の余裕がある。ランサーのように戦えば戦うほど魔力を消費する陣営に対し、その点で大きなアドバンテージがあった。それを利用し、ただ闇のキバを撃破する、そのためだけに新たな召喚術式を組み上げ、ピンポイントで闇のキバに対する特攻を備えた攻略用サーヴァントを召喚しよう、というのがキャスターの提案だった。キャスターらしい、ゲーマー戦法だ。

「ま、待て……聖杯戦争とは、元来七騎の英霊によって行われる魔術儀式。そのような方策はルール違反もよいところであろうに。教会が黙って見過ごすとは思えん！」

キャスターはいいえ、とゆるくかぶりを振った。

「どのみち聖堂教会もまた遠坂陣営一方に肩入れし、明らかなルール違反に加担しているのです。そんな連中にルール違反だのなんだの言われる筋合いはありません」

負けじと、ケイネスは声を張った。

「裏を返せば、そうまでして聖杯戦争に勝とうとしているのだ、奴らは！　こちらにルール上付け入る隙があるとなれば、嬉々として突いてくるぞ！」

「ふむ。では、我らもアサシンのルール違反を突き付けてやりましょう。奴ら、色々と小細工を弄して自らの違反を秘匿してはいるようですが、この諸葛孔明を前にその程度の細工は戯れのようなもの。逃れようのない証拠を突き付けて、此度の監督役としての立場そのものを揺るがしてやればよいのです」

はつとした様子で、ケイネスは瞠目した。

「そうなることを恐れて、教会は我らのルール違反は追求してこない……いいや、追求できないと、君はそう言いたいのかね」

「奴らも馬鹿ではない。一度私の奇門遁甲に掛かるといふ失敗を犯した以上、よもや未だアサシンの絡繰りを見抜かれていないなどと脳天気なことを考えているわけもありますまい。奴らは間違いなく、この私を警戒している」

即断できかねるらしく、ううむ、と低く唸るケイネスに代わって、今度はランサーが声を上げて笑った。

「あつははははは、なるほど面白い！　方針はわかりました。しかし、それがまかり通るとして、要石とは遠坂の生命線なのでしょう。であれば、奴らも必死になって阻止し

キャスターは一瞬眉をしかめ身を引いたが、すぐに向き直った。嬉々として槍と刀を振り回すランサーに追い詰められた経験のある戦兔には、キャスターの気持ちがあんなくなく理解できる気がした。ランサーの笑顔と正面から向き合うことは、戦力として心強い反面、空おそろしいものがある。

「……そ、そうか。では、ランサー。君は賛成と見ていいんだな」

「ええ、とういか、このまま籠城するのも面白く……あつ、いえ、あまりよい策とはいえませんし?。」

「今、面白くないと言いかけなかったか」

「あはははははははははつ、まあまあ。死中に活を求めると言いまして、戦とあらば果斷即決！とにかく打って出ることが肝要です。ですので、ケイネス殿さえ了承されるなら、その企てに是非とも一枚噛ませてもらいたいところですが」

あいも変わらず物騒な笑みを浮かべるランサーに反して、ケイネスは指先に顎を添えた姿勢のまま低く唸り、暫し黙考した。

「どうする、ケイネス。あとはあんた次第だ」

戦兔は空間に開いたマップを閉じ、ケイネスの肩を叩いた。当然のようにケイネスは戦兔の手を払いのける。

「ええい、緒戦のうちは慎重に……とは思っていたが、そうも言ってはおれんことはよく

分かったとも。取れる選択肢の中で、これがもつとも勝率の高い戦法なのだろう？　であれば、断る理由もなかるうに」

「おお、流石はケイネス卿、ご英断です。それでは、日が沈み次第早速仕掛けようと思うのですが」

「う、うむ。どちらにせよセイバーと戦う必要があるのなら、仕掛けるのは早いほうがよからう。ただし、やるからには必勝の覚悟で挑むぞ。よいな、キャスター！」

「言われるまでもなく。中華の軍師たるサーヴァントの本領をお見せいたしましょう」

キャスターは不敵に笑みを浮かべると、恭しく頭を垂れた。

「よっし、話は決まったな。そんじや、俺も早速動くとしますかー！」

戦兎はにんまりと頬を緩めると、運び込んだ機材に駆け寄りコンピュータの電源をつけた。自らのデスクに向き合い、懐から取り出したポトルを戦兎が組み上げた装置に設置する。装置には既に、ハザードトリガーが接続されていた。現代よりも二十年以上も前の設備では、ポトルの調整にも時間がかかることは容易に予想できるが、実際の戦闘開始までに少しでもビルドのスペックを底上げする必要がある。戦兎はひとりの科学者として、自分の世界に没入していった。

戦兎らが選んだ工場は、部分的に二階建て構造になっており、二階部分は事務所とし

でも運用できるよう造られていた。給湯室や仮眠室だけでなく、簡素なシャワースペースも最初から用意されていたので、生活をする分には困らない。戦兎らは二階の事務所スペースを仕切りで隔てて、それぞれの居室をつくった。

二階の廊下を、ひとりの少女が歩いていった。ランサーだ。真紅の布で裏打ちされた白の和服を身に纏い、肩や胴など、部分的に武者鎧を身に纏っている。霊衣は脇腹や太ももを覆ってはいないらしく、歩くたびに白い和服の隙間から健康的な肌色がちらりと見える。

ランサーは、子供のようにな无邪気な笑みを浮かべ、興味津々といった様子で各部屋を覗いて回っていた。

「随分と機嫌がよさそうだな、ランサー」

好奇心に駆られたキャスターは、廊下の一本道でランサーとすれ違うその刹那、不意に彼女を呼び止めた。ランサーは口元に薄い笑みを浮かべたまま、きよとんと小首を傾げて見せた。

「おや、キャスターではありませんか。私は別段いつも通りですが、機嫌がよさそうに見えましたか？」

「ああ。新たな環境を楽しんでいるように見えた……が、いや。よくよく考えれば君は常に笑顔だったな」

ランサーはくすくすと微かな笑みを浮かべる。

「さしもの中華の軍師殿にも、私の本心はわかりませんか」

「残念ながら。君の真名についてなら、私の中であともう一步というところまで絞つてはいるのだがね」

「あはははははつ、流石は音に聞こえた天才軍師ですねえ。もしも想像の通りだとしたら、大した観察眼です！」

なんでもないようにランサーは笑つてみせる。おそらく彼女は、自分の真名を言い当てられることにさほど警戒心を抱いてはいない。自分の力量に絶対的な自信がある証拠だった。

廊下に等間隔で並んだ窓からは、工房と化した階下の工場全体が見渡せる。ランサーは不意に窓へ向き直ると、階下で機械の山に埋もれながらよく分からない作業に熱中している戦兎に視線を向けた。

「私には、人の心がわかりません。戦兎がなにを考えているのかも、そなたがなにを考えているのかも、本当のところはわからないのです。聖杯戦争という戦いにおいて、そなたらが本当に本心からケイネス殿のために戦おうとしているのかも」

「それは事実だ。確かに私の話には秘せざるを得ない情報も幾つかはある。しかし、ケイネス殿に不幸な未来を辿つて欲しくないと心から思っているのは、嘘偽りのない本心

だ。まだ疑わしいかね」

「疑ってはいませんとも。ただ、わからないのです。なぜ、そなたはケイネス殿のためにそうまでしようと思うのですか？」

ランサーは笑顔のまま、キャスターへと向き直った。

「言ったはずだ。ケイネス卿の勝利は、そのまま私の未来に影響する。ここでケイネス卿に勝って貰わねば、困るのは未来の私なのだ」と

「なるほど。ならば自分で聖杯を獲って、自分で自分の未来のためにその力を行使すればいいではありませんか。聖杯を獲ればどんな願いでも叶えられるというのに、わざわざケイネス殿を勝たせるなどという遠回りをする理由が？」

「それは……」

返答に窮し、言葉を詰まらせる。目の前で微笑む少女の感情が、キャスターには読み取れない。本心が見透かされてる気がして、キャスターは得体の知れない居心地の悪さに見舞われた。

「ああ、いえ。責めているわけではありませんよ。ただ……私は人というものを知りたいのです。なぜたかが他人のためにそうまで尽くせるのか。いやまあ、それが人である、ということは分かってはいるつもりなのですが……なにか特別な理由がおりなら、そなたの言葉で教えてくれませんか、キャスター」

数瞬の沈黙ののち、キャスターは口を開いた。

「……………私はもう、後悔をしたくない。確かに君の言う通り、私が自分で聖杯を得ればそれで済む話なのかもしれない。しかし、そのために恩師をこの手に掛けられるのかと問われれば……………私には、そんなことはできない。ましてや、此度の聖杯戦争において、私のせいでケイネス卿の才能が失われたという誹りを受けることは……………私には堪えられない」

「なるほど……………そういうものですか。そなたの言い分はなんとなくわかりました。ですが、ええ……………なればこそ、安心なさい」

「なに……………?」

「この私がいる限りケイネス殿は絶対に死なせませんよ。聖杯を獲るのは、ケイネス殿とこの八華のランサーです。そなたの望みは正しく叶えられましょう」

ランサーは淀みなくそう言うてのけると、一切の銜いのない花のような笑みを浮かべてみせた。瞬間、キャスターはその美しく玲瓏な微笑みに、ぞっとするものを感じた。まるで凶器を眼前に突き付けられているような感覚。凶器そのものと会話しているような剣呑な危機感。

キャスターは自ずと視線を反らし、階下のケイネスを見遣った。

「逆に問おう。君こそ、聖杯にいったいなにを託して戦おうというのかね」

「おや、そなたもケイネス殿と同じことを問うのですね。聖杯にさしたる意味などないというのに」

困ったようにランサーは笑った。そんなことを言われても、困るのはキャスターの方だった。

「聖杯に、意味がない？ それは、どういう意味で言っている」

「だって、報奨がなんであるうが私は勝ちますし？ 今回はそれがたまたま聖杯だったってだけでしょように」

「……あいかかわらず、かなりの自信家らしいな、君は。呆れるよ」

「あつははは！ そうでもなければ軍神だなどと呼ばれはしませんよ」

微笑みをたたえたまま数歩進んだランサーは、キャスターの肩を追い越し、遠ざかってゆく。

「先程の問いに答えてくれた礼です。私も少しだけ、自分のことを語りましょう」
振り返ると、ランサーは数歩ほど歩いたところで、はたと立ち止まっていた。

「私とケイネス殿は、似ているのです」

「似ている……？ 君と、ケイネス卿が？」

「ええ。私もケイネス殿も、なにも特別なことをしてきたわけではありません。自分に為せることをただ当然のように為してきただけ。ただのそれだけで、私は気付けば軍神

とまで呼ばれていました……あつ、いえ、實際呼ばれたのは死んだあとですけど」

キャスターは顎に指を添え、小さく唸った。

「ああ、なるほど……そういう意味では、確かにケイネス卿もその境遇に当てはまるのかもしれないな」

「私は、当たり前をただ当たり前になんしてきただけ。万人にとつてそれは当たり前のことではなかったようですが、ともかく、およそ私の人生に不可能と呼べるものは存在しなかった。事実、生涯大きな戦では一度も敗走していませんし？ 私には敗走せざるを得ない側の人間の気持ちなどほとんどわかりません」

「うむ……うむ。なるほど。ああ、だんだん似ている気がしてきたぞ……」

幼き頃から神童と謳われ、手を出した分野のことごとくで成功をおさめ、若くして君主の栄光すらもその手に握んだ、時計塔の風雲児——ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。人生のすべてにおいて勝利と栄光を約束された勝ち組の人間と、ケイネスそうでない自分。ウェイバこちらの気持ちを知りませず、聴衆の面前でこつぴどくこき下ろされた過去の思い返すと、自分に非があつたとはいえ、胸のうちがぞわぞわとしてくる。

「……でも、ホントのところは、違うんですよ」

不意に、ランサーの声のトーンが軽く一段ほど下がった。

「違う？」

「ええ。私とケイネス殿は、似ているけれども、決定的に違うんです」

ランサーがくるりと首を回し、キャスターへと振り向いた。目と目が合う。口元は相変わらず緩んでいるものの、その目はなにかを訴えかけているような表情をしている、とキャスターは感じた。その微笑みは、キャスターに不思議と儂さを連想させた。

「それは、いったいどういう」

ランサーはもう一度、くすりと柔らかな笑みを浮かべた。

「ケイネス殿は、許嫁のソラウ殿を心から愛しておられる。ケイネス殿は、私と違って細かな物事に心から憤慨することができる。それがなを意味するか……わかりますか？」

「……心、か」

「ええ、その通りです。ああ見えて、私の主は誰よりも人らしい心を持つてるんですよ」
どんな言葉をかけてよいのか、返答に窮したキャスターに背を向けると、ランサーは再び歩き出した。

「似てはいても、私とは決定的に違う。ケイネス殿は、私と同じく、当然のように栄光の道を駆け抜けながらも、その実きちんと人らしい心を持ちあわせている。私は、そんなケイネス殿から、人のなんたるかを学びたいのです」

「それが、君の願い」

「ええ。私に願いがあるとすれば、ただのそれだけですよ」

もう、ランサーはキャスターの返答を求めてはいなかった。最後ににこりと柔らかく微笑むと、そのまま振り返らずに歩き去ってゆく。やがて突き当りの階段に到達した時点で、ランサーはその体を粒子へと変えて姿を消した。霊体化だ。

「ランサー……」

彼女が最後に見せた笑みが、キャスターの脳裏にこびりついている。嬉しくも悲しくもない、本心のうかがい知れぬ微笑み。普通の人間ならば、あんなふうには笑わない。あの微笑みにむりやり意味合いを持たせるなら——どこか思い悩んでいるような、複雑な笑みであったようにキャスターには思われた。

「……そうやって思い悩むその姿こそが、君もまた人の心を持っているという証じゃないのか」

結局ランサーに返す言葉を持たず、今更になつてぼやいたキャスターだったが、その言葉を受け止めてくれるものはどこにもいなかった。

冬木中の霊脈が集うと言われる円蔵山に入り、登山道はずれてしばし山中を進むと、いよいよ月明かりさえも届かぬ程に草木は鬱蒼と生い茂り、ビルドラの歩みを阻んだ。それでも木々をかき分けて進むと、やがて戦兎らはぼつんと開けた場所に出た。苔

むした石造りの祠が見える。目的地の印だった。

「あれを壊したら、遠坂に気取られる前にすぐに離脱するぞ。それでこちらの役目は終了だ」

突然の敵襲に備えて、既に赤と青の姿へ変身を済ませて進むビルドの後方からキャスターが声をかけた。ビルドラと同時進行で、ランサーとケイネスも指定された要石を破壊して回っている。予定通りであれば、向こうも今頃はこの円蔵山に配置された要石を破壊している頃だろう。

「あいつらがしくじってなきやいいけどな」

ビルドは軽口を叩きながら空き地へと進む。既に戦兔は、ここに至るまでに幾つかの要石を破壊して回っていた。霊脈にとつて影響の小さいものから順に破壊してきた。奇門遁甲の陣にアサシンがかかったならば、遠坂に気取られるのを少しでも遅らせるため、石兵八陣で幽閉し徹底的に排除した。あとは眼前の要石さえ破壊できれば、それで今日の破壊目標数は達成される。

「いや、待て……様子がおかしい」

「なに……？」

異変に気付いたビルドがその足を止めた。一瞬遅れて、キャスターも立ち止まる。

祠の前に積み上げられた土塊つちくれの中で、宝石ルビーが煌めいた。ルビーから生じた赤の魔力

が、稲妻のように土塊全体を駆け巡り、その姿を変えてゆく。土塊は急速に二メートルほど盛り上がると、人の形を成した。ごつごつとした岩の体を包み込むように、赤い宝石の装甲が形成される。土塊は宝石の体を持つ怪物ゴレムへと姿を変えていた。

全身を赤い宝石で補強したゴーレムが土の体で軋轢を響かせ、生物感のない咆哮をあげる。ルビーの体は、淡い月明かりを受けて真紅の煌めきを乱反射させていた。

ビルドも、キャスターも、さして驚きはしなかった。むしろ、ここまでアサシンを除いて大した邪魔が入らなかつたことの方が拍子抜けだったのだ。

「ルビーゴーレムの番兵か。流石に円蔵山まで入り込めば、少しは警備も厳重になるらしいな」

「はいはい、なんでもいいよ。再調整アップグレードしたビルドの性能を試す絶好の機会つてことに変わりはない。だろ?」

「ふ、それもそうだな。ここまで来たんだ、徹底的にやってしまえ!」

「了解。それじゃあ気兼ねなく、実験に付き合って貰うとしますか!」

ルビーゴーレムからは、敵意は感じるが人間らしい意思は感じない。おそらく、要石の祠に悪意を持つて近づいた敵を排除せよ、という単純な命令ひとつで動いているのだろう。旧世界に存在した自律行動メカガイデバイスとそう大差はない。ビルドの敵ではない。

調整したばかりの大剣型フルホトルバスターの武装を構え、ビルドは地を蹴り駆け出した。ゴーレムがそ

の巨大な拳を打ち合わせて前進する。互いの間合いへと踏み込むと同時に、ゴーレムは巨腕を叩き付けようと振るうが、ビルドはわざと体勢を崩して後方へと倒れ込み、拳をかわした。カウンターの要領で、ビルドは己の間合いへと勢いよく踏み込んだ。ゴーレムの胴体をフルボトルバスターの刃で横薙ぎに斬り裂いた。

「——ッ！」

「ほら、まだまだいくぞー！」

背中が完全に地面に設置する頃には、既に大剣のグリップが折れ曲がっていた。バスターブレードモードから、バスターキャノンモードへと瞬時に組み替えたのだ。二箇所に取り付けられたグリップをそれぞれ握り込み、ビルドはトリガーを引く。大口径の光弾が一発、二発、三発と続けてゴーレムの腹部で炸裂し、ルビーの体に亀裂を走らせながら後退る。

「よっつと！」

起き上がったビルドは、真紅のフェニックスボトルをシリンダーに装填する。電子音を鳴り響かせて、フルボトルバスターはボトルから抽出した炎のエネルギーで巨大な光弾を発生させる。トリガーを引くと、放たれたエネルギー弾は炎を振り撒きながらゴーレムへと直撃し、その巨体を後方へと吹き飛ばした。

一瞬遅れてフルボトルのエネルギーが炸裂し、舞い上がった炎がゴーレムの全身を蝕

んだ。全身がひび割れる。崩れかけた体で、それでも炎に巻かれながらも果敢に突撃してくるゴーレムを前に、ビルドは二本のボトルを取り出した。

「はいはいどんどんいきますよつと。お次はジャストマツチでーす！」

シリンダーに消防車ボトルと扇風機ボトルを装填する。ジャストマツチブレイクの発動だ。戦兔の言葉と一語一句違わぬ電子音が鳴り響くと、赤と青のエネルギーが渦を巻く。ゴーレムが戦兔の間合いに踏み込む間もなく、二色のエネルギー弾はゴーレムに着弾し、炸裂した。

水飛沫と突風が弾けて、ゴーレムを中心に暴風雨を発生させる。最前のフェニックスボトルの攻撃で燃え広がった炎は瞬く間に消し飛び、砕け散ったゴーレムの体が祠を巻き込み、ビルドが発生させたサイクロンにもみくちゃにされる。ゴーレムは既にその機能を停止していた。

風がやみ、落下した祠の中身めがけて、ビルドはフルボトルバスターの引き金を引いた。放たれた光弾が要石を粉々に撃ち砕いた。

「うーん、さつすが俺！　時間も設備も絶妙に足りてない環境でここまで再調整するなんて、やーっぱ凄いでしょ、最高でしょ、天才でしょーッ！」

「ああ、そうだな。そんなことよりすぐに離脱するぞ。予定通りなら、そろそろランサーも作戦を完了しているはずだ」

戦兎の歓喜の声をあからさまに適当に聞き流しながら、キャスターが要石のあった場所まで歩み出た。要石のかげらを蹴り飛ばして、地面に手を触れる。霊脈の流れを確かめているのだろうか、戦兎にはわからぬ世界の話だった。

「はいはい。それじゃ、とつとと撤収してランサーと合流するとしますか」

真紅のゴーレムは、核コアとなるルビーを穿たれ、その全身から宝石の輝きを失い、崩れ去った。最前まで人の体を形成していたゴーレムも、ただの土塊となつてしまえば、腕や頭、胴体の見分けもつかない。ただの土となつて、うず高く積み重なるばかりだった。

ゴーレムが戦闘をするのは、ほんの僅かな時間だった。ランサーという名の刃持つ暴風雨の前に、サーヴァントでもない自律兵器がまともな戦闘を演じられるわけもない。傷一つない体で、ランサーは槍をぶんと振り回す。黄金の閃光が、幾重か閃いた。それだけで遠坂の要石が置かれた祠は細切れと化して地に落ちた。

「まったく手応えのない。ここが本当に大切な要所であるならば、もつとまともな兵を置けというのに」

「ふ、そう言うなランサー。よもや要石の所在を看破されるなどとは思ひもよらなかつたのだろうよ」

木陰から、後ろ手を組んだケイネスがたつぷりと余裕を滲ませた笑みをたたえて姿を

表した。おそらく、この程度のゴーレムが相手ならば、ケイネスの月ヴォールメン・ハイドラグラム 靈髓液でも十分に相手取れただろう。この分なら、今頃戦兎らも特段苦戦を強いられることなく目的を果たしている頃合いだろう。

ランサーは戦いの後の爽快感など得られるわけもなく、心に満ちた空虚な物足りなさに乾いた笑みを漏らした。

だが、その空虚もすぐに燃えるような昂揚によつて上塗りされる。

「ッ！」

急速に接近する敵意と、隠そうともしない憎悪の気配を察知したランサーは、その強靱な脚力でもつて即座に地を蹴ると、月へ向かつて勢いよく跳び上がった。

「——オオオオオオオオオオオッ！」

憎悪に任せた絶叫を響かせて、短槍と長槍を構えた漆黒の騎士が飛来した。

刹那、月明かりの夜空にふたつの影が交差する。漆黒の二槍と、黄金の魔力を振りまくランサーの槍が激突した。そこから、僅か数秒の間に人智を越えた速度で槍と槍が激しく相克し、突風を巻き起こす。起こった風が木々を揺らし、ざわつかせる。一斉に小鸟が空へと舞い上がった。

両者互いに決定打を与えることなく、幾度目かの相克で槍と槍を打ち合わせると、互いに弾き合うように距離を取つて着地する。

「どうやら敵の襲撃のようだな、ランサー」

ケイネスの周囲には、既に水銀が蠢いている。不用意に間合いに踏み込めば、そのすべてを切断せんとばかりに月^{ヴォールメン・ハイドラグラム} 霊 髓 液は銀色の鎌首をもたげている。

「ええ、どうやら少しは骨のある奴が出てきたようです！」

白の和服を翻し、八華のランサーは嬉々として笑う。

相対する黒の槍騎士は、その双眸から夥しい量の血涙を流しながら、憎悪の雄叫びをあげた。まるで理性のない獣のようだとランサーは感じた。

「ふん、よろしい。ならば奴に刻み付けてやるとしよう。我らに鉾を向けることが、いつたいなにを意味するのかを」

ケイネスは新手の敵を睥睨すると、どこまでも冷徹に、鉄のように冷たい笑みを零した。

第14話 「忠節のブロークンナイト」

深夜の山中を、ふたつの影が駆け抜ける。

白の装束を翻して跳ぶランサーと、黒の影を身に纏った槍騎士シャドウランサーが、路面を穿ち、樹木の幹を蹴り砕きながら、常人が認識できる速度を遥かに越えた超高速で闇夜を駆け抜け激しい相克を繰り返す。鋼と鋼がぶつかり合うたび、破壊的な魔力の本流が突風となって木々をざわつかせる。ほんの一瞬の激突で、両者互いに十を越える剣戟の嵐をぶつけ合っていた。

「オオッ！」

短い雄たけびとともに、シャドウランサーが再び跳んだ。助走の必要はない。ただ一度地を蹴れば、それだけで最大加速に達する。シャドウといえど、歴戦の英霊としての実力に間違いはないことの証左だった。

「——ッ！」

両者、空中で相克する。突き出された赤の長槍を、ランサーは六又の銚で絡め取り受け流し、続く黄の短槍による刺突をも、祭剣で叩き落とす。ランサーはそのまま、祭剣を捨てた。瞬時に手の内に刀を精製すると、がら空きになったシャドウランサーの

胸を狙って突き出した。だが、ランサーの一撃はシャドウランサーには命中しない。

「ぐう——ッ」

刀の刺突よりも先に、シャドウランサーは爪先を跳ね上げ、下方からランサーの胃のあたりを蹴り上げていた。その反動で自身の体を落下させることで、シャドウランサーはランサーの攻撃を回避したのだ。

「少しはやるようですね」

普通は今の一瞬で終わっている。樹木の枝に体重など感じさせぬほどに軽やかに着地したランサーは、目を剥いてシャドウランサーを見下ろすと、上弦の月のようににいと口元を歪めた。

落下したシャドウランサーは、ひとたび地面に手をつくすと、獣のように這いつくばり、吠えた。セイバー戦で姿を見せたバーサーカーの少女以上に、狂戦士という印象がしつくりとくる。

地面を叩いて跳び上がったシャドウランサーは、宙で身を翻すと、弾丸のように加速し上空にいるランサーへと槍を突き出した。ランサーは笑みを絶やさぬまま、鉾を構えて樹木から飛び降りた。

「はああッ！」

「ルオオオッ！」

再度、槍と槍が激しく交錯する。互いに致命傷を与えるには至らない。けれども、手数の多さでは、本能のみで戦っていると思しきシャドウよりも、八華のランサーの方が上回っていた。

互いに槍を弾き合い、間合いを取る。

一瞬のにらみ合いののち、互いに跳んだ。

勝負の瞬間を察したシャドウもまた、裂帛の咆哮をあげて突き込む。両者の間合いが詰まるのは、ほんの一瞬だった。互いの槍が激突するかに見えたその刹那、シャドウの槍は誰もいない空を切った。肉薄したその刹那、ランサーは腰を低くかがめて身を翻し、瞬時にシャドウランサーの背後を取ったのだ。

「貰ったッ！」

獐猛な肉食獣よろしく爛々とその双眸を輝かせて、ランサーは鉾を振るう。シャドウが纏う軽装の武者鎧は、動きやすさを重視したためか、胴体に鎧は身に着けていない。ランサーの一撃が極まれば致命傷だ。獲った、という確信があった。

「ウオオオッ！」

シャドウランサーは振り向きざまに赤の長槍を突き出すが、構うことはない。苦し紛れの長槍は、肩の鎧で受ければいい。ランサーはそのまま踏み込み、鉾を振り抜いた。ランサーの穂先は狙った通りにシャドウの胴体を抉り、肉を断ち、骨に達した。そこで

ランサーの動きがとまった。

今しがた捨て置けばよいと判断した赤の長槍が、ランサーの肩に装着された鎧を突き抜けて、その穂先が肩の肉に突き刺さっている。鎧は、砕かれたわけではない。敵の槍が鎧など最初からなかったようにすり抜けて、その穂先をランサーの肩を貫通しているのだ。

「なッ」

敵の反撃が見抜けなかったわけではない。状況判断に間違いはなかった。槍そのものに付与された特殊能力を勘定に入れなかったことによる失態だ。

脇腹に一撃を叩き込まれたシャドウもがくりと態勢を崩したが、これでは相打ちだ。ケイネスに合わせる顔がない。

このままでは終われない。

肩に突き刺さった槍を引き抜こうとするシャドウの動きに合わせて、ランサーは体を捻った。吐息とともに、力を含めるタイミングをぴったりとシャドウに合わせる。

「——アアッ!？」

最前までと比べ、ずいぶんと間の抜けた声を上げながら、シャドウはその身を宙へと舞い上げていた。ひとりでに回された。ランサーの肩から槍を引き抜こうとした力を、そのまま返されたのだ。

「覚悟ッ！」

頭から地へと落下しようとするシャドウの胴体目掛けて、再び銚を突き出す。まともに決まれば直撃コースだ。けれども、その一撃はシャドウが咄嗟に構えた黄槍に防がれる。それでも構うものかと、ランサーは力を込め、銚を押し切った。

「でやあアアアッ!!」

「——ッ！」

槍による防御の上から力押しで弾き飛ばされたシャドウは、地面にしたたかに体を打ち付け、弾けたバネのように跳ね、ごろごろと転がっていった。

「はあ……はア——ッ」

荒い吐息を零しながら、ランサーは左肩に突き刺さった槍を引き抜いた。血飛沫が飛び散り、ランサーの白装束が赤く染まる。左腕の肩から先の感覚が、痛みと熱で掻き消える。

ランサーは珍しく表情を歪めた。尤も、歪んでいるのは目元だけだ。口元には引き攣った笑みがたたえられている。

怪我自体は大したことはない。霊基に及ぶ損傷がない以上、魔力さえ充填されればこの程度の外傷はそう時間をかけずに回復できる。それよりも、こんな醜態を晒してしまったこと自体がランサーにとっては屈辱だった。

「ぐ、ウウ……ッ」

一方で、手負いのシャドウもまた、脇腹から夥しい量の血液を流しながら立ち上がる。損傷を受けた箇所が、まるでモザイクでもかけられたように実態がぼやけていた。戦兎から話に聞いてはいたが、ランサーはそこで相手がまつとうな英霊でないことを再認識した。

「ランサーー！」

背後から、ケイネスの声がかかる。周囲に水銀を流動させながら戦場に脚を踏み入れたランサーの主は、ランサーが負わされた傷を見るや、あからさまに表情を歪めた。

「貴様ッ……なんなのだその醜態は!? サーヴァントの影ごときに遅れを取るなど……なにが日の本最強の戦国武将か！ 越後の軍神が聞いて呆れるわ！」

「いやあ、どうも敵の宝具にしてやられたようです、あはははは」

ランサーは苦笑した。生前味わったことのない辛酸を嘗めさせられたのだ。悔しくないといえば嘘になる。だが、事実が事実として受け入れる他ない。

「あ……ア」

シャドウはケイネスを凝視したまま、掠れた声で嗚咽を漏らした。見開かれた瞳から、血涙が堰を切ったようにどつと溢れ出る。様子がおかしい。ランサーはすぐに右手で鉢を構え直し、ケイネスを庇うように前に出た。

「ケイネス殿は後ろへ。まだ決着はついていません」

「ええい、そのようなことは貴様ごときに言われずともわかっておるわ!」

油断なく水銀を流動させながら数歩後退するケイネスの罵声を聞き流し、ランサーは微笑んだ。優しい笑みは一瞬だ。すぐにシャドウランサーに向き直ったランサーは、その一挙手一投足に注視する。

「聖杯、戦争……マスター……サー、ヴァント……——ケイ、ネス殿」

シャドウランサーは、血涙の滲んだ真紅の目で、ランサーとケイネスとを凝視している。最前までのシャドウランサーは、ただ目に映るものすべてに襲いかかる猛獣だった。けれども、今は違う。明確な理性を感じる。ランサーの主の名を呼んだことがその証左だ。

「嗚呼……俺は、いつたい……なにをやって——」

シャドウランサーは、片手で自らの顔を覆い、嘆いた。

サーヴァントにかけられた狂化は、死期が近づくと解除される場合があると聞く。よもや、ランサーから受けた痛烈な一撃が切っ掛けで狂化が解除されたのか、或いはケイネスを視界に捉えたことで狂化から解放されたのか、確かなことはわからない。わからないが、敵として立ちはだかるならば、倒す以外に道はない。

ひとまずランサーは鉾の穂先を下げて、声をかけてみることにした。

「その黒いランサー。そなた、もしかして今なら会話が成立する感じですか？」
顔を覆う指の隙間から、シャドウランサーの血眼が覗く。見開かれた瞳には、明確な憎悪の炎が感じられた。

シャドウランサーは顔からやおら手を離し、慟哭にも似た声を絞り出した。

「俺は……俺は、貴様らサーヴァントが……聖杯戦争に加担するすべてが憎いッ！ 冥利に憑かれ、騎士の誇りを貶めた亡者どもよ。貴様らは、貴様らだけは……断じて許すわけにはいかんのだ！」

苦痛に悶えるように、吐き出すようにシャドウランサーは怨嗟を叫んだ。その語に、ランサーは心当たりがない。誰に向けてよいかわからない怒りと憎しみを眼前の敵へ向けて発散しているように見受けられる。

人理に刻まれた英雄豪傑が斯様な影にまで成り下がりに、ただ怨嗟を撒き散らす化け物と成り果ててしまったという事実は、あまりにも忍びない。早いうちに引導を渡してやるのがせめてもの慈悲ではないかと思われた。

「ケイネス、ランサーー！」

バイクの走行音を伴って、後方から聞き慣れた声がかかる。ビルドを乗せたマシンビルダーはケイネスらの隣で停車した。後ろにはキャスターも乗っている。

ビルドはバイクから降りるや、血塗れのランサーの左腕を見て、次に視線をシャドウ

ランサーへと送った。

「この状況、もしかしなくても結構ピンチ？」

「いえ全然。私はまだまだ余裕ですよ、戦兎」

ランサーは左腕の傷などなんでもないようににこやかに笑ってみせた。強がりでもなんでもなく、ランサーは心の底からそう思っていた。

「キャスターよ、あの敵は君らの語る……」

「ええ、シャドウランサーです。しかし、よもやあのランサーがケイネス卿を襲撃してこようとは」

キャスターは苦虫を噛み潰したような表情で目線を伏せた。ビルドがキャスターの言葉を引き継ぐ。

「ああ、タイミング最悪だな。やることやったらとつとと撤退しねえと、いい加減遠坂に気づかれちゃうぞ。というより、もう気付かれてると考えた方がいいかもな」

「いや、私が言いたいのはそういうことではないのだが……まあ、それも間違っではないな。今回の作戦は遠坂に気取られる前に、一撃離脱でことを済ますことに意味があるのだから」

「それでしたらご心配なく。あの黒いランサーを速攻で仕留めることなど造作もないことです。というか、戦兎こそどうして此処に？ そなたの持ち場はこっちではないで

「しように、暇潰しでもしにきたんです？」

「あーもうそんな痛々しい怪我しながら強がってんじやないよ。ずいぶん派手に戦ってつから、心配して様子見に来てあげたんでしようが」

ランサーは一瞬きよんと目を丸くしたが、すぐに磊落に笑い飛ばした。

「あはははははははっ！ でしたら、やっぱり余計な心配というやつですね。だって私、負けませんから」

「……あつそ。ま、その様子じゃ俺の助けなんて必要なさそうだな」

「当然です。そなた、私を誰だと思ってるんですか」

「知らねえよ。まだ真名明かしてないでしょうが」

「おや、そういえばそうでしたね。なら、まあ見ててください。私がいかに強いか、ここらで証明してみせましょう」

ランサーはくすりと笑みを浮かべると、右手に握った赤の長槍に視線を落とした。シャドウランサーから奪い取った槍だ。もう一度ケイネスに視線を送り、一際にこやかに微笑むと、ランサーは赤槍をシャドウランサーへと放り投げた。

「な——」

足元に転がった赤槍を見て、瞠目したのはシャドウランサーだ。けれども、シャドウランサーが言葉を発するよりも先に、ケイネスが激昂し、怒鳴り散らす。

「なッ、なにをやっているのだこのたわけがッ！　せつかく奪った宝具を敵に返してやるなどと、痛みあまり気でも狂ったかランサー!?」

「いいえ？　私は至って正気ですよ」

「ならばなぜッ!」

「だって、このままではあんまりではありませんか。ケイネス殿に私が口だけの武将だと思われることも……左肩の借りを返さずにこの戦を終えることも。私はそのどちらも、我慢ならない」

　大気がじわりと熱を帯びる。うちから湧き上がる闘志がランサーの身を横溢し、熱気となつて漏れ出しているのだ。自由の効く右腕に再度鉾を握りしめると、ランサーはそれをぶんと振り回し、眼前のシヤドウランサーへと突き付けた。

「そなたには全力で戦つて貰わねば困るのです。その二槍を振るい、技工の限りを尽くして私に挑みなさい。私は——その上でそなたをポッコポコにして差し上げましょう!」

　シヤドウランサーは衝撃に打たれたように顔を上げた。

「お前はッ……この俺と、真つ向からの勝負に臨もうというのか」

「それでもしなきゃ死んでも死にきれないでしょう。なにやらそなた、英霊として譲れぬ矜持もお持ちのようすし?」

ランサーは屈託のない笑みで笑いかける。

マスターもなく、その存在そのものが茫洋とした状態の今のシャドウランサーなど、もはやそこらの悪霊と大差はない。決戦を挑んだところで、シャドウランサーの霊基はそう長くは保たないだろう。だが、だからこそこのまま終わらせるわけにはいかない。残る命を燃やし尽くしてでも、持てる武芸のすべてを尽くして挑んで貰わねば、ランサーの気がすまない。

「俺を……俺を、ひとりの英霊と認め……戦いを挑もうと、お前は、そういうのか」

シャドウランサーは、呆然と立ち尽くしたまま天を仰いだ。

ランサーにしてみれば今の軽い一言にそこまで大仰な意図はないのだが、それで事がスムーズに進むのなら、それはそれで不具合はない。ランサーは不敵な微笑みをたたえたまま頷いた。

「ええ、そういうことです。よもや断るなんて無粋な真似はしませんよね？」

目を細め、眉根を寄せ、シャドウランサーは決然と頷いた。次に目を開いたときには、とめどなく溢れ出ていた血涙はぴたりと止まっていた。

赤槍を拾い上げ、もう一度ランサーに向き直る。その双眸は、最前までの憎しみの赤に彩られた血眼ではなくなっていた。凄烈な戦場をあまたくぐり抜けて来た歴戦の戦士の瞳が、そこにはあつた。

「なにを勝手に話を進めているのだこのたわけが……！ 貴様はまともな状況判断もできんのか!? どう考えても今持てる全戦力で蹂躪し、急ぎ撤退するのが最善策であろうが……！」

後方からケイネスの誹りが聞こえるが、もはやランサーとしても引き下がることなどできるわけもない。既に臨戦態勢に入っているランサーに変わって、戦兎がケイネスの肩を叩いた。

「やめとけ、ケイネス。こうなつちまったらもう、なにを言つても無駄だ」

「なにが無駄なものかッ！ 今はこんなことで時間を取られている場合ではなかりょうに！」

「そんなことはランサーだつて分かつてる。だから、あいつは速攻で敵を仕留めるつて言つたんだろ」

「ぬ、ウ……」

ケイネスは黙り込んだ。戦兎が伝えんとする言葉は伝わったが、納得はしていない様子だった。

「俺が言うのもなんだが……お前のランサー、かなり強エぞ。やりあつた俺が言うんだから間違いない。ちつとは自分のサーヴァントを信じてみなさいよ」

「くっ……、ええい、五分だ！ 五分だけ待つてやる！ それまでに敵を仕留められね

ば、桐生戦兎、貴様にも戦線に加わって貰う！ よいな!？」

「はいはい。それでいいよな、ランサー!」

「ええ、ええ！ ケイネス殿の差配に感謝を!」

ランサーは即答した。むしろ、長過ぎるとすら感じたほどだ。片腕が使えないとはいえ、手負いの敵を仕留めるのに五分も要すると思われているのであれば、その認識から改めさせる必要がある。なおのこと闘志を滾らせて、ランサーは笑う。

「フ、話は決まったな」

キャスターが一步を踏み出した。地面に、青白く輝く奇門遁甲の陣が張り巡らされる。前方にいるランサーを、シャドウランサーをも飲み込み、奇門遁甲はこの戦場を中心として瞬く間に範囲を広げてゆく。

「この勝負、騎士の誇りを懸けた真剣勝負とお見受けする!」

キャスターは羽扇を再度振るい、決然と宣言した。

「であればこそ、古来より伝わる決闘に無粋なる横槍は不要ツ! よつて、立会はこのキャスター——諸葛孔明が公正なる立場で務めさせていただく。おのおのが各々方、よもや異論はあるまいな?」

「ええい、まったくもって異論だらけだが、こうなってしまうては是非もあるまい。此度の決闘は許してやる……—ただし、絶対に敗北は許さぬ! わかつておろうなラン

サー！」

「あははははははっ！ 誰に向かって言ってるんです、ケイネス殿。そなたは、己が引き当てたサーヴァントがいかにも有能であるかをまるで分かっていない！」

ランサーは磊落に笑った。

左肩の傷は今も癒えぬままだ。本来ならば魔力供給を担っているソラウから魔力を吸い上げ、とつくに回復して然るべき傷を、しかしランサーはそのまま勝負に挑もうというのだ。腕一本を封じられたところで、ランサーには自分が負けるなどという発想は微塵もなかった。

対するシャドウランサーもまた、脇腹を深々と抉られた傷口を癒やす術を持たない。未だ真新しい鮮血をどくどくと垂れ流し、地面に赤黒い水溜りを作ってはいるものの、既に傷口を覆うモザイクピクセルは消え失せていた。けれども、その口元には、ランサーと同じように笑みを浮かべている。

ここにいる黒騎士は、もはや最前までの悪霊ではなくなっていた。

「すべてを失い、なにもかもを呪い……ただ怨念を吠えるだけの悪霊と成り果てた俺が……よもやもう一度、騎士として誉れある戦いに挑めようとはな」

脇腹の傷などないように、シャドウランサーは二槍をぶんと振り回し、構え直した。

ランサーによって与えられた傷によって大きく生命力を奪われているシャドウラン

サーだが、それでも闘志は十分だった。シャドウランサーの周囲の気が歪む。残る僅かな魔力を、己の存在のすべてを燃やし尽くして、シャドウランサーは最期の決闘に挑もうというのだ。その熱が蒸気となって揺らめいている。

相手にとって不足はない。ランサーはとびきりの笑顔を咲かせ、叫んだ。

「風花雪月、月下に舞い散る白銀の花。八華のランサー——ここに推参ッ！」

「フィオナ騎士団が一番槍、デイルムツド・オ・ディナ——推して参るッ！」

名乗るが早いか、互いに跳んだ。

ランサーの槍とデイルムツドの槍が激突する。凄絶な二槍から繰り出される攻撃を、ランサーはしかし一步も引くことなく、たった一本の刀で打ち返し、弾き返す。まるで体重など感じさせないように地を蹴り、宙を舞い、デイルムツドを翻弄する。

僅か一秒もあれば、その刹那の間に常人の目には既に何度相克したかもわからないほどの剣戟が繰り返される。互いの間に最早言葉は不要だった。夜空に血の華と魔力の閃光を迸らせて、幾度となく打ち合う。

「あいつら笑いながら戦ってるぞ……引くわー」

ビルドの仮面の下で、戦兎が心底からのぼやきを零す。眼前で人間離れた激闘を繰り広げるふたりの剣戟は、ビルドの通常形態が到達可能な最高速度をゆうに越えている。それほどの相克を繰り返しながら、ふたりは笑っているのだ。マスターであるケイ

ネスに至っては呆れ果てて言葉もないという様子だった。

戦兎の目を一際引いたのは、ランサーの立ち回りだ。ただ速く、鋭いというだけでなく、今のランサーはなにやら闇夜を明るく照らす後光をも背負っているように見える。おそらく気のせいではない。ランサーは今、本当の意味で光を背負って戦っている。その神々しさすら覚える光の加護が、ランサーを守っているかのようだった。

戦況は、誰が見てもデイルムツドの不利だった。ランサーの動きが、あまりにも速すぎるのだ。ビルドとして、あんな化け物と戦っていたと思うと背筋が寒くなる思いだった。

「けど、シャドウランサーのやつ……なんか、楽しそうだな」

「——これが、私にできるせめてもの償いだ」

せめて邪魔者が入らないようにと奇門遁甲を巡らせるキャスターのささやかな独り言を、戦兎は聞き逃さなかった。

「なあキャスター、あいつやつぱり」

「ああ。あれは本来の聖杯戦争で、ケイネス卿が召喚していたサーヴァントだ」

過ぎ去った過去の亡霊、シャドウサーヴァント。今の聖杯戦争に関与していないシャドウランサーになにを償ったところで意味などあるまいに。

「……お前ってそういうとこ、ちよつと面倒くさいタイプだよな」

「そう言ってくれるな。実利はないが、意味のあることなんだ……私の中ではね」

「ま、実利がないってことを分かった上で、それでも意味があるとお前が感じてるのなら、俺はなにも言うことはねえよ」

キャスターの語を否定する気にはなれなかった。キャスターが抱えている事情を戦兎は詳しく知らないし、いちサーヴァントでしかないデイルムツド・オディナを相手に、果たしてキャスターが罪悪感を覚える必要があるのかもわからない。けれども、自分の中で蟠っているものを少しでも精算できるのなら、悪い話ではないと思えた。

キャスターは、しばしの黙考ののち、決然とケイネスに向き直った。

「ケイネス卿。この戦いが終われば、あなたに話したいことがあります」

「……それは、あのシャドウランサーに関する話か」

「ええ。その説明も、後で必ず」

どこか遠いところでも見るように、キャスターは目を細めた。

ケイネスは後ろ手を組んだまま、なにかを悟ったように視線を伏せた。

「あのシャドウランサーはな……私の名前を呼んだのだ。私にはきやつ記憶など微塵もないというのに」

「その理由についても、お話致します。我々は……まだ重大な秘密を、あなたに打ち明けてはいない」

「そうか。その秘密とやらが我らの同盟の破綻を招かぬことを、精々祈っておくとしよう」

「ええ……私も、同感です」

それがキャスターの選んだ答えならば、戦兎はなにも口出しをしようとは思わなかった。自分の中でなにかに決着をつけて、その判断に至ったのならば。

決闘の趨勢は、徐々にランサーに傾いていた。

互いに速度、技量ともに類まれなるセンスを持つていることは間違いない。片や左腕を実質的に封じられ、片や脇腹を抉られ十全なる体捌きを封じられた身。両者の間に、そこまで決定的な差は存在しない。

デイルムツドが繰り出す二槍の嵐を、ランサーはたった一本の刀を目にも留まらぬ速度で振るい受け流す。槍も刀も、傍目にはただ閃光が散っているようにしか見えはしないだろう。けれども、他ならぬランサーには、その槍の軌道がすべて視えていた。

「ウオオオツ!!」

「ハアアアツ!!」

凄絶な剣戟のさなか、槍を弾き返したランサーの刀が、瞬時に幅の広い祭剣に持ち替えられる。槍を受け流した刹那の間にデイルムツドの間合いに飛び込んだランサーが、渾身の力で祭剣を振り下ろす。刃はデイルムツドの赤槍にしたたかに叩きつけら

れた。

赤槍が地面に突き刺さり、ほんの一瞬動きを封じられたデイルムツドの腹部に、ランサーの蹴りが突き刺さる。

「が……はッ」

人間の脚力を遙かに越えた蹴りで吹っ飛ばされたデイルムツドは、大木に背を打ち付け、肺の中の空気を一気に吐き出した。

ランサーは空中で一回転すると、既に武器を薙刀へと持ち替え、振り上げて飛び掛かっていった。瞬時に敵の間合いに飛び込んだランサーは、薙刀を力いっぱい振り下ろした。

「まだまだ、まだ——ッ！」

大木が真つ二つに裂ける。けれども、その刃がデイルムツドの頭頂部を断つ前に、デイルムツドは神速たる速度で黄槍を突き出した。薙刀を捨てたランサーは、間合いの内側から右腕で槍を払いのけ、デイルムツドの刺突を受け流す。

互いに互いの武器を受け流し合い、既に持てる技量のすべてを出し尽くしたかに見えるその時、決着はついた。

「——私の勝ち、ですね」

デイルムツドの槍を振り払ったランサーは、既に新たな刀を精製してた。その手に握

りしめられた刀の切っ先が、デイルムツドの喉元に突き付けられている。

敗北を悟ったデイルムツドは脱力した。両腕に握りしめた二槍の切っ先が、地に落ちる。最前まで大気を焦がしていた戦意の熱が、すっと引いていく。

「見事だ、八華のランサーよ。よもや片腕一本で俺をここまで追い詰めようとは恐れ入る……ああ、お前にならば、ケイネス殿を任せられそうだ」

「……そなた」

デイルムツドの手元の二槍が、大気に溶けるように消えていく。

二槍だけではない。デイルムツドの霊基そのものが急速に減衰していくのが、ランサーには間近で感じられた。既に致命傷に近い傷を負いながら、それでも知名度補正と神仏の加護を味方につけたランサーを相手に、ここまで立ち回ったのだ。己の存在を保つための魔力など、とうに枯渇していてもなんらおかしくはない。

ランサーは立ち上がり、大木を背に崩れ落ちたデイルムツドに視線を向ける。ランサーもデイルムツドも、既に全身が血と泥で汚れきっていた。

既に消滅を始めたデイルムツドに、ランサーは問うた。

「なぜです。なぜ、自分が消えゆくその刹那にまで、そなたはケイネス殿を想うのです」
「それが、せめてもの矜持というものだ。なにも成せず、一度は騎士の誇りすら見失った俺だが……せめて最期くらいは騎士として」

気づけば、地面に張り巡らされた奇門遁甲の輝きは消失していた。ランサーの周囲に、ケイネスとキヤスター、ビルドが集まっている。デイルムツドは集まったそれぞれの顔を見遣った。

「そうか。ケイネス殿はもう、ひとりではないのだな」

「デイルムツド・オディナ。貴様はいつたい——」

「ケイネス殿。我が主よ。最期に……最期にこのデイルムツドに、騎士として誉れある戦いを許してください。感謝の言葉もありませぬ。どうか……主とともに最後まで戦い抜くことのできぬ我が身の不徳を、ご容赦願いたい」

「な、なにを言ってる……」

当惑し、返答に窮するケイネスだったが、その次の言葉を待つよりも速く、銃声が鳴り響いた。

その場は誰が反応するよりも先に、デイルムツドが弾かれたように跳び上がった。ケイネスを突き飛ばしたデイルムツドの胴体を、一発の弾丸が突き抜ける。

「ゴ、ハッ」

胸元に風穴を開けられたデイルムツドの口から、多量の血液が溢れ出る。遠方からの狙撃だ。魔力を使い果たし、神秘の加護も得られないシャドウサーヴァントには、近代兵器の一撃ですらも致命傷足り得るのだ。

「デイルムツド！」

片膝をつき、血を吐き散らすデイルムツドに駆け寄ろうとしたケイネスの肩を押し留めるようにビルドが掴んだ。刹那、真紅の影が風となつて吹き抜ける。

デイルムツドの頭部が、月下の空に舞い上がった。崩折れた首の切断面から夥しい量の血液が吹き出す、それもすぐにピクセルのモザイクに覆われ、ほつれ、デイルムツドの形自体がバラバラに崩れ去つてゆく。

「……アーチャーッ!!」

既に全員の背後へと回り込んでいた下手人へと誰先に振り返ると、ランサーはその敵の名を叫んだ。

白と黒の双剣を握りしめ、戦場に乱入してきた赤い弓兵を、その場の全員が認識した。突然の銃撃に全員が気を取られたその刹那のうちに、アーチャーはデイルムツドの首を跳ね飛ばしたのだ。

「ふん。虎の子の起源弾も、マスターに当たらんのでは意味がないな」

ビルドは原型を留めていないデイルムツドの亡骸に一瞥し、アーチャーに向き直つた。

「アーチャー……いや、アインツベルン。お前ら、またケイネスを狙つて……!」

「これは聖杯戦争だ。必要最小限の徒労で勝利を掴みに行くのは当然だろう」

「どこまでも卑劣な真似をツ……そなたらには、正々堂々と戦おうという考えはないのですか!」

ランサーの怒気を孕んだ誹りを受けて、アーチャーはなお冷ややかに笑う。アーチャーの視線の先には、最前までディルムツドだったデータの残骸があった。

「生憎と、その黒騎士のような殊勝な誇りなどは持ち合わせていない性分でね……だがまあ、本来の目的は果たせた。今回はこれで上々としよう」

アーチャーの褐色の肌には、生々しい傷が数多刻み付けられていた。けれども、ディルムツドの消滅と同時に、その傷の数々は淡い魔力の輝きとともに消失してゆく。同様に、ランサーに与えられた黄槍の傷も塞がっていった。

どうやら今回の主目的はシャドウランサーの討伐にあったと見える。おそらく、どこかでディルムツドと戦闘を交え、消えない傷の呪いを負わされていたのだろう。

「アーチャー……!」

くるりと踵を返したアーチャーに、ビルドはフルボトルバスターの銃口を向ける。ランサーも既に臨戦態勢に入り、鉾を握り締めている。左肩の傷もまた、既に治癒をはじめていた。

「お前、俺たちがこのまま逃がすと思ってるのか……!」

「随分と威勢がいいな、キャスターのマスター。だが、今の君たちに私と戦っている余裕

などあるのか？」

「——ッ！」

ちらりと一瞥をくれたアーチャーの瞳に、戦意は感じられない。ただ冷ややかな視線だけが向けられている。勢いを削がれたビルドの肩に、キャスターが手を置いた。

「……ここまでだ、マスター。これ以上ここで時間を浪費するのは得策ではない……寧ろ、我々はこの場に留まり過ぎた」

「……だそうだ。私としても無駄な戦闘は本意ではないのでね。そちらも精々、セイバーが出てくる前に撤退することをお勧めするよ」

アーチャーは既に、ビルドらを見てすらいなかった。後ろを振り返ることなく、嘲りにも似た声音でそれだけを呟くと、一足飛びに森林の闇の中へと姿を消した。誰も、追いかけるようとはしなかった。ケイネスとランサーのふたりは、憤懣やるかたないといった様子でアーチャーの消えていった西の方角を睨めつけていた。

誰もいなくなった円蔵山の戦場跡地に、赤と白のオッドアイが淡い輝きを伴って茫洋と浮かぶ。仮面の内側から呼吸を蒸気として吐き出しながら、白い装甲の仮面ライダーは残骸データと成り果てたシャドウランサーに視線を送る。

もはや英霊としての存在データは完全に破壊され、この場に散らばったバグピクセル

の残骸はまさしくただのデータの成れの果てでしかない。

白のライダー、ゲナムは紫色のパッド——バグヴァイザーを取り出すと、宙に弧を描くように振るった。シヤドウランサーの残骸データは、バグヴァイザーから放出された光に触れると、粒子へと変換され、吸収されてゆく。そう時間をかけずに、シヤドウランサーだったもののデータはバグヴァイザーの内部へと収まった。

「これでシヤドウランサーのデータも蒐集完了か。いやはや、まったくいい仕事してくれるねえ、あいつらは」

背後から投げ掛けられた声に振り返ると、真紅の装甲を身に纏ったブラッドスタークが、戦いの余波で倒れた木の幹に座り込んでいた。エメラルドグリーンのバイザーが妖しい輝きを放っている。

「……アーチャーをけしかけたのはお前か、スターク」

「まあな。アインツベルンってのはこれでよく働いてくれるんだ。ま、欲を言えばランサー陣営も纏めて始末してくれりゃあ万々歳だったんだが、贅沢は言わないでおこう」
スタークはさも愉快そうにくつくつと笑った。

アインツベルンといえば、表向きには遠坂に助力している体を取っているルーラーから見れば敵勢力だ。そのアインツベルンに許可もなく勝手に協力を要請するなど、黎斗からしてみれば慮外の出来事だった。

たつぷりと深く重たい吐息を零したゲムムは、そのオッドアイでスタークのバイザーを睨めつける。

「忠告しておくぞ、スターク。貴様がなにを企んでいるのかは知らんが、勝手な真似は慎め。あまり好き勝手に行動していると……寿命を縮めることになるぞ」

「ハッ、寿命……！　寿命ときたか！　仮にも一度は消滅させられた地球外生命体の俺に命を説くとは、傑作だねえ！」

スタークはさも愉快とばかりに膝を叩いて笑う。

ゆつくりとした足取りで歩を進めたゲムムは、スタークの襟元の装甲を掴み上げ、顔を引き寄せた。ゾンビのオッドアイと、深緑のバイザーがぶつかる寸前で止まる。

「お前がこうも好き勝手に立ち回れるのは、私のスポンサーとして、聖堂教会の権威を味方につけているからだ。その権威を手放したくなければ、少しは身の振り方を考えろと言っている……！」

襟元を掴むゲムムの手に、スタークの手が重ねられる。スタークは立ち上がると、深く息を吐き出しながらゲムムの指を装甲から引き離し、無理矢理降ろさせた。

「聖堂教会を敵に回すのは、俺にしたって旨くはないからな……その辺りは言われなくてもわかってるよオ」

「……璃正神父は既に石動惣一の動きを不審に思い始めているぞ。これがなにを意味す

るか、本当にわかってるのか？」

「おおそうか、そいつは困った。それじゃあ仕方ない。俺もちよつとは大人しくするかねえなあ？」

降参とばかりにスタークは両手を掲げると、ゲムムに背を向ける。肩にライフル形態のトランスチームガンを担ぎ直すと、スタークはふらふらとした足取りで歩き始めた。今夜はこれ以上会話をするつもりはない、という意味表示だろう。

「…………ふん」

ゲムムは鼻を鳴らし、懽然として立ち尽くした。

不意にバグヴァイザーの液晶画面に目を向ける。画面の内部には、眠りについたままの少女がいた。華奢な体になめらかな色合いの黒衣をドレスとして纏い、絹糸のような金髪を微かに揺らしている。

未だ調整中の彼女を完璧なキャラクターとして覚醒させるには、英霊としての存在を証明するためのデータがあと僅かに足りない。けれども、基礎データの構築自体は概ね終わっている。黎斗がその気になれば、起動すること自体はいつでもできる状態にあった。

黎斗の予定通りにゲームが進行すれば、彼女は最強のラスボスを守るために剣を執る完璧なる騎士士として目覚める予定だ。その事実を、協力者であるスタークは知らない。

未だ圧倒的なアドバンテージを握っているのは黎斗の側だ。それを思うと、少しは溜飲が下がる。

スタークが歩き去って行った方向を眺めながら、黎斗はゲームの仮面の下で冷ややかに笑った。

「まあいい。貴様がなにを考えているかは知らないが、せいぜい今のうちに策を弄しておくがいい……最後に笑うのは、この檀黎斗神なのだから……！」

黎斗の笑みは、次第に高らかな大笑いへと変わっていった。真夜中の山中に、黎斗の喜悅の哄笑が響き渡る。それを聞き咎めるものは、誰もいなかった。

第15話「明かされるトゥルース」

「いやあ、それにしてもアーチャーにかけられた呪いが解けてよかったよ。これでおたくらも万全の態勢で聖杯戦争に挑めるってもんだ」

目の前で膝を崩し、恩着せがましく笑ってみせる石動惣一なる男のことが、切嗣にはまったく信用ならなかった。切嗣の傍らに敷かれた座布団の上で静かに座っているアイリスフィールにしてもそれは同様だろう。

日ごろ、アイリスフィールが拠点として用いている屋敷に、数日前突然訪れた聖堂教会の石動を名乗る男は、今回の聖杯戦争に関する情報を衛宮陣営に横流しするという建前で定期的に屋敷に顔を出すようになった。実際、シャドウランサーの宝具で癒えることのない傷を与えられたアーチャーを戦列に加えるわけにもいかず困窮していた切嗣にとつては、石動の言葉に耳を傾けるのはそう悪いことではなかった。

ふと、アイリスフィールがちらと切嗣に目配せをした。切嗣は油断なく石動を睨めつけたまま、小さく首肯する。僅かなアイコンタクトのうち、アイリスフィールは切嗣に代わって口を開いた。

「今回はあなたが教えてくれた情報のお陰で、無事シャドウランサーを仕留めることが

できました。お陰でアーチャーの傷も既に回復していますし、それに関しては感謝もしています。ですが、私達にはあなたの目的が依然としてわからずにいます。いったい、私達にシャドウサーヴァントの情報を与えてなにをさせようというの？」

石動はシャドウサーヴァントの情報のみならず、ランサー陣営と同盟を結んだキャスター陣営と仮面ライダービルドの情報、アインツベルン城を乗っ取ったルーラーのサーヴァント、仮面ライダーゲンムなる存在の情報を寄越してくれた。見返りのない情報としては、あまりにも成果が大きすぎる。

「何度も言ってるように、シャドウサーヴァントつてのは俺たち聖堂教会にとっちゃすごーく邪魔な存在なの。だから、敵対してるおたくらに情報を寄越したってワケ。なにしろ、聖杯戦争を正しく運営することこそが俺たちの目的だからな」

テーブルを挟んで向かい合って座る石動は、表情ひとつ変えずに茶を啜った。当の石動本人も、自分が切嗣らからまるで信用されていないことを知っていながら、特に気にも留めていないように見受けられる。

「ならば何故ルーラーの情報まで寄越す。アレはお前たちの戦力なんだろう」

「そりゃあ、俺だつて悪いなあと思ってるからだよ。ルーラーの一存でおたくらの城を奪い取ることはなっちまったが、アレは聖堂教会の意思とは無縁だ。璃正神父も、まさかルーラーがアインツベルンの拠点を奪い取つてるとは露とも思つてねえだろうさ」

「随分おざなりな言い訳ね。お陰でこっちは戦略上の重要拠点をひとつ失っているというのに」

「だからこそ情報を教えたのさ。気持ちばかりのお詫びつてわけじゃないが、俺はおたくらとは仲良くやっていきたいと思ってる」

明らかな苛立ちを孕んだアイリスフィールの一言にも、石動に動じる様子はない。

深く息を吐いたアイリスフィールは、不服を隠すことなく石動を睨み返した。

「……いいでしょう。では、質問を変えます」

「どうぞ?」

「これは聖堂教会に所属する石動惣一に対する質問です。先日、そちらの言峰綺礼が妙な言い掛かりをつけて我が陣営の人間を襲った、と話に聞いています。それについてなにか釈明は?」

「それは俺に言われても困る。あれは綺礼のやつが勝手に先走っただけだろ? そういう、聖堂教会に対する文句を俺に言われてもねえ」

石動は困ったように首を振った。

「なんて無責任な……! あなた、それでも聖堂教会の人間なの?」

アイリの語尾は僅かに上擦っていた。流石の石動も罰が悪そうに眉を顰めた。

「いやあ、実は俺がここにいること自体、監督役の璃正神父にしてみりや想定外の行動な

んだよ。そんな俺が、聖堂教会の人間として正式な返答をするワケにやいかねえだろ？

俺の一存じゃ答えらんないこともあるってことは、悪いけど分かって貰わないと」

アイリスフィールは額を軽く押さえ、再び大きな嘆息を落とした。彼女に、この手の相手との交渉事が向いていないことは明白だ。切嗣は心中でアイリスフィールを労いつつ、続く質問を引き継いだ。

「つまり、お前の行動は聖堂教会に対する背信行為に当たるといふわけだ」

「まあ、そうなるな。別に表立って裏切つてやろうつて気はまだないが」

「……なるほど」

切嗣は一瞬の黙考を挟み、乾いた笑みを零した。とんだ茶番だ。この男が聖堂教会という組織に忠誠を誓っていないことは、もはや明確だった。

「目的がどうあれ、お前が実利を優先する人間だということとはよくわかった。今回はあくまでシャドウランサーの始末が最優先事項だった……だから僕たちをけしかけ、その目的を果たさせた。それ以上の目的はないと、お前はそう言いたいんだな」

「そういうこと。つてか、最初からそう言つてんだろ。信用ないねエ、まったく」

「だったらそういうことで構わない。お前の目的がなんであろうと、僕らも勝利のために利用できるものはなんでも利用するつもりでいる」

石動は感心した様子で頷いた。

「へえ？ 目的のためなら、この俺をも利用しようって？」

「そう言っている。お前がなにを考えていようと、最後に聖杯を掴むのは僕たちだ。その上で、お前が僕たちを利用するのなら、僕たちもお前を利用させて貰う……徹底的なギブ・アンド・テイクだ。僕らの間に信頼関係は必要ない」

「いいねえ、いいねえ、あんたは話が早い。取引をするなら、やっぱりあんたみたいなのやつに話を持ち掛けるのが一番だ。間桐のマスターを取引相手に選ばなかったのは正解だったよ」

手を叩いて、愉快そうに石動は笑った。きつと、その笑みにも石動の本心などは込められていないのだろう。この男を信用することは危険だと切嗣の本能は警鐘を鳴らしているが、戦いに勝利するためには利用できるものはなんであろうと利用し尽くし、どんな些細な要素をも味方につける必要があることを切嗣は知っている。毒を食らわば皿までとはよく言ったものだ。

「……今度は取引と来たか。やっぱりあるんじゃないか、お前にも目的が」

「まあな。腹の探り合いはここらにしておこう。俺の目的は、キャスターのマスターごと、仮面ライダービルド——桐生戦兔の排除にある。奴を排除できるなら、聖堂教会の情報なんざいくらでもくれてやる……どうだ、悪い話じゃないだろ？」

「それは、お前の個人的な因縁のためか」

「まあ、そういうことになるな。敵がビルドだけでいいなら、俺にだって似たようなシステムはあるから戦えないことはないんだが、サーヴァントを味方につけられちまうと、こつちもねえ？」

石動は困ったように苦笑した。

「なるほど、お前の目的は分かった」

かつて米軍によって開発されたパワードスーツが聖堂教会の派生組織の手に渡り、ここで人外の驚異に対する特殊武装へと改良されたという事実は切嗣も知っている。一部では、その強化装甲服を指してライダーシステムと呼ぶらしい。ビルドもおそらくはその類のシステムなのだろう。

ライダーシステムを用いる組織同士のいざこざに切嗣が首を突っ込む義理はない。返答は決まっていた。

「悪いが僕らは今すぐにビルドを排除するつもりはない」

「へえ？ これはまた驚いた。おたくらにしてみりや、邪魔な敵陣営を消すチャンスだったのにな？」

まったく驚いていない様子で、石動はわざとらしく目を丸めた。切嗣は淡々と返答する。

「キャスター陣営が遠坂の霊脈を奪い取ろうとしていることは僕らも知っている。遠坂

のセイバーといえば、すべての陣営にとって目下最大の驚異だ。それを排除するまで、奴らにはせいぜい働いてもらわなければならぬ」

「使えるだけ使ってから排除するってワケか。けど、だったらなんで昨日はランサーのマスターを狙ったんだよ。ランサーだって、セイバーに対抗する立派な戦力じゃねえのか」

「単純に、戦力的な脅威度で見ればビルドよりもランサーの方が上だからだ。キャスターが遠坂の霊脈を奪うだって？ ああ、結構なことだ。だが、それでランサー陣営にまで力を付けられては本末転倒だからな」

石動は納得した様子で深く頷き、拍手を打った。

「流石は悪名高き魔術師殺し、堅実な戦略眼だ。なるほどねえ、あんたの中では、既にセイバー、ランサー、キャスターともに攻略法が確率されてるってワケだ」

実際、切嗣にはセイバーと真つ向から戦う気など最初から毛頭ない。だが、遠坂から戦力を剥ぎ取れるのであれば可能な限り剥ぎ取っておきたいというのが本音だった。万が一、セイバーを失った遠坂が他のサーヴァントと契約したとて、霊脈から得られる魔術的な加護をすべて失ったとあれば、もはやそこらの一般マスターと大差はない。そして、遠坂から霊脈を奪い取れるのは、キャスター陣営において他にはなく、当のキャスター陣営の排除にさほどの労力はかからないと切嗣は睨んでいた。

「ま、断られちゃったんじゃ仕方ない。今回は諦めるとしよう」

「……随分と物分かりがいいな」

「駄々こねて要求呑んでくれるタチでもなさそうなんですね」

茶化すように肩を疎める石動に、切嗣は返す言葉を持たない。味方でもない相手と必要以上に馴れ合うつもりはなかった。

「それじゃ、俺はここらでお暇させて貰うとしよう。またなにかあれば、そのときはよろしく頼む」

切嗣の返答を待たずに、石動は立ち上がった。すぐにアイリスフィールも立ち上がり、部屋を出る石動に追従する。廊下に控えていた舞弥も合流して、ふたりに見送られて石動は屋敷を後にした。

しんと静まり返った室内に、ひとの気配がひとつ、増える。霊体化を解除したアーチャーが、切嗣の背後に佇んでいた。

「あの石動とかいう男と組むつもりなら、お勧めはしない。あの男は、おそらく言峰綺礼と繋がっている。信用するには値しないと提言させて貰おう」

「そんなことはお前に言われるまでもない」

たった一言で返すと、切嗣は静かに立ち上がった。切嗣はもう、武器でしかないサーヴァントと、必要以上の会話をするつもりがなかった。このサーヴァントに、切嗣の理

想が理解できないなら、話すだけ無駄だと断じたからだ。

無言のまま部屋を出た切嗣は、ちらと背後を一瞥した。赤い外套の弓兵は、別段なにを言うでもなく、ひとり節目がちに佇んでいた。

衛宮の屋敷を出た石動は、冬木の住宅街を歩きながら黙考する。

アインツベルンを丸ごと味方につけることができれば大きな収穫だったが、あの衛宮切嗣という男はそれほどおめでたい頭はしていないらしい。あの男は、石動惣一という人間をまるで信用していない。短い会話で、石動はそれをひしひしと感じた。

「ま、言峰綺礼の身内ってんじや仕方ねえか」

後頭部で両手を組みながら、石動はぼやいた。

衛宮と言峰の間に確執があることは理解している。それは黎斗が記録していたデータにも記されていた。

これからじつくり十年の歳月をかけて、言峰は衛宮の名を受け継ぐ者と相争うことになるのだ。切嗣から見ても、言峰は因縁の相手ということになる。そんな人間と仲良くつるんでいる石動に、切嗣が心を許さないことなど考えなくてもわかる。

だけれども、それならそれで構わないと石動は思っていた。こうして切嗣に会いに行つたことには、意味がある。それが果たされたのだから、石動にしてみれば今回のア

インツベルンとのやりとりは必要なものだったと言える。

石動は鼻歌を口ずさみながら、踊るように軽やかな歩調で教会へと続く道を進む。

遠坂邸の地下に敷設された魔術工房には、聖堂教会との通信用に儲けられた蓄音機型の通信機が設置されている。通信機の向こうから聞こえる同盟者たる神父らの声を聞き流しながら、時臣は沈鬱な面持ちで項垂れた。

昨夜から行われているキャスター、ランサー両陣営による破壊活動のことで話題はもちきりだった。

『——しかしまさか、この短時間でここまで遠坂が管理する冬木の霊脈が解き明かされるとは。外様の魔術師がマスターとはいえ、腐つてもキャスター。最早捨て置くこともできませんまい』

蓄音機の朝顔から聞こえる璃正神父の声には、少なからず焦りが感じられた。

万丈龍我との会談を切り上げて拠点へ戻った時臣だったが、キャスターらの動きは予想以上に早かった。偵察に送り込んだアサシンは尽く連絡が途絶え、奴らの動向を嗅ぎ付けて対処をしようにも、時臣らが一箇所を突き止めたときには既に次の要石を破壊に向かっている。完全に遠坂の要石の位置を把握していなければできない、一撃離脱の戦法だった。

テーブルに片肘をつけて額を押さえ項垂れながら、時臣は声を発した。表情は暗澹と陰つてはいるが、それを通信機の向こうの神父に悟られぬように、努めて毅然と振る舞うことを心がけて。

「ええ、それは勿論です。冬木の地を管理するセカンドオーナーとして、これ以上、やっらの狼藉を見過ごすわけにもいけません。次にキャスターが姿を見せたとき、我々も勝負を仕掛けます」

『おお、ついに』

璃正神父の声が僅かに弾んだ。時臣も顔を上げる。

「そのためには綺礼、君のアサシンには重要な役割を任せたい」

『ハ。私めに務まる役目であれば、なんなりと』

朝顔から綺礼の声が聞こえる。こういうとき、綺礼は常に璃正神父の背後に控えていることを時臣も知っていた。

「ありがとう、綺礼。次にキャスターが姿を見せれば、アサシンを総動員してしまつて構わない。なんとしても奴らをその場に縫い付けて欲しいんだ。次は、奴らが離脱する前にセイバーで叩く」

『アサシンをここで使い捨てても構わないと?』

「ああ。既に七騎のサーヴァントが出揃つた今、情報面で尤も秀でているのは我が陣営

だ。まだ宝具を明かしていないサーヴアクトもいるにはいるが、キャスター陣営さえ排除してしまえば、それに勝る脅威はあるまい。アサシンの役目は、大凡果たされたと考えていい」

目下、時臣にとつて最大の脅威度を誇る陣営は間違いないキャスター陣営だ。

長距離狙撃宝具を持つアインツベルンのアーチャーも驚異とは言えるが、アサシンとの戦闘報告から考えるに、戦闘面でセイバーが遅れを取ることはありえない。おそらく日本の戦国武将であろうランサーにしても、知名度補正は厄介と言えるが、真つ向から戦えばセイバーの方が強いことは先の戦闘で既に立証されている。間桐雁夜のバーサーカーは論外だし、万丈龍我ライダールに至っては上手く立ち回れば味方につけることも難しくはない。どう考えても、最優先排除対象はキャスターだ。

『わかりました。では、引き続きアサシンには哨戒を命じ、キャスターらが現れ次第、導師に連絡致します……ただ』

蓄音機の方こうから、綺礼は罰が悪そうな声を出した。

『どうした、綺礼』

『……先日から続くアーチャー、及びシャドウランサー戦。それに、昨日の一戦で、既に相当数のアサシンが仕留められています。残存戦力はそう多くありません。街中に網を張るとなると、かえって監視の目が疎かになる恐れが』

「ふむ……なるほど」

アサシンは既に十分すぎるほどに当初の目的を果たしてくれたと時臣は考えている。ゆえに、ここでアサシンというカードを切り捨ててもキャスターを仕留める腹積もりだったが、どの道アサシンの残存数自体が底をつき始めているというのなら、もはや悩む必要もない。このままじわじわと数を減らされるくらいなら、最後にひとつでも役割を与えた方がマシだ。

「ならば、残る目ぼしい要石の要点に集中してアサシンを配置させて欲しい。おそらくキャスターは、完全に霊脈を篡奪するために、残る要石も破壊しに現れるはずだ」

『ハ。では、そのように命じておきます』

「……ありがとう、綺礼。重ねて礼を言うよ。アサシンの犠牲は決して無駄にはしない」
『勿体ないお言葉です。次こそが、キャスターの最後にならんことを』

璃正神父らとの作戦会議は、残るアサシンを総動員してキャスターらを足止めし、然る後、セイバーで一気に殲滅する、という方針で一応の決着を見せた。

書き換えられた霊脈に関しては、キャスター陣営さえいなくなれば、後からどうとも修復できる。セイバーの圧倒的戦力を思えば、作戦そのものに不安はない。けれど、時臣の心は晴れなかった。

——今のあの子は、まともな魔術師としての教育など受けてはおりません。

——間桐臓硯の道具として利用され、幼くして女としての尊厳すら踏み躪られ、苗床として生かされているだけの哀れな少女。

昨夜のバーサーカーの言葉を、時臣は心中で幾度となく反芻する。

間桐臓硯は、桜を己の野望を成就するための道具としてしか見ていない。当然のように与えられるべき魔導の薫陶もろくに受けられずに飼い殺されていると、バーサーカーは確かにそう言った。

にわかには信じがたい事実だが、あの局面でバーサーカーが嘘を言うとも思えない。嘘を嫌うサーヴァントの言葉だとすればなおのことだ。

「桜……」

誰にともなく、時臣は愛娘の名を呼んだ。

愛する我が子の幸せを思えばこそ、時臣は桜を間桐へと送り出したというのに、その願いを否定するような待遇を受けているとなれば、話が変わってくる。

間桐の翁に確認を取って、もしもバーサーカーの言葉が事実であったならば、もう一度桜を引き戻す必要がある。養子として出す家をもう一度選別し直さなければならぬ。

「——どうした、時臣。浮かない顔をしているな」

誰もいないと思っていた閉じた地下室の中で、不意に時臣以外の声が響いた。時臣ははっとして顔を上げた。

ぱたぱたぱた、と。小さな羽音とともに姿を表したのは、艶やかな黒と赤に彩られた無機質な蝙蝠。その身に闇のキバダークキバの鎧を内包した英雄王キングの盟友、キバツトバツトⅡ世だった。

キバツトは地下室の薄暗闇の中、黄金色の大きな双眸を炯々と輝かせながら、デスクの端で羽を休めた。

「……キバツトか。いや、どうということはないさ。ただ、キャスター陣営との決戦が近付いているのでね……少しナーバスになっているのかもしれない」

「そうか。俺にはもつと違う問題で迷っているように見えたが」

時臣は返す言葉を詰まらせた。キングほどの大英雄を召喚しながら、その主たる時臣が聖杯戦争になんら関係のない事情で迷っていると悟られることはあまり旨くないのではないか、そう思われた。

けれども、時臣の懸念に反して、キバツトは器用に下顎をずらし、ふ、と笑みを零した。

「そう身構えるな。俺はキングとは違う。妻や子供の身を案じることのできる男は、これで案外と嫌いではない」

その一言に、時臣は毒気を抜かれ、一瞬遅れて笑みを返した。

「驚いたな。君には既に私の迷いもお見通し、ということかな」

「ふふん、当然だ。いったい何百年人間を見てきたと思っっている」

「……ふ。敵わないな、君に嘘はつけそうもない」

「ああ、嘘など無意味だ。素直に話した方が楽になるぞ」

時臣の悩みの理由、その真実を告げるべきかでまず迷った。遠坂の当主ともあろう人間が、使い魔サーヴァントの使い魔ゴの弱みを見せることがいかに愚かか、分からぬわけではない。だが、それでもキバットが相手ならば、話してみるのも悪くはないのかもしれない、と時臣は思った。或いは、そう感じることもそのものが心が迷っていることの証左なのかもしれない。

「……養子として送り出した私の娘が、どうやら酷い仕打ちを受けている、という話を小耳に挟んでね。私はそんなことのために愛する娘を送り出したわけではないというのに」

「ふむ。なるほどな」

キバットは再びはばたくと、ふわりと宙に浮かんだ。時臣の周囲を旋回する。

「ならばどうする、時臣。娘を救いたいというのなら、俺からキングに口添えしてやつても構わんぞ。キングがその気になれば、いかな家系であろうと絶滅させることなど容易

「」

「いや、そう単純な話でもないんだ。魔術師が一度養子として送り出した娘惜しきに力で他者を蹂躪したとあつては、それこそ遠坂は魔術の世界からの誹りは免れないだろう？」

「ふん。建前や風体、というやつか。人間というのは相変わらず面倒な生き物だな」

キバットは面白くなさそうにぼやいた。ただ圧倒的な力のみで連綿と続く歴史と絶対的な掟を築き上げてきた吸血鬼ファンガイアの一族と、時臣が生きる魔術の世界では住む世界が大きく異なっている。それを理解しながら、時臣は微かに微笑んだ。

「それが、人間という生き物なんだ。例え遠回りになつたとしても、魔術師として、人間として、私は正しい道を歩んでいたい……君はそれを愚かだと笑うかね？」

「まったくもって愚かだな。だが、短い時を生きる人間だからこそ、そういう考え方をするとすることは俺も知っている。だから、付き合つてやらんこともないぞ」

「そう言つてくれるか。感謝するよ、キバット。これほど頼もしい味方もそうはいない」時臣は背筋を伸ばすと、燭台に逆さにぶら下がったキバットに目線を合わせた。

「桜は私が直々に間桐の翁に事実確認を取る。その結果として、もしも桜が目にも余るほどの仕打ちを受けていたなら……その時は、正式な手続きを経て遠坂家に呼び戻すつもりだ。だが、もしもその過程で争いになることがあつたら……その時は、君たちの力を

借りても構わないだろうか」

「よかろう。もつとも、俺としてはそうなつてくれた方が面白いのだがな」

「よしてくれ、キバット。縁起の悪いことは言うものではない」

時臣の苦笑を聞き流しながら、キバットは燭台から落下すると、再び空中ではばたき、舞い上がった。蝶のようにひらひらと舞いながら、時臣に背を向ける。

「では、俺からキングに話を通しておいてやる。邪魔をしたな、時臣」

「いや、待つてくれ。今の話は最悪の場合を想定したものだ。まだキングの耳に入れるには」

「違う、その話ではない」

キバットが空中で器用にくるりと振り返った。

「お前はこれからキャスター陣営を絶滅させるのだろうか？」

「ああ、そのつもりだが……」

「安心しろ、時臣。俺とキングを引き当てた以上、お前に敗北はありえない」

それだけ言い残すと、キバットは時臣の返答を待たず、背を向け飛び立っていった。絶対的な強者のみに許されたキバットの言葉は、時臣の胸中に蟠る不安を和らげるには十分すぎるほどに靦面だった。

しばしの沈黙ののち、時臣は自らの席から立ち上がった。使い魔にだけ話をさせて、

マスターである自分が顔を出さないので筋が通らない。時臣は自室を出て、キングの待つ王の居室へと向かった。

此度の聖杯戦争は、仮想空間で行われている偽りの魔術儀式である。

その事実をケイネスらに告げてから、早くも二分が経過していた。キャスターは目線を伏せたままケイネスの言葉を待ち、戦兔は腕を組んだまま壁にもたれ掛かっている。ランサーだけはいつも通りにこにこと微笑を浮かべたままソファに腰掛けているが、相変わらずキャスターにはランサーの考えは読めない。当のケイネスはというと、眉根に思い切り皺を寄せながら黙考に耽っていた。

“これで良かったのか、キャスター”

“ああ。嘘を吐き続けるにも限度がある。こうなってしまった以上はな”

“ま、キャスターがそれでいいなら、俺はなんとも言わねえよ。この同盟だって元はキャスターの提案で出来た同盟だし？ あとはなるようになれだ”

念話の交信相手である戦兔に視線を向けると、戦兔は表情は動かさず、小さく首肯した。戦兔は既に、同盟が決裂した場合をも想定しているのだろう。そのしたたかな考え方が、キャスターにはやけに心強く感じられた。

真実を打ち明けたのは、シャドウランサーが理性を持ってケイネスを主と認識し言葉

をかけたことに端を発する。

キャスターが経験した聖杯戦争の記憶を持ったサーヴァントがこの時間軸に存在するのは、どう考えても不自然だ。嘘で塗り固めてその理由を語ることはできるが、嘘に嘘を塗り重ねるほどに、事実との乖離は大きくなっていく。やがて事実との間に生じた綻びが解けたとき、重ね続けた嘘が大きければ大きいほど、ケイネスとの間に生じる亀裂もまた大きくなってしまふことを恐れての判断だった。

しばし流れた沈思の幕を裂いたのは、他ならぬケイネスだった。

「薄々勘付いてはいたのだ。君の話には、おかしな点が少なからず見受けられる」
「………という」と

「君は私の書齋で恋文の下書きを見つけたと言っていたな」

ケイネスがソラウへと宛てて書こうとしていた恋文の存在を、キャスターは思い起す。その身内しか知らぬ事実を知っていることが、キャスターが他ならぬエルメロイの派閥の間であることを示しているのだ。

「はい。それが、なにか……？」

「この私がそんな迂闊なものを残したまま、他人の手で部屋を漁らせるなど、断じてありえぬ話だ。思うに、未来の君が検めた私の書齋というのは……主がついに戻らなかった部屋なのではないか、とな」

瞬間、キャスターは衝撃に打たれたように瞠目した。

迂闊だったのは、キャスターの方だ。ケイネスはずっと、キャスターの説明に違和感を覚えながら、それでもキャスターが自らの門閥の身内であることを認め、なにも言わずにいてくれたのだ。

「……はい。仰せの通りです」

ケイネスは諦めたように嘆息した。

「やはりな。となれば、私がデイルムツドとともに聖杯を掴んだという話も嘘なのだろう？」

「ええ。あのシャドウランサーこそ、かつてのケイネス卿が使役したサーヴァント。主であるケイネス卿を守りたいという願いを懐き、しかし志半ばにして敗退した騎士の成れの果て」

「その怨念がサーヴァントの影となり、彷徨っていたというわけか」

キャスターは頷いた。

デイルムツドの願いは、騎士としての本懐を遂げることにあつたと聞く。此度の聖杯戦争に、望まぬかたちとはいえ参戦してしまったデイルムツドは、果たして満足して逝くことができたのだろうか。かつてキャスター^{ウエイパー}が聖遺物を篡奪したことが切っ掛けとなつて、ケイネスは破滅し、そのサーヴァントは非業の最期を遂げ、そしてエルメロイ

の門閥は没落した。

「それもすべては私の責任です。この場所でのあらゆる償いが意味を持たないことも、理解はしています。ですが、それでも……私は二度と、時計塔が誇る才能を失いたくは」
「貴様はなにをくだらぬことを言っているのだ、キャスター？」

ケイネスは冷笑をたたえ、キャスターの言葉を遮った。

「この世界が仮想現実だと？ 誰がそのような妄言を信じると言った。まったくもつて馬鹿馬鹿しい。度し難いほどに醜悪な戯言だ。現に私は今ここにいるというのに、貴様はなにを戯けたことを言っているのやら」

「それもあくまで仮想。本来のケイネス卿は——」

「——キャスター！」

ケイネスの一喝が、またしてもキャスターを黙らせる。

その声で怒鳴られると、昔日の日々が脳裏を掠めるのだ。そうすると、キャスターはなにも言えなくなる。偉大なる恩師に、キャスターは真つ向からの刃向かう術を持たない。

「貴様がなんと言おうとも、私は今、この場所にいる。自分で物事を考え、己の意思でこの戦場に立っているのだ。であれば、仮想現実だなんだとくだらぬ理由をつけて戦場から逃げ出すことなどできようものか、出来るはずがなからう！」

「……ケイネス、卿」

「誰になんと言われようとも、私は聖杯を獲得し、ただひとりの勝利者となって、時計塔へと凱旋する……これは絶対だ。ロード・エルメロイの名にかけて、その役目を放棄して逃げ出すことだけはできないのだよ、キヤスター」

キヤスターは言葉を失った。

これでこそロード・エルメロイだ、と改めて思い知らされた。

時計塔が誇る風雲児。天才の中の天才。貴族の中の貴族。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトとは、常に自信に満ち溢れ、いかな状況であろうとも敵に背を向け無様に逃げるような真似はしない。キヤスターが憧れた師は、まさしくそういう人間であった。

「キヤスター。君は確か、私が聖杯戦争を勝ち上がり栄光の階を確かなものとするため、全力で力を尽くすと、そう言ったな」

「……ッ、はい」

弾かれたように顔を上げる。ケイネスは平時となんら違いなく、不敵に口角を釣り上げて笑っていた。

「ならば、それでよいではないか。私は聖杯戦争を勝ち抜くために戦う。君はその私を補佐するために軍師としての辣腕を振るう。ただのそれだけであろうに」

「それが……ケイネス卿の出した答え、なのですね」

「ふん、私が答えを出すには余りにも粗末な問答であつたがな。君こそ、そのような妄言を口に出している暇があれば、少しでも次の戦鬪に備えた策でも練つておけばどうかね？
でなければ、君に力を貸した策士の霊基が泣くぞ」

「……ええ、ええ。まったく、仰る通りです……私はただ、私の成すべきを成すのみ。ケイネス卿の仰る通りでございます」

思わず笑みが漏れる。全身からどつと力が抜けるような感覚に見舞われた。

ケイネスとて馬鹿ではない。キャスターの語を、まったくの妄言だと断じているわけでもないのだろう。最悪の場合、同盟の決裂まで想定していたというのに、それでもケイネスはキャスターを信じ、今後ともに戦う道を選んでくれた。ここに至るまで、ともに修羅場を乗り越えてきたことで信頼関係が芽生えたのか、ケイネスの心境の変化については未だキャスターにも判然としない。だが、ケイネスがキャスターを認めてくれたというその事実が、今はただただ嬉しかった。

「——我が昔日の恩師。私が目指したロード。偉大なるエルメロイ。御身の才能は時計塔が誇る至宝です……今更改めて約束されることではないと思いだろうが、それでも宣言させて頂きたい。私は、必ずや……必ずや御身をお守りすると、ここに誓います。我が身に宿りし軍師の名にかけて」

震える声で、キャスターは深々と礼をした。

うむ、と深く頷いたケイネスは、そのまま黙り込んだ。腕組みをしたまま目線を伏せたかと思えば、不意に顔を上げる。なにかを悩んでいる様子に見えたが、やがてケイネスは口を開いた。

「——ああ、そういえば。君の田舎訛りの英語イングリッシュを聞いていて、ひとつ思い出したことがある」

「は……それは、いったい」

「私の生徒にひとり、君と似た英語を話す田舎者の少年がいたのであった」

途端に、キャスターは絶句した。

嫌な汗が一気に吹き出る。正体に気付かれたのか、そういう不安がキャスターの胸中で一斉に鎌首をもたげる。

ケイネスはキャスターに背を向けると、かつ、かつ、と踵を鳴らして数歩進んだ。

「その少年もまた、今の君に似て、度し難いほどに愚かな妄想癖を口にする男だな。まったくもって、魔導の探求には不向きと言わざるを得ない浅慮っぷりを持って余し、あまつさえ、この私に対し論文など提出してきた蒙昧極まる男だ」

「そ、それが……なにか」

心音が早鐘を打つ。生きた心地がしない。

ケイネスは後ろ手を組んだままちらりと振り返ると、その鋭い視線をキャスターへと寄越した。

「だがな、私はこれでも時計塔の花形講師だ。暇な時間などありはしない。どうでもよい落第生だと思っっている生徒の論文などに、多忙極まるこの私がいちいち目を通すと、君は思うかね」

「そ、それは……」

他ならぬキャスター自身が覚えている。

構想三年、執筆に一年を費やしたあの無駄に長つたらしい論文は、若さと無謀さゆえに魔術のなんたるかを理解しようとしてもしなかった昔日のウェイバーがしたためたところでもない黒歴史だ。他ならぬロード・エルメロイⅡ世が、若気の至りとはいえあんな駄文を書いていたことが生徒間で知れば、それこそ噴飯ものだろう。

ケイネスはキャスターの心を知ってか知らずか、冷やかな声で続ける。

「さして名門の出自でもなく、優秀な師を持つでもなく、人より特別優れた才能を持つわけでもなく。……だが、それでいて努力の量は人一倍ときた。才能に恵まれぬがゆえ、不要な努力を強いられてきた哀れな男と断ずればそれまでだが、しかし……これで中々見込みのある生徒でな」

「……………え」

ケイネスはふん、と鼻を鳴らすと、付け足すように続けた。

「まあ、まったく醜悪な妄想癖に踊らされる性分であることは、私にも如何ともし難いが」

もう、キャスターはなにも言えなくなってしまった。

自分が今なにを言われているのかも、混乱した頭では正確に受け止めきれしていない。ただ目を見開いて、ケイネスが続ける言葉を受け止めることしかできない。

ケイネスは最後、微かに、ほんの僅かに頬を緩めた。キャスターでなければ見落としていてもおかしくはない微妙な変化だった。

「だが、その悪癖を克服し、魔術師として正しい鍛錬を重ねれば……あの少年はいつの日か、それこそ君のような優秀な魔術師になるのかもしれない」

ケイネスはそれだけ言い残すと、キャスターに振り返ることなく歩いて行った。

なにかを言おうとしたが、喉が震えて、上手く言葉を発することができない。にまにまど笑みを浮かべながら歩み寄ってきた戦兔が、キャスターの顔を覗き込むようにして肩を叩いた。

「よかつたな、キャスター」

「……ツ、な、なにかだ」

「同盟が決裂せずに済んで」

「そ、そうか……それは、そうだな。ああ、よかったとも!」

取り繕うように返答する、戦兔に背を向ける。戦兔は悪戯を思い付いた子供のようになんまりと頬を緩めたまま、キャスターの前方へと回り込み、下から顔を覗き込んでくる。キャスターが慌てて背を向ける。戦兔ははしゃいで回り込む。あとはもう、その繰り返しだった。

「ケイネス殿、ケイネス殿。どうして急にあんな話をしたんです?」

自室に戻りソファに腰掛けたケイネスの眼前に、霊体化を解いたランサーが現れた。ランサーは後ろ手を組んだまま、腰を屈めてケイネスの顔を覗き込んでくる。ケイネスにしてみれば、サーヴァント如きが断りもなく主人の部屋に姿を表し、不躰な質問を投げてることは不快以外の何物でもない。

ケイネスはランサーを振り払うように手を振った。

「ええいまったく、なんと無礼な使い魔か! 貴様にいちいち説明してやる義理などないわ!」

「なんとご無体な。私は純粹に今のケイネス殿の気持ちを知りたいだけなのに!」

「それが不快だというのがわからんのか!?! 人の心を知りたいというならば、まずは人並みの慎みを学べというのだ、たわけ!」

「うーん、そういうのは一応仏門で学んだつもりなのですが、いざ対人となるとどうにも距離感が難しく」

ランサーは笑顔のまま腕を組み、顎に指先を添える。

この戦国武将は、人の心を知ることが己の望みであると言った。それ以上に願うべきものはないし、そもそも願いななどというものは自分の手で叶えるものだ、そうケイネスに豪語したのだ。

ケイネスとて、聖杯になにかを願いたいというわけではない。ただ、聖杯戦争という大掛かりな魔術儀式の勝者となったという証が欲しいだけだ。あらゆる勝負事を勝利で飾り続けてきたケイネスにとって、聖杯などという胡乱な代物には微塵も興味がななし、報奨がなんであろうがケイネスは勝つ。それは揺ぎのない事実だ。その認識はランサーと変わらない。

「そういえば、ランサー」

不意に、ケイネスは声のトーンを落とした。

「貴様、最後にシャドウランサーと何事かを話していたな」

「……ええ。彼がなにを思い、なんのために戦っていたのかが知りたくて」

「そうか……ふむ。答えは聞けたのか？」

「かの騎士がなにを懸けて戦っていたのかは、わかりました。痛いほどに伝わってきました」

したから」

ランサーは笑った。けれども、その笑みに心が伴っていないことを、ケイネスは知っている。ランサーはただ、万人はこうして笑うものだど知って、形だけなぞっているに過ぎない。今彼女が浮かべているのは、中身のない上辺だけの微笑みだ。

「そのせいでしようか。私は、アーチャーがああ騎士の首を跳ねた瞬間——平時ならば感じることもない熱を心のうちに感じました。最期までケイネス殿を想いながら果てたあの騎士の不憫を思うと、どうにも」

「ランサー……その時貴様が感じた熱とやら。それこそが、まさしく貴様がわからぬと宣う人の心なのではないか」

「そういうものでしょうか。まともな人間はああいう時に怒るものだと、私とて理解はしていたので……あのと感じたものが果たして、万人が抱く感情と同じものなのか、と問われると。私はただ、万人が思い描く『怒りの発露』とやらをなぞっただけに過ぎないのでは、とも」

あの瞬間、アーチャーに対し戦兎とともに怒号を飛ばしたランサーのことはケイネスも覚えている。けれども、あの時のランサーは——笑っていた。

言葉に込められた熱量も、瞳に宿った怒りも、すべて嘘ではなかったはずだ。それでもランサーの口元は笑っていたのだ。どうしてあんな顔ができるのか、ケイネスには

わからない。

「ケイネス殿。あの時の私は上手く怒っているように見えましたか？」

「あ、ああ……」

「それはよかった。人とはああいう風に怒るものと学びましたから」

返答に窮したケイネスは、歯切れの悪い生返事しかできなかった。それを受けてまた笑うランサーの痛々しい姿に、ケイネスは底知れない恐ろしさを覚えた。

ランサーには、ケイネスが今なにを考えているのかも見透かされているのではないか。そう思えてならなかった。それは、ケイネスがランサーを苦手とする大きな理由のひとつだった。

思わず視線を逸らすと、ランサーはやはりくすりと微笑んだ。それが見下した笑みや憐憫の笑みでないことはケイネスにもわかった。ランサーは柔らかな声音のまま、ほんの少しだけトーンを落とした。

「ですが、あの騎士にしてみれば……あの結末もそう悪い最期ではなかった、のかもしれないですね」

「なに？」

「私は見たのです。あの騎士が最期の瞬間に浮かべた表情は、怒りでも絶望でもなかった」

「ほう」

「あの騎士は、最後の最後まで、微笑んでいたのです。まるで戦に勝利し、家族の待つ国へと帰る男衆のように……私には、それがわからない。これから死にゆくというのに、かの騎士はあれで嬉しかったのでしょうか。たとえ死を迎えようとも、最後は騎士として槍を振るい、そなたを守る盾となれたことで……満足して、逝けたのでしょうか」

ケイネスはふん、と鼻を鳴らした。

「くだらぬ疑問だな、ランサー。当の本人が消滅した以上、今となってはなにを問答したところで答えなど出るわけもあるまい」

なぜランサーがときがあのような行動に出たのかは、ケイネスにもわからなかった。わからないことが腹立たしく、ケイネスの声に僅かな苛立ちの棘がこもる。

ランサーが所詮はただの道具。英霊の影法師に過ぎない。心があるように見せかけてはいるが、それは所詮、その英霊の生前のあり方をなぞっただけなのだろうと、そう思っていた。

だが、ランサーは現に、今こうして悩んでいる。孔明を名乗るキャスターはエルメロイの未来を守るために苦勞を背負い込み、シャドウランサーに至っては騎士としての本懐を遂げて、満足して逝ったという。

「心、か……」

彼らには、人間と同じように思考し、喜び、悲しみ、怒るまっとうな心があるのではないか。そもそもその話、万が一の話だが、ケイネス自身も仮想現実の存在だとするならば、その命の価値はここにいるサーヴァントらとなにも変わらないのではないか。

「……ええい、馬鹿な」

無意識のうちにそんなくだらないことを考えてしまっていることを自覚したケイネスは、懊悩を振り払うように勢いよくかぶりを振った。

「大丈夫ですか、ケイネス殿？」

「うるさい、くだらぬ心配は無用だ！」

伸ばされた手を振り払う。笑顔のまま腕を引いたランサーに、ケイネスは深く息を吐き出し、訪ねた。

「……ランサー。この世界のこと、貴様はどう思う？」

「というと、キャスターが言っていた仮想現実だかなんだかの話ですか？ でしたら、私もケイネス殿と同感ですよ。やれ虚構だ現実だと言われたところで、私は今こうしてここにいますし？」

「そうか……うむ、そうだな」

自分自身を納得させるようにケイネスは頷いた。結局、答えはそれしかないのだ。

ランサーもケイネスも、自分の意思で物事を考え、自らの目的のためにこの地に立つ

ている。それを今更、お前は生きた人間ではないからと言われたところで、聖杯戦争を投げ出す理由にはならない。

例え他人から生きることの意義を否定されようとも、今ここに生きるケイネスは、終わりが来るその瞬間まで生き続けることしかできないのだ。そう思い直し、ケイネスはこれ以上答えのない自問自答を繰り返すことはやめることにした。

伏せた目線の先に、ひよつこりとランサーの微笑みが顔を出す。

「あれっ？ ひよつとしてケイネス殿、ほんとは結構悩んでたりしますか？」
ケイネスはあからさまに嘆息を落とした。

「なにを戲けたことを言っている、この私がそのような妄言に耳を傾けるわけがなからう。だいたい貴様も貴様だランサー！ 人の心を知りたいという前に、そのデリカシーのなさを改めた方がよいのではないか？」

「むう。なんとも難しいものですね、人はこういう風に冗談を言って笑い合うものだと思っていたのですが……」

辟易する思いの中、返答をする気力すらも削がれたケイネスは大きくかぶりを振って、もう何度目になるかもわからない嘆息を落とした。対するランサーはやはり笑顔のままだ。

ランサーが真に人の心を知る日が来るのは、まだまだ先になりそうだと思われた。

石動が聖堂教会の拠点たる冬木教会へと戻ったとき、その帰りを出迎えたのはたったひとりの神父だった。

教会の天窗から降り注ぐ陽光をその大きな背に受けながら、璃正神父はその年老いた姿からは想像もつかないほどにはつらつとした声を、礼拝堂に響かせた。

「どこへ行っていたのかな、石動惣一くん」

はじめ、石動はほんの一瞬硬直した。けれども、すぐに平時の薄笑いを浮かべ、石動は礼拝堂の奥へと歩を進める。

「いやあ、ちよつと買物に。この地方都市じゃコーヒー豆の栽培も難しいから、せめていいものを探そうと思つたらどオーにも時間掛かつちやつて」

璃正神父はくるりと振り返ると、深く息を吐きながら、ゆるくかぶりを振った。

言峰璃正といえば、第八秘蹟会の司祭にして、前回の第三次聖杯戦争から続けて監督役を任されるほどの傑物だ。齢八十を越える高齢であると聞き及んでいるが、僧衣の薄布に隠された筋肉は、未だ衰えを知らず逞しく張り詰めており、敵に回せば厄介な人間であることは間違いない。

薄く開かれた双眸の奥で、鋭い眼光が獲物を見定めた猛禽類のように輝いている。その獲物とは、まさしく石動惣一自身のことだ。石動は既にその事実気付いていた。

「なぜ嘘をつくののです」

「嘘だつて？ なんの話をしてるのかわかんねえな」

「残念だが石動くん。私は教会の間諜に君を尾行させていました。もう誤魔化しは通用しないと考えた方がよろしい」

石動はわざとらしく、あからさまに戸惑つてみせた。

「尾行オ!? おいおい勘弁してくれよ、なんだつて仲間内でそんなことするんだよオ!」
「……君の行動には不可解な点が多すぎる」

「不可解な点? 言いがかりだろオ、そんなモン。俺の行動のいったいどこが不可解だつてんだよ」

礼拝堂の奥へと進みながら、石動は問い返す。

「このところ、君は頻繁にアインツベルンの拠点に顔を出していたようですが。いったいなんの目的であるような敵地へ赴いていたのか、納得のいく説明はできますかな」

「そりゃ敵情視察つてやつさ。遠坂に勝利を掴ませようにも、敵の情報は不可欠だろ? アサシンだけじゃ限界があると思つてねえ」

璃正神父の隣に並び立った石動は、天窓の向こうで輝く太陽を見上げ、目を細めた。既に陽は高く登っている。午前中は丸々衛宮の屋敷で過ごしてきたことの証左だった。

「ふむ。では重ねて問いましよう。君は単身敵地に乗り込み、見事なんらかの有益な情

報を掴むことは出来たのですか」

「そりやあもう、とびきり有益な情報を」

「ほう、面白い。それはいつたい——」

璃正神父が石動へと向き直ったその時、既に石動はトランスチームガンを神父へと突き付けていた。

「——やはりかッ」

「蒸血」

トリガーを引くと同時に、銃口から放たれた煙幕が石動の身を包む。黒煙は瞬く間に拡散し、ふたりの影を覆い隠した。やがて、もうもうと立ち込める黒煙が晴れた時、そこにいるのはもう石動惣一ではない。赤い装甲を纏った蛇の戦士、ブラッドスタークだ。

蒸血の前から既にスタークの殺意を感じ取っていた璃正は、長年の戦闘経験によつて裏打ちされた拳法の構えから、鋭い正拳突きを繰り出した。

「うおおッ、とオ……！　なんだこの速さはア！」

すんでのところで身を捻つて璃正神父の突きを回避したスタークは、僅かな刹那で璃正神父の戦闘能力の高さを実感し、素直に感心した。蒸血していなければ、今頃石動は意識を刈り取られていたことだろう。生身のままでは絶対に戦いたくない相手だ。

「本性を現した以上、最早言葉は不要と知るがいい……!」
「そいつは上等だ。こつちももう、あんたと話すことはなにもない」

続けて繰り返される突きの連撃をいなしながら、スタークは徐々に礼拝堂の奥へと追いやられてゆく。回避を続けながらスチームブレードをトランスチームガンへと連結させたスタークは、銃身に取り付けられているバルブを勢いよく捻った。

「あんたはもう、言葉なんか話せなくなっちゃうんだからな」

『DEVIデビLル STEAスチMム!』

最後の突きと蹴りの連撃を身を翻して回避したスタークは、振り返りざまにライフルの銃口を突き付けた。璃正神父は飛び退ろうと床を蹴ったが、銃口から放たれたのは銃弾ではなかった。銃弾であれば回避できていたのだろう。それが璃正神父の運命を分かち最大の誤算だった。

銃口から放たれた煙幕は瞬く間に広範囲に拡散し、璃正神父の身を覆い隠す。僧衣の袖で口元を覆うが、全身をネビュラガスに包まれた以上、最早逃げ果せることなど不可能だ。呼吸すらままならず、ガスを吸引し、肺を外宇宙からの異物で満たした瞬間、璃正神父はぱたりと動きを止めた。

「う、おとおお——ッ!」

短い断末魔の叫びののち、長年の鍛錬によって鍛え上げられた肉体が、無機質な機械

の体へと作り変えられてゆく。

丸々とした鉛色の体で、その巨腕を振り上げた璃正神父は、己の両拳をぶつけ合わせて低く唸った。のっぺりとした鉄の顔には、黒い穴が三つだけ穿たれている。

旧世界において、便宜上ストロングスマッシュユハザードと名付けられていた個体だ。

「流石に強敵と見込んでネビュラガスは多めにブチ込んだが、まさかなんの耐性もない人間が一発で強化態にまで変貌しちまうとはな。まったく、第八秘蹟会の神父つてのは化け物しかいねえのか」

悪態を吐きながらもくつくつと笑みを零すと、スタークは自らの配下と化した璃正神父スマッシュユの巨軀に馴れ馴れしく片肘を乗せた。目の前の怪人には既に、元になった人間の自我はない。

スタークがなにをしても、璃正神父はもう、怒ることすらできなくなったのだ。

「さあて。成り行き上とはいえやっっちゃまったことだし、俺もそろそろ動き出すとするかア！」

トランスチームライフルを肩に担いだスタークは、ぐつと背筋を伸ばして伸びをするのと、ゆつたりとした足取りで歩き出した。意思を奪われた鉛色の異形は、なにも言わず肅然と追従するしかできない。

ついに動き出した星の破壊者は、その凶行を誰にも見咎められることもなく、主人を

失った教会を背に歩き去っていった。

第16話「深層のデザイン」

桜はもう、なにかを感じる、ということ放棄していた。

体中の内と外を無数の蟲が這い回る。不快を叫び苦痛に涙を流したのも、今はもう随分と昔のことのように感じられる。

はじめのうちはまだ両親が姉か、ともかく桜の身を案じてくれる誰かがこの地獄から救い出してくれるのではないか、そういう希望もあった。助けて欲しいと願い、声が枯れるまで叫び、涙が尽きるまで慟哭した。けれども、桜の声は誰にも届かなかつた。

蟲に齧られはじめて三日もする頃には、もう声を出すことを諦めた。

遠坂の屋敷で過ごした日々の記憶は、今はもう、ひとつの時代が過ぎ去り、それよりもずっと遠い昔に触れたかどうか、それくらいの微かな断片としか感じられない。ああいう平凡な日常を人は幸福と呼ぶのだろうが、今はそれも夢幻のようにしか思えない。ただ、その記憶の断片の中で、今も鮮烈に桜の脳裏にこびりついているものがあつた。

それが、桜を送り出した父、時臣との最後のやりとりだ。

生まれ育った屋敷から引き離され、敬愛する家族から遠ざけられ、見知らぬ家に養子に出されるとなつたとき、桜は当然のように拒絶した。もう二度と、愛する母や姉とあ

の公園で遊ぶことはできないのだなどと、未だ五歳にも満たない桜が容認できるわけがなかった。

けれども、時臣が桜の願いを聞き入れることはなかった。魔導の家に生まれた以上、桜には負うべき責任がある。これは桜のためだ。桜の幸福を思つて、父は娘を間桐に送り出すのだ。時臣の言には有無を言わさぬ圧力があつた。一家の大黒柱である時臣がなにかを決断した時、遠坂の一員は誰もそれに逆らえないことを、桜は幼いながらに理解していた。だから桜は、首を縦に振るほかなかつたのだ。

——いい子だ、桜。

桜を無事間桐に送り出せるとなつたとき、時臣は安堵した様子で微笑んだ。その顔が、桜は忘れられない。

結局のところ、桜は体よく捨てられたのだ。

なにをやつても優秀で気品に溢れた姉に魔術を伝授するために、なにをやつても姉よりも劣っている桜は、魔術師として生きるため、人並みの幸福すらも剥奪されたのだ。

どれだけ願つても唯一の希望たる父母は桜を救つてはくれず、桜が懐いたあらゆる望みは踏みにじられ、叶えられることはない。だつたらもう、なにも考えず、ひたすら心を虚無に沈めてこの地獄をやり過ぎた方が幾分マシであると、幼い桜は痛感した。

いつからか桜は己の心を殺し、子供らしい希望を口にするとはなくなつた。

「なんだよ、これ……なんで、あんな小さな子供が、こんな目に遭わされなくちやなんねエんだよ！」

雁夜の案内で屋敷の地下に敷設された工房へと足を運んだ万丈は、今まさに蟲に嬲られ、虚ろな瞳で天井を見上げる桜を見て、誰はばかることなく激怒した。

万丈はいま、間桐の屋敷に迎え入れられた客人という立場にある。ライダークラスのサーヴァントでありながらマスターをも兼任する万丈は、当主である臓硯にとつても無碍にあしらえる存在ではない。聖杯戦争において、雁夜が同盟相手に選んだ男、という名目があれば、屋敷に忍び込むこと自体はさして難しいことではなかった。

「だから言つたら、ライダー。狂ってるんだよ、魔術師つてのは。あんな小さな女の子を……ましてや自分の娘を、こんな地獄に放り込んでなんとも思わない。人の親のやることじゃない」

雁夜の言葉に込められた憎悪の意味を、万丈は理解した。どうしてあれほどまでに時臣を憎むのか、どうして自分の命を犠牲にしてまで聖杯を求めなのか、その理由を。

「……それで、あんたが聖杯戦争に勝ち残ったら、あの子を解放するって……あのジジイはそう言ったのか」

「桜がこんな目に遭わされているのも、元を辿れば聖杯欲しさからだ。聖杯さえ手に入れば、臓硯が桜を苦しめる理由はもう、どこにもなくなる」

「それで……！ 聖杯を手に入れたらあんたはどうなるんだ！」

「放つておいても俺はじき死ぬ。だが、桜をあのだ獄から救い出せるなら……こんな生命に未練はない」

「……ンだよ、それ！」

項垂れた万丈は、胸の奥にわだかまるやりきれない感情をどこへやっていいのかもわからず、握り締めた拳を石壁へと叩きつけた。

「これがますたあの戦う理由です。ますたあはもう、引き下がることはできないのです……あの子を、救うまでは」

雁夜の背後で静かに控えていた和服の少女が、重たい口を開いた。今まさに、蟲蔵の底で夥しい数の刻印虫に体を齧られている桜を見るバーサーカーの瞳が、見るに耐えないとばかりにそつと伏せられる。彼女の思いもまた、雁夜と同じであることを万丈は悟った。

「もうわかつただろ、ライダー。桜を救うためには、聖杯を獲る以外に道はない。だから俺は時臣を殺す……あの男がいる限り、あの子は何度でもこんな地獄に放り込まれる」

「違う！ 遠坂さんが、こんなこと望むわけねエだろ！」

雁夜は白く濁った瞳をきつと尖らせ、吠えた。

「お前もあのと聞き聞いただろう、ライダー！ あの男は『死にも勝る修練』などという

ふざけた理由で自分の娘をこの地獄に放り込んだんだ！ 結局あいつは、父親であることよりも、魔術師であることを選んだんだよ！」

「俺には魔術だなんだって難しいことはなにもわかんねエ。けどな、少なくとも、遠坂さんがこんなことを望んでるなんて……俺は信じねエ！ 信じたくねエ！」

万丈にはもう、これ以上語るべき言葉はなかった。ふたりに背を向けると、腹部に蒼炎が宿った。燃える龍の息吹が、万丈の思いに応えてビルドドライバーを精製する。

「なっ……ライダー、お前まさかッ!？」

「俺は遠坂さんに言ったんだ。桜が酷い目に遭わされてんなら、俺が救う。誰も傷付けさせねえって。だから俺は、その約束を守る！」

「やめろ、力技で解決するなら最初からやっている！ それに、ここで強引に桜を奪ったとして、その先はどうする！」

「今度はあの人に約束して貰う！ もう二度と娘を酷い目に遭わせるようなことはさせねえって！」

「そんな無茶が通るならばはじめから苦勞は——ッ」

「無茶でもなんでも、それをやンののが仮面ライダーだろ！」

雁夜の言葉と静止を振り切って、万丈はクローズドラゴンにフルボトルをセットし、ベルトへと叩き込んだ。変身待機音が鳴り響き、閉鎖された地下空間にけたたましく反

響する。こんな騒ぎを起こせば臓硯に気取られるかもしれないか、そういう後先のことは既に万丈の頭の中にはなかった。ただこの瞬間、万丈の心と体を支配した熱に身を任せ、叫んだ。

「俺が、みんな救ってやるッ！」

この力は、ラブアンドピースのため、誰かの幸福を守るために使われるべき力だ。

ここで苦しんでいる少女を見捨てるようでは、万丈はきつとこの先二度と仮面ライダーを名乗れなくなってしまう。それではこの力をくれた戦兔に申し訳が立たない。

「変身ッ！」

背後から伸ばされた静止の腕を振り払い、万丈は眦を決し、石段から飛び降りた。

宙に放り出された万丈の身を挟み込むように精製されたスナップライドビルダーが、即座にクローズの装甲を造り上げる。瞬く間にクローズへの変身は完了した。ビートクローザーを上段に構え、振り上げた刀身にごうと唸る蒼炎が宿る。

「オオオオオラアアッ！」

万丈はクローズの仮面の下で、自分自身を奮い立たせるように叫んだ。燃え盛る炎で、まずは眼下の刻印虫を焼き払ってやる。

「ッ!!」

そのとき、猛り狂う猛獣を思わせる絶叫が、その場の全員の耳朵を打った。

寸前まで誰もいなかった階下の闇から突如姿を現し、弾丸のように飛び上がった全身甲冑の黒騎士が、手に持った漆黒の大剣に無数の赤い毛細血管を血走らせ、クローズへと躍りかかる。

「ッ!!」

刹那のうちに両者は激突した。蒼く燃えるビートクローズと、黒騎士の大剣が激しくぶつかり合う。ほんの一瞬の拮抗ののち、剣を弾き飛ばされたのはクローズの方だった。

「な……ア!?」

空中で姿勢を崩したクローズの胴体を、黒騎士の甲冑に覆われた脚が蹴り飛ばした。砲弾のような威力だった。胴体がくの字に折れ曲がる。吹き飛ばされたクローズは蟲蔵の石壁へ背中を打ち付け、壁に巨大なクレーターを刻み込んだ。

「が、は……」

地に落ちると同時に、肺の中に僅かに残った空気が吐き出される。

はじめの激突の際、たまらず手放したビートクローズは、地面に落下する前に黒騎士に掴み取られていた。見慣れた愛剣は瞬時にどす黒い闇に侵され、その刀身に真紅の毛細血管を血走らせる。

「なんなんだよ、コイツ……!」

「漆黒の剣と成り果てたビートクローザーを振り上げ、闇を纏った黒騎士が急迫する。すかさず地面を転がって回避すると、黒騎士の一撃は轟音を伴って石造りの地面を粉々に砕いた。」

「起き上がったクローズを、黒騎士の猛攻が襲う。後退しながら回避するが、矢継ぎ早に繰り出される連撃の速度は凄まじく、間合いは瞬く間に詰められた。徒手空拳となつたクローズは、いよいよ黒騎士に対抗する術を失つた。」

「両腕を前方に構え、防御姿勢を取つたクローズを、黒騎士の一閃が襲う。強大な膂力から繰り出される一撃は、クローズの装甲を容易く斬り裂き、血飛沫を思わせる火花が空に散る。」

「うおおおおお……ッ!!」

「防御姿勢を崩され、から空きになった胸部を袈裟懸けに斬りつけられたクローズは、装甲を爆ぜさせ、火花を噴出させながら後退し、崩折れた。」

「強制的に変身解除へと追い込まれた万丈の胸部を、黒騎士の鉄の足が踏み躪る。」

「ぐ、お……ッ」

「ライダー!」

雁夜の声が、飛びかけた意識を現実へと引き戻す。倒れ伏した万丈に、黒騎士は追撃をかけようとはしなかった。顔を上げた万丈は、黒騎士の姿をはじめてまともに直視した。一瞬遅れて、万丈は自分が敗北したことを悟った。

万丈を打ち負かした黒騎士は全身を一分の隙もなく甲冑で覆っていた。顔を覆うフルヘルムの兜のスリットの奥には、鬼火のように爛々と燃える不気味な双眸の輝きがあった。

「少しは己の実力というものが知れたかのオ、ライダーよ」

無数の虫が軋みを上げるような不気味な忍び笑いを漏らしながら、蟲蔵の階段を一人の男が降りてくる。萎びた老人の矮躯とは裏腹に、やせ細った髑髏のような顔には底の知れない剣呑な笑みが浮かんでいる。

「テ、メエ……間桐、臓硯」

「ほほう。些か短慮過ぎるきらいがあることは知れていたが、ワシの名前くらいは覚えておったか。善哉、善哉」

万丈には難しい言葉の意味は理解できなかったが、自分が馬鹿にされているとこのだけは雰囲気から察することができた。立ち上がるうと上体に力を込めた万丈を押しさえ付けるように、黒騎士が体重をかける。

「ッ」

「もうよい。下がれ、バーサーカー」

臓硯の声ひとつで黒騎士は沈黙し、万丈から奪い取ったビートクローザーを投げ捨てた。黒騎士の手を離れた漆黒の剣から、その刀身を覆う闇が晴れてゆく。元の彩色を取り戻したビートクローザーは、そのまま粒子となって大気へと溶けた。

「——臓硯。俺の耳に狂いがなければ、あんたは今そいつをバーサーカーと呼んだのか」
雁夜も、その傍らに控える和服の少女も、突如現れた見知らぬサーヴァントを油断なく睨めつけている。特にバーサーカーは、口元を扇子で覆い隠しながらも、その瞳は獲物を威嚇する蛇のように爛々と光らせている様子だった。黒騎士が少しでも雁夜に危害を加えようとすれば、即座にバーサーカーの炎が唸るのであることは容易に想像がついた。

「左様。このバーサーカーこそ、ワシが手ずから訓練した秘蔵つ子。そこな妖怪くずれとはサーヴァントとしての『質』が違う」

臓硯の杖が指す先にいるのは、雁夜が喚んだ和服の少女だ。あからさまに気分を害した様子で、清姫^{バーサーカー}は冷たい声を発した。

「……なるほど、確かにこと戦闘における技量だけならばわたくしよりも勝ってはいるようですが」

「カカツ、そう気色ばむでない。おぬしとて曲がりなりにも間桐のサーヴァント。雁夜

が聖杯を獲ると息巻いている限り、そう容易く切り捨てはせん」

バーサーカーはあからさまに眉根を寄せた。不快を隠すつもりもないらしい。なにかを言おうとしたバーサーカーを片手で制し、雁夜は問いを投げる。

「あんたは今回の聖杯戦争は捨ててかかると言つたはずだ。それがどういう心変わりですんなサーヴァントを味方につける気になった」

「いかにも。おぬしの言う通り、ワシの本命はあくまで次々回。今回は様子見に徹するものと決めておつたが……蓋を開けてみれば、ほれ、この有様よ」

臓硯の虚のような冷たい双眸が万丈へと向けられる。

「聖杯戦争とは、本来であれば七騎のサーヴァントで行われるもの。それが、今や八騎を通り越して、この冬木に召喚されたサーヴァントの数は十騎を超えておる……それどころか、斯様な一般人までもが英霊の座に召される始末」

「一般人で悪かつたな！」

吠え猛る万丈を嘲笑うように、臓硯は続ける。

「見ての通り、聖杯戦争のシステムは間違いなく狂いはじめておる。まずはその正体を突き止めることが寛容でな。そのためにも、まずはこの冬木を幽鬼の如く彷徨っていたこのバーサーカーから、ワシの傀儡にさせて貰つたというわけよ」

雁夜は鼻を鳴らした。

「なるほど。流石に令呪を考案したあんたの手にかければ、野良のサーヴァントひとり従わせるくらい造作もないってワケか」

「当然、タダというわけにもいかん。魔力供給の問題もあるでな。そこは桜の純血を啜った刻印虫をふんだんに注ぎ込ませて貰ったわい」

挑発的に、桜の純血を啜った、という言葉にアクセントを置いて語られた言葉を受けて、あからさまに表情を歪めたのは雁夜だった。

「カカカツ、元は消えゆく影とはいえ、瑞々しい魔力を惜しみなく注ぎ込んだワシのバーサーカーは、正規召喚されたサーヴァントとなんら違いはあるまい。或いは、遠坂のセイバーとも五分に戦えるかも知れんのか？」

臓硯の言葉の裏に潜んだ明確な悪意に、しかし雁夜は言い返すことなく、齒を食いしばって堪えた。クローズに変身した万丈がこும்一方的に叩き伏せられる様を見せ付けられた直後だ。力技に訴えたところで勝算がないことは、他ならぬ雁夜自身も弁えているのだろう。

「あんたがなにに興味を持つとうが勝手だ。だが、俺が聖杯を獲つたら、桜は解放して貰う。聖杯戦争のシステムが狂おうがなんだろうが、その約束だけは反故にはさせない……分かつてるよな、お父さん」

たつぷりと皮肉を込めて、雁夜は憎々しげに父を睨んだ。

「安心せい。間桐の当主として、約束に二言はない……まあ、おぬしにできるなら、の話じゃがの」

臓硯は現れたときと同じように忍び笑いを漏らしながら、踵を返した。無防備に背中を晒して、悠々と階段を登ってゆく。その態度が、雁夜や万丈など歯牙にもかけていないことの証左だった。

蟲蔵の重い鉄扉に差し掛かったところで、臓硯ははたと立ち止まった。

「ああ、ひとつ言い忘れておったわ」

「なんだ、今日は随分と饒舌じゃないか」

くるりと首を回し振り向いた臓硯は、口角を三日月のようになに、と歪めた。

「いやなに。おぬしには関係のないことやも知れんがの。遠坂の当主が、今更になって桜と面談したいなどと申し出てきおってな」

「なっ……」

雁夜と万丈が、ほぼ同時に顔を上げる。臓硯は謳い上げるように言葉を続けた。

「大方、誰かになにかくだらぬ戯言でも吹き込まれたんじゃろうて。じゃがな、桜は既に間桐の娘。今更時臣めが弄言を呈したところで、なにも変わることはあるまい……のう、桜よ」

臓硯の視線が、蟲蔵の中央の桜へと向けられる。桜はいつのまにか、己の脚で直立し

ていた。とうに生気を失ったその目で、桜は最前までの戦闘など、なにごともしなかつたかのように言葉を返した。

「はい、おじいさま。私はもう、間桐の子です。遠坂に帰るつもりはありません」

桜の冷たい声色からは、およそ感情の色は感じられない。心のない機械を彷彿とさせる、抑揚のない声だった。

いったいどれほどの苦痛を味わえば、幼い子供が心を殺してそんな言葉を言えるのか、万丈には想像もつかなかつた。誰も、なにも言えなくなつた。しんとした静謐の中、臓硯の軋むような笑い声だけが蟲蔵に響き渡つた。

徐々に日が西に傾きはじめている。雁夜は客間のソファに深く腰掛け項垂れていた。思考がぐるぐると渦を巻いて、落ち着かない。雁夜が知る限り、時臣はどこまでも実利を優先する生粋の魔術師だ。あの男に家族に対する情愛などがあるとは思えない。けれども、いま、時臣は雁夜とバーサーカーとの接触を経て、桜に会おうとしている。いったいどういう風の吹き回しなのか、雁夜には理解が追いつかなかつた。

「ますたあ。もしも、もしもの話を致します」

唐突に口火を切つたバーサーカーを、雁夜はまだ視力の残っている片目でちらと一瞥する。室内を落ち着きなく歩き回つていた万丈も、雁夜と同様にバーサーカーへ視線を

向ける。

「もしも、遠坂時臣が桜の現状を知り、あの子を遠坂へ連れ戻すという判断をされたなら……ますたあはいつたい、どうなさるおつもりなのですか」

「——ありえないッ！」

ほぼ反射的に、雁夜は声を荒げた。

「あいつは、自分の娘を自分の手で悪魔に売り渡したんだ……それが、今更、そんな、そんな都合の良い話があるものか……！」

時臣を否定したいという、ただその一心で雁夜は吠えた。

「ますたあ……」

「桜がああなったのだって、そもそもの原因は時臣だ……遠坂へ連れ帰ったところで、また同じことが繰り返されるに決まっている！」

雁夜の胸中は今、時臣を認めたくない、という思いで満たされていた。

時臣が桜を救う。そんな事実を認めるわけにはいかない。なにしろ雁夜は時臣への憎悪を糧に、体を極限まで酷使し、本来であれば十年かかっても足りない調練をたったの一年で積み上げたのだ。

桜のために。

その大義名分がなくなってしまえば、雁夜はもう、二度と立ち上がれはしない。桜か

らも必要とされなくなった雁夜は、ただ時臣への憎悪を吐き散らす悪鬼と成り果てて、同じく聖杯戦争に挑むただの敵のひとりとして討たれて終わる。そんな結末だけは、断じて受け入れるわけにはいかない。

「死ぬのは怖くない。未練もない。だが、そんな結末だけは……そんな結末だけは、認めるわけにはいかない……!」

「じゃあ、どうすんだ。桜を連れ帰ろうって遠坂さんを、それでもあんたは殺そうっていうのか」

「そ、んなこと……っ」

単純な問いであるはずなのに、答えられず、口を噤んでしまったことに、一瞬遅れて雁夜は驚いた。

絶望の日々の連続で心を閉ざした桜に、ようやく希望の光が差し込もうというのだ。それを、雁夜の憎悪ひとつで摘み取っていいはずがない。そんなことはきつと、葵も望まない。それくらいは雁夜にだってわかる。

「くっ……、俺は……ッ」

雁夜は頭を抱えた。

時臣は許せない。だが、桜には救われて欲しい。二律背反の感情が雁夜の思考を混濁させる。

「あんたもホントは分かっただろ。遠坂さんを殺したって桜は喜ばねエ。あんたがやろうとしているのは、桜から父親を奪うことなんだって」

「そんなことは分かっている！ それでも、桜には……あの姉妹にはまだ母親が、葵さんがいる！ 時臣さえいなくなれば、あの親子はまた、あの公園で笑って過ごせるんだ！」

「それを、桜は望んだのか。凜は、その葵さんって人は！」

「ッ」

なにか言い返そうとしたが、言葉は雁夜の口から出てこなかった。返答に窮した雁夜は、血走った目を見開き、万丈を凝視するしかできない。

万丈は、雁夜の肩を掴んだ。その真っ直ぐな視線が、じつと雁夜の瞳を見つめ返す。

「なあ雁夜。どんな理由があつたって、あんな小さい子から父親を奪うことが正しいことだとは、俺は思えねエ。それでもあんたがあの人を殺すっていうのなら……俺は、あんたと戦わなくちゃならなくなる」

「だったら勝手にすればいい。俺は、お前に味方になつてくれと頼んだ覚えはない」

「なんでわかんねエんだよ……！」

雁夜の胸ぐらを、万丈が掴み上げた。死にゆく雁夜には、万丈の臂力に逆えるだけの体力などは存在しない。万丈は、叫んだ。

「俺は、あんたと戦いたくねエんだよッ！」

真正面で叫ぶ男から、確かな熱を感じた。雁夜が失望した魔術の世界では、どれだけ探そうともついで出会うことのできなかつた魂の熱量。混濁していた思考の一切が吹き払われ、雁夜の意識のすべてが眼前の熱血漢へと向けられる。

「あんたがほんとは優しい人だつてことは知ってる！ あんたが桜のために自分を犠牲にしてきたことも知ってる！ だつたら俺だつて気持ちと同じだ……！ あんたと一緒に戦いたい！ 俺は、あんたと一緒に、あの子を救いてエんだ！」

「ライ、ダー……」

「そのために、俺と、あんたと、遠坂さんと……三人の力を合わせて戦う！ それのどこに問題があんだ！」

「な……ッ」

考えたこともない、考えようもしなかつた新たな可能性。

時臣を殺すでもなく、協力して臓硯に反旗を翻し、桜を奪い返す。あの圧倒的な戦闘力を誇るセイバーと、クローズに変身するライダーの力を借りれば、或いは。そういう考えが、一瞬雁夜の脳裏をよぎる。

「……だめだ。俺は、時臣を許せない。仮になにかの間違いで桜を救い出せたとしても、あの男は結局、何度でも繰り返す。幼い桜の幸福を、凡俗の一言で貶めたあの男は……！」

万丈は、雁夜の胸ぐらを突き放した。突然放り出された雁夜の背が、ソファに沈み込む。

「だったら、俺が遠坂さんの真意を確かめてきてやる」

「は——？」

一瞬、なにを言われたのか理解が追いつかなかった。

雁夜が当惑しているうちに、万丈は踵を返して去ってゆく。客間のドアの前に立つたとき、万丈は振り返った。

「もし、遠坂さんが二度と桜ちゃんを苦しめないと約束したら……そんなときは、あんたにも一緒に戦ってもらおう」

「はっ……無理だ、あの完璧主義の魔術師が、人に言われたくらいで自分の考えを曲げるわけがない」

吐き捨てるように諦念を口にした雁夜を一瞥した万丈は、それ以上なにも言わず、勢いよくドアを開け放ち、飛び出していった。

姿勢をただし、よれたパーカーの襟を整える。ふいに、バーサーカーが雁夜の隣に腰掛けた。

「ますたあ。ひとつ、わたくしに教えてくださいますか」

「……なんだ、バーサーカー」

穏やかな口調。狂戦士とは思えない少女の声音に、雁夜は深く息を吐きながら応えた。

「わたくしはかつて、大きな過ちを犯しました。愛憎に狂い、蛇の化生へと成り果て……愛する殿方を、この手で——」

「ああ知っているさ。有名な伝説だからな……俺がお前に殺された男の生まれ変わりだ、なんて話は馬鹿馬鹿しい与太話もいいところだが」

バーサーカーはくすりと微笑んだ。その微笑みの意味が、雁夜にはわからない。

「ただ衝き動かされるまま、わたくしは己の欲望を貫きました。生前のわたくしには、ほかの選択肢など目にも入らなかつた。憐れなことに、清姫という娘は、そういうふうにしかな生きられない女だつたのです」

「バーサーカー……」

安珍清姫伝説。

愛する男に裏切られた怒りから、燃える蛇の化生へと成り果てた少女の物語。ただ、男に振り向いて欲しがつた。それだけの祈りも届かず、嘘に嘘を重ねられ、最後には愛憎の炎で男を焼き殺し、自らの命をも絶つてしまった、あまりにも壮絶な人生。

雁夜が喚んだバーサーカーとは、その安珍清姫伝説に語られる蛇の化生だ。

彼女を召喚した夜、出会い頭にマスターである雁夜を安珍だと宣つたときには流石に

頭が痛くなる思いだったが、それでも雁夜は自分が安珍であると偽ることはしなかった。

雁夜は、いつだって自分の気持ちには正直に生きてきたつもりだった。魔術の世界に嫌気がさして逃げ出したことも、遠坂葵とその娘たちの幸福を心から祈ったことも、今こうして自分の命を消費してでも時臣に対し憎悪を燃やしていることも、すべては心のままに走り続けてきた結果だ。自分の生きざまに嘘をつこうと思ったことは、ただの一度だつてありはしない。

嘘を極端に嫌うバーサーカーのためにそうしようと思つたわけではない。今こうして、彼女と正面から向き合えるのもまた、雁夜が歩んだ人生がもたらした結果だった。そのバーサーカーが、真つ直ぐ雁夜を見つめている。

「——遠坂時臣を殺し、聖杯を獲つて、あの子を救い出したところで、これより死にゆくますたあが得るものなどにもなく、そうまでして幸福を祈った女性が、果たして心から喜んでくれるのかどうか……もう、それすら知る術はないというのに」

「……そんなことは、言われなくてもわかつている」

「では、なぜ。どうして、ますたあはそうまでして、死に急ぐのですか」

バーサーカーの問いは、雁夜の原初の祈りに触れるものだった。

雁夜はこれまでただ生きたいように生きてきた。自分の行動の結果になにが待つの

かなんて、十年前は考えようとも思わなかった。雁夜が魔術を拒み、欲望のままに放蕩した結果として、間桐は家督を継ぐものを失った。時臣はそんな間桐に桜を養子として引き渡してしまった。それが雁夜の人生がもたらした結果だ。だから、雁夜は戦うのだ。

贖罪のためといえれば聞こえはいい。だが、それだけでないことを雁夜自身も理解している。いつか失った恋慕の情を憎悪へと変えて、憎しみの炎を糧と成し、命を燃やして戦う男。

あまりにも不器用で、あまりにも馬鹿正直で、あまりにも愚かな人生。けれども、それこそが雁夜という人間の本質だった。

「ああ、わかってる……わかってるさ。俺は結局、どこまでいっても自分のためにしか戦えない。桜のためだなんだって言っても……結局俺は、こういうふうにしかな生きられないんだ。今までそうしてきたように、これから——きつと、俺は、自分の存在を懸けて、戦い続けることをやめられない」

脳裏を、雁夜が知るはずのない情景がよぎった。

たつたひとつの想いを胸に屋敷を飛び出し、裸足のまま野を駆け、森を抜け、大河すら渡り、化生と成り果てても己の生きざまを貫き通した少女の記憶。

いつか雁夜が夢に見た心象風景。

「——ああ、そうか」

ぼつりと零す。

あの夜、なぜ清姫が雁夜の召喚の喚び声に応えてくれたのかを、雁夜はいま、はじめて理解した。

バーサーカーは、静かに立ち上がった。薄い微笑みを浮かべたまま、その細い腕で雁夜を抱きしめる。雁夜の視界が、薄緑の布地で埋め尽くされる。バーサーカーの声は、微かに震えていた。

「どうか、どうかあなた様は、わたくしのように間違えないで」

抱き締め返すつもりにはなれなかった。どんな言葉を返すのが正解なのかが、雁夜にはわからなかった。清姫の人生を知ったからといって、彼女がなにを思うかなど、雁夜にわかるはずもない。慰めの言葉を吐いたところで、薄っぺらい上っ面の嘘にしかならないように思われた。

「あなた様には、まだ、選び取れる道があるはずです……その道を、どうか見失わないで」
既に機能を失いつつある表情筋を吊り上げて、雁夜は不器用に笑った。乾いた笑みを零す。

「選択肢があつたとしても……俺はきつと、俺の生きざまを貫くことしかできない。笑つちまうよな、憐れな男だ、つて。お前が選んだマスターは、そういう生き方しかで

きない男なんだ」

蟲に侵され、とうに感覚の薄れた細腕で、力なく清姫の背を撫でた。

「——だが、それでも。お前は最後まで俺に付き合ってくれるか、清姫」

「ええ、ええ。わたくしはあなた様のサーヴァントですから。いつかますたあが果てるその刹那まで、わたくしは、あなた様のおそばにおります」

これからどんな決断を迫られようとも、雁夜の望みは変わらない。ただ、大切な人たちが笑って過ごせる世界を取り戻したい。その過程でどれほどの矛盾を孕もうとも、それでも雁夜は、ただ前だけを見て突き進むしかできないのだ。

聖杯戦争の監督役という立場を任されている言峰璃正が、誰にも告げずに姿を晦ましのまま、夕刻を過ぎても帰ってこないという状況は、息子である綺礼からしても十分に異常と呼べる状況であった。

自室のソファアに腰掛けた綺礼の傍らに、見知ったサーヴァントが姿を表す。髑髏の面で素顔を覆い隠した長髪の女だ。多くのハサンの中から、綺礼がその能力を有用と見込んで側近として見繕った者である。

「綺礼様」

「どうだ、アサシン。父上の行方は知れたか」

「いえ。街中を探させているのですが、依然として」

「そうか、と綺礼は低く唸った。

間が悪い、と思わずにはいられなかった。アーチャーやランサーとの連戦でアサシンの数自体が減らされているということもあるが、次にいつ攻めてくるかも知れないキャスター陣営の侵攻に備えて、アサシンを要石の要所に配置していたことが仇となった。よもや監督役の拠点たる教会内にいる神父が、白昼堂々姿を消すことになるだなど予想だにしなかったのも事実だが、このまま監督役不在で聖杯戦争を進めるわけにはいかない。

綺礼は肺にわだかまった空気を吐き出し、目線を伏せる。

今にもキャスターが攻めてくるかもしれないというこの状況で、監督役は姿を消し、通信機越しに会話した時臣にはどうにも心ここにあらずといった印象を懐いた。懸念事項が多すぎる。

先の通話の折、時臣はここでキャスターとランサーを確実に始末するために、残るアサシンをすべて使い潰すという判断を下した。けれども、土地の霊脈を守るためとはいえ、未だ能力の全容を明かしていないサーヴァントがいる段階で、アサシンという手札をすべて切ってしまうことは、賢い選択だとは思えない。逆に言えば、それだけ時臣が焦っているという証左でもある。

「畏れながら、綺礼様」

「なんだ」

「今回のキャスター陣営との戦闘についてですが。綺礼様は、本当に我らハサンをここですべて使い潰すつもりでおいでですか」

「これまで粛々と諜報活動をこなし続けてきた髑髏の女からの問いかけに、綺礼は僅かに視線を揺らした。アサシンの声音に不満が込められていることは明白だったからだ。

「なぜそんな質問をする。私が今まで導師の意にそぐわなかったことが一度でもあったか」

「いえ……ただ、いつになく神妙な面貌で悩まれている様子でしたので、もしやかの配慮になにか思うことでもあるのでは、と。畏れながら勘繰らせていただいた次第にございます」

綺礼は笑みを零さずにはいられなかった。

「重症だな。お前にそんな勘繰りをさせるほど、私の悩みは顔に出ていたか」

アサシンは言葉もなく、微かに頭を下げた。肯定の意を示しているのだろう。

「言わずとも、お前の望みは分かっているつもりだ。聖杯に手を伸ばすことなく、ここで全滅させられることの是非を問いたいのだろう」

「は……仰せの通りにございます」

「私の決断は変わらない。我が導師の采配に異を唱えるなど、弟子としてあってはならないことだ」

正しく、美しくあれと願って生きてきた綺礼にとって、己の道を指し示してくれる恩師の判断に勘繰りを入れること自体が、下衆の行動にほかならない。なによりも、そんなことは璃正神父が望まない。

「では、衛宮切嗣の件はどうでしょう」

「……なに？」

予期せぬ名前が飛び出たことに、綺礼の表情から笑みが消えた。

「綺礼様は、個人的に衛宮切嗣の動向を監視していたことを、導師に告げられてはいないように見受けられます。失礼を承知で申し上げますが、その行動にはなんらかの利己的な理由があったのでは、と勘繰らずにはいられませぬ」

綺礼は黙り込んだ。

流石に聖杯戦争が始まって以来、肅然と綺礼のそばに仕え続けた側近だけのことはある。綺礼が下した命令のひとつひとつに意義を見出そうとし、その中でも整合性の取れない命令に対しては、内心で疑念を抱き続けてきたのだろう。考えてみれば、綺礼は敵である筈の衛宮切嗣をシャドウランサーから保護する、という理由で多くのアサシンを使い潰したのだ。アサシンが疑念を抱くのも当然と思われた。

綺礼はふと、いつかの石動の言葉を思い出した。

もしもいま、なんでも好きなことができるとしたら、自分はいつたいたいながしたい？

——その問いの解に最も近い位置に存在して人間こそが、他ならぬ衛宮切嗣という男なのだ。ここで時臣に従いアサシンを全滅させ、時臣のセイバーがアーチャー陣営を殺し尽くすようなことがあれば、綺礼が望む解に辿り着くことはできない。

綺礼は乾いた笑みをひとつ零すと、アサシンに向き直った。

「流石に鋭いな。だが、お前にしては浅慮な問いであると言わざるを得ない。ここで私がかもしお前に『謀反の意思あり』と判断したらどうする？ 次回の戦闘を待たず、ここで脱落してしまう可能性を考えなかったのか」

「その可能性も考慮の上で申し上げております。どのみち、このまま次回の戦闘を迎えれば、我らハサンの望みは潰えるのみでございましょう」

「なるほど。その覚悟あつての問い、というわけか」

アサシンは頭を垂れたまま、微かな首肯で答えた。

「……安心しろ。私にお前を責める意図はない。聞かれて困る相手は、現状不在だからな」

時臣と同盟を結んだ厳格なる父、璃正はここにはいない。監視の目がなくなった今、己が傀儡と向かい合う機会を得られたのはこれがはじめてだった。

「私には……私自身がわからないのだ。信心を得るためと称し、試練に身を置いたところで真理には程遠く、いかな克己と献身をもってしても、私を救う福音は鳴り響かず。挙げ句の果てに、師の目を盗み、敵である筈の男にまで解を求め彷徨うなど」

時臣に秘匿してまでアサシンを独断使用し、衛宮切嗣に迫ったのは綺礼自身が救いを求めていたからだ。自分は何者なのか。どうすれば満たされるのか。その手掛かりを、己と似た環境に身を置き過酷な戦場を巡礼し続けた男に求めたのだ。そんな自分勝手な目的のために戦闘に駆り出され、敵であるはずの衛宮切嗣を保護するためにアサシンの大半を使い潰してしまったことを思えば、アサシンの不満も納得できる。

「その意味では、私もお前と同じだよ、アサシン。だからわかる。お前の苦悩も、解に辿り着かんと願うその心も」

総勢にして九十にも迫る、分裂したハサン。うち、この世に生を受けたとき、最初に存在していた“一”とはいったい誰なのか。自分一人ではどれだけ考えあぐねても答えの出ない問答を、その解を、万能の願望器に託す。それが、百貌のハサンと呼ばれる“彼ら”の願い。

綺礼には、なぜ聖杯が自分に令呪を託したのかがわからない。けれども、なぜ自分の呼び声に歴代ハサンの中から“百貌”が応えたのかはわかる。

共感や同情を懐くつもりは微塵もないが、理解だけはできてしまう。

「——気が変わった。私からお前に提案がある……導師には内密にな」

或いはそれは、ほんのささやかな気の迷いか。未だ己の深遠なる願いがどこにあるのかはわからないが、それでももう少しだけ足掻いてみるのも悪くないように思われた。

アサシンは、綺礼から告げられる新たな指示に聞き入り、その髑髏の面を僅かに揺らした。彼女という「個」がなにを思うか、綺礼にはわからない。やがて短く了承の意を示したアサシンは、綺礼の足元に傅き、そのまま姿を消した。

第17話「誰が為のヒーロー」

切嗣が買い取った屋敷は、一般の人間が当たり前の生活をする上でなんら不自由がない程度には整備が施されていた。拠点としての意味しか持たない屋敷に生活水準を求めると切嗣は贅沢な性分ではないが、切嗣らはあくまでもたまたまこの地にやってきて、たまたまこの屋敷を買い取った一般人という触れ込みで冬木に留まっている。いつまでも廃屋のような屋敷のまま生活を続けることの方が、かえって不自然だった。

とんとん、とん。新調したばかりの襖が、リズム良く叩かれる。あらかじめ取り決められていた通りのリズムだ。

「入れ」

極めて単調に返答する。襖を開けて静かに入室したのは、切嗣にとって、ある意味ではアイリスフィールよりも安心できる相手だった。彼女のそばにいる限り、切嗣は己の卑劣さを恥じたり、冷酷さを憎んだりせず済む。切嗣にとって、それは一種の安息だった。

「教会の動きが妙です。礼拝の時間を過ぎても、言峰璃正が姿を現しません」

切嗣と舞弥の間には最低限の挨拶すらも必要ない。淡々と切り出された舞弥の報告

を受けて、切嗣は黙考する。

聖杯戦争の監督役の任を任されているとはいえ、言峰璃正は表向きにはまつとうな聖職者だ。敬虔な信徒である言峰璃正が、夕刻を過ぎても礼拝に姿を現さず、その影すらも見せないことは異常だった。

昼間、石動惣一が去ってからというもの、その行動を訝しんだ切嗣は舞弥に教会勢力の監視を命じていた。その結果報告のため、舞弥は切嗣の指示を待たず、デコーダーをブラウ管テレビに繋いだ。舞弥の使い魔の蝙蝠に括り付けたCCDカメラが捉えた映像だ。冬木教会の今日一日の動きを、早送りで見せる。映像に映し出された教会は、徐々に距離が近づき、大きくなってゆく。遂には小窓の内側の、無人の礼拝堂まで目視できるまでに至った。

「なるほど、これは確かに妙だな」

「ええ。仮にも教会は不可侵地帯だというのに、これだけ接近しても気取られないとなると、流石に」

切嗣が抱いた感想を、舞弥は的確に引き継いで口にする。彼女の観察眼は、切嗣と同等のレベルで状況判断ができる程度には仕上がっている。そう育て上げたのは他ならぬ切嗣自身だし、切嗣もその点において舞弥を深く信頼している。

だから切嗣は、彼女に問う。

「舞弥、君はこれをどう見る」

「可能性の話をするのなら……言峰璃正は既に始末されている、という見方もできるのではないかと」

切嗣は頷いた。予測した通りの返答だった。

「僕もその可能性を考えていた。だとすれば、下手人は——」

映像の中で、切嗣の見知った顔が、教会へと姿を現した。

「——石動惣一」

石動惣一は無人の教会へと正面から堂々と入り、礼拝堂の奥へと消えてゆく。おそらくは、教会地下の私室へと戻っていったのだろう。監督役の言峰璃正は姿を見せないというのに、その協力者を自称する石動惣一は変わらず教会に出入りしている。

なんのために？

そもそも、璃正神父のいない教会に、石動惣一はいつたいたなんの目的で出入りしている？

あの教会の地下で匿われている男は——。

それを考えたとき、切嗣は肺の中に溜まった空気を一気に吐き出し、頭を掻いた。一瞬遅れて、自分が柄にもなく焦っていることを自覚する。

「……切嗣。今しばらくは教会の監視を続けます。なにをするにしても、今はまだ判断

材料が乏しすぎる。功を焦るのは愚策です」

「ああ、そんなことはわかつてる。ここで焦って行動を急ぐのは魔術師殺しのすることじゃない」

脳裏に、あの男の影がよぎった。

己の目的のために、聖杯戦争すら蔑ろにして切嗣に迫いすがろうとした男の影が。

此度の戦争において、切嗣が最も警戒し、最も恐れている相手が、切嗣を標的に見据えて動いている。あの男は、言峰綺礼は、あのとき確かに切嗣を標的にして動いていた。それが、切嗣には恐ろしかった。

「もしも仮に、監督役の言峰璃正が始末されたとするなら……もう誰も、言峰綺礼を止められるものはいなくなる」

聖杯戦争のルールという枷から外れた綺礼は、必ずまた切嗣を襲撃するだろう。

事実、あの男は聖杯戦争のルールなど関係なく、自らの意思で切嗣に会いに来たのだと、自分でそう言ったのだ。遠坂時臣の存在など、あの男はきつと枷とも判断しない。切嗣には分かる。言峰綺礼とは、そういう男だ。

益体もない不安が、長年感じることのなかつた恐怖を駆り立てる。ただ人を殺す機巧としてののみあり続けられた頃は抱かなかつた類の感情だ。

いくつもの可能性と、取り留めのない思考が浮かんで消える。

すると、切嗣の首へ蛇のようにしなやかに腕が伸びた。柔らかい、女の腕だ。舞弥の腕は、気の緩んだ切嗣の後頭部を捉えて離さない。切嗣が二の句を継ぐ前に、艶やかな唇が切嗣の唇へとそっと押し付けられた。濡れた舌が、切嗣の唇を割って、その舌先を探り当てる。

ほんの一泊程度の沈黙だったが、切嗣には実際の時間よりも長く感じられた。唇が離れる。まだ吐息のかかる距離で、舞弥は元来の伶俐な双眸を僅かに潤ませ、蠱惑的に切嗣を見つめていた。

「……切嗣。いま必要なことにだけ、意識を向けてください。余計なことは、考えないで」

掠れた声に次いで、もう一度、切嗣の唇があたたかな感触に遮られる。微かな水音が跳ねる。

いまのふたりに、言葉は必要なかった。最前まで抱いていた不安と恐怖が、薄れてゆく。今この瞬間だけは、どうでもよいことのように思えてくる。

戦場で拾った、まだ少女だった舞弥をこういう女にしたのは、他ならぬ切嗣自身だ。その自覚が、また、切嗣の心の温度を冷ましていく。切嗣が冷徹な機械であり続けるためには、彼女という補助機械は必要不可欠だった。

新調したばかりの真新しい襖に額を当てたまま、アイリスフィールは身動きを取れずにいた。心音が高鳴る。胸が内側から締め付けられるような心地のまま、アイリスフィールは物音を立てないように、そつと襖を離れた。中にいるふたりに気取られてしまうことだけは、避けたかった。フローリングの床を、音を立てないように細心の注意を払って踏みしめ、ある程度離れたところで、アイリスフィールは足早に駆け出した。縁側に差し掛かったところで、足を止めた。

はじめは、ほんの些細な好奇心だった。こと争い事において、アイリスフィールは自身がまるで役に立たないことを自覚している。だからせめて、襖の向こうで、切嗣と舞弥がどんな会話をしているのかが知りたかった。邪魔をするつもりはなかった。ただ、静かに聞き耳を立てれば、それでよかったのだ。

襖の向こうのふたりがなにをしていたのか、本当のところはわからない。けれども、アイリスフィールとして乙女だ。ふたりの会話の温度や、息遣い、微かに聞こえる物音から察するに、男女の間でなにが行われていたのかなど容易に想像がつく。

「――なに考えてるんだろう、私」

縁側にすくと腰掛け、誰にもなくひとりごちる。

アイリスフィールは、久宇舞弥という人間を切嗣ほど深く理解はしていない。裏を返せば、久宇舞弥は切嗣にとっても最優の理解者のひとり、ということにほかならない。

今の切嗣にとって、舞弥は必要な人間であると、認めるしかなかった。

切嗣の心から不安と恐怖を取り除き、かつての強靱な冷酷さと呼び戻すことができるのは、久宇舞弥だけなのだ。アイリスフィールでは叶えられぬ願いを、彼女が引き受けてくれている。

たとえふたりがどのような関係であろうとも、切嗣がアイリスフィールに愛情を注ぎ、生きることの意味を教えてくれたという事実には嘘はない。ならば、自分もこんなところでへこたれている場合ではない。

舞弥が舞弥にしかできないことをやっているのなら、アイリスフィールにはアイリスフィールにしかできないことをする必要がある。それが、妻である自分の役目だ。

かぶりを振って眈を決したアイリスフィールは、すつくと立ち上がった。まずは、自分にもできる切嗣のサポートを考えよう。守られるだけではない。聖杯の守り手としてだけではない、自分だけの役目を探そう。

思い直し、振り返ったところで、アイリスフィールはアーチャーと視線を合わせた。ちやうど台所から出てきたところらしい。濡れた手をタオルで拭きながら、アーチャーは口元を歪めた。

「アイリスフィールか。縁側で夕涼みをするには、些か時期を違えているようだが？」
「いや、ええと、そういうわけじゃなくてね。というかアーチャー、あなたこんなところ

でなにしているの？」

苦笑しつつ返答するアイリスフィールに、アーチャーはさも得意げに笑みを深め、踵を返した。アイリスフィールもその背に追従する。向かう先は台所だった。

「ああ、ちようどいい、少し見てくれないか、アイリスフィール。水回りの整備を済ませたところなんだ」

「水回りって……そんな雑用みたいなこと、わざわざサーヴアントのあなたがしなくたっていいのに」

「いやなに、黙って見ていられない有様だったものでね。ひとまず最低限の生活水準には達したと思うが、どうだろうか」

アーチャーに案内されるがままに居間に入って、アイリスフィールは目を見開いた。はじめ見たときは長年手入れすら施されていない古きびた台所、といった印象だったが、それが今では見違えるほどに整備が行き届いている。シンクは銀色の輝きを放ち、壁のタイルは新品同様に艶めいている。ビルトインのガスコンロと冷蔵庫はいずれも舞弥によつて発注された最新式のものが設置されており、そのほか生活に必要と思われる食器や料理道具は一通り揃っていた。

「あら、すごいじゃないアーチャー！　ひとりでここまで片付けたの？　こんなにも家事が上手なサーヴアントがいたなんて、聞いたことがないわ」

「ふ、どうやらこの靈基に本能レベルで染み付いていたらしい。記憶が戻らないのになんなことばかり得意というのも、まったく褒められた話ではないがね」

アーチャーの苦笑に、つられてアイリスフィールも笑った。

「あなたたつて、きつと本当は優しい人なのね。切嗣の隣で、険しい顔をして戦っている姿よりも、こうして日常の些細なできごとで笑っている方が、なんというか……うまくいいないんだけど。本当のあなたの顔に近いような、そんな気がするわ」

ほんの一拍の間だが、アーチャーは押し黙った。柄にもなく目を丸くして、アイリスフィールに見入っている。アイリスフィールは慌てて手を振った。

「ああ、いや、違うの。別にあなたを馬鹿にしたわけじゃなくて。気分を害したならごめんなさいね、アーチャー。自分の記憶を思い出せないのに、こんなことを言われても困るわよね」

「いや、構わない。特段困りはしないが……ただ、少し驚いた、とても言うべきか」

アーチャーは取り立てて表情の険しくすることもなく、むしろ穏やかな面持ちで深く息を吐いた。

「……驚いた？」

「まさかサーヴァントの身でありながらそんなことを言われる日が来るとは夢にも思わなかったものでね」

「あら、じゃあ私の評価も案外当たってたりして?」

アーチャーは鼻で笑った。

「いいや、慮外も甚だしいな。まして、サーヴァントを捕まえて家事が上手だなどと、それでは本当の意味でただの使い魔だ。サーヴァント私の本分はあくまで戦うことだよ、アイリスフィール」

ほんの僅かの間に、最前までの穏やかな表情は消えてなくなっていた。いつもと変わらぬ皮肉を込めた笑みを受けて、アイリスフィールもまた諦めたように笑った。

アイリスフィールには、自分の心に蓋をして、わざと機械のように振る舞おうとしている夫と、眼前のアーチャーの姿が重なって見えた。

きっと、本当は、戦いとは無縁の場所で、心から穏やかに笑っていられる場所の方が、彼らには似合うのだ。聖杯戦争の果てに、アイリスフィールと切嗣が夢想する世界が待っているのならば、やはりアイリスフィールは立ち止まってはいられない。自分でできることをやらなければ。しかし、今の自分になにができるのかがわからない。

「アイリスフィール。次の方針が決まった」

不意に、背後から声がかけられた。切嗣が続いて、舞弥が居間に入ってくる。

アーチャーの表情が引き締まる。アイリスフィールも一瞬遅れて気を張り、切嗣に向き直った。

「切嗣、なにか新しい作戦を思いついたの？」

「作戦というほどのものでもない。ただ、僕たちはひとまず『見』に徹することにした」
「ほう、穴熊を決め込むと？ らしくない決断だな、マスター」

切嗣はちらりとアーチャーに一瞥をやったが、それだけだった。アーチャーの軽口に応える素振りは見せない。

「石動惣一に話した通り、僕たちはキャスター陣営を標的とはしない。だが、それはランサー陣営に対しても同様だ。目下の最優先警戒対象を、言峰綺礼と石動惣一のふたりに絞る」

「どういうこと？ 一番の強敵は遠坂のセイバーじゃなかったの？」

「ああ。純粋な戦力だけで語るなら、最大の難関はセイバーと考えて間違いない。だが、あのマスター……遠坂時臣の行動の根底にあるのは、どこまでいっても魔術師のソレだ。僕らの予測の域を出るものじゃない」

「対して、言峰綺礼……あの男には既に切嗣を襲った前科があります。今後もなにか仕掛けてくるものと見て警戒しておくに越したことはありません」

「……そして、言峰綺礼と石動惣一は裏で繋がっていると見てまず間違いはない」

切嗣と舞弥の状況判断に、アイリスフィールはなるほどと頷いた。

妙な因縁をつけて切嗣に接触を図ってきた言峰綺礼と、目的の見えない石動惣一。切

嗣がこのふたりを最も警戒すべきと判断したのなら、きつとその通りなのだろう。

「でも、そうなると石動惣一との関係はどうするの？　あの男、きつとこれからも私達に接触してくるわよ」

「そうだな。不要な接触は避けたいところだが、向こうから来るというのなら是非もない」

切嗣はここで、はじめてアーチャーに向き直った。

「しばらくは石動惣一を泳がせ、その目的を探る。だが、あの男がスキを見せることがあれば——殺せ。手段は選ぶな」

ほう、と。アーチャーは小さく唸った。

「仮にもやつは聖堂教会の人間だろう。殺してしまっても構わんのか」

「構わない。あの男が僕らと接触していること自体、聖堂教会からすれば慮外の事実だ。

……いや、そもそも、今の聖堂教会が監督役としてまともに機能しているのかどうかも怪しい」

「それ、どういふこと？」

アイリスフィールが問うと、切嗣は体の芯をこちらへ向けて、話し出した。

「今朝から言峰璃正が姿を現していない。知つての通り、言峰璃正といえば神に仕える敬虔な神父様だ。自分の役割を放棄した試しは、過去に一度もない。それが丸一日表に

出てこないとなると、流石になにかあったと考えるのが妥当だろう」

「つまり、既にこの世にはいない可能性もある、ということか」

切嗣はアーチャーをちらと一瞥するが、言葉での返答はなかった。

己がマスターからの返答を待たぬまま、アーチャーは笑った。

「いいだろう。他ならぬマスターからの要請であれば、逆らう道理もない。その仕事、引き受けた」

冷酷無比な宣言だが、その言葉そのものが、無理をして発せられているようにアイリスフィールには感じられた。

アーチャーは、皮肉屋の仮面で心を覆い隠して、ただ目的を遂行するだけの機巧たらんとしている。そういう印象を抱いた。だとすれば、それははじめて出会った頃の切嗣と同じだ。

「それじゃあ、アイリ。僕はまた出かけるよ……そろそろキャスターたちも動き出す頃だからね。街中に監視の目を張り巡らせておく必要がある」

やりとりはそれだけだった。アーチャーの返答を聞いた切嗣は、アイリにだけ微笑みを向けると、それきり能面のような無表情へと顔色を切り替えて踵を返した。舞弥もその背に追従する。ふたりの姿が廊下へ消えたところで、状況に取り残されていたアイリスフィールは弾かれるように駆けた。

「ねえ、ちよつと待つて切嗣」

玄関の手前で切嗣は立ち止まり、振り返った。その瞳からは、最前アーチャーに向けたような、冷徹な刃物のような剣呑さは感じられない。穏やかな表情で、切嗣はアイリスフィールに向き直った。

「どうしたんだい、アイリ。今後の方針で、なにか不安なことでもあつたかい？」

「切嗣……——」

「たしかに先の見えない状況ではあるが、心配には及ばない。聖杯は必ず獲る。最後にやつらを出し抜くのは、僕たちだ」

「違うわ、私はそんなことを言いたいんじゃないの」

アイリスフィールには、いま自分で自分がなかにを言おうとしているのが判然としなかった。ただ、あの瞬間感じた違和感を、口に出さずにはいられない。胸の奥でざわつく不安を抑え込むように両手を胸元に添えたまま、アイリスフィールは問うた。

「ねえ、切嗣。アーチャーと、なにかあつたの？」

切嗣は眉一つ動かすことなく、優しい瞳のままこちらを見つめている。アイリスフィールにしてみれば、その仕草そのものが不自然だった。

「なにもないさ」

「嘘」

「嘘じゃない。甘すぎたんだ、今までが」

ロングコートを翻して、切嗣は体の軸をアイリスフィールから背けた。

「僕らの理想には、英雄も英霊も必要ない。それは、あのアーチャーも同じだ。どんな精神の持ち主だろうと、あれが英霊などという存在である以上、僕らの求める世界には相容れない存在なんだ。そんなものと必要以上に言葉を交える必要はない」

「そんなの、寂しすぎるわ」

アイリスフィールは切嗣の言葉に食い下がった。自分でも珍しいことだと自覚している。けれども、まだ、思いは伝えられていない。ここで引き下がることはできない。「アーチャーの身にながあつて、英霊の座なんてものに召し上げられてしまったのは、私にだつてわからないわ。けど、あの子は私達と同じ、人間よ。あなたが嫌う英雄の類じゃない」

切嗣はなにも言わない。ただ、静かに背を向ける。アイリスフィールはその背に言葉を投げる。

「お願い切嗣……ちゃんと、アーチャーと話をしてあげて。あなたがあの子と向き合わずに、誰があの子を理解してあげられるの」

自分が突拍子もないことを言っていることは自覚しているつもりだった。けれども、アイリスフィールには、この世に数多ある伝説に祀り上げられる英雄豪傑と、あのアー

チャーを一緒にたにされることに強い違和感を覚えていた。それを認め、アーチャーの在り方を否定することは、巡り巡って切嗣の在り方をも否定してしまうような気がしてならなかった。

「——それで、聖杯が獲れるのかい？」

玄関口に差し掛かったところで、切嗣は首だけを回して振り返った。

返答に詰まったアイリスフィールの二の句を待つことなく、切嗣は再び背を向け歩き出した。

「この戦争を人類最後の流血にする。そのためなら、僕はこの街の人間をすべて殺し尽くしても構わないとすら思っている……そんな男が、いまさら他人と向き合ったところで意味なんかない。僕らにはもう、そんな余裕は残されていないんだ」

冷たい声でそう言い残し、切嗣は玄関の引き戸を開け、夕闇の世界へと消えていった。呆然と立ち尽くすしかできないアイリスフィールの背を追い越した舞弥が、静かに振り返る。

怒っているわけでも、悲しんでいるわけでもない、表情の読めぬ面持ちで、舞弥は伏し目がちに口を開いた。

「失礼ながら、マダム。私も切嗣とは長いつもりですが……私は、切嗣のあのような表情を見たことは、今まで一度もありませんでした」

「え……舞弥さん？」

「私には、切嗣にあのような優しい顔をさせることは、できません」

舞弥が知っている切嗣とは、すなわち数多の戦場で畏れられてきた魔術師殺しとしての衛宮切嗣だ。より多くの命を活かすため、ただそれだけのために冷酷な機械となつて、人を殺し続けてきたいびつな機械。アイリスフィールが知る切嗣とは、違う。

「切嗣にはあなたが必要です。どうか、これからも切嗣をそばで支えて欲しい」

舞弥なりの精一杯の励ましのつもりなのかもしれない。

「え、ええ。それはもちろん、こちらこそ」

舞弥は微かに頬を緩めた。平時の無表情とさして変化はないが、それでも、それが微笑みであることは理解できる。

「私は、切嗣の伴侶に真に相応しいのは、あなたのような女性だと思っています」

それだけ言って小さく会釈をした舞弥は、切嗣の後を追うように屋敷の外へと駆け出していった。ややあつて、庭先から車のエンジン音が響いた。

肅然と項垂れるアイリスフィールの肩に、声がかかる。

「すまないな、アイリスフィール……妙な気を遣わせた」

居間へと続く入り口の柱の影から、赤い外套が姿を現した。切嗣との会話も、すべて聞かれていたのだろう。振り返ったアイリスフィールは、いたたまれない気持ちに駆ら

れて、苦笑するしかできなかつた。

「ごめんなさい、アーチャー。なんだか私、空回りばかりで」

「いや、謝罪をするべきはこっちの方なのだろう、この場合は」

「そんなこと……」

アーチャーは微笑んだ。平時と比べるとほんの僅かに柔らかい笑顔のように感じられる。一瞬遅れて、アイリスフィールは、いつの間にか自分がアーチャーの表情の些細な機微まで見分けられるようになっていたことに驚いた。

「案ぜずとも、マスターとはいずれ話をつけるさ。私もこのままでいいとは思っていない……だが、今はまだその時じゃない。ただ、それだけの話さ」

アイリスフィールもまた、くすりと、柔らかく微笑んだ。

「ありがとう、アーチャー。やっぱりあなたって、優しいのね」

アーチャーは不服そうに肩をすくめた。その仕草が可愛らしく思えて、アイリスフィールはまた笑う。もしも自分に年頃の息子がいれば、こんなふうに接するのかもしれない。そんな思考に意味がないことは自覚している。

だけれども、ほんの少しの間でも、そんな夢を見たとしても、罰は当たらないだろう。せめて自分が人の形を保っていられる間は、このアーチャーと切嗣のそばにいてあげたいと、アイリスフィールはそう強く思い直した。

もともと時臣の私室として使われていた部屋は、今では玉座の間へと変わり果てていた。

部屋の最奥に詔えられた玉座を取り巻くように、真紅の薔薇の花弁がうず高く降り積もっている。時臣が召喚したサーヴァントは玉座に深く腰掛け、悠然とこちらを見下ろしていた。時臣は無礼のないように、眼前で傅き、頭を垂れる。

「――以上が、現状の趨勢にございます」

まだ聖杯戦争ははじまったばかりだ。その戦いの趨勢を逐一セイバーに報告するのは、時臣の義務でもあった。

ライダーはひとまずバーサーカーと一緒に行動しているが、ことによつては自陣営につき可能性もあること。アーチャーは未だ単独行動を続けていること。そして、キャスターとランサーが手を組み、遠坂の霊脈を次々と奪い取つて回つていること。必要な情報はすべて、嘘偽りなくセイバーへと報告した。

「報告、ご苦労」

玉座の周辺を飛び回る漆黒の蝙蝠が、セイバーに変わつて時臣を労う。

「は。さしあたっては、王よ。我らが領地を荒らし回るランサー、キャスター両陣営には、いよいよもつて王の誅伐を下す必要があるかと存じます」

セイバーは玉座から微動だにせぬまま、冷ややかに笑った。

「構わんぞ。有象無象が手を組んだとて、所詮はか弱き烏合の衆。絶滅させるにはあまりにも容易い」

「ありがたきお言葉」

時臣が思っていたよりも存外にあつさりと引き受けてくれた。その事実には、時臣は僅かに驚きつつも心中で安堵を深め、平伏を深める。セイバーは滔々と続けた。

「……時臣。この我が素直に誅を引き受けることがそんなにも意外か」

「いえ、そのようなことは……めっそうもございませぬ」

思考が読まれているのだろうか。時臣は僅かに肝を冷やしたが、それを態度に出すことは遠坂の家訓に反する。時臣は表情ひとつ崩さずに淡々と答えた。

「ふん。貴様の領地とは、すなわち私の領地でもある。それを土足で荒らし回る輩が相手となれば、いよいよもって黙って見過ごすわけにはゆかぬ」

「そういうことだ、時臣。ランサー、キャスター、両陣営揃って絶滅タイムだな」

唄い上げるように言いながら、キバットはセイバーの玉座にとまった。反対に、セイバーは静かに立ち上がり、時臣へと歩み寄った。

「顔を上げろ、時臣」

「……は」

時臣は僅かに頭を上げ、セイバーに己の顔を見せる。セイバーはまた、冷笑した。

「何度見ても、ほとほと面白みに欠ける顔をする男だな、貴様は。この我がじきじきに動いてやるというのに、些かたりとも表情を動かささんとは」

「畏れながら、それは王に対する無礼のなきようと努めてのこと。偉大な王の助力を得られるという事実に感謝を抱かぬ道理などありませんまい」

「あいも変わらず口だけは達者だな」

セイバーはさも面白くなさそうに眉根をぴくりと震わせた。

再び宙に舞い上がったキバットが、その小さな翼をばたばたと羽ばたかせ、セイバーの顔の隣で滞空する。

「まあ、そういうな、キング。この男はこれで案外と面白いところもある」

「ほう?」

「俺はこの男に期待している。ことによつては、この聖杯戦争も面白い方向に転がるやもしれん。なあ、時臣」

「……それはまだ、なんとも」

思いもよらぬ呼びかけに、さしもの時臣も焦った。けれども、やはりそれを表に出しはしない。キバットは桜の話をしているのだろうが、これからキャスター、ランサー陣営との戦いが控えているというのに、時臣の個人的な事情でセイバーの気を揉ませたく

はない、というところが大きかった。

「まあいい。この場合は貴様の言う通りに動いてやるが、時臣——」

セイバーの冷やかな目が、時臣へと注がれる。それを直視した瞬間、王が放つ圧に、時臣は全身の毛穴が総毛立つような錯覚を覚えた。時臣の感情を知ってか知らずか、王は腰元の魔皇劍ザンバットソードを抜き、その切っ先を時臣の喉元へと突きつける。

「我を失望させるようなことだけはするなよ」

それだけ言うと、セイバーは時臣を鼻で笑い、劍を収めた。時臣の返答を待たず、セイバーは自らの身体を足元から黄金の粒子へと変換し、姿を消してゆく。全身が消える最後の瞬間まで、セイバーの瞳は冷ややかに時臣を見下していた。

セイバーが消え、張り詰めた威圧感から開放されると同時、時臣は一気に体が軽くなるような錯覚に見舞われ、微かに息を吐いた。残ったキバットが、時臣の傍らへと寄り、囁く。

「そう畏まるな、時臣。お前は、お前が心から望むことを優先すればいい……でなければ、キングの心は動かんぞ」

「私が、心から望むこと……?」

キバットは再び羽ばたき、玉座の上に乗った。ほんの僅かの逡巡ののちに、キバットは時臣に背を向け、ぼそぼそと語り出した。

「キングは、王としての責任を果たした。だが、それしか出来なかった。だから、あの男は自分の妻と子にも、あんな接し方しかできなかつた。——俺は、それが気に食わなかつた」

時臣には、キバットがなぜそんな話をするのかがわからず、返答に窮した。どんな言葉をかけても失礼に当たる気がした。

「俺には、なぜお前がキングを喚んだのかが分かる。お前はキングのようにはなるな」
「……それはいつたいたいという意味かな、キバット」

「フ、少し喋りすぎだな。ともかく、お前は、自分の心が真に求めるものから目を背けるな。俺から言えるのはそれだけだ」

キバットは問いには応えず、その小さな翼を広げ、羽ばたいた。

「——今度こそ、俺は最後までキングとともに戦いたいと思っている。だが、それが叶うかはお前の行動次第だ」

「キバット……」

「くれぐれも俺たちを失望させるなよ、時臣」

セイバーと同じ言葉を残し、キバットもまたセイバーと同じように金の粒子へと姿を変えていく。小さなキバットの体が完全に姿をくramsすのに、一秒とかからなかつた。王とその盟友が消え去ると同時に、綺羅びやかな王威で満たされていた部屋は、途端に

なんの変哲もない、ただの玉座が置かれただけの部屋へと成り果てる。その部屋の中で、ようやくこの屋敷が自分の空間だという認識を取り戻す頃、時臣は立ち上がった。

瞳を閉じて、黙考する。

キングにはキャスターとランサーの討滅を頼んだが、キバットの察する通り、実のところ、今最も時臣の心を締めているのはそんなことではない。それは時臣とて自覚している。

けれども、魔術師が聖杯戦争に挑んだ手前、その責任を放棄して、己の事情にかまけることは、憚られた。目先の出来事に気を取られ、真に成すべきを見失うのは、あの間桐雁夜と同じ落伍者のすることだ。そんなことは、できない。

あくまで、第一に優先すべきは聖杯戦争だ。

第二に、間桐の翁との会談を経て、桜が不当な扱いを受けていると判断できたなら、遠坂へと連れ戻す。次いで、今度は桜を遠縁のエーデルフェルト家へと養子に出すつもりで時臣は考えていた。格式高いエーデルフェルトならば、桜が野望の道具にされることもなく、まっとうな魔術師としての教育を受けることができるはずだ。

桜の身を案じて、聖杯戦争そっちのけで間桐から強引に連れ戻すなどというやり方は、常に余裕を持って優雅たれという遠坂の家訓に反するし、なによりもスマートではない。やはりまずは遠坂の魔術師としての責任を果たす必要がある。

思考の渦の中、屋敷の廊下を黙々と歩いていると、不意に甲高いチャイムが屋敷全体に響き渡った。誰かが、屋敷の呼び鈴を鳴らしている。

例えば、アインツベルンのような敵勢力が相手ならば、正面から堂々と遠坂の屋敷を訪れることはないだろう。時臣は屋敷の周辺に配置している使い魔を通して、時臣は外の様子を伺う。

果たして、来客の正体は——ライダークラスのサーヴァント、万丈龍我だった。

「はあ〜……美味し」

猪口に入った日本酒を飲み干したランサーは、感に堪えぬといった様子で己の頬を撫でた。それでもまだまだ足りぬとばかりに、徳利からまた日本酒を注ぎ、飲み干す。戦兔が見ている限り、さつきからその繰り返しだった。

「お前、ちよつと飲みすぎだろ。これから遠坂の陣営に殴り込みをかけるってこと、分かってます？」

「もちろん分かかっておりますとも。だからこそではありませんか」

「……あつそ」

戦兔は己の感情を隠すつもりもささしてなく、特大のため息を零した。

ふたりは今、冬木新都の市街地に位置する個室居酒屋の座敷席にいた。ことの発端

は、ランサーが現代の人の世を知りたい、と言い出したことに起因する。人の心を知るにはまずその生活から、という判断だそうだが、今までずっとケイネスからの許可を貰えなかったらしい。それが、キャスターからこの世界の真実を聞いてからというもの、ケイネスにもなんらかの心変わりがあったのか、今になって突然許可が出た。もつとも、ケイネスは同席するつもりではなく、結局戦兎ひとりがランサーに同伴させられる羽目になったのだが。

「それにしても戦兎、現代のお酒もなかなか悪くはありませんねえ。これ、酒瓶で買って持って帰りたいのですが」

ランサーは手にした猪口の酒をまた飲み干すと、上機嫌のまま徳利を掲げた。今のランサーは、いつもの霊衣を纏ってはいない。ノースリーブの黒ブラウスの上には、ややサイズ感の大きな白シャツをゆるめに羽織っている。シャツの両肩には大きくスリットが開いており、そこから、鍛えられた筋肉によって適度に引き締まった二の腕が描く健康的な曲線が垣間見える。日中、ケイネスのカードで買い物した私服だ。当然、この居酒屋の支払いもケイネスのカードで支払う予定だった。

「つていうかお前どんだけ飲むつもりなんだよ、まだ飲み足りないわけ？」

「なにを言ってるんです戦兎？ まだ大して飲んでないでしょうに」

目を丸くして驚いてみせるランサーだったが、テーブルの端には既に空になった酒瓶

が五本は置かれている。それでいて、ランサーは顔色ひとつ変えず、酔っ払うこともなく酒を煽り続けているのだから感心せざるを得ない。

「酒というものはいくらあっても足りなくなるものですから。戦場で飲む分と、それから拠点にも予備をいくつか置いておきませんと」

「戦場で……つてまさかお前、戦鬪の真つ最中にも飲むつもりかよ!」

「はあ、なにを今さら。銃弾の飛び交う戦場で酒を煽るくらいは余裕ですが」

この世界ではじめてビルドに変身し、ランサーと戦ったときのことを思い出す。たしかに、ビルドが放った銃弾はその尽くが軌道を逸れ、一発たりともランサーに命中することはなかった。おそらく、彼女に飛び道具は当たらない。実際にそういうスキルが作用しているのだろう。

「というか戦兎、こんな街中でひとをランサー呼ばわりするのはやめなさい。ほかの参加者に気取られたらどうするんです」

「そんなこと心配してるやつは行動とは思えねえけどな」

戦兎はほとんど呆れ果てて、テーブルの上に積まれた空瓶に視線を送った。ランサーは戦兎がどうしてそんな顔をしているのかもわからず、笑顔のまま小首を傾げるだけだ。いちいち突っ込むのも馬鹿馬鹿しく思えてきたので、戦兎は早々に話題を進めることにした。

「いや、なんでもない。で、なんて呼べばいいんだよ」

「そうですね……私のことは『お虎』と呼ぶのがよろしいかと」

「お虎……？」

ランサーはさも上機嫌といった様子でにこりを相好を崩す。

「はい、お虎です。親しみを込めて、お虎さん、でも構いませんよ」

「俺はいつの間に物騒な自称戦国武将と親しくなったんだ？」

怪訝な面持ちで小首を傾げる戦兎とは真逆、ランサーは胸を張って笑みを深めると、また一杯ぐいと酒を煽った。猪口を勢いよくテーブルに置くと、今度はぎよろりと見開かれた大きな瞳で、正面から戦兎を見据える。口元は絶えずにんまりと孤を描いたままだった。

「聞けば戦兎、そなたはエボルトなる存在を討ち果たすことさえできるならば、この戦そのものに興味はないのだとか」

「まあな。エボルトを倒して、元の世界に帰れるなら、俺は正直、聖杯戦争の決着なんて、まっつったく興味ない」

「では、私と戦兎にはもう、争う理由はありませんね」

感情の読み取れない笑顔のままあっさりと告げるランサーに、戦兎は微かな違和感を覚えた。

「お前は、それでいいのか」

「いいもなにも。ただ勝利して終わりの戦を当然のように終わらせるよりも、そつちの方がよほど面白みがあるでしょう」

「面白み？」

さしもの戦兎も、ランサーの言葉には耳ざとく反応する。命を懸けて戦った仲間たちの姿を脳裏に思い描くと、エポルトとの戦いを「面白い」などという言葉で形容されることは、戦兎にしてみれば不愉快だった。

「……言つとくが、ランサー。俺たちは遊び半分で戦つてんじやねえぞ」「わかつてますよ。そなたらの戦いを愚弄したいわけではありません」

ランサーは猪口に次の一杯を注ぎながら、言葉を続けた。

「聖杯戦争の裏に潜む悪意。放つておけばこの世界すら滅ぼしかねない人類悪。それに立ち向かうはびしや……もとい、日の本最強の武将と名高いこの私。ただ戦をして当たり前のように勝利するよりも、民を、平和を守るために戦う方が、なんかそれっぽいでありませんか」

満面の笑みでランサーは語る。戦兎には、ランサーがなにを言わんとしているのかがいまいち理解できず、当惑した。

「いやわかんねえよ。なんだよ、それっぽいつて」

「んもう、話の分からぬ男ですね。ほら、なんて言うんですたっけ？　そなたの好きなアレですよ。愛と平和のためにー、みたいなやつ」

「……ラブアンドピースのことか？」

「そうです、それですそれ」

ランサーは肩肘をつくど、どこか遠い目で窓の外の通りを眺めた。既に夕日はその大部分が地平線の向こうへと沈んでいる。強く差し込む西日も、この都市部では概ねビルの影に遮られ、今や空から振る光よりも、通りの街灯の方がよほどまばゆく感じられる夕暮れ時。ランサーは神妙な面持ちで僅かに目線を伏せた。

「なにぶん、私の時代にはなかった考え方ですので、最初はピンと来ませんでした。私の時代は、食うために奪う、生きるために殺す……そういうのが当たり前の世の中だったので。ラブアンドピースだなんて言われても、はて、この者はいったいなに言ってるんです、くらいにしか思わなかったものです」

「えー……そんなふうに思われてたの、俺？」

窓の外から戦兎へと視線を戻したランサーは、またにこやかに笑った。

「今日一日、こうして天下泰平の世を見て回って、私は思いました。この世界にはもう、国を守るために戦う戦国大名などは必要なく、民は明日をも知れぬ身の上に怯える必要もない。人々は武士ものぶに守られるだけの生活から解放され、豊かになった暮らしの中で

……こんなに美味しいお酒が造られるようになった」

うつとりと頬を緩ませて、ランサーは徳利を揺らす。戦兔は思わず姿勢を崩した。

「——つて、なんかいい話すんのかと思つたら、結局酒の話かよ！」

「なにを言いますか、お酒の話は重要でしょうに」

「言つとくぞランサー、そんな酒ばかり重要視してんのはお前だけだ」

「むう、そうですかねえ……いえ、まあいいでしょう。お酒の話はさておき」

ランサーは口元だけをけらけらと笑わせたまま、今度は戦兔の瞳をじいつと凝視する。

「私は思つたのです。戦兔の掲げる理想を叶えるために戦つてみるのも、これで悪くはないんじゃないかなー、と」

「ランサーが、ラブアンドピースのために……？」

「ええ。人が人を愛し、みなが各々の日常を謳歌できる天下泰平の世。そして、それを守るために戦う正義のヒーロー……それがそなたなのでしょう？ ええ、よい話ではありませんか」

相変わらず、戦兔にはランサーの考えが読めない。けれども、言葉の通りに受け止めて鼻を高くするほど、戦兔は能天気ではない。

ランサーの瞳は、眉根を寄せて当惑を示す戦兔をしつかりと捉えたまま、幼子を安心

させようとする母親のそれを思わせるほどの柔和さを湛えて、柔らかく微笑んだ。

「しかし、私は同時に疑問を抱かずにはいられません」

「疑問？」

ランサーは、テーブルに肘をついた姿勢で、ずいと上体を乗り出した。

「——戦兔。果たして、そなたの掲げる理想の庇護対象に、この仮初の世界は入っているのでしょうか」

表面上だけを見れば、ランサーの表情は、穏やかで、あたたかみに溢れた微笑みのように見えなくもない。

だけれども、見開かれた大きな双眸の奥に、戦兔は底知れぬ空虚を感じた。万人が想像する優しい微笑みというものをなぞってはいる。だが、それだけだ。

ひとは普通、穏やかな心持ちになったとき、自然と笑う。けれども、眼前の女は、先に笑顔を作って、後から心を追い付かせようとしているように感じられる。心が伴っていない。

戦兔はランサーの微笑みの異質さに気付きながらも、それについて触れることはしなかった。

「……なにかと思えば、くだらない質問だな」

動揺はなく、務めて冷淡に戦兔は答える。

対するランサーは、ほう、と唸った。場の空気が微かにひりつく。ランサーの口元は緩く孤を描いてはいるものの、目が笑っていない。

「そなたの言を信じるならば、ここは仮初の世界なのでしょう？　そなたが守りたいと願うのは、あくまでそなたが生まれ育った本来の世界であるはず。此度の戦を終わらせて無事元の世界に戻れるならば、それで一件落着きなのでは？」

「だから、そういう考え方がくだらねえって言っただよ」

「ふむ。私の疑問が、くだらない……と」

見開かれた瞳は、さながら獲物を前にした猛獣トラのように、戦兎を捉えて離さない。上っ面の言葉で取り繕うことは、無意味だ。だが、かえってその方が話しやすい。

「お前は今こうしてここで生きている。自分で考えて、行動してる。それはケイネスも、この世界に生きる人たちも、みんな同じだ……その命は、仮初なんかじゃない」

「だから外の世界を守ることも、この世界を守ることも、同等に価値のある行為だと……そなたは胸を張って、そう言えるのですか」

「言えるさ」

即答した。なんの迷いも銜いもなく、戦兎は断言する。

「俺はそもそも、虚構から生まれた人間だ。桐生戦兎なんて人間は、この世界にも外の世界にも実在しない。そんな人間が、お前らの存在を虚構だなんて否定するわけには

いけないでしょうが」

桐生戦兎。それは、もともとエボルトの野望のためだけに創られた虚構のヒーローの名だった。

野望のために生まれた虚構は、いつしか創造主であるエボルトの手を離れ、自分の意思で己の人生を歩み出した。自分の意思で生きたいと願うものの存在を、虚構だからと軽んじるつもりは戦兎には微塵もない。

「それに、俺が生まれ育った世界なんてものは、もうこの世のどこにも存在しない。だが……それでも俺は、みんなが笑い合える世界を望んだ」

エボルトによって失われたすべての命が失われずに済む新世界。たとえ生まれ育った世界が消滅する道を辿ることになったとしても、戦兎は新たな世界の創造を願った。戦兎には、その責任がある。

「だから俺は戦うんだ。これからも、ラブアンドピースを胸に、そこに生きる人々を守るために」

「たつたひとり世界から取り残され、己の身を犠牲にすることになってもなお、そなたは戦うと……そう言うのですか」

「ああ。虚構だろうが現実だろうが関係ない。たとえこの世界にひとりでも俺を覚えていてくれる人間がいるなら、俺はそいつらを守るために戦う……それだけで、十分だ」

なにを考へて彼女が笑うのかがわからず、戦兎は背筋が寒くなる思いに駆られつつも、阿々大笑するランサーを凝視する。ランサーはひとしきり腹を抱へて笑うと、ひいひいと息を吐きながら、愉快そうに目を細めて戦兎を見やる。

「あは、あははははは、いや、まったく……馬鹿ですなえ、そなたは！ 自分の先行きすら知れぬというのに、人の命を守るために戦う？ あまつさえ、聖杯を私に寄越すですつて？ ええ、話を聞いてみたものの、私にはそなたが何故そうまでするのか、てんで理解できませんでした！」

「そんなに笑うことじゃなえだろ！ つか、わからないならわからなくて結構。なんと言われようと、俺はこれからもラブアンドピースを胸に戦い続ける。……それが、仮面ライダービルドなんだよ」

ランサーは、またしても声を上げて笑う。

「あつはははははははははははははははつ！ やはりそなたは面白い！ いえ、本当のところを言うと、もしやそなた、天才に見せかけた馬鹿なのでは？ とは前から思っていたのですが、さてもさても、馬鹿と天才は紙一重とはよく言ったものです」

「いやちよつと待てランサー、さすがにちよつと馬鹿馬鹿言いきだろ。そこまで言われる筋合いなえ……つか、そういう役割俺じゃなえし！」

「ふふ、これはすみませんね。ですが、私は私で、そういう馬鹿は嫌いではないのです。

そなたの在り方と、その理想……私は大変気に入りました！」

ランサーは静かに立ち上がると、硝子窓の向こうに広がる冬の夜空を見上げた。話し込んでいる間に、いつの間にか日が沈んでいたらしい。ケイネスとキャスターが指定した作戦開始の時刻は近い。

「時代は移り変われども、人が懐く『愛』というものはきつと不変のもの。それを守るためにそなたが戦うというのであれば、おそらく、それこそが人としての正しい在り方なのでしょーう」

「別にそんなに難しい話じゃねえと思うけどな。俺は、人としての当たり前を話しただけだ」

戦兔にとつて、ラブアンドピースというものは難しいことでもなんでもない。人が当然のように抱く美しい感情を、尊い命を、ただ守りたいと思っただけだ。いわば、誰しもが持つ素朴な正義感。それを貫くことに、難しい理由などは存在しない。

ランサーはふう、と息を吐くように笑みを零した。

「それをさも容易く言つてのけられるその強さこそが、そなたの美德なのでしょう。そんなそなたをこそ、私は信じたいと思つたのです。その進む道行きを見届けたい、と」

その言葉を聞いた時、猛獣と同じ檻に閉じ込められたかのような威圧感から解放され、肩からどつと力が抜けるのを感じた。戦兔もまた息を吐き、ランサーの真意を確か

めんと問いを投げる。

「ずいぶん簡単に信じてくれるんだな？　同盟組んではいえ、本来なら聖杯戦争の参加者は敵同士だ。ここで話したのも全部、お前を油断させるための嘘って可能性だつてないとは言いい切れねえぞ」

「あはははははははつ、なにを戯けたことを言ってるんです。その時は当然、私がそなたを殺します。ええ、徹底的に、完膚なきまでに殺し尽くしますとも。馬鹿は馬鹿でも、そういう救いようなない馬鹿ではないでしょう、そなたは」

言葉が孕んだ物騒な意味合いとは裏腹に、ランサーはにっこりと破顔し、戦兎へと手を差し伸べる。ランサーのその剥き出しの刃物のような微笑みが、今は随分と頼もしく感じられる。戦兎もまた、つられて笑った。

「とーぜん。なにしろ俺はてえんさい物理学者だからな、……っつかそもそも馬鹿じゃねえし！」

差し伸べられた掌を掴み、腰を上げる。立ち上がった戦兎の顔を見て、ランサーはまた、微笑んだ。

「では、その天才物理学者とやらの力、とくと見せて貰うとしましょうか」

「言われなくても。お前こそ俺の脚引つ張んじゃねえぞ、お虎さん」

わざとらしくそう呼んで見せる。ランサーは僅かに瞠目したが、虚を突かれたような

その表情は、すぐに見慣れた笑顔へと変わった。戦兔には、ランサーの笑顔が、心なしかいつもよりも上機嫌そうに感じられた。

「あつ、それはそれとして、お酒は買って帰りますので、荷物持ちはお願いしますね、戦兔」

戦兔はすぐに、最前の自分の考えを撤回した。わかりきっていたことだが、ランサーの笑顔には有無を言わさぬ威圧感がある。話の流れで頼もしさを感じてしまったが、それも戦兔の錯覚だったのかもしれない。

結局、戦兔は、紙袋に詰めた酒瓶を両手に提げて、拠点までの帰り道を歩かされる羽目になった。

第18話「啜うプリースト」

万丈から桜の惨状を伝えられたところで、遠坂時臣の顔色が変わることはなかった。屋敷の客間に通された万丈と向かい合うかたちで座った時臣は、一通り話を聞き終えると肅然と頷きはしたが、それだけだ。悲しむ様子も、憂いを嘆く様子もありはしない。

「——状況は理解した。ありがとう、万丈くん」

時臣の口から出た言葉は、万丈が期待した言葉ではなかった。

期待したのは、愛娘の現状を案じ、救い出すべきだと奮起する父親の姿だ。だということに、時臣の表情に万丈が期待した変化はなく、義憤を胸に立ち上がろうとする気配も感じられない。あまりにも、時臣は優雅に過ぎた。

「あ、ありがとう……それだけかよ」

「ん？ それだけ、とは」

「あんた、桜の父親なんだろう。あんな小つさい子供が、助けも呼べずに苦しんでんだぞ……！ もつとこう、なんか言うことあんだろう！」

感情を隠すすべを知らず囃し立てる万丈とは裏腹に、やはり顔色ひとつ変えることなく、時臣は一息をついた。

「万丈くん。きみはひとつ誤解をしているようだ」

「五階も六階もねえッ！俺はこの目で桜が苦しんでる姿を見たんだ！あんなモン見せつけられて、これ以上黙って見てられっか！」

「君の言いたいことはわかる。だが、その言い分は……悲しいかな、あの間桐雁夜と同じだ。魔術の世界では、それは筋違いと言わざるを得ない」

「なっ……」

時臣の言葉の意味がわからず、返す言葉に窮した万丈をよそに、時臣は淡々と言葉を続ける。

「以前にも言ったとは思いが……魔導の家に生まれた時点で、その人生には常に死と隣合わせの宿命が付きまとうものだ。降り掛かる死の恐怖から逃げ出さず、己の秘術でもってそれを克服する。それが魔導を歩む者が背負うべき覚悟と責任だ。それらを背負うことで、はじめて魔術師は己の在り方に誇りを持つことが許される」

「ンだよ、それ……じゃあ、桜にはこれからもあの地獄で苦しめつて、あんたそう言いてエのか!？」

「そうだ。修行の道筋は家系によって違えど、魔導を歩むというのはそういうことだ。その観点で見れば、桜が地獄の只中にいることなどははじめから織り込み済み。あの夜、間桐雁夜とそのサーヴァントが吠えた戯言は筋を違えているとしか言いようがな

「い」

万丈は絶句した。雁夜の言葉の意味が、いま始めて理解できた。

遠坂時臣という男は、父親であることよりも、魔術師であることを優先している。それを理解したとき、万丈の肩からどつと力が抜けていった。雁夜の言葉は正しかったのだ。この男に頼ろうとした自分が愚かだったとすら思えて来た。

「だが、それは桜がまっとうな魔術師としての人生を歩めるならば、の話だ」

「あん？」

「——あのバーサーカーは言った。桜は今、ただ次代の世継ぎを産むためだけの苗床として育成されている……まともな魔術師としての教育など受けられるべくもない、と。それが事実であれば、私には、桜の進む道を矯正する責任がある」

万丈は両手をテーブルにつき、身を乗り出した。

「そりゃ、桜のこと救ってくれる、ってことでいいのか」

「救う、という表現はいかなものかとは思うが……そうだな。まずは、間桐の翁と話を付ける。結果、桜が魔術師として己の責任を果たすためでなく、単に間桐の私利私欲のためだけに利用されているのであれば、私には桜を連れ戻す義務がある」

「……連れ戻して、そのあとはどうすんだ」

「もう一度養子に出すことになるだろうな。今度は、正しく魔術を修めることができる

家系に」

万丈は右手を勢いよくテーブルに打ち付けた。サーヴァントの膂力で殴られた木製のテーブルが、軋轢とともに微かに跳ねる。けれども、時臣の表情が揺らぐことはない。万丈は時臣に掴みかからん勢いでまくし立てた。

「んなこと言つて養子に出したせいで、桜は今あの地獄に放り込まれてんだろぅがッ！」
「それも理解している。ゆえに、今度は繰り返させない。幸い、遠縁にアテがあつてね。北欧はフィンランドに居を構える名門貴族だ。冬木からは離れてしまふが、かのエーデルフェルト家ならば間桐のような愚を犯すこともあるまい」

万丈には、フィンランドという国がどこにあるのかなど想像もつかない。アメリカと同じくらい遠いのだろうか、北極とか南極よりは幾分近いのだろうか、そういう広漠とした感想しか沸いてはこない。だが、もはや距離がどうか、行く先がどこであるとか、そんなことは重要な問題ではなかった。

大切なことは、ただひとつ。

「——それで、桜はホントに幸せになれんのか」

「決まっている。これもすべては我が子の幸福を思えばこそだ」

「幸福？　んなもん、誰が決めたんだよ……！」　家族と離れ離れになつても魔術師になりたいて、一言でもあの子が自分で言ったのか!？」

「愚問だな。直接聞いてはいないが、聞くまでもあるまい。あの子は魔術師として稀代の才能をもって生まれてきた、いわば逸材だ。その才能を殺して、凡俗な生活に貶めることの不幸がいかにほどのものかなど、君には理解も及ぶまい」

表情ひとつ乱すことのない時臣の物言いを聞いたとき、万丈の中で、ずっと抑え込んできた感情がぷつんと音を立てて弾けた。いま、雁夜の言葉の意味が分かった。同時に、目の前の男を、ある意味では雁夜に似ていると感じた。

「あんたらは、みんなそうだ……雁夜も、あんたもツ！ 凜や桜の気持ちなんかこれっぽっちも考えてねエ……！ あの子達が本当に望むものがなんなのかも考えず、勝手に決めつけて押し付けてるだけだ……！」

「心外だな。私は父として、また魔術師として、正当なる責任を果たしたに過ぎない。魔術の世界を知らず、子をなしたことすらない君に言われる筋合いはない」

「なにが責任だ！ そんなモン押し付けられて、ホントにあの子が幸せになれんのかよ!?」

「君の言う通り、たしかに、一時的につらい思いをすることもあるだろう。だが、いずれ、それが我が子の幸福に繋がると確信しているからこそ、私は愛する我が子に責任を課すのだ」

「それらしいこと言って誤魔化してんじゃねえ！ 俺は、自分の人生を自分で決めらん

ねエで、そのどこが幸福なんだって訊いてんだよ……!」

時臣は目を伏せ、静かに唸った。

実際のところ、時臣も万丈の言葉がまるで理解できないというわけでもない。

時臣はそもそも、凜や桜のように、魔導において天性の才能を持つて生まれてきたわけではない。己の才覚の低さを受け入れ、血の滲むような努力を積み重ねることこそが己に課せられた責任であると信じて今日まで生きてきた。それは自分で選んだ道だ。誰に左右されたわけでもない、自分自身の人生。そう思えばこそ、つらい修練の日々にも耐え、己の体に魔を刻む茨の道を歩み続けることができた。

だが、もしもそれが他者から一方的に押し付けられた責任であったとしたら、時臣は、己の人生に誇りを懐くことができただろうか。

凜はいい。時臣の在り方を羨望の眼差しで見つめ、父の背中を追いかけることに誇りすら抱く彼女には、なんの憂いもあるまい。

だけれども、桜は、凜とは違う。あの子は、自分の意思をはつきりと口にすることができず、親や姉の決めたことに逆らったことのない、内気な子供だった。ゆえに、桜が時臣の決断に異を唱えるわけがないと決め付けていた。

当然、時臣とて愛する娘と離れ離れになるのはつらい。だがそれでも、それ以上に、桜には魔術師として成功する人生を歩んでほしかった。父の苦悩を、桜ならばいつか必ず

理解してくれるものと、無条件に思い込んでいたのではないか。

「——なるほど、万丈くん。君の言いたいことは理解した」

万丈の言葉は、魔術の世界の常識で考えれば、浅はかで凡俗極まりない妄言だ。まともな魔術師であれば耳を貸さないし、貸すべきではないとすら思っている。けれども、時臣が愛娘である桜を愛していることもまた、紛れもない事実だ。このまま一方的に言われたまま引き下がることは、時臣の誇りプライドが許さなかつた。

「たしかに、君の意見にも一理ある。そこで、ここから先は私からの提案だ」

「あん？ 提案だア？」

「ああ。君の言う通り、桜には自分の意志で未来を決めさせる。今すぐに決断できないのであれば、己で決断することの《責任》を理解するまで待つても構わない」

万丈は目を見開き、一瞬言葉を詰まらせた。時臣の返答が意外だったのだろう。

「……それでつ、もし桜が魔術師になんかなりたくねエって言ったら、そんなときヤどうするんだ！」

「そんなことはありえないが……そうだな。仮にそう答えたとしたなら、私も桜の気が変わるまで待とう。あの子の才能を思えば、真の幸福を得るための道筋は魔導にこそある……それは疑いようもない事実だ。あの子にはそれを理解してもらおう必要がある」

「あんた、まだそんなこと言ってる……」

時臣は万丈の言葉を遮り、畳み掛けるように口を開いた。これ以上の譲歩はないとばかりに。

「我が子の幸福を思い、私は父として、あの子に道を指し示す。その上で、我が子には己の意思で道を選んでもらう。それが父としての責任だと心得るが、それでも君は不服かな」

「そ、そりや……ッ」

明らかかな当惑を表情に浮かべながら、万丈は黙り込んだ。返す言葉が思いつかないのだろう。

一見万丈に言いくるめられたように思えるが、時臣にしてみればどう転んでも結果は変わらない。魔術を始める時期が遅れる可能性があることは些か気がかりだが、最終的に桜が魔術師としての成功を収められるのならそれでいい。むしろ、桜がいま不当な扱いを受けていることを知り、今度こそ正しい道を指し示す機会が与えられたことは、時臣にとっても僥倖だと考えるべきだ。

「私は君の助言の通り、父として己の責任を果たすと約束する。これ以上、君に望みはあるかな」

「いや……そりや、桜がああ地獄から救われるのなら、それが一番だけだよ」

「ならば、話は纏まったね」

まだなにか言いたいことはありそうだが、ひとまず万丈は頷いた。頷くしかない、と表現した方が正確かもしれない。時臣に対し、これ以上なにかを要求するだけの知恵は万丈にはないのだろう。

時臣もまた笑みを深め、頷いた。

「私は私の役目をまっとうする……君のお陰で、私は父としての本懐を思い出すことができた。感謝するよ、万丈くん」

「お、おおう……？」

「ところで、だ。私は己の責任を果たすと約束した。一方で、君は己の責任をどう心得る？」

思わぬ切り返しに、万丈は自分自身を指差し、目を丸め、首を傾げた。

「君は此度の聖杯戦争において、ライダーのクラスをもつて招かれたサーヴァント。であれば、君にも聖杯戦争を進めるといふ責任があるはずだ。素知らぬ顔でやり過ぎることなど許されはしない。そうだね？」

「……俺にどうしろってんだ」

「では、単刀直入に言おう——」

時臣は僅かに口角を吊り上げ、微笑んだ。

「万丈くん。君には、今夜の戦いに我が陣営の同盟者として参戦してほしい」

「……俺に、あんたの味方して、どつか他の陣営と戦えつて、そう言いてエのか」

「ああ。私は己の責任をまっとうする。そこにはもちろん、遠坂の当主としての責任も含まれている……それすなわち、聖杯の獲得だ。それはそのまま、遠坂の子たるあの子らの幸福に繋がるのだと、私は考えている」

「あー……難しいこと言われるとよくわかんねエが、つまりなんだ……そりや、凜と桜のために、つてことでもいいのか？」

時臣はくすりと微笑んだ。

「その通りだ。以前にも話した通り、君が協力してくれるなら、私は他のマスターを害することなく、サーヴァントだけを仕留める方針で戦うことを約束しよう。この条件ならば君の方針とも乖離しないはずだが」

「なーんか上手く言いくるめられたような気もするが、そういうことなら、俺だつて断る理由はねエ。ただし、あんたがもしも誰かを傷つけようとしたなら……そんなときや俺があんたを止める」

「構わないとも。では、契約は成立だな」

時臣は元より戦力に困ってはいない。セイバーの力をもってすれば、下手な小細工を労せずとも聖杯獲得は間違いないことだ。加えて、ライダーをも己の戦力として取り込めるなら、マスター不殺の誓約など大した足かせにはなりえない。

静かに立ち上がった時臣は、そつと右手を差し伸べた。

「私は君の決断に感謝の意を示す。ゆえに私も宣誓しよう。私は、この聖杯戦争に必ず勝利する。そして、凜と桜が幸福な未来歩めるように力を尽くすことを」

「約束だかな。絶対エ、あの子達を悲しませるようなことはすんな……それと、雁夜のことも」

ふ、と。思わず失笑が溢れるのを、時臣はしかし、とりたてて隠そうとも思わなかった。

間桐雁夜など、時臣からすればこの上なくどうでもいい相手だ。魔導を貶める恥晒しであるあの男を生かしておく理由もないが、あの男を見逃すことでライダーのサーヴァントを味方につけられるのであれば、安い代償だ。

「ふ。まったく、君は本当に愚直な男だ。もつとも、その愚かしきこそが、君の魅力でもあるのだろうかね」

「ん……んん？ おい、それ褒めてんのか？」

「勿論。君のような男だからこそ信用できる、と言ってるんだ」

「……そうか？ ま、それならいいけどよ」

しばし混乱していた様子の方丈だったが、やがて差し出した手を勢いよく掴まれた。遠慮も礼儀も知らぬ乱暴な握手だった。

ほんの一秒にも満たない握手ののち、互いに手を離す。二人しかいない筈の客間に、三人目の気配が現れたのはそれと同時だった。

「時臣様」

「うおっ!？」

言峰綺礼のサーヴァントであるアサシンのひとりが、頭を垂れてその姿を現す。素っ頓狂な声を上げて飛び退いたのは、万丈だけだった。

アサシンは構わず淡々と事実だけを報告する。

「キャスター陣営が動き出しました。狙いは、当初の読み通り「柳洞寺」かと」

「ふむ。あそこは冬木の霊脈全体の流れを左右する戦略上の要地。押さえられれば、我々は完全に地の利を失うことになるだろうな」

「既に相当数の戦力を向かわせております……おそらく、此度の戦場こそが我らの最後の戦いなれば、キャスターどもにはここで確実に墜ちて貰わねば我らハサンも報われませぬ」

アサシンの言葉の端々から、不満の色が滲み出ているのを、時臣は肌で感じ取った。もはや本心を隠そうという気もないのだろう。眼前で傳いたアサシンの、髑髏に覆い隠された素顔がどれほど歪んでいるのかは想像に難くない。それでも、マスターである綺礼に命じられれば、逆らうわけにはいかない。今夜が、アサシンの最期だ。

「ああ、分かっているとも。柳洞寺には、すぐにセイバーとライダーを向かわせる。君たちの犠牲を、無駄にはさせないよ」

「……その言葉ひとつで、幾らかは報われます——然らば^{しか}」

これ以上の会話は無用とばかりにアサシンの霊体は大気の闇に溶けて消えた。

音もなく消えた暗殺者の影を探すように、万丈は首を振り、室内を見渡している。時臣は万丈に向き直った。

「聞いての通りだ。敵はキャスター陣営、ならびにランサー陣営。目的は、この地の霊脈を篡奪し、我ら遠坂を破滅に追い込むこと……卑劣なやり口だ。このような手段を取る連中を野放しにするわけにはいかない」

「難しいことはよくわかんねえが、まあ、なんとなくわかった。要は、そのキャスターだかランサーだかという奴らをつぶ潰しやいいんだな」

「理解が早くて助かる。安心してくれ、万丈くん。私もすぐにセイバーも向かわせる。やつらを討伐する、その斬り込み隊長の役目を君に頼んでも構わないだろうか」

万丈は、勢いよく手のひらに拳を打ち付けた。

「そういうことなら、俺に任せろ！　んなコス狡いやり方しか出来ねエやつらに、俺ア負ける気がしねエ！　あんたのセイバーが来る前に、俺が全部まとめてブツ潰してやるツ
!!」

冬木教会の主たる言峰璃正の消息は依然掴めぬまま、時計の針は夜の礼拝の時刻を回った。表向きには一般の教会を装っているからには、誰かが璃正の代理として礼拝の儀を執り行う必要がある。そうなると、その役目を果たせる人間は、綺礼を置いて他にはいない。

目下、頭を悩ます懊悩の数々を振り払うように、綺礼は己の心を無にして、神へ捧げる祈りへと意識を没入させた。その静謐を引き裂くように、背後から声がかかる。

「いなくなつちまつた親父の代わりとは、相変わらず真面目なこつた」

軽薄な声音が礼拝堂に響き渡った。声の主には、覚えがある。誰何は不要だ。無言のまま踵を返すと、整然と並べられた席の中ほどに、綺礼が思い浮かべた通りの顔がぼつんと座っていた。

「よつ、言峰」

「石動か。このような夜更けに、いったい何用かな」

「ああ、この前の質問の答えを聞きに来たんだよ」

なんの話をされているのかは、すぐに分かった。あの日、衛宮切嗣が冬木ハイアットを襲撃した夜の会話のことを言っているのだ。それを分かっているながら、綺礼はくすりと笑みを零してみせる。

「はて、なんの話だったかな」

「おいおいとぼけんなよ。前に訊いたら、お前が本心から求めるものはなんなのか、つてさ」

「ああ、そういえばそんな問答をしていたな。もつとも、問われたところで私の答えは変わらんがね」

「そうかい」

石動は両手を後頭部で組むと、にこりと破顔してみせた。なにが面白いのか、綺礼にはさっぱりわからない。いつも通りの、感情の見えない上っ面の笑みであることは明白だった。

「……もう一度言うぞ、石動。私は神に仕える身。君の言うような俗物的な望みは、私には必要ない」

「それは、お前の本心からの言葉か？」

石動の表情から、はたと笑みが消えた。

当然だ、と返してやりたかった。自分は父と同じ敬虔な信徒であることを証明するべきだ。そう頭では理解していても、問われた刹那、綺礼は咄嗟に言葉を詰まらせた。

綺礼の反応を見た石動は、得心が行ったとばかりに深く頷いた。

「やっぱりなあ。お前は鉄の鎖で何重にも縛られて、自分自身、どこに向かえばいいかわ

かんなくなっちまってるだけだ。で、その重た〜い鎖のひとつが、いま、外れようとしている」

「……なにが言いたい」

石動の手が、綺礼の肩に軽く乗せられる。不思議と、振り払おうという気にはなれなかった。

「いいか言峰。あんたにとつて、父親の言峰璃正つてのは道標だ。清く正しい道標。あの人は、あんたが道に迷わないように、正しい道を指し示し続けてくれた」

「その通りだ。言峰璃正は我が人生における最良の模範。そんなことはお前に言われるまでもない」

「ああ、そうだろうよ。言峰璃正に関しちやまさに理想の神父と言って差し支えはない。立派な人間だと思うよ。俺だって尊敬してるさ……けどな、息子に対する道標つて意味では、あの人の在り方は間違いでしかなかった」

「なに？」

石動は綺礼の肩から手を離すと、大股で悠然と歩き始めた。決して綺礼から視線を外すことのないまま。

「あの人はただ、父親として理想的な模範解答を息子に指し示し続けただけだ。息子がなにを望むかも知らずに、な。おめでたいことに、それが息子の幸福に繋がるもの通信

じて疑わなかった……その結果が、これだ」

「……その辺りにしておけ。そこから先は、我らへの侮辱だ。黙って聞いてやるわけにはいかない」

石動は深く息を吐いて立ち止まると、じいっと綺礼を見つめる。真つ向から睨み返すことができず、綺礼は目線を伏せた。

なぜそうしたのはかは、自覚がある。凶星を突かれたからだ。

眼前の無神論者が言う通り、言峰璃正は神の信徒としてこれ以上もなく理想的で、模範的な善人だ。それは間違えようもなく綺礼も理解しているが、だからこそ璃正には、綺礼が理解できない。持つものには持たざるものの気持ちが変わらない。息子の心を知らず、璃正は綺礼を自慢の息子だと宣って回る。綺礼もまた、そうあれかしと振る舞うほかなくなる。そういう意味では、石動の評した「おめでたい」人間という言葉もあながち的外れとはいえない。

心の奥底に深く沈めた筈の迷いが、水面から僅かに顔を出す。石動は、その迷いを見抜いているかのようにだった。

「なあ、言峰……お前はもう、子供じやないんだ。誰かに敷いてもらったレールを走り続けて、それでも答えが出なかったのなら、そこから先は自分で考えて行動しなくちゃならない」

「お前に、なにがわかる！」

綺礼の語尾は上がっていた。激昂せずにはいられなかった。

あらゆる道を模索しても解を得られず、彷徨い続けてきた綺礼の苦悩が、こんな軽薄な男に理解できるとは思えなかった。理解してほしいとも思わなかった。綺礼は、石動に掴みかからん勢いで声を荒げた。

「自分の考えだど？ それこそ、くだらない世迷い言だ！ 言つたはずだ、そんなものは必要ないと……私には聖杯に懸ける悲願もなければ、妄信するに足る理想もないのだから！」

「いいや違うね。それがそもそもその間違いなんだよ」

「なにが間違いなものか！」

「だったら訊くが、お前、そうやって生きてきて一度でも自分を納得させられる。『答え』を見出だした試しがあつたか」

綺礼はまたしても、即座に回答することができなかつた。言葉を詰まらせ、目線を伏せる。そんなことは石動に問われるまでもなく、自分自身が一番よくわかっている。だから、答えられない。

「私は……」

綺礼は片手で頭を抱えた。

己のことがなにひとつとして理解できなかつた綺礼だが、今まで積み重ねてきた求道の先に答えがないことだけは、心のどこかで分かっている。だから綺礼は衛宮切嗣に期待をかけたのだ。自分と同じ彷徨者であるあの男に。

「——ならば石動惣一、そこまで見抜いているのであれば、逆に君に問おう。私は、いつたいどうすればよかつたのだ。どうすれば、解にたどり着けるといふのだ」

「いやあ、そんなモン、わざわざ俺に聞くまでもないと思うけどな」

言葉の意味を測りかね、眉根を寄せる綺礼だったが、その意識はすぐに一点へ向けられることになった。

——ゴツ、ゴツ、ゴツン。

鈍い音が静謐な礼拝堂に響き渡る。

木と鉄でつくられた重い扉を、一定間隔でなにかが叩いている。

綺礼はいったん思考を中断し、訝しみながらも、扉へ向かつて歩き始めた。

「なんだ？　こんな時間に……礼拝目的というには些か様子がおかしい」

「どうかな。なんにせよ、教会を預かる身としては、訪ねてきた相手をそのまま追い返すわけにもいかねえだろ？」

石動の言う通りだ。冬木教会は、魔術の素養の有無にかかわらず、万人に向けて広く扉を開いている。たとえ夜分の来訪であろうとも、訪ねてきた人間を無碍に追い返すこ

とを、きつと綺礼が模範とする璃正はよしとはしない。

綺礼が礼拝堂の扉に手をかけた、その刹那。

「——ッ！」

膨れ上がった殺気とともに、轟音が響く。

枠を鉄で縁取られた重たい木製の扉が軋みを上げ、熱した油に触れ、爆ぜた水のように勢いよく吹き飛んできた。

ほぼ反射的に両腕を交差させ防御姿勢を取ったが、扉が丸ごと吹き飛んでくる事態など綺礼の想定にない。重たい扉は綺礼の腕をしたたかに打ち付け、そのまま倒れ込んでくる。

綺礼は右腕を突き出した。手のひらに込められた圧が、扉の木造部分を木っ端微塵に粉碎する。扉を縁取っていた鉄枠がシャーンと音を立てて地に落ちる頃には、既に綺礼は八極拳の構えをとっていた。そこではじめて、綺礼は襲来した敵の姿を視界に捉えた。

「こいつは……ッ！」

鋼鉄でできた鋼の体に、今まさに扉を吹き飛ばしたのであろう巨大な豪腕。顔面には虚のような穴を三つ空けた、人間とも英霊とも明らかに質の異なる怪人がそこにはいた。

鉄が擦れ合うような耳障りな異音が響かせながら、鉄の怪人が地を蹴り、駆け出す。「さあて、綺礼ちゃん。相手は並のスマツシユとは一味違うぜ。このピンチ、いつたいどう乗り越える？」

「スマツシユ、だと——」

疑問符を浮かべる綺礼だったが、会話の隙などありはしない。八極拳の達人たる綺礼すらも息を呑むほどの速度で、鉛色のスマツシユは突撃を仕掛けてくる。

瞬く間に両者の距離が詰められた。その豪腕が、綺礼を仕留めんと振り抜かれる。

「速い——ッ」

人間の限界を遥かに超えた速度で繰り出された右の拳をすんでのところで回避しながら、綺礼は間近で見た拳の鋭さに肝を冷やした。ただの力任せの拳ではない。左足で踏み込み、大地から得た力をそのまま拳へと伝えて威力を生み出している。すなわち、異形ながらに全身をフルに活用した拳法家の拳にほかならない。迂闊に喰らえば、一撃で命を刈り取られることは明白だった。

「クッ」

続く二撃目の拳を、今度は後方へと飛び退るように回避する。礼拝堂に並べられた木製の椅子を、スマツシユの拳が掠めた。決して安い作りではない椅子の背もたれ部分が、それだけで容易く木つ端となって吹き飛んだ。

「……なるほど、相当な威力だな」

彼我の膂力の差を思い知らされながらも、しかし綺礼の戦意が薄れることはなかった。倒せないことはない。そういう確信があった。

攻撃の威力は申し分なく、戦闘面の技術もまなかななものではない。けれども、眼前の敵からは「意思」を感じない。確固たる魂を持たぬ拳では、八極拳を極めた綺礼を仕留めることは敵わない。

「やれやれ、こんなときにアサシン不在とは……いや、それとも、アサシンの不在を狙つての暴挙かな？」

鋭い視線で、後方の石動に一瞥をやる。

アサシンは、キャスター・ランサー両陣営の討伐のため、既に戦場へと向かわせている。いま、己の身を守ることができるのは、この拳ひとつだ。さしあたっては、迫りくるスマッシュを無力化させてから、石動を問い詰める必要がある。

綺礼は拳を構え直し、眼前のスマッシュへと向き直った。

「その意思をもたぬ拳でどこまでやれるか、試してみるがいい」

目前の敵に狙いを定めたスマッシュは、再度その豪腕を打ち合わせ、駆け出す。巨大な砲弾さながらの拳の嵐を前に、綺礼は逃げるでもなく、逆にスマッシュの懐へと飛び込んだ。

「ハッ！」

攻撃の合間を搔い潜って、綺礼は手のひらをスマツシユのボディへと叩き込んだ。氣の流れを集中させ、その鋼の体へと一気に流し込む。大木すらも容易に押し折れる綺礼の発勁はつげいを受けたスマツシユは、大きくよろめき、後退った。

すかさず距離を詰め、追撃に出る。綺礼の殺人拳は、敵の体を内側から破壊する。鋼鉄の装甲で身を鎧おうとも、綺礼の前では無意味だった。

「——オオオオオオオオツ!!」

スマツシユは、咆哮とともに豪腕を振り抜いた。予備動作のない、正確無比な一撃だ。綺礼は敵の腕に己の腕を覆い被せて軌道を逸らし、力を分散させると、そのまま無力化したスマツシユの腕を己の脇腹へと抱え込んだ。

「ッ!?!」

表情のないスマツシユの鉄のマスクが、驚愕に震える。

綺礼に絡め取られた腕は、もはやどれだけ足搔こうともびくりとも動かない様子だった。綺礼がそうさせている。腕力だけでは、技術を極めた綺礼のロックから抜け出すことは敵わない。

「フンッ」

綺礼の肘打ちが、絡め取ったスマツシユの肘の、その内側へと入った。装甲に守られ

ていない関節部を狙った一撃は、スマツシユの内部を骨格から粉々に打ち砕く。全身を痺撃させながら、スマツシユの右腕がだらりと落ちる。前のめつたスマツシユの体を、綺礼の掌底が下方から弾き上げた。そのまま手のひらを押し付け、スマツシユの装甲の内側へと気を叩き込む。

「ガ……ア」

ふらつき、後方へ倒れ込もうとしたスマツシユの間合いの内側へと、勢いよく右足を踏み込み、綺礼は腰を低く構えた。

「終わりだ」

死と隣り合わせの戦場で己の技を磨き続けて来た綺礼を仕留めるには、自我のないスマツシユでは些か力不足であったと言わざるを得ない。

もはや体勢を立て直す隙など与えはしない。弾丸のように鋭く捻られた綺礼の拳が、スマツシユの胸部装甲へとめり込んだ。綺礼必殺の絶招が、スマツシユの肉体を内側から粉々に粉碎する。

岩石すら粉々に粉碎する一撃だ。確かな手応えがあった。

よるめきながら数歩後退したスマツシユは、糸の切れた人形のように膝から崩れ落ちた。全身の装甲が光の粒子となって霧散してゆく。

「イ……ふッ」

スマツシユだったものがひとの姿へと戻つたと同時に、口元から血反吐が溢れ出す。自分自身の血を押し留めるすべを持たず、もはや受け身を取るほどの余力すらもなく、言峰璃正は前のめりに倒れ伏した。

「そん、な……馬鹿な」

綺礼は、その瞬間、自分がなにをしかしてしまったのかを理解した。

攻撃を受けたわけでも、疲労しているわけでもないというのに、いやに意識が混濁する。足元がふらつく。

「ち……父、上……？」

璃正は、スマツシユへの変身状態にあつたにせよ、綺礼の渾身の絶招を総身で受け止めたのだ。綺礼の呼び声に応えるだけの余力など残されているはずもない。

綺礼はこの日、この世で最も敬愛すべき人間を、自らの手で葬ってしまったのだ。

誰にも理解されることなく、自分自身ですら理解の及ばぬ憐れな男を、それでも愛し、癒そうとしてくれた女がいた。

女の想いに応えなかつた。同じように愛したかつた。だけれども、憐れな男には、女の気持が理解できなかつた。

愛情という言葉を理解するために、女との間に子を成し、これまでこなしてきた数々

の修練と同じように、努力を積み重ねた。

結局、その命が果てる最期の瞬間まで、男は女を愛することができなかつた。

自らの命を捧げてまで、女は男への愛情を示したというのに。

——ほら。貴方、泣いているもの。

病床で自ら命を絶ち、死にゆく女が最期に残した言葉は、今でも綺礼の心の奥深くに残っている。

あのときは、ただの勘違いだと思った。たとえ愛する妻が死んだとしても、人間として破綻している綺礼が、いまさら涙など流すわけがない、と。

そう思い込もうとしていた。

自分自身の感情から目を背けるように。

「なぜです、父上……なぜ……どうして、このような……ッ」

死に体の璃正を抱き抱えて、綺礼は嗚咽した。

綺礼の腕の中で、璃正は微かに瞼を持ち上げ、朦朧とした視線を向ける。

まだ微かに意識が残ってはいるが、もう助からない。回復不能の致命傷を与えたのは、ほかならぬ綺礼自身だ。璃正は今、内臓のほぼすべてを破壊し尽くされている。それは、誰よりも綺礼が理解していた。

「が、ふっ……き……れ」

もはや咳き込む余力もなく、血反吐を吐き溢しながら、璃正は最愛の我が子の名を呼ぶ。璃正は、震える左手を、綺礼の肩にかけた。右腕はもう、関節がひしゃげて、そこから先は使い物にならない。

「嗚呼……父上……私は、なんということを」

璃正は、震える口角を不器用につり上げること、努めて穏やかに微笑んでみせた。表情を見ればわかる。璃正には、綺礼を責める気がないのだ。

腕の中の父の体を抱き起こし、強く抱擁する。璃正の口腔内に蟠っていた血反吐が、綺礼の肩に吐き出される。ぜいぜいと微かな吐息を零して、璃正は、なにごとかを呟いた。

暗号めいたメッセージだ。それが最後まで紡がれることはなかった。だけれども、敬虔な信徒である綺礼には、璃正が今際の際になにを伝えようとしたのかなど、容易く理解できた。

しばしの抱擁のあと、綺礼はそつと優しく、礼拝堂の床に璃正の遺体を横たえた。

清廉にして潔白なる理想の神父。己の進むべき道に迷う綺礼を案じ、正しい道を指し示し続けた最愛の父の命を、綺礼はこの手で摘み取ってしまったのだ。父の愛情に、なにひとつ報いることのないまま。

「こんな……こんなことで……こんなにも、容易く」

体が震える。父の血で汚れた己の両手を見つめ、綺礼はふらりと立ち上がった。

ずつとそばにいてくれるものと思つて疑わなかった。こんなにも容易く壊してしまえるなんて、思つてもみなかった。

——ぱち、ぱち、ぱち。

綺礼の嗚咽に混じつて、乾いた拍手の音が響く。

涙を拭うことすら忘れて、綺礼は幽鬼のように振り返つた。不敬にも礼拝堂最奥の講壇に腰掛けた石動惣一が、綺礼を見下すように手を叩いていた。

「貴様……貴様が父上を」

「その通り。俺からの贈り物さ。お気に召していただけたかな？」

聖堂教会の神父を、その本拠地たる教会で殺すなどという蒙昧極まる暴挙に出たというのに、石動はなんでもないうように笑っている。なぜそんなふうに見えるのか、綺礼には理解が及ばない。

「なぜだ、なぜ笑う……なにがそんなに面白いッ！」

問われた石動は、呆れた様子で大きく息を吐き出すと、ゆっくりとかぶりを振り、答えた。

「いやあ綺礼ちゃん。その言葉、そっくりそのまま返させてもらおうよ」

「——は」

はじめ、自分がなにを言われているのか理解が追い付かなかった。

一瞬遅れて、自分の表情筋に違和感を覚えた。口角が、意思に反して引き攣っている。その不自然な痙攣を自覚してはじめて、綺礼は硝子窓に視線を向けた。

「馬鹿、な」

呆然と立ち尽くすほかなかった。夜の硝子窓に映り込んだ自分自身のあまりにも歪な笑みを見てしまったとき、綺礼は戦慄した。

笑っている。

この手で最愛の父を討ったというのに。

滂沱と流れ落ちる涙は真実のものだ。だけれども、父を喪った哀しみに反して、綺礼はこみ上げる笑いを堪え切れず、歯を剥いて笑っていた。

壊れている。そう思わずにはいられなかった。

「私は、そんな……」

己の頬を掌で掴み、無理矢理に笑みを抑えようとするが、それは無駄な抵抗だった。沸き起こる興奮が、綺礼の白いキャンパスのような心をどす黒く染め上げていくような感覚。

「父、上」

二度と届かぬと知りながらも、綺礼は継るように愛する父を呼んだ。死と隣合わせの修練の日々が、走馬灯のように脳裏を駆け巡ってゆく。

綺礼の幸福を第一に願ひ、息子の心を理解できないながらも、それでも愛し、導いてくれた最愛の父。

その父を、言峰璃正を、綺礼はこの手で壊したのだ。

父の右腕を容赦なく粉碎し、内臓を破壊し尽くして、二度と助からぬ致命傷を与えたのだ。

肉親殺し。許されざる罪。絶望するには十分過ぎる状況で、しかし綺礼が懐いたのは、心底からこみ上げる——ひとかけらの爽快感だった。

それを認識してしまったとき、綺礼は絶句した。

——ほら。貴方、泣いているもの。

死にゆく妻が最期に残した言葉は、今でも綺礼の心の奥深くに残っている。

あのときは、ただの勘違いだと思った。たとえ愛する妻が死んだとて、既に人間として破綻している綺礼がいまさら涙など流すわけがないと、そう思っていた。

だけれども、妻の言葉は正しかった。綺礼はあのとき、間違いなく悲しみ、落涙したのだ。

そのとき懐いた感情が、心の奥底に封じ込めたはずのどす黒い染みがじわりと滲み広

がって、綺礼の心に暗い影を落とした。影は、瞬く間に綺礼の胸中を埋め尽くしてゆく。綺礼は、愛する妻を喪った哀しみに涙したのではない。

愛する妻を、この手で壊すことができなかつた悔しさに、――

「――ち、ちがう！　ちがうツ!!」

頭を抱え、絶叫とともに、胸中で鎌首をもたげた思考を否定する。

否定したところで意味のないことなのだ、心のどこかで理解しながら、それでも綺礼に残った善性が、理性が、全力で抵抗している。

「そんなものは度し難いほどに醜悪な悪性だツ！　私の中にそのようなものが宿っているなどと……!!」

綺礼は半狂乱状態で叫んだ。そんなことはありえないのだと、自分に言い聞かせたかった。そうでもしないと、綺礼の理性が壊れてしまう。

だけれども、綺礼の心はもう分かっている。理解している。

綺礼は、石動の罠に嵌められるかたちで、図らずして父の体を破壊した。自分の意思の介在しない破壊。結果、理性の心は壊せぬまま、あの愚かな父は、最後の最後まで息子の善性を信じ、帰らぬひととなったのだ。

そのことが、悔しくて、悲しくて、腹立たしくて、感情のやり場を失った綺礼は慟哭するほかになく。

「——これは、違う。なにかの間違いだ、……かの言峰璃正の息子に、そのような歪みがあつていいわけが……」

「いいや、なにも違わねえよ。お前はそういう人間だ。お前は、俺が見込んだ通りの最低最悪なサイコ野郎なんだよ！」

嬉々として快哉を叫ぶ石動に、綺礼は血走つた目を向けた。

「貴様になにが分かる。自分自身ですら己を識る解を持たぬこの私の、いつたいなにが——！」

「わかるさ。お前のことならなんでも」

石動は、謳い上げるように、滔々と口を開いた。

「言峰綺礼。お前はこれから、自分の愉悦のためだけに敬愛する恩師を殺し、そのサーヴァントを奪い取る。そしていまから十年後、非道の限りを尽くしたお前は『正義の味方』に討たれて終わるんだ」

「——は？」

胸の内からこみ上げる嗚咽と笑いが、ぴたりと止まった。

あまりにも突拍子のないことを言われたせいとか、綺礼の思考が一瞬、停止したのだ。だけれども、石動はそんな綺礼の感情になどまるで斟酌する様子もなく、言葉を続ける。

「それが後の世に語り継がれる言峰綺礼という名の悪党の末路だ」

「……いつたい、なにを言っている？」

「お前からすりや未来の話だが、俺からそりや過去の話ってことさ。なにしろ、この世界は所詮過去に起こった聖杯戦争を再現しただけの仮想世界。言峰綺礼なんて人間は、現実世界じゃとうの昔に死んじまってんだからな」

石動の言葉は、やはりするりとは頭に入ってこなかった。

あまりにも荒唐無稽な話だ。それを認めることは、自分自身のみならず、この世界のなにもかもが価値をなくすことに繋がる。

ここにいる綺礼も、いましがた綺礼が殺した父も、なにもかもが虚構の存在であるなど、そんな話は認められるわけがない。

「戯言を。そんな馬鹿げた話があるものか……！」

「ああ、まあそういう反応にもなるよなあ。安心しろよ、すぐに信じろとは言わない。信じたくないこともあるだろうからな」

石動はさして残念がるわけでもなくぼつりと返すと、壇上から飛び降りた。緊張感に欠ける極めてゆつたりとした歩調で綺礼の隣を横切ると、石動は去り際に間延びした声を上げた。

「綺礼ちゃん。お前にひとつ、いいことを教えてやるよ」

「な、に……？」

礼拝堂の入り口手前で立ち止まった石動は、その場でしゃがみ込み、木つ端微塵に破壊された扉の残骸をつまみ上げ、顔を顰めてそれを眺める。追撃をかけ、仕留めるならいまだ。石動が油断しているいまをおいて他にない。そう頭では分かっているのに、綺礼の体は動かなかつた。

その綺礼の様子を眺め、満足気に目を細めた石動は、手にした破片を投げ捨て、につと微笑んだ。

「お前の師匠……遠坂時臣は、もうすぐお前に家宝のアゾット剣を渡すことになっている。そんなときに奴さんやつこの最後だ。かわいそうになあ、愛弟子のお前に殺されるなんて考えてもみなかつたらしい」

「デタラメを言うな！」

反射的に怒鳴るが、石動は意にも介さぬ様子で肩をすくめるだけだった。

アゾット剣の存在は綺礼と知っている。英霊パラケルススが愛用したとされる、遠坂家に伝わる家宝だ。そんなものを、あの時臣が血縁者でもない綺礼に寄越すとは思えなかつた。仮にその気があるとしても、綺礼の今後の人生の進退に関わる話を、あの慎重な時臣が、部外者の石動にするとも思えない。

「ま、デタラメかどうかはそのとき判断すりゃいいさ。だが、これが事実なら、ちつたあ俺の言葉を信じる気にもなるだろ？」

まるで「絶対に的中する」とでも言わんばかりに、石動は破顔した。

綺礼の理性は石動の言葉を否定した。けれども、綺礼の心は、既に石動の言葉に耳を傾け始めている。その事実を否定するように、綺礼はかぶりを振った。

もしもそんな話が真実なら、綺礼は、この世界を――。

「そんじゃ、チャオ。また会おうぜ、綺礼ちゃん」

ぞんざいに片手だけを掲げて別れの挨拶を告げ、石動は礼拝堂を出た。もはや綺礼に頓着する様子もなく、石動の背はさつさと足早に夜の闇へと消えてゆく。追いかけるだけの気力は、綺礼には残されてはいなかった。

感情の奔流に翻弄され、思考が定まらない。

石動曰く、この世界はただ過去を模倣しただけの仮想現実で、現実世界の綺礼は既に死んでいるという。真実かどうかは判然としないが、現時点で、たったひとつだけ、綺礼はひとつの解にたどり着いてしまった。

自分自身の心根に破滅的な悪性が潜んでいる、という、あまりにも慈悲のない解に。認めるわけにはいかない。たとえば事実でも、認めてしまえば今まで築いてきたものが崩壊してしまう。

綺礼は慟哭した。

泣いて、嘆いて、感情のありつたけを吐き出した。

それも最初だけだ。綺礼の口から漏れる感情は、やがてすべてが笑みへと変わっていった。自分自身ですら感情の判然としない、狂った笑みだ。

自嘲といえ、自嘲なのかもしれない。同時に様々な感情が濁流のように押し寄せてくるものだから、綺礼にもいまの自分の心はわからなかった。もう、自分が笑っているのか、泣いているのかも、わからなかった。

やがて、綺礼の心の空洞に、ひとりの男がぼつりと浮かび上がった。

「衛宮、切嗣……」

一歩脚を踏み出すことすらためらうほどの暗く静謐な心の闇のその奥に、小さく見える男の姿。右も左も分からない暗闇の中で、衛宮切嗣の立ち姿だけが、綺礼の心に光を灯していた。

綺礼と同じく、己に過酷な修練を課し、自殺行為と見紛うばかりの極限状況の中、それでも生存し続けた男の、感情を感じさせることのない能面のような顔。それが、綺礼の心に希望をもたらした。

「嗚呼、そうか……お前も、そうだったのか」

半ば錯乱した思考の中で、綺礼は次の解へと繋がる方程式を、仮に定義する。

もしもあの男が綺礼よりも数年早くこの「答え」に辿り着き、凄惨極まりない巡礼の日々に終わりを告げたのだとしたら。

あの男の目にはいま、いったいなにが映っているのだろうか。知りたい。識りたい。

衛宮切嗣という人間の心の奥底に潜むものを、この目で見たい。それが綺礼と同質のものか否か、今はともかくそれだけが知りたい。

今まで信じてきた自己が崩壊し、それを取り巻く世界すらも嘘偽りで塗り固められた無間地獄だとするならば、もはやあの男の存在だけが、綺礼にとってたつたひとつ残された道標に他ならない。

「アサシンは……今頃戦闘中か」

ふいに、時臣の命に従い帰らぬ戦場へと出撃したアサシンに思いを馳せる。時臣はアサシンを使い捨ての駒にするつもりだが、冗談ではない。アサシンを失えば、綺礼は二度と、聖杯戦争の中で衛宮切嗣と相対する機会を失ってしまう。サーヴァントを持たぬ綺礼など、衛宮切嗣からしてみれば有象無象の標的のひとりでしかない。それでは、綺礼の目的は果たされない。

だが、今後衛宮切嗣との戦いは激化していくとみてまず間違いはない。その戦いを、アサシンだけで渡り合うには、戦力面で見て些か心許ないものがある。まずは戦力を確保する必要があった。

綺礼は未だ己の右手に三画刻まれたままの令呪を見やり、次に眼前で横たわる璃正の

遺体へと目を向けた。

「父上——」

あなたの息子は、いまほんの少しだけ、真実へ向かつて歩き出すことができました、と。そう告げたい思いを抑え込み、綺礼は父が最期に遺してくれた遺産を継承するため、その枯れ木のような腕に——自分が破壊してしまった右腕に、そつと、労るように指先を触れた。

親子の間でのみ通じる聖なる祝詞を、肅々と謳い上げる。それだけで、監督役である璃正の全身に刻まれた無数の令呪は赤く輝き、息子である綺礼の体へと受け継がれてゆく。過去の聖杯戦争で持ち越された余剰令呪だ。

父の遺産の継承を終えて立ち上がったとき、綺礼の顔から、迷いの色も、あらゆる感情の色も、ごっそりと抜け落ちていた。能面のような無表情を貼り付けたまま、綺礼は顔を上げる。

破壊された扉の向こう側に、一匹の蝙蝠が見えた。足元にカメラを括り付けている。使い魔だ。

使い魔がいるということは、教会が監視されているということだ。どの陣営の使い魔であるかなどは、もはや考えるまでもなかった。

「はいはい……はいはい、はいはいはい」

能面のような無表情のまま、綺礼の口元から笑みが漏れる。

本来であれば、敵の使い魔など見咎めた時点で迷わず仕留めるべきなのだろう。けれども、今の綺礼にはもう、時臣から与えられた命令も、璃正から受け継いだ使命も、なにもかもがどうでもよかった。わざわざ追撃したところで、得られるものはなにもない。

あの蝙蝠は、放っておけば飼い主の元へと帰る。あの男がいまの綺礼を見たとき、果たしてなにを思うだろうか。自分で自分が分からないのだから、衛宮切嗣の思考など理解できるわけもない。それでも、今はあの蝙蝠がいつか衛宮切嗣の元へ辿り着く瞬間を夢想する。それだけでいい。今は、それだけで。

「待っている、衛宮切嗣。私は必ず——お前にたどり着く」

第19話「戦場のリユニオン」

戦兎が大量の酒瓶が入った紙袋を持ち帰ったとき、おおよそ想像はできていたことだが、ケイネスはやはり激怒した。ランサーの振る舞いに対して、戦兎はもうどうしようもないという諦念が強かったが、ケイネスはそうではない。これから戦闘が始まるというのに、己のサーヴァントが街に出て酒に浸っていたとなれば怒るのも頷ける。

「まったく、少し自由を許せばこのザマだ。こんなことならはじめから外出など許すのではなかった！」

「まあまあ、それでも私はただ時間を無為に過ごしたわけではないのです。それでも、私なりに得るものがあります——」

「貴様はそうであろうな！ 人の金で好きな酒を買い漁っていればよいのだから！」

「ああいえ、そういう話ではなく」

ケイネスの剣幕に反して、ランサーはのんびりとした口調で微笑むだけだ。同じようなやりとりが、既に五分近く行われている。流石のケイネスも怒鳴ることに疲れてきたのか、もうこれ以上ランサーになにかを言い含めようとはせず、大きく深呼吸をして、かぶりを振った。

荷物運びをやらされた戦兎にしても、ケイネスに同情はするものの、一緒になってランサーを叱責する気にはなれなかった。この自由人ランサーになにを言ったところで暖簾に腕押しだ。そんなことに時間を割いている暇があれば、フルボトルの調整に時間を使ったほうが遥かにマシだと思われた。

戦兎の予測の通り、ケイネスの怒りのエネルギーがいったん尽きたタイミングをい見計らったように、キャスターが顔を出した。

「さて、そろそろ今後についての話をしたいのですが……よろしいか」

「……ああ、構わん。もう怒鳴るのにも疲れた」

「心中お察しいたします」

キャスターは小さく頭を下げると、戦兎に向き直った。戦兎は示し合わせたように空間にホログラムウインドウを展開し、そこに冬木市の地図を表示させる。街のふもとに位置する円蔵山の中腹に、赤いマーカーが打たれていた。

「日中のうちに仕込みは済ませておきました。あとは、冬木を流れる龍脈の心臓部たるこの柳洞寺にて、その流れを書き換え、奪い取る。それだけで、遠坂が誇る絶対的なアドバンテージは脆くも崩れ去るだろう。口にすれば単純な作戦だが、それだけに失敗は許されない」

戦兎とランサーが頷くのを、キャスターは説明を続ける。

「前衛はランサーに任せる。マスターには、今回の作戦の肝となる術式が組み上がるまで、私の護衛に全力を費やして貰う。ケイネス殿、並びにソラウ殿は、決してこの工房から出ないように」

「ふむ。マスターである私が工房で穴熊を決め込むという戦略そのものに異論はない。それは遠坂やアインツベルンもやっていることだ……だが、ただ黙って待っているだけ、というのも些か能が無いように思える」

「そう言うと思つてたよ」

待つてましたとばかりに戦兎はラボに向かつて歩き出した。その背を全員が追従する。複数のパソコンやモニターが乱雑に置かれた大きなテーブルに、小型のカメラとプロペラが取り付けられた小さなドローンが、合計で五台置かれていた。

「なんだこれは」

見慣れない機械を見せられたケイネスが、怪訝そうに眉を顰める。その反応が愉快で、戦兎は髪を掻きむしりながら相好を崩した。

「超小型カメラ搭載型のドローン……つつてもわかんねえか。まあ、百聞は一見にしかず。まずはこいつの性能をその目で確かめてくれ」

ポケットから取り出したカメラフルボトルをしゃかしゃかと振つて、親機となるドローンのスロットにそれを装填する。同時に、親機となるドローンが空中に飛び立ち、

設置されたモニターに映像が映し出される。ドローンのカメラが映し出す映像が、リアルタイムで送信されているのだ。遅れて、子機となる四台のドローンも飛び立ち、残る四台のモニターに親機が撮影しきれない死角を映し出す。合計五台のドローンは、工場の窓から夜空へと飛び立っていった。モニターには冬木市の夜景が映し出されている。

「戦況は逐一このモニターに映像として映し出される。ランサーの戦闘を中心に撮影するようにプログラミングしてるから、例えばケイネスが戦場にいないとも、完ツ壁に状況把握ができるはずだ」

「これを、マスターが造ったのか？ 我々の時代から見て二十年以上も前の、この時代の技術で？」

キヤスターの質問に、戦兎はニヤリと笑みを深めた。

「難波重工が使ってたドローン技術を参考にしつつ、てえええんさい物理学者であるこの俺の、天ツツ才的な頭脳によつて生み出されたAIユニットを親機に搭載。常に戦況を自己判断し、遠隔通信で子機に的確な指示を出し、死角のないリアルタイム映像をこのモニターに映し出す！ これがあれば戦場に出なくとも、ケイネスは常にランサーの状況を把握できるってコト。凄いでしょ？ 天才でしょー!？」

「いや、しかしだな……こんなものを使わなくとも、使い魔の目を通せば戦況の把握くらいは——」

「そう言うなって。こつちのほうが絶対、便利だから。これなら無駄に魔力を使う必要もねえし、そもそもこのドローンは戦場に近付く必要もない。誰も気付かないような遙か上空から、衛星写真並の精度で撮影してくれる。ほら、なんか凄いような気がしてこない？」

「ううむ、そうは言うが……」

「ふむ。君主よ、一流の魔術師たるあなたが、このような胡乱な科学技術に頼ることに抵抗を感じるのとはわかります。しかしながら、時計塔の風雲児たるケイネス卿の才能は誰しもが認めるところ。そのケイネス卿を思つてこれを造つた我がマスターの顔を立てて、ここはひとつ、利用してみるのも悪い話ではないのでは？」

ケイネスの表情が、変わった。

「なるほど……君の言うことは分かった。考えてもみれば、これはルール無用の聖杯戦争。すなわち、生き残りを懸けた熾烈な戦い。アインツベルンの暴挙や、遠坂の圧倒的な優位性を鑑みるに、私も使えるものは使つた方がよいのやもしれんな」

「ええ、その通りです。流星は私が認めた偉大なる君主^{ロード}、理解が早くて助かります。そんな貴方にこそ、私は勝利を齎したい」

「よさぬかキャスター、見え透いた世辞はもう沢山だ」

キャスターの言葉を片手で制するケイネスだったが、その反面、まんざらでもない様

子で頬が緩んでいるのを戦兎は見逃さなかった。このキャスター、つくづくケイネスの扱いが上手い。

「そんなことよりも、だ。此度の作戦、我らの勝算は如何ほどのものなのだ。二度目の襲撃ともなれば、さしもの遠坂も用心せずにはいられまい。その点も抜かりはないのであらうな」

「それこそ愚問ですな、ロード君主よ。これでも私は人類史に名を刻まれた稀代の軍師。勝算のない戦ならば、はじめから挑みはしない。最大戦果はセイバーの脱落。最低でも、遠坂から龍脈を奪い取り、再起困難な痛手は負って貰う。私はそのために此度の策を練りました。それとも、策士の言葉では信用に値しませんかな？」

「……あいも変わらず大した自信だな。よかろう、そうまで言うならばひとつ乗せられてやる。かの孔明の畷とやら、とつくりと楽しませて貰おうではないか」

キャスターは慇懃に頭を下げた。

「では、ケイネス殿は陣地に残り、状況把握に専念。必要があれば、適宜念話にてランサーに指示を送る……という方針でよろしいか」

「構わぬ。ことによつては、此度の戦場で宝具を切る必要もあろう……その見極めは、正確であれば正確であるほどよい。せいぜい、貴様の発明とやらを利用してやろう、桐生戦兎」

涼しい顔で流し目を送るケイネスに、戦兎は笑顔で応える。なんだかんだといって、自分の発明が有効活用されるのは気持ちがいいのだ。

「少々お待ちを、ケイネス殿。いま、宝具を切る、とおっしゃいました？」

「うむ、言ったがそれがどうかしたか、ランサー」

「ここで我が真名を明かしてもよいのですか？」

ランサーは口元に笑みを浮かべたまま、きよとんと目を丸くしている。ケイネスは面倒臭そうに体の芯をランサーから背けた。

「ふん、貴様は貴様で散々大口を叩いたのだ、せめてただの酒飲みでないことを証明してみせよ。それが叶うならば、宝具の開帳くらいは許してやってもよい」

「流石はケイネス殿！ まあ、真名ごとき開帳したところで圧倒的な知名度補正を誇る私に弱点などあるわけでもなし。かくいう私もそろそろ高らかに名乗りを上げて戦いたいと思っていたのです。いやあ、これは腕が鳴るといふもの。やる気が湧いてきました！」

まるで親から新しい玩具を買い与えられた子供のように、無邪気な笑みを咲かせるランサーに、ケイネスはこめかみに青筋を立てながら向き直った。

「待てランサー、今話したのは状況によつてはの話だ！ 真名の開放が必要かどうかを判断するのはあくまでこの私なのだ、くれぐれも勝手な判断で先走るなよ！」

「あつはははははははッ！ そんなことは言われるまでもありませんとも。そも、私が勝手な判断で先走ったことなんてありませんでしたっけ？」

「き、貴様というやつはよくもまあぬけぬけと……！」

先のシャドウランサー戦を脳裏に思い浮かべて、戦兎は思わず失笑した。

ケイネスの判断を無視して敵の宝具を返還し、ケイネスの警告を無視して一対一の戦鬪を続行、それでも見事勝利をもぎ取って見せたのは、他ならぬランサーだ。

これから目下最大の強敵である遠坂に決戦を仕掛けるというのに、それを微塵も恐れず笑い飛ばしてのけるランサーの振る舞いを見てみると、難しいことを考えて暗澹とした気持ちを抱えたまま戦場に赴くことが馬鹿馬鹿しく思えてくる。勇気が湧いてくる。

「ああもう、最ツ高だな、お前ら！ お前らが一緒なら、根拠はないが不思議とやれる気がしてくる」

「ええ、ええ、それでよいのです。戦などというものは、死なんと戦えば生き、生きんと戦えば死するのみ……要するに、考えてもしようがないということですよ。ただ持てる力のすべてを懸けて、全力で事に挑むのみ！ そうすれば、勝利など後からついてくるものです」

「とんでもない暴論だが、あなたが間違いとでも言えんところがおそろしいな」

キャスターの苦笑に、ケイネスはあからさまに呆れた表情を浮かべながら、こくこく

と首肯で答えた。

「ああ、もうなんでもよいからとつと出陣せんか」

「あつはははははははは！ それではみなもの者、ケイネス殿の号令も出たことですし、いざ出陣ですつ！ にやー！」

奇声とともに拳を振り上げるランサーに、異論を唱えるものはいなかった。

円蔵山は柳洞寺へと続く石造りの参道から大きく外れ、まつとうな人間ならば決して踏み歩くことのない未舗装の獣道を進んだ先に、見晴らしのよい丘があつた。山の中腹に建てられた柳洞寺よりも標高としては高い。この位置からならば、生い茂る木々に邪魔されることなく、眼下の柳洞寺を睥睨することができる。丘の太木にもたれ掛かるようにして、ブラッドスタークは眼下で始められた戦闘を眺めていた。

夜の帳に暗く影を落とされた木々の合間に、灰色に開けた柳洞寺の境内。その空間の中を、無数の人影が飛び交っている。本殿の正面では、キヤスターがなにやら地面に陣を描き、直接手で触れ、魔力を流し込んでいる様子だった。

アサシン軍団はみな一様にキヤスターの妨害を目的として殺到するが、ランサーとピルドの奮戦ぶりもなかなかのもので、アサシンはどうにもキヤスターに近付けないでいる。

数を増やすほどに一騎あたりのスペックが落ちるといふ宝具特性を鑑みれば、アサシンでは歴戦の勇士であるビルドとランサーに太刀打ちができないことも道理といえる。

「ああああ、焦れたいねえ。サーヴァントといえども所詮は烏合の衆か」

平時の軽快な声音とはかけ離れた、低く、老獪さを滲ませた声音で、スタークは嘲るようにぼやいた。もう、石動惣一の声や顔に頼る必要はない。

「せっかくマスターがやる気を出したつてのに、これじゃああアサシンが浮かばれない。まったく、随分と下手なカードの切り方をしたモンだよ、遠坂の奴ア」

「カカツ、それだけセイバーの実力を信頼しているということじゃろうて」

背後の闇の中から、不気味な忍び笑いが漏れ聞こえる。

振り返ると、寸前まで間違いなく誰もいなかったはずの場所に、痩せ枯れた老人の矮躯があった。はじめからそこにいたのであれば、トランスチームシステムのセンサーが感知するはずだ。老人は、なにもない場所から「突然」現れたのだ。

「おお、いたのか。相変わらずの神出鬼没っぷりだなア、臓硯」

「今更背後を取られたくらいでは微塵も驚かぬか。ここはひとまず、おぬしのその胆力を高く評価しておくでしょうかのう」

「そいつは光栄だ。だが爺さん、あんたが今日ここに来たのは、そんな世間話をするためじゃあない。もっと違う話があるんだろ？ 俺と話したいことが」

「なんじゃ、おぬしこそ、ワシが来ることが最初から分かつておったとでも言いたげな口ぶりではないか」

臓硯は皺に埋もれた唇を歪ませて、数歩前へ進む。スタークの隣に並んだ臓硯は、眼下の柳洞寺で繰り広げられる戦闘の趨勢を眺め、落ち窪んだ眼窩の奥で、人間ならざる瞳を微かに光らせた。

「石動惣一、いやさブラッドスターク。監督役を殺め、その小倅こせがれを焚き付け、おぬしはいつたいなにを企んでおる？」

「ハッ、こいつは参った！ 随分と単刀直入に聞いてきやがる！ 遠慮がないねえ。あなた、キャンデイもすぐ真ん中から噛み砕くタイプだろ？」

スタークはわざとらしく自らのバイザー越しの額をペしりと叩いて、言葉とは裏腹に、まったく参っていない様子を見せつけるかのように笑ってみせた。

対する臓硯も、スタークと同様に笑っていた。その思惑を決して表に出すことなく、不自然なまでに好々爺めいた笑みを顔に貼り付けて。

「よせよせ、ワシは然様な言葉遊びをしに来たのではない。おぬしとて、今更戯言ひとつでワシを煙に巻けるなどと思つてはおるまい？」

「まあな。だが、そんなこと聞いてどうするんだ？ お前は俺の計画を邪魔するつもりこそないが、かといつて協力をする気もない……そんなことは見てりやわかる。すると

なると、その質問はただの好奇心つてところだろうが、そいつをただ満たしてやったところで俺にメリツトはない。だろ?」

「ふうむ、これは手厳しいのう。隠居した老人の、他愛もない好奇心に付き合つてやるほどの余裕など持ち合わせてはおらぬか」

「ハッ、よせよ爺さん。俺はそんな安い挑発には乗らない。大体、今日はそういう言葉遊びをしに来たわけじゃねえんだろ?」

臓硯は納得した様子で頷いた。

「ククク、やはりこの程度では動じぬか。雁夜めであれば、とうに挑発に乗つて吠え散らかしておつたところじゃろうて。おぬしの爪の垢でも煎じて飲ませてやれば、少しは賢さかしくなるうものを」

「悪いな、俺に爪の垢はない。なにせ地球外生命体なんでねえ」

冗談めかした物言いで鼻を鳴らすと、スタークは臓硯の返事を待たずに体を木の幹に預け直した。

「ま、そんなに気になるなら黙つて見とけよ。俺の目的なんてモンはそのうち嫌でもわかるさ……もつとも、それまで互いに生きていたら、の話だな」

「カカ、そうじゃのう。火遊びをするにしても、精々上手く立ち回ることじゃ……互いに、の」

さぞかし楽しそうに、最後の言葉をねちっこく強調して臍硯はにたりと笑った。

この老いた怪人はいったいスタークの目的をどこまで把握しているのか、それともなにも知らずにかまをかけているのか。もう少し深く立ち入った会話をしてみたい、という好奇心が鎌首をもたげかけたが、すぐに思い留まった。この男は、かつてスタークが籠絡した難波重三郎などとは根本から異なる、本物の怪人だ。今まで関わってきた手合と同じ感覚で挑めば、手痛いしつべ返しを食らうことは火を見るよりも明らかだった。

「おぬしには思いもよらぬ玩具を寄越してもらった恩もあるからの……万に一つ、おぬしが窮地に立たされた折には、ワシが匿ってやることも吝かではないのじゃぞ」

「ほおう、こいつは意外な申し出だなア。いったいどういう風の吹き回しだ？」

「カカツ、そう惚けずともよかろう。それとも、気付かれていないとでも思っておったか？ 端からそのつもりであの玩具を寄越しおった癖に」

しわがれた鬍髯のような面が、にい、と歪んだ。こんなことはいちいち口に出して言うまでもないがお前の考えなど一から十までお見通しなのだから今更ワシ相手に隠す必要はないのだぞという態度がありありと現れており、よりにもよってそれが当たっているのだから、スタークにしてみれば極めて不快だった。

「おおっと、こいつは恐れ入る。流星に間桐の翁ともなれば、俺みたいな若造の浅知恵はお見通してかア？」

「そう大仰な話でもないわ。おぬしからはの……匂^くつておるのじゃよ」
「匂^くう？」

「そうさな、言うなれば……隙あらば腐肉に卵を産み付け、それを餌に這い回る生き汚い蛆虫の匂い、とでも言うべきか——ほれ、ワシと同類の匂いじゃ」

「生憎と、俺は蛇で通つてるんだ。これ以上妙なキャラ付けされんのは御免被りたいねえ！」

言葉を言い終えると同時、スタークは右の肘を軸にぐりんと拳を跳ね上げ、強烈な裏拳を臓硯の顔面目掛けて叩き込んだ。拳頭が臓硯の鼻先にめり込むと同時に、老人の矮軀は不定形の泥のように崩れ去り、無数の蟲となつて宙へ舞い上がる。

空に浮かぶ月をスタークの視界から覆い隠すほどの蟲の大群から、老人の声だけが反響する。

「カカ、少しばかりからかいが過ぎたかの。ワシと五分に話せる若造と見えるのは久方ぶりでのオ、年甲斐もなく興が乗つてしまうたわい」

「安心しろよ爺さん。五分どころか、そつちの方が数段上手だ。話していてこんなにも快な相手もそうはいない」

口惜しいことだが、今口にしたのは紛れもない事実だ。この世界に来てからというものの、スタークが誰かに本心を打ち明けたのもまた、これが始めてだった。

頭上の闇の中から、蟲の翅が擦れ合うような耳障りな哄笑が響く。

「然様な言葉で惑わされはせんぞ、忍び寄る者よ。今のはジジイを喜ばすための世辞として捉えておこう」

「ああ、どこまでも喰えねエジジイだよ、あんたは」

「カカカツ、おぬしがまた新たな玩具を抱えてワシの前に現れるときを、心待ちにしておるぞ」

スタークはもう余計な言葉を返す気にはなれなかつた。緩く掲げた手をぞんざいに振り、たった一言、いつも通りの挨拶で蟲の群れを見送る。

頭上を覆っていた闇が完全に視界から消え去るのを待つてから、スタークはわざとらしく、特大の嘆息を落とした。

「はああア、まったく恐れ入るよ。流石は聖杯戦争の裏に潜む元祖黒幕、とでもいったところかア？　ここは尊敬の念を込めて、大先輩とでも呼ばせて貰おうかねえ」

誰に届くわけでもない愚痴をひとり零すと、スタークは気持ちを切り替えるため眼下の柳洞寺へと視線を落とす。間桐臓硯に対して抱いた不快感と、今の自分に必要な状況判断とを冷静に分けて思考する。

桐生戦兎ジユニアスに感情を与えられるよりも以前のエボルトであれば、このような精神的作業は必要ではなかつた。けれども、それを煩わしいとも思わない。感情に精神が左右され

ることそのものを愉しいと感じている自分がいる。

「ああ、ダメだなこりゃ」

スタークは片手で軽く頭を抱えた。

戦場で宙を飛び交うアサシンの影が、最前よりも数を減らしている。臓硯との雑談に時間を割き過ぎた。そうすると、いまスタークがなすべきことは、ひとつだ。

「よオし、ここはひとつ気持ちを切り替えて、俺も楽しむとするかアー」

スタークは己を鼓舞するように両手でガッツポーズを作ると、大木に立て掛けていたトランスチームライフルを小脇に抱え、駆け出した。

少しでも丘を下れば、待ち受けていたのはヒトの侵入を許さぬ獣道だった。生い茂る木々に進路を阻まれ、月光すらも遮られる暗闇の雑木林に、ブラッドスターク闇夜に忍ぶ蛇は躊躇もなく飛び込んだ。主の意思に呼応するように現れた巨大なコブラが、木々の合間を音もなくすり抜け猛進する。血湧き肉躍る戦場は、すぐそこだ。

戦場を、無数の黒い影が飛び交っている。その影の間を、黒光りする短刀ダークが行き来する。ひとりのアサシンが短刀を投擲し、それをランサーがかわすと、それを受け取った他のアサシンがさかさず投げ返しているのだ。

アサシンの数は目算にして十騎といったところだが、戦場を行き交う短刀の数は、そ

の倍に迫っている。

「まったく、数だけが多いというのも、なかなか厄介なものですな〜！」

踊るように身を翻して跳んだランサーの鉾が、短刀のひとつを叩き落とす。すかさず飛び込んできたアサシンの短刀を鉾の切っ先で受け止め、離れるよりも素早くその胴体に刀を深く突き刺した。アサシンの断末魔がやむ間もなく、次のアサシンが迫りくる。けれども、結果は同じだった。いかな短剣飛び交う嵐の中であろうとも、キャスターの宝具で「気配遮断」のスキルを封じられたアサシンなど、ランサーにしてみれば雑兵も同然。何人いようと物の数ではない。

むしろ、心配なのは戦兔の方だ。ランサーはアサシンとの攻防を続けながら、後方でキャスターの護衛のために剣を振るうビルドへと視線を送った。

一方のビルドは、手にした忍法刀の電子音を鳴らし、白煙とともにひとりからふたり、三人、四人と分身を繰り返す。右腕に忍法刀、左腕に機関砲ホークガトリンガーを手にした紫と黒鉄色のビルドは、キャスターへと接近しようとするアサシンを忍法刀で斬り伏せ、付近を飛び交うアサシンへとホークガトリンガーの弾丸を浴びせる。

戦闘のさなか、分身したビルドのうちのひとりが手にした忍法刀に、その側でアサシンを牽制していたふたりめのビルドがホークガトリンガーを意図してぶつける。ホークガトリンガーのリボルマガジンが、火花を散らしながら回転した。弾丸が瞬時に生

成、装填される。四人に増えたビルドは、それを繰り返して断続的に弾丸を装填しながらアサシンのとの戦闘を続けていた。

「おいキャスター、ちよつと敵の数が多すぎるんじゃないの!？」

「流石に今回ばかりは黙って見過ごすわけにはいかないということだろうな。それだけ遠坂が焦っている証拠だ、勝利は近いぞ、マスター!」

「涼しい顔で……ッ、言ってるんじゃないよ!」

ホークガトリンガアの掃射の合間を縫って急接近してきたアサシンのひとり忍法刀で叩き伏せ、その霊基を確実に一刀両断しながら、戦兔はビルドの仮面の下で苦い声を漏らした。

「問題はない。すべては私の思うままだ。マスターこそ、口を動かしている暇があれば手を動かせ。敵はまだ多いぞ」

「言われなくても……わかって、ますよつてのオ!」

剣を振るい、機関砲を放ちながら、四人のビルドは戦場へ向き直った。釈然としない気持ちはあるが、今はキャスターと口論をしている場合ではない。

ビルドの一人が、飛び交う弾丸と短刀の合間を縫って己の間合いを確保すると、薄い水色のフルボトルを振って、ビルドドライバーに装填する。

『SENNPUUKI!』

もうひとりのビルドもまた、ひとりめと同様に鋼色のフルボトルをビルドドライバーに装填する。それを阻もうと迫りくるアサシンの短刀を、忍者ガトリングのビルドが忍法刀で打ち合い、阻む。

『ROBOT!』

「ビルドアツプッ!」

ふたりの戦兎の声が重なった。同時に、四人中ふたりの半身が、瞬時にその形状を変化させる。

分身状態の維持のため、右半身を形成する忍者ボトルはそのままに、左半身のみを水色へと変化させた『忍者扇風機』と、同様に左半身をロボボトルによって形成された豪腕へと変化させた『忍者ロボット』が戦列に加わった。

「ハッ!」

忍者扇風機となったビルドが、右腕に装着された巨大な扇風機サイイクストリーマーユニットを翳し、掛け声とともに起動する。ユニット内部のファンが高速回転をはじめ、生じた風は瞬く間に巨大な竜巻となって乱気流を巻き起こす。それだけで、アサシンたちの放り投げた短刀の軌道はめちやくちやに逸れ、明後日の方向へと飛んでいった。

「ウオオオオオッ!」

多くのアサシンが強風に煽られ動きを止めたが、中には吹き荒ぶ突風など意にも介さ

ず突撃を仕掛けてくるアサシンがいた。ほかのアサシンと違い、筋骨隆々とした肉体をローブで隠そうとはしていない。ビルドよりも一回りほど大きな体躯をしたそのアサシンが、不自然に盛り上がった怪腕を振り上げ、真正面から突撃してくる。

「お前の相手は俺だ！」

忍者ロボットへと変身を遂げたビルドが、すかさず怪腕のアサシンの眼前に躍り出た。振り抜かれた巨腕と、あらゆるものを破壊し尽くすロボットの左腕が正面から激突し、火花を散らす。

二度目の激突で、ビルドはロボットアームを大きく開き、怪腕のアサシンの腕を上下から挟み込むように掴んだ。いかな怪腕とはいえ、あらゆる物質の粉碎するビルドの巨腕を跳ね返すには至らない。

ビルドは空いた片手でベルトのレバーを一気に回転させた。

「ぐ、お、お」

「ハアアッ！」

電子音に次いで、ビルドのデモリションワンから放出されたエネルギーアームが、怪腕のアサシンの胴体を挟み込み、そのままアサシンの巨体を軽々と頭上へ持ち上げた。周囲のアサシンがビルドを妨害しようと短刀を投げるが、それらはすべて忍者扇風機のビルドによって巻き起こされた旋風に吹き飛ばされる。

ビルドのボルテックアタックが発動した。巨大なエネルギーアームが、ビルドの頭上で藻掻く怪腕のアサシンを挟み潰し、エーテルで作られたその体を粒子となるまで粉碎する。

奮戦するビルドを横目で流し見ながら、ランサーはくすりと笑みを浮かべた。戦兎は、ランサーの期待を裏切らない程度の働きはしてくれている。ここであつさりと敵の侵入を許すようでは期待はずれも甚だしい。

ランサーの周囲の地面には、八つの武器が円を描くように突き刺さっていた。鉾に槍、打刀に太刀、鏢のない大刀から祭剣まで、様々な様相の武器が召喚されている。その中心で、ランサーは踊るようにアサシンからの襲撃をいなし、反撃をし、状況に応じて武器を持ち替えて戦っていた。ランサーの許可なく武器に触れようとしたアサシンは、武器を持ち上げるよりも先に、ランサーによって八つ裂きにされた。

幾度となく繰り返されたランサーによる演舞のさなか、ほかとは様相の異なるアサシンが紛れていた。全身を漆黒のローブで覆い隠した、どのアサシンよりも小柄な個体である。

「ッ!？」

迅速のアサシンはほかのいかなるアサシンをも上回る俊足でランサーの懐へと飛び

込むと、その首を断とうと手にした巨大な曲刀を振るった。ランサーの目をもつてしても追い切れぬほどの速度の持ち主であった。

ほぼ直感でひとつで頭を屈めると、頭上を曲刀が過ぎ去つてゆく。ランサーの白い髪が数本空へと舞い上がった。

に、と。ランサーの口元が、三日月のように歪む。

すかさず武器を取り回しやすい打刀へと持ち替え、迅速のアサシンの急所を突こうと振るうが、既に背後にはいない。ランサーはもはや頭で考えて回避をしようとは思わなかった。ただ直感にのみ身を任せて、薙刀を手取る。急迫する殺気に対し、ランサーは振り向くことなく脇腹の下から薙刀を通し、背後を突いた。

「つ——ッ」

アサシンの吐息が漏れ聞こえた。ランサーの薙刀の切っ先が、アサシンの脇腹を掠めている。迅速のアサシンの動きが、鈍った。ランサーは笑みを深め、目にも留まらぬ速度で跳んだ。急迫する他のアサシンを手にとつた大刀で叩き伏せながら、ランサーは武器を鈍へと持ち替え、加速する。脇腹に負傷を負つてなお音のような速度で駆けるアサシンの隣に並ぶと、ランサーは遠慮容赦なく迅速のアサシンの曲刀を叩き落とした。

「狂い咲け、八華繚乱ッ！」

アサシンが跳ぶと同時、ランサーは既に \square 祭剣へと武器を持ち替えていた。三度^{みたび}ふた

りの影が交差するとき、アサシンの胴を切り裂いたのは、ランサーの祭剣の方だった。迅速のアサシンの敗因はひとつだ。いかにランサーの速度を上回る俊足を武器としたところで、戦闘におけるセンスには天と地ほどの差があった。それを弁えずにランサーの間合いに踏み込んだ時点で、アサシンの運命は決まっていた。

ランサーは人間の限界を遙かに越えた速度で八つの武器を巧みに持ち替え、それらすべてで迅速のアサシンの体を八つ裂きにした。都合八回分の攻撃が繰り出されたことになるが、そこにランサーは三秒も費やしてはいない。刹那のうちに迅速のアサシンの霊基は座へと還らされることとなった。

敵の数は多いが、数だけでは趨勢を覆すには至らないことを、ビルドとランサーの奮戦が示していた。アサシンでは、キャスターの敷いた陣を崩すには至らない。それをこの場の誰もが理解しつつあった。

『STEAM SHOOT!』

誰も予想しなかった方角から、電子音が鳴り響く。

一発の弾丸が、宙を泳ぐコブラのように曲がりくねりながら戦場へ迷い込んだ。弾丸が向かう先にはキャスターがいる。それを判断したランサーが、いち早く鎗を手にして飛び込み、弾丸を叩き落とそうと振るうが、弾丸はランサーの動きを読んだかのように空中で軌道を変えて回避すると、後方のキャスターへ向けて一気に加速する。

「外した……ッ、この私が！」

笑顔絶やさぬまま驚愕するのもつかの間、間髪入れずに正面から迫りくる巨大な敵意にランサーは気付いた。

森林の奥から、木々を薙ぎ倒して現れたエメラルドグリーンの巨大なコブラが、その巨軀を振るい、ランサー目掛けて尻尾を叩きつけようとしている。

「ええい、洒落臭いッ！」

地を蹴り、一気に空高く舞い上がったランサーは、眼下に現れた新手の姿を捉えた。

巨大なコブラの背に乗っているのは、ビルドと同様に全身を鋼鉄の鎧で覆った

ブラッドスターク

赤蛇の男——聖堂教会の石動惣一エボルト

に相違ない。そいつが、頭上を仰いで、ランサーに向けて軽く片手を掲げて挨拶の意を示している。

「この男……！」

エボルトが敵であると知ってはいるものの、石動惣一が聖堂教会の立場を笠に着ている限り、こちらから手を挙げるわけには行かない。空中で白装束をはためかせ、くるりと身を翻したランサーは、反撃に出ることなく数メートルほど後退するかたちで着地した。周囲のアサシンたちも攻撃の手を止めている。一旦は様子を伺う方針でいるらしい。

ちらと後方を振り返れば、最前スタークが放った弾丸は、忍者扇風機フォームのビル

ドが放った突風に呑み込まれて推進力をなくしていた。

「ハアッ!」

上方から、元の赤と青となつたビルドが、大剣フルボトルバスターを振り上げ急降下する。刹那、斬り裂かれた弾丸が爆発するが、その爆風も爆炎も、瞬く間に忍者扇風機が起こした突風に吹き消された。

「チャオ、戦兔。それにランサーもか……冬木ハイアット以来だなあ」

「エポルト……! お前、今度はなにを企んでる!」

激昂する戦兔とは裏腹に、スタークはふうと大きく吐息をつきながら、悠々と巨大なコブラから飛び降りると、ビルドへと向き直った

「なアに、ちよつとした番狂わせてやつだ。お前らのゲームがあまりに一方的だったんでね」

「聖堂教会の人間が、どこか一方の陣営に肩入れすんのは反則のハズだ」

「ハント、なにを今更。退場したはずのアシンがこうもウジャウジャ湧いてる時点で、反則もクソもないだろう。ちよいと言うのが遅いんじゃないか?」

「なんだと……!」

もはや石動惣一としての体面など気にする素振りもみせず、スタークは本来の自分の声で嘲笑う。拳を握りしめわななくビルドに代わって、今度はランサーが口を開いた。

「事情を察するに、そなたは聖堂教会に所属する人間でありながら、アサシンに助太刀する目的でここへ現れた……という認識でよいのですね」

「概ね正解だが、ひとつだけ訂正しておこう。俺はもう聖堂教会の人間じゃあない。だからなにをやるうがお前らにとやかく言われる筋合いは、ない」

言うが早いのか、スタークは左腕に装着された紫色のバッドのボタンを押し込み、それを頭上へ向かって掲げた。バグヴァイザーの内部で培養されたバグデータが、砂粒よりも小さな極小の粒子となって空へ噴出される。舞い上がったバグの粒子は、地上に舞い落ちるまでの間に寄り集まり、人のかたちを形成し、人間大の怪人のかたちを形成する。瞬く間に、戦場に無数の戦闘員が解き放たれた。

「こいつら……っ、バグスターウイルスか！」

「御名答！ 流石に理解が早いなあ、戦兔オ！」

かつてエグゼイドらと共闘した際に、戦兔はバグスターウイルスの戦闘員と戦った経験があった。人に感染するバグスターウイルスが、人のかたちを持った個体。戦闘員ひとりひとりに意思はなく、倒しても倒しても無数に湧いて出る厄介な存在だ。

「ギアて、第二ラウンドといこうじゃねエか」

スチームブレードを掌の上で幾度か跳ねさせると、スタークは軽く右手を掲げ、振り下ろした。号令の合図だ。一斉にバグスターの戦闘員が前方へ向かって駆け出す。は

じめ、当惑した様子で互いに顔を見合わせていたアサシンも、すぐに状況を受け入れ、その黒衣をなびかせ一斉に宙へ舞い上がる。

ランサーは振り返り、叫んだ。

「戦兎！」

「ああ、分かってる。ここでキャスターの術式を妨害されるわけにはいかねえからな」

ビルドの周囲に無数の八卦炉型の円盤が無数に展開される。キャスターの意思に呼応して、魔力のレーザーを放つ兵装だ。

「すまないが、引き続き護衛を頼む。我らの勝利は、この一戦に掛かっているといつても過言ではない」

「問題ない。キャスターは自分の仕事を優先しろ」

フルボトルバスターを構え直し、ビルドはスタークへと向き直った。無数のアサシンとバグスターの戦闘員に加え、スタークが召喚した巨大なコブラが戦場を駆け回り、ランサーとの交戦状態に突入していた。その中で、スタークは誰と戦うわけでもなく、ただ悠然と構えてビルドを凝視している。

「——エボルト……いや、スターク」

「またあの頃のように呼んでくれるたア、ずいぶん気が効くじゃねエか」

「お前はここで、ブラッドスタークとして倒す。二度とエボルトにはさせない！」

「ああそうかい……、だったらやってみなア！」

寸前まで気怠げに脱力していたスタークは、まるで弾かれたようにトランスチームガンを構えた腕を上げて、駆け出した。銃口から高熱硬化弾が連続で放たれる。同様に走り出したビルドは、フルボトルバスターの刀身で急迫する弾丸をすべて叩き落とした。道中で襲い掛かってきたアサシンと戦闘員をも片っ端から斬り伏せて、ビルドは一直線に走る。

闘志に燃えるふたりが激突するのに、時間はかからなかった。

「スタークッ！」

「嬉しいねエー！ 俺アこうしてお前とやり合えるときを、心待ちにしてたよ、戦兔オー！」
スタームブレードとフルボトルバスターが衝突し、火花を散らして弾き合う。最初に舞い散った火花が消え去るよりも早く、互いに武器を激しくぶつけ合う。幾度目かの衝突の末、崩折れたのはスタークの方だった。

「——ッ!？」

ビルドの視界からスタークが消えたときにはすでに、スタークは地べたを転がりながらトランスチームガンを構えていた。無防備な下方からの銃撃に、反応が一瞬遅れた。スタークの連射をすべて胸部装甲で受け、ビルドは数歩後退する。

なおも続く銃撃をフルボトルバスターで受け止めながら前進し、再度肉薄すると同

時、ビルドは思い切りその大剣を振るう。スタークはくるりと身を翻してその一撃を回避すると、蛇のような巧みな身のこなしでビルドの懐へと潜り込んだ。

「ダメだダメだ、攻撃が大振り過ぎる！ お前の実力はそんなもんじゃねえだろ！」

「うる、せえ……！」

連続で叩き付けてくるスチームブレードによる滅多撃ちをフルボトルバスターで受け止めながら、ビルドは手にしたグリップを折り曲げ、バスターキャノンモードへと変形させる。砲撃形態となっても、砲身に備え付けられたバスターブレードは健在だ。スタークの攻撃をブレード部分で受け止めながら、ビルドはフルボトルを装填した。

『G A T L I N G！』

電子音声に次いで、ガトリングボトルの紋章クレストが刀身に浮かび上がる。

『F U L L B O T T L E B R E A K！！』

両腕で構えたフルボトルバスターの銃口から、秒速にして百発にも迫る超高速の弾丸が射出させる。唸りを上げて急迫する弾丸に、スタークは真正面から対処をしようとはしなかった。地べたを転がり、横方向に大きく退避することでビルドの斉射から逃れる。スタークが通つた石畳の地面にはガトリングによつて無数の穴が空けられていた。「ハッ、さつきから、ガトリングに頼り過ぎなんだよォ！」

フルボトルブレイクのエネルギーが切れ、ビルドの斉射が終わるころ、スタークは片

膝突いてトランスチームガンをライフルモードへと変形させていた。右腕で構えたライフルのバレルを左腕に乗せ、ビルド目掛けて射撃を行う。ビルドはフルボトルバスターでスタークの弾丸を叩き伏せながら、次のボトルを取り出し、耳元で振る。

『ROCKET!』

「ビルドアップ!」

ドライバーにロケットボトルを装填し、レバーを回す。濃いメタリックブルーで形成されたタンクボトルの成分が一気に抜け、代わりに水色のロケットボトルの成分がビルドの半身へ行き渡る。左腕にロケット型のアームを装着した、ロケットラビットフォームへの変身が完了した。

「だったらこいつで勝負だッ!」

ビルドの左腕に装着されたロケットアームが、スラスターからジェットの炎を噴射しながら射出された。その軌跡を追うように、再びバスターブレードモードへと変形させた大剣を構えたビルドが駆ける。

「なるほど、今度はロケットからの波状攻撃か! 悪くないぞオー!」

はじめ、スタークはガトリングのときと同じ要領で回避をしようとしたが、直線的な軌道でしか射撃を行わなかったガトリングと違って、ロケットは自動的にスタークを追尾する。途中で逃げるのをやめたスタークは、ロケットへと向き直り、左腕に装着され

たバグヴァイザーのボタンを押し込んだ。

「キアて、鬼が出るか蛇が出るか!」

スタークは、正面からロケットアームに向き合うと、トランスチームガンを乱雑に投げ捨てた。左腕にバグヴァイザーを装着したまま、渾身の左ストレートでロケットアームを殴り返す。バグヴァイザーの銃口と思しき場所を、極めて乱雑な所作でロケットアームへと叩きつける。

ほんの一瞬の発光ののち、ビルドの目前でロケットアームが消失した。仮面の下で瞳目する戦兎だったが、しかしその程度で止まるわけにはいかない。波状攻撃を仕掛けるため、ロケットアームのすぐ後方にまで飛び込んでいたビルドは、振り上げたフルポトルバスターを、全力でスタークへと振り下ろした。

「はあああああッ!」

「ッ、オオオ!!」

ロケットアームへの対処で、ほんの一瞬対処が遅れたスタークの胸部装甲を、ビルドのバスターブレードが袈裟懸けに切り裂いた。スタークの胸部装甲が斬撃のかたちに沿ってひしやげ、血飛沫の代わりに盛大な火花を噴出する。

大打撃を受けたスタークは、境内の石畳をごろごろと数メートルほど転がってから、起き上がる。その頃には、すでにビルドはドライバーのレバーを回転させていた。

ドライバーがロケットの成分とラビットの成分を吸い上げ、増幅させる。兎の脚力を宿した左足のスプリングが大きいたわむ。その脚で地を蹴り、ビルドは月下の空へと飛び上がった。

『Vortex Attack!!』

再構成された左腕のロケットアームのスラスターが、爆発的に火を吹いた。空に浮かぶ月を背に、ビルドはジェット加速を得て急降下する。

今からでは、回避の余裕はない。スタークにできることがあるとすれば、ビルドの攻撃によるダメージをいかに軽減させられるか、程度だ。スタークは高らかに笑いながら、両腕を交差させる。そこに、ビルドの左足が突き刺さる。

「うおおおおおおおッ!!」

「ふはっ、ふははははははッ! たかだかトライアルごときで、ここまでやるかア……!!」

スタークの腕に必殺のキックを突き刺したまま、戦兎は裂帛の叫びを上げる。胸の奥底から湧き上がる闘志に応えるように、ロケットアームのスラスターが熱量を上げた。ジェットの爆音を響かせさらに加速する。

なんとか踏ん張って耐え抜こうとしていたスタークの軸足が、僅かにブレる。そうなるともう、スタークに勝ちの目はない。ロケットラビットフォームの蹴りが、姿勢を崩したスタークの防御を貫いた。

「う、おおおおお——ッ!？」

上体で爆発を起こしながら吹き飛んだスタークが、石畳にしたたかに体を打ち付け、横たわった。スタークは起き上がるうとはしなかった。苦しみに嗚咽を漏らすでもなく、敗北を嘔み締め悪罵を吐き散らすでもなく、スタークはただ、空に浮かぶ月を見上げ、愉快そうに笑っていた。

「でやあああああッ!!」

白装束をはためかせ、ランサーは人知を超えた速度で戦場を舞う。鉾を振り下ろし、横合いから飛び掛かってきたアサシンの体を肩口から脇腹まで真つ二つに引き裂いた。刀を突き出し、背後から迫りくるアサシンの心臓を一突きのうちには穿ち貫いた。☒祭剣を振り抜き、並み居るバグスターの戦闘員を一刀のもとに消滅させた。それでも際限なく、敵はランサー目掛けて攻め寄せてくる。

それでもランサーはキャスターへ接近しようと近付く敵は手当り次第に塵殺し、実質的にビルドの援護を失った今も、見事キャスターが敷いた陣を守り続けていた。

そのランサーの顔を、いやに冷たい汗が伝う。にい、と吊り上がった頬に横髪が張り付いて、不快だった。

「くっ、くっも数が多いと……少々鬱陶しい、ですわね!」

短刀を構えたアサシンが、弾丸のような速度で飛び込んできた。ランサーは軽くぼやきながらも軽い跳躍で空へ跳び上がると、今しがた間合いに踏み込んできたアサシンが通過するよりも早く、その首筋に刀を突き立てた。

着地すると同時に、一斉に押し寄せてきたバグスターの戦闘員を、一体につきおよそコンマ一秒程度を費やししながら、確実にひとりずつ首を掻き切つてゆく。これと同様の工房が、もうずっと長いこと続けられている。

負ける気はしないが、明らかに手数が足りていない。

“フ、さしもの戦国最強の武将といえど、この数が相手では苦戦は道理か”

主であるケイネスの声が頭の中に反響する。念話だ。ケイネスはいま、戦兎の発明したドローンのカメラを通して、リアルタイムでランサーの戦闘を見守っているのだ。

“この程度の雑兵ごとき、私ひとりですら十万人くらいまでなら軽いのですが、防衛戦となると、どうにも”

“ふん、苦しい言い訳だな、ランサー”

言葉だけを捉えれば、冷たく突き放されたようにも受け取れる。けれども、ケイネスの声は、言葉に反してどこか弾んでいるようにランサーには感じられた。

“あのー、ケイネス殿。もしかして、なにか楽しんでませんか？”

“ふむ。まあ、貴様がこの程度の雑兵に遅れを取る口だけの英霊であつたなら、私と

しても楽しんでゐる余裕などなかっただろうな”

“あはははははははははは、それ、褒めてます?”

“たわけ、褒めてはおらぬわ”

ランサーの口元に、最前までとは質の違う笑みが浮かぶ。どのようなかたちであれ、あのケイネスの口から、ランサーの実力を認めている、と取れる言葉が出てきたことが、嬉しかった。

“ランサー。これ以上、その程度の雑兵に手間取ることは許さん。宝具の開帳を許す。キャスターに釣られて現れた不埒なる有象無象どもを——速やかに始末しろ”

ふいに、脳裏に響くケイネスの声音から、浮ついた笑いの気配が消えた。戦況に応じて的確な指示を出す正確無比な指導者の声。それが、ランサーに架せられた重たい足枷を外し、いま、サーヴァントとして与えられた能力のすべてをつまびらかにして敵を殲滅せよと、そう言っているのだ。

ここへきて、ランサーはいまだかつてないほどに、頬を歪ませて笑った。

「ええ、ええ、その言葉を待つておりました!」

ようやく重荷を下ろしたような心持ちだった。スタークによつて召喚された巨大なコブラが、牙を剥いてランサーの目前へと立ち塞がる。先程から攻撃を仕掛けられてはいたが、アサシンへの対処を優先していたせいで、いなす程度にしか対処できなかった

目障りな相手だ。

ランサーは足を止めた。武具を振るう手を下ろした。巨大なコブラが、アサシンが一齐に攻め寄せる。

「この毘天の化身の前に、臆することなく攻め込むその度量。天をも恐れぬ不埒者とは、まさしくその方らのことよ」

たった一振りの鉾を携えて、ランサーは不敵に笑う。華奢な体に魔力が充満し、有り余る余波が光り輝く一迅の旋風となつて巻き起こる。いつの間にか、空からは白く煌めく雪がしんしんと降り注いでいた。周囲の気温が、ぐんと下がる。

「しかし悲しいかな。その方らごときでは、我が前に立つ資格なし！ 己の身の程を知るがいい！」

ランサーは、きつと眈を決すると、黄金の輝きを放つ鉾を構え、跳んだ。鉾の切つ先が、上方から攻め込んで来たコブラの顎に突き刺さり、そのままち上げる。ランサーの神速の一撃は、コブラの下顎から頭蓋までを一気に貫通し、エメラルドで出来た巨軀に亀裂が走る。

「我が敷くは、不敗の戦陣ツ！」

空へと舞い上がったランサーを迎えんと、崩壊を始めたコブラの背を、一頭の白馬が駆け上がる。一角獣を思わせる兜と、ランサーと同じ純白の装束を身に纏った、月の色

をした毛並みの名馬だった。

軍神にのみ仕える雄々しき白馬は、白銀のたてがみをなびかせ、沈みゆくコブラの頭を蹴った。その背に、ランサーが乗り跨がる。

「駆けよ、放生月毛……！ 毘沙門天の加護ぞ在り！」

みなが月下の夜空を見上げた。みながそこに白銀の華を幻視した。

降りしきる雪とともに、輝くような白装束を風になびかせ、八頭の白馬が押し寄せる。八頭すべてに、神威に満ちた眩い後光を背負ったランサーが跨っている。八人すべてが、槍や鉾、刀や薙刀、八人八色の武具を備えている。

「毘天八相、びてんはっそう車懸りの陣しんツ!!」

宝具の号令に次いで、八人のランサーは一気呵成に戦場へとなだれ込んだ。

最初の一頭が駆け抜けたとき、その進路上にいた雑兵のことごとくが首を跳ねられ、血なまぐさい砂煙とともに、その靈基を消滅させた。二人目、三人目のランサーが、間髪入れずに駆け抜ける。それ以降は、もはやただの蹂躪だった。

獐猛で残忍なる八人の軍神が、ただ戦場を掃討するためだけに駆ける。アサシンの中には、自棄になって反撃に打って出るものもいた。無駄と理解し、逃げようとするものもいた。八人のランサーによる猛攻は、それらすべてに分け隔てなくもたらされた。

「うおっ……すっげえ、これがランサーの宝具か」

スタークとの戦闘のため、ビルドが戦陣から抜けたというのに、ランサーひとりの活躍で戦場を埋め尽くしていた雑兵は瞬く間に姿を消し、ものの数秒で趨勢が塗り替えられた。

放生月毛を駆るランサーの速度があまりにも速すぎて、戦兔にはそれが、嵐で水かさが増した川の激流のように感じられた。荒れ狂う濁流がすべてを洗い流していくように、見る間に戦場が掃討されていく。

「同時に、放生月毛なる愛馬の存在から推測するに……あのランサーの真名は——」

戦兔の感嘆に応えるように、キヤスターがつぶやいた。ここが戦場であることを考慮したのだろう、最後までは口にしない。口にしないが、戦兔にもすでに当たりはついている。

放生月毛という名の名馬を駆り、軍神の名を恣にする戦国武将。そんな人間は、日本史においてひとりしか思い当たらない。

上杉謙信。上杉輝虎。長尾景虎。呼び名はいくつかあるが、そのいずれもがひとりの人物を指している。生涯において、主だった戦ではほとんど負けを知らずに戦い抜いた最後の軍神。

「——っというか女かよ!？」

「うむ。まあ、ままあることだ」

「えーっ、あるのー……」

キャスターは苦い顔をして目線を逸らした。なにか似た状況に心当たりがあるのかもしれないが、それについて触れない方がよいことはキャスターの顔色を見ればすぐに分かったので、早々に思考の隅に追いやった。

一方で、残るアサシンは、僅か三騎にまで減らされていた。姿を見せていないアサシンがまだいるのかもしれないが、戦場に姿を表したアサシンは、これで最後だ。

もはや敗北を悟り、逃げようと背を向けたアサシンらへとランサーの鉾が迫る。もはや八人に分裂する必要すらなかった。ランサーもまたもとの一騎に戻り、必殺の鉾に黄金の魔力の輝きを宿し、迫る。

『SCRAP BREAK!!』

そのとき、低く、地に響くような電子音が鳴り響いた。

雪の舞い散る境内の気温が、ぐんと跳ね上がる。燃え上がるような龍の咆哮が、熱量をもって押し寄せる。

燃え盛る炎の蒼龍が、その身に雷を伴って飛来した。そいつが、巨大な顎門あぎとを開き、横合いからランサーの行く手を阻まんと急迫する。戦兔は、その蒼龍に見覚えがあった。

「……面白いッ！」

ランサーは殺意に満ちた微笑みを絶やさず、放生月毛の手綱を握り、蒼龍に向かって方向転換した。通常の感性をしていれば、それに立ち向かおうなどとは考えない。それを、ランサーは真つ向から立ち向かうつもりでいるのだ。

黄金の魔力と旋風をその銚に宿し、ランサーは蒼龍の顎門あぎとにその切つ先を突き立てた。魔力の輝きが、龍の蒼炎を散らす。龍の身が、薄く引き裂かれた紙片のようにほつれ、原型を失ってゆく。ランサーは構わず突き進む。

やがて、鋭く研ぎ澄まされた極光が、戦兔の視界を覆った。甲高い金属音と、なにかとなにかが強い力で衝突する打撃音とが同時に鳴る。

「そなたは………!」

「うおおおおらああッ!!」

ランサーの銚と、襲撃者の剣は互いに弾き合い、両者間合いを計り合う。

境内の入り口まで弾き飛ばされた襲撃者は、全身を白銀のボディスーツで覆い、その上に蒼く燃える炎の龍を身に纏った戦士だった。その姿を、戦兔は知っている。その無鉄砲な叫びを、戦兔は知っている。

「な………なっ、おまつ、なにやっつてんだよこの馬鹿ッ!」

「ああん?! 誰が馬鹿だ、せめて筋肉付け………つて、ええーっ!」

思考が激しく掻き乱される。痛烈な頭痛が戦兔を襲う。

戦兔は、ビルドの仮面の下でこれでもかというほどに表情を歪ませた。戦場に飛び込んできた仮面ライダークローズチャージもまた、戦兔と同様に声を荒げ、ぴんと立てた指をビルドに向けて固まっていた。

ランサーは、にこりと口元を緩めたまま、ビルドとクローズを交互に見ている。スタートは、その場に片膝立てて座り込んだまま、両手を広げて肩を竦めるだけだった。

「こんなところでなにやってんだよ、お前ツ!!」

戦兔の心底からの叫びは、嫌というほどに慣れ親しんだ馬鹿の絶叫と、まるで示し合わせたようにびたりと重なって響いた。ともすれば、もう二度と再会することは叶わないかもしれないと思っていた相手との邂逅は、思いもよらぬかたちで成し遂げられた。おそらく、想像しうる限り最悪の状況下で。

「ああもう、最ッ悪だ……!」

第20話 「ハザードを乗りこなせ」

「あーもう最ツ悪だ！　なんでお前までこつちに来ちまつてんだよこの馬鹿！　お前がこつちに来たら、あつちの俺達の体はどうなんだよ！」

「馬鹿馬鹿うツセエな！　来ちまつたモンはしょうがねえだろうが！」

口うるさくがなり立てながら詰め寄るビルドが差した指を、クローズチャージは平手で叩き落とす。はじめ、クローズの姿をした別人ではないかと思いましたが、実際に接触して戦兎はその考えを改めた。この短絡的思考回路は、間違いなく万丈龍我そのひとだ。間違えようもない。

ビルドはその場で頭を抱えてしやがみこんだ。

「マジで最悪だ……ってことは、俺達がこつちにいる間、俺たちの体はあの工場で放置されてるってワケ？　俺がこつちに来てから何日経った……？　あんな誰も来ない工場じゃ、最悪発見が遅れて——」

「あん？　俺がこつちに来てからまだ一日しか経ってねエぞ。お前が変なメール開いてブツ倒れちまったのは、つい昨日のことだろうが」

「なに？」

ビルドはしやがみ込んだ姿勢のまま首だけを回してクローズに目線を送る。

万丈と認識が食い違っている。戦兔の記憶では、この世界に来た初日にキャスターを召喚し、翌日にはケイネスとの同盟を結び、四日目までに工場を買い取って工房ラボを新設した。五日目で遠坂に襲撃をかけてシャドウランサーを撃退し、今日は六日目にあたる。

「ひとつ訊くぞ万丈」

「おう」

立ち上がったビルドは、顎に指先を添えたまま歩き出した。その場で小さく円を描くように、ぐるぐると。

「俺はあの日、エボルトから届いたメールを開いたことで、この世界に意識を取り込まれた」

「おう、俺もだ」

「そうなると、現実世界の俺の体は、今も意識不明状態で倒れていることになる」

「おう、実際倒れてたな」

「お前、俺が倒れてからこつちの世界に来るまでに、どれくらい時間が経過したか覚えているか？」

立ち止まったビルドは、再びクローズを指差した。

「いや、どれくらいって……そんなに経ってねえよ。あの日、お前に言われた通り売り出しに出かけて、夕方になる前には帰ってきたっつーの」

「時間の流れが違うということか……？ 確かに、俺たちの世界とエグゼイドの世界では流れる時間が違っていたという実例はある。一般相対性理論に基づいて考えればありえない話じゃないが……いや、それだけじゃ説明がつかない。物理法則を無視して。だが、待てよ？ 考えようによつてはこの世界だって意識体だけをタイムトラベルさせてるようなものだ。量子ゼノン効果を適用して考察すれば——」

「お、おい、戦兔？ 戦兔、おーい！」

すでに万丈の声は戦兔の頭に届いてはいなかった。戦兔は黙考しているつもりでも、脳内で呟いたつもりの言葉はほぼ口から小さな呟きとなつて漏れ出ていた。

ふいに、ビルドの鋼鉄のマスクに、か細い光条が命中した。痛みはないが、その衝撃に軽く頭を揺さぶられ、戦兔は我に帰る。

「自分の世界に没頭するのもいいが、時と場所を考えると、マスター」

「あ、ああ。悪い、キャスター」

キャスターの周囲に浮かんだ八卦炉のひとつが、ビルドに極限まで威力を絞ったレーザーを当てたことに気付き、謝罪する。次いで、キャスターもランサーも、怪訝な面持ちでビルドとクローズを眺めていることに戦兔は気付いた。

彼らからすれば、突然出てきた見知らぬ仮面ライダーと漫談を始められたようなものだ。万丈が敵でないということの説明が必要がある。

「紹介が遅れたな。こいつは俺の仲間の——」

「おい、ちよつと待て戦兎」

戦兎の言葉を遮ったのは、万丈だった。最後までと比べて、ぐんと声のトーンが落ちている。クローズは、肩を怒らせてビルドへと向き直っていた。

「さつきからキャスターだのマスターだのつて……戦兎、まさかお前、この戦争に乗っちゃまったのか!？」

戦兎は、万丈の怒りの理由を察した。

旧世界で、誰よりも戦争の被害に憤りを示していたのは、他ならぬ万丈だ。聖杯戦争と名前を変えたところで、人と人が相争う戦争を、万丈が手放しで受け入れるとは思えない。ビルドもまた、クローズへと向き直った。

「落ちてけ万丈。俺たちが戦うのは、あくまでもう一度エボルトの野望を食い止めるためだ。戦争のために戦ってるわけじゃない!」

「だったら! なんてきたねえ手を使って遠坂さんを苦しめるような真似してんだツ!」

万丈の声は震えていた。それが怒りによる震えであることは、戦兎にはすぐにわかつ

た。同時に、状況は戦兎が思っていた以上に単純でないことを察した。

「万丈、お前まさか……遠坂と組んだのか?」

「戦争のためじゃねえッ! あの人は、娘のために戦うと言った。誰も傷付けずに戦争を終わらせると言った……! だから俺はあの人に手を貸すと決めたんだ!」

「誰も傷付けずにこの聖杯戦争を終わらせたい……その思いは俺たちだつて同じだ。だが、少なくとも遠坂はあそこにいるスタークと手を組んでる。無条件で信用するには、あまりにも危険すぎる!」

ビルドが指差した先で、スタークは片膝を立てて地べたに座り込んでいた。背中を木の幹に預け、リラックスした姿勢でふたりのやり取りに視線を注いでいる。

「おいエボルト。テメエ、今度は遠坂さんを利用するつもりじゃねえだろうな!」

「ああ、そのことなら心配すんなア。たぶん、もうすぐ時臣の奴ア俺を敵とみなす。そうになったら、晴れて俺も遠坂の敵だ。なんなら、お前らと一緒にセイバーと戦つてやつてもいいんだぞオ?」

「俺たちはお前とは組まない」

「おおつと、つれねえなあ、こいつア!」

スタークに視線すら寄越さず戦兎は即答した。対するスタークの声に落胆は見られない。面白おかしように、くつくつと笑っている。いつも通りの嘲笑だ。

クローズは、ビルドの襟の装甲を掴み上げた。ふたりの仮面が接近する。クローズの複眼に、ビルドの姿が反射している。仮面の下で、戦兎は微かに目線を伏せた。こんなかたちで万丈と向き合うことになるのは、本意ではない。

「ともかく、この戦いには遠坂さんの娘……凜と桜の未来がかかってんだ。お前は手を引け、戦兎」

「悪いが、遠坂にエボルトの危険性が理解できてくるとは思えない。ここで手を引くわけにはいかない」

戦兎は一步も引かず、クローズを真っ向から直視した。

クローズチャージは、ただでさえ装着者の闘争本能を掻き立てる形態だ。今の万丈にそう返答することがなを意味するか、わからない戦兎ではない。だが、それでも、戦兎にも背負っているものがある。背後で見守るキャスターとランサー、工房で待っているケイネスの顔を思い浮かべたとき、先に立った感情は、彼らを裏切ることはできない、というものだった。

「凜と桜はな……なんの罪もない、まだ幼い子供なんだよ……！ それが、こんなくだけたねえ戦争のために、今も酷い目に遭わされてる……！ なあ戦兎。俺は、あの子たちを悲しませたくねえ……お前なら、わかるだろッ！」

「お前が言ってることはわかる……その子たちを助けたいって気持ちをも否定する気もな

い。だが、今回に限っては話が別だ。こっちにも、ここで引くわけにはいかない事情があるんだよ！」

「だったら、あの子たちはどうなってもいいって……そう言いてえのか、テメエはッ！」
「そうは言っていない！　ただ、聖杯を遠坂に任せるわけにはいかないと言ってるだけだ！」

「ああそうかよ……やつぱテメエも聖杯狙ってるのかよッ!？」

言うが早いのか、ビルドの襟を掴み上げていたクローズが、その装甲を突き飛ばした。よろけながら数歩後退ったビルドに、クローズは追撃をかけるように殴りかかる。

「だったら！　テメエらの企みは！　俺がッ、ここで、ブツ潰す！」

「くっ……やめろッ、万、丈……！」

最初の数発はなんとかいなししていたが、通常フォームにしかなれないビルドではそもそのスペックでクローズチャージに負けている。怒涛の拳のラッシュは、すぐにビルドの守りを貫き、その仮面を殴り付けた。

ゴッ、と鈍い音がビルドの仮面の中に反響する。ビルドはもんどり打って倒れ込んだ。

「ぐっ……」

「立て、戦鬼！　聖杯とか、戦争とか……それがどんなにくだらねえモノか、俺がわから

せてやる！」

倒れ伏したまま、ビルドは怒号を上げるクローズチャージを見上げる。

クローズチャージに搭載されたシステムが、万丈の怒りを闘争本能へと昇華することで、攻撃の威力を底上げしているのだ。万丈の頭を冷やさせるためには、強制的にでも変身を解除させるしかない。

だけれども、戦兎はラビットラビットとタンクタンクはおろか、スパークリングすらも未だに使えない。次元の狭間でエボルトとの最終決戦のために使われた強化ボトルは、いずれも新世界創造のためにエネルギーを吸い尽くされている。

初期フォームのビルドで、クローズチャージに勝てる見込みは、薄い。

「——つたく、ホンットに仕方ねえ筋肉バカだな」

それでも、ビルドは立ち上がった。その手に、ハザードトリガーを握り締めて。

各パワーアップボトルはその成分を失っている状態にあるが、ボトルとライダーシステムに強化剤を直接注入することで強制的にスペックを底上げするハザードトリガーであれば、使えないことはないだろう。

「戦兎……」

万丈もまた、戦兎がいまなにを考えているのかを察したのだろう。クローズの複眼は、ビルドの手の中にあるハザードトリガーをじいっと見つめている。

両者の間を、ほんの一拍程度の沈黙が流れた。その僅かな間に、ハザードの暴走によつて引き起こされた悲劇の記憶が、走馬灯のように戦兔の脳裏を駆け巡つていく。

一年間に及ぶエボルトとの戦いの日々。そのさなか、戦兔の発明によつて、敵も、味方も、多くの人々が傷付き、倒れていった。ハザードフォームとなつて暴走した戦兔は、この手で、人の命をも奪つた。

心を抉る哀しい記憶ばかりが呼び起こされる中で、しかし最後に強く心に印象づいた記憶は——戦兔の父、葛城忍の笑顔だった。

七年前のスカイウォールの惨劇のさなか、忍は、自分は愛と平和のために科学者にラフアンドピースなつたのだと、なんの衒いもなく笑顔で言つてのけた。

「万丈」

ビルドは顔を上げた。

父の想いは、今も戦兔の心に強く息衝いている。それを思つたとき、暗澹とした戦兔の心に、光が降り注いだ。

仮面ライダーは、兵器ではない。

戦兔の心に、もう、迷いはなかった。

「お前に守りたいものがあるように……俺たちにも守らなきゃならないものがある。お前は、俺が止める……！」

胸元まで掲げたハザードトリガーのセキュリティカバーを外し、ボタンを強く押し込んだ。

『HAZARD ON!』

ハザードトリガーをベルトに接続し、続けて二本のボトルを耳元で振る。ビルドはそれを勢いよくドライバーに装填した。

『RABBIT!』『TANK!』

『SUPER BEST MATCH!!』

スーパーベストマッチの電子音とともに、ラビットタンクの紋章クレストが浮かび上がる。けたたましい待機音が鳴り響く中、ビルドはレバーを一気に回転させた。

『Are You Ready?』

いまなら断言できる。葛城忍は、ただ力だけを追い求めてこんな暴走装置ハザードトリガーを造ったのではない。

戦兎の父は、エボルトの侵略からこの星を守るため、愛と平和のために、科学者の誇りを懸けてハザードトリガーを完成させたのだ。父の想いを受け継いで仮面ライダーになった戦兎は、この力を本来の目的のために正しく使う義務がある。

決して暴走などしないという強い決意とともに、戦兎は叫んだ。

「ビルドアップ!」

巨大な鋼鉄の鑄型いがたが、ビルドを前後から挟み込むようにプレスした。強化剤を注入された強化装甲が、鑄型の内部にいるビルドの装甲を上から圧縮して定着させる。

再び鑄型が開いたとき、白煙とともに姿を表したのは、全身をブラックメタリックの装甲で包んだ黒鉄のビルドだった。

『アンコントロールスイッチー!』

『ブラックハザード!!』

『ヤベーイ!!』

全身に闇を纏ったような漆黒の装いとなったビルドは、フルボトルバスターを構えて、腰を低く落とす。

以前と比べて、ハザードフォーム自体が戦兎の体に馴染んでいる実感があった。ライダーステムを纏って戦えば戦うほど、ハザードレベルは上昇する。一度はエボルトを倒すにまで至った戦兎の成長も相俟って、この分ならば当分は暴走せずに戦えると戦兎は確信した。

穏やかな冷静さを保ったまま、戦兎は眼前のクローズに告げた。

「来い、万丈。お前の頭、俺が冷やしてやる」

「上等だ! だったら俺が、逆に冷やし返してやるッ!」

掌に拳を打ち付けたクローズは、意気揚々とよくわからないことを宣った。万丈の行

動にいちいち論理的な整合性を求める方が愚かだということはよくわかっているが、それでも調子が狂う。いざ構えを取ろうとしていたビルドの姿勢が緩む。

「なにが逆だよ、どう考えても頭に血が上ってんのはそっちでしょうが!」

「うるせエ、とにかくこっちはテメエらの作戦をブツ潰しやそれでいいんだ! そうなりや戦うのが一番手っ取り早エだろうが! それによ……」

クローズは、己の両腕を見下ろした。ぐっ、と拳を握り込む。

「なんだか知らねえが、テメエらを見てると、無性に戦いたくなってくる……! こんな気持ちは、こっちに来てから初めてだツ! この思いは、誰にも止められねエエツ!!」

クローズが纏う闘気が、蒼い炎となつて燃え上がる。その炎の中に、青白く輝く稲妻が見えた。はじめ小さな稲光だった電撃が、次第にばちばちと大きな音を伴つて、蒼炎をも散らすほどに広範囲に迸つて、大地を焦がす。

「うおおおおおおおおあああああああッ!!」

万丈の咆哮とともに蒼炎と稲妻が迸り、その手の中に大剣ビートクロザーが精製される。見慣れない武器の出し方だ。万丈が使っている能力が、戦兎が造つたライダーシステムのそれではないことは明白だった。

「万丈、お前……!」

マスターになった戦兎には、わかる。目の前で吠え猛るクローズから感じる威圧感

は、セイバーやランサーが纏っていたものと同じ、魔力による身体強化だ。

戦兔は直感的に察した。万丈龍我は、サーヴァントになったのだと。

「ラァアッ！」

「はッ！」

両者、同時に地を蹴った。青く燃える剣と、霧のような闇を纏ったフルボトルバスターが激突する。閃いた火花と蒼炎、そして溢れ出した稲妻が、深夜の境内を眩く照らした。

一撃の威力が重い。想定よりも、格段にスペックを上げている。クローズがただライダーステムの力だけで戦っているわけではないという戦兔の仮説が、より現実味を帯びてくる。

クローズが振るう剣の連撃を、しかしビルドもまた一步も引くことなく打ち返す。キャスターのスキル支援を受けたハザードならば、英霊の力を宿したクローズが相手でも十分に戦えると確信する。

幾度目かの剣戟ののち、上段から力いっぱい振り下ろしたフルボトルバスターを、ビートクロウザーが受け止める。そのまま押し切らんと体重をかけながら、戦兔は叫んだ。

「万丈、お前ッ、そんな力どこで手に入れた！」

「俺に力をくれた人がいるッ！ その人の想いに応えるためにも、負けるわけにはいかねエんだよッ！」

クローズの剣に宿った蒼炎と稲妻が、ごうと唸ってその熱量を上げる。それに伴って、クローズの膂力が跳ね上がった。上段を取ったはずのビルドが、下方から押し返される。

ビートクローザーの薙ぎ払いに合わせて、ビルドは後方へと跳んだ。

「今の俺は、負ける気がしねエエッ!!」

クローズが、一本のフルボトルをビートクローザーに装填した。ミリオンスラッシュの電子音とともに、その剣を振り抜いた。光り輝く鎖状のエネルギーが、稲妻を纏って放たれる。

「だったら、無理矢理でも止めてさせてもらおう。話はそれからだ！」

フルボトルバスターに、二本のボトルを連続で装填する。ユニコーンボトルと消しゴムボトルの二本だ。ジャストマッチの電子音に次いで、振り払った刀身から青白いエネルギー刃が飛んでゆく。

ビルドが放ったエネルギーは、程なくして空を駆ける一頭の一角獣へとその姿を変えらる。一角獣の姿をしたエネルギーの塊と、クローズの放った鎖が衝突し、一角獣を絡め取った。

空中で、両者の放ったエネルギーが霧散する。消しゴムボトルの効力で、一角獣と鎖のエネルギーを打ち消したのだ。

「万丈……！」

「戦兎オオオッ！」

再び駆け出した両者は、互いの剣を激しくぶつけ合わせる。相克を繰り返すたび、クローズの攻撃はその威力を増してゆく。幾度目かの激突の末に、ビルドのフルボトルバスターが弾き飛ばされた。剣の威力では、稲妻と蒼炎を纏ったクローズを止められない。

「うおおおおらあああッ！」

蒼く燃えるビートクローザーを振りかぶるクローズに対し、ビルドはベルトのレバーを高速で回転させた。

『HAZARD ATTACK!』

左足を軸に、クローズから頭を遠ざけるように上体を引きながら体を一回転させる。右足の装甲の隙間から、どす黒い霧が滲み出すように噴出し、ビルドはそれを纏う。後ろ回し蹴りの体勢だった。

まるで映像を早回しにしたように、ビルドの攻撃は加速した。ビートクローザーの刃がビルドに届くよりも先に、ビルドのキックがクローズチャージの胸部装甲に減り込

む。

ハザードフォームには、接触した物体の装甲を分解・霧散させ、その内部中枢に直接攻撃を叩き込む機構が備わっている。ビルドの蹴りは、クローズチャージの装甲を突き抜け、内部の万丈の体へと直接衝撃を叩き込んだのだ。

「うお——ッ!？」

クローズチャージの体が、まるで砲弾に吹き飛ばされたように吹き飛んだ。数十メートルほど吹き飛んで、クローズは境内の入り口にあたる鳥居の付近を転がる。

並のスマッシュに使えば装着者ごと死に至らしめる攻撃だが、英霊の力を得た万丈に對してはそこまでの殺傷性能を發揮できなかつたらしく、ものの数秒でクローズは起き上がった。

だけれども、疲労は明らかだった。攻撃を受けた箇所を片手で抑え、前のめりに荒い吐息を吐き出している。

「もうやめろ、万丈! 今のは効いたはずだ、これ以上戦えば、お前の身がもたない!」
「へっ……、なに寝惚けたこと言ってたんだ。そりゃ、こつちの台詞だろうが……お前こそ、もうそろそろ……ハザードの限界が近エンじゃねえのか」

凶星を突かれ、戦兎は狼狽えた。ハザードフォームは、戦えば戦うほどに、装着者の闘争心を駆り立てる。その果てに待つのは、暴走だ。ひとたび暴走すれば、ハザードは

敵味方の区別なく、視界に入るすべてを灰燼に帰すまで戦い続ける獣と化す。

「戦兎オ……そうなる前に、俺が、止めてやる。それで、お前らの作戦も、ブツ潰す……みんな、俺が、救ってやる」

肩で息をしながら、それでもクローズチャージは構えを取った。

ハザードが暴走する前に、戦兎を救う。そして、遠坂も、その娘も、みんな救うと、あの筋肉バカはそう言っているのだ。誰も傷つけることなく、この聖杯戦争を終わらせるために。

「あんの、バカ」

握り締めた拳が震える。英霊になっても、聖杯戦争に巻き込まれても、あのバカは、どこまでも自分を貫くために戦っているのだとわかってしまった。

救いたいという思いは、戦兎も同じだ。後ろにいるキヤスターやランサーだけでなく、ケイネスも、いま相對している万丈のことも、救いたい。万丈が願うなら、遠坂の娘だつて救いたい。思いは同じなのに、こうも擦れ違つてしまう。

それでも、全力でビルドと向かい合うクローズを止めるためには、戦うしかない。懊悩を振り払い、もう一度前を向いた、そのときだった。

「——戦兎、上ですッ！」

ランサーの声が響く。

見上げた頭上には、巨大な蝙蝠を模したエネルギー状の膜が、エメラルドグリーンの妖しい輝きを放って、ビルドらの頭上を覆っていた。その向こうに輝く月は、まるで血を啜ったように赤黒く染まっている。

「なっ、これは——ッ！」

気付くのが遅かった、というわけでは断じてない。完全な不意打ちだ。戦兔が気付いたときには、既に頭上に展開された蝙蝠の紋章と鏡写しになるように、地面にもエメラルドグリーンの紋章が描かれていた。

地面に描かれた紋章から紅い稲妻が迸り、ビルドの脚をその場に縫い付ける。全身を稲妻が駆け巡る衝撃に、戦兔は完全に身動きを封じられた。次いで、糸を切られた吊り天井のように、頭上に展開された紋章が落下する。

もはや回避が不可能であることを悟った刹那、万丈の叫びが戦兔の耳朵を叩いた。

「戦兔オー——ッ！」

『SCRAP BREAK!!』

クローズの体から、稲妻を纏った蒼龍が解き放たれる。巨龍はその大口を開け、けたたましい咆哮を響かせながら空へと舞い上がった。

飛翔した蒼龍は、ビルドと、頭上より迫りくる紋章の間に躍り出ると、ビルドを庇うように真つ向から紋章に向かっていった。蒼龍の顎門が、紋章に食らいつく。紋章から

放たれる紅の稲妻と、蒼龍が纏った蒼の稲妻がないまぜになって放出される。

紋章の落下が、止まった。蒼龍のエネルギーが、紋章と拮抗しているのだ。

「万、丈……！」

地面に描かれた紋章から迸る稲妻の威力だけで意識が飛びそうな最中、万丈が戦兔を救うために力を使ったことを悟った。

龍の咆哮が、ふたたび戦兔の耳朵を叩く。彼方から飛来した蒼く燃える龍が、ビルドの体に食らいつき、そのまま上下から挟み込み押し潰そうと迫る紋章に触れることなく、ビルドの体を外へと叩き出した。

一瞬遅れて、クローズが放った蒼龍のエネルギーを、キバの紋章が押し潰し、爆散した。

「はあっ……はあ……っ、いつたい、なにが」

「ふう。間一髪、といったところでしょうか」

ビルドを紋章の外へと押し出した蒼龍が、ビルドの眼前でぐるぐるを巻き、人の姿をかたどった。白の和服を纏った少女は、にこりと柔和な微笑みを浮かべた。

「お前は、確か……パーサーカー」

「あら、覚えていらしたんですね。一度きりしか会っていないのに……嬉しい限りですわ」

バーサーカーは一瞬目を丸めたが、すぐに扇子で口元を隠すと、くすりと微笑みを浮かべた。その微笑みが信用できず、戦兎はビルドの仮面の下で警戒心を顕にする。

「なんでお前がここにいる。俺を助けてくれたのか……?」

「ええ。此度はあなた様方を支援するため、ますたあの命により馳せ参じました。バーサーカー——真名を清姫と申します。以後、お見知り置きを」

「なっ!?!」

サーヴァントが自ら他陣営の人間に真名を名乗ることがそもそも慮外の出来事だが、その清姫があまりにもさらりと己の真名を言つてのけるものだから、戦兎は余計に驚いた。

「わたくしに与えられた使命はたったひとつ……セイバーを打倒すること、ただのそれだけです。ですから、セイバーを倒すために動いているあなた様方は、目下わたくしの味方……ということになります。非常にわかりやすいでしょう?」

ビルドは、微笑むバーサーカーの小さな手を取り、立ち上がった。

仮面越しに互いに視線を交わし合う。一瞬ののち、バーサーカーは、その視線を境内の入り口に立つクローズへと向けた。否、その奥の、石階段の下から上がってくる者に、といったほうが正確だった。

「来る」「来ます」

ランサーとバーサーカーが、ほぼ同時に呟いた。

クローズの背後の石段を踏みしめ、黒装束に紅のマントを纏った男——セイバーが悠然と姿を現した。セイバーが踏みしめた石畳には、しつかりと男一人分の足跡が刻まれ、その足跡から炎が燃え立っている。

大気が、陽炎のように揺らめいた。

空気が、質量を持ったように重くなる。

圧倒的な魔力量。桁外れの威圧感。最強にして最優のサーヴァント。闇のキバの鎧に認められし純血ルーツ・オブ・ザ・キングの継承者。

「セイバー……ッ！」

久方ぶりの再開に、戦兔の身がこわばる。キャスターは言わずもがな、笑顔のままのランサーも、顔のおよそ半分を扇子で覆い隠したバーサーカーも、この場の全員がセイバーの放つ並外れた威圧感を肌で感じている。

クローズの隣で肩を並べたセイバーは、この場の全員を睥睨するように視線を上げ、目を細めた。

「あんたが……遠坂さんの、サーヴァントか」

ハザードの攻撃の直撃を受け、消耗した体で再び必殺技を発動した万丈のコンディションは既に劣悪だった。その万丈が、息を切らしながらセイバーへと詰め寄った。

「ライダー。なぜ^{オレ}私の邪魔をした」

セイバーは、隣にいるクローズに一瞥すらも寄越さなかった。ただ、凍てつく冬の湖面のように玲瓏な声音で問い返す。

「あいつは、戦兎は俺が止める！ あんたには悪いが、この役目だけは他の誰にも任せらんねえんだよ……！ あいつは、俺の——」

「もうよい。口を閉じろ、雑種」

セイバーとクローズの間の空間に、黄金の歪みが花開いた。その歪みから、無数の宝剑が雨霰さながらの勢いで飛び出す。

「う、おおおおッ!？」

宝剑の苛烈なラツシユがクローズを襲う。絶大な威力を誇る剣の切っ先が、クローズの装甲を斬り裂き、穿つ。怒濤の勢いで押し寄せる大量の宝剑の閃きを、今のクローズがしのぎ切れるわけがない。

はじめ両腕で頭を庇うように体を丸め、防御姿勢をとっていたクローズだったが、宝剑の連撃はたやすくその守りを打ち崩し、クローズを吹き飛ばした。

ライダーシステムが強制解除され、全身に切り傷を刻み付けた万丈が地べたを転がる。胸元には、ハザードの一撃によって与えられた傷が生々しく残っており、擦り切れた衣服の合間からは赤黒く変色した痛々しい痣が垣間見えていた。

「万丈オオーツ！」

駆け寄ろうとしたビルドの眼前に、またも黄金の歪が出現した。一齐に放出された黄金の大剣を、ビルドは再び構えたフルボトルバスターで弾き返す。

魔皇剣の複製品とはいえ、腐つても宝具の射出だ。ろくな構えも取っていない状況から、敵の宝具攻撃の威力を殺し切るには、些か膂力が足りない。一瞬の拮抗ののち、吹き飛んだのはビルドの方だった。

「ぐ、あ……!?!」

「戦兔！」

駆け寄ったランサーの腕を振り払って、ビルドは地面を殴って起き上がる。

ランサーは一瞬目を丸めたが、すぐにいつもの笑みを取り戻し、小首をかしげた。

「おや、随分お疲れのように見えましたが、まだ私の手助けはいりませんか？」

「……ランサー、お前にひとつ、頼みがある」

「頼み？ 珍しいですね、よもや戦兔が、この私に頼み事など」

らしくないと、自覚はしている。それでも、伝えなければならぬ。

戦兔はランサーに向き直った。

「もしも、俺が暴走して手が付けられなくなったら……そのときは、俺のベルトを狙え。ハザードトリガーが停止すれば、ビルドは止まる」

「そなた、もしや……捨て身で？」

ビルドの仮面の下で張り詰めた表情を浮かべていた戦兔は、なんでもないように、努めて朗らかに笑ってみせた。

「ま、安心しろよ。暴走するつもりはない。けど、最悪の状況を想定して保険をかけておくのは、てんつさい物理学者として当然の心構えだからな」

言うが早いか、ビルドはベルトに装着されたハザードトリガーのスイッチを押し込んだ。ランサーに二の句を継がせるつもりはなかった。

『MAX HAZARD ON!!』

無言のまま、ビルドはベルトのレバーを回転させる。

「待ちなさい、戦兔ッ！」

『Ready Go!』

ハザードフォームに変身してから、既に一定以上の時間が経過している。これ以上戦闘を長引かせるのは、危険だ。短期決戦で、一気に勝負を仕掛ける必要がある。

感情的になっている、という自覚はあった。

セイバーは味方であるはずの万丈に不意打ちを仕掛けた。傷だらけの万丈の命をなんとも思っていない。以前戦ったときから分かっていたが、あのセイバーは、そういうことを平気でやれるサーヴァントなのだ。それが、戦兔には許せなかった。

『オーバーフロー!』

『ヤベー!!』

無言のまま、ビルドはオーバーフローモードを起動した。

全身から漆黒の霧が噴出し、ビルドの装甲を覆う。どす黒い闇の中で、赤と青の複眼だけが妖しく煌めいていた。

ゆらりと、黒いビルドが顔を上げる。その視界に、敵の姿を捉え、ビルドは地を蹴った。

「ツッ」

残像だけを残して、漆黒のビルドはその姿を掻き消した。速度が、あまりにも疾すぎるのだ。

目前に黄金の宝剣が無数に展開されるが、今のビルドから見れば、あまりに遅すぎる。

眼前に突き立てられた宝剣の切っ先を、横合いから右の拳で殴り付ける。殴り付けたそばから拳を起点に漆黒の闇が噴出し、宝剣を粉々に砕く。二刀目は左の拳で、三刀目は右の裏拳で、四刀目は回し蹴りで叩き落として、ビルドは破竹の勢いで進撃する。

オーバーフローモードを起動したビルドの速度は、間違いなくセイバーの遠隔射出の初速を上回っている。音速に近い速度で迫りくる攻撃を叩き伏せながら突き進み、やがてビルドはセイバーへと肉薄した。

「ほう」

鼻を鳴らすセイバーの顔面目掛けて、ビルドは無言のまま拳を放つ。

渾身の右フックを受け止めたのは、セイバーの生身の左腕だった。その掌から、赤黒い波動が放たれている。それがハザードの拳を食い止めていた。

一瞬ののち、濃緑に輝く魔皇力の波動が、セイバーの腹部を中心として、水面に波打つ波紋のようにその全身へと広がってゆく。

ビルドの仮面に、セイバーの吐息がかかるほどの至近距離。そこで、セイバーはほんの一言、呟いた。

「変身」

ビルドと突き合わせていたセイバーの顔面は、瞬く間にエメラルドグリーンの複眼に彩られた仮面に覆われた。

ダークキバの反撃の拳を、ビルドもまた片手で受け止める。両者の拳と掌の間には、ハザードの装甲から滲み出た黒い霧が生じている。

ほぼ同時に、カウンターとなるかたちでビルドは殴り返した。けれども、その拳もまた、ダークキバの腕に遮られ、届かない。

そこから先は、壮絶な拳の打ち合いだった。

互いに決定打を与えられぬまま、拳の応酬だけが繰り返される。

ただひとつ、両者に差があるとすれば、戦闘時間が長引くにつれて自我を保てなくなるビルドと違って、ダークキバには制限がないということだった。

第21話「キングが斬る！」

「ぐっ……うう、戦、兎オオ……！」

ハザードフォームへの変身を果たし、ダークキバと殴り合う戦兎を遠目に見ながら、万丈は砂利を握り締め、未だ新鮮な傷の痛みに軋みをあげる上体を起こした。

そこで、はたと気付く。いつのまにか、傍らに雁夜が寄越したバーサーカーが立っていた。

「随分手酷くやられたものですね、ライダー。まだ戦えますか？」

「うるせえ……ッ、俺は、こんなところで、へこたれるワケにはいかねんだよ……！」
「あらあら、うふふ。それほど傷を負いながら、なおも戦おうという気概、素直に感服いたしますわ。ですが、戦うといっても、いったいどなたと？ あなた様は、遠坂時臣の側について、彼を止めるために戦っていたのでしょうか？」

口元を扇子で覆い隠したまま、バーサーカーは微笑んだ。

見上げた万丈の視線と、バーサーカーの視線が向かい合う。口調に反して、バーサーカーの目は笑っていない。一瞬返答に窮した万丈は、目線を逸らし、雑念を振り払うように立ち上がった。

「俺がやることは変わんねえ。俺が戦う理由は、戦兔がくれたんだ……あいつは、俺の戦う理由なんだよ。だから……戦兔は、俺が止めなきやなんねえ」

倒す、という意味ではなく。

戦兔をハザードの呪縛から解き放つために、万丈は戦わなければならぬ。

「それでしようか？ 放っておいても、セイバーが止めてくれると思いますか？」

「あんなやつに任せておけるか！ 戦兔は、俺に仮面ライダーの力をくれた……！ 何度も俺を救ってくれた！ けどな……あいつは人に手を差し伸べるばかりで、誰にも助けを求めようとしねえ……！」

万丈の声は震えていた。戦兔は、どんなに自分が苦しくても、それを表に出そうとはしなかった。いつだって自分ひとりで背負い込んで、自分ひとりでつらい道を歩もうとする。

飄々とした態度で笑いながら、その仮面の裏にどれほどの悲しみを隠しているのかを、万丈は知っている。このまま黙って戦兔をやらせるわけにはいかない。あんな男に、これ以上戦兔を任せてはいられない。

「せめて、俺があいつを理解^{わか}ってやらなきや……いったい誰があいつを救うつてんだ！」

「それは、つい先程まであの方と戦っていたライダーに言えた言葉でしょうか」

「何度も言わせんな！ 俺の戦う理由は変わらねえ……！ 遠坂さんも、凜も、桜も……」

戦兎も！ 全部、俺が救う！ 俺が戦うのはそのためだ！ さつきから、その思いはなにひとつ変わってねえッ！」

バーサーカーの口調から、余裕に満ちた笑みがすっと消えた。

神妙な眼差しで、バーサーカーはじいっと万丈を見つめる。

「本当に、不器用なお方。戦う理由……それをくれた殿方を救うために……それだけの理由で、そんなになってまで戦うと」

「それ以上の理由なんか必要ねえ。戦兎がそうしたように、俺も、誰かを守るために……ラブアンドピースのためにこの力を使うッ！ それが、仮面ライダークローズだ！」

目線を伏せたバーサーカーは、くすりと、諦めたように笑みを零した。

「まったく、あなたという人は……どこまでも、清々しいほどに素直な人。ええ、それを聞いただけで十分です。わたくしも、意地悪が過ぎましたね」

「バーサーカー……お前」

「ライダー。あなたが、己が胸に懐いた嘘偽りのない願いを貫くために戦うのであれば……わたくしも、彼を救うための戦いに、手を貸して差し上げましょう」

バーサーカーの双眸は、セイバーへと向けられていた。

隣に並び立った万丈は、拳を掌に打ち付け、セイバーを睨めつける。

そもそも、マスターを傷付けない、というのが時臣と万丈の間に結ばれた条約の前提

条件だ。戦兎への過剰な攻撃といい、無防備だった万丈への不意打ちといい、セイバーの行動はいずれも万丈との約束を違えている。もしも約束を違えた場合、万丈が時臣を止める、というのは当初の約定の通りだ。それを思えば、万丈にはなんの負い目もない。「遠坂さんにや悪いが、セイバーにはさっきの借りを返させて貰う……！」

万丈の胸の内に、ふたたび闘志の火が灯った。

炎は心の奥底から、体の表面へと燃え広がる。万丈が生み出した魔力の炎は、胸元に出来た傷を瞬く間に燃やし尽くす。真紅の炎は、そのまま全身を滑るように広がり、セイバーに与えられた傷をも洗い流した。

通常、マスターからの魔力供給で、サーヴァントは己の身に刻まれた傷を治癒させる。マスターとサーヴァントをひとりで兼任する万丈は、なんの知識もないまま、本能だけでそれをやってのけたのだ。

「待ってろよ、戦兎……俺がお前を救う。お前がくれた力で……！」

他の誰でもない、戦兎が見せてくれた、仮面ライダーという夢に憧れたひとりの男として。

万丈の右腕に、ごうと唸りを上げて真っ赤に燃える炎が灯った。炎はやがて、赤熱する溶岩へとその姿を変えた。

握り締めた溶岩の塊から、灰褐色に変色した外郭が剥がれ落ちたとき、万丈は己の手

の中にナツクルダスター型の武装、クローズマグマナツクルが握り締められていることを確認した。

戦える。そういう確信がある。

『BOTTLE BURN!!』

ナツクルにドラゴンマグマフルボトルを装填すると、表面の外装が左右に展開し、変身シークエンスへと突入する。万丈はそれを、腹部のドライバーへと勢いよく叩き込んだ。

『CROSS—Z MAGMA!!』

『Are You Ready?』

「変身!!」

レバーをゆっくりと回転させる。

万丈の背後に、巨大なナツクル型の^{るっほ}坩堝が形成された。そこから溢れ出した大量の溶岩^{マグマ}が、万丈の体を覆い尽くす。

けたたましい電子音の演奏のさなか、万丈の体を覆い尽くして余りある大量の溶岩は、巨大な八頭のドラゴンを形作った。日本神話に登場する^{ヤマタノオロチ}八岐の大蛇を彷彿とさせるマグマのドラゴンだ。

赤熱する溶岩の中で、万丈は猛り狂う八首龍の咆哮を聞く。変身は刹那のうちに果た

された。万丈を包み込んでいた溶岩が冷えて固まり、灰褐色の繭と変わる。

『極熱筋肉ツ!!』

『クローズマグマ!!』

『アーチャチャチャチャチャチャ

チャチャチャチャアチャーツ!!』

ベルトから鳴り響くド派手な電子音とともに、クローズの全身を覆っていた灰褐色が弾けるように吹き飛んだ。

全身に八頭のドラゴンを身に纏ったクローズマグマが、装甲を赤熱化させながら雄叫びをあげる。燃え上がる闘志に応えるように、マグマの装甲は熱く煮え立ち、全身のあちこちからこう、と唸りをあげて炎と熱が噴出する。

クローズマグマの装甲は、すなわちマグマそのものだ。圧倒的な熱量を至近距離で受けながら、しかしバーサーカーは涼し気な顔で微笑んでいた。

「うふふ。溶岩地帯といえども、私の前では涼風同然。さあ、ライダー。どうやら考えていることは同じ様子ですし、ともに参りましょうか」

「少々お待ちを。ライダー、そしてバーサーカー……清姫、と言いましたか」

ふいに、背後からかけられた声に振り返る。その先にいたのは、バーサーカーの微笑みとはまた趣の異なる、不敵な笑みをたたえて佇立する和装の少女だった。

「デメエは……さっきの」

「ええ、さっきのです。なにやら楽しそうな話をされている様子でしたので、その企て、私にも一枚囁ませていただきたく思いました」

白馬を駆り、八人に分身して、逃げ惑うアサシンを掃討していた女武将がそこにはいた。

一瞬とはいえ技をぶつけ合った相手とは思えぬランサーのにこやかな微笑みに、万丈はクローズの仮面の下で表情を顰めた。けれども、最前感じた危機迫る殺戮者の顔は既に鳴りを潜めている。敵意は感じない。

反射的に構えを取りかけた万丈だったが、ひとまず警戒を解き、肩の力を抜いた。

「私は八華のランサー、真名を長尾景虎と申します。いえ、それとも……上杉謙信、と名乗った方がわかりやすいですか？」

ランサーはたつぷりと間を溜めて、深い笑みとともにその名を名乗り、胸を張った。

「——あん？ 誰だそれ、知らねえな」

「えっ……上杉謙信を、知らない？」

「おう、知らねえな。誰だそれ」

「え、そんな……謙信ですよ？ かの戦国武将、武田信玄と川中島の戦いで相争った

……」

「ああん？ タケダだかシンジだか知らねエが、んなことどうでもいいんだよ！ ともかく、アンタは味方つてことでいいんだな！」

「ど、どうでも……いいい」

ランサーは微笑みを絶やさぬまま、剥製のように固まり、瞠目した。大きく見開かれた瞳の中で、混濁した瞳孔が開ききつている。瞳に、光を感じられない。

バーサーカーは、袖で口元を隠してくすくすと笑った。

「ふふ、ライダーつたら、本当に正直なお方。ですが、ここで無意味な見栄や虚勢を張らないところには好感が持てます」

「あ？ ンだよ、有名なのか？ そのタカスギなんとかつてのは。全ツ然知らねエぞー！」
「あの、高杉ではなく上杉……あついえ、もういいです。手助けしますので、私のことはお虎さんでも呼んでください」

「おう、だったら最初からそう言えよ。よろしくな、お虎さん！」

明らかに落胆している様子で引き笑うランサーに、バーサーカーは微笑みかける。

「ご安心を、謙信様。あなた様の武勇は、はるか昔、平安の世を生きた私の耳にも届いております。もつとも、座から得た知識ではございますが」

「これは清姫殿！ そなたの伝説こそ、私が生きた戦国の世になってなお、語り継がれておりますよ」

「まあ……なんとということでしょう。あまり語り継がれて嬉しい伝説でもないのです
が」

僅かに頬を赤らめ、表情を陰らせるバーサーカーの言葉の意図が読み取れないのか、ランサーは穏やかな笑みを浮かべたまま、小首を傾げていた。かくいう万丈にも、ふたりがなんの話をしているのかはさっぱり理解できてはいない。

「なんかよくわかんねーけど、ともかくお虎さんも戦兔の味方ってことでもいいんだろ？」
「ええ。私はこれで、戦兔が掲げる理想を大変気に入っています。叶うならば、その行く末を見定めたい。であれば、斯様な戦場いくさばを、彼の者の最期とするわけにはいきませんか
で」

変わらず笑顔のままそう言つてのけるランサーだったが、その瞳には確かな熱が灯っていた。戦場を真っ直ぐ見つめるその瞳を見たとき、万丈はランサーの言葉に嘘がないことを直感的に察した。

万丈が雁夜やバーサーカーと出会えたように、戦兔もまた、この世界で新しい仲間と出会えていたのだ。その事実に安堵しつつ、クローズは残る最後の仲間に視線を向ける。

戦兔のサーヴァントにして、この聖杯戦争において最も信頼すべき仲間であるキャスターは、クローズを見据え、不敵に微笑んでいた。

「うおおおおあああああッ!!」

叫びとともに、闇を纏ったビルドの拳が幾度となくダークキバへと叩き込まれる。けれども、そのうちの一撃たりとも直撃はない。すべてが正確無比なダークキバの手さばきでいなされるか、受け止められるかを繰り返していた。

「ふん。少しはやるかと思えば、所詮は雑種の足掻きか」

ダークキバは、数歩ずつ後退はしているものの、それだけだ。ハザードフォームの攻撃は、命中さえすればいかなる装甲であろうとも無効化し、内部に直接ダメージを叩き込める。だけれども、そもそも攻撃が当たらないのでは意味がないのだ。

幾度目かの激突ののち、戦兎はベルトのレバーを高速回転させた。

『Ready Go!』

次第にハザードの限界が近付いている。視界の隅に、ノイズが走り始めている。闘志を昂ぶらせ続けた戦兎の意識の糸は、己の熱で焼け、擦り切れる寸前だった。

意識が飛ぶ前に、ここで一気にハザードレベルを跳ね上げて、ダークキバを追い詰める。

「セイバーツ、お前は、ここで倒す……!」

『HAZARD FINISH!!』

脳神経を、ハザードの強化剤が駆け巡る。

ビルドの体を覆う闇が色濃くなり、その身を闇の霧が覆い隠す。昏く輝く闇が、ビルドの拳の威力を強制的に上げる。通常の打撃の速度を遥かに越える連打が、ダークキバ目掛けて放たれた。

「ぐっ……貴様、これは……！」

「うおおおおおおあああああッ!!」

己の脳神経にひたすら負荷をかけて、ハザードレベルを際限なく跳ね上げる。それが、ハザードトリガーの能力だ。

戦兎のハザードレベルの上昇に応じて、拳の速度が目に見えて加速する。はじめは上手くないさせていたダークキバだったが、やがてその守りを突き崩し、ビルドの連撃が押し始めた。

ビルドの拳が、ダークキバの鎧の中央を殴り付ける。ハザードフォームの能力で闇のキバの鎧すらも透過し、ビルドは内部のセイバーへと直接攻撃を叩き込んだ。

「ぬ……ぐうっ」

それでも、ダークキバは僅かにひるんだだけだった。

構わず攻撃を叩き込む。キバの鎧の胸、肩、腹部を問わず、狂ったように拳を叩き付ける。一撃一撃が、ダークキバの内部のセイバーに直接ダメージを叩き込んでいるはず

だが、戦兎は確かな手応えを感じられずにいた。

やがて、ビルドの正拳突きがダークキバを突き放した。その一瞬の隙を突いて、ビルドは足にハザードより噴出する闇の輝きを纏う。必殺のライダーキックを叩き込もうとした、その瞬間だった。

「そこまでだ、雑種」

「——ッ」

四方八方から伸びた黄金の鎖が、ビルドの四肢を絡め取っていた。

十重二十重に雁字搦めにされたビルドは、完全に身動きを封じられ、蹴りの姿勢のまま固まった。足に纏った闇が、すう、と霧散する。

「この王を前にして、よくもやったと褒めてやろう」

ダークキバは、ビルドに殴られた箇所から漂う白煙を軽く掌で払うと、腰元の魔皇剣を引き抜いた。振り上げられたその刀身は、僅かに差し込む月明かりを吸い込み、虹色に乱反射して煌めいている。

「せめてもの褒美だ。王自ら、誅をくだしてやる」

魔皇剣が振り下ろされるその瞬間、草木を吹き払う極熱の熱風が、嵐となって吹き付ける。さしものダークキバも一瞬動きを止めた。その刹那、空を舞う炎の龍が、ダークキバ目掛けて飛来するのを、セイバーは確認した。

今飛び込んできたドラゴンよりも遙か上空には、背中の翼とスラスターからマグマを噴出させ、ドラゴンたちとともに空を飛ぶクローズの姿が見える。

「セイバーアアアッ！ テメエ、さつきはよくもやってくれたなコラアッ!!」

「見苦しいな……小煩い羽虫が、ぶんぶんと喚きおつて」

空を舞う八頭の龍が、続け様にダークキバに襲い掛かる。最初の一頭を、頭から魔皇剣で両断する。魔皇剣の真紅のエネルギーが、クローズの放ったマグマライズドラゴンを突き抜け、形を崩したドラゴンは溶岩となつてダークキバへと降りかかった。

赤熱する溶岩が闇のキバの鎧を焦がし、周囲の足場に火が灯る。ダークキバの鎧に纏わり付いた溶岩はすぐに冷え固まつたが、鎧の表面は灰褐色の煤で覆われた。それが、セイバーは気に食わなかつた。

「雑種風情が、この闇のキバの鎧に泥を塗るか——ッ」

続け様に飛来するマグマの龍を斬り払って応戦するダークキバの懐目掛けて、今度は八頭の白馬が殺到する。八頭の白馬に跨つたすべてのランサーが、それぞれ異なる武器を携えていた。

空間に生じさせた歪から、大量の魔皇剣を射出するが、そのすべてをランサーは掻い潜り、必要に応じて打ち返し、猛進する。

「あつはははははははッ！ 霊脈を奪われたセイバーなど、所詮はこの程度ッ！ 圧倒

的な知名度補正を誇るこの私との差は一目瞭然！　みなのもの、怯むな！　進めエーイー！　にやーーーーッ!!」

ふざけた奇声を上げながら、ランサーは夜を昼へと塗り替えんばかりの眩い後光を纏って突撃を仕掛けてくる。

上杉謙信の名が持つ絶大な知名度補正に加え、謙信自身が持つスキルと、霊脈を味方につけたキャスターの術式が味方しているのだろう。セイバーの遠隔射出程度では、もはやランサーには届かない。

「——だからなんだというのだ」

ビルドにそうしたように、四方八方から天の鎖が飛び出した。エルキドゥ

エルキドゥは、神性を持つサーヴァントに対しては絶大な威力を誇る鎖。軍神の名を恣にする上杉謙信もまた、その例外ではない。

はじめ、殺到する鎖の群れを上手くかわしていたランサーだったが、やがて鎖の一本が、武器を握り締めたランサーの細腕を捉えた。鎖はそこからするとランサーの腕を登り、容赦なくランサーの四肢を絡め取った。

いなく白馬の首に巻き付いた鎖が、完全にランサーの進撃を封じる。同じ要領で、セイバーへと踊り掛からんとするランサーらの腕に、足に、鎖は絡みつき、鎧に守られていない柔肌深く食い込む。

残りのランサーもすべて捕縛してやろうと、宙を舞う鎖を加速させる。

「——どこを狙ってるんです?」

今しがたエルキドゥで絡め取ったランサーの体が、乗り跨った白馬ごと霧散し、消え去った。一体、二体、三体。まるで溶けるように、はじめからなにもなかったように、跡形もなく消えてゆく。

エルキドゥが捉えたのは、いずれもランサーの宝具で増えた分身だ。本体は、己の分身をすら囿にして、上手くかわし続けていたのだ。

戦場を駆け回る残りのランサーへと鎖を伸ばす。しかし、それそのものがセイバーの意識を一点に向けているための罠だったことを、セイバーは一瞬遅れて悟る。

空から飛来したマグマのドラゴンが、ビルドを雁字搦めにしていた鎖を真上から呑み込んだ。黄金の鎖は瞬間に赤熱し、溶解しはじめ。寸前まで空中から生じ、ぴんと強く張られていた鎖が、だらりと弛緩し、燃え落ちてゆく。

「……ライダーか」

「ツラアアア!!」

空から舞い降りたクローズマグマが、燃え盛る大剣を振り下ろし、ビルドを捉えていた残りの鎖をすべて断ち切った。同時に、クローズのスラストから噴出した炎と溶岩の渦の中を泳ぐようにして飛来した蒼龍が、ビルドの体へまとわりつく。

「ちよおつと、失礼しまあーす」

バーサーカーは、器用にもその上半身だけを和服の少女へと戻し、ビルドのベルトに装着されていたハザードトリガーを引き抜いた。同時に、ビルドの装甲が溶けて消えてゆく。中から現れたのは、既に意識を失い、糸の切れた人形のように項垂れ、前のめりに倒れ込む桐生戦兎だった。

「清姫、あとは私が！」

白馬に乗って駆けつけたランサーが、意識を失い倒れ込もうとしていた戦兎の腕を乱暴に引き寄せ、強引に己の馬上に担ぎ上げた。放生月毛は一声いなくなると、くるりと踵を返す。

「ライダー、後は任せます！」

「おう、そつちこそ、戦兎を頼んだ！」

戦兎を乗せたランサーが、キヤスターの待つ柳洞寺本殿へと退避してゆく。下半身だけを燃える蒼龍へと変えたバーサーカーもまた、ランサーに追隨するように宙を泳ぐ。万事すべてが想定通りだった。

クローズマグマが全力で戦うためにも、生身で戦う彼女らは先に退避するようにと、他ならぬ万丈がそう申し出たのだ。

「貴様ら、最初からその男を救うために……！」

小賢しい雑種の群れにしてやられたことにセイバーは苛立ちを禁じ得ず、その場の全員を睥睨し、声を震わせた。

「たかが一介のサーヴァント如きが王の手を煩わせるなどと……弁えろよ雑種！ 王に對してその狼藉……刎頸にも値するぞ！」

「ごちやごちやうツせえな、テメエはここでブツ倒す！ つーかよくよく考えりや、テメエさえいなくなりやあ遠坂さんも聖杯戦争から解放されんじゃねエか！」

クローズが口にする言葉のあまりの浅はかさに嘆息するダークキバを尻目に、クローズマグマは燃え盛るビートクローザーを掲げ、駆け出した。

「うおおおおおおおらあああああッ!!」

構わず魔皇剣を精製し射出するが、そのいずれもがクローズマグマの燃える剣に叩き伏せられる。どうやら、霊脈の加護を失ったことで、攻撃の威力が落ちていることは確からしい。

ダークキバは、軽く腕を掲げた。地面に描かれた光り輝くキバの紋章が、すう、と抜け出して、クローズマグマの元へと伸びてゆく。キバの紋章は、クローズマグマの背後を取ると、宙へと浮かび上がった。そのままクローズマグマを背中から磔にしてやろうとした、そのとき――

「酒ヤア落臭エエエツ!!」

「なっ!？」

紋章がクローズマグマを捉えるよりも早く、その背中から爆発的な勢いでマグマを噴出し、クローズは空へと飛び上がった。燃える爆炎のジェットスラスタを推進力に、轟音を唸らせ、溶岩の火柱を伴って空高く飛翔したクローズマグマが、燃える大剣を振りかざして急降下する。

黄金の歪から無数のザンバットソードを射出するが、そのすべてがクローズの咆哮とともに叩き落された。ただ落とされるだけではすまない。クローズの剣に触れただけで、射出された魔皇剣の複製は、爆炎とともにマグマを噴出させ、やがて溶岩となって燃え落ちるのだ。

クローズマグマが誇る熱量が、時間経過とともに跳ね上がっていることの証左だった。

「うおおおおおおおッ!!」

「——ッ」

間髪入れずに飛び込んできたクローズマグマと、ダークキバの魔皇剣がかち合う。剣の接触面から炎が吹き上がり、爆炎の竜巻が両者を襲う。仮面越しでなければ、呼吸さえままならないほどの高圧力の爆風だ。

「ぐっ……貴様ッ、その判断力……、よもや本能とでもいうのか!？」

「魂が燃える……！ 俺のマグマが迸るツ!! もう誰にもツ、俺は止められねエエエエーツ!!!」

絶叫とともに、クローズマグマはビートクローザーを投げ捨てた。燃え盛る拳を、ただ力任せに叩きつけんと振るう。

「図に乗るなよ雑種ツ！」

彼方から飛来した天の鎖が、クローズマグマの腕を絡め取った——かに見えた。

実際には、クローズマグマの動きが止まったのはほんの一瞬にすぎない。天の鎖が触れた瞬間、クローズマグマの腕が爆発したのだ。爆炎とマグマが、火山の噴火さながらの勢いで溢れ出し、燃え滾る溶岩は鎖をも溶かした。

身に降りかかるあらゆる枷を単純な剛力と圧倒的な熱量だけで無に帰しながら、クローズマグマはストレートパンチを繰り出す。

「うおおおおおおおあああああアツ!!!」

砲弾のような威力を誇る拳が、ダークキバの胸部に突き刺さった。

殴られた箇所から、太陽フレアを思わせる爆炎が噴出する。次いで、ダークキバの鎧から、およそ十メートルにも迫る極太の火柱が空へ向かって噴出する。今のクローズは、もはや荒れ狂う活火山も同然だった。

「おおおおおおおあああああアツ!!!」

続く二撃目。クローズマグマの腕から噴出した大量のマグマが、その拳を覆い隠すように巨大な龍の顎門をかたどった。燃え盛る真紅の龍を巨大な手甲として拳に纏い、クローズマグマはダークキバ目掛けて渾身の一撃を叩き付ける。

「おおおおおおあああああああああああッ!!」

「ぐ……ッ」

爆裂、轟音、そして噴火。

大気を震わせ、焦がしながら、キバの鎧から溶岩の火柱が噴出する様を見て、さしものセイバーも絶句した。続け様に振るわれる拳のラッシュをすべて己の装甲で受け止め、そのたびに燃え盛るマグマの熱に焦がされ、セイバーは歯噛みする。

ふたりの周囲は、既にクローズマグマの体から噴出した爆炎と、その攻撃によって溢れ出したマグマによって、火の海と化していた。

セイバーは察した。これは、必殺技でもなんでもない。ただの通常攻撃だ。なんでもない攻撃の一発一発が、マグマと同等の熱量を持っているのだ。

「こんな、馬鹿なことが……!」

核弾頭の直撃を受けても傷一つつかないキバの鎧を、真つ向からの攻撃で突破することは不可能だ。とはいえ、最前まで見下していた雑種一匹を相手に、こうも一方的に押されているという事実が、セイバーには腹立たしかった。

「今の俺はッ、負ける気がしねエエエエエエッ!!!」

『Ready Go!』

咆哮とともに、クローズマグマは背中中のマグマの翼から爆炎と溶岩を勢いよく吹き出して、再び空へと高く、高く飛んだ。

地面に巨大なクレーターだけを残し、マグマそのものとなつて空へと昇るクローズを、燃え盛る八岐の大蛇マグマライズドラゴンが追いかける。

「うううううううッ、おおおおおおあああああッ!!!」

頂点に達したクローズが、今まさに装甲の表面で赤熱化し、爆発とフレアの噴出を繰り返している右足を突き出し、裂帛の叫びを響かせた。

空を舞う八頭の龍が、一斉にクローズの足元へと集まる。元々赤熱していたクローズの装甲はさらに熱く燃え滾り、背中から吹き出したマグマは炎の渦となつてクローズの背を押す。もはやクローズそのものが、赤く燃えるマグマと同化していた。

爆炎を広範囲に噴出し、もはや昼夜の区別すらつかぬほどに赤く燃える夜空を背景に、燃え盛るクローズマグマのライダーキックは、ダークキバ目掛けて急加速する。

セイバーは、ふん、と鼻を鳴らした。

「——よかろう。ここまで追い縋つたその意気に免じて、貴様に我が至宝たる魔皇剣の閃きを魅せてやる」

両手で握り締めた魔皇剣を、眼前に掲げる。きらめく虹の刀身に、血のような赤の輝きが差した。虹色の煌めきは損なわず、ただその刀身を煌々と輝く赤一色に満たしてゆく。

ダークキバは、赤色化した魔皇剣を構え、上空から迫り来る敵を見据えた。

「^そ其が告げるは絶滅の時刻^{とき}。一瞬で結末へと送り届けてやる——！」

ダークキバを中心に、膨大な魔皇力の奔流が渦を巻く。突風を孕んだ魔皇力の波濤は、クローズマグマがあちこちにばら撒いた炎の残滓を一瞬で吹き消した。

爆発的に増加する真紅の魔皇力は、ザンバットの刀身を満たしただけでは収まらず、溢れ出した赤色光は乱反射し、周囲のあらゆる闇を払う極光と化した。

膨大な魔皇力を内包し、既に飽和状態となったザンバットソードを振り翳し、セイバーは昂然とその名を宣言する。

「死して拜せよ、^{ジ・エンド・オブ・ザンバット}天地乖離す絶滅の魔皇剣——！」

創世の光を宿した魔皇剣が、一振りのもとに、赤く煌めく光の束を放出した。

放たれた真紅の極光は、ダークキバを起点に爆発し、天へと昇る巨大な柱へと変わる。光の奔流は、クローズマグマを容易く呑み込んだ。なお欠けることのない絶対なる輝きは、上空でばら撒かれた爆炎も、溶岩も、一切合切の隔てなく、あらゆるものを一呑みにする。

同時に、宝具の解放によって生じた余波が、ダークキバを起点に周囲のすべてを無に帰さんと吹き飛ばしてゆく。敷き詰められた石畳は一枚残らず捲れ上がり、剥き出しの地面が露出した。生い茂る木々は押し折れ、吹き飛び、創世の輝きをもろに受けたものは、もはや存在の痕跡すら認識できぬ粉微塵となって消滅した。

「ライダーーツ!!」

この場に集まった誰かの絶叫がセイバーの耳朶を打つ。けれども、天を衝く極光の奔流がもたらす、大地すら軋ませる轟音を前に、ひとひとりが発する絶叫など矮小な羽虫が掻き鳴らす羽音と大差はない。

セイバーは、微かにほくそ笑んだ。

「ふん。加減はしたつもりだが……所詮はヒトが造った紛い物の鎧。我が至宝の前には霞むも道理か」

やがて宇宙の法則をも揺るがす極光は収束する。ダークキバは魔皇剣を降ろした。

光に吞まれたクローズマグマが、身に纏った装甲を消失させ、地へと堕ちてゆくのが見える。クローズマグマが纏う赤熱化した溶岩の装甲は、まさしく原初の地獄を示す大地そのもの。かつて天と地とを隔てた乖離剣の因子をも取り込んだ魔皇剣の直撃を受けて、無事で済むはずがない。それでも万丈が原型を保っていられる程度に耐えて見せたことは、セイバーにしてみれば予想外ではあるが、もはや些事だ。

意識を失い地へと墜ちゆく万丈を、空へと舞い上がった蒼龍が迎えに行く。バーサーカーは上空で人の体を形成すると、その華奢な体で、自分よりも大きな万丈の体を抱き抱えた。

キャスターを中心に、ランサーとバーサーカーは障壁で余波を防いでいたらしく、宝具の解放によるダメージは及んでいない。ブラッドスターもちやつかりと障壁の後ろに入り込んでいた様子だった。

「残るは雑兵のみか……さあ、どうする雑種ども。頼みの綱の仮面ライダーは二騎ともそのザマだ。望むなら、一瞬で絶滅させてやろう」

セイバーは、ダークキバの仮面の下で冷徹に嗤った。

一歩を踏み出す。濃密な魔力を内包したダークキバが踏み締めると、それだけで足跡は焼け、ゆらりと炎が燃え立つ。

霊脈を奪われたところで、圧倒的な地力の差は縮まらない。セイバーの勝利は、目前だった。

「さて、それはどうかな、セイバー」

「なに？」

もはや仮面ライダーはふたりとも戦闘不能に追い込まれたというのに、非戦闘員であるはずのキャスターはなおも不敵に微笑んでいた。ダークキバは足を止め、キャスター

を睥睨する。

「キヤスター風情が、この我に楯突く気か」

「まだ気付かないか？ 自分が、この場所へ誘い込まれたのだということに」

はじめ、セイバーにはキヤスターの言葉が理解できず、眉をひそめた。

どう考えても、現状でチェックメイトに手をかけているのはセイバーの方だ。もはや有力な戦力を失った今のキヤスターらに、逆転の目があるとは思えない。

キヤスターは、足を止めたダークキバに向かい合ったまま、滔々と語り始めた。

「チャンスは、ほんの一度きりだった。昨日、あれだけ派手に暴れ回ったのだ……流石に遠坂も黙ってはいまい。それははじめから分かっていた」

「貴様……なにが言いたい」

「今日、ここに貴様セイバーが現れることは織り込み済みだったと言っているのだよ。勿論、払った犠牲も大きかったがね。マスターとライダーには無理をさせた……あとで労ってやらねばな」

そこまで喋らせてなお、セイバーにはキヤスターの言葉の意味が理解できなかった。当惑するセイバーの前で、キヤスターは腰を屈め、地面に描いた己の陣に掌を触れる。「わからないなら、お見せしよう。このキヤスター、諸葛孔明が……自らの陣営すら囿に起ち上げた召喚術式の輝きを」

にいい、とほくそ笑んだキャストが、魔力の輝きを地面へと流し込んだ。長い黒髪がふわりと舞い上がる。キャストが触れた箇所を起点に、眩い魔力の輝きが地面を駆け抜けていった。

「これは……まさかッ」

一瞬遅れて、セイバーは気付いた。

これは、召喚陣だ。キャストは、この冬木でもっとも強い霊地であるこの場所を中心に、円蔵産全体をぐるりと取り囲むように、超巨大な召喚陣を描いていたのだ。

「流石に気付いたか、セイバー。貴様とその魔剣には、我らが真なる切り札を喚び込むための依代となっていたら良かった」

「なん……だと」

ただ一瞬、このときだけをキャストはひたすらに待ち続けていたのだ。ダークキバが己の持てる能力を發揮し、更にはその宝具すら開放し、膨大な魔力を消耗するこの瞬間を。

冬木の地脈が一箇所に集まっている円蔵山を丸ごと舞台装置へと作り変え、アサシンによる怒涛の攻撃を掻い潜り、ダークキバの苛烈な猛攻を耐え忍び、そして、ビルドとクローズが稼いだ時間を最大限に利用して、この瞬間を虎視眈々と待ち続けていたのだ。

それこそは、闇のキバそのものを依代として利用した、反則中の反則。キバを討つための英霊を喚ぶための術式。

「この闇のキバを依代として利用する、だと？ 痴れ者がッ！ 貴様、誰の許しを得て——ッ！」

「なにを言ったところでもう遅いッ！ サーヴァント召喚の布石は打たれた。もはや誰にも止められはしない……この私自身にも」

「……ッ」

不意に、セイバーの動きが止まった。ヴァイオリンの澄んだ音色が、風に乗って運ばれてゆく。

ダークキバの仮面の下で、セイバーの目がぎよろりと見開かれた。

「なっ……これ、は」

聴き覚えのある音色だった。

セイバーからすべてを奪った男が奏でる音色に酷似した、忌むべき人間の音楽。歴代最強のキングと謳われたセイバーが転落するきっかけを生み出した、あの男の——。

或いは、幻聴なのかもしれない。吹き荒れる風の音が、そういう錯覚を齎しているだけかもしれない。けれども、セイバーの直感が、この身の全神経が、生前のセイバーを二度も死に追いやった男の召喚を予感し、戦慄している。

「馬鹿な……そんなことが」

大氣中に咲き乱れたエーテルの輝きは赤い薔薇の花弁へと姿を変え、セイバーの眼前で舞い踊る。赤い花弁吹き荒ぶエーテルの嵐のただなかで、黄金の輝きが、夜の闇を染め上げた。

眩い極光の中、セイバーはダークキバの仮面越しに目線を伏せる。ただの光ではない。濃密な魔力を内包した、熱量を持った輝きだ。

光が収まり、顔を上げたとき、降り積もる薔薇の花弁の中心に——セイバーは男の存在を、認めた。

セイバーと同じ漆黒の装束に赤のマントを身に着けた男は、セイバーと同じように腰から虹色の煌めきを宿した魔皇剣を提げている。ただひとつ違うのは、男が提げた魔皇剣には、巨大な蝙蝠を模した黄金の鏢が取り付けられていることだ。

男の、亜麻色の髪が風になびく。少女のように整った顔立ちをした男は、眼前の敵——セイバーを視界に捉えると、きつとその双眸を尖らせた。

男は腰に提げたザンバットを引き抜き、地面へと突き立てた。その衝撃で、降り積もった薔薇の花弁が、一斉にぶわりと舞い上がる。

突き刺した剣の柄に両手を軽く乗せ、男は高らかに名乗りを上げる。

「サーヴァント、アルターエゴ。喚び声に応じ、推参した」

見知った顔だ。忘れるはずもない。

歴代最高にして最強のキングと謳われたセイバーから、なにかもを奪い去ったあの男の息子の顔を！

「貴様ツ……貴様は」

舞い散る薔薇の花吹雪の中心で、男は、今しがた地面に突き刺した魔皇剣を引き抜き、その切っ先をダークキバへと突き付けた。ザンバットの刀身が、僅かな星明かりを吸収し、虹色の煌めきを乱反射させる。

「我が真名はネロ——皇帝ネロ・クラウデイウス！ この電腦世界において、星を蝕む悪意に立ち向かわんとする勇者の喚び声に応えし、至高のサーヴァント！」

ネロと名乗った男は、ちらと後方を振り返った。そして、自分を見上げる三人のサーヴァントの顔を順に見渡す。それから、傷付き、意識を失った二人の青年の顔を。

ネロはもう一度、セイバーへと向き直った。その瞳に宿る義憤の輝きは、まさしく守るべきものと倒すべきものとを正しく理解した男の闘志の発露。

「セイバー……いや、キング。お前はもう一度、この僕が倒す」

この世にたつた一振りしか存在しない至高の魔皇剣。その、存在するはずのない二振り目を携えた暴君は、ダークキバと真っ向から向き合い、決然と宣言した。

第22話 「皇帝・ゴールデンファイバー」

空に浮かぶ月は燃え立つような赤に染められ、周囲には薔薇の花吹雪が吹き荒れる中、恐れも、痛みも、そして悲しみすらも、なにひとつ感じさせることのない凜とした宣戦布告が響いた。

アルターエゴとして現界したネロは、その瞳にギラついた闘志を宿し、右手を高らかに掲げる。

「キバツト、タツロツト！」

ネロの呼び声に応えるように、彼方から黄金色をした蝙蝠と小竜が飛来する。

「久々に、キバツていくぜツ！」

「びゅんびゅん、いつでもあなたの元へ！」

ネロは蝙蝠キバツトをその右手に掴み取ると、己の左手へとあてがった。左手へと突き立てられた蝙蝠の牙が、ネロの全身に眠る膨大な魔皇力を目覚めさせる。首筋から頬にかけて毛細血管にも似たステンドグラスの紋様が奔ると同時に、腰元には何重にも重ねられた鎖が纏わり付いていた。

「ガブツ」

「変身」

鎖が変じた真紅のベルトに蝙蝠を装着すると、周囲を滞空していた小竜は自らの意思でネロは左腕へと収まった。ベルトを中心に、黄金に輝く波紋が大氣中に波打つように広がってゆく。

一瞬の後、ネロの体は眩い煌めきとともに黄金の鎧に覆い隠された。溢れ出る魔皇力が、炎のオーラとなって鎧を中心に吹き上がる。

「キバ……ッ！」

憎々しげに、セイバーの変じた闇のキバダークキバがその名を呼んだ。

対するネロが変身を遂げた黄金エンペラーフォームのキバは、その鎧に闇のキバと酷似した意匠を纏いながらも、全身は黄金と真紅に彩られ眩く煌めいている。漆黒の闇そのものを鎧にしたようなダークキバとは対称的に、黄金の輝きをそのまま鎧に閉じ込めたような、光り輝くキバがそこにはいた。

振り上げた魔皇剣の鏢を掴むと、キバエンペラーは勢いよくそれを剣先へ向かってスライドさせる。鏢となって取り付いているザンバットバットの牙に研磨された刀身は、魔皇力の赤い輝きを宿す。

「ハアッ！」

キバエンペラーは、真紅に輝く魔皇剣を横一閃に振り抜いた。

魔皇力のエネルギーが、斬撃の衝撃波となってダークキバへと奔る。ダークキバの魔皇剣に、ザンバットバットはない。だけれども、なんの予備動作もなしにエンペラーと同等の輝きを刀身へと纏わせると、ダークキバはそれを縦一閃に振り下ろす。

両者の魔皇力が激突し、爆発が起こった。その爆音をゴング代わりに、キバエンペラーは宿敵目掛けて飛び掛かった。

「ハッ！」

「ぬうッ！」

両者のザンバットソードが激突し、魔皇力の閃光が舞い散る。

魔皇剣は、接触した敵の魔力を自ら吸いに行く性質を持つ、命喰らう魔剣だ。魔力を原動力とするすべてのサーヴァントの天敵と呼べる特性だが、それが魔皇剣同士の激突であれば、互いの魔力を喰い合うだけに終わる。ダークキバが今まで誇っていた優位性のひとつが失われた瞬間であった。

ダークキバのザンバットを跳ね上げたキバエンペラーは、すかさずザンバットによる斬撃を振り下ろす。虹色に煌めく魔皇石でつくられた刀身が、ダークキバの胸部装甲を斬り裂き、火花が舞い上がる。

「ハッ、黄金のキバとはその程度か！」

即座に繰り出された反撃の一撃が、キバエンペラーの鎧を斬り裂き、火花が上がる。

いかな魔皇剣とはいえ、核爆発の直撃を受けても傷一つつかないキバの鎧を、ただの斬撃で傷付けることなどできはしない。

互いの魔皇剣をぶつけ合わせ、時折鎧を斬り付けることには成功するが、互いに火花が散るだけで決定打は与えられない。それでも臂力の差で押されているのは、キバエンペラーの方だった。

「やはりな。黄金のキバといえども、所詮は闇のキバを元に造られた鎧……ましてや、鎧を纏う者が貴様のような紛い物では、宝の持ち腐れというもの」

ダークキバの魔皇剣が、再びセイバーの魔皇力を吸い上げ、その刀身に真紅の煌めきを宿した。キバエンペラーはすかさずザンバットバットで魔皇剣を研磨し、同様に真紅の輝きを纏わせるが、己の意思一つで魔皇力を充填できるダークキバと比べて、キバエンペラーの方が一手遅い。

両手で魔皇剣を上段に構える。その上から、ダークキバの魔皇剣が叩き付けられた。「ぐ……ッ」

魔皇力の閃光が一気に弾け、炎のオーラが爆風となって拡散する。ダークキバは流れるような動きで、赤熱したままのザンバットソードを横薙ぎに振り払い、キバエンペラーの防御をすり抜けてその鎧を斬り付けた。

「フーン」

「が……ッ」

鎧の表面で魔皇力が爆裂し、キバエンペラーの体が吹き飛ぶ。すかさず宙空から飛び出した黄金の鎖が、空中に浮かんだキバエンペラーの四肢を絡め取った。

ダークキバは、魔皇剣の切っ先をキバエンペラーへと突き付けるように掲げた。背後に、無数の黄金の歪が生じ、そこから数えるのも億劫になるほどのザンバットソードが飛び出し、キバエンペラーの鎧へと殺到した。

「ぐっ、あああああッ！」

天の鎖を解除すると同時に、キバエンペラーは今度こそ吹き飛び、鎧から白煙を上げながら地べたを転がった。並のファンガイアならばとうに死んでいる威力の攻撃を雨のように浴びせられたのだ。頑強なキバの鎧を突き抜けるには至らないが、大量の魔皇剣を叩き付けられたことで、鎧越しに魔力が吸い上げられているのを、ネロは実感し、叫びた。

数歩前進したセイバーは、ダークキバの仮面の下でくつくつと嗤った。

「所詮貴様は紛い物の皇帝。真のファンガイア皇帝は、ただひとり……この我だ」

両手で構えたダークキバの魔皇剣に、膨大な魔皇力が注ぎ込まれてゆく。あまりにも強大過ぎる魔皇力の奔流は、たちまち魔皇剣から溢れ出し、突風となつて渦を巻く。

今しがたキバエンペラーから吸い上げた魔力をも自らの糧として、セイバーは膨大な

魔力消費を強いられる大技を放とうとしている。対するネロは、まだ宝具すら発動していないというのに、既に魔力を大幅に消耗させられている。

「まずいぞ、アルターエゴ！ 奴は再び宝具を撃つつもりだ！」

後方で、キャスターが叫んだ。逃げろ、と言いたいのであろうことはネロにもわかる。ネロは己のザンバットを地面へと突き立て、身を起こした。ダークキバを中心に渦巻く圧倒的な魔力の風が、キバの鎧を突き抜けて、その素肌を総毛立たせる。

だけれども、キバエンペラーに後退の選択肢はなかった。本能的に鎌首をもたげた恐怖心すらも己の胆力で呑み込んで、キバエンペラーは二本の足で地を踏み締め、立つ。

「言つたはずだ、キング……お前は、僕が倒すと。誰かを虐げ、力で支配するしかなかったお前に、皇帝キングの資格はない……！」

「ほごくなよ雑種、紅音也はもう死んだ。今更貴様ひとりが喚ばれたところで、この闇のキバを前になにが出来る！」

ネロは——紅渡は、かつて、父である紅音也とともにキングを打ち倒した。

父は、我が子の未来のため、己の身を焦がす愛を貫くため、自らの命をも燃やし尽くしてダークキバへと変身し、渡の変身するキバエンペラーとともに戦ったのだ。

ふたりのキバが力を合わせてようやく撃破するに至った最強にして最大の強敵。あらゆる魔族を滅ぼし尽くし、たったの一代でファンガイアを至高の魔族へと押し上げた

一族の英雄王。それが、ファンガイアのキングだ。

それでも。彼我の圧倒的な戦力差を理解してなお、ネロは宿敵を前に一步も引かず、もう一度剣を執る道を選んだのだ。

「僕は……ひとりで戦ってるんじゃない」

渡の背中を押して、今もこの胸の内では消えることのない音楽メロディを奏で続けてくれる人がいる。その音楽を美しいと認め、渡に力を貸してくれた英霊がいる。

なによりも、守護まもるために戦いに、渡の力を必要だと求め、喚んでくれた人がいる。

それを心に思い浮かべたとき、絶対に負けられない、負けてはならないという強い感情が、心の奥底から湧き出てくるのを感じた。

「奏者マスターッ！」

セイバーの猛り狂う魔皇力の嵐を前にして、ネロは高らかに叫んだ。

瞬間、心を通じた気がした。ネロを喚び出した者たちの願いが、この心へと流れ込んでくる。

愛と平和を守りたいと強く願う心が、美しいメロディとなって伝わってくる。

「——つたく、サーヴァントが戦ってるってのに……マスターの俺が、おちおち寝てるわけには、いかねえよなあ……！」

目を覚ました桐生戦兎が、キャスターに支えられながら立ち上がった。左手に刻まれ

た令呪が、燃え立つように光り輝いている。

キバの仮面の下で、ネロはほんの一瞬、頬を緩めた。そして、すぐに気を引き締め直し、眦を決して眼前のダークキバを睨め付ける。

「僕に、魔力をッ！」

「ああ、わかっている。ここが令呪の使いどきだっていうんだろ……！」

たったの一言で、ネロと戦兎は意思を伝わせた。ネロがなにを求め、叫んだのかを、マスターである戦兎は汲み取ってくれたのだ。その願いの強さに呼応するように、戦兎の左手に宿った輝きは光度を増す。

「令呪を以て命じる……アルターエゴ、ネロ・クラウディウス！」

名を呼ばれたネロは、膨れ続ける真紅の魔力に真っ向から向かい合ったまま、次の言葉を待つ。

煌々と輝く令呪を眼前に構え、拳を握り込んだ戦兎は、今もつともネロが求める願いを、高らかに叫んだ。

「——あのセイバーを、倒せッ！」

キバエンペラーは、力強く、決然と頷いた。

瞬間、戦兎の左腕に刻まれた令呪の一面が、燃えるように剥がれ落ちていった。それと引き換えに、膨大な魔力がネロの根幹へと流れ込んでくる。

全身に、力が漲ってゆく。宿敵キングを倒すために必要な魔力が、令呪を通してネロの体を満たしてゆく。

「宝具の発動なぞさせるものか。貴様はここで絶滅せよ……！」

既に魔力の充填を完了し、魔皇力の嵐の中心で、魔皇剣を高く振り上げたダークキバに対し、キバエンペラーはザンバットソードの切っ先を勢いよく地面へと突き刺した。真紅の魔力が一気に膨れ上がり、キバエンペラーを中心に半球を形成する。

半球は瞬く間に巨大化し、セイバーを、後方で待つキャスターらを、戦いの場である柳洞寺をも呑み込んだ。

英霊ネロ・クラウディウスは、謳うように叫ぶ。

「我が才を見よ！ 万雷の喝采を聞け！」

周囲のすべてがなにもない虚無の暗闇へと落ちる中、激戦の余波で捲れ上がった石畳が、周囲を取り巻く無数の木々が、後方に座する巨大な柳洞寺の本殿が、この世に存在するあらゆる物質が、零と一のみで構成された電子のグリッド線へと姿を変えた。

「インペリウムの誉れをここに！ 咲き誇る華の如く……！」

ネロを中心に、この電脳世界におけるフィールドデータが急速に書き換えられてゆく。薄緑のグリッド線となった世界の上に、強制的に黄金の曲線が投影され、上書きして

ゆく。新たに描かれた曲線は実体を持ち、最前まで形成されていた景色は完全に消失した。

「開けッ、黄金の劇場よ！」

ネロの叫びとともに、周囲のフィールドデータの書き換えが完了した。

もはや、夜空に浮かぶ満月も、連戦による激戦区と化していた柳洞寺も、どこにも存在しない。

真紅の床材に彩られた、黄金の劇場。吹き荒ぶ薔薇の花吹雪の中、その広大なホールを中心に、ふたりのキバは立っていた。

「なッ……馬鹿な!? これは……この場所はッ！」

キバエンペラーの後方に位置する、燭台の明かりに照らされた真紅の玉座を見たとき、セイバーはついに狼狽の声を上げた。

決してセイバーが知るはずのない招き蕩う黄金劇場。アエストゥス・ドムス・アウレアしかし、この玉座を、かのセイ

バーが知らないわけがない。

玉座に、真紅の薔薇の花弁がうず高く降り積もってゆく。劇場の中心に再現されたのは、黄金の皇帝に体を貸し与えた紅渡にとつても見慣れた景色。

ここは、ネロによって展開された黄金劇場。皇帝のためだけに存在する絶対皇帝圏で

ありながら、キヤッスルドラン王の居城でもあるのだ。

「この場所に再現されたのは、僕らもよく知るキャツスルドランの心象風景。それが何を意味するか、これからお前は身をもって知ることになる」

「それがなんだというのだ！ 貴様の宝具で再現されたキャツスルドランなど、我が魔皇剣の一撃で——ッ」

言いかけたセイバーは、そこで言葉を詰まらせた。

魔皇剣に集約した真紅の魔皇力が、霧散してゆく。ひとたび放てばあらゆるものを灰燼に帰す圧倒的な魔力の奔流が、まるで最初から存在しなかったように消失し、振り上げたザンバットソードは元の無色の刃へと戻ってゆくのだ。

輝きを失った魔皇剣を見上げ、ダークキバはその切っ先を降ろし、凝視する。

「何故だッ、何故……我が魔皇剣から、輝きが失われてゆく……!?」

「当然だ。この場所は長年に渡ってザンバットを封印し続けてきた王の居城！ この空間にいる限り、お前はザンバットの力を振るうことはできないッ！」

魔皇剣を突き付け、キバエンペラーはそう高らかに宣言する。

「この場所にザンバットを封じたのは、キング……お前自身だ」

「な……ッ」

キングはかつて、自らへの戒めとして、このキャツスルドランにザンバットソードを封印した。この空間は、キングによって刻まれたキャツスルドランの歴史を、そのまま

宝具へと昇華したものだ。

いかな魔剣であろうとも、それがザンバットソードの性質を持つ限り、この黄金劇場の中では無力化される。

そして、この絶対皇帝圏内にいる限り、黄金皇帝たるネロに敵対するあらゆる存在はステータスの弱体化を余儀なくされる。それこそが、皇帝ネロの発動した宝具の真髄！

「ぬう……、ザンバットが……ッ」

ダークキバが手にした魔皇剣が、ずん、と沈み込むように地に落ちた。セイバーの意思とは関係なく、その切っ先は地面を割って深くめり込み、そのままセイバーの膂力ではびくともしなくなつた。黄金劇場の効果によるザンバットの封印と、その絶対皇帝圏がもたらす効果によるセイバーへの弱体化が、相乗効果を及ぼしているのだ。

霊脈を奪われ、魔皇剣を封じられ、その能力すらも大幅な制限を受けたダークキバは、もはや常勝無敗の絶対王者などではない。

「お、のれエ……っ、おのれおのれおのれエエエエッ!! 許さんぞ、黄金のキバッ! 許さんぞ、紅渡ウウウッ!!」

もはや輝きを失つたザンバットをその場に捨て置き、ダークキバは咆哮した。

片手を翳し、そこから膨大な魔皇力の波動を放つ。キバエンペラーはザンバットバットで刀身を研磨し、赤く煌めく魔皇剣を一閃した。魔皇力の衝撃波が、ダークキバの

放った波動と相殺し、爆発した。

「なツ……何故だ!? 何故、貴様のザンバットだけが」

「ザンバットバットは、暴走したザンバットの力を制御するため、この王城で生まれた新たな命。この絆の力ある限り、我が魔皇剣が王城の封印を受けることはないッ!」

音也との約束を守るため、渡に力を貸す三人の家臣が、己の思念とライフエナジーを注いで生み出した絆の結晶、それがザンバットバットだ。

キヤツスルドランがザンバットソードを封じる結果とするなら、ザンバットバットはその封印効果を無力化する礼装と言い換えられる。

無敗にして無敵のキングは、その生涯果てるときまで、ついで誰にも理解されることはなく、孤高の王者で在り続けた。他者の力を必要とせず、己の絶対的な力ただひとつを拠り所としてきた男は、自身が要らないものと断じて切り捨て続けてきたものによって、今、討たれるのだ。

「これで最後だ、キング!」

ザンバットバットの顔面を覆うように装着されていたウェイクアップフェッスルを取り外したキバエンペラーは、それをベルトに収まったキバットの口元へとセットする。

「キメるぜ渡ウ! ウェイク、アープ!」

広漠としたふたりきりの劇場に、キバットの叫びと笛の音色が反響する。ザンバットバットで研いだ魔皇剣の刀身が、今までとは一線を画する眩い真紅の輝きを宿し、溢れ出た魔力の波濤がオーラとなって周囲の闇を赤く彩った。

「貴様だけは、貴様だけはアアツ！ キング自ら絶滅させねば気が済まんツ！！」

四方から天の鎖が殺到するが、駆け出したキバエンペラーを止めるには至らない。真紅の魔皇力に燃えるザンバットソードを振るい、キバエンペラーは殺到する鎖を片つ端から叩き落とす。真紅のマントを靡かせて、迫り来る攻撃の嵐の中をひた走る。

瞬く間に互いの距離は縮まった。もはや正面からの打ち合いは避けられない。ダークキバは己の拳に赤黒い魔皇力の闇を纏わせ、身構えた。

「オオオオオオツ！！」

「ハアアアツ！！」

鎖の嵐の中を流れるように駆け抜けたキバエンペラーは、ダークキバの拳を身を屈めて回避すると、すれ違いざまに魔皇剣を振り抜いた。

必殺のファイナルザンバット斬は、ダークキバの胸部に直撃し、そのまま脇腹にかけてを一気に斬り裂く。生命喰らう魔皇石の刃は、闇のキバの鎧に食い込み、セイバーの霊基へと確かに食らい付いた。

「フンツ！！」

ダークキバの後方へと走り抜けたキバエンペラーは、ザンバットソードを中段に構え、その刀身をもう一度研いだ。ザンバットバットが元の位置に収まると同時に、魔皇剣が纏った真紅の輝きは霧散する。それを合図とするように、ダークキバの体から、燃えるような炎のオーラがキバの紋章をかたどって浮かび上がった。

一瞬ののち、ダークキバは膝からがくりと崩れ落ちた。

深山町、遠坂邸の地下工房で、遠坂時臣はデスクに腰掛けたまま頭を抱えていた。

「馬鹿な……、英雄王^{セイバー}が、あのような外様の魔術師にしてやられるなど……」

当初、時臣の掌に赤々と刻まれていた三画の令呪は、今やその三分の二が掠れて消え、残り一画となっていた。セイバーの敗北を悟った時臣は、あのアルターエゴなるサーヴァントにトドメを刺される前に、セイバーを撤退させたのだ。

だけれども、最後に残った令呪を消耗することは、絶対に許されない。最後の二画は、時臣が聖杯戦争に勝ち残る最後のひとりとなったとき、己がサーヴァントを自害させるために残しておく必要があるからだ。

この場で悪罵を吐き捨て、机を殴り付けたいという本能的な衝動に駆られるが、それは余裕とも優雅さとも程遠い暴挙だ。遠坂の当主としてあるまじき言動である。時臣は深く息を吸い込み、もう何度目になるかもわからない嘆息を落とした。

『アルターエゴの宝具評価は、セイバーと比べれば大きく見劣りするもの。しかし、今回に限っては相性が悪すぎましたね』

淡々とした戦況分析が、宝石通信機の向こうから聞こえてくる。

アサシンの目を通して、常に戦況を知らせてくれていた言峰綺礼の声だ。アサシンはその戦力の大半を失い、セイバーに至ってはまさかの完全敗北を喫するという、およそ想定しうる最悪の戦況結果を前にしても、綺礼の声には一切の乱れなく、時臣のような焦燥を抱いているようにも聞こえない。

「そう、だな……今回は、我々の、完全敗北だ」

認めなければならぬ。今回の戦闘において、時臣の陣営は予期せぬ大打撃を受けたことを。

ここでアサシンを使い潰してでもキャスター、ランサー両陣営を柳洞寺に縫い止め、セイバーで一気に殲滅するという戦略そのものは、間違いではなかったはずだ。だが、まさか罫を仕掛けたつもりが、逆に諸葛孔明の策に嵌められていたなどと、つい数時間前までは考えもしなかった。否、或いは、絶対的なアドバンテージたる霊脈を奪い取られるというありえない状況からくる焦りが、時臣の判断力を鈍らせたのかもしれない。

時臣は、劉備玄德に対し、圧倒的な戦力差で一気呵成に攻め込んだはずの曹操が、孔

明の罠に嵌められままと撃退された逸話を思い出さざるを得なかった。よもや今という時代で、自分が曹操と同じ轍を踏む羽目になるだなどと誰が予想したものか。時臣はここへきて己の慢心を強く悔やんだ。

「なんにせよ、ここからは戦い方を改める必要がある。あのアルターエゴがいる限り、セイバーを不用意に出陣させるわけにもいかなかった。すまないが綺礼……ここからは、代行者としての君の力を頼りにさせて貰うことになるだろう」

『ええ、もとより私はそのつもりです』

淡々と、感情の変化を感じさせない声音で通信機の向こうの綺礼は返答をする。

考えようによつては、まだ状況は万事が絶望的というわけではない。こちらはこの一戦で、ランサーの真名とその能力を把握することができた。キャスターのマスターも、見慣れないライダーシステムを用いてはいるものの、魔術師としては外様も甚だしいことは確定している。

セイバーの勝手な行動のために、今回は結果的にライダーをも敵に回す事態になつてはしまつたが、あのライダーの活躍で、アサシンが全滅は免れたことも事実だ。時臣自身には、万丈龍我をすぐに敵に回す意図はない。そう考えれば、時臣の手元には、まだ手札が残っているといえないこともない。

引き続きライダーを籠絡することに注力して味方に引き込むか、或いは今回の戦闘に

おいて静観を決め込んでいたアインツベルンとの同盟を組むか。かつて冬木ハイアットにてケイネスをその宝具の一撃で葬ろうとしたアーチャーの手腕は、味方につけられれば頼もしい。アーチャーが選ぶ手段の是非はともかくとして、時臣にはもう、なりふりをかまっていられる余裕はない。

今後の戦略について、想定しうるパターンを瞬時にいくつか思い浮かべるが、なにを考えたところで、暗澹とした気持ちは晴れず、時臣は肺にわだかまった空気を大きく吐き出した。

そもその話、あのアルターエゴさえいなければ、と思わずにはいられない。

「まったく、璃正神父がいれば、あのような不正召喚など、断じて許さなかつただろうに……」

『導師。そのことで、私から話さなければならぬことが』

そこではじめて、綺礼の声のトーンが僅かに落ち込んだ。

自陣營の敗北ですら動じなかつた綺礼の変化に気付いた、時臣は僅かに顔を上げる。

ほぼ時を同じくして、魔術師として培った時臣の第六感が、この場に現れた侵入者の到来を察知した。遠坂邸に張り巡らされた結界に対し、何者かがなんの魔術対策もなしに不用心にも踏み込んだのだ。

「すまない、綺礼。どうやら予期せぬ来客のようだ……話はまたの機会に」

時臣は椅子の傍らに立て掛けてあつた樫材のステッキを手に取り、立ち上がった。握りの頭に象られた特大のルビーには、時臣が生涯をかけて錬成してきた炎の魔力が封じ込められている。ケイネスが風と水の二重属性からなる月霊髓液を持つように、時臣もまた炎の礼装を所持している。

セイバーが敗北した機を見計らつたかのような襲撃。この状況で、時臣に仕掛けてくるものがあるとしたら、ひとりくらいしか思い当たらない。

「いいだろう。そちらから仕掛けてくるとあらば、是非もない」

あの日先送りにした誅罰を、今ここで下して終わらせてやることは、時臣にとって慈悲でもある。

まだ見ぬ敵の顔を思い浮かべ、その瞳を獲物を見定めた猛禽のように爛々と輝かせながら、時臣は戦場へと続く階段をゆっくりと登つてゆく。

「勝つた、のか……俺たち、あのセイバーに」

煌めく霊子の粒子だけを残して、光とともに消えていったセイバーがいた場所を眺めながら、桐生戦兎はおずおずと呟いた。

既に戦場は元の柳洞寺へと戻っている。光り輝く劇場も、降りしきる薔薇の花弁も、そのすべてが幻のように消え去って、戦闘の余波で捲れ上がった石畳の中心に佇んでい

たキバエンペラーは緩慢な動作で振り返った。

ベルトから蝙蝠が、左腕から子竜が離脱し、少女のような顔立ちの青年が顔を見せる。ネロと名乗った青年は、戦兔の顔を認めると、緩く相好を崩して微笑んだ。

「僕の名前はネロ。皇帝ネロ・クラウディウスを名乗っています」

「皇帝ネロって……ローマの？ どう見ても日本人だが。あ、桐生戦兔」

頭に思い浮かんだ疑問を真つ先に口にしながら、戦兔は掌を軽く掲げると、取つてつけたように名前を名乗った。

ネロはこくりと小さく首肯すると、ゆつたりとした歩調で戦兔へと歩み寄る。傍らを追従するようにぱたぱたと飛んでいた黄金の蝙蝠が口を開いた。

「おう、厳密に言うところには『紅渡』って立派な本名がある。けど、今は渡に力を貸してくれた英霊の名前を名乗ってるんだ」

「うわツ、なんだ!? 蝙蝠が喋ってる! どういうガジェットだ!」

身を大きく乗り出してキバツトを掴もうとした戦兔の腕をすり抜けて、キバツトは器用に目元をしかめて見せた。

「うおっ……なんだあ、人がせつかく説明してるつてのに失礼なやつだな! だいたい蝙蝠とはなんだ、俺様にはキバツトバツトⅢ世って立派な名前がだな——」

「私はタツロットと申しませす! 渡さんが戦うなら、時空を越えて、いつでもどこでも

駆けつけまアすよ〜！」

「なんだ、ガジエツトじゃねえのか……」

憤慨するキバットを遮るように、タツロツトと名乗った子竜が戦兔の眼前でふわふわと上下に揺れる。非常に機嫌がよさそうに小躍りしているのは結構だが、ガジエツトではない時点でさほどの興味もないので、視線の先でふらつかれるのはそれなりに邪魔だった。

タツロツトを片手で軽く払いのけながら、戦兔はネロへと向き直る。

「つてことは、あんたも疑似サーヴァントか」

「そうとも言えますが、違うとも言えます」

「なんだよ、はつきりしねえな」

「僕は複数の英霊や神霊が複合された存在……ハイ・サーヴァント、と呼ばれるものです」

「ハイ・サーヴァント……？　そういうのもあるのか」

眉根をしかめて頷く戦兔に代わって、今度はネロを喚び出した張本人であるキャスターが前へ出た。

「確かに、私は自らの宝具を用いて、あのセイバーを倒し得るものに、英霊としての霊基を与えるつもりでいた。しかし、それが皇帝ネロになったのはまったくの想定外だ。な

「ぜ君が喚ばれたのか、私には説明がつかない」

いまキャスターが語った宝具については、戦兎も既に熟知している。

キャスターが誇る第二宝具、出師表すいしのひょうとは、特定の人物に、勝利のために必要な霊基を与えてサーヴァント化させる能力分配型の宝具だ。今回の場合は、仮面ライダーキバに、キャスターの知るとある英霊の霊基を複合させることを目論んでの作戦だった。

「失礼を承知で言うが……私が霊基の分配を狙ったサーヴァントは、皇帝ネロではない。別の英霊のはずだが」

「ええ、それも知っています。ですが、あなたが喚ぼうとした英霊は今、座にはいません。ですから、皇帝ネロが名乗りをあげたのです。彼女の言葉を借りるなら……『電脳世界における戦ならば、余を置いて右に出る者はおるまい』と」

「なっ……」

キャスターの表情が固まる。

戦兎にしてみれば、皇帝ネロを彼女と表現したことが気がかりだったが、キャスターの言葉を信じるならば、そういうこともままあるのだろう。話の腰を折るのも不粋なので、戦兎は余計なことは口にしないことにした。

「勿論、それだけが理由ではありません。今回の戦いに、かの皇帝が選ばれたことには理由があります」

「ふむ。その、理由とは」

問われたネロは、戦兔の隣をゆったりとした歩調で通り過ぎると、未だ倒れたままの万丈の傍で立ち止まり、振り返った。

「彼女には、かつてとある世界で外宇宙からの侵略者と相対し、これを撃退した……という実績があります」

「外宇宙からの……侵略者」

「僕には、星の天敵と戦うための力が備えられている」

この瞬間、戦兔をはじめ、キャスターとランサー、この場にいる全員が、おそらく同じ人物の顔を思い浮かべた。はっとして周囲を見渡すが、既にブラッドスタークの姿はない。

面倒なことになる前に、どさくさに紛れて姿を消したのだろう。音もなく忍び寄り、気付かぬうちに去っていく蛇のように。

「いや、ちよつと待て」

万丈のすぐ側、ネロの足元の近くの薄暗い闇の中に、なにかが落ちていることに気付いた戦兔は、それに駆け寄り、拾い上げた。

紫色をした、小型の電子パッドだった。これを最前までスタークが左腕に装着していたのは、まだ記憶に新しい。

なにも映し出されてはいない液晶画面を眇める。ボタンを押すと、画面の中になんらかのデータ情報が表示された。

「これは……」

「はて、かの者が落としていったのでしょうか？」

「いや……スタークがそんなミスをするとは思えない。意図的に残していったんだ」

きよとんと小首を傾げるランサーの言葉を、確信をもって否定する。

スタークはこのバグヴァイザーからバグスターウイルスを精製し、果てはビルドの攻撃をも打ち消してみせた。なんの意図もなく、これみよがしの自分の持てる能力^{システム}を衆目に晒し、その上、それを放置して撤退するなど、なんらかの企みがなければありえないことだ。

いったい何故、どうして。なんの目的があつて敵に塩を送るようなことをするのか。スタークの企みについて思考を巡らす中、長らく沈黙していたバーサーカーが、ふいに口を開いた。

「もし。よろしいでしょうか、キャスターのマスター」

「バーサーカー……いや、清姫、だったか」

名を呼ばれたバーサーカーは、にこりと微笑みを浮かべると、傍らで倒れたままの万丈に視線を落とした。

「ライダーのこと、あとはあなた様にお任せしても？」

「ああ、その馬鹿は頼まれなくてもこつちで面倒見るつもりだが……そつちはそれで構わないか」

「ええ、あなた様がそう仰つてくださるなら、わたくしも安心いたします」

「そうか……清姫、お前には色々と感謝してる。ありがとな」

戦兔をあの窮地から救つてくれたのが、他でもないバーサーカーであることを思い出し、戦兔は謝礼を口にした。

おそらく、この世界に飛ばされた万丈の面倒を見てくれたのも、彼女なのだろう。柄ではないと自覚しつつも、万丈が世話をかけた相手に礼を言うのは、仕方のないことだと思えた。

「ふふ。お礼だなんて、そんな」

一瞬目を丸めたバーサーカーだったが、すぐに柔らかな頬を緩めた。穏やかな微笑みのまま踵を返し、バーサーカーは一同に背を向ける。それから、口元を扇子で隠したまま、首だけを回して、バーサーカーは一瞥を寄越した。

「それでは、わたくしは急ぎゆかねばならぬ場所がございますので……これにて」

「待て、バーサーカー」

キヤスターが、清姫を呼び止める。

「君のマスターに伝えて欲しい。遠坂時臣を打倒し、間桐桜を救うことを目的とするならば……我々も協力を惜しむつもりはない、と」

「あら、これは意外な……それでいてありがたいお申し出。かしこまりました、あなた様の言葉は、しかとますたあに伝えさせていただきます」

にこりと柔らかく微笑んだバーサーカーの体が、足元から溶けるように消えてゆく。

「それでは、キャスター。願わくば、またお会いするそのときも、味方であらんことを」
言い終えるころには、バーサーカーの姿は完全に視界から消えていた。サーヴァントによる霊体化だ。

戦兎は溜息を落としながら、万丈へと視線を落とした。バーサーカーのこと、遠坂との同盟のこと、そして何者かに授かったという英霊の力のこと。聞き出さなければならぬことは山ほどある。

ひとまず、戦兎は万丈の額を掌ではたいた。一瞬表情を歪めるが、意識を起こす気配はない。今度は頬を左右から二度はたく。そこでようやく万丈は目を覚ました。

「ふがっ……なんだ、どういう状況だ!？」

身を起こした万丈は、左右をきよろきよろと見渡して、両腕で拳を構えた。セイバーの宝具の直撃を受けたにしては、存外に元氣そうに見える。クローズマグマがいつたいなぜあの規模の攻撃を受けて耐えられたのか、興味は尽きないが、今はひとまず万丈を

連れ帰ることが先決だ。

戦兎はしやがみ込んで、視線の高さを万丈に合わせた。

「お前が寝てる間に全部終わったっつーの。ほら、帰るぞ万丈」

「はっ!? えっ、なに、終わったア!? セイバーは?」

「もう倒した」

「はあアアッ!? いつの間に!」

大口を開けて驚愕する万丈の間抜けな顔が見てられず、戦兎は首を回して後方へ振り返る。セイバーを倒した張本人であるネロは、真顔ではいられず、くすりと笑みを零した。それがおかしくて、戦兎もまた笑った。

小さな羽をばたばたと羽ばたかせてやってきたキバットが、ネロの顔の隣で滞空する。

「どうやらいいチームのようだな、渡。お前を召喚したマスターがどんなやつなのかと俺ア冷や冷やしてたが、一先ず信じてもよきそうだな!」

「うん。そうだね、キバット」

ネロは、無邪気な子供のように穏やかな微笑みで答えた。戦兎たちに見せる笑顔とは、性質が違う。ネロとキバットのたった一言のやりとりに、戦兎は不思議と安堵させられた。

「あつははははは、此度の戦は我らの大勝利に終わったということで、これにて一件落着
！ ですね！」

呵々大笑するランサーを尻目に、戦兔は万丈に手を差し伸べる。

はじめ、わけがわからず当惑していた様子の万丈だったが、すぐにいつもの不敵な面
構えに戻ると、戦兔の手をがっしりと力強く掴んで、起き上がった。ふらつく万丈の肩
へ、戦兔が腕を回す。

ランサーとネロが見守る中、二人三脚でもするように、ふたりはゆつくりと歩き出し
た。

「——お前は、まアた先を越されちまったなあ、戦兔オ」

柳洞寺本殿の瓦屋根の上に片膝立てて腰掛けながら、スタークは月夜を見上げ独りご
ちる。

ライダーの霊基を得た万丈は、既にクローズマグマにまで変身できる。ダークキバを
倒すほどの仮面ライダーまで現れたというのに、戦兔は未だにハザード止まりだ。ラ
ビットラビットはおろか、スパークリングにすら変身できない。かつての戦いでも、戦
兔は万丈の進化についていけず、置き去りにされた期間があったことを思い出す。

のんきに万丈と肩を組んで石の階段を降りてゆく戦兔の背中を眺めながら、スターク

は嘆息した。

「だが、お前はこんなところじゃ終わらない。なにせ、人間ってのは、進化する。進化し続ける生き物だ。その果てに待つものが破滅だとも知らずにな」

人間とは、常に自己の限界に挑み、進化を続ける生き物であることを、スタークは知っている。だからこそ、ヒトは愛おしいのだ。

ライフルモードへと変形させたトランスチームガンのバレルを左腕の装甲に乗せて、その銃口を戦兎の背中へと合わせる。引き金に指をかけると、ばん、と子供の遊びのよな銃撃音を口先だけで表現しながら、スタークは笑った。

「そのバグヴァイザーはお前にくれてやるよオ、戦兎。そのデータを活かすも殺すも、お前次第だ」

よっ、と声を発しながら立ち上がったスタークは、月明かりの下で背筋を伸ばし、ぐつと力強く伸びをした。

これからは少し、立ち回りを考える必要がある。今までのように、聖堂教会の権威を笠に着て、堂々と動くことはもうできない。否、今にして思えば、スタークの現状も、檀黎斗の想定範囲内だったのかもしれない。

よくよく考えれば、以前この円蔵山で檀黎斗と話した時点で、あの男はスタークの心に野心があることを見抜いていた。だというのに、こんなにも容易く言峰璃正を追い落

とせてしまったこと自体が不自然だ。その証拠に、聖杯戦争の監督役が死んだというのに、ゲームマスターの檀黎斗は未だに姿すら表そうとしない。

なにかある、と考えておいた方がいいだろう。

「まあいい。ともあれ、これで聖杯戦争は大きく動く。誰が最初に聖杯を獲るのか、こつから先は競争だ……悔いのないように、頑張ろうぜ！」

最後に一言、チャオ、と付け足すと、スタークの額の煙突から黒煙がもうもうと吹き出した。闇に溶けるように拡散した煙幕は、スタークの全身を覆い隠す。どす黒い煙幕の中で、スタークのエメラルドグリーンのバイザーだけが妖しく煌めいていたが、その輝きも次第に薄れ、消えていった。

煙幕が晴れたとき、そこにはもう誰もいない。

吹き飛んだ瓦、捲れ上がった石畳、折れひしゃげた木々の群れ。刻み込まれた惨憺たる乱戦の爪痕だけを、淡い月明かりがぼんやりと照らしていた。

第23話 「レイドバトル開幕」

ぶおう——ん、と。ボイラーが震えるような、密集した蠅が踊り狂うような、生理的な嫌悪感を引き起こす耳障りな音が絶えず時臣の耳朶を打つ。庭園の景観を損なうには十分すぎる異形の蟲の群れが、薄い翅を絶えず微振動させて、空を塗り潰すように密集して滞空している。見るに堪えないその有り様に頭が痛くなる思いを堪えながら、時臣は蟲を操る浮浪者然とした男を睥睨した。

「このような夜分に何用かな、間桐雁夜。今更君と話すことなどなにもないと心得るが」
雁夜は、顔に垂れていたフードを払った。

白く濁った目を剥いて、既におよそ半分が壊死した顔を、殊更醜く歪ませる。

「何故だ、時臣。何故お前は今更になって、桜に会おうだなんて思った……」

「そんなことを問うために、君はひとりでここへ乗り込んできたのか」

「いいから答えろオ！」

時臣は目線を伏せ、鼻からゆっくりと吸いあげた息を、勢いよく吐き出し緩くかぶりを振った。

「私は桜の父親だ。娘が正しく魔導を収められているか、その修練の度合を確かめるこ

とに、いったいなんの問題があるというのかね」

「貴様は、この期に及んでまだ父親を気取つてあの子を苦しめる気か!? 今のあの子に叶わない希望を見せることが、どれだけ残酷なことかなど知ろうともせず……ッ!」
「なにを言い出すのかと思えば……そんなことを君に言われる筋合いはないな。魔術を貶めた、裏切り者の君に」

「……時臣イイイッ!!」

安い挑発ひとつで、雁夜は裂帛の絶叫とともに全身から血を噴き上げ、大量の蟲たちを一齐に励起させた。強靱な顎を持つ甲虫の群れが、時臣に狙いを定め、隊列を成して襲い来る。

ステツキを軽く掲げ、柄頭に嵌め込まれたルビーに魔力を込める。短い詠唱に次いで、燃える炎の防御陣が時臣の前面に展開された。雁夜の放った蟲の群れは、突然止まることもできず、時臣の炎の陣の中へ飛び込み、焼け落ちてゆく。

それでも雁夜は蟲による突撃をやめようとはしない。血反吐を吐き、全身の血管を破裂させながら、蟲の群れを間断なく時臣の炎の中へと送り込む。それしか能がないのだと判断するにつれて、その体たらくに溜息が漏れる思いだった。あまりにも、見るに不快が過ぎる。

「あの子、は……っ、遠坂、には……戻らない、と……言った……!」

「なに?」

「き、さまにイ……、分かるのか……ッ! あれ、ほどの……地獄の、中でエ……! 心にもない言葉を、言わなきやならない……桜の、苦痛がアアッ!」

雁夜がこの状況でなぜそれほどまでに桜を気にかけるのかが、時臣には理解ができなかった。

当初の時臣の予想では、第四次聖杯戦争において、間桐はその参戦を辞して見送るものとはばかり思っていた。それが何故、今更になつて雁夜などという落伍者を無理矢理マスターに仕立て上げて、このような醜態を晒させるのか。

当の雁夜がいったいなにを求めて魔術の世界に舞戻ったのか、そんなことは想像するだけでも不快極まりなく、これまで興味すら抱こうとはしなかった時臣だったが、ここではじめて、心中に些細な好奇心が芽生えた。

「では、問おう。君はいつたい、なにを求めて聖杯戦争にその命を懸けるのか。君はなぜ、そうも桜に固執するのか。君の行動は、万事理解に苦しむことだらけだ」

炎の手は一切緩めることなく、絶えず飛び込む虫の群れを焼き払いながら、時臣はその惨憺な眼差しを細めた。

「私は君の問いに答えた。次は君の番だ。答えて貰うぞ、間桐雁夜」

「そんなことは、決まっている! 桜を……あの地獄から、解放するッ! そのためにッ

……お前を、殺す！　ただ、それだけが俺の目的だッ！」

「話が見えないな。真に桜の事を思うならば、父である私をその手にかかる理由など——」

——家族と離れ離れになっても魔術師になりたいって、一言でもあの子が自分で言っただのか!?

——あんたらは、みんなそうだ……雁夜も、あんたもッ！　凜や桜の気持ちなんかこれっぽっちも考えてねエ……！

「……ッ」

言いかけたところで、時臣の脳裏にライダーの怒号が蘇る。

桜を間桐から救ったとしても、遠坂に帰還すれば、また次の家へと養子へ出される。桜の意思は尊重されず、家族と引き離される。ライダーは、それを不条理だと言った。

魔導を知らぬものは、桜が自分の道を自分で選ぶことのできる未来こそが理想だと、誰しもがそう思うのだろうか。それはこの雁夜とて例外ではないということか。

「そうか、今ようやくわかった。君はそのために……桜のために、私に牙を剥くのか」「お前がいる限り……あの子は、何度でも……ッ、あの地獄へ叩き込まれる……だからッ——」

「ああ、理解したぞ間桐雁夜。君がなにを願ひ、その身をそうも苛むのかを」

雁夜は、再びぎよろりと目を剥いた。怒りの形相ではなく、純粹な驚愕のように時臣には見受けられた。時臣が雁夜に対し僅かでも理解を示したことが意外だったのだろう。他ならぬ時臣自身にしても、いま自分が口にした言葉は、不本意ながらまつたくの慮外のうちに出たものだ。

ライダーの言葉がなければ、雁夜の感情に気付く日ごとなどついぞなかっただろう。間桐雁夜は、欲に目を晦ませ、醜態を晒しながら聖杯を掠め取ろうとする不埒者と決め付けて疑わなかったのだから。

「——だが、だとしても、君が魔導を貶めた事実に変わりはない。桜は私が責任を持って救うが、我が家の事情について、部外者の君に口出しをされる謂れはない」

「責任を持って、救う、だと……？　今更……ッ、そんな都合のいい話があるか!?　お前は結局……責任とか、魔導の誇りとか……そんなくだらない物差しでしか物事を見ていない！」

「それこそ君に言われる筋合いはないな。君が己の責任を放棄し、放蕩していた間も、私は常に親として子の幸福を願ってきた。なんら責任を持つとうとせず、当事者であろうとすらしなかつた君が語る言葉など、現実から目を背けた綺麗事でしかない」

火の手が強まる。蟲の羽音が増す。

雁夜は、血反吐を吐き散らしながら、それでも嗤った。

「は、はは……はははははっ」

「どうした。凶星を突かれて壊れたか、間桐雁夜」

「いいや……貴様がそういうやつでよかったと……っ、心から思ったのは……これが、初めてだ！」

時臣は無言のまま、眉根を寄せる。炎の魔力を注ぎながら、次の言葉を待った。

「貴様は結局……責任だなんだと体のいい言葉で武装して……凜を、桜を……ッ、葵さんを裏切った！俺は、そんな貴様が赦せない……！彼女たちの幸福を……理解しようともしない貴様がッ！」

「なるほど。それが私の問いに対し、君が示した答えか」

口の端から、無意識に笑みが溢れる。

感情の大部分を嘲りの色が占めてはいるものの、同時に奇妙な心地よさをも覚えた。眼前の男が、そういう浅はかな人間でよかったという安堵。そして、やはりここでこの男を葬るべきだという義憤。

時臣は眦を決し、ルビーの嵌められたステッキをふたたび掲げた。

「自分の都合を優先し、困難から逃げ続けてきた裏切り者の君が、今更になつて当事者の決断を責め苛む……その卑劣極まる生き様が、私にはどうにも赦せそうもない。ゆえに、今日まで誰も下さなかつた誅罰を、私が下そう。間桐の恥は、私が洗い流す」

時臣と雁夜が今更わかり合うには、あまりにも価値観が乖離しすぎている。それでも、己のうちにある不快感をここまで丁寧な言葉にしたのは、時臣にしてみれば一種の慈悲でもあつた。

ただの害虫として処分するのではなく、ひとりの敵として認め、処断するという決意とともに、時臣は己の魔術回路を励起させ、ステッキへと魔力を回す。

「とおおきおみイイイイイッ!!」

雁夜の顔を伝う血管がのたうち暴れ回る。避けた血管から血飛沫を噴き出しながら、雁夜は裂帛の絶叫をあげた。黒鉄の甲虫の群れが奏でる大顎と翅の軋みが、雁夜の叫びを掻き消すほどの大音響を奏で、押し寄せる。

時臣が敷いた防御陣の規模を上回る数の蟲たちが一斉に飛び上がり、視界を埋める弾幕となつて飛来する。

「Intensive Eina scherung——」
我が敵の火弾は苛烈なるべし

ほんの二節程度の詠唱。時臣の意思に応えた炎が、蛇のようにうねる。時臣の火炎は、飛来した蟲の弾幕の尽くを償却し、雁夜へとその火の手を伸ばした。

雁夜は、防御姿勢すらまともに取りうとはしなかつた。防御を取る余裕すらないのか、その発想そのものがないのか知る由もないが、別段知ろうとも思わなかつた。馬鹿のひとつ覚えとばかりに蟲を飛ばし続ける雁夜へ、灼熱の火炎が迫る。

雁夜の前に、虚空の闇からひとりの英霊が姿を現した。白い和服を纏った少女が、薄緑の長髪を風に靡かせる。

「それが、ますたあが導き出した答えなのですね」

「バー、サーカー……お前、なんで……ッ」

バーサーカーは、くすりと微かに微笑み、雁夜へと振り返った。

「……本当に、どうしようもないお方。ですが、こうして喚ばれた以上、この清姫にも意地というものがございます。このようなところで、ますたあを死なせるわけにはまいりません」

時臣へと向き直ったバーサーカーは、手にした扇子を力強く仰いだ。巻き起こされた魔力を帯びた風が、時臣の炎の魔術をたちまちくゆらせ、制御を困難とさせる。続けて、ふう、と息を吹き込む。バーサーカーの吐息は灼熱の竜の息吹と化して、時臣の炎すらも呑み込み、地面を舐めるように時臣へと迫った。

サーヴァントが起こした高圧力の魔力の火炎に対抗するためには、今しがた唱えた二節以上の魔術を励起させる必要がある。対処のため、己の身に刻んだ魔術刻印を総動員するべく魔力を回した、ちょうどそのときだった。

「——ヴウウアアアハハハハハアッ！」

迫りくる炎の魔の手から時臣を庇うように、居丈高な哄笑とともに、白と黒の装甲を

身に纏った仮面ライダーがどこからともなく現れた。

瘴気を纏ったゾンビのライダーは、糸に吊られたマリオネットのようにふらりと構えを取る。手にした剣をぶんと力強く横薙ぎに振り払った。バーサーカーの火炎が吹き払われ、あとには熱風だけが残り、時臣の髪を撫でる。

「ルー、ラー……、どうしてここへ」

「貴様らには、即刻戦闘を中止して貰うウ……！」

「なに？」

背筋をこれでもかと仰け反らせて時臣へと振り返った仮面ライダーゲムは、白と赤のオッドアイを闇夜に輝かせ、その仮面の下で理性を失ったゾンビを彷彿とさせる特大の吐息を零した。

「聖杯戦争はア……一時中断だアアアアッ！」

冬木教会の礼拝堂は、物々しい雰囲気にも包まれていた。

決して広くはない礼拝堂のホールに、人ならざるものが発する濃密な魔力がひしめき合っている。空間を満たすひりついた緊張感さえも、講壇の上に立つ檀黎斗にしてみれば、今という瞬間を愉しむためのスパイスでしかない。

ゲームマスターであり裁定者^{ルラ}でもある檀黎斗から直々に、全サーヴァント、もしくは

マスターの強制召集令が発令されてから僅か一時間。黎斗が知る限りすべての陣営の参加者が、いま、この礼拝堂に集まろうとしていた。

「——見ろ、キャスター。セイバーも来てるぞ」

「ああ、そのようだな。だが案ずる必要はない。ここ冬木教会は聖杯戦争における不可侵領域……ここではさしものセイバーも安易に仕掛けられはしまい」

桐生戦兔とキャスターの声が微かに黎斗の耳に入った。

ふたりは整然と並べられた信徒席には着席せず、礼拝堂の隅で佇立したまま、油断なく周囲に視線を配っている。その先にいるのはセイバーだ。誰とも馴れ合う様子なく、信徒席にひとり深く腰掛けている。

おとなしく座っているように見えるが、セイバーの身から澎湃ほうはいと湧き上がる殺気のオーラは、凄烈の一言に尽きる。迂闊に寄れば殺されるかもしれないと、そう思わせるだけの威圧感がそこにはあった。

当然ながら、アルターエゴも姿を見せてはいない。その立場上、この場所に堂々と姿を現すわけにはいかず、霊体化してそばに控えているのだろうが、黎斗はあえて見逃すつもりでいた。処分ならいつでもできる。

「しっかし妙な気分だな。ついさっきまで敵だったやつと一緒にいるってのは」

「同感ですね。私もさっきからそわそわと落ち着かず、許されるならば、この場でいざひ

と暴れたいという気持ちを抑えていたところだす」

「うおつ、物騒なやつだな!! 流石の俺もそこまで喧嘩っ早くねえっつーの!」

「おや、そうなのですか? てつきり血気盛んな若者とばかり思っていたのですが」

桐生戦兎のすぐそばの信徒席に腰掛けた万丈龍我に、ランサーがくすくすと笑いかける。

一見すると、ふたりはあくまで招待客のいで無遠慮に信徒席に腰掛けているように見えるが、少なくともランサーがそうでないことだけは明白だった。絶えず笑顔を崩しはしないものの、その双眸からは十全たる戦意を発奮させ、周囲のサーヴァントに視線を巡らせている。とりわけ、ふたりからやや離れた位置に腰掛け、静かに瞑目するアーチャーに対する敵意は殊更だった。

ランサーにしてみれば、アインツベルンのアーチャーとは、卑劣な手段で幾度となくケイネスを貶めようとした、その下手人だ。敵意を示すのも当然と思われた。

「あら、これはこれは。随分とお早い再会になりましたね、皆様」

桐生戦兎を中心とした同盟連合に迎合するかたちで、和服の少女が霊体化を解き、姿を現した。マスターである間桐雁夜は姿を見せていない。

その他にも、昆虫や小動物など、各々のマスターが用いる使い魔の類が、窓から、入り口から礼拝堂へと侵入してくるのを確認したところで、黎斗は大きく咳払いをした。

この場にすべての陣営の目と耳が揃ったことを確認したところで、黎斗はここに集った全員を睥睨し、笑みを深める。

「——諸君！ よく私の呼びかけに応え、集つてくれた。聖杯を求めて相争うすべての陣営が、こうして一堂に会することはまたとない機会。それだけに、今回がいかに急を要する事態であるか、みな察していることだろう」

「待て、ルーラー。これで全員というには、些か数が足りていないように見受けられるが？」

眠るように静かに腕を組んでいたアーチャーが、伏せていた顔を僅かに上げ、その鷹のような眼光を講壇の黎斗へと突きつけてきた。

アーチャーが放った言葉の圧を引き継ぐように、キャスターがその眉根に寄せた皺を殊更深く刻むように表情を顰め、発言する。

「此度の聖杯戦争において、群体として己の靈基を分割することのできるアサシンが参戦しており、それがまだ残っていることは、既にこの場の全員が知っている。今更隠し立てをすることに意味があるとは思えないが」

「ふむ。確かに、その申し出には一理ある。この期に及んで、ゲームマスターであるこの私がかくならない反則行為を容認し続ける意義も薄い……では、裁定をくだそう。——言峰綺礼ッ！」

悪びれる様子もなく滔々と答えた黎斗は、軽く片手を掲げると、聖堂教会の同盟者たる男の名前を呼んだ。

数瞬ののち、地下室へと続く階段の奥から、ゆったりとした步調でひとりの男が登ってくる。全員の視線を一身に集めながら、言峰綺礼は、機械のように肅々と歩を進め、無言のまま黎斗の隣に肩を並べた。

「此度の聖杯戦争を総括するゲームマスター、及びルーラーの権限において命ずる。言峰綺礼よ……—この場でアサシンを始末しろ」

極めて冷淡に、それでいて一切の慈悲を感じさせない威圧とともに、裁定はくだされた。信徒席から、驚愕の息遣いが漏れ聞こえる。

「ふ。ルーラーの命令とあつては、是非もない」

僅かな逡巡もなく、欠片の躊躇いもなく、微かな笑みとともに静かに首肯した綺礼は、右手に刻まれた令呪をかざした。

「では、令呪を以て命じよう——自害しろ、アサシン」

宣告は、極めて冷淡に、拍子抜けするほどあっさりと済まされた。

長袖で覆われた掌に見える全三画の令呪に、真紅の輝きが灯る。掌に刻まれていた令呪の二画が、すう、と溶けるように消えてゆく。

サーヴァントが、令呪による強制力に抗うことなどできはしない。礼拝堂への召集令

を拒否した最後の英霊たちは、この場に姿すら見せぬまま、各々の命を断った。柳洞寺での激戦を命からがら逃げ延びた僅かな兵隊たちにしてみれば、それはあまりにも無慈悲な最期だった。

「なっ……そんな、簡単に」

キャスターの瞠目にも、綺礼は素知らぬ顔だった。

微笑みのまま目を見開くランサー、油断なく綺礼を睨めつける戦兔、胡乱げに目を細めるアーチャーと反応は様々だったが、そのいずれにも反応を示さず、綺礼は踵を返した。もう役目は終わったとばかりに、黙々と引き返し、地下室へと戻ってゆく。

黎斗は、綺礼の背中を見送ると、にんまりと頬を歪めて鼻を鳴らした。

「さて。私は正当なるゲームの運行のために権限を行使した。本来ならばサーヴァントの違法召喚を行ったキャスター陣営にも厳罰を与えたいところだが、今は他により優先度の高い問題がある。よって、今回は特別に見逃してやろう。よもや文句などはあるまい、キャスター？」

「……ああ。ルーラーが己の責務を正しく果たした以上、こちらとしてもこれ以上の要求はない」

「よろしい。では、このまま話を続けさせて貰おうか」

たっぷりと皮肉の笑みを浮かべ、顎を逸らせて集まった全員を睥睨する黎斗に、もう

誰も、なにも言おうとはしなかった。全員が、黎斗の言葉を待つている。その事実が、黎斗の笑みをより深めさせた。

「ここはひとまず、礼に適った挨拶は省略し、単刀直入に言わせてもらおう。——今日、聖杯戦争の監督役を務める言峰璃正神父が他界した」

瞬間、空気がざわついた。

「下手人の名は、石動惣一……またの名を、ブラッドスターク！ 彼は、トランスチームシステム”なる、サーヴァントにも匹敵する強化装甲服を身に纏って犯行に及び、依然として逃亡を続けている！」

最前の笑みから一転、怒りと悲しみと、人としての義憤に表情を歪め、舞台役者のように両腕を大きく広げた黎斗は、舞台役者さながらに声を張り上げ、聴衆へと訴える。

「これは聖杯戦争に対する重大な違反行為だ！ 彼の私利私欲にまみれた行動が、諸君らの悲願をかけた神性なる儀式にどれほどの悪影響をもたらすか……それは敢えて説明するまでもないだろう。今、聖杯戦争はッ、重大な危機に見舞われている！」

「おいちよつと待てよ神、スタークはテメエの仲間だったんじゃないのか」

声をあげたのは、万丈龍我だった。信徒席から立ち上がり、無礼にも黎斗を指差している。

黎斗とスタークが同じ陣営でシャドウサーヴァントの討伐を行っていたことは、既に

万丈にも知られている。それは、スタークが勝手に接触を図ったアインツベルンも同様だ。当のアーチャーは相変わらず無言のままだが、しかし確かな猜疑心をむき出しにした視線を黎斗へと寄越している。釈明する必要がある。

「ああ、君の言う通りだ、ライダー。かくいう私も、聖杯戦争を運営するという、同じ志を持つスタークが……まさかこのような暴挙に打って出るなどとは思ってもみななかった。あの男は……私をはじめ、彼を信じたものみんなの心を裏切ったのだ！ 君にはこの愚拳が許せるか!？」

「つつーか、そもそもあんなやつのこと信用する方がおかしいだろ！ なあ、戦兎」

唐突に振られた戦兎は、腕を組んで、肩を壁にもたれさせた姿勢のまま、なにも言ううとはしない。はじめ、釈然としない様子で小首を傾げていた万丈だが、戦兎の呆れとも疑いともつかない胡乱な眼差しを見て、諦めたように席へ座り直した。どうやら、ここで話の腰を折る気はないらしい。

黎斗は声に込める熱量を昂ぶらせ、拳を握り締め、叫んだ。

「そこで、私は断言する！ 石動惣一……いや、スタークの存在は、聖杯の招来そのものを脅かす危険因子にはかならない！ よって私は……非常時における裁定者の権限をここに発動し、聖杯戦争に暫定的なルール変更を設定するッ！」

謳うように宣言すると、黎斗はおもむろに身に纏っていたジャケットを脱ぎ払い、イ

ンナーのシャツをも脱ぎ捨て、それら衣類を大きく振りかぶって、乱暴に足元へと叩き付けた。

聴衆の面前であることを考慮し、努めてまともな人間を装ってはいたが、そろそろ現界が近かった。この衣服と同じように、煩わしいものは脱ぎ捨てたい。そういう原初の欲望が鎌首をもたげた結果だった。

「ブウウンッ！」

程よく鍛え上げられ引き締まった筋肉を晒し、上裸の黎斗は奇声を発し、笑う。

己の背中に刻まれた真紅の文様が全員に見えるように、黎斗はその場でくるりと踵を返すと、背筋を海老反り状に大きく反り返らせ、逆さになった視線で一同を睥睨した。

「ン我が靈基に与えられしクラスは、裁定者ルーラーッ！ 私は自らのクラススキルとして、この聖杯戦争に参加する全サーヴァントに対応した令呪をそれぞれ二画ずつ保有している！」

神明裁決——それこそが、ルーラーのみに与えられた特クラススキル権。

ルーラーである黎斗の宣言を、全員が凝視している。あのセイバーですらも、眉根を寄せてじつと視線を集中させている。それが、黎斗には心地がよかった。こうなるとう、抑えがきかない。黎斗はさらに声を張り上げた。

「そしてエ……裁定者のサーヴァントにはア……！ 私の独断で、この令呪を任意の相

手に委譲する権限が与えられているウツ！それがなにを意味するのか、改めて説明する必要はあるまいツ！ ヴェアーツハハハハハハア、ヴェアーツハハハハハハハハアツ！」

令呪とは、すなわち絶大な魔力を内包した、消費型のフィジカル・エンチャントスキルだ。令呪によるブーストを得たアルターエゴが、圧倒的な戦闘力を誇るセイバーを撃破したという前例もある。その重要さは誰しもが理解できることだろう。

「ふう……ンンツ」

もういちど正面へと向き直った黎斗は、一度大きく深呼吸をしてから軽い咳払いを落として気持ちを落ち着かせると、床に落とした衣服を拾い上げ、もう一度袖を通しはじめた。その間、みな無言である。

ややあつて、衣服の着用が終わると、黎斗は再び爽やかな好青年の仮面を纏って、努めて穏やかな語調で言葉を続けた。

「すべてのマスターは以後の戦闘行動を中断し、各々、スタークの討伐に尽力すること。そして、見事スタークを討ち取ったものには、特例措置として追加の令呪を寄贈する。単独で成し遂げたのであれば達成者にひとつ。他者との共闘で得られた成果であれば、事にあたった全員にひとつずつ。そして、スタークの死亡が確認された時点で……改めて、従来通りの聖杯戦争を再開するものとする」

セイバーを除くすべてのサーヴァントが、互いに顔を見合わせる。誰と組むべきか、どう立ち回るべきか、各々今後のことに考えを巡らせているのだろう。

畳み掛けるように、黎斗は今後においてもっとも重要な伝達事項を伝えるべく口を開いた。

「そして、最後になるが……監督役の死亡による特例措置として、今回の聖杯戦争が終結するまでは、ルーラーであるこの私が監督役の任を引き継ぐこととなった。さて、異存のあるものは……いるかな？」

穏やかな微笑みを浮かべたまま、黎斗は一同の顔をぐるりと睥睨する。

最初に席を立ったのは、セイバーだった。黒い裾と真紅のマントを翻らせて踵を返すと、無言のまま歩き出す。扉に差し掛かるまでの間に、セイバーの体は極小の霊子へと変質し、霧散してゆく。異存がないというよりも、そもそも興味がないという様子だった。

「ふ、答えは出たな。では、私もこれにて失礼させて貰う」

次に立ち上がったアーチャーは、セイバーのように歩き去る様子も見せず、その場で体を霊体化させて消えていった。礼拝堂に集まった小さな使い魔たちもまた、三々五々、冬木の夜空へと飛び去ってゆく。

誰も、黎斗の監督役化に異存を唱えるものはいなかった。

「——ま、そうなるよな。今更監督役が変わったところで、大した違いがあるとは思えない」

「むしろ、アサシンの不正を裁いたという点だけを見れば、以前よりも公正とすら思えてくる……甚だ不本意だがな」

戦兎のぼやきに、キヤスターが続く。その不遜極まりない物言いに対し、目を細めてキヤスターを睨め付ける黎斗だったが、当のキヤスターは黎斗と視線を合わせようとはしてくれなかった。

「ふん、まあいい。私からは以上だ。せいぜい、健闘を祈っておいてやる」

セイバーとアーチャーが去った時点で、残ったのは桐生戦兎に籠絡された同盟連合の一員だけだ。黎斗はもはや体裁を取り繕うこともせず、冷淡に会合の終わりを締め括ると、地下室へと続く階段を下っていった。

間桐雁夜は、深山町の町外れに位置する公園のベンチに背中を預け、脱力し、項垂れた。

最前の時臣との死闘が祟って、雁夜の体は鉛のように重たい。いま不意をついて襲われたとて、即座に魔力を回す余裕もない。控えめに言っても、体調は絶望的なまでに劣悪だといえる。

「で、バーサーカー。これはいったいどういうことだ」

問われたバーサーカーは、にこやかな微笑のまま小首をかしげた。

冬木教会で行われたルーラーの演説は、使い魔として飛ばした蟲の目を通してひとり把握している。だが、その上でなお、バーサーカーが他の陣営の参加者を引き連れて戻ってきたことは、雁夜にとって慮外の出来事であった。

「いえ、桜を救うために戦うというのであれば、このキャスターも力を貸してくださいと仰るので、これは是非ともお力添えをいただきたいと思い、つれてきました」

緊張感を欠片も感じさせない微笑みを浮かべて、バーサーカーをちらりと舌を見せる。嘘を見抜くことができる彼女が、よもやキャスターに騙されるといふことはないのだろうが、それでも雁夜にとって、アーチャーとセイバーを除く全陣営を一度に味方につけるといふ状況は、想定外にも程があった。

「申し遅れた。私はキャスター、真名は諸葛孔明」

「俺は天才物理学者の桐生戦兔。こいつのマスターで、仮面ライダービルド」

黒のスーツをびしりと着こなす長髪のサーヴァントに続いて、要所の説明を大胆に端折ったぞんざいな自己紹介を済ませた戦兔に、雁夜は白く濁りきった死人同然の瞳をぎろりと向ける。

「その天才物理学者が、なんで俺に力を貸す。言っておくが、俺はルーラーが言ったス

タークとかいうやつに興味はないぞ。俺はただ、俺の聖杯戦争を続けるだけだ」

雁夜の体は、事実上の危篤状態にある。それを、体に寄生させた刻印虫から得られる魔力で無理矢理動かしているだけだ。いつ燃え尽きるかもわからないこの命を、スタークなどに費やしている余裕は、今の雁夜にはない。

「あなたはそう言うだろうな……勿論、それも予想の通りだとも。だが、我々とて、あなたの目的は把握しているつもりだ。そして、あなたが間桐桜の救出を悲願として戦う限り、そのことに協力を惜しむ理由もない」

「仮に桜を救い出せたとして、あんたたちはなにも得をしない。聖杯戦争に参加する魔術師が、わざわざそんな徒労に首を突っ込む理由が俺にはわからないと言ってるんだ」
「ほう……これは驚いた。ほかならぬあなたが、それを問うか」

キヤスターは僅かに目線を伏せ、自嘲気味に吐息を零した。

「ならば逆に問おう。あなたはいつたい、なんのために戦う。どうしてそうまでして間桐桜を救いたいと願う。その決断は、あなたにとつてデメリットしかないはずだ」

「なんで、だって……？ そんなことは決まっている。時臣があの子から奪い去った幸福を、取り戻すためだ。そのために、俺は桜を救わなければならないんだ」

「だったら、それはここにいる馬鹿も、俺たちだって同じだ。子供を助けるために戦うのは、人として当然でしょうが。そこに理由なんて必要ある？」

傍らの万丈に一瞥を寄越しながら、戦兎はその大きな瞳を丸めて、頬を緩めた。その言葉に嘘がないことは、バーサーカーの反応から見ても確かなのだろう。

それは、人として、ごく当たり前の論理感。魔術の世界には存在しない、人を想う優しさ。間桐の地獄で、久しく忘れていたものに触れて、雁夜は毒気を抜かれて脱力し、項垂れた。

「……だめだ。ライダーにも言ったが、話はそんなに簡単じゃない。力で解決するならばじめからそうしてる。そうできない理由があるから、俺は聖杯を獲らなきゃならないんだ」

雁夜の動向は、常に刻印虫を通して臓硯に監視されている。その刻印虫が精製する魔力によって、雁夜は危篤状態の自分の体を無理矢理動かしているのだ。もしも臓硯に対し、謀反を企て悟られでもすれば、雁夜の命の灯火はたちまちもみ消されて果てるに違いない。

「だから、あんたたちには悪いが、力を借りるわけにはいかない。俺は、時臣を殺して、聖杯を獲る。この戦いに……近道はないんだ」

「あんた、まだそんなこと言ってる——！」

怒号をあげて身を乗り出した万丈を、キャスターが片手で制する。

「言っただけで、あなたが置かれた状況は把握している、と。当然、その体に宿した刻印

虫のことも。ゆえに、あなたがそう言うほかないことも、理解しているつもりだ」

「はっ、流石は音に聞こえた諸葛亮だな。あんたにかかればなんでもお見通しつてわけか。だったら、俺のことはもう放っておいてくれ……あんたたちにできることは、なにもない」

もう話は終わりとはばかりに立ち上がった雁夜を、バーサーカーが支える。

時臣との戦闘から既にそれなりに時間が経過していることもあって、自力で歩ける程度には回復している。バーサーカーの小さな手を払い、雁夜は一同に背を向け、歩き出した。

「おい、ちよつと待てよ、雁夜」

「なんだ、ライダー」

背中からかけられた声に、雁夜は立ち止まる。少し前の自分なら、きつと立ち止まらなかった。万丈は、雁夜の背中に問いかける。

「遠坂さんと戦うつつつても、肝心の聖杯戦争がこんなじゃ、どうしようもねえだろ」

「ああ、そうかもな」

「じゃああんた、これからいったいどうするつもりなんだよー」

問われ、俯いた雁夜の目が、そばに寄り添うバーサーカーと合う。じつと見上げる少女の目から視線を逸らすように、雁夜は首だけを僅かに回してちらりと振り向く。

「明日、遠坂時臣が桜に会いに来る。もしかしたら、桜は時臣に連れ戻されるかもしれない。だが、俺は……そんな結末は認めない。今更、そんな都合のいい結末が許せるものか」

「じゃあお前、やっぱり……!」

「ああ。俺は、時臣と決着をつける」

それが、雁夜が選んだ答えだった。

たとえほかに選択肢があつたとしても、雁夜には結局、この道を走り抜けることしかできない。清姫が自分の感情を貫いて走り続けたように、雁夜もまた、そうする以外の道を知らないのだから。

黎斗をはじめ、クラスススキル神明裁決を用いて、アサシンに対応した令呪を切る腹積もりでいた。聖杯戦争が中断されるという前代未聞の緊急事態はともかくとして、現時点ではあくまで遠坂時臣の勝利を至上の目的とする言峰綺礼が、ああも容易くアサシンの自害を認めたことは、黎斗にとって無視できる心境の変化ではなかった。

「あそこで君が私の指示に素直に従ったことは、私にしてみれば嬉しい誤算だった。とはいえ……誤算は誤算だ。神である私の計画に、誤算があることなど容認できない」

「そんなことを言われても困るな。ほかならぬルーラーの指示とあらば、拒絶するわけ

にもいくまい。素直に従ったというのに糾弾されるとするのは、私としても納得できるものではないが」

綺礼は淹れたばかりのコーヒーが入ったマグカップを片手に、自室のソファに深く腰掛けた。黎斗はちらりと視線を部屋の外へと送った。今、この教会には間違いない、綺礼と黎斗のふたりしかない。アサシンも脱落したいま、盗み聞きを恐れる必要はなかった。

「なぜ、アサシンを切り捨てた。君は、遠坂時臣のために戦っているんじゃないのか。君はいま、なにを考えている」

「私がなにを考えていたところで、ルーラーが気を揉む必要はあるまい。仮に野心があったとて、サーヴァントすら持たぬ私になにができるというのか」

一口、コーヒーを口に含んだ綺礼は、湯気の立ち昇るマグカップをテーブルに置いた。その手には、未だ令呪の赤い痣が刻まれている。

今回の聖杯戦争には、英雄王ギルガメッシュは参戦していない。綺礼に愉悦を教え込んだ下手人が不在である以上、道を逸れる理由もないとたかをくくっていたが、そうも言ってられない状況になりつつあることを、黎斗は肌感覚で悟っていた。

「貴様、スタークにないを吹き込まれた」

「これは異なることを。なぜ、ここでスタークの名が出る。父を葬った男の戯言など、私が

聞く耳を持つと思うか」

まっすぐに黎斗を見つめ、綺礼は口角を微かに歪ませた。

尊敬する父が死に、聖杯戦争における己の役割すら失った男にしては、あまりにも感情の起伏が乏しい。

「……言っておくぞ言峰綺礼。貴様がもしも少しでも怪しい行動を見せたなら……そのときは、私が貴様を処分する。そのことを肝に銘じておけ」

「疑り深いな、杞憂だと言っているのに。むしろ、私からすれば……ルーラー、お前の行動の方がよほど見えない」

「なんだと」

綺礼は、感情を感じさせない能面のような眼差しで黎斗を見据えた。

「父、言峰璃正はスタークの卑劣な罠に嵌められ、命を落とした。そして、聖堂教会の本拠地たる教会であれだけの暴挙に打って出たスタークは、誰にも補足されずに今も逃げ続けている……果たして、こんなにも万事が思い通りに行くものだろうか」

「貴様、なにが言いたい……言いたいことがあるならばつきり言えエー」

「父上は、かねてから石動惣一を疑っていた。だがそれも元を辿れば、お前が父上に石動惣一の不審な行動を報告したことが発端だと聞いている。お前はそこまで用心していたというのに、事の顛末はこれだ。あまりにも……片手落ちが過ぎるとは思わないか」

綺礼の言っていることは、事実だ。

スタークが裏でアインツベルンと繋がっているという事実を璃正神父に伝えたのは間違いなく黎斗であるし、その結果として、璃正神父がスタークに対し間諜を放つことは予測がついていた。

「ルーラーであるお前は、スタークの暴挙を食い止めようと思えば食い止められた。だが、お前は敢えてそれをしなかったのではないかと……そう言いたいのだよ、私は」
黎斗は肺に蟠った重たい空気を、一気に鼻から吹き出した。

昂ぶっていた気持ちを下ろし着かせ、かつてまだ人間だったころ、世を渡ってきた好青年の仮面を顔に貼り付け、笑顔を浮かべた。

「ふう。なにを言い出すのかと思えば……まったく、実にくだらない言いがかりだな。そんな証拠はどこにもない」

「ああ、証拠はない。だが、お前ははじめから監督役ゲームマスターの立場を得ることが目的で、スタークを泳がせていたのではないかと……、そういう疑いが私の中にあるのもまた事実。なにしろ、これで名実ともにここ冬木で行われる聖杯戦争はお前のものとなったのだからな」

「人聞きの悪い言い方をしないでくれないか。それではまるで、私が聖杯戦争を私物化しようとしている悪人とも言うているように聞こえるぞ」

「ふ……私は、疑い出したらキリがないという話をしているのだよ」

綺礼は小さく失笑すると、再びマグカップに口をつけた。

スタークと綺礼の間に繋がりなどはありえないし、仮にあつたとしてもここで黎斗に語る気はないという思いがありありと現れている。黎斗はこれ以上、証拠もなしにこの場で追求することは不可能だと認め、口を閉ざした。

「ああ、だが一応先程の問いには答えておこう。どのみちアサシンは今日、あの戦いで使い潰される予定だった。それを思えば、むしろ長く生きた方だ。ゆえに私はお前の命令に背こうとも思わなかった……それだけの話だよ」

深山町の住宅街に位置する一戸建ての民家の一室に、スタークは足を踏み入れている。

十帖ほどの居間の中心に、この家の住人が家族で食卓を囲む洋テーブルと、椅子が並べられている。照明すらつけず、スタークはテーブルの上に足を組んで腰掛けたまま、リモコンを操作した。テレビのチャンネルを回してニュース番組へと切り替える。ブラウン管に映し出された映像は、燃え上がる柳洞寺の風景だった。駆けつけた消防隊が、必死に消火作業に勤しんでいる。先刻のセイバーとの戦いは、謎のガス爆発事故として処理されたらしい。

ふいに、廊下の向こうの玄関から、ガチャリと、鍵を開ける音が聞こえてきた。居間で流れるテレビの音に引き寄せられるように、ずだ、ずだ、ずだつとフローリングの床を踏みしめる足音が近付いてくる。

「なんだ、まだ起きてたのか。今日は遅くなるって言っ——」

居間のドアを開けた家の主は、テーブルに腰掛けたスタークの顔を見るなり、瞠目し、息を詰まらせた。緩んだネクタイに、くたびれた顔。時計の針はとうに零時を回っている。家族の笑顔を励みに、つらい残業を終えて帰ってきたサラリーマンであろうとスタークは推測した。

「おお、こんな時間までご苦労なことだ、お疲れさん」

「ひっ、な、なっ……」

主は腰を抜かして、その場に尻餅をついた。

リモコンの電源ボタンを押し込み、柳洞寺の惨状を伝えるニュースキャスターの声を遮断する。この部屋に存在する唯一の光源であったテレビの灯りがなくなると、途端に室内は仄暗い闇に包まれた。窓の向こうから僅かに差し込む淡い月光だけが、スタークのワインレッドの装甲と、エメラルドグリーンバイザーを照らしていた。

「ひ、ひいあああッ！」

頓狂な叫びを上げて、男はスタークに背を向け、立ち上がることもせず這って逃げ始

めた。壁伝いに数メートル進んだところで、照明のスイッチを押し込む。一瞬遅れて、廊下の蛍光灯に灯りが点った。そして、男は退路を断つようにそこに立つ異形の姿を認め、また叫んだ。

上半身の盛り上がった巨体スマツシユが、発達した腕を打ち合わせて男を威嚇する。すっかり腰を抜かして動けなくなった男に悠然と歩み寄ったスタークは、男と視線の高さを合わせるため、しゃがみ込んだ。

「せつかくねぎらってやろうと思ったのに、人の顔見て逃げ出すとは心外だねエ」

「お、おおおれの、おれの家族はっ」

「ああ、安心しろよ。ここにいるじゃねえか」

スタークの背後から、両腕が丸ごと翼と化したスマツシユが現れる。玄関先のスマツシユが、理性など感じさせない仕草で拳を打ち合わせながら、男の顔を覗き込む。

状況が飲み込めず狼狽えるしかできない男の胸元に、スタークのライフルの銃口が突き付けられた。ライフルの引き金を引くと同時、電子音が響いた。銃口から溢れ出した煙幕が、男の顔を、体を覆い尽くし、その体内すら侵してゆく。数瞬ののち、男は悲鳴をあげてことをやめ、人であることもやめた。

「それにしても、まさか一度に全部のサーヴァントを敵に回すことになっちまうとはなあ。おかげでこつちも急ぎごしらえで戦力を整える必要が出てきちゃった」

立ち上がったスタークは、ライフルを肩に担ぎ、首を捻る。ゴキゴキと骨が鳴る音を確かめながら、我が物顔で居間へと戻る。ふたたびテーブルに腰掛けると、廊下の奥から、意思を奪われた三体のスマッシュが追従する。

ここにいる三体を含めて、今のところ合計何体のスマッシュを製造したか、正確な数は覚えていない。どうせ何体造ったところで仮面ライダーが相手では付け焼き刃にしかならないが、いまいよりはマシといえる。

「こいつはまったく、してやられたよ。さては黎斗の奴、敢えて俺を泳がせてやがったなア？」

傲慢さを極めた檀黎斗の高笑いを思い起こし、スタークはくつくつと笑う。

檀黎斗はあの日、あえてスタークの危機感を煽ることで、言峰璃正はスタークにとつて邪魔な人間である」と認識させたのだろう。そう思うと、生前の璃正神父がああも直接的にスタークに詰問してきたことも、今にして思えばタイミングが出来すぎているように思えてならない。

ゲームメイカーを自称するスタークにとって、これはまさしく胸が躍る展開といえる。よもや人を裏で操ってきた自分が、こんな罠に嵌められるなどとは思ってもみなかった。

スタークは居間の棚に置かれていたラジカセの電源を入れ、適当に見繕ってきたカ

セットテープをセットする。クラシック曲が多数収録されたテープだ。大音量で響き渡るピアノの音響に耳を傾けながら、スタークはテーブルの上に置かれていたリモコンや、個包装された菓子が詰められた籠を横薙ぎに払い落とす。なにもなくなつたテーブルの上にとかりと寝転び、後頭部で両手を組んだ。

「いいねえ、面白いじゃねえか。ゲームマスターとゲームメイカー。どっちがよりよいゲームを演出できるか、腕が鳴るつてもんだ……なあ、お前もそうだろう、檀黎斗神？」
暗い天井を見上げ、スタークは笑った。

胸を満たす昂揚を鼻歌に変えて、室内に響き渡るクラシックに乗せて歌う。深夜だろうが、近所迷惑など気にする必要はない。そういうことを指摘する家主は、もうこの家にはいないのだから。

第24話「決戦へのレゾリューション」

戦兎らが拠点とする工場に帰還する頃、既に夜は更けて日付が変わる時間帯に差し掛かっていた。ケイネスは当然まだ起きているが、冬木で生活を送る多くの市民は既に眠りに就いている時間帯だった。

「俺はプロテインの貴公子、万丈龍我……またの名を、仮面ライダークローズー」

「僕はアルターエゴ。今は、ハイ・サーヴァントとして皇帝ネロ・クラウディウスを名乗っています」

ライダーとネロの自己紹介は、はじめてそれを受けるものに対してあまりにもぞんざいなものだった。ケイネスにしてみれば既に慣れたものであり、取り立てて叱責する気も起きなかつたので、ただ諦念の嘆息ひとつ溢して自己紹介自体は聞き流すことにした。

「色々と言いたいことはあるが……一晩のうちに戦力が二騎も増えたことを思えば、事の首尾は上々と言つてもよからう。あのセイバーを撃退したことも事実。ここは素直に貴様らの凱旋を喜ぶべきなのであろうな」

「意外だな、ケイネス。アルターエゴはともかく、遠坂と間桐の両方と繋がりを持つてる

万丈が仲間になることには、もうちよつと洩ると思つてたが」

「ふん、あまり私を安く見るなよ桐生戦兎。アルターエゴを味方につけた以上、もはやセイバーなど敵ではなし。バーサーカーに至つてはそもそも眼中にすらないわ。その程度の分別もつかぬ蒙昧と私を一緒にするな」

不快感を隠そうともせず、ケイネスは戦兎を睨んだ。

戦闘の一部始終はケイネスとて把握しているし、そもそも万丈龍我が器用に嘘をつける手合にも見えない。多くの生徒を育て評価してきた時計塔講師としての審美眼にはそれなりの自信を持っている。

「で、貴様らはこれから先、いつたいどうする腹積もりでいるのだ。聖杯戦争が中断したとあつては、こちらから表立つて遠坂に仕掛けるわけにもいくまい……まあ、出来ることなら、再開前に遠坂カスタークのとちらかを仕留めておきたいところだが」

「それについては、私に考えがあります」
「ほう」

期待した通り、はじめに声をあげたのはキャスターだった。

「間桐雁夜から得た情報によると、明日、娘との面談を目的として、遠坂時臣が間桐の屋敷の門を叩くそうです。しかし、間桐雁夜が遠坂時臣との決着を望んでいる以上、話が穏やかに進むとは思えない。ともすれば……セイバーかバーサーカー、そのどちらかが

明日、脱落する可能性も考えられる」

「まあ、そうなった場合、脱落するのはバーサーカーと見てまず間違いはなからうよ……もつとも、それはあくまで『我らが動かねば』の話だが」

キャストāはに、と笑みを深めた。

「お察しの通りです、ロード。私は、アルターエゴを率いて間桐邸に乗り込むべきと進言いたします」

「お、おい、ちよつと待てよ。聖杯戦争は一時中断するつて話だろ、それをこつちから仕掛けるような真似して大丈夫なのかよ」

「案ずるな、ライダー。なにも我々から仕掛けるわけではない。セイバーとバーサーカーが戦闘に突入した場合、その仲裁役を我らが担おうと言っているんだ。その結果として、セイバーが脱落することになる可能性は否めないがね」

付け足すように告げられたキャストāの本音に、万丈はあからさまに表情を引きつらせ、身を引いた。

「うツわ、ズリいなテメエ……やつぱ遠坂さんの言つてた通りのヤツじゃねーか!」

「ふ、遠坂氏が私をどう評していたのかなど興味もないが、それはそれとして、私の方策になにか不満でもあるのかな、ライダー」

「……いや、ねーよ。セイバーの野郎をブツ倒して、雁夜と遠坂さんにはちゃんと話をさ

せる。そこで、本当はあの人たちが戦う必要なんてねえってことを分かせて、みんなで桜を救い出す……！　そーいう作戦なら手を貸してやってもいい」

手のひらに拳を打ち合わせて、万丈は迷いのない視線で言い切った。キャスターは頬を緩めて首肯すると、戦兎とネロに向き直る。

「マスター、アルターエゴ、君たちはどう思う」

「俺は賛成。清姫の話じゃ、間桐がシャドウバーサーカーを召し抱えてるのは間違いないさそうだし、そっちも放っておくわけにはいかねえからな」

「僕も異論はありません。あのセイバーとの戦いになるなら、今度こそ、僕が倒します」意見が出揃ったところで、ケイネスは振り返り、傍らに控えるランサーの顔を見やっただ。ランサーはいつも通りにこやかに微笑んでいた。彼女の攻撃的な性格から見ても、今すぐにも戦場に攻め込み暴れ回りたいと考えていることはあまりにも明らかだったので、わざわざ考えを問う気にもならなかった。

「——よからう。間桐の屋敷が戦場となる可能性がある以上、どのみち捨て置くわけにもいかぬ。我らは遠坂より先んじて間桐の屋敷へと乗り込み、その趨勢を見守ることとする。連戦になるやもしれぬが、明日に備えて、各自英気を養うように」

誰も異論はなく、全員が各々の所作で頷いた。

既に夜も深く、これから摂れる睡眠時間も限られている。ケイネスもまた深く頷き返

すと、自身もまた休養を求め、自室へと戻っていった。

天窓の向こうに見える夜空には厚い雲がかかり、月灯りを遮っていた。ケイネスが去ってから、既に数時間が経過している。

工場内は既に消灯されているが、戦兎のラボの一室だけは消灯されてなお人工の灯りにぼんやりと照らされていた。無数のパソコンモニターから漏れる光だ。デスクの上には乱雑に研究資料が散りばめられており、その中でも一際目を引くのが、大量の計器と無数のコードに繋がれた、スクラツシユドライバーだった。

持ち主の万丈は、手持ち無沙汰のあまり、腕立て、腹筋、背筋、シャドーボクシング等のトレーニングに終始打ち込んでいたが、やがてそれにも飽き、モニターと向かい合ったまま動かない戦兎の背後に立った。

「なあ戦兎。お前、眠らなくて大丈夫なのかよ」

「それはこっちのセリフだ」

「ああん？ 俺はべつにイ？ なにしろ俺は？ 無敵のサーヴァントツ！ だからなあ
！」

両腕の筋肉を見せつけるボディビルダーよろしく腕を振り上げる万丈だったが、戦兎はモニターに向かい合ったまま、振り返ることはなかった。虚しくなったので、気づか

れる前にそつと腕を下ろした。

「お前、セイバーの宝具をまともに食らったんだろ。体力の消耗が激しいのは、俺よりもお前のはずだ」

「ああ、いや……なんか不思議とピンピンしてんだよな。やられた瞬間はやべえツて思っただけだよ」

キーボードの打鍵音が止まった。戦兔はくるりと椅子を回転させて、振り返る。じいつと万丈を眇めて、戦兔は眉根を寄せた。

「やつぱりな。お前の体は、普通じゃない」

「あん？ そりや、今の俺はサーヴァントだからな」

「セイバーのあの宝具を受けて平気でいられる理由は、それだけじゃ説明がつかないんだよ。あれは、サーヴァント一騎くらいは確実に葬り去れるだけの威力はあった」

セイバーの魔皇剣から放たれた真紅の極光に視界が覆われ、すべての感覚が消え失せた瞬間のことは、万丈も覚えている。確かに、あれほどの威力の攻撃を受けたことはいまだかつて一度もない。

「お前があの攻撃を耐えられた理由はおそらく、エボルトの遺伝子にあると俺は見てる」「はア？ そりやいったい、どういうことだよ」

「いいか万丈。お前がなんでサーヴァントになったのかは知らないが、少なくとも英霊

になった今も、お前の中にエボルトの因子が残っていることは間違いない。そうできや、クローズには変身できないからな」

「それがなんで、あの宝具の攻撃を受けて耐えたことに繋がるんだよ」

戦兎は再びキーボードを叩き、万丈のスクラッシュドライバーから採集したデータをモニターに映し出す。戦兎のドローンが撮影したセイバーの宝具展開に関する映像記録も残されていた。モニターは、他にも様々な計算式や英語の羅列で埋め尽くしているが、それがなにを意味するのかは万丈には分からない。

「これは仮説だが……あの宝具の性質と、エボルトの遺伝子が持つ性質。その両方が上手く作用して、お前はあの宝具から生還できたんじゃないか……俺はそう睨んでる。サーヴァント戦つてのは、互いの相性で決まるものだって、キャスターも言ってたからな」

「そういうもんか。なーんか難しくてよくわかんねえけどよ」

「ま、現時点では俺もまだ仮説でしか話せてないからな……わからないのも無理はない。だが、仮にこの説が正しいとするなら、それは俺たちにとって有益なファクターになる」

「お、おう」

デスクチェアごと振り返った戦兎は、子供のように無邪気に笑みを深めた。物理学者として、好奇心のスイッチが入った瞬間だった。

これ以上話を聞いても、どうせ万丈に難しい話はわからない。だが、それでも戦兎の瞳があまりに純朴に輝いているので、万丈は諦めて聞き返した。

「で、つまりどういうことだよ」

「ふふん、よく聞いてくれました！ 万丈も知つての通り、ライダーシステムは元々、エポルトの力が封じられたフルボルトを、地球の科学で解析し、応用したものだ。だから、エポルトの成分がなきゃ、俺達は変身すらできない」

「おう、そうだな」

「だが、俺のビルドはエポルトとの最終決戦でその成分の殆どを吸い尽くされちゃった。おかげで、今のビルドのスペックはほぼ初期状態まで落ちてる。それはお前のクローズも一緒のはずだ……少なくとも、マグマナックルなんか使えるはずがない」

「ん？ いや、普通に変身できてっけだな。なんかこう、心がカーツ！ となったら勝手に出てきたぞ、マグマナックル」

「……それは、今のお前がサーヴァントだからだ」

戦兎は呆れた様子で笑みを溢すと、万丈に背を向けて、再びモニターに向かい合つた。「サーヴァントの力の源は、魔力だ。仮にお前がその魔力を原動力に、スクラッシュドレイバーやマグマナックルを精製し、失つたはずのエポルトの成分すら補つて変身したんだとすれば——」

別のモニターに、フルフルビットタンクボトルの画像が表示される。よく見れば、パソコン本体とスクラッシュシールドライバーを繋ぐコードは、フルフルビットタンクボトルにも接続されていた。それは同様に、スパークリングボトルにも繋がれている。

「魔力をライダーシステムのエネルギーに変換、或いはその逆の現象を引き起こすシステムを構築すれば、エボルトの力に頼らずとも、ライダーシステムを強化できるかもしれない」

「つまり、なんだ……よくわかんねえけど、ビルドも俺のクローズみてえに強化できるってコトか！」

もはや、ほぼ戦兎の言葉を復唱しただけだった。問われた戦兎はまた子供のようにならなうに笑った。

「そういうこと。で、そのために……こいつも利用させてもらうつもりだ」

戦兎の視線の先には、スタークから齎されたバグヴァイザーが、デスクの上にぞんざいに投げ出されていた。既にデータの吸い出しは終わっているらしく、また別のモニターにバグヴァイザーの内部データが表示されている。万丈にはそれがなにを意味するデータなのかはわからなかったが、戦兎のことだ、また新しい武器を造ろうとしていることは容易に想像できた。

「うお、まーたよくわかんねえことしてんな。今度はどんな改造するつもりなんだよ」

「それは実証実験でお披露目するまでのお楽しみ。ま、少なくとも朝までには完成させるつもりだから、お前もあんまり夜ふかししすぎるんじゃないよ」

「いや、だから……そりゃこっちのセリフだつってんだよー」

時臣にとつて、聖杯戦争開始以来、最も長かった夜が明けた。

朝を迎え、ぴりりとひりつく冷たい空気に触れ、時臣はひとり、ここに至るまでの道筋を追想した。

セイバーの敗北。令呪の無駄な消費。手駒であるアサシンの脱落。そして、盟友たる言峰璃正の死。立て続けに襲い来る不幸を前に、さしもの時臣といえども、これまで傲岸不遜なまでに確信していた勝利の道に、微かなりとも「万が一」という暗雲を感じ始めていた。

言峰璃正といえば、第八秘蹟会が誇る老練にして屈強なる代行者にはかならない。その手練が志半ばで命を落としたのだ。自分もまた同様の道を歩む可能性があるのではないか。常勝無敗にして歴代最強と謳われた英雄王^{キング}が、思いも寄らぬ反撃に足元を掬われたように、自分もまた格下と断じていた相手に手痛い報復を受ける可能性があるのではないか。そう考えはじめたとき、時臣の足は自然と妻の実家である禪城^{ぜんじょう}の門前へと向いていた。

「お父様……?」

愛娘である遠坂凜の、宝石のような一對の瞳が、門前で佇む時臣を捉えて離さない。このような早朝から、用件を告げることもなく自分を屋敷の外へと呼び出した父に對し、凜は緊張し身をこわばらせている様子だった。

時臣はこれから、戦争に参加する人間のひとりとして、生死の境の戦いに身を投じてゆかねばならない。絶対的な勝利の確約が失われた今となつては、これが娘との最後の会話になりかねないことを、時臣は自覚した。

「凜」

短く娘の名を呼び、片膝をついた時臣は、そつと優しく凜の頭を撫でた。呆氣にとられた様子で目を見開いた凜を見て、時臣は今になつて、いまだかつて一度も娘の頭を撫でてやったことがないことに気付き、戸惑った。

「成人するまでは協会に貸しを作つておけ。それ以後の判断はおまえに任せる。おまえならば、独りでもやっていけるだろう」

だけれども、戸惑いは一瞬だ。一度口火を切ってみれば、後は次から次へと言葉が溢れてきた。

家宝である宝石の扱い、大師父からの伝承の件、地下の工房の管理をはじめとして、これから遠坂を次ぐ人間に必要な教養を、的確に、要件をかいつまんで説明してゆく。そ

れは、時臣が、凜を次代の遠坂頭首として指名するも同然の訓戒だった。

凜は、澄んだ瞳で真つ直ぐに時臣を見つめ、真摯に耳を傾ける。そこには、一切の迷いも、不安も、戸惑いも感じられはしない。凜の純朴な瞳にあるのは、尊敬する父に對する憧憬と、自分こそが遠坂の跡目を次ぐのだと信じて疑わぬ硬い決意だけだった。

凜になれば、遠坂のすべてを託すことができる。そういう確信とともに、一通りの説明を終えた時臣は、もう一度凜の頭を撫でた。

親として、子を慈しむように、いまだかつて表にしたことのない想いを込めて。

“——ああ、そうか”

時臣はいま、改めてこの聖杯戦争に勝利することの意義を見出した。

聖杯を得ることが遠坂の義務であるという大前提は今も揺るがない。けれども、時臣にはそれ以上に、決して死ぬわけにはいかない理由がある。宝石のような少女の瞳をじつと見つめ返し、時臣は頬を緩めた。

「——凜。私は今、大切なことに気付けた」

「え……大切な、こと？」

「ああ。おまえのおかげだ」

幼い我が子の背を、時臣ははじめて抱きしめた。ただただ当惑するしかできない凜の小さな背を、時臣はただ父親として、強く抱擁する。こんな行動は遠坂時臣らしくない

と、自分でも分かっているが、父親としての在り方を心に思い描いたとき、時臣はこうしたいと強く思った。時臣は、この一瞬のみ、行動を感情に任せた。

抱擁はほんの一瞬だった。僅かな触れ合いながらも、凜のぬくもりを確かに感じ、時臣はもう思い残すことなどなくなった。

立ち上がった時臣の顔には、最前までの不安はどこにもない。誇り高きひとりの魔術師として、時臣は決然と凜に向き直った。

「凜。いずれ聖杯は現れる。アレを手に入れるのは遠坂の義務であり、なにより——魔術師であろうとするのなら、避けては通れない道だ」

「——ッ、はい、お父様」

凜もまた強い眼差しで、きつぱりと頷いた。時臣の「誇り」が正しく凜に受け継がれていることを確信し、胸が満たされる思いだった。凜ならば、時臣よりも遥かに容易に魔導の秘奥を修めるに違いない。この瞬間、時臣は自分がひとりで戦っているのではないことを心で理解した。もう、恐れるものはなにもない。

「私はもう行かねばならない。あとのことは分かっているな、凜」

「はい。——行つてらっしゃいませ、お父様」

凜もまた決然と、澄んだ瞳で頷いた。

これより冬木に戻り、間桐臓硯との会見に挑む腹積もりでいるが、屋敷にはあの間桐

雁夜がいる。停戦中とはいえ、間桐雁夜の陣地に乗り込む以上、覚悟は必要だ。間桐と遠坂の間には不可侵条約が取り交わされてはいるものの、聖杯戦争の渦中である以上、臓硯が雁夜になんらかの肩入れをする可能性も否めない。だが、いかなる敵が立ち塞がろうとも、時臣は負けるわけにはいかない。万難を排して、勝利を掴み取る必要がある。

「時臣さん」

必勝の覚悟で踵を返そうとしたところで、屋敷の門を出たところにひとり佇む葵の姿が目に入った。凜のすぐ側まで歩み寄った葵は、そのたおやかな手を凜の肩に置き、名残惜しそうに時臣を見つめた。聖杯戦争の最中、それもこんな早朝に、時臣が急遽禅城の屋敷を訪れるという事態に、直感的になにかを感じ取っているのだろう。

時臣は新たな決意を胸に、いつも通りの不遜な笑みを浮かべ、葵に向き直った。

「すまない。突然の訪問に驚いたことだろう……だが、なにも心配はいらない。私には、負けるわけにはいかない理由がある」

「それを確かめるために……ここへいらしたのですね」

「ああ。そして答えは得た。これより私は、間桐の屋敷へ向かう」

「えっ……」

葵の表情に陰りが差す。

間桐といえば、桜を送り出した養子先の家系だ。実母として、桜を思い出さずにはい

られないのだろう。

「事情は話せば長くなるが……とある筋から、桜が不当な扱いを受けているという情報を耳にしてね。信じたくはない話だが、聞いてしまった以上、事の真贋を見極める必要がある」

「桜が……？ そんな、どうして……ッ」

葵は両手で口元を覆い、声を上擦らせた。凜も葵と同じように瞠目している。

時臣は目を伏せ、緩く頷いた。

「君の言いたいことは、私とてわかっているつもりだ。我々は、間桐の私欲を満たすために桜を養子に出したのではないのだから」

凜と桜は、いずれも呪いの域にまで達する程の才能を持って生まれた奇跡の子だ。その才能は、この世の正道を外れた怪異を際限なく呼び寄せ続ける。ゆえに彼女らは、己の身を守るため、魔導をその身に修める必要があったのだ。だというのに、遠坂の秘術は一子相伝。秘術を伝授できるのは、姉の凜にだけだ。

いつそ桜が魔術の才能をもたず生まれていたら、遠坂の子としてずっとそばにいられたのに、そう思ったことがないといえは嘘になる。だがそれでも時臣は、桜の才能を祝福したかった。いつか愛する我が子が魔術師として強く羽ばたく日がくることを夢見て、時臣は苦渋の末に桜を間桐の養子として送り出したのだ。

その決断が桜の今の地獄に繋がったのだとすれば、自らの手でその過ちを精算する必要がある。

「私は、桜を連れ戻す。そして、今度は自分の意思で、あの子に未来を選ばせる。今更だと思われるだろうが……今のあの子に私がしてやれることは、それしかない」

「……っ、また、桜に会えるんですか……？」

葵はそもそも、桜を養子に出すことを心から容認していたわけではない。彼女は時臣の意思に従い、諦念の末に桜を送り出したのだ。腹を痛めて産んだ愛娘と二度と会えないことの苦悩が幾ばくのものか、想像に難くない。

つらいのは自分ひとりではないと己に言い聞かせ、桜の意思を無視して、母の想いに蓋をして、いつかは遠坂での暮らしを忘れられるはずと強引に引き離れたことが間違이었다。今の葵の顔を見て、時臣はあらためてそう確信した。

桜と、もう一度向かい合う必要がある。

「この戦いが終わったら、私はやり直したいと思っている。もう一度、家族四人で話合つて……今更だと理解はしているが、それでも」

桜が生きていくためには、魔導の道は必修といえる。いつかは離れ離れになるのだとしても、それまでは家族として、そばに寄り添いたい。不器用ながらも、それははじめ時臣が口にした、時臣個人の願望だった。

「……わかりました」

時臣の決意を感じ取った葵の表情からは、戸惑いの色が消えていた。夫婦の間には、長年連れ添った信頼と、固い絆がある。

「あなたを信じて、ここで待ちます。必ず、帰ってきてくださいね」

「私も、お母様と一緒に待っています。だから、桜を……お願いします!」

凜は子供ながらに母にも劣らぬ強い眼差しで深く頭を下げた。

この世の誰よりも信頼する家族たちから送られる、揺るがぬ信頼と熱い激励。確かな想いを受け取った時臣に、これ以上不要な言葉を重ねる気はなかった。これが、ふたりの願いなのだ。

決然とした首肯で応え、踵を返した時臣は、迷いのない足取りで歩き始める。

未だ日が昇って間もない市街地には、往来の人通りも少なく、数分に一回、車道を車が通り過ぎていく程度だった。禅城の屋敷を離れ、しばし歩いたところで、ぱたぱたと、と小さく風を叩く羽音が時臣の耳朶を打った。

朝靄の中から姿を現したのは、黒と赤に彩られた蝙蝠、キバットバットⅡ世だった。

「ふふん、ようやく吹っ切れたようだな、時臣」

「ああ。あの日、君が言った言葉の意味を、私はようやく理解したよ」

キングは、王としての責任を果たした。だが、それだけしかできなかった。そう、キ

バットは言った。

最初のきっかけは、時臣に真つ直ぐに感情をぶつけてくる万丈龍我の存在だった。業腹だが、間桐雁夜の見当違い甚だしい言葉も、時臣の心になんら響かなかつたわけではない。決して相容れぬ敵であることに違いはないが、雁夜は雁夜なりに、時臣と真剣と向かい合っていたのかも知れない。

「では聞かせて貰おうか。お前がなにを見出したのか」

「責任を盾にするだけでは、救えないものもある……ということさ」

我ながら、柄にもないこと言ってしまった自覚して、時臣は遅れて笑みを零した。

愛するものを救いたい。桜を救うための理由など、たつたそれだけの単純なものでよかつたのだ。

だというのに、『魔術師として責任を果たすために我が子を養子に出した』という事実が前提として来るせいで、それを覆すためにはより大きな責任が必要なのだと思います。時臣は今日まで自分から動くことなく構えていた。

責任という言葉を盾に、人として大切な感情から目を背け続けていたことに、時臣は遅ればせながらようやく気付いたのだ。

「ふ、少しはいい顔をするようになったな。では、それを踏まえて重ねて問おう。お前がこれからやるべきことは、なんだ」

「桜を救う。そして、聖杯をこの手に掴む。そのためならば、私はもう迷わない」

迷いとは、余裕なき心から生まれる影だ。それは優雅さとは程遠いものであると、愛する家族たちの真つ直ぐな眼差しが、改めて時臣に教えてくれた。

時臣を信じて送り出してくれたふたりに対し、恥じることなき完全無欠の父であり続けるためには、桜を救い、その上で聖杯を掴み取り、遠坂の魔導を完遂させる必要がある。

今度こそ、家族みんなが笑って過ごせる未来を掴み取るために。

決意を新たにしたら時臣は、決戦の地である冬木への帰路を急ぐ。

窓から差し込む陽光に目を細めながら、雁夜は地べたに座りこんだまま、ぼんやりと空を見上げた。雲ひとつない澄んだ空だった。あらゆる雑念から解放された雁夜の心も今、この空と同じように澄んでいる。

こつ、こつ、と床を叩く杖の音が耳に入った。音の主は知れているので、わざわざ振り返ってやる気にもならない。

「これ、雁夜よ。これから遠坂の頭首が来るというのに、随分と落ち着き払っておるではないか。お主、いったいなにを考えておる」

「なにも。もう、考えるのはやめにしただけだ。悩んだところで、結局答えなんて最初か

ら決まってるんだからな」

雁夜は一瞥すら寄越さず、乾いた笑みを零した。

時臣が桜を救いに来る。あの絶対的な自信家が、今更自分の過ちを認めて、のこのこと間桐の屋敷へやってくるのだ。

おそらく時臣を動かしたのは、あの万丈龍我の言葉だろう。

万丈の熱苦しいまでに実直な言葉の数々は、雁夜の摩耗しすり減った鉄のような心にも確かに届いていた。あの馬鹿正直なサーヴァントにあつたのは、心の底から桜を救いたいという素朴な善意だ。それは、わかっている。

「ふむ。遠坂時臣との決着を望む、か……力の差は歴然だろうに、どこまでも愚かしい男よ」

「ああ、まったくその通りだな。自分でもそう思うよ……こんな戦いに命を懸けなきゃならないなんて、反吐が出そうだ」

ようやく臓硯へと振り返った雁夜は、自嘲気味に笑った。もう、今更迷うことなどなにもない。反吐ならなにもしていなくても常に出そうだ。

振り返って見上げた臓硯の顔に、いつもの薄ら笑みはなかった。面白くもなさそうに、風いだ表情で座り込んだままの雁夜を見下している。その表情を見ることができただけで、雁夜にしてみれば痛快だった。

一 所詮、雁夜も臓硯の玩具に過ぎないのだということ、他ならぬ雁夜自身が誰よりも分かっている。きつと臓硯は、雁夜がもがき苦しむ姿を眺めて笑っていたのだらう。臓硯が見たかったのは、こんな開き直った姿ではない。

ひとつ息を吐いた臓硯は、微かに口角を吊り上げ、言葉が続けた。

「まあ、よかろう。聖杯戦争の参加者同士の問題であれば、ワシが口出しをすることもなし。万に一つでも、お主が遠坂を打ち負かすようなことがあれば……カカツ、そのようなことはあり得ぬじやろうが、それはそれでワシに損はないからのう」

今、雁夜は察した。この男は、雁夜のこと、時臣のことも、等しく玩具としてしか見ていない。表向きには桜に面会するための場を設けたのだと宣ってはいるが、時臣がここへ姿を現した時点で、雁夜が黙ってはいないことも、臓硯には既に見抜かれている。「時臣が来る前に、人払いの結界は張っておいてくれよ。あいにく、俺にはそんな余裕も知識もないんでね」

「よかろう。死にゆく息子の頼みとあらば、聞かぬわけにもいくまいて」

仮にも父親の言葉だとは思えない軽薄さではあるが、今更なにかを言い返す気にはならなかった。

もうそろそろ、時臣が来る時間だ。雁夜は死体同然の体を刻印虫で無理矢理動かし、立ち上がる。ふらつく姿勢を、霊体化を解いた和服の少女がさかさず支えてくれた。

「……バーサーカー」

「ますたあ。わたくし、バーサーカーの名を返上いたしたく思います」

「なに？」

予期せぬ言葉に、雁夜は視線を落とし、少女の顔を見やる。

そこで雁夜は微かに驚いた。少女もまた、雁夜と同じように、清々しいまでの笑みを浮かべていたからだ。

「もう、わたくしには真名を隠す必要もございません。それになにより、わたくしより、あちら側の黒騎士様の方がそのお名前にふさわしそうですし？」

そう言つて微笑んだ清姫の視線の先にいるのは、シャドウバーサーカーの飼い主である間桐臓硯だった。黒騎士は姿を現さないが、清姫がなにを言いたいのかは理解できる。

「カカツ、これはよい。確かに、バーサーカーがふたりおったのではややこしくて敵わんからの」

「ええ、そうでしょうとも。それでは、臓硯様。こちらはこちらで好きにやらせていただきますので、あとのことはどうぞよしなに」

臓硯へとにこやかに微笑みかけた清姫は、雁夜の背を支え、少しでも雁夜に負荷をかけぬようにと、牛のような歩みで前進する。臓硯はもう、なにも言おうとはしなかった。

「雁夜も、あえて振り返ろうとは思わなかった。」

「なあ、……清姫」

「うふふ、やっとわたくしの名前を呼んでくださいましたね、ますたあ」

「ああ……まあ、今まではクラス名でしか呼んだことがなかったからな」

そうですね、と囁き、清姫はまた笑った。

清姫は、決して自分から多くを語ろうとはしない。だから雁夜は、自分から口を開くことにした。

「はっ……馬鹿なマスターだよな。素直にキャスターたちの提案に乗っておけば、こんな無謀な戦いに付き合わせることもなかったのに」

「ええ、それは、そうですね。でも、やっぱり……——それは“嘘”ですから」

清姫が浮かべた消え入りそうな儂い笑みに、雁夜は目を丸めた。

「そう、か……なら、俺の選択もあながち間違ってたんだな」

「いいえ、残念ながら大間違いです。ここまで筋金入りだったなんて、呆れてものも言えません」

にこりと微笑みながらそんなことを口にする清姫がおかしくて、雁夜は笑った。なにかを面白いと思ったのは、久々だった。

「いいや、俺にとつちや正解だね。お前に燃やされずに済んだ」

「もう、ますたあつたら……」冗談は程々にしてくださいまし」

きつと瞳を尖らせた清姫だったが、すぐに堪えきれなくなり、片手で口元を覆って、くすくすと笑い出した。

この聖杯戦争に参加している誰よりも愚かで、誰よりも救いようのない、自己満足を満たすためだけの戦いに参加しようとしているマスターに、こうも健気に付き従ってくれるサーヴァントがいる。それだけで、雁夜はなにも恐れることなく戦える。

道連れは、ひとりでいい。キャスターたちには、こんな愚かな戦いに付き合う必要も義理もないのだから。

特に、どこまでも馬鹿正直なあの男は。

「——お前、本当は分かかってたんだろ。俺が戦う本当の目的は、桜のためだけじゃないってこと……ああ、いや、丸つきり嘘ってわけでもないが」

「ええ、分かっております。ですが、他ならぬますたあご自身が、いつからかその事実にお気付きになっていたご様子でしたので……わたくしから申し上げることは、とくになにも」

「ははっ、そうかよ」

本当は、口にするのが怖かった。嘘をつけば、逆上した清姫に燃やされるのではないか。そう思って避けてきた事実は、言葉にしてみると、案外と大した問題ではなかった。

この少女は、誰よりも近くで、雁夜だけを見つめ続けてくれたのだから。

「……ますたあこそ、よいのですか」

「なにがだ？」

「この戦いに負ければ、あの子はきつと、時臣様に救い出されることになるのでしょう。そうなれば、これまでますたあが戦ってきた意味は——」

「いいんだよ。そんなことはもう、どうでも」

桜は救いたい。だが時臣は殺したい。矛盾した、二律背反の感情。

万丈の説得を受けて変わりはじめた今の時臣なら、或いは桜を救い出し、かつてと異なる、新しい未来を提示することができるのかもしれない。それくらいのことには雁夜にだって分かる。目を背けようとしていただけで、本当のところは理解している。

だけれども、それを理解してなお、やはり時臣のことは許せない。あの日、葵の純情を奪い去り、あまつさえその幸せを踏み躪った男のあり方など、認められるわけがない。時臣を許し、認めることは、雁夜の血の滲むような一年の努力を否定するようなものだ。

あんな小さな子供から父親を奪うことが正しいのか、と。いつか万丈に問われた言葉に、雁夜は答えられなかった。だが、自分の愚かしさのほどを自覚した今であれば、答えられる。いくら悩もうと、答えなど最初から決まっていたのだから。ならば、悩んだところで意味はない。救いたいという感情と、殺したいという感情。矛盾を抱えたま

ま、最期まで走り抜こう。たとえそれが誤った道だとしても。

「まったく。あれだけ選択肢を提示されながら、こんな結末しか選べないなんて……誰かさんによく似て、本当に、救いようのない人」

「ああ、そうだな。今ならなんで俺の喚び声に応えたのがお前なのか、嫌ってほど理解できてる」

いつか見た夢を思い出す。

怒りと憎悪に支配され、荒れた野山を裸足で駆け抜け、最期にはたったひとり、誰にも看取られることなく逝った愚かな少女の夢を。

そんな生き方しかできないなかった。その愚かしさは自覚しているが、しかし間桐雁夜とはそういう男だ。そういう生き様しか選べなかった男なのだ。今更自分の人生を偽る気もなければ、変えようともがく気もない。

だが、しかし。

少しだけ、変わったものもある。

かつての雁夜ならば、考えもしなかった言葉。

「——清姫。お前には、感謝してる」

屋敷の玄関に辿り着いた雁夜は、外へと続くドアを開ける前に、掠れた声で言葉を紡ぐと、そっと清姫の頭に手を載せた。既に半分以上感覚のなくなった死人のような顔

で、それでも不器用に笑ってみせる。清姫は、衝撃に打たれたように目を見開き、やがて、にこりと優しく微笑み返してくれた。この笑顔にずっと安心させられていたことに、雁夜は今更気付いた。

「それじゃあ、いくぞ」

「ええ、わたくしはいつでも」

ここから先は、前だけを見て突き進めばいい。雁夜と清姫は、いつもよりも重たく感じる玄関ドアを勢いよく開け放ち、最後の戦いの場へと足を踏み出した。

人の通りもまばらな早朝の市街地に、朝靄を切って走る二台のバイクの姿があった。桐生戦兎の乗ったバイクが先頭を走り、少し遅れて万丈龍我の乗ったバイクが追走するかたちで、これから戦場となる間桐の屋敷へ向けてアクセルを握り込む。

ふいに、大地を揺らす轟音が響いた。木々に止まっていた鳥たちが一斉に、空へ飛び立つ。なにかが爆発した音であることは明白だった。

戦兎が急ブレーキでバイクを旋回させながら停車すると、万丈も一瞬遅れて、戦兎と同様にバイクを急停車させる。

「な、なんだよありや!?!」

ふたり揃って、ヘルメットを取り払う。真つ先に視界に入ってきたのは、ここ深山町

から、冬木大橋をひとつ隔てた新都側の空に、もうもうと黒煙が昇っている景色だった。次いで、なにかが爆発するような轟音が立て続けに起こり、最前まで青く澄んでいた新都の空が、次第に黒煙で塗り替えられていく。悲鳴とも怒号ともつかない喧騒が、風に乗って深山町へと渡ってくる。

「なんの騒ぎだ……？」

「なにあれ、テロ？」

周囲の民家の窓が、ひとつ、またひとつと開け放たれ、なにも知らない冬木の住民たちが口々にぼやきはじめる。みな、異様な騒音に叩き起こされたのだろう。いま、聖杯戦争の参加者と一般人とに関わらず、この場の全員が同じ景色を眺めていた。

「嘘だろ……こんな朝っぱらから」

驚愕する戦兔が漏らした呟きに応えるように、傍らに降り積もった霊子が、白装束の麗人をかたちづくった。姿を現したランサーもまた、眉根を寄せて新都の空を見上げている。双眸に反して、その口角はやはり、不自然に吊り上がっていた。

「戦兔。神秘の秘匿もなにもないあの動きを見るに、あれはもしかしくともスタークの仕業では」

「だろうな……どう見てもまともな聖杯戦争じゃない。——悪い万丈！ そつち任せた！」

「ッ、はアッ!? ……オイ、戦兔!?」

決断すると同時に、戦兔はヘルメットを深くかぶり直し、答えを聞く間もなくバイクのクラッチを踏み込んだ。強くアクセルをひねる。万丈の声を振り切って急加速した戦兔のマシンビルダーは、冬木大橋へと続く道を弾丸のような速度で駆け抜けてゆく。戦兔の発進に合わせて、ランサーはいつの間にか姿を消していた。

「俺はどーすりゃいいんだよ!?!」

「あちらはビルドとランサーに任せましょう」

「うおおおッ!」

いつの間にか背後に立っていた黒装束のアルターエゴに驚いた万丈は、バイクから飛び降りそうになる衝動を堪えて、向き直った。

「いや、任せるつつつてもよ……!」

「セイバーが来ます。すべてが終わる前に、急がないと」

「…………ッ」

間桐の屋敷には、雁夜と時臣がいる。戦えばどちらか、或いは両者ともに命を落とすかもしれない。手遅れになってしまいう前に、自分にできることをするべきだ。ネロの言いつを自分自身の胸中に落とし込み、納得させた万丈は、逡巡を振り払うようにかぶりをふると、ヘルメットをかぶり直した。

「だーっ！、もう、仕方ねエな！　こうなりや飛ばすぞ！　しっかり捕まってるよ、ネロオーツ！」

万丈に返答することなく、ネロの姿は霊体化して消えていった。

「つて消えんのかよツ!?!」

もはや万丈の背後には誰もいないが、それでも大胆に上体をひねって振り返り、ひとしきり叫ぶと、ふうと一息ついてハンドルを握り直す。

あの戦兔がそう簡単に負けるはずがないと自分に言い聞かせた万丈は、アクセルを握り込み、戦兔が進んだ道とは別方向へとバイクを急発進させた。

「そっちは任せたぞツ、戦兔オオオーツ!!」

第25話 「カオスは加速する」

間桐の庭園は、遠坂のそれと比べれば幾分手狭ではあるものの、それでも一般的な邸宅と比べれば馬鹿馬鹿しい広さだった。バイクから降りた万丈は、屋敷へと続く一本道の先に、門番よろしく佇立している雁夜を認識し、足を止める。雁夜の傍らには、清姫バーサーカーもいる。

清姫の表情に、昨日までの穏やかな微笑みはない。雁夜とふたりで、油断なく万丈を睨め付けるその視線に、万丈は胸が苦しくなる思いに駆られた。

あのふたりはもう覚悟を決めている。それでも、そうと分かったところで、問わずにはいられない。

「なあ、雁夜……あんた、ほんとにこれでいいのかよ。遠坂さんを倒したって、なにも得るものなんてねエだろ……!」

「ああ、お前の言う通りだよライダー。だが、もうそういう問題じゃあない。俺は……ここで立ち止まるわけにはいかないんだ」

雁夜が自嘲気味に笑うと、そのパーカーの内側から、黒光りした甲虫がぶううん、と羽音を立てて宙へ舞い上がる。庭園の茂みから、屋敷の窓から、どこからともなく湧い

て出た蟲が靄のように空を埋めるのに、そう時間はかからなかった。

舞い上がった虫たちは、ぎちぎちと顎を鳴らして万丈を威嚇する。

「……それがあんたの答えかよ、雁夜！」

「俺は、こういう風にしか生きれない男なんだ。お前は俺という人間を根本的に誤解している」

「なんでだよ……ッ、あんた、桜のために、そんなになるまで苦しんでたんだろ！」

「それがそもそもの誤解だと言ってるんだ。確か、お前は言ったよな。桜の幸せよりも、時臣への憎しみを優先するのなら……そんなやつは俺が倒す、と」

思わず息を呑む。雁夜の刺すような視線が、万丈を見据えて離さない。

「だったら、今がそのときだ。本気で俺を止めたければ、ここで俺を倒してみせろ、ライダー！」

叫んだ雁夜の頬の内側で、血管がのたうつ。苦痛のあまり前のめりにうずくまる雁夜とは裏腹に、揚々と宙に舞い上がった甲虫たちが、一齐に加速する。黒い靄が、万丈へと殺到する。けたたましい羽音が、戦闘開始のゴングとなった。

「ああそうかよ……そつちがその気なら、ぶん殴つてでも目を覚まさせてやるッ！」

変身、と叫ぶと同時、万丈はボトルを装填したクローズドラゴンをベルトに叩き込んだ。クローズのハーフボディが万丈の前後にすかさず生成される。蟲の群れが万丈の

間合いに入るよりも素早く装甲を身に纏った万丈は、クローズとなって飛び出した。

手にした剣、ビートクローザーのグリップエンドを勢いよく引く。万丈の体内で生成された魔力が、唸りを上げて蒼炎へと変換される。クローズは自分目掛けて飛んでくる虫の群れ目掛けて、横一閃に剣を振り抜いた。

「オオラアアアッ!!」

剣が纏った魔力の蒼炎は、またたく間に上空へと広がり、迫りくる虫たちを焼き払う。炎の幕に囚われた蟲は次々と燃え落ちるが、一度では足りない。二度三度と剣を振るい、蒼炎を飛ばす。

ふいに、蟲の群れがふたつに割れた。蒼炎を纏った清姫は、蟲の群れを掻き分け、獲物へと急迫する猛禽類のように飛翔する。

「シヤアアアアアアッ!!」

「デメエ、バーサーカーッ!」

清姫の燃える鉄扇と、クローズの剣が激突した。ふたりを起点に炎がぶわりと舞い上がり、周囲を漂っていた蟲たちは成す術なく焼け落ちてゆく。

鉄扇に炎を纏わせた清姫は、蒼炎による魔力噴射を得て、怒涛の勢いでクローズへと炎の舞いを叩き付けてくる。不覚だけは取らないようにとビートクローザーで攻撃を受け続けるが、じりじりと追い詰められているのはクローズの方だった。

「ぐっ……一発一発が、重てエ……ッ！」

目の前で鉄扇を振るうサーヴァントが、昨日まで柔和に、嫺やかに微笑んでいた華奢な少女と同一人物とは思えず、万丈は仮面の下で驚嘆した。

幾度目かの激突の末、清姫は宙でとんぼ返りの要領で身を翻した。同時に、周囲にぼんやりと蒼い火の玉が浮かび上がる。はじめは蒼く揺らいでいた火の玉は、またたく間にその熱量を跳ね上げ、蒼い火球となった。

「わたくし、これでも戦いは不得手な方ですよ。ですが、だからといって、怨念籠もつて龍にまで成り果てたわたくしの炎……見くびられては困ります」

清姫は一見優しく、されど剣呑に微笑んだ。瞳は笑っていない。万丈の背筋を、ぞつとするような悪寒が駆け抜けた。清姫の周囲に浮かんだ火球が、唸りを上げて加速した。

最初の数発はビートクローザーで叩き落としたが、殺到する火球の速度は先程の蟲の比ではない。連続で急襲する火球に対応しきれず、やがて一発の火球がクローズの胸部装甲に炸裂した。火球は爆ぜ、舞い広がった蒼炎がクローズを包む。

「あッ、づウー！」

装甲越しの炎ならば恐るるに足らず、と思っていた自分の判断を万丈は呪った。清姫の火球は、装甲を突き抜けて万丈の肌に熱をもたらした。装甲が万全に機能していな

い。一瞬動きを止めたクローズに、火球は次々と炸裂した。

「ライダー。わたくし、これでもあなたには感謝をしているのです……本当に。ですが、此度ばかりは譲るわけにはまいりません。ますたあの邪魔をするなら、ここで……!」

清姫の放った火炎に苛まれながら、それでもクローズは叫んだ。

「それがッ……そんなことが、ホントに雁夜のためになると思ってたのかよ!」

「自分の信念を曲げて、後悔とともに死んでいくくらいならば……わたくしは、自分の想いを貫く道を選びます。それはますたあとと同じこと。ならばどうして、同じ志を持つて喚ばれたこのわたくしが、戦いをやめろなどと言えましようか!」

「ンだよそれ……俺にはお前が言ってることは難しくてよくわかんねエよ! けどな、今の雁夜を放っておくことが間違いだってことだけはわかる! だから俺は、お前らを止めるッ!」

「ええ、それでよいのです。あなたはあなたの信念を貫きなさい!」

清姫の頬が、一瞬緩んだ。が、すぐに眦を決した清姫は、再び蒼炎によるジェット噴射を強め、燃える弾丸となって加速した。

クローズは間合いに飛び込んで来た清姫から距離を取ろうと、地べたを転がって回避する。同時に、火球によって装甲へと燃え移った炎を、地面の土で消そうという魂胆もあつたのだが、アテは外れた。炎はクローズのボディに纏わり付いたままだ。鎮火でき

ない。そこにまず、驚愕した。清姫によつて齎された蒼炎の枷は、標的を見定めた蛇のように、念入りに、執念深くクローズを焼き、じわじわと体力を奪つてゆく。

「うツわ、ンだこれ！ 炎が纏わり付いてきやがる！」

「うふふ。わたくしの炎は怨念そのもの。ただの火遊びとはわけが違いますわ」

空中で立ち止まった清姫は、袖で口元を隠し、婉然と笑つた。

万丈は、マスター能力として付与されたスキルで、己のステータスを確認した。案の定、明確なバッドステータスが、状態異常として付与されている。

清姫の持つ固有スキルによるデバフ効果だろう。クローズの防御力を低下させる状態異常と、やけどによるダメージを上昇させる延焼状態が、やけど状態と一緒に付与されている。快復するためのスキルを、万丈は持つていない。それを認識した途端、どつと体力を奪われた気がした。

「チツ、それがテメエらの戦い方か！」

炎を操るバーサーカーの戦闘スタイルを理解した万丈は、延焼効果を振り払うことを諦め、ビートクローザーを構え直した。此方の体力が尽きる前に清姫を叩けば、勝機は十分にある。

再びクローズの間合いへと飛び込んできた清姫は、握りしめた鉄扇から真紅の炎を噴き上げ、それを剣と見立てて振り抜いた。両者の刃が激突し、二種類の炎が舞い上がる。

熱風が、波動となつて周囲の草木を吹き払つた。

サーヴァント相手とはいえ、クローズとて膂力では負けていない。激突の末、クローズの剣が鉄扇を弾き上げた。清姫は大海原を自由に泳ぎ回る海蛇のように身を捻つて、距離を取る。

「ッ、流石はライダー……接近戦ではわたくしの方が不利ですね」

清姫は、ちらりと背後に視線を送つた。雁夜が、血反吐を吐いて蹲っている。これ以上戦闘を長引かせれば、雁夜の命に関わることは、誰の目にも明白だった。

清姫の額を、つう、と脂汗が伝つてゆく。雁夜の体力が尽きるより前に、せめてクローズを戦闘不能に追い込む必要がある。

「いいでしょう。少々恥じらいはありますが……そうも言つてはいられません」

大気を伝う熱気が、ぐんと跳ね上がる。清姫の纏う魔力量が上昇している。大技を仕掛けてくるつもりだと、万丈は本能的に悟つた。

「お前ッ……今の雁夜の様子見て、それでも宝具ブツ放そうつてののか!」

「ええ。たとえ愚か者と蔑まれようとも、これこそがますたあの選んだ道。ならばわたくしは……この身を炎と変えてでも、その道を阻む障害を燃やし尽くすまで。この命、常にますたあとともに——!」

清姫の魔力は蒼い炎へと変じて、和服の裾を、袖を燃やしてゆく。炎は、瞬きの間に

清姫の衣服を焼き払った。華奢で、容易く手折れてしまいそうな、しなやかな手首の先がちらりと見えたが、それすらも蒼い炎が覆い隠した。炎は、渦を巻いて清姫の体を包み込む。

「馬鹿野郎ツ……だったら、ぶっ倒してでも止めてやるー！」

決然と叫ぶと、クローズはベルトのレバーを勢いよく回転させた。

蒼く輝く魔力が全身から噴出し、オーラとなつてとぐろを巻く。クローズから放たれた高圧力の魔力の波濤は、クローズの後方の空に蟠り、稲光を伴いながら龍の形をかたどった。清姫と同じ、蒼く燃える炎の龍だ。

「転身、火生三昧ツ!!」

炎の中から、清姫の声が響いた。決して悲愴を感じさせない、決然とした声だった。

クローズの呼び出した蒼龍に対峙するかたちで、小柄な少女の体を焼き尽くした蒼炎は、巨大な炎のうねりへと変化してゆく。クローズと同じ、蒼く燃える炎の龍だった。

二頭の龍は互いに蛇のようにうねり、のたうち、庭園のあらゆる草木を焼き払いながら咆哮を響かせる。蒼く煌めく炎が空を覆う。結界の内部は、舞い上がる黒煙とクリスタルブルーの彩りに覆われていた。

清姫が変じた龍が、その顎門から極熱の火炎を放射する。燃え盛る火の海の中、ク

ローズは跳んだ。屋敷の屋根よりも、高く、高く、空へと跳び上がった。

「はああああああッ！」

ともに空へと駆け上ってきた蒼龍、クローズドラゴンブレイズが、クローズの背に極熱のブレスを放射する。クローズは、燃えたぎる蒼炎を己のエネルギーとして取り込み、右足に集約させる。

必殺のドラゴニック・ファイニッシュに対し、清姫の変じた龍は、臆することなく真正面から向かってくる。

「上等だ、正面からぶちかますッ!!」

清姫の龍もまた、大口を開けて咆哮した。

クローズは自ら、龍の顎門の中へと飛び込んだ。龍はかまわず、クローズの全身を丸呑みにする。獲物を捕食する大蛇のように。

「うおおおおおおおらああああああッ!!」

クローズを飲み込んだ蒼龍の内部から、万丈の裂帛の叫びが響いた。

清姫の変じた龍の炎の体のあちこちから、稲光が漏れる。龍の体内を、一筋の稲妻が走り抜けていった。

一瞬遅れて、蒼龍の炎の体が揺らぎ、ほつれた糸のようにくずれはじめた。体を形成する炎と炎の間に裂け目ができる。その裂け目から、蒼龍の背中を突き抜けたクローズ

は、全身に蒼炎を纏いながら落下し、地べたを転がった。

「あツづ、あづツ、あぢイイツ！」

清姫の宝具によつて付与された火傷状態に、重ねがけされた延焼効果も相俟つて、もはや装甲越しでも生身で身を焼かれているのと変わらないほどの熱量の炎に万丈は苛まれていた。全身を手ではたくが、その程度で火の手は収まらない。

後方に気配を感じ、振り返る。蒼炎を再び和服へと変換した清姫が、ふわりと舞い降りるように着地した。扇子で口元を隠してはいるものの、その額には脂汗が浮かんでいゝ。顔色も決してよくはない。

一瞬遅れて、崩れ落ちたのは清姫の方だった。けれども、万丈とてそれどころではない。クローズの装甲は強制解除され、それに伴つて炎も消え去つたが、体力の消耗は甚大だった。

「ます、たあ……ますたあ」

それでも清姫は、痛む体に鞭打つて立ち上がり、蹲つて血反吐を吐く雁夜の元へと走り寄つた。クローズとの戦いで、清姫は大幅に魔力を消耗していることは想像に難くない。雁夜も、もうまともに戦える体ではないことは火を見るよりも明らかだった。

血反吐を吐きながら咳き込む雁夜を抱き起こす清姫に、万丈はひりひりと痛む体を擦りながら、歩み寄つた。

「あんた、そんな体で、それでもまだ遠坂さんとやりあおうってのか」

「がふッ……げふ……っ、当然、だ……俺はどうせ、放っておいても、じき死ぬ。だが……なにもなせず……、死ぬのだけは、御免だ……ッ」

雁夜の容態が、昨日よりも悪化していることに、万丈は気付いた。今の戦闘は、きつと更に雁夜の寿命を縮めたに違いない。

はじめから、万丈と戦う必要などなかったのだ。当初の予定通り、雁夜は時臣だけを狙って立ち回ればよかった。避けて通るべき戦いに、それでもふたりは正面からぶつかってきたのだ。その想いを、万丈へと叩き付けるように。

万丈はゆるくかぶりを振って、視線を伏せた。

「桜は……きつと、遠坂さんが助け出す。それでも、挑まねエわけにはいかねえのか」

「ああ……いかない、ね。どうしても、止めたければ……ここで、俺を、殺すしかない」

雁夜の白濁とした瞳に宿る闘志に、万丈は諦念の吐息を零した。

「わかった。もうあんたを止めようとは思わねエ。それであんたが救われるなら……好きにしろ」

己の耳を疑うように目を丸めて、雁夜は万丈を見上げた。白く濁ったその瞳は、もう、焦点が定まっていない。今の雁夜に、万丈の姿が正しく見えているとは、あまり思えない。

「だああもうツ、こうなったらしよーがねえだろ！　ただし、やるなら男と男の真劍勝負だ、卑怯な真似は許さねエ！　そういう約束なら……この勝負、俺が最後まで立ち会ってやる。誰にも邪魔はさせねえ……！」

「よいのですかライダー。あなたは誰も死なせたくなかつたのでは」

「ああ。だからお前らに遠坂さんは殺させねエし、遠坂さんにもお前らを殺させねエ。俺が見届けんのは、あくまで男と男の真劍勝負だ！」

「……、あなたという人は、まったく」

はじめ、目を丸くした清姫は、小さく失笑を零しては袖で口元を覆った。清姫はすぐに堪えきれなくなり、くすくすと笑みを零し始めた。

「ンだよ、なにがおかしいんだよ！」

「うふふ……なにもおかしくはございませんわ。ただ、あなたもつくづく愚かな人だと思っただけです。もつとも、ますたあほどではございませんが」

「うツセエな、誰のために愚かなヤツになつてると思つてんだ！　せめて馬鹿つて言え、あと筋肉付けろ！」

筋肉馬鹿とサーヴァントのやり取りに、雁夜の頬が僅かに緩んだ。

万丈は、雁夜が穏やかな笑みを浮かべている姿を見たのは、これが初めてだった。こんな風に笑える人間が、これほどつらい宿命を背負い、これから死に行かなければなら

ないことが、万丈にはつらかった。

庭園の正門の鉄柵が、きいいと音を立てて開いた。真つ赤な背広をきつちりと着こなす壮年の男がいる。遠目には一人で来たように見えるが、遠坂時臣が霊体化させたセイバーを引き連れていることは明白だった。

先の戦いの余波で既に火の海と化した庭園をぐるりと見渡した時臣は、やがて雁夜に冷徹な視線を向け、嘲笑った。

「私が誅を下すまでもなく既に満身創痍とは……哀れなものだな、間桐雁夜」

「貴様……、時臣イイイ！」

憎々しげに来訪者の名を呼び、雁夜は立ち上がった。ふらつく姿勢を、清姫が支える。

「そこを通して貰えるかな。私は今日、間桐の翁より招待を受けてここへ来たのでね。君に我が道を阻まれる筋合いはないはずだが？」

「そうは、いかないね……聖杯戦争は、まだ終わってない。これは、俺からの宣戦布告だ……！ 受けて貰うぞ、時臣イ……！」

時臣は、まるで最初からこうなることが分かっていたかのように笑みを深め、携えていたステッキを胸元の高さまで緩く掲げた。

「いいだろう。君との間に浅からぬ因縁があることもまた事実。精算するにはいい機会だ」

「遠坂さん……」

万丈のすぐそばで、大気中の霊子が人の形に凝縮されていく。寄り集まった光の粒は、黒装束のサーヴァント、紅渡ネの姿を形成した。見計らったように、時臣のそばにもセイバーが姿を現す。両者ともに、腰に提げた魔皇剣に指をかける。無言のまま、因縁のふたりは睨み合った。

「クローズ、そちらは任せます。セイバーは僕が」

「いや、お前ツ……ずつといたんならさつきネの戦いの時点で出てきとけよー」

「あれは、あなたの戦いです。ひとりの仮面ライダーとしての」

「あアん!？」

ネロの思惑が計りきれず、万丈は唸りをあげた。今に始まったことではないが、言葉が足りない。けれども、結論としての方向性は万丈の目的と合致しているので、これ以上にかを言い返す気は起こらなかった。万丈はふらつく雁夜に寄り添った。

「……おい、まだ戦えるか、雁夜」

「ああ……元より死にかけの体だ。いまさら恐れるものなどなにもない」

「……そうか」

雁夜は深く息をついて、呼吸を整えながら答えた。それでも、時折咳き込んでいる。白濁とした瞳に時臣を捉え、雁夜は不敵に笑った。今にも消えそうな笑みの儚さに、万

丈は胸が締め付けられる思いに駆られた。

清姫も、気丈に振る舞ってはいるものの、既に息が上がっている。クローズのドラゴニックファイニッシュをほぼ直撃で受けたようなものだ。マスターからの魔力供給も満足になされていない今、清姫とてまともに戦える状態でないことは明白だった。

それでもふたりは、前だけを見て進む。万丈がかけてやれる言葉は、もうなにもない。「こつから先は、あんたの戦いだ」

最後の決戦に挑まんとする男から、万丈はそつと静かに距離を取った。

この戦場における仮面ライダークローズの役目は、これで終わりだ。後はただ、男同士の戦いを見届けることくらいしか、できることはない。

「キバット、タツロットー」

ネロの叫びに応じて、どこからともなく蝙蝠と小龍がやってくる。セイバーも同じだ。金と黒に彩られたネロのキバットとは配色の異なる赤と黒のキバットが、セイバーの腕の中に収まる。

「変身」

セイバーとネロ、ふたりの声が重なった。ふたりの魔皇力が、大気に波紋を描きながら周囲へと伝播してゆく。ふたりの戦士は、ほぼ同じタイミングでキバへの変身を遂げた。

変身と同時に、キバエンペラーを中心として、大地に真紅の魔法陣が描かれる。即座に広域展開された魔法陣は、この場の全員を飲み込んで赤く煌々と煌めく。ネ口の標的は、最初からたつたひとりだけだ。引き抜いた魔皇剣を大地に突き立て、黄金のキバは高らかに宣言した。

「宝具、展開——アエストゥス・ドムス・アウレア招き蕩う黄金劇場」

魔力の華が吹き荒れる。突風は燃え盛る火の手を吹き払い、万丈の視界を埋めた。眩いエーテルの輝きののち、ふたりのキバは、庭園から姿を消していた。

さすがの時臣もこれには驚いた様子で目を丸めていたが、それも一瞬だ。時臣が構えたステツキに嵌められた宝玉を中心に、周囲の炎が渦を巻いて掻き集められてゆく。

「ふん、君との戦いに英雄王セイバは不要。間桐雁夜、なにするものぞ」

「はっ……上等じゃないか。これで邪魔者はいなくなつたつてワケだな、時臣イイイツ！」

雁夜は笑った。屋敷の窓から、一齐に蟲の群れが飛び出した。ここは、間桐の本拠地だ。蟲なら腐るほどいる。空を埋める黒い霧となった蟲の群れは、時臣を取り囲むように陣形を組んだ。万丈との戦いで繰り出した数の比ではない。蟲は屋敷の奥から無尽蔵に供給され続けている。出し惜しみはしないし、する必要がない。これが、雁夜にとつて最後の戦いになるのだから。

新都の駅前広場に駆けつけた警官隊は、銃を構え、一斉に発砲した。既に多くの民間人は避難している。ここにいるのは、鋼鉄の体で武装した怪人スマッシュの軍団と、それを鎮圧するために出動した警官隊だけだ。

スマッシュの軍団は、拳銃による弾丸をその身に受けながら、微塵も怯む様子を見せなかった。分厚い戦車の装甲に向けて銃を撃つても効果をなさないと同じだ。スマッシュの軍団の中から、翼を持ったスマッシュが飛び出した。低空を滑空して、警官隊の只中へと突っ込んでくる。

そこからはもう、一方的な蹂躪だった。どちらが狩るもので、どちらが狩られるものであるかはあまりにも明白だった。両手に剣を構えたスマッシュが、両腕の豪腕を振り上げたスマッシュが、色とりどりの鋼鉄軍団が、逃げ惑う警官隊を襲う。

「ひ、ひいイああ、来るな、来るなあー！」

逃げ遅れビルの壁際へと追い詰められた警官のひとりが、尻もちをつきながら、拳銃の引き金を引いた。弾丸は狙い過たずスマッシュに命中した。火花が散った。それだけだった。

もはや逃げ場を失った警官を前に、ミラージュスマッシュは舌なめずりでもするよう
に緩く剣を掲げた。警官は死を覚悟し固く瞑目したが、その瞬間が訪れることはなかつ

た。

地面に、どす黒い泥沼のようななみずみが生じている。そこから、まるでゾンビを思わせる所作で湧き出した白い装甲の戦士たちが、ミラージユスマツシユの腰元と足に纏わり付いた。

「なっ……なんだ」

「ヴェエアアアア……」

淀んだ呼吸とも唸りともつかない異音を発しながら、スマツシユを上回る勢いで増殖を開始した仮面ライダーゲンムが、警官隊に変わって反撃を開始した。各々のゲンムが手にした鎌や弓矢、剣を振るって、スマツシユ軍団を押し返していく。

ゲンムたちに纏わり付かれ、身動きを封じられたミラージユスマツシユを、新たに現れたゲンムの一人が、鎌状の武器ガシヤコンスパローで袈裟懸けに斬りつける。当然、ミラージユスマツシユは反撃に打って出ようとしますが、増殖したゲンムたちが腕に纏わり付いているため、それも叶わない。

十体を超えて増殖を続けたゲンムは、その全てがミラージユスマツシユに覆い被さるように纏わり付き、その身を地面に生じたみずみへと押し込み、圧縮してゆく。ミラージユスマツシユは、断末魔の叫びすらあげることなく、ゲンムたちによって圧潰させられ、爆発した。その爆発も、ゲンムの群れによってできた厚い壁の外に漏れることはな

かった。

「た……助かった、のか」

ゲンムに命を救われた警官は、すぐに立ち上がることができなかつた。一度は死を覚悟するほどの恐怖に囚われたこともあつて、腰が抜けている様子だつた。深く肩で息をしなから、救世主たるゲンムに視線を向ける。

「ヴェエエエアア……」

ゲンムの腕に装着された紫色のバグヴァイザーから照射された光を浴びたところで、警官の意識は途切れた。警官は、既に人ではなくなつていた。制服はそのままだが、地肌を晒していた頭部と両手は、既に異形のそれへと変貌している。

果たして、ゲンムは決して人間の味方などではなかつた。

既に息絶えた警官は捨て置いて、まだ交戦している警官をバグスターウイルスの戦闘員へと変貌させ、スマッシュに対する意思のない尖兵へと仕立て上げる。ゲンムとバグスターウイルスの軍団による、スマッシュ軍団への反撃が始まつた。

檀黎斗神は、冬木上空にぼつんと浮かび、戦場と化した新都を俯瞰しながら、乾いた笑みを漏らした。

「こんなところで我が宝具を解放させられたのは甚だ不本意だが、どのみち怪人を目撃した人間など、^ゲ聖杯戦争の進行において邪魔になるだけだ。ならば、せいぜい私のた

めに役立つて消えるがいい」

宝具、デイル・ブ・インサイド・ナイトメア死満つる夢幻の奈落へ。

無限に増殖を繰り返すゲムムによる人海戦術。ゲムムの襲撃を受けたNPCは強制的にバグスターウイルスに変貌させられ、檀黎斗神の意思のままに動く操り人形となる。

街中で白昼堂々使うべき宝具でないことは重々承知しているが、もはや聖杯戦争の体を保ち続けるのも限界が近い。現に、聖堂協会のスタツフは、既にほぼ全員が消されている。おそらくは、スタークの毒牙にかかったと見て相違ない。

「いったいなにを考えている、スターク……私の神聖なるゲームを破綻させるつもりか？」

増殖を続けるゲムムと、街に溢れたスマツシュの戦いを眺め、黎斗は独りごちる。戦場にいるのは下級怪人ばかりで、スタークは姿を見せていない。

黎斗が見下ろす街並みの中、一軒のビルの屋上に、スナイパーライフルを構え、スコップ越しに戦場を俯瞰する衛宮切嗣の姿があった。傍らには赤の弓兵も随伴しているが、すぐに戦場へ投入する気はないらしく、アーチャー陣営はあくまで『見』に徹している。

国道に沿って、一台のバイクがやってくるのが見えた。桐生戦兎は、半ばバイクから飛び降りるようにして戦場へと飛び込んで行く。戦兎の姿がビルドへと変じると同時、

霊体化を解いた長尾景虎が、周囲のスマツシユへと飛び掛かった。

ビルドとランサーの奮戦を眺めながら、黎斗は満足気に深く頷いた。

「フン、君たちはそれでいい。NPCとはいえ、一般人を見捨てるわけにもいくまい」
迫りくるゲナムの群れを真紅の大剣で薙ぎ払いながら、赤と青の装甲を纏ったビルドは戦場の真ん中へと躍り出た。

「なんツだよコレ、これじゃ俺のいた世界の二の舞じゃねえか」

戦兎はビルドの仮面の下で嘆いた。破壊されたビル、街に溢れた瓦礫、逃げ惑う人々、押し寄せる怪人たち。人間同士の戦争と、エボルトの侵略によって破壊し尽くされた旧世界の町並みを思い出し、戦兎は心を抉られる思いに駆られた。こんな景色は、二度と見たくはなかった。

「戦兎、この者ら……まさか」

警官の制服を着たバグスター戦闘員を、槍による峰打ちで叩き伏せながら、ランサーは笑顔のまま、珍しく動揺の声を漏らした。

「ああ、元は人間だ。殺すわけにはいかない」

言いながら、豪腕を振り上げて襲い掛かってくるストロングスマツシユに、フルボトルバスターの刃を叩き込む。カウンターをもろに食らって怯んだスマツシユの胸に、ガンモードへと変形させたドリルクラッシュヤーの弾丸を浴びせる。

「このスマツシユも、バグスターも、みんな元は人間だったはずだ。少なくともスマツシユは倒せば元の姿に戻る。だが、バグスターの方は……俺の方にはデータがない。助けられる保証がない！」

「なんとまあ……あのスタークとかいう輩、やってくれましたね」

半ば悲鳴のような戦兔の叫びを受けて、ランサーは器用にも微笑みをたたえたまま歯噛みする。殺到するゲムムの群れを華麗な槍捌きでいなしながら、地獄と化した街をぐるりと見渡す。主犯と思しきブラッドスタークは、この場所にはいない。

「とにかく、一人でも多くの市民を助けるぞ。今は人命が最優先だ」

「心得ました。こうなつては、神秘だなんだと言っている暇はありませんから、ね！」

にいと微笑むと同時、ランサーは超人的な跳躍力でゲムムの群れへと飛び掛かった。逃げ遅れた警官へと向けられていたバグヴァイザーを槍による一撃で弾き上げ、背後の警官を庇いつつも敵の群れへと切り込んでいく。

「味方になれば、あんなに頼もしいやつもそうはいねえな」

戦兔は、ビルドの仮面の下で、信頼からくる安堵の吐息をついた。すぐに背後に迫っていたスマツシユへと振り返ると、ラビットタンクスパークリングボトルを取り出し、耳元で振る。ボトル缶の中で、炭酸がしゅわしゅわと弾ける音がする。内部の成分が活性化している証拠だ。

横合いから飛び掛かってきたフライングスマッシュの攻撃を屈んで回避しながら、ビルドはスパークリングボトルをベルトへ叩き込んだ。

『R A B B I T T A N K S P A R K L I N G !!』

『Are You Ready?』

「ビルドアツプッ！」

立ち上がると同時に構え直す。ビルドの前後に生成された金型が、ビルドを挟み込む。全身から炭酸を思わせる泡を放出しながら、ビルドの強化変身がなされた。戦兔が徹夜で再調整した力だ。

『シユワつと弾ける！』

『ラビットタンクスパークリング!!』

『イエー！ イエー！』

赤と青の装甲の各所を鋭角的に尖らせて、ラビットタンクスパークリングへの変身を遂げたビルドは、両手にフルボトルバスターとドリルクラッシュヤーを構え、二刀流で駆け出した。まずは、この場にいるすべての下級スマッシュを鎮圧する。スパークリングならば、決して遅れを取ることはない。

「あの男、随分と派手なことをやってくれたな」

スコープ越しに戦場を眺めながら、衛宮切嗣は誰にともなくぼやいた。

いざという状況に備えてアーチャーも傍に待機させてはいるものの、この混沌とした戦場に馬鹿正直に突っ込んでいくべきかどうかは、未だ思案中だった。

少なくとも、ルーラーは市民の命に頓着しているようには見えない。人命救助を気にせず戦うのであれば、ゲムムの軍勢と、ビルド、ランサーがいれば十分にスマッシュは鎮圧できるだろう。ルーラーによる追加令呪の報奨を思えば、切嗣としては首謀者と思しきスタークのみを仕留めたいところだ。

「おそらく陽動だろうな。これではあまりに目立ちすぎる」

傍らのアーチャーが口を開いた。腕を組んで戦場を俯瞰しながら、冷静に所感を述べたのだろう。無言のまま、ちらと視線だけをくれてやる。

「しかし、陽動にしても愉快ではないやり方だな。放っておけば被害も拡大するだろう」
「僕らの仕事は人命救助じゃない」

アーチャーはなにを言い返すでもなく、深く息を吐くと、無言のまま静かに瞑目した。自分の意思を押し殺したようなその対応が、切嗣にとっては不愉快だった。アーチャーは依然として、なにを考えているのか読めない節がある。人命救助など、あの仮面ライダーとランサーにでも任せておけばそれでいい。

ふいに、懐に忍ばせた携帯電話が鳴った。インカムの通信県外からの連絡手段とし

て、切嗣は舞弥に携帯電話を持たせていたのだ。無言のまま、切嗣は着信を取った。

『街に放っていた使い魔から報告がありました。間桐邸にて、遠坂と間桐が戦闘に入った様子です。おそらくこの戦いで、いずれか……または両陣営ともに敗退する可能性が高い』

「それは放っておけない状況だな。そっちは今、現地にいるのかい」

『向かっている最中です。十分もかけずに到着するかと』

「わかった。なら、到着しても下手に動かず、あくまで監視にのみ徹してくれ」

必要なやりとりだけを済ませて、すばやく電話を切る。それから、切嗣は思案する。

スマッシュによる市街地の襲撃と同じタイミングで発生した間桐邸での決戦。眼下で繰り広げられる戦闘が陽動とするならば、間桐邸での戦いこそがスタークにとつての本陣である可能性が高い。だが、だとすればスタークと組んでいると思しき言峰綺礼は今、なにを考えているのか。あまりにも不確定事項が多すぎる。

「どうした、マスター」

「アーチャー、お前も間桐の屋敷へ向かえ」

「……それは別段構わないが、いったいなぜ」

「屋敷で動きがあった。お前は現地で舞弥と合流し、監視を続ける」

「そうか。委細了解した」

必要最低限の指示だけ下す。アーチャーは、すう、と溶けるように消えた。

背後に侍っていた従者の気配が完全に消えるのを確認してから、切嗣は煙草を一本取り出し、静かに火を付けた。思考の整理には、ひとりの時間が欠かせない。

ビルの下から聞こえてくる剣戟音や砲撃音、悲鳴や雄叫びを聞き流しながら、切嗣はふうと煙を吐き出した。街のあちらこちらで上がっている白煙と比べれば、煙草の煙などあつてないようなものだ。

当初想定していた聖杯戦争から、事態は大きく逸れ初めている。聖杯を求めて相争う魔術師同士の殺し合いでは、既になくなっている。なにか大きな力による妨害を受けているように切嗣は感じ始めていた。

戦いに勝利するためには、常に最新の情報にアップデートしながら、戦略を切り替えていく必要がある。いつまでも従来の聖杯戦争の感覚で挑み続けるのは、愚か者のすることだ。ここからは、思索の時間が必要になる。

「どうにも今朝は騒がしくていかんのう。老人の耳には堪えるわい」

窓の向こうで燃え滾る火の海を横目に、間桐臓硯は二階の一室に逃えたソファに深く腰掛け、しわがれた頬を歪めて笑った。

庭でサーヴァント同士の決戦が繰り広げられていることは知っている。新都の市街

地で、スタークの放った化け物どもが誰彼構わず人を襲っていることも知っている。それぞれの戦場で戦う戦士たちが、なにを思つて戦うのかも、臓硯は知っているつもりだった。

「なに、もう少しの辛抱さ。今日で聖杯戦争は大きく動く。少なくとも、時臣はこれでジ・エンドだ！ そうなったら、あんたのシャドウバースーカーに勝てるやつはいなくなる」

背後からかかった老獪な声に、臓硯はより笑みを深める。

真紅の装甲を身にまとつた偉丈夫が、屋敷の壁に寄りかかっていた。エメラルドグリーンに煌めくバイザーの奥で、スタークがどんな表情を浮かべているのかは知らない。だが、知る必要もない。結局、聖杯のシステムを真に理解しているのは、御三家だけだ。スタークがなにを企んでいようと、臓硯の手から聖杯を篡奪することはできない。

はじめは聖杯戦争の裏に潜んだ野望を暴くことが目的だった。正確には、今だつて目的のひとつではある。だが、最終的に聖杯が手に入るのであれば、裏にどのような思惑が潜んでいようともはや関係はない。雁夜がどうなろうと、桜がどうなろうと、どうだつてよかつた。

「カカツ、それは善哉。雁夜めは最後まで能無しの子であったが、せめて最後くらいは

役に立って欲しいものよ。まあ、期待はしておらんがの」

「そう言うなよ。父親であるあんたのために、健気に働いてくれたカワイイ息子じゃねえか」

雁夜による謀反を警戒した臓硯は、刻印虫を通して常にその生殺与奪を握っていたつもりだった。けれども、結局雁夜による謀反はなかった。最初から雁夜になど期待はしていなかったが、目下最大戦力を保有している遠坂の陣営を屠るための舞台を演出してくれたことだけは褒めてやってもいい。雁夜の心を、自らの手で壊せなかったことだけは心残りだが、その程度の娯楽は些末な問題だ。

「まったく、お主はげに面白き男よ。よもやこの歳になって、こうも他人の世話になる日が来るなどとは夢にも思っておらんのだわ」

「おおいおい、よせよ爺さん。あんたが匿ってくれなきゃ、今頃俺は路頭に迷ってたに違いない。世話になってンのは俺の方だよオ」

「カカツ、相変わらず口の上手い男じやて。ならばせめて、助けてやった恩には報いて貰うとしようかの」

「わかってるよオ。あんたの望むゲームは、しっかりと俺がメイクしてやる。大船に乗ったつもりでドシツと構えてな」

スタークは、無骨な赤い手で枯れ枝のような臓硯の肩を叩いた。嘘にまみれたスター

クの笑い声に応えるように、臓硯もまたくつくつと笑う。

決してスタークに心を許したわけではないが、少なくとも現時点でスタークの手綱を握っているのは臓硯だ。あとはどこでこの蛇男を切り捨てるか、問題はそれだけだ。

やがてスタークは馴れ馴れしくもぼんぼんと臓硯の肩を二度三度叩くと、大きく伸びをして窓際へと移動した。

「いいねえ。どっちもいい具合に殺気立っていやがる」

スタークの眼下では、雁夜と時臣が睨み合っている。一触即発とはこのことだ。スタークは鼻で笑った。

「ま、せいぜい潰し合ってくれ。脱落するサーヴァントは、多ければ多いほどいい」

雁夜が、先に仕掛けた。蟲の軍勢が一气呵成に畳み掛ける。

スタークにしてみれば、雁夜と時臣の因縁に別段興味はない。だけれども、今ばかりは雁夜を応援してやってもいいと思われた。雁夜の敗北は最初から確定しているが、なにかの間違いで運良く時臣を仕留めてくれれば、それはそれで都合がいい。期待はしていないが。

スタークは、晴れ渡った空を見上げた。日は徐々に高く登りつつある。戦争はまだはじまったばかりだ。

第26話 「追想のデイスぺア」

日が昇り、にわかにも明るくなりはじめた東の空を、セイバーは物憂げに目を細めて見据えていた。黄金のキバに与えられた屈辱は、もはや燃え上がるような激情を通り越して、セイバーの心に薄ら寒い虚無感をもたらしていた。なにかを考えようとしても、頭の中に靄がかかったようになにも現れてはこない。

東の空を焦がす暁が赤ければ赤いほど、セイバーの胸を満たす冷たい虚無感は大きくなってゆく。黄金のキバを倒し、この雪辱を果たすまで、心の奥底に澱のようにわだかまった不快感が晴れることはない。

常勝無敗の王は、紛い物のキバに敗れ去った。

日が完全に昇りきるころ、夜明け前から屋敷を空けていた時臣が帰還した。状況は既に聞き及んでいる。これから間桐の屋敷へ乗り込み、間桐雁夜と決着をつけて、娘を連れ戻すのだという。

また、闇のキバの力が必要となる。時臣の帰還は、セイバーの物憂げな感傷とは無遠慮に、戦いるときは近づいていることを如実に示していた。

ファンガイアのキングは、人間にクイーンを奪われた。

キングはいっだって王としての責務を優先し、その辣腕を振るってきた。人間に寝取られたクイーンなど、一族の恥だ。王として、裏切り者のクイーンを追い落とすことは、必然たる責務であつた。

時臣もまた、己の責務を優先する男だったとセイバーは認識している。だけれども、その時臣は今、妻子のために立ち上がろうとしている。

キングは、実の息子を道連れに逝こうとした。

死の間際に放つた決死の一撃は、自我すら持たぬ息子によつて跳ね返された。

思い返すに、一族の英雄にしては、あまりにも無残な最期だった。

次代を担う実の息子が、そのときはまるで赤の他人のように、キングの思いを無視した。まだ世の理をなにも知らぬ赤子の純朴な目は、実の父であるキングに一瞥すら寄越してはくれなかつた。虚しく伸ばされたキングの手は、二度と妻子に触れることなく奈落へ落ちた。

誰も、キングの思いを理解しようとさえしない。妻子という、細くとも確かな絆で結ばれているはずの間柄でさえも。

無敵の英雄譚の幕切れは、そんなあつけないものだった。

背後から呼び掛けられる。男の視線が背中に張り付くのを感じた。ゆつくりと振り返る。室内は、夜中のうちにセイバーの体から溢れ出た魔皇力によって破壊しつくされていた。半ば八つ当たりのようなものだった。その結果、部屋の扉はすでになくなっていく。

屋敷の主たる遠坂時臣は、廊下に佇立したまま、決然とした眼差しをセイバーへと送っていた。

「……私の知る貴様は、そんな目をする男ではなかった」

時臣は、返す言葉に窮して視線を僅かに泳がせた。

「なにが貴様を変えた？ 王の命令だ。答えよ、時臣」

魔皇剣を抜き放ち、その切っ先を時臣へと向け、問う。時臣は静かに息を吸い込み、ゆつくりと喋りだした。

「私は……今までの己が行動を間違ったものとは思いません。責任、誇り、それらは、いずれも人の上に立つものに欠かせぬ素養。しかし、義務感だけで事を成すのでは、本当に守りたいものは守りきれない。その事実、私は遅ればせながら気付いたのです」

「ほう。ならば重ねて問おう。貴様の語る本当に守りたいものとは、なんだ」

「……心、です」

時臣は、力強く答えた。セイバーは顔を上げた。時臣の表情には、悩みも、銜いも、な

にもない。自分の成すべきことを理解した男の顔が、そこにあつた。

「己の立場に付随する責任や義務を果たせばいい……それは、言い換えればただの『負担』でしかない。しかし、私にとって家族とは、決して『負担』などではないのです。責任や誇りを越えた先に、彼女らを守りたいと強く願う心が、私の中にはあつた」

「そのようなくだらぬ感情を、貴様は聖杯戦争よりも優先すべきことだと？ ……貴様という男は、もう少し賢い男だと思つていたのだが」

冷たく突き刺すようなセイバーの声音を、しかし時臣は真正面から受け止め、切り返した。

「聖杯は必ずや我が手中に収めます。それは既に確定事項。まずは間桐雁夜を下し、石動惣一に誅を成す。そして、あのアルターエゴをも打倒する……そのために、私は万難を排して前進せねばならない」

セイバーの頬が、ぴくりと、微かに動いた。時臣は、すかさず声を張つた。

「王よ、無礼を承知で申し上げます。御身には、これより我が進軍にお付き合ひいただきたい」

時臣がこんな風に物事を頼み込んでくるのは、これが初めてだった。忠臣として慎み深く振る舞い、懇懃の限りを尽くして傳く時臣の姿は、そこにはない。一人の男として、時臣はセイバーに懇願しているのだ。その事実が、セイバーの興味をそそつた。

「これは面白いことを言う。だが、貴様の手に残る令呪は既に一画。その有り様でいったいなにができる」

「私は、一度言った言葉を違えませぬ。必ずや、御身を失望させることはしないと約束いたしました。聖杯は獲る。そして、あのアルターエゴにもこれ以上大きな顔はさせませぬ……私に、秘策があります」

「ほう」

セイバーは、深く息をついた。

一画目の令呪はともかく、二画目の令呪を切らせたのはセイバーの不覚ゆえだ。それは他ならぬセイバー自身が最もよく理解している。だから余計に黄金のキバが赦せない。けれども時臣は、その黄金のキバの打倒をも約束すると宣った。時臣の目は、本気だ。

「フン……面白い」

ほんの少しだけ、遠坂時臣という男の認識を改めてもいいのかもしれない。

「時臣。そうまで大見得を切ったからには、以後の敗北は断じて赦さぬ。王が敷く無敵の戦陣、見事勝利のまま飾ってみせると約束するならば……貴様の行き着く先は、この我が見届けてやろう」

微かな笑みとともに、セイバーは霊子となって消えた。

ほんの気の迷いと言つてしまえばそれまでだが、セイバーには、時臣が進む道行きに僅かな興味があつた。かつてキングが選ばなかつた道の先に、いつたいなにが待つてゐるのか。その景色を見てみたいという気持ちだが、鎌首をもたげはじめている。

英霊として、己の意思で剣を執ろうと思つたのは、これがはじめてだつた。

セイバーは——ダークキバは、真紅と黄金に染めあげられた固有結界の中で、静かに顔を上げた。劇場に喝采はない。真紅の薔薇がしんしんと降り積もる静謐な空間の中心に、ダークキバとキバエンペラーのふたりが間合いを計り合うようにしながら対峙している。

因縁の戦いの邪魔立てをするものではなく、余計なものはない。どちらかが死ぬまで、この劇場は維持され続けることだろう。

例え霊脈の守護を失おうと、例え敵の宝具圏内であろうと、例え魔皇剣を封じられようと、この身には絶対王者の誇りがある。もう二度と、負けることは赦されない。

「黄金のキバ、ここで確実に消し去つてやる」

緩く掲げた人差し指をつきつけ、ダークキバは謳い上げるように告げた。

キバエンペラーはなにも言わず、緩慢な動作で魔皇^{ザンバットソード}剣を掲げた。最初から飛ばしていくつもりなのだろう。押し寄せる殺意に対して昂りを抑えきれず、セイバーはぶるり

と小さく震えた。こんな感覚は、レジエンドルガの古代王ロイドとの決戦以来だ。

もはやこれ以上の言葉はいらない。戦いのはじまりを告げるゴングも必要ない。まるで示し合わせたように、ふたりのキバは同時に駆け出した。

ふいに、空間に現れた波紋のような歪から、黄金の鎖が飛び出した。キバエンペラー目掛けて急迫した天エルキドゥの鎖が、振り上げられたザンバットソードの刀身を絡め取った。矢継ぎ早に射出された鎖が、十重二十重に剣に巻き付き、雁字搦めに拘束する。

「ッ!？」

驚愕は一瞬。その一瞬は、ダークキバがキバエンペラーの間合いに飛び込むには十分すぎる隙だった。ほんの僅かに遅れを取ったキバエンペラーの胸部装甲を、ダークキバは力任せに殴りつける。

咄嗟の判断で魔皇剣を捨てたキバエンペラーもまた、カウンターの拳をダークキバの胸部に叩き込んでいた。同時に、持ち手を失ったザンバットソードには、ほぼ全方位から射出された鎖が絡みつき、宙にがっしりと嚴重に固定された。

「フーン!」

「ハア!」

互いが互いを己の間合いの内側に捉えたまま、両者の拳が両者の鎧を連続で強打する。向かい合ったキバの鎧から、火花が立て続けに噴き上がった。

激しい攻防のさなか、キバエンペラーが右膝を振り上げた。繰り出された蹴りを片手で叩き落とすと、無防備になった真紅の鎧にダークキバの右の拳が連続で叩き込まれる。

「……………」

劇場によるスペックの低下を受け入れた上で、なおダークキバの出力はキバエンペラーを上回っていた。開幕直後にザンバットソードさえ封じてしまえば、闇のキバが黄金のキバに遅れを取る道理はない。

幾度目かの拳の応酬ののち、先に吹っ飛ばされ、真紅の絨毯が敷き詰められた地べたを転がったのはやはり、キバエンペラーの方だった。

「滅びよ、キバ……………」

緩く片手を掲げる。その号令に従って、天の鎖が一斉に射出された。

鎖による最初の一撃を転がって回避したキバエンペラーは、起き上がりざまに地を蹴った。ダークキバは、己の目を疑った。

「なに……………」

空中で身をよじったキバエンペラーは、瞬きのうちにその姿を黄金の翼竜へと変質させていた。人間とファンガイアの混血によってのみ誕生する、赦されざる異形——それが飛翔態だ。

飛翔態となったキバは、金属が軋みをあげるような咆哮を響かせて、その巨大な翼を羽ばたかせる。音速に近い速度で上空へと舞い上がった翼竜を、天の鎖は捉えきれない。よしんば追いついたとして、飛翔態の鋭利な翼に触れると同時、鎖は容易く切断されるだけだ。

「おのれ、忌まわしき混血児め……！」

こういう化け物が生まれるから、ファンガイアと人間の血が交わることは長らく禁忌とされてきたのだ。

飛翔態は、劇場の空を自由に飛び回り、ザンバットソードを絡め取った鎖の拘束をたちまち引き裂いた。鎖が消失すると同時、落下するザンバットソードをその龍の顎門で啜えた飛翔態は、ジェット戦闘機を思わせる超高速で地上すれすれを飛ぶ。ソニックブームが巻き起こり、降り積もった薔薇の花弁が一斉に舞い上がる。

これはもう、間に合わない。流星となってダークキバの間合いへと飛び込んだ飛翔態は、空中で即座にキバエンペラーへと姿を変え、飛行によって得られた加速力すら味方につけて、ダークキバへと斬り掛かった。

「……ッ」

絶大な切れ味を誇るザンバットの刃が、闇のキバの鎧を上段から斬り裂き、王のライフエナジー生命力を喰いにかかる。けれども、そんなことではセイバーの闘志は折れない。ダーク

キバは、斬り裂かれながらも、剣を握るキバエンペラーの腕を掴みにかかっていた。

「我^{オレ}を侮^ヒつたな、キバ！」

キバエンペラーの腕を絡め取ったダークキバは、拳を振り上げ、踏み込んだ。身動きを封じられたまま、この至近距離から闇のキバに殴られてはひとたまりもないはずだ。そう思った次の瞬間、ダークキバは己の判断の甘さを呪った。膨大な魔皇力が、キバエンペラーの右足に寄り集まっている。

「貴様……ッ！」

「ウエイクアツプ、ファイバーツ！」

キバエンペラーの左腕に取り付いた子龍^{タツロツト}が、高らかに叫んだ。気付いたときには、キバエンペラーの右足から溢れ出した魔皇力が、真紅の大鎌を形成していた。剣の一撃は、
困だ。最初から必殺技を放つつもりで飛び込んできたのだ。

「ハアアツ！」

「ぬう……！」

ダークキバが次の一撃を放つよりも先に、キバエンペラーの左足が振り上げられる。至近距離から蹴り上げられ、ダークキバはたまらず掴んでいた腕を離した。そこへ、左、左、連続で左の蹴りが叩き込まれる。火花を噴き上げながら数歩後退したところで、キバエンペラーは身を捻って、強烈な右の回し蹴りを放った。

それは、魔皇力の刃を展開した必殺の蹴りだった。エンペラームーンシフレイク

明確な殺意をもつて繰り出された蟲の群れは、一切の躊躇もなく時臣の放った炎の幕に飛び込んでゆく。焼き殺されたすぐそばから、間断なく湧いて出る蟲たちが炎へと飛び込んでゆく。

一見すればまるで芸のない自殺行為とも取れるが、ここは間桐の屋敷。蟲の巣窟だ。いくら焼き殺されようと、蟲の群れに際限はない。焼かれるたびに屋敷からわらわらと湧いて出て、全方位から時臣へと襲いかかる。

「見苦しいな、雁夜。君のそれは、もはや魔術とは言い難い」

時臣の表情に焦りの色はない。涼し気な顔をして炎を操り、蟲を焼き殺し続けるだけだ。

一方の雁夜には、もう殆ど体力が残されていない。痛覚含めてあらゆる感覚はどうにも麻痺している。今も機能しているのは、必要最低限の視覚と聴覚だけだ。ゆえに、もはや痛みも熱も感じてはいない。ただ残る僅かな命を消耗するだけの無謀な戦いの中、それでも雁夜は、震える脚で地面を踏みしめ前進する。

「ころ……殺して、やる……貴様、だけは……殺——」

ただ延々と呪詛の言葉だけを吐き捨てながら、憎悪と執念を燃やし、雁夜は進む。

時臣は、それこそ虫けらを見るような冷徹な視線で雁夜を一瞥すると、軽くステッキを掲げた。ほんの短い魔術詠唱で、展開していた炎の防御陣のうち、ほんの一部に魔力を注いだ。

時臣の魔力を受けた炎は、蛇のようにうねり狂って雁夜を襲う。

「雁夜——ッ——！」

後方で万丈が叫ぶ。雁夜はもう、時臣の炎など恐れてはいない。焼かれたところで、これから死にゆく雁夜に、今以上の苦痛などは存在しない。痛みを感じるほどの感覚も、もうない。ゆえに雁夜は止まらない。襲い来る炎を、既にぼやけはじめた視界で真正面から捉え、幽鬼のように前進する。

炎が雁夜を飲み込もうとした瞬間、それを迎え撃つたのは、後方から噴出した蒼く燃える炎だった。高熱の蒼炎が時臣の炎を呑み込む。赤と蒼、二色の炎は揉み合い、やがて蒼炎が支配権を奪い取った。勢いを増した蒼炎が、唸りをあげて時臣目掛けて跳ね返ってゆく。

「行ってください、ますたあ！　どうか、思いを遂げてくださいませ——！」

後方から聞こえる叫び声に、雁夜は僅かに頬を歪めた。

襲い来る炎は、すべて清姫の放った蒼炎が受け止めてくれる。一方で、融通の効かない蒼炎は、雁夜の放った蟲すら諸共に焼き尽くしているようだが、もはやそんなことは

取るに足らない些事だ。

あともう少し。ほんの少し腕を伸ばせば、時臣に届く。

「時臣イイ……葵さんを、裏切った……貴様、だけはア……！」

「私は、君のその独善的な振る舞いが気に入らない。葵の気持ちも知らず、独り善がりを演じる君の醜さが」

既に互いの距離は縮まっている。拳を振り上げ、飛び掛ければ防ぎようもない距離だ。体調さえ万全なら、そうしている。けれども、時臣の表情は動かない。ただゴミを見るような眼差しで雁夜を睥睨する。その目が、気に食わない。奥歯を擦り合わせ、腹の底から怨嗟の声を絞り出す。

「うるさい、黙れエ……！　貴様が、葵さんを、語るな……ア！」

「いいや、語らせて貰おう。彼女は……葵は、私の妻だ。私は、愛する妻の激励を受けて、ここに立っている。愛娘を救い、己が過ちをそそぐ……ただそのためだけにここへ来たのだ。理想も、大義も、決意すら……なにもかもが欠如した君とは、背負うものの大きさがまるで違う」

「……ッ!!」

雁夜は、逆る憎悪に目を剥いた。燃えるような感情の力が、死に体の体を衝き動かす。

時臣などよりもっとずっと早く、葵がまだ穢れを知らない乙女であったあの頃か

ら、雁夜は葵と日々を楽しく過ごしていた。時臣よりも、先だ。時臣よりも、雁夜の方が葵を理解しているに決まっている！

激情で気が動転する中、雁夜は逸る感情にすべてを任せ、口を開いた。

「俺は、俺は貴様などより……先に……ッ！」

呼吸に喘鳴が交じる。ぼやけた視界の隅でちかちかと眩い火花が散り始める。身を焦すほどに熱い激情が、意識すら焼き切れろうと燃え上がる。

「貴様という男はいつもそうだ！ 人の、気も、知らないでエエエッ!!」

雁夜があのと時身を引いたのは、葵の身を案じてこそだった。

間桐の家に嫁げば、葵はあの蟲蔵の犠牲となる。愛した女性が苦しむ姿など、見たくはない。あのと時、あの瞬間、時臣の方がまだマシだと雁夜は思った。認めることは死ぬほど癪だが、それでも時臣になれば任せてもいいと、雁夜は僅かにでも思ってしまった。だから、葵を譲ったのだ。

愛ゆえに。

葵への想いは本物だった。自分が雁夜に譲られたことにすら気付けない時臣とは違う。その思いを原動力に、雁夜は叫んだ。

「貴様などに、葵さんを幸せにする資格があるものかアアッ！」

今まで堪えていた感情が振り切れて、涙が溢れ出る。あとからあとから、ぼろぼろと

面白いように零れ落ちてゆく。

もはや恥も外聞もない。自分自身の見目の醜さは、他ならぬ雁夜自身が誰よりも理解している。それでも、溢れ出した感情の濁流はもう止まらない。今にも倒れそうな体に鞭打つて、脚を引きずりながら、ただ感情に身を任せて前進する。

「違うね。私だからこそ、葵の幸せを、我が子の幸せを願うのだ。家族を持たぬ君にはとうてい理解の及ばぬ感情だろうがね」

「うるさいッ、うるさいうるさい黙れ黙れ黙れエエ！ 貴様にッ、貴様などに、葵さんの心が分かつてたまるものかッ!!」

「その言葉、そつくりそのまま返させて貰おう。本気で人を好いたことすらない君に、私と葵……子を思う夫婦の心など、決してわかるまい」

「——ああああああアアアアああああアアアアッ!!」

これ以上はもう、聞きたくない。

弾ける感情を抑えきれず、雁夜は裂帛の叫びとともに、時臣の胸ぐらに掴みかかった。しわひとつない真紅の背広の襟元を乱雑に掴み、雁夜は震える拳を振り上げる。

それでも、時臣の視線は揺るがなかった。鬼のような形相で迫る雁夜を正面から見据え、淡々と、しかし僅かに熱の込められた声音で告げる。

「葵を幸せにしてみせる。そう思い、私は彼女を娶ったのだ。妻を愛する心。愛娘が生

まれたときの喜び。私の誓いのなにひとつとして、君などに理解されてたまるものか」
「……………あ……………ッ」

「私の家族は、私が救う。それが——人の愛というものだ」

時臣の手が、雁夜の腕を振り払った。触れたのはほんの一瞬だったが、その一瞬でもはや臂力ですら時臣には敵わないことを、雁夜は決定的に悟ってしまった。

支えを失い、脚がもつれ、受け身すら取れずに顔面から地べたへ落ちる。ぶべツ、と情けない声を漏らした雁夜は、一瞬遅れて盛大に血反吐を吐き出した。もう、時臣の顔を見上げるだけの余力すらありはしなかった。

「あ……………ウ……………」

そんな言葉は聞きたくなかった。

時臣の思いなど知りたくはなかった。

最後まで、ただ憎たらしい仇敵で在り続けてほしかった。

或いは、それが時臣の慈悲だったのかもしれない。雁夜の身を焼く炎は、いつまで経っても降ってはこなかった。終焉の時は訪れぬまま、時臣の足音が遠ざかってゆく。もはや、トドメすら刺してはくれないのだと、雁夜は絶句した。

「あ、ああ……………ああああアアああ……………」

雁夜は号泣した。怒りとも哀しみともつかぬ雄叫びを上げて、最後に残った、行き場

を失った力のすべてを振り絞り、地べたを殴りつけた。時臣に届かなかつた拳は、もはや痛みすら感じることもなく、枯れ枝のように折れてひしやげた。

ふと、己の折れた腕がぼやけた視界に入った。もはや血の通わぬしわがれた手が、己の意思とは無関係に震え、蠢く様を見て、雁夜にはそれが、桜の体を這い回る淫蟲となら変わりのないおぞましいモノに見えた。

「雁夜……」

戦いは、万丈の予測に反して、あまりにも一方的で、あまりにもあつけない幕引きだった。雁夜の魂の叫びを間近で聞いた万丈は、どう言葉をかけていいものかもわからず、ただ立ちすくむしかできなかった。

必死に時臣に縋り付き、思いの丈を力の限り叫ぶ雁夜を見ると、いまさら邪魔立てをするのも違うように思えた。どのような形であれ、雁夜は己の命を賭してでも、時臣に喰らいつきたかつた。そして、雁夜はそれを果たしたのだ。

「と、遠坂さん……」

「やあ。また会ったね、万丈くん」

雁夜に思いをぶつけられた当人は、しかしなんの感慨もなく、涼し気な表情のまま万丈の眼前で立ち止まった。雁夜のことをどう思っているのかなど、あえて問うのは無粋

であるように思われた。いや、正確には、聞くのが怖かった。

返す言葉を詰まらせた万丈の肩を、時臣は優しく叩いた。

「私は彼を殺さない。約束は果たしたよ」

「……ああ。確かに勝負は見届けた。あんたの、勝ちだ」

「当然の帰結としか言いようがないがね」

時臣の声音に、万丈はどこか寒々しい印象を覚えた。勝利者の余裕やカタルシスといったものは見られない。他ならぬ時臣自身が、どこか虚しそうに目を伏せた。それきりにも言わず、万丈の隣を通り過ぎて、時臣は屋敷の玄関へと進んでいく。もう、時臣の邪魔をするものは誰もいなかった。

「ますたあ……よく、頑張りましたね」

心のうちにわだかまっていたなにもかもを吐き出し、今まさに燃え尽きようとしている雁夜に、優しく声をかける女がいた。遠のいてゆく意識の中で、雁夜は自分が膝枕をされていることに気付いた。

白くぼやけた視界の中、清姫がゆるく微笑んだ。小さな手のひらが、雁夜の前髪を優しく撫でる。目にかかっていたぼさぼさの白髪が、清姫の手ぐしで整えられ、視界の隅へよけられる。

雁夜は時臣との勝負にすらならないやりとりを思い出し、また、泣いた。

「おれ……は、結局……最初から……負けて、いたのか」

「ええ、そうですね。気持ちいいくらいの完全敗北です……きつと、ますたあが葵様の元を去ったそのときから、勝敗は決していたのでしよう」

一切の嘘のない、正直な言葉だった。

もはやなにも言い返す気力はない。ただ、口をばくばくと開閉させ、掠れた喘鳴を漏らすしか、雁夜にはできなかつた。こめかみを流れ落ちる涙が耳の中に入り込むと、僅かに残った聴覚すらもあやふやになる。それでも、清姫がなにを言っているのかは、わかる気がした。

「ますたあはよく頑張りました。最後まで己の意思を貫き、ひた走った。その結果、誰もますたあに理解を示さずとも……この清姫だけは、最後までおそばにおります。わたくしだけは、ますたあの気持ちを知っていますから」

「あ……ア」

ふと、懐かしい記憶が蘇る。

優しく、温かい、この世の誰よりも愛おしい女の声。

まだ未来のことを考える必要もなく、雁夜が葵と一緒にいられたころの記憶。

呪われた家に生まれた雁夜に優しくしてくれたのは、葵だけだった。葵だけが、雁夜

の満たされぬ心を潤す心のオアシスだった。

「おれ、は……あのとき、葵さんを……」

なにも言わずに葵の元を去った、あのときの判断を雁夜は呪った。時間を巻き戻して、未来を選び直したいとすら思う。

このまま葵と一緒にいれば、葵と自分は結ばれる。そういう確信があった。だけれども、雁夜と結ばれれば、葵は臓硯の餌食となる。それが嫌だったから、雁夜は葵のために、真実を告げず黙って姿を消したのだ。

だから、雁夜は失恋などしていない。ただ、時臣に葵を譲っただけだと信じて疑わなかった。

それが、雁夜の心の隅に残った僅かな望みだった。ふたりの仲を引き裂いた時臣さえ消えれば、葵はまた、雁夜の元へ戻ってきてくれると信じて疑わなかった。けれども、そうではなかった。

時臣は、葵を愛していた。娘を愛していた。それはそのまま、この一年間の血の滲むような努力も、苦しみも、すべては雁夜の独り善がりだったことを意味している。もはや都合のいい幻想すら見ることは許されず、なにもかもを失って、雁夜は独り寂しく死んでいく。

死の間際になって、雁夜ははじめて、失恋を経験した。

「嗚呼。おれは、結局……ひとり、虚しく死んでいくんだな」

「それは、違います。ここにはわたくしがおります。わたくしの命は、常にますたあと共に……あなた様と一緒に逝けるなら、わたくしは本望でございます」

「……あ」

清姫の目尻から湧き出た涙が、頬をつうと伝つて、雁夜の頬に落ちた。

なぜ清姫が泣いているのか、雁夜にはその理由がわからなかった。最後まで独り善がり走り続けた雁夜には、他人の心がわからない。けれども、清姫の涙は、案外と気分の悪いものではなかった。乾いた心に吹き込む冷たい風が、ほんの少し遮られた気持ちになつた。

雁夜の震える手を、清姫は強い力で握りしめた。令呪の刻まれた、ふたりを結んでくれた右腕を。

「ごめんな……、俺は、君に……なにも、してやれなかった」

「ふ、ふふ。なにを今更……、あなた様が人であることなど、先刻承知でございませす！……だから、よいのです。それでもあなた様のそばにいたいと願うのは、あくまでわたくしの自分勝手。ますたあが謝ることなど、なにも……なにも」

雁夜という男は、どうしようもない甲斐性無しで、救いようのない愚か者だ。愚かだから、清姫がなぜ泣いているのかも、自分がなにを謝ればいいのかも分からない。それ

でも雁夜には人並みの優しさがある。だから雁夜は、意味もわからず謝罪する。

清姫はそんな雁夜の心を汲み取って、一緒に涙を流してくれる。馬鹿でもいい。クズでもいい。すべてを受け入れて、清姫はただそつと寄り添ってくれる。この少女こそが、雁夜の元に残った最後の宝なのだ。まだ雁夜の手元には残ったものがあるということに、ここへきてようやく気が付いた。

ほんの一拍程度の無言の間において、雁夜はふと、視線を空へと向けた。高く昇った太陽のあまりの眩しさに、雁夜の視界にはもう、なにも見えはしなかった。

「きよ、ひめ」

「はい。ますたあ」

雁夜の手を握る清姫の握力が、ぐつと増した。正確には、既に触覚が死んでいるのでわからないのだが、清姫の声を聞いていると、不思議と状況が伝わってくる。

清姫の手の中で、雁夜のしわがれた手に刻まれた令呪が、一際眩しい輝きを放った。

「もう、俺の、ことは……いいから。桜、を」

「なっ……ま、ますたあ……!?!」

「桜を……助けて、やって、くれ」

最後に残った命の灯火を燃やし尽くして、雁夜は己が胸に抱いた願いを告げる。

「ここまで、長い戦いだっただ。葵を巡る十年の恋愛対決は、随分と遠回りをしたものの、

最終的には時臣の勝利に終わった。それは認めてやってもいいが、それはそれとして、雁夜は時臣が死ぬほど嫌いだ。殺してやりたいほど憎たらしいし、時臣が葬を救う姿を見るくらいなら、自分が死んだ方が幾分幸福だとすら思える。

例えこれから死ぬとしても、時臣を認めて死ぬのだけは、絶対に御免だ。雁夜はそう強く思い、重ねて願った。

「俺の、分まで……桜に、幸せを」

二画目の令呪に続いて、最後に残った三画目の令呪も燃え尽きた。

時臣は、自分が桜を救うと息巻いていた。けれども相手はあの臓硯だ。時臣ひとりでは失敗するに決まっている。臓硯は、そんなに甘くはない。

だから雁夜は、後のすべてを託すのだ。

自分の手で娘を救うつもりだったのに、その役目を雁夜のサーヴァントに奪い取られたと知ったとき、時臣はどんな顔をするのだろうか。それを思うと、少しは気が晴れる。

最後の最後に、雁夜は微かに笑みを浮かべた。

桜が救われる様を見届けられなかったのは心残りだが、最後に意趣返しをしてやったという気持ちが大きかった。胸のすくような思いだった。それすらもくだらない独り善がりであることは自覚しているが、それでも。

「——あ、ああ……そんな。ましたあ……ましたあ！」

清姫は、冷たくなった雁夜をひしと抱きしめた。

通常、魔力の供給源たるマスターが息絶えれば、サーヴァントは消滅する。だということに、清姫の体内には未だ溢れんばかりの魔力がみなぎっている。

死の間際に注ぎ込まれた令呪の魔力のういによって、消えゆく運命だったはずの清姫の霊基は、なおもこの現世に繋ぎ止められてしまったのだ。

「独りで逝くなんて……っ、最後は一緒に逝くと、確かに申し上げましたのに……！ あろうことか、わたくしの言葉を嘘に変えてしまうなんて……そんな、そんなの……あんまりではございませんか……ッ！」

清姫は、雁夜の亡骸を抱きしめ、声を荒げた。

最後まで一緒にいられば、それでよかった。それが清姫の唯一のわがままだった。どのような道を辿っても逝くときは一緒だと、そう思えたからこそ、清姫は雁夜の行動を支え続けてきたのに。

雁夜はついでに清姫の思いを理解することなく、最後まで自分の感情を優先して、そしてひとりで逝ったのだ。

「どうして……」

清姫が見初めた男は、いつだって先に逝く。

あとに残されたのは、これから死にゆく清姫ひとり。

それでも、生きないわけにはいかない。戦わないわけにはいかない。

愛した男の最期の祈り、果たさずに逝けるほど、清姫は薄情な女ではない。

「ますたあ」

もう二度と呼吸をすることのない雁夜の唇に、清姫はそつと口付けをする。燃えるような熱い口付けを。生前の雁夜なら、きつと許してはくれなかつただろう。清姫の、ほんのささやかなわがままで。

雁夜の頭を優しく横たえ、立ち上がる。刹那、令呪によつて齎された膨大な魔力が清姫の体内で駆け巡り、清姫の霊基を構成するエーテルを一斉に励起させた。

清姫を中心に、ぶわりと風が舞い上がる。燃え立つ蒼炎が、和服を端から焦がしてゆく。純白の和服は黒く染まり、薄緑の髪は色素が抜けきつて、透き通るような白髪へと変質する。

雁夜がその命と引き換えに二画分の令呪で齎したのは、二段階分の霊基再臨だった。

「——ますたあの最期の願い。この清姫、たしかに聞き届けました」

黒く彩られた和服の裾を翻し、清姫は前を向いて歩き出す。

雁夜は、最期まで子供のように純真な男だった。幼稚園児のような愚かな男だった。それでも、最期には失恋を知り、誰かを助けることを願って逝つた。清姫には、主の願いを叶えるため、最後の戦いに臨む義務がある。

「もう、いいのか。バーサーカー……いや、清姫」

数歩離れた場所で静かに見守っていた万丈の声がかかる。

前世で愛を語り合った男女の最期の逢瀬に水を差さず、そつとふたりきりにしてくれたのだろう。その心遣いに感謝しながら、清姫は万丈へ視線を返した。

「ライダー……いえ、万丈様。わたくしはこれより、サクラを救うため……ただそのためだけに最後の戦場へ赴きます。あなた様は、どうなさいますか」

「だったら、俺も行く。元々、それが俺の目的だ……せめて雁夜の分まで、俺にも一緒に戦わせてくれ！」

「ふふ。あなた様なら、そう言ってくださると思っておりました」

予想通りの答えに、清姫はくすりと柔らかに微笑んだ。

急ぐ必要がある。この霊基は、令呪で強引に生きながらえさせているにすぎない。雁夜が最期に遺してくれた魔力が尽きる前に、桜を救い出す必要がある。

先陣を切って歩き出した清姫に追従するかたちで、万丈も歩き出した。

「——じゃあな、雁夜」

勝利、と読ぶにはあまりにも後味が悪いものだった。時臣はただ、雁夜の自滅を見送っただけだ。

「私も、どうかしているな」

時臣は自嘲気味に独りごちる。

本来ならば、雁夜などに時臣の心を語って聞かせてやる義理はなかった。魔術を貶め、独善により、己が欲望のままに戦う愚者と同じ舌戦の土俵に立つことそのものが時臣の品位を下げる行為に他ならないのだから。

それでも時臣が言葉を尽くしたのは、雁夜もまた、曲がりなりにも桜のために立ち上がった男だと認めたからだ。純然たる事実として、それだけは認めてやってもいい。だが、それはそれとして、あまりにも不快の度が過ぎる戦いだ。勝利したとて達成感もなにもない。雁夜は、最期まで独り善がりを貫き、勝手に自滅したのだから。

深く嘆息した時臣は、もはや雁夜について思い煩うことをすっぱりやめて、アルターエゴとの戦闘に入ったセイバーに思いを巡らせる。時臣の体から吸い上げる魔力量が増加している。セイバーが苦戦していることの証左だった。

「セイバー……」

土地の管理者たる遠坂が誇る地の利は既になく、アルターエゴの宝具圏内では宝具の魔皇剣も、闇のキバすらも制限を受ける。

セイバーの戦いは、此度の雁夜との戦いとは訳が違う。なにも失わずに勝利を収めようとするのは、あまりにも見積もりが甘い。

時臣は、右手を緩く胸元へと掲げた。左手で、最後に残った令呪を撫でる。僅かに残る名残惜しさを振り払ったとき、時臣の令呪は淡い輝きを放ち始めた。

「王よ。御身は、我が道行きを見届けてくださるのでしよう。であれば、このようなところで敗北することを、認めるわけには参りませぬ」

最後の令呪を失うことの意味は、時臣とて理解している。だが、だとしても、もはやそんな問題ではない。

僅かながらも、はじめて心の繋がりを感じた王の勝利を、時臣は願わずにはいられなかった。

「令呪をもって奉る。王よ——今一度、御身に宝具の煌めきを。かの仇敵を討ち倒すだけの力を」

祈りの言葉を聞き届け、最後の令呪は弾けるような真紅の輝きとともに消え去った。

消え去り、掠れた令呪の痕を一瞥する。ほんの一瞬の瞑目ののち、時臣は再び歩き出した。

セイバーは、必ず勝利する。然る後、セイバーとともにスタークを仕留め、追加の令呪を獲得すれば、ここで令呪を切ったとて帳尻は合う。

「遅かったのう。待つておつたぞ、遠坂の」

「……………」

黙考しながら間桐の玄関前に立ったそのとき、ギイと木が軋む音を立てて、扉は内側からひとりでに開け放たれた。間桐臓硯は、何事もなさそうに頬を歪めて笑った。まるで、ここに至るまでの雁夜と時臣の戦いなどなかったかのように。

「なにをぼうつとしておる。早く中へ入らんか」

「ッ、これは失礼をいたしました。それでは、お言葉に甘えて」

軽い会釈ののち、時臣は間桐の屋敷へと脚を踏み入れた。

臓硯は満足げに頷くと、くつくつと喉を鳴らすようなしわがれた笑みを零して背を向けた。着いてこい、ということだろう。ここが敵の魔術工房であることを念頭において、時臣は油断なく臓硯に追従する。

胸部装甲から白煙をくゆらせながら、ダークキバは立ち上がった。キバエンペラーの必殺の蹴りを直撃で受けながら、それでも戦意には微塵の陰りもありえない。

マスターである時臣から、現在進行系で魔力を吸い上げ、今しがた受けたダメージを急速に修復する。憎き仇敵を眼前に捉え、ダークキバは低く唸った。

「真夜と、音也の子……貴様だけは、赦すわけにはいかん……！」

忌々しくもキングの元からクイーンを奪い去った男と、キングの思いを踏み躪った女の間に生まれた禁忌の子。セイバーとして、キングとして、己の持てる全存在を懸けて

でも、紅渡の存在だけは断じて認めるわけにはいかない。

なによりも、セイバーは時臣に宣言した。その道行きを見届けると、口に出して約束をしたのだ。なれば、違えることは赦されない。

セイバーは、己の責任を放棄し、愛などという不確かな感情に身を任せた愚か者とは違う。必ず勝利し、時臣の元へ戻る。それが、王の責任だ。

「決着をつけよう、キング」

キバエンペラーが、ザンバットソードを振り抜いた。昨夜、ダークキバを下したあの技を使うつもりだろう。

ダークキバもまた、魔皇剣を振り抜いた。時臣の祈りとともに注ぎ込まれた膨大な魔力を内包した、紅く煌めく魔皇剣を。

「……なぜ、ザンバットが!？」

「昨日とは……状況が逆転したな、キバ」

たった一画だけ残った最後の令呪を費やして、時臣はセイバーの勝利を願い、祈りを捧げたのだ。爆発的な魔力充填は、王城の重圧をも弾き飛ばし、ダークキバに最後の力を与えてくれた。

ここまでお膳立てをされた上で無様に敗北を喫するようでは、セイバーは二度と時臣に顔を合わせられない。今こそ、生前の雪辱を果たすとき。奪われ続けてきた過去を精

算するため——ただそれだけを胸に、ダークキバは燃え盛る怒りの刃を抜刀した。

「——この一撃で、貴様ら親子に刻まれた忌まわしき運命さだめを断ち切るッ！」

剣から溢れ出た魔力が、荒れ狂う暴風雨となって降り積もる花びらを舞い上げる。

濃密な魔力の突風は、まるで質量を持ったように吹き荒び、風の刃となった魔力の嵐は、劇場内のなにかもを消し去ろうと暴れ回る。黄金劇場の柱に、壁に、空間に。僅かな亀裂が奔った。あまりにも膨大すぎる魔力の奔流に、結界そのものの限界が近づいているのだ。

「いいだろう……正面から受けて立つ！」

対する好敵手キバエンペラーは、逃げも隠れもしなかった。

真のキングたるダークキバの魔皇剣と比べれば、キバエンペラーのザンバットソードの出力などたかが知れている。だというのに、それでもキバエンペラーは、臆せずに剣を構え、腰を低く落とした。

互いの全力を尽くした宝具の激突だ。次の一撃で、長きに渡る因縁に決着がつく。ダークキバは、己の持つ魔皇力をも一点に注ぎ込み、世界をも斬り裂く必殺の魔皇剣を高らかに振り上げた。

第27話「救済のアイ・ベグ・ユー」

真紅のステンドグラスを通った陽光は、淡い赤の輝きとなつて宮廷へと降り注ぐ。広間を包むあたかな光は、贅を尽くした黄金の装飾の数々に反射して煌めき、この皇帝の空間を幻想的に演出している。

渡は、広間の中心でヴァイオリンを演奏していた。いつから演奏していたのかはわからないが、ずっとここで演奏していたような気もするし、今はじめたばかりと言われればそんな気もしてくる。時間の概念すら曖昧な空間に響くヴァイオリンの音色は、重々しくも妖艶に、たつぷりと情緒を乗せてうねる。それは、渡の心の在り方を示す音色だった。

やがて演奏は節目を迎え、渡はヴァイオリンの弓を握る腕をそつと下ろした。玉座に腰掛けていた少女が、すつくと立ち上がる。真紅のドレスを翻し、少女は渡の目前まで進む。

「うむ、実によい演奏である。そなたの演奏は、いつ聴いても余を飽きさせぬ……これぞまさしく、至高の芸術よな」

胸を張つて花のような笑顔を送らせる少女の称賛に、渡は面映ゆくなつて微笑んだ。

人はみな、心で音楽を奏でている。この少女は、渡の心の音楽を認め、その真価を引き出してくれる。彼女がいてくれるなら、渡はもつと素直に、心のかたちを表現できる気がした。

黄金で彩られた踵をカツ、カツ、と甲高く鳴らして、少女は広間を闊歩する。

「人はみな、己が命という演目を奏でる芸術家だと……そなたは言ったな」

渡は、おずおずと頷いた。それだけで、少女は満足げに破顔した。

「芸術を……否、人の心の音楽を守りたいと願う尊き心——そなたが駆け抜けたのは、まさしく、強く、美しく！ 鮮やかに煌めく流星の如き生命の軌跡であるッ！」

少女が進んだ先に、光り輝く剣があつた。

本来の担い手を失い、人理によつて取り上げられた至宝の剣。その、世界にたつた一振りしか存在しない星の聖剣が、約束された勝利を言祝ぐように、燦然と光輝いている。「そなたは口下手なれど、熱く燃え盛るような想いを秘めていることを、余は知っている！ そうだ、ゆえにそなたの奏でる演目は、余の心を大いに奮い立たせる！ なればこそ——ここで勝利せずしてなんとするッ！」

少女が、その細く嫋やかな指で、聖剣を力強く握りしめた。轟風が巻き起こる。渡よりもずつと華奢な少女が、唸りを上げる聖剣を手懐け、振り抜いた。

聖剣が放つあまりの眩しさに、渡は目を細めた。それは、長い夢の果ての曙光を思わ

せる輝きだった。溢れ出る命の輝きが、渡の胸の内にわだかまっていたあらゆる焦りを、不安を、優しく払拭していった。

この世のあらゆる地獄を斬り裂き、死と絶望の恐怖すら振り払う神造兵装。人の尊さを神話に刻み付けた、散りゆくすべての者たちが思い描く奇跡の結晶。

例え本来の担い手が醜き人の欲望に囚われようと、人理が死守した最後の宝剣。少女はその輝きを掲げ、真紅のスカートをばさりと翻し、決然と胸を張った。

「ゆくぞ、我が半身よ！ 勝利は既に約束されている！ 余が約束した！ この道行き
の先に、輝かしき栄光の明日を掴み取るのだ！」

渡は、うたかたの夢から現実へと意識を引き戻した。

魔皇剣を中心に巻き起こった魔力の奔流は、直上へと延びる積乱雲さながらに渦を巻き、キヤツスルドランを再現した固有結界にみしみしと軋轢を生じさせている。常人であれば容易く吹き飛ばされてしまう突風の只中で、キバエンペラーは静かにザンバツソードを構えた。

今ここに、桐生^{マスマ}戦^{タケ}兎はいない。令呪の補助なしで、英雄王の宝具を迎え討つことは、さしもの抑止の守護者の任を課されたキバエンペラーといえども、骨の折れる行為といえる。だが、それでも、今の渡に、逃げ出すという選択肢は存在しない。渡は、キバエン

ペラーの仮面の下、決然とまなじりを決して、荒れ狂う魔力の嵐へと真つ向から向かい合う。

ベルトから飛び立った黄金キバツの蝙蝠トが、キバエンペラーの仮面のすぐそばに寄り添った。

「……やるのか、渡」

「うん。これは、僕がやらなくちゃいけないことだから」

「そうか。だったら、止めねえよ。お前なら絶対に負けねエ！　って……オレは信じてるからよ」

長年の友からの絶大な信頼を受けて、渡は仮面の下で小さく微笑んだ。

「ありがとう……行こう、キバツト！」

「おう！　キバツて、行くぜエツ！」

力強く頷いて応えたキバエンペラーは、己の靈基に宿った全回路をザンバツトソードへと接続する。緩く振り上げたザンバツトソードの柄に装着されたザンバツトバツトで、刀身を研ぐ。

即座にキバエンペラーから吸い上げた魔皇力が充填され、透き通るようなプリズムの結晶を思わせる魔皇剣の刀身に、真紅の輝きが満ちてゆく。もう一度、ザンバツトを研ぐと、真紅の輝きは次第に光度を上げ、やがて超高光度の輝きは、白とも黄金ともつか

ない光を放ち始めた。

「ダークキバが巻き起こした魔皇力の嵐が、キバエンペラーを中心に引き裂かれてゆく。いま、キバエンペラーから発せられる魔力は逆巻く風を呼び、その余りにも濃密な気圧差は、この身に触れようと迫る一切合切を吹き飛ばさんと猛り狂っている。

闇を纏って荒れ狂う真紅の魔力の嵐のその中心に、黄金のキバはなにものにも汚されぬ星の輝きを纏い、剣を構えていた。

——いま、機は満ちた！

「約束されたツ！」

周囲の光を集めて、キバエンペラーの魔皇剣は黄金の輝きを迸らせる。

対するダークキバも、既に言葉が必要とはしていない。キバエンペラーの魔皇剣に対し、正面から撃ち合うつもりでいる。あの男は、逃げも隠れもしない。王として、最後の戦いに挑む覚悟でここに立っている。その矜持が、大気を震わす魔力を通じて、ひしひしと伝わってくる。だからこそ、こちらもまた、逃げることは赦されない。

今、黄金のキバが掲げたソレは、かつて夜よりも昏い乱世の闇を、一刀のもとに斬り祓った、栄光という名の祈りの結晶。その意志を誇りとともに掲げ、渡は、新たな聖剣の担い手として、手に執る奇跡の真名を高らかに謳う。

その名は——！

「勝利の剣——ツ!!」
エクスカリバー

ザンバットエクスカリバーから放たれた極光が、闇を引き裂き、結界内のすべてを呑み込まんと奔る。吼え猛る光の奔流が、闇を纏った魔力の刃と激突した。

黄金の魔力と闇の魔力が互いにひしめき合い、灼熱の突風となって吹き付けてくる。超高熱の魔力は、黄金劇場を形成していた支柱を、壁を、床を、あらゆる装飾を捲れ上がり、粉々に粉碎し、跡形すらも残さず蒸発させてゆく。

その只中で、ダークキバは憎悪の叫びをあげた。

「黄金のキバ……紅、渡！ 貴様だけはツ——このオレの存在すべてを懸けてでも……ここで消し去ってくれるツ!!」

黄金の輝きを押し返す闇の奔流の重さが、キバエンペラーの肩をびりびりと震わせ、キングは、その言葉の通り、己の命すら魔皇剣に焚べて、この一撃にすべてを懸けている。

事実として、キバエンペラーの持てる魔力のみで、原初の地獄を体現した魔皇剣の輝きを押し返すには、僅かに足りていない。徐々に、黄金の輝きが闇に吞まれようとしていた。敵の宝具もまた、間違いようもなく、規格外の宝剣による至高の一撃であることの証左だった。

「ぐ……ウ、う……ツ！」

聖剣に接続した魔力回路を、夥しい量の魔力が循環してゆく。星の聖剣は、容赦なく膨大な魔力を要求し、アルターエゴとしての渡の霊基から無尽蔵に吸い上げてゆく。霊格が軋みを上げ、剣を握る手が震え始める。

本来の担い手でない渡が、それでも人理に与えられるまま、無理矢理に聖剣を抜刀したのだ。霊基へとかかる負荷は尋常なものではない。

元来、魔術師ですらない渡の体に例外的に与えられた回路が、全身のあちこちでショートをしはじめた。溢れ出した魔力が火花を上げて渡の体を内側から焼き焦がす。体が熱い。膝が震える。視界が揺れる。剣を構える体のバランスが、がくりと崩れた。それでもキバエンペラーは、両足で踏ん張って、聖剣を構え続ける。

「わ、た……るウー！ お前が折れない限りッ、俺も……諦めねエー！ キバレエエッ！」
ベルトに収まったキバットが、裂帛の叫びをあげた。

体内で練られた魔力の循環に、キバエンペラーの体が熱を持ち始めている。核爆発の直撃にすら耐えうる黄金のキバの鎧が、かろうじて体内での魔力の暴発を抑え込んでくれているもの、鎧の力を制御するキバットにかかる負荷もまた甚大なものだった。

このまま魔力の放出が続けば、渡の霊基はキバの鎧諸共融解してもおかしくはない。
「渡、きあん……！ あなたは……ッ、ひとりでは、ありません！ 私たちが、ついてます……だからッ、負けないで！」

左腕に装着されたタツロットもまた、歯を食いしばって、キバエンペラーの体を超高速で循環し続けている魔力の圧力に耐えている。タツロットの体には、小さな亀裂が入り始めていた。それでもタツロットは、渡の想いに応えるため、小さな体で苦痛に耐えている。

「キバット……、タツロット……！」

まだ、もう少しだけ、頑張れる。あと少しだけ、踏ん張れる。

渡は、この極限の状況の中、それでも笑った。みんなが一緒にいる、それだけで、恐怖も不安も吹き飛んだ。

絶対に勝利する。その決意を胸に改め、キバエンペラーは再び腕に力を込めて、ダークキバの宝具を押し返しはじめた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

腹の底から、力を振り絞る。

体内に残った魔力のすべてを動員して、渡は剣を執る手に力を込める。ただ、体内を循環する魔力の流れをコントロールすることに集中する。

剣を構え直し、崩れた姿勢を正す。そのとき、体内を巡る魔術の回路が一気に拡張した。キバエンペラーを中心に、虹の魔法陣が展開される。幾重にも折り重なった魔法陣は、高速で回転しながら、キバエンペラーの魔力の循環を補助してくれる。一気に、体

が楽になった。

「……………ッ！」

聖剣に宿った黄金の輝きが、今までとは異なる輝きを孕んで乱反射しはじめた。

赤、緑、青。三原色の光の瞬きが、星の聖剣にさらなる彩りを加えている。体を苛む熱が、心地のよいあたたかさに変わった。剣を執るキバエンペラーの姿に、渡だけが知る気高き少女の幻影が重なった。

“ありがとう……………みんな！”

キバエンペラーは、三原色に光り輝くザンバットエクスカリバーを構え、一気にダークキバの闇の刃を押し返した。世界のすべてを包み込まんとな放出された星の輝きが、ダークキバの闇を散らしてゆく。

「……………そんな、馬鹿なッ、貴様ごときに！ このオレが……………このオレが、またしてもッ!?」
「僕は、ひとりで戦ってるんじゃない。ここには、みんなが一緒にいる……………！ だから僕は、戦える！」

「ほぎくなッ！ 弱者が寄り集まったところで……………真の強者を打ち負かすことなど……………！」

「できるッ！ 僕らみんなの力で……………今度こそ、お前を倒す！」

剣を握る手に、力を込める。

今こそ、宿命を断ち切るときだ。

「いけエエエ、渡ウー……ッ！」

「渡さん！ 勝利は、すぐそこですッ！」

仲間たちの声が、渡に力を分け与えてくれる。

三原色を孕んだ黄金の輝きが、奔る。闇を振り払い、原初の地獄をすら引き裂き、キバエンペラーの決死の一撃は、遂にダークキバの頭上に降り注いだ。

星の瞬きが、ダークキバの総身を形成する霊子に至るまでを悉く呑み込み、核爆発にすら耐える鎧を灼熱の魔力の只中へと晒す。ダークキバにはもはや、超高压力の魔力の輝きの中、声にもならぬ絶叫を張り上げるしかできなかつた。

屋敷の応接室に通された時臣は、そこではじめて、変わり果てた愛娘の姿を見た。

黒く艶のあつた髪は、紫がかった色に変色している。見開かれた瞳には精気が宿つておらず、光を移さぬ虚のような瞳がただ呆然と時臣を見据えている。身なりこそ綺麗な洋服を着せて貰つてはいるものの、もはや凜と一緒になつてはしやぎまわっていた、元気で、されども奥手な少女の面影はそこにはなかつた。

「桜……」

震える声で、時臣は愛娘の名を呼んだ。

返答はない。桜はただ、困惑した様子で小首を傾げ、実父である時臣を見つめ返すだけだった。

「ほれ、サクラよ。実の父の呼び掛けじゃぞ、返答くらいせんか」

「え……でも、おじいさま、私はもう……」

杖でこつこつと床を叩きながら、臍硯が下卑た笑みを浮かべる。

桜は心底から当惑した様子で、次に発する言葉すら思い浮かばぬ様子だった。

昨夜の雁夜の言葉が、時臣の脳裏に蘇る。絶望的な状況の中で、本心を口にするすべからず出来なくなってしまう愛娘の境遇を思い、時臣は一年前の己の判断を深く後悔した。

時臣は、娘をこんな姿にしたくて、間桐の養子に送り出したのではない。

「桜……すまなかつた。私が、間違っていた」

「え、えつと……あの……急にそんなことを言われても」

「もう、これ以上、このようなところで苦しむ必要はない。間桐は約束を違えた。……私は、お前を連れ戻しにきたのだ、桜」

「……っ」

見開かれたままの桜の瞳が、困惑した様子でぐるぐると右往左往する。

返す言葉を失った桜は、ただ胸元に手を当てて、数歩後退るしかできなかった。

それも当然だろう。変わり果てた間桐雁夜の有り様を目の前で見せつけられておきながら、臓硯の意に反する言葉を、他ならぬ臓硯の目の前で口にできるはずもない。

臓硯が、わざとらしく桜の肩に手を置き、庇うように前に出た。その仕草が、時臣の目には度し難いほど醜悪なものに見えた。けれども、時臣にも立場というものがある。下手なことは言えず立ちすくむ時臣を挑発するように、臓硯はその歪な笑みを深めた。

「それは困るのう、遠坂の。サクラは既に間桐の跡取りとしての教育を積んでいる段階でな。それを目の前で奪われることを容認するほど、ワシも寛容ではないぞ？」

「私が我が子を手放したのは、この子の将来を思ってこそ。正当なる魔導の薫陶を受けることも叶わず、ただ体に刻み付けさえすればよいという考えであれば、それこそ当初の約束を違えている」

「カカツ、これはまた異なことを言いおるわ……サクラが正当なる教育を受けておらぬなどと、いったいどの誰が吹いたほら話か」

「ツ……、あなたは、この期に及んでまだそのようなことを……！」

「はてさて、お主は然様な根も葉もない戯言に耳を貸すほど愚かしい男ではないと思っておったが、果たして」

くつくつとわざとらしく笑いながら、臓硯が桜の背を軽く撫でた。

「ほれ、サクラよ。遠坂の当主は然様なお主の処遇になにやら不服を申し立てておるよ

うじゃが、当のお主はどう考えておるのか……自分の口で説明してみせい」

「はい、おじいさま。私はもう、間桐の子ですから……今更、遠坂に戻るつもりはありません。私はこれからも、間桐の子として教育を受けていくつもりです」

一切の感情のこもらぬ瞳で、桜は時臣を見上げた。瞬間、時臣を取り巻く世界が足元から崩れ去っていくような錯覚に囚われた。

他ならぬ桜自身がこう語る以上、無理を言つて遠坂に連れ帰ることはできない。そんなことをすれば、それこそ、遠坂の側が筋を違えた慮外者の誹りを受けることになる。

「馬鹿、な……桜」

「帰ってください。私はもう、あなたの娘ではありません」

桜はそれだけ言うと、興味を失ったように時臣から視線を外し、俯いた。見開かれたままの感情を映さぬ瞳で、ただぼうつと床を眺めている。まるで、意志のない人形のようだった。

愛する我が子をこんな姿に変えてしまった。その事実が、時臣を苛む。返す言葉を失い、ただ拳を握り込むしかできない時臣の代わりに口を開いたのは、この場に招待されるべくもない、招かれざる少女だった。

「嘘、ですね」

あの日、冬木の市民公園ではじめて聞いた声と寸分違わぬ少女の声音だった。振り返

ると、黒く染まった和服を着た少女が、万丈龍我を引き連れて、誰はばかることなく応接室へと足を踏み入れていた。

間桐雁夜の姿は、既がない。それだけが、あの夜との違いだった。

「きみ、は……バーサーカー?」

「時臣様。わたくしには、嘘が分かるのです。その少女が心の奥底で願っているのは、そのような上辺の言葉ではございません」

桜は、当惑をありありと示しながら臓硯の影に隠れた。桜の頭を撫でる臓硯を、清姫はその蛇のような双眸で睨め付ける。清姫の瞳の中には、真紅の炎が渦巻いていた。それが憎悪に燃える怒りの炎であることは、誰の目にも明白だった。

今にも臓硯目掛けて飛びかかりそうな勢いのまま、清姫は声を張った。

「サクラ——あなたにも女としての矜持があるなら、踏み躪られるだけの花でいるのもこれまでになさい。女には、女の幸福というものがあります。あなたは、もつと素直に、それを求めてもよいのです」

「そんなの、私……知りませんっ」

「サクラ! お前はもう、こんなところになくていいんだ! 遠坂さんは……お前の父親はッ、お前を救うためにここまで来たんだよ!」

万丈が続けて叫ぶが、それでも桜は不安げに視線を泳がせることしかできない。

なにを不安に感じているのか、その答えは明白だ。臓硯という絶対的な支配者が、今も桜の心を幽閉している。それが分かったところで、そのような指摘はそれこそ言いがかりと一蹴されておしまいだろう。王手チェックをかけるには、今ひとつ決め手が足りない。

清姫はあからさまな嘆息を零して、時臣の隣まで歩み寄った。

「時臣様。あなた様は、先程からなにを黙ってらっしゃるのですか」

「なに？」

「よもや、こんなところまで来て、まだ己の本心を口に出来ずにいるなどと……呆れたものですね。そんなことで、よくもまたあにそのような啖呵が切れたものです。ご自分の家族は、ご自分で救うのでしょうか？ それとも、あの言葉は嘘だったのですか」

突き放すような冷たい口調だった。

なんの責任も負わなくいい部外者だから、清姫はそんなことが言えるのだ。あの雁夜と同じ、己の分を弁えぬ無礼者、と。まずはじめに怒りがこみ上げるが、次いで清姫の言葉の意図を咀嚼する。

己の本心。

まだ時臣は、桜になにも伝えていないのではないか。

清姫は、時臣の顔すら見ず、扇子で口元を隠したまま淡々と続ける。僅かな嘲りすら含んだ声音で。

「まあ、この期に及んで本心のひとつも口にできないような父親であれば、所詮その程度ということでしょう。少しでも期待をしたわたくしが愚かでございました。あなた様かなにもなさらないのであれば、あの子はわたくしが救います」

「なっ……」

言うが早いか、清姫はばさりと勢いよく開いた扇子を仰いだ。蒼炎がこうと唸りを上げて、臓硯目掛けて放射される。これには流石に時臣のみならず、万丈も絶句した。

「ま、待て、そんなことをしたら……」

「サクラに嘘を吐かせているのは、他ならぬその男です。その男さえ消えれば、サクラは嘘を吐く必要がなくなる。なにか問題でも？」

清姫は淡々と扇子の先を臓硯に突き付け、この場の誰も言えなかつたことを言つてのけた。その眼差しは、既に臓硯を敵と定め、昏く据わっている。

室内で放たれた蒼炎が臓硯を呑み込むかと思われたそのとき、どこからともなく霊体化を解いて姿を現したのは、漆黒の甲冑を纏ったバーサーカーだった。現れると同時に抜き放った剣の風圧が、清姫の炎をくゆらせ、その軌道を逸らす。

「——カカツ、嘘を見抜くサーヴァントとは、これまた面妖な。雁夜め、最後の最後に面倒な置き土産を残して逝きおつて……どこまでも親の手を焼かせる^{せがれ}倅よのう」

バーサーカーに吹き払われた蒼炎の一部が絨毯に燃え移った。徐々に火の手をあげ

はじめる様を見ても、臓硯はなんら動じる様子なくいと笑みを深めるだけだった。

数瞬遅れて、火災報知器が警報を鳴らし始める。次いで、間桐の邸宅に備え付けられたスプリンクラー設備が作動し、天井からシャワーの放水が始まった。室内に降り注ぐ雨の中、一足先に戦闘態勢に入った清姫が臓硯と向かい合う。

時臣は、未だどう動くべきか判断ができずにいた。ここで力に任せることは、遠坂のやり方ではない。

「……フン。遠坂の小倅はまだ踏ん切りがつかぬか。まあ、それもよい。魔術師として、至極当然の判断じゃろうて」

「テメエ、この期に及んでまだンなこと言ってるのか、臓硯！」

「ライダーか。相も変わらず血気盛んなことよ。なぜお主が死んだはずの雁夜のサーヴァントとともにこの場に乗り込んできおったのかは知らぬが、まあ、なんでもよからう。みな纏めてここで消えるのじゃからな」

臓硯の号令に従って、黒い甲冑のバーサーカーが一足跳びに万丈へと襲い掛かった。

振り下ろされた剣の一撃を転がって回避しながら、起き上がりざまに構えたクローズ・マグマナツクルをベルトへ装填する。

「変ツ身！」

掛け声と同時にベルトのレバーを回転させると、万丈の背後に形成された巨大な坩堝

から、夥しい量のマグマが溢れ出した。マグマは室内のあらゆる物質を焼き払いながら、
 万丈を包み込み、その姿をクローズマグマへと変身させた。

「カカツ、これは善哉。ではバーサーカーよ、こちらも見せてやれ」
 「ッ!!」

言葉にならない絶叫に続いて、バーサーカーの甲冑が漆黒の闇に覆われる。闇は瞬く
 間にもうもうと立ち込め、バーサーカーの姿を完全に覆い隠した。

「ッ、なんだ!」

クローズマグマも、清姫も、時臣も。臍硯の背後に隠れた桜までもが、息を呑んでバー
 サーカーの身に起ころうとしている異常に視線を向ける。

数秒の沈黙を引き裂いて、バーサーカーが纏った闇の中から飛び出したのは、真紅に
 燃えるエネルギー波だった。すかさずビートクローザーを構えたクローズマグマが、時
 臣らを庇うように前に進み出て、放たれたエネルギー波を振り払う。

一瞬ののち、クローズマグマは絶句した。

「なッ……なん、で」

バーサーカーが纏った闇が晴れたとき、そこにいるのは既に黒い甲冑の騎士ではなく
 なっていた。

ダークレッドとマットブラックの装甲を、ゴールドの装飾で彩った異星の仮面ライ

ダーが、ばさりと音を立ててマントを翻す。はじめうつむき加減だった漆黒のコブラの面は、下方から舐めるようにゆっくりと視線を上げて、クローズマグマをじつと見据えていた。

エボルトとよく似た装甲を、ドラゴンとヴァンパイアを想起させる装飾で覆い隠したその仮面ライダーを、万丈は知っている。

「なんでテメエがここにいるんだよッ！」

かつて伊能賢剛いのうけんこうが変身し、仮面ライダービルドを窮地に陥れた悪の戦士——仮面ライダーブラッドがそこにいた。

「これぞ地球外生命体の遺伝子をも取り込んだワシの秘蔵っ子よ……尤も、姿を変える能力そのものはバーサーカー固有の能力じゃがな」

「地球外生命体の遺伝子って……！ テメエまさか、スタークと手を組んだのか!？」

「カカツ、所詮お主らはここで散る命。然様な問いに答えてやる義理もあるまい」

「……ッ、上等じゃねえか！ その黒い野郎には借りがあつ！ 見せかけだけのハリボテなら、このオレがブツ潰してやる！」

クローズマグマの装甲が、万丈の闘志に呼応して灼熱のマグマを滾らせ、熱く燃え上がる。もはや頭上から降り注ぐスプリンクラーの雨は、眼下に降り落ちることもなく、放水されたすぐそばからクローズマグマの熱にあてられて蒸発していった。

「では、お手並み拝見といこうか。ゆくぞ、サクラよ」
「えっ……でも、お、おじいさまっ」

臓硯は、桜の手を引いて、奥の扉から別室へと去っていった。

桜は、時臣に対し僅かに手を伸ばしかけたが——それを、己の意思で取りやめ、ただ黙って臓硯に追従することを決めた様子だった。

片手ではざりとマントを翻したブラッドが、悠々と歩を進める。時臣も、清姫も、誰も動けない。この部屋のどこにしようが、ブラッドの攻撃圏内であることに変わりはない。迂闊に動けば、やられる。それをこの場の全員が理解していた。

クローズマグマは清姫と時臣を庇えるよう、一步前に出て油断なく構えを取ったまま、視線だけを後方にやった。

「遠坂さん。一応訊くぜ……あんた、これからどうすんだ」

「……よもや、他ならぬ間桐の翁があのような慮外者と手を組んでいたなどと……このような結果は想像したくもなかった。だが、そうと分かった以上、捨て置くわけにもいまい。ブラッドスタークは聖杯戦争に挑むマスター全員の敵……私には、亡き璃正神父に代わり、翁の罪を断罪する責務がある」

「責務とか、難しいこと言って煙に巻いてんじゃねエ！ あんた自身がどうしたいのかって、俺はそう訊いてんだよッ！」

瞬間、時臣は衝撃に身を打たれたように固まった。

「無駄ですわ、万丈様。この殿方は自分の立場や建前をいたく気にしておられるご様子……サクラの心の叫びに耳を傾けてあげられるほど、器用な男ではございません」

ブラッドが、両腕から真紅のエネルギー波を放出した。波は蛇のようにならうち、クローズマグマを襲う。ビートクローザーを構え、真正面からエネルギー波を受け止めた万丈は、そのまま一気に前進し、ブラッドに組み付いた。ブラッドの動きを封じながら、クローズマグマは声の限りに叫ぶ。

「遠坂さん……！……ここまできたら、あとはもう助けるだけだろうが！……そりゃ……っ、俺は馬鹿だからよ……難しいことはよくわかんねエよ！……でもな、俺も、清姫も、……雁夜もツ！……みんな、みんな桜が救われることを望んでんだ！……今、ここで！……それができるのは、あんただけなんだよツ！」

「万丈、くん……」

雁夜を救えなかった。その悔しさが、今の万丈を突き動かす原動力だった。せめて、雁夜が最後に懐いた「桜を救う」という願いだけは、意地でも叶えてやりたかった。

組み合ったブラッドとクローズマグマを尻目に、清姫が数歩前に出る。

「——どうなさいますか、時臣様。わたくしは当然サクラを追い掛けますが……生憎と、わたくしは万丈様ほどお優しくはございません。あなた様が、ここまで来て本音のひと

つも口にできないような殿方であるならば、着いてこられたところで足手まといも甚だしく。できればここで大人しくして頂いた方が助かるのですが」

「……黙って聞いていれば、随分と勝手な物言いだな。流石は礼儀を知らぬ雁夜のサーヴァントだけのことはある」

時臣もまた、清姫に追従する形で数歩進んだ。

そして、時臣が、清姫を追い越した。すれ違い様に、雁夜に向けていたものと同じ、冷徹な眼差しを清姫に注ぎながら。

「桜は、私が救う。他ならぬ私が、愛娘を取り戻したいと、そう願ったからだ。君こそ、私の邪魔をするような真似はしないで貰いたいところだね」

「……ではお好きにどうぞ。わたくしも好きなようにやらせていただきますので」

時臣を追い越そうと、清姫もまた足早に歩を進める。ふたりの足が、臓硯が消えていった扉へと向いていることを悟ったブラッドは、クローズマグマの拘束を振り払い、雄叫びを上げながら床を蹴った。ふたりを追撃するつもりだ。

「ッ、させるかよッ！」

すかさず立ち上がったクローズマグマが、再びブラッドに背後から組み付いた。強烈な肘打ちが、ガン、と音を立ててクローズマグマの仮面を強打する。それでも一度組み付いたならば離れはしない。振り返ったブラッドの顔面を力任せに殴り返したクロー

ズマグマは、そのままブラッドの腕を絡め取り、部屋の壁に叩きつけるようにして抑え込んだ。

ブラッドの膂力も相当なものだ。少しでも気を抜けば、すぐにクローズマグマの拘束から逃れることだろう。理性のない獣と組み合っているような感覚だった。それでも、万丈は絶対に離さない。

「行けッ！」

たった一言で万丈の思いを汲み取ったふたりは、各々決然と頷いた。万丈は、クローズマグマの仮面の下でにツと微笑んだ。

ふたりが奥の部屋へと消えていくのを見届けると同時、窓の向こうで、極光が炸裂した。ネロが庭園で放った、星の聖剣の瞬きだ。陽の光よりもなお眩い光の奔流が、衝撃波を伴って屋敷の窓ガラスを粉々に粉碎する。吹き付ける突風の中、ブラッドはクローズマグマの拘束を振り払うと、呻き声をあげながら頭上を仰ぎ見た。

「A——^アurrrrrrrrrッ!!」

先程までの獣の叫びとは異なる、血も凍るような冷たい叫びだった。

苦痛に身悶えするように体を仰け反らせ、荒い呼吸を吐き出す。ブラッドの装甲から、闇が溢れ出した。全身のライダースーツを、真紅の血管が侵食し始める。以前、クローズから武器を奪い取ったときと同じだ。

「こいつツ」
「ツ!!」

漆黒のコブラを思わせるブラッドの仮面に元来存在したエメラルドグリーンのライオンが、煌めくようなメタリックレッドへと変色する。真紅の瞳をクローズマグマへと向けながら、狂戦士と化した仮面ライダーブラッドは、どこからか取り出したビートクローザーを、やはり漆黒の闇で侵食し、構えを取った。

火の手は徐々に屋敷全域を包もうとしていた。清姫が最初に放った炎が原因だが、その後クローズマグマが放った灼熱もまた大きな要因であることは疑いようもない事実だった。

時臣と清姫は、互いに会話もなく屋敷の中を進む。ひとつひとつ部屋を風潰しに探してもいいが、それではあまりに時間がかかりすぎる。そう思いあぐねていたとき、屋敷内に鳴り響く警報に、部屋着のまま慌てて飛び出してきたひとりの男の存在を時臣は認めた。

その赤らんだ顔を見れば、男が午前中から酒に耽溺していたことは明白だった。紫の癬毛を整える余裕もなく、時臣とほど近い年齢と思われる男は清姫の顔を見るなり絶句し、蛇に睨まれた蛙のように足を止めた。

「彼は、確か——」

「間桐鶴野……ますたあの兄君であると同時に、サクラをあのような姿に変えた張本人。幼い子どもを嬲り、慰みものにするしか能のない男です」

それを聞いた瞬間、時臣の心の奥底に熱が灯った。雁夜にはついで感じたことのない、人としての義憤の熱量だ。けれども、時臣はそれを心のままに発散するような真似はしない。

鶴野もまた、時臣のことは知っているのだろう。最前まで酒に赤く染まっていた顔をあからさまに青くしながら、呂律の回らない口調で喋り出した。

「ち、ちち違うツ、誤解だ！ 私はただ、遠坂の娘を調教しろと言われて——」

言葉を終えるよりも速く、清姫の炎が鶴野を焼いた。蒼炎に全身をくるまれながら、鶴野は手足をばたつかせて、絶叫する。

「——あツ、ガアあああああああツ!! あ、あツつ、あづウツ、な、なんでツ、なんでえええこんなアアア!？」

「その炎はわたくしの怨念の灯火。燃やすも消すも、わたくしの心ひとつ」

清姫がくすりと微笑むと同時、鶴野を包む炎がぐんと熱を上げる。室内の体感温度が上がった。頭上からスプリンクラーの放水が放たれるが、その程度で清姫の怨念の炎は消えはしない。

「ご安心を。あなた様は腐つてもますたあの兄君。サクラの件に関しても、あなた様はただあの男に従つただけ……ええ、ですから殺しはしません。ただ、教えて欲しいのです。間桐臓硯がどちらに向かつたのかを」

「し、知らないッ、知らない知らない知らないっ、私は、なにもつ、ああああアアアッ!!」

灼熱の豪華の只中で、鶴野は一心不乱に叫んだ。

清姫はふむ、と小さく唸ると、そのまま俯いた。

「……どうかね。彼は、嘘をついているのか」

「いいえ、どうやら本当になにもご存知ではないご様子。無駄骨でしたね、先へ進みましよう」

和服の裾を翻し、清姫はすたすたと歩き出した。鶴野は、依然として燃え盛る炎に巻かれ、悶え苦しんでいる。火の手が静まる気配はない。

「あッ、ああアア、待、待つで、熱ッ、助けっ助けて」

「あの子^{サクラ}がその身に受けた苦痛と屈辱はそのようなものではございません。あなた様も、少しは甦られる者の痛みを知つては如何です?」

振り返つた清姫は、扇子で口元を隠したまま、嫺やかに微笑んだ。その微笑みの裏に、明確な怒りが込められていることは、時臣にも理解できた。

鶴野を苛む火の手は、最前よりは僅かに弱まってはいるように見受けられる。呼吸器や眼球は焼かぬように、頭以外の箇所を念入りに燃やしている様子だった。

清姫の言葉の通り、死ぬことはないのだろう。だが、あの火傷では、助かったとて後遺症は免れ得まい。或いは、死なない程度の火刑という方が当人にとつてはより痛烈な地獄なのかもしれない。炎の魔術師である時臣ならば助けることもできなくはないが、そんな気にはなれなかった。

清姫は鶴野からは既に興味を失った様子で、迷いのない足取りで進む。その淀みのなさに、時臣は問うた。

「どこか、向かう先に心当たりでもあるのか」

「今の男との会話で、少しぴんと来るものが」

「……聞かせて貰えるかな」

清姫は暫し沈黙した。

時臣に情報を寄越すことに躊躇いがあるのは明白であったが、清姫は雁夜ほど愚かではない。状況を見て、桜を真に救い出すことができるのが、時臣において他にいないことも理解しているはずだ。

数瞬の沈黙を破って、清姫は静かに語り出した。

「この一年間、あの子は地下の蟲蔵で廻られ続けてきました」

「ああ、それは……聞いている」

「地下の蟲蔵には、サクラの純血を啜った……臓硯子飼いの淫虫が無数にひしめいています。臓硯が本気でわたくしたちと決着をつけるつもりであれば、最後の決戦の地に選ぶのもまた、その場所かと」

「ふむ、なるほど……間桐の工房へ直接乗り込むことになるか」

顎先に指先を添え沈思する時臣を嘲るように、しかし務めて柔らかく、清姫は微笑んだ。

「あら。怖気づいたのであれば、あなた様はここで引き返してもよろしいですよ」「馬鹿な。この程度で怖気づくなら、そもそもこのような場所まで出向きはしない」

返答はない。清姫は、時臣と必要以上の会話をする気はない様子だった。

言葉ではそう言ったが、内心としては、僅かに緊張している。基本的に、魔術師が他の魔術師の工房に足を踏み入れることはない。どのような罠が待ち受けているかもわからない敵の本拠地へ、これより時臣は生身で乗り込まなければならぬのだ。

こんなとき、英雄王セイバーがそばにいてくれたら、と。そう思いかけた自分自身の弱い心を振り払い、時臣は進む。

ほどなくして、清姫に導かれるままに、時臣は地下の蟲蔵へと続く重たい鉄の扉を開けた。同時に、湿っぽい空気が、据えた臭いを伴って押し寄せてくる。時臣は、思わず

顔を聳めた。このような場所で、愛娘は苦しみ続けてきたのだ。

地下へと続く階段を降るほどに、立ち込める臭気は強くなってゆく。やがて、最下層へ降り立ったとき、時臣は見た。

四方を石で囲まれた逃げ場のない空間の中心に、臓硯と桜が立っている。その周囲には、時臣の到来を拒むように、幾千の蟲が蠢き、耳障りな歯音を軋ませている。しかし、ただっ広い空間に対して、蟲の数が些か少ないようにも思われた。

「本来ならばこの倍はおったのじゃがな。雁夜め、無駄に使い潰しておつて」

「ご存知ないのですか？　ますたあははじめから、このときのために蟲を動員していたのですよ」

清姫が、くすりと柔らかく微笑んだ。

時臣に燃やされるだけと知りながら馬鹿の一つ覚えとばかりに飛ばし続けてきた蟲による傀儡戦術の意味を、ここで時臣ははじめて悟った。最後の戦いでは、清姫の炎も一緒になって蟲を焼いていた。今にして思えば、その行動にも辻褄が合う。

「まあ、なんでもよいわ。どのみちここでお主らが潰えることに変わりはないからの」

四方を囲む闇の奥から、無数の人影が姿を現した。人の形を捨て去った無機質な怪人の群れが、時臣と清姫を取り囲む。どこからか湧いて出た大量の羽虫の群れが、上空からボイラーのような羽音を響かせ、ふたりを威嚇する。

「さて、遠坂の。最期になにか言い残すことはあるか」

問われた時臣は、清姫より一步前へと進み出た。

臓硯の傍らで不安そうにこちらを見つめる桜に、父として、務めて優しい微笑みを向ける。

「桜……お前をこんな場所に放り込んだのは、ほかならぬ私の罪だ」

「そんな……そんなことを今更になつて言われても……困り、ます」

「ああ、あまりにも遅きに失する失態だということとは理解している。だが、だからこそ……今からでも私は、お前を連れ戻したい。もう、こんな場所で苦しむことはないんだ。父も、母も、姉も……家族みんなが、お前の帰りを待っている」

「そんなの、今更すぎます……っ！　だつて、私はもう……！」

「都合のいいことを言っていることは自覚している。私が言う権利はないかもしれないが……桜には、幸福な人生を歩んで欲しいと、そう願つて私はお前を養子に送り出した。しかし、この場所では、それは叶わない。……ああ、こんなことは、もつと早く気づくべきだったな」

自分自身をこんな地獄へ突き落とした父の言葉になど、聞く耳を持ちたくないと思うのは当然であろう。桜はなおも当惑した様子で、臓硯と時臣とに交互に視線を送る。どちらの手を取れば自分が助かるのか、桜自身も悩んでいるのだ。

ならば、示してやる必要がある。

時臣は、既に令呪すら失った無骨な手を差し出し、叫んだ。魔術師でもマスターでもない、時臣自身の言葉を。

「ここから先は、私がお前を守る。今度こそ……父として。間桐ではなく、私が」

「お父、さん……」

「頼む——帰ってきてくれ、桜。私を、もう一度信じてくれ」

時臣の言葉を鼻で笑う臓硯とは裏腹に、桜は——その瞳を真つ赤に充血させて、時臣を見据えていた。今までずっと我慢していた涙が、堰を切ったように溢れ出てきたのだろう。遅れて、肩を震わせ、吐息を荒げ始めた。鼻水をすすりながら、桜は問い返した。

「私……もう、帰ってもいいの？ また、お母さんと、お父さんと、お姉ちゃんと……みんな一緒に暮らしても、いいの？」

「約束する。みんな、お前の帰りを待っている。だから、お父さんと一緒に、うちに帰ろう……桜」

その言葉が、長く桜の心を凍て付かせていた氷を溶かした。涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で、大きく頷いた桜には、もう迷いなどなにもない。あらゆる懊悩を振り切って駆け出そうとした桜の肩を、臓硯が強引に掴む。

「桜ッ！」

「お父さあんッ！」

涙ながらに助けを求める娘の眼差しを見て、時臣の決意は固まった。

ここで、臓硯を倒す。もはや御三家の盟約など知ったことではない。父として、人として、それが今の時臣のなすべきことだ。

「カカツ、くだらぬ茶番ではあったが、見ものであったぞ、遠坂の。ここでお主が死ねば、今後サクラもワシに手向かう気は起こすまいて」

「間桐臓硯……聖杯戦争を私物化しようと企む男の口車に乗り、魔導を貶めた貴様に、もはやかける言葉を私は持たない。だが……ひとつだけ語るとするならば」

ルビーのはめ込まれたステッキを緩く掲げ、時臣は明確なる敵意の眼差しを突きつける。

「正しき魔術師たれと願つて送り出した我が子の心を踏みにじり、自らの傀儡として利用せんとしたその愚行、正当なる魔術師として……いいや、ひとりの父として。今、私が貴様の罪を裁くッ！」

「フン……遠坂の小倅風情が。身の丈に合わぬ妄言はそこまでにせい」

一斉に、甲虫たちが加速を初めた。清姫が炎を舞い上げる。時臣の魔術が、その炎を操って迫りくる蟲の群れを一気に焼き払った。勢いそのまま、清姫の蒼炎が臓硯へと迫

る。

炎が臓硯を呑み込んだその瞬間、臓硯の姿は無数の蟲の群れとなつて消えた。四方に散らばつた虫の群れの一部は清姫の炎によつて焼き尽くされたが、こうなつてはどれが臓硯の本体であるか判別がつかない。

臓硯の支配を逃れた桜が、時臣にひしと抱きついた。時臣は、その背を抱きとめ、父として、優しく撫でやる。

「ひつく、ぐすつ……お父さん、お父さあん！」

「安心しろ、桜。もう離さないからな」

全身で包み込むように、時臣は我が子を掻き抱いた。その間も、蟲とスマツシユの群れは容赦なく押し寄せてくる。

清姫は下半身を燃え盛る蒼龍へと変化させて、宙を泳ぎように迫りくるスマツシユを翻弄した。豪腕による殴打を灼熱の鉄扇で受け止め、無数の弾丸による砲撃を口から吐き出した火炎の熱で溶かす。

「カカツ、多勢に無勢とはこのことじゃな。精々足掻くがよい。お主らがどこまで持ちこたえられるか、高みの見物といかせて貰うとするかのう」

どこからともなく臓硯の笑い声だけが反響する。

臓硯は、なにがなんでもここで清姫諸共時臣を始末するつもりだ。上階で戦っている

万丈がバーサーカーに敗れば、それこそ臓硯の罪を知るものはなく、臓硯だけが戦力を残して終わることになる。そうなれば、桜もまたこの地獄に逆戻りだ。それだけは、避けなければならない。

すつくと立ち上がった時臣は、短い詠唱に次いで、清姫が撒き散らした炎を操り、蟲とスマツシユの両方目掛けて灼熱の嵐をお見舞いしてやった。蟲は焼け落ち、スマツシユは僅かに後退する。

「私は桜を連れて脱出する。着いてくれるか、バーサーカー」

「わたくし、これでもサーヴァントですよ。一介の魔術師風情に、容易く遅れを取るわけがございません」

「よく言った。ではゆくぞ」

時臣に強くしがみつく小さな桜の背を片手で抱き上げて、ステッキを構えたまま時臣は駆け出した。行く手を阻むようにスマツシユの軍団が立ち塞がる。各個撃破する必要はない。脱出するだけの隙さえ見出すことができれば、あとはどうとでもなる。

時臣は、三小節ほどの詠唱を紡いで、既に火の海となりつつある地下室中の火炎を一点に掻き集めた。高密度の炎は渦を巻き、灼熱の業火となったそれを一気に放出する。

避けきれなかったスマツシユの腕に火炎が命中し、その体から火花を噴き上げて倒れ込んだ。拓かれた道を、時臣は桜を抱いたまま走る。スマツシユを踏み越えて、石の階

段を駆け上がる。

「怖くないか、桜」

「うん、だって……お父さんが、私を守るって約束してくれたから」

「そうか。なら、約束を破るわけにはいかないな」

スマツシユと蟲の群れに追い立てられながら、それでも時臣は朗らかに笑った。

桜の瞳には、未だ涙が滲んでいる。時臣の娘は、馬鹿ではない。今がどれほど危険な状況で、自分がどれほど危ない橋を渡っているか、自覚できていないわけがない。それでも桜は、時臣を信じてくれた。裏切るわけにはいかない。

頭上から、轟音が響く。屋敷の一部が崩壊したのかもしれないが、地下室からでは地上階の全容はわからない。時臣らの真上では、仮面ライダークローズと仮面ライダーブラッドが激戦を繰り広げているに違いない。

無事に逃げ切れるのだろうか。否、桜だけでも脱出させねばならない。押し寄せる不安を振り切って、時臣は地上へと続く鉄扉を開け放った。

第28話 「旅立ちのベルが鳴る」

硬い金属同士が激突する甲高い音と、建物が軋みを上げて崩壊してゆく重低音が、地響きを伴って聞こえてくる。今はまだ屋敷の輪郭は保たれているが、そう時間をかけず崩落するだろう。既に、屋敷の窓という窓から火の手が上がっている。中でどれほど苛烈な戦闘が行われているかは、想像に難くなかった。

どこか遠くを見るような目で屋敷を見上げていたセイバーは、ふいに視線を上げて空を仰いだ。太陽が、徐々に中天へと昇りつつある。それを認めて、すぐに視線を伏せた。空から降り注ぐあたたかな陽光から目を背けるように。生前、キングが最期に見た空も、同じような青空だった。

「……生きているか、キング」

「当然だ。我を誰だと思っオレている」

「フ、どうやら愚問だったようだな」

傍らでキバットバットⅡ世がばたと音を立てて対空しているが、その羽ばたきにもいつもの力強さはない。ふらふらと頼りなく上下に揺れている。弱りきり、墜落する寸前の羽虫を連想させるその有り様に、セイバーは乾いた笑みを零した。

サーヴァントとして、満身創痍であることは明白だった。何事もないように立っているものの、実際に見かけほどの余裕はもうない。ただ、意地だけを抛り所に、セイバーはふらつく姿勢を正し、二本の足で直立する。

「どうする、キング。時臣はまだ生きていますぞ」

時臣のために撤退するのも手だと、そう言いたいのだろう。だが、それが本心でないことは分かる。その証拠に、キバツトは笑っていた。返答は既に決まっている。

「やつは仮にも、この我の家来を豪語した男。ここで無様に散るようなら、所詮それまでということ……キングの配下に、弱者は必要ない」

「奇遇だな。オレもそう思っていたところだ」

セイバーはフンと鼻を鳴らして笑った。キバツトもまた、釣られるように笑った。

時臣がなにを掴んだのかは知らないが、あの男は少なくとも自分の道を自分で見つけ出したのだ。であれば、あとはその道を突き進めばいい。

結局のところ、セイバーと時臣の間には、王と家臣以上の関係はあり得なかった。孤高の絶対王者が家臣の無事を祈ることも、いち家臣でしかない男が常勝無敗の王の勝利を祈ることも、そもそもが理を違えている。

なにも言わず、なにも語らず、ただ勝利すればいい。それだけが、ふたりの間にあるすべてだった。これからも、それは変わらない。変える必要もない。

「——だが、悪いなキング。どうやら、オレも少し消耗しすぎたらしい。闇のキバは、もう使えそうもない」

「そうか。ならばもはや貴様など不要……暇をくれてやる、どこへなりと消えるがいい」キバットに背を向けたまま、ふらつく足取りでセイバーは前進する。殺意に燃える瞳は、ただひとり、眼前の敵を見据えていた。

宝具を放ったキバエンペラーの消耗もまた、見るからに甚大だった。未だ変身解除には至っていないものの、魔皇剣を地面に突き立て、前のめりに此方を睨め付けている。その仇敵を、セイバーは目を剥いて睨み返した。

「そうか、それがお前の選んだ道か」

微笑みひとつ落として地面へ降り立ったキバットは、静かに翼を畳んだ。

「お前とともにここまで戦ってこれた。それだけで、十分だ。あとは、お前の心が望むまま……思う存分やればいい」

背後からかけられる声に、返す言葉はない。なにも、必要ない。

「さーらばだ、キング」

それが最後の言葉だった。もう、キバットの声は聞こえない。

残されたのは、男がふたり。互いを相容れぬ宿敵と見定めた、ふたりの男がここにいる。他にはもう、なにもいない。

「紅、渡……い！」

「……キング」

大気中の魔力が、真紅のオーラとなってセイバーに寄り集まってゆく。

セイバーのサーヴァントには必要なしと切り捨てた力を解き放って、セイバーは——
キングは、王でも英霊でもなく、ひとりの男として、その瞳に殺意の炎を滾らせる。

「魂を……オレをオレとして懸けて、オレは貴様を否定する」

地に響くような雄叫びをあげて、キングは我が身に集約した魔力を一気に解き放った。体内で魔皇力へと変換された真紅の波動が、突風を伴う衝撃波となって辺りの草木を吹き飛ばす。獣を思わせる裂帛の咆哮を響かせたのち、キングは真紅の怪人への変身を果たしていた。

「例えすべてを失っても……貴様にだけは、これ以上なにも譲らん。例えこの命尽きようとも、オレは最後の瞬間まで貴様の敵で在り続ける……い！」

紅く燃える鬼の双眸で眼前の仮面ライダーを見据え、バットファンガイアは最後の力を振り絞って地を蹴った。

無言のまま構え直したキバエンペラーは、左腕の小龍の尾を引き、腰を低く落とす。黄金の装甲から放出された魔皇力の闇が、陽光を覆い隠し、暗い夜の帳を下ろす。

燦々と輝く太陽の代わりに、煌々と煌めく巨大な満月が空に浮かんでいた。

「ハッ！」

短い掛け声とともに空へと跳び上がったキバエンペラーの右足から、真紅に燃える魔皇力の翼が、さながら大鎌のように飛び出した。

巨大な満月を背に、必殺のライダーエンペラー・ムーンプレイクキツクの態勢に入ったキバは、バットファンガイア一点を狙って急降下する。

「ウオオオオアアアアアアッ!!」

一瞬ののち、バットファンガイアの胸部に、キバの右足が突き刺さった。既に満身創痍の全身を、暴力的な衝撃が襲う。同時に、キバの黄金の右足から現出したふたつの翼が、加速した。命を刈り取る大鎌となった翼が、刹那のうちに、バットファンガイアの胸部を十重二十重に刺し貫いた。

「ガ……ア、——」

完全に動きを止めたバットファンガイアをふたたび蹴り飛ばしたキバは、真紅のマントを翻して空中で一回転すると、危なげなく着地する。

バットファンガイアの体を構成するステンドグラスに、亀裂が奔った。全身が鈍い煌めきを放ちながら透き通ってゆく。体内の生命力が、ファンガイアとしての外骨格を突き破って今にも外に溢れ出そうとしている。

それでも、倒れることだけはしない。したくはない。己の体内で暴走する魔皇力の流

れを意地ひとつで制御し、キングは今にも倒れそうな脚で踏ん張った。もはや、変身形態すら保てはしない。ふたたび生身を晒したキングは、霞みゆく視界の先に仇敵の姿を捉え、憎悪に満ちた眼差しを向ける。

誰の力も頼らず、たったひとりで戦い続け、栄光とともに勝利を掴み続けてきた男に、手を差し伸べてくれる女がいた。誰もがおののく無敗の王者を前に、しかし女は畏れも敬いもなく、あくまでひとりの男として接してくれた。

キングには、女がなにを考えているのかがわからなかった。だから、差し伸べられたその手を見たとき、キングは無言のまま眉を顰めることしかできなかった。

「あら、つれないわね。手を貸してあげるって言ってるんだけど」

差し伸べられた手を振り払い、キングは女に背を向け、肩越しに冷たい視線を送る。

「裏切り者のクイーンの力などいらん。オレの前から消えろ」

「あなたって、いつもそうね。少しは仲間を頼ることを知ったらどうなの」

「オレを裏切ったのは、貴様だ。もはや仲間でもなんでもない」

クイーンは呆れた様子で肩をすぼめた。

周囲を見渡す。ぽつんと玉座が置かれた王の広間には、絶えず薔薇が降り注いでいる。ここにいるべきルークとビショップの姿がない。クイーンに背を向けたまま、キン

グは視線だけでふたりの姿を探した。

「あのふたりならいいわよ」

もう一度、凍てつくような視線をクイーンに送る。

「だって。あなたが求めたのは、私だもの」

キングは、心と体にわだかまるありったけの憎悪をその眼差しに込めて、クイーンを睨んだ。クイーンの表情に変化はない。キングの激情に触れてなお、怯えることも、逃げ出すこともしない。

「今なら分かるわ。あなたが、私を愛してくれていたこと。だから、音也が赦せなかったんでしょ？ 渡のことも」

「——それ以上言うなッ!!」

瞬間、キングの中でなにかが弾けた。

腰に提げた魔皇剣を怒りのままに抜刀し、その切っ先をクイーンの喉元に突きつける。あとほんの少しでも腕を突き出せば、クイーンの命は断てる間合いだ。クイーンは無言のまま、その大きな瞳でキングをじいっと見据えるだけだった。

「キングに……愛など不要だ」

深く息を落として、キングは魔皇剣を下ろした。真紅のマントを翻してクイーンに背を向けると、キングは今度こそ広間の扉へ向かって歩き出した。

「ほんとうに、不器用なひと。でもいいわ。そういうひとだものね、あなた」

今更誰かの力を頼ることなど、できるわけがない。

孤高の絶対王者は、誰の力も頼りはしなかった。信じられるのは、己の力のみ。その意思と誇りが、ファンガイアを至高の魔族へと押し上げたのだ。その伝説に、自分の手で泥を塗ることなどできるわけがない。

キングの手元には、もうなにも残されてはいない。それでも、最後に残った誇りだけは、失いたくはなかった。

「さようなら、キング。かつて私の愛したひと」

もはや指一本を動かすことすらも苦痛を伴う責め苦の中で、それでもキングは魔皇剣を引き抜いた。未だここに燃え残った命の証を振りかざすように。

「言ったはずだ、紅渡……貴様には、なにも譲らん。なにも、くれてはやらん。勝利の、栄光すらも」

黄金のキバは、身構えることすらしなかった。

ただ静かに振り返り、その真紅の仮面でじつとキングの行動を見守っている。

最後の意地で、キングは嗤った。

「が……、ふッ」

両手で握りしめた魔皇剣の切っ先を、キングは己が心臓へと突き立てた。喉の奥から這い上がってきた人外の青い血を吐き出し、キングはまた啞う。

なにものをも断つ世界最強の魔剣は、狙い過たずキングの霊格を刺し貫いた。その水晶のような刀身に青い血を滴らせたまま、キングの体は金の粒子となつて崩壊を初めた。座へ、還るときがきた。

「
黄金のキバはもう、なにも言わなかつた。その真紅のマントをばさりと払い、無言のままに歩き出す。真つ直ぐにキングに向かつて前進したキバは、キングに言葉をかけることすらなく、その脇を通り過ぎてゆく。背後に聳える屋敷へ向かつて、一切の迷いなく。」

キングは重ねて笑つた。これでいい。宿敵にかけられる言葉も、情けも、キングには必要ない。

やがて足音が聞こえなくなり、宿敵の気配が完全になくなるまでその場に立ち続けたキングは、静かに瞳を閉じた。キングを英霊たらしめるなにもかもが消えてゆく。

剣が消え、体が消え、最後に残つた意識が消えるその間際。キングはふいに、今も屋敷の中で戦っているであろう時臣の顔を思い出した。

果たして、キングと異なる道を歩み始めたあの男は、キングすら知らぬ未来を掴み取

ることはできたのだろうか。ほんの少しだけ気がかりだったが、そう思う心もじき光に溶けて消えていった。

どす黒い闇をオーラとして身に纏った仮面ライダーブラッドが、瞬時にクローズマの目の前に現れた。間合いに入られた認識はない。ほんの瞬きのうちに、ブラッドはクローズマグマの懐に飛び込んでいたのだ。

「早エツ!!」

クローズは状況を理解するよりも先に、本能的に両腕で頭を庇うようにガードの姿勢をとった。振り下ろされたビートクローザーの刀身が、クローズマグマの手甲と衝突。溶岩のフレアが噴き上がる。

「ッ!!」

「っ……おお!!」

血飛沫のように舞い上がる溶岩を真つ向から浴びながら、それをまるで意にも介さずブラッドは闇に侵されたビートクローザーの乱打でクローズマグマを襲う。クローズマグマは幾度目かの激突の瞬間、ガードをやめて、押し返した。噴出した溶岩が、ビートクローザーを弾き返す。

「オオオラアアアッ!!」

すかさず手甲に溶岩のドラゴンヘッドを纏ったクローズは、至近距離からの拳を叩き込んだ。拳がブラッドの胸部装甲に命中すると同時に、爆炎が炸裂する。火柱を拭き上げながら、ブラッドは吹っ飛んだ。

「テールとソファを薙ぎ倒し、なんの罪もない棚や壺などの彫像品を粉々に粉碎しながら、ブラッドは壁に激突し、その壁をも突き破って、一気に廊下まで叩き出された。速度では勝てなくとも、一撃の重さならばまだこちらに分があることを万丈は確信する。」

「廊下側のブラッドが、咆哮とともに放った衝撃波で、ふたりを隔てる壁を木つ端微塵に粉碎した。崩れ落ちる壁の向こうから、ブラッドが人間離れした速度で急迫する。先にダウンさせられたはずのブラッドが、先手を打った。クローズマグマは一瞬遅れて灼熱の炎を纏ったビートクローザーを構える。」

「リアアアッ!!」

同じかたちをした剣同士が激突する。ブラッドの闇と、クローズマグマの炎が一齐に周囲へと吹き荒れる。至近距離での鏖迫り合い。赤くきらきらと燃えるブラッドの瞳が、クローズマグマを睨め付ける。

「ッ!?!」

ブラッドの前蹴りが、クローズマグマの腹部をしたたかに蹴り飛ばした。数歩よろめ

いたクローズマグマ目掛けて、力まかせの剣の一撃が振り下ろされる。咄嗟に剣を構え一撃目を防いだが、すかさず放たれた二撃目を防ぎ切れることは出来ず、姿勢を崩したクローズマグマの胸部を、ブラッドのビートクローザーが袈裟懸けに斬り裂いた。溶岩が噴き上がる。

「ッ!!」

三発目は、強烈な回し蹴りだった。真紅の輝きを孕んだどす黒い闇を纏った蹴りが、防衛姿勢さえままならないクローズマグマの胴体へと突き刺さる。吹き飛ばされたクローズマグマは、彫像品を丁寧に並べた棚を背中で吹き飛ばして燃やし尽くしながら、壁に激突して項垂れた。

最前まで棚だったものが、今はもうバラバラに粉碎された木材と陶器の破片となつてクローズマグマに降りかかる。

「クッソ、ンだよコイツ……バカみてえに強エじやねえか!」

体へのしかかる廃材を噴き上がる炎で弾き飛ばしながら、クローズマグマは壁を支えに立ち上がった。

こんな攻防が、もうずっと続いている。今頃、時臣と桜はどうしているだろうか。桜は無事に救出できただろうか。脳裏によぎった考えを遮るように、ブラッドは雄叫びを上げて突っ込んでくる。

地上階に出た時臣を待ち受けていたのは、鉄色くろがねのスマツシユの軍団だった。両腕に翼を持つもの、両腕にプレス機構を備えたもの、右腕にバーナーを装着したものの、姿形は様々だったが、三体ともに全身を鈍い鉄色に染めている。いずれも、今まで地下であしらつてきたスマツシユの群れとは気迫が違う。

桜を抱きかかえたまま立ち止まった時臣は、片手に構えたステツキを振るつた。周囲の炎が一点へと集約され、三体のハザードスマツシユ目掛けて放出される。対して、すかさず前に出たのは、右腕にバーナーを備えたスマツシユだった。時臣へと向けられたバーナーから、時臣の放った火炎をも凌駕する高熱の炎が放射される。

「私に炎で仕掛けてくるとは……愚かな」

決して焦ることなくそう嘯いた時臣は、言葉の最後に短い詠唱を連ねた。バーンス マツシユの放った炎は、時臣に届く前に意思を持ったようにうねり、攻撃を繰り出した主の元へ跳ね返る。猛り狂う炎は、三体のハザードスマツシユをまとめて火の渦に閉じ込めた。

「カカツ、流石というべきか。この布陣を前に、いつまでその威勢が続くか、見ものじゃ
のう？」

どこからともなく響くしわがれた嘲りに続いて、炎の渦の中からスマツシユが飛び出

した。両腕に鉄の翼を備えたスマッシュユダ。フライングスマッシュユは自らの能力で氣流を操り、炎の風を纏って宙を滑るように滑空する。

すかさず防御陣を張ろうとしたそのとき、間に割って入ったのは蒼龍の少女だった。

「シャアアアアッ！」

熱く燃え盛る炎の鉄扇でフライングスマッシュユの突進を受け止めた清姫は、そのままありつたけの魔力を込めて弾き返す。清姫の怨念の炎に巻かれ、火だるまになりながらも空中で姿勢を制御したフライングスマッシュユはしかし、再び加速を付けて清姫へと急迫した。

遅れて時臣の炎の渦から抜け出した二体のハザードスマッシュユも時臣目掛けて走り出す。時臣に、清姫の援護をしている余裕はない。

「……意思を持たぬ哀れな人形どもめ」

時臣の眼前に炎が集まり、球体をかたちづくる。それを、向かってくるプレススマッシュユ目掛けて射出した。火球は狙い過たずにスマッシュユのボディを直撃し、数メートル後方へと吹き飛ばした。時臣は再び火球を精製しながら、今度はステッキの先端をバースマッシュユへと向ける。

「——時臣様！ 今はあくまで脱出が最優先、このような雑兵の相手をしてなんになるというのです！ なんとになれば、露払いはわたくしが……！」

フライングスマッシュの二度目の突撃を鉄扇で受け止めながら、清姫が怒鳴る。フライングスマッシュからの追撃を抑え込んだまま、下半身の蒼炎を噴出させた清姫は、空中でもつれ合いながらバーススマッシュ目掛けて突っ込んだ。

ろくな知性を持たぬバーススマッシュは、フライングスマッシュ諸共もんどり打つて地べたを転がった。真つ先に体を起こしたのは、蒼く燃える龍だった。

「わたくしは所詮死にぞこないのサーヴァント。ここはこの清姫に任せて、あなた様はサクラを、早く……!」

雁夜のサーヴァントに救われるという事実は小癩ではあったが、今はなりふりを構っていられる状況でもない。清姫の言葉に従い、桜を抱きかかえたまま駆け出そうとした、そのときだった。

「カカツ、そう上手く行くと思うておるのか?」

燃え盛る戦いの場に似つかわしくない、冷え切った声が降り注ぐ。

背後から迫る敵意をいち早く察した時臣は、桜を庇うように腕の中に抱きかかえた。刹那、地下へと続く石階段と屋敷の地上階とを隔てていた鉄扉が粉碎され、その破片が時臣の背中をしたたかに打ち付けた。

「ぐ……ッ!」

「お父さん!」

背中に走る鈍く重たい衝撃を、その場に踏ん張って堪えた時臣は、一瞬遅れて後方からの殺意の正体に気付いた。地下へと続く階段から現れたスマツシユが、巨大な豪腕を振り上げて咆哮する。

これまで時臣が仕留めずになしてきた連中だ。地下でひしめいていたスマツシユの群れが、黒光りする甲虫の群れとともに一齐に這い出てきた。

「さあ、どうする遠坂の。せいぜい、知恵を絞って突破してみせイ」

人の形を捨てた老人の笑い声がどこからか木霊する。

気づけば一階広間の天井を、黒い靄が覆い隠していた。そのすべてが臓硯に放たれた蟲の群れだ。この中のどれか一匹が臓硯の本体だったとて、それを見抜く術は時臣にはない。

「お、お父、さん……」

「……大丈夫だ、桜。なにも心配はいらない。私が必ず、お前を外に連れ出してみせる」
不安げに表情を陰らせ、時臣を見上げる桜を強く抱き返す。痛みを堪え、すつくと立ち上がった時臣は再びステッキを振った。周囲を取り巻く炎は灼熱の幕となつて時臣へと迫る蟲の群れを焼き払ってゆく。

地下からやってきたストロングスマツシユが、豪腕を振り上げて時臣へと突撃してきた。

「知性も、品性すら、なにひとつ感じさせぬ毒虫どもめ。貴様らなぞに、遅れをとるものか」

あえてそう嘯くと、時臣は迫りくるスマツシユを鼻で笑い飛ばした。

桜を抱えたまま、身を屈めてストロングスマツシユの大振りなパンチをかわす。同時に、敵の懐に入ることに成功した時臣はすかさずステッキをかざす。火球が、ほぼゼロ距離でストロングスマツシユの腹部目掛けて射出された。

勢いよく吹き飛んだストロングスマツシユが、後続のスマツシユの群れを巻き込んで倒れ込む。時臣は脂汗の浮かんだ顔で、それでも平静を装い、再び前を向いて歩き出した。出口はもう、すぐそこだ。

「お父さんッ!」

桜が叫んだ。後方から飛来した氷の塊が、空中でつらら針となって時臣へと急迫する。短い詠唱で分厚い炎の幕をつくるが、スマツシユの能力で凍結させられたつららの矢を完全に溶かし切るには詠唱時間が足りなかった。

「馬鹿な……っ!」

時臣の炎を突き抜けたつらら針が、時臣のステッキを弾き飛ばした。同時に、つららに触れた時臣の腕が瞬時に凍結する。それが、アイススマツシユの能力だった。

「時臣様ッ!」

三体のハザードスマツシユを攪乱しながらその場に抑え込んでいた清姫が叫ぶ。それが命取りだった。清姫が気を抜いたその隙を突いて、プレススマツシユの腕に備わったプレス機のローラーが、清姫の唯一の武器である炎の鉄扇を巻き込み、粉々に粉砕する。絶句した清姫の腹部を、フライングスマツシユの翼の打撃が殴打した。

「ッ、アア!?!」

一瞬間に浮いた清姫に、フライングスマツシユが再び突撃する。咄嗟に腕を蒼炎で燃やして受け止めた清姫だが、反撃をする余裕はない。天井めがけて一気に加速したフライングスマツシユは、清姫の背を天井に叩きつけた。華奢な少女はどさりと地に落ちて、桜の近くに転がった。

「がっ、は……っ」

咳き込み、血反吐を吐き出す清姫を見て、桜は現実から目を背けるように俯き、硬く瞑目した。

背後に退路はない。姿勢を正したストロングスマツシユを筆頭に、一体、また一体とスマツシユが雄叫びをあげながら時臣へと迫る。スマツシユの群れは、嘲るように時臣のステッキを踏み躪った。

「——もう、やめて」

苦しむふたりの代わりに声を張り上げたのは桜だった。

「お願いです、もう、やめてください！ 私、やっぱり間桐に戻ります！ もう、我儘も
いいませんっ！ だからっ……だから、もう、許して……許してよお……っ」

嗚咽にまみれた言葉尻は、消え入りそうなほどにか細かった。

桜は、賢い子だ。彼我の戦力差にどれほどの開きがあるかを、正しく理解している。
きつと、父が臆視ほど優秀な魔術師でないことまで見抜いて、幼い少女はそう叫んだの
だろう。時臣は歯噛みし、桜を強く抱き締めた。

「やめなさい、桜。もう、これ以上、お前が無理をする必要はない。お前は、私が解放す
る……例えこの命に替えても」

「カカツ、そうかそうか。まだやるといふなら是非もあるまい。せいぜい足掻くがよい」
桜は絶句した。既に、全方位を蟲とスマツシユの群れに囲まれていた。

それでも時臣の心は折れなかった。まだ凍っていない方の手で、時臣は桜の頭を撫で
た。涙で真っ赤に充血した瞳で、娘は父をじっと見つめる。時臣は、務めて柔らかく微
笑み返した。

「桜。ここから先は、ひとりで行けるかい」

「えっ……え、お父、さん？ なにを、言っつて」

「ここは、私が引き受ける。ただの一匹たりとも、お前のあとを追わせはしない。だか

ら、桜……私が合図をしたら、脇目を振らず、決して振り返らず、出口へ向かって走るんだ」

時臣は脂汗にまみれた顔で、三体のハザードスマッシュが死守する外への扉へと視線を送った。

「そんなつ、そんなの嫌だよお！ お父さんも一緒じゃないと、私、ひとりじゃ……」
桜の顔が、絶望に青ざめてゆく。少しでも安心させてやりたかった。そつと、大きな掌で包み込むように桜の頬を撫でる。時臣の手を、零れ落ちた桜の涙が伝ってゆく。

「いいね、桜。合図をしたら走るんだ」

とめない涙を流しながら、桜は首を横にふる。時臣は最後に桜をひしと抱き締めた。こうして娘を抱きしめるのが、こんなにも遅れてしまった。今更、こんなかたちでしか父として振る舞えない自分の情けなさに、時臣は自嘲する。

ほんの一瞬の抱擁ののち、時臣は静かに立ち上がった。後方に迫るスマッシュを、決然と睨め付ける。ちょうど背中合わせになるかたちで、清姫もまた前方のハザードスマッシュを見据えて立ち上がった。

「先陣はわたくしが切ります。殿はお任せしても？」

「ああ。不本意ではあるが……桜を、君に任せよう」

清姫は乾いた笑みを零した。時臣はそれを了承と受け取った。

ここまでできて、結局ふたりは敵同士だ。仲間意識など微塵もありはしない。それでも、今この瞬間、桜を救いたいという思いだけは一致していた。

武器を失った今のふたりに、勝てる見込みがないことは火を見るよりも明らかだった。せいぜい、時間稼ぎが関の山だろう。だけれども、その行動が桜の未来に繋がるのなら、そこに一切の迷いはない。ここから先は、死への旅路だ。

泣きじやくる桜の頭を撫でやり、時臣は愛娘に最後の微笑みを向ける。強くいきて欲しいと、そう願って。

「……………、時臣様」

ふいに、清姫が声を張った。なにか、大きな力が近付いているのを時臣も感じ取った。刹那、強大な魔力の波濤が熱風となって吹き付けた。スマツシユが、蟲の群れが、雁首揃えてびたりと動きを止める。この場の誰も、動くことすらできなかつた。

「嗚呼、そんな……………」

清姫が、頬を緩めた。状況を理解できていない桜が、不安げに時臣に縋り付く。瞬間、ごうと唸りを上げて、真紅の魔皇力が屋敷の中を吹き荒れた。

「——来ましたわ。彼らが脅えるほどの力が！」

誰もが動きを封じられた静寂の中、飛来した無数の斬撃波が、真紅のオーラを迸らせながらスマツシユへと殺到する。

一瞬だった。ほんの一瞬、たったの一撃で、すべてのスマツシユがその身を真紅の刃に引き裂かれた。スマツシユの群れは、いずれも爆炎とともに砕け散り、無数の蟲の群れとなつて燃え落ちてゆく。

「これは……」

時臣は悟つた。今の今まで自分たちを追い詰めていたのは、人ですらない。そのすべてが、蟲の群体によつて構成された、真正銘の人外だったのだ。

天井を埋め尽くす蟲の群れが、その顎門をぎちぎちと掻き鳴らし、時臣ら目掛けて一斉に翼を羽撃かせた。迎え撃つように、魔皇力の光線が奔る。黄金の輝きを孕んだ真紅の光条は、時臣らの周囲の空間を埋め尽くす蟲の群れを舐めるように焼き払い、跡形も残さず焼滅させた。

「なんと……ッ」

あまりにも絶大な威力に瞠目する時臣をよそに、黄金の鎧が走り抜けた。

出口に最も近い場所にいたプレススマツシユハザードの胴を、キバエンペラーはすれ違いざまに斬り裂いた。強大な真紅の魔皇力が弾ける。赤熱する魔皇剣の一撃に、並のスマツシユが耐えられるわけがない。爆裂したスマツシユの破片が、無数の蟲となつて燃え落ちる。

「二匹」

低く響くような男の声が、キバエンペラーの魔皇剣の柄に装着された幻影生物ザンバットバットから響く。

片手でマントを翻し、ザンバットバットで魔皇剣の刀身を研ぐと、キバエンペラーは振り返ると同時に剣に溜まった魔皇力を横一閃に振り抜き放出した。剣圧が真紅の衝撃波となつてバーンスマツシユの放った火炎を吹き払う。その一撃で、スマツシユの腕に備わつたバーナーは噴射口に大きな剣の爪痕を食い込ませてひしゃげ、ずたずたに引き裂かれた。

狼狽えるバーンスマツシユの間合いへと一気に飛び込んだキバエンペラーは、その脇をすり抜けるように、魔皇剣で鉄の胴体を断ち斬つた。

「二匹……い！」

二体目のハザードスマツシユが爆発するや否や、空中からフライングスマツシユが突撃を仕掛ける。

キバエンペラーは再び魔皇剣の刀身を研いだ。クリスタルの刀身に魔皇力が漲り、魔皇剣は再び真紅の輝きを乱反射させる。

「ラストオツ！」

「ハアツ！」

ザンバットバットの掛け声とともに、キバエンペラーは魔皇力漲る宝剣を縦一閃に振

り抜いた。

いずれも、決着は一瞬だった。最前まで猛威を奮っていたハザードスマッシュはいとも容易く斬り伏せられ、ただの蟲となって消えていく。

かつて世界すら滅ぼしかけた闇のキバと双壁を成す黄金のキバ。その圧倒的な力の前に、時臣は呆然と眩いた。

「……なぜ、君がここに」

キバは魔皇剣を降ろし、その真紅の仮面でじつと時臣を見据えた。

「ここには、みんなが命を懸けて守ろうとしたものがある」

キバの視線が、時臣から清姫に、そして桜へと注がれる。

迷いも悲しみすらも感じさせない、優しくも凜とした声音だった。

「守ります。僕も……みんなを。それが、僕が喚ばれた理由だから」

「……そうか」

時臣は、静かに瞑目した。

闇のキバとの戦いを切り抜け、生還を果たした男がどういう人間であるかを、心で理解した。己がサーヴァントが、いったいどういう男に負けたのかを、理解してしまった。

脳裏に、闇のキバを纏った盟友の勇姿が蘇る。圧倒的な力を誇る絶対王者。ともに勝利を約束した時臣のサーヴァント。かの王と過ごした時間は決して多くはないが、それ

でも、やりきれない感情が込み上げる。

胸中にわだかまかった感情を深い吐息とともに吐き出すと、時臣をその双眸を開いた。「行こう。この屋敷はじきに崩れる……もう、時間がない」

スマッシュの大群も、蟲の群れも、もうここにはいない。すべて、キバが焼き尽くした。先程までの殺気に満ちていた空間が、嘘のように静まり返っている。その静寂を引き裂くように、頭上から轟音が響く。屋敷が揺れる。

今までは自分たちの戦いで手一杯で意識を向ける余裕すらなかったが、二階では今もクローズマグマとブラッドが激戦を繰り広げている。

静かに頭上を見上げるキバに、清姫がおずおずと口を開いた。

「まだ、万丈様が戦っています。苦戦を強いられています。助けなければ」「わかりました。あとは僕に任せて、あなたたちは脱出を」

真紅のマントを翻して、キバは時臣らに背を向ける。その背に、時臣は声をかけた。

「——黄金のキバ、アルターエゴ。君にしてみれば、私に言われる筋合いではないのだからが……君の助太刀に、感謝する」

立ち止まったキバの仮面が、僅かに下を向いた。

言葉はない。無言のまま、キバは屋敷の奥へ向かって歩き出した。

歩き去ってゆく黄金の鎧に背を向けると、時臣は桜の手を取った。迷いのない歩調

で、外の世界へ向かって歩みだす。もう、邪魔をするものは誰もいない。臓硯が押し黙ったままでいることは些か不気味ではあるものの、今は考えている時間すら惜しい。

「……待って、お父さん」

「どうした、桜」

ふと、桜が足を止める。つられて足を止めた時臣は、そこで気付いた。ともに外の世界を目指していたもうひとりの少女が、そこにいないことに。

果たして、黒い和服の少女は、燃え盛る炎の中心で、親子を見送るようにぼつんとひとり佇んでいた。

「わたくしは、ここに残ります」

清姫は、黒の和服の袖で口元を隠し、微笑んだ。

意図が理解できず、時臣は無言のまま見つめ返す。

「確かにこの場所は、醜い野望に囚われた蟲の巣窟です。しかし、同時に……このお屋敷は、わたくしとますたあがはじめて出逢った場所でもあるのです」

雁夜の敵で在り続けた時臣に、言葉を返す資格がないことは自覚している。

なにも言わない時臣に代わって、桜はその大きな瞳でなにかを訴えるように清姫を見つめる。一緒に行きたいのだろう。清姫もまた、桜を救うために命を懸けた人間であることを、桜も理解しているのだ。

「そんな顔をしないで、サクラ」

清姫は、まだ幼い子供に視線を合わせ、今にも消え入りそうな儂い微笑みを浮かべた。今までの苛烈な笑みが嘘のようだった。

「そんな、どうして？　ここまで、一緒に来てくれたのに……」

「わたくしは、愛する殿方の最後の想いを成就するため……ただそのためだけにここへ来たのです。役目はもう、果たされました」

気付いたときには、清姫の体から、金の粒子が立ち昇りはじめていた。

雁夜の最後の魔力で無理矢理現界を保っていたエーテルの体が、いま、その命を終えようとしている。黄金の霊子の輝きの中で、清姫は柔らかく微笑んだ。

「ふふ。ますたあと一緒にすることは叶わなかったけれど……あのひとの願いがひとつでも叶うなら。あなたが、生きていてくれるなら……それが、わたくしがここに存在した証になるのです」

「清姫、さん」

「——強く生きなさい、サクラ。もう、自分の心に嘘をつくようなことはしないで。もつと、我儘に、貪欲に……これからは、自分の幸せを追い求めなさい。どうか、わたくしの分まで」

桜も、時臣も、なにも言えなかった。否定も肯定もなく、ただ静かに、死にゆく英霊

の最期の言葉に耳を傾ける。

「そして、いつか愛する殿方が現れたなら……そのときは、心の赴くままに。ええ、サクラなら……きっと大丈夫です。あなたは、愛される子ですから」

儂く、脆く、容易く手折れる野花を思わせる笑顔が小さく咲いた。それが、時臣らが目にする、清姫の最後の微笑みだった。

地に響くような轟音を伴って、天井がひび割れた。二階の床もろとも崩落した木材と瓦礫の山が、桜と清姫を隔てるように、降り注ぐ。砂埃が舞い上がる中、時臣は愛娘を庇うように抱き抱え、走り出した。

「もう限界だ。いくぞ、桜……」

父に抱かれ、親子は外の世界への一步を踏み出した。

待ち焦がれた自由な空を前にして、それでも桜は、清姫が消えた瓦礫を見つめ続けた。

屋敷の二階は、もはや原型を留めてはいなかった。柱も、壁も、天井も、床すらもずたずたに引き裂いて、燃やし尽くし、ふたりの仮面ライダーが所狭しと駆け回る。

雄叫びを上げて取っ組み合うふたりをよそに、二階のあらゆる彫像品を破壊しつつしながら、エメラルドグリーンの体色をした大蛇と、溶岩でつくられた八俣の大蛇が互い

の体をぶつけあい、隙あらば相手を喰らい尽くさんとその牙を剥いている。とくにクローズマグマが放った八俣の大蛇はひとときわ苛烈で、八頭の龍がのたうつだけで、周囲は火の海と化す。

「テメエ、いい加減しつこいんだよッ！」

三百六十度どこを見渡しても炎しかない灼熱の地獄の中で、クローズマグマはベルトのレバーを一気に回転させた。大蛇と争っていた八俣の大蛇が、爆炎を纏って咆哮する。ブラッドの大蛇をその龍の顎門で食い破った八俣の大蛇は、そのままクローズマグマの右足へと吸い寄せられるように集まった。

「ッ!!」

全身に闇のオーラを纏ったブラッドが、真正面から突っ込んでくる。

クローズマグマは、地を蹴り、飛んだ。背中のスラスタからマグマのジェットを噴射しながら、ブラッドよりも、速く、鋭く、炎の弾丸となって加速する。

「オオオオラアアアアアッ!!」

クローズマグマの必殺のキックが、ブラッドの腹部に直撃した。刹那、爆炎が炸裂し、おびただしい量のマグマが吹き上がった。マグマに巻かれ火だるまになったブラッドは、その体で再び壁を突き破ると、今度はその破壊の爪痕によってついに自重に耐えられなくなった天井の崩落に巻き込まれた。

燃え盛る木と石が大量の瓦礫となって、ブラッドを押し潰さんと降りかかる。獣の咆哮は、瓦礫に封じ込められ、次第に聞こえなくなっていく。

既に屋敷中のあちこちで、屋根が、柱が、倒壊しはじめている。屋敷の限界が近いことは明白だった。ブラッドのように家屋の崩壊に巻き込まれる前に、脱出しなければならない。

「はあ……はあ……っ」

ふらりと、クローズマグマはよろめいた。

ダークキバとの一戦でもそれなりに苦戦はしたが、ダークキバはブラッドほど苛烈な攻撃は仕掛けてこなかった。攻防一体の猛者との戦いは、間違いなく万丈を大きく消耗させていた。

疲労のあまり、膝から崩れ落ちそうになったところで、クローズマグマは何者かに後ろから支えられた。

「お、お前……っ」

キバエンペラーの真紅の複眼が、じっとクローズマグマを見据える。ちようど、クローズマグマの脇腹に腕を回すかたちで支えてくれていた。

「勝った、のか」

「当然です。無事、サクラの救出にも成功しました」

「おう……そうか、そりゃ、よかった」

自分でも驚くほどに気の抜けた返事だった。それから一瞬遅れて、一気に全身から力が抜けていく。

「あーっ、疲れたアアアッ！」

キバエンペラーに支えられながら、クローズマグマは腕を振り上げて快哉を叫んだ。ふ、と。キバエンペラーの仮面の奥から、小さく微笑むような息遣いを万丈は感じた。それが、万丈には意外だった。

「お前、いま笑った？」

「笑ってません」

「嘘だ、絶ッ対エ笑つたらー！」

「……もう屋敷が保たない。急ぎましよう、クローズ」

子供のようにはしゃぐクローズマグマに、キバエンペラーはもはやまともに取り合うつもりもないらしく、その腕を引いて歩き出す。

「ッ!!!」

刹那、既に屋敷の原型すら保たぬ瓦礫の奥から、戦意と殺意に満ちた獣の咆哮が響き渡った。

ぞつとするような悪寒が万丈の背筋を駆け巡る。あれだけの激戦を繰り広げて、ク

ローズマグマのボルテックファイニッシュを直撃で食らって、瓦礫に押し潰されて——それでもあのバーサーカーはまだ戦おうというのか。

一瞬動きを止め、身を強張らせたふたりだったが、キバエンペラーはすぐに背を向けた。

「今の僕らに、アレを相手にしている余裕はありません」

重たい足取りで、キバエンペラーは来た道を引き返してゆく。その歩調にいつもの余裕に満ちた優雅さは感じられない。時折ふらつくキバエンペラーの姿を見て、万丈は小さく嘆息を落とした。あの傲岸不遜なアルターエゴが、脚を引きずって歩いている。そういう姿を眺めていると、ひどく痛々しく感じられて仕方がない

「……つたく、しよーがねえな。飛ぶぞ、ネロー！」

「えっ?」

キバエンペラーが振り返ったそのときには、既にクローズマグマの背中に備えられたスラストターは灼熱のジェット噴射を拭き上げていた。

爆風を巻き起こして飛翔したクローズマグマは、有無を言わずにキバエンペラーの胴体をひつ掴み、そのまま壁を、天井を、屋根すらも突き破って大空へと舞い上がった。どのみち、キバエンペラーが歩いてきた階段は既に燃え落ちてなくなっている。脱出するなら、飛ぶのが一番手っ取り早い。

瓦礫の奥で叫び続けていたブラッドの声は、ジェットの轟音に紛れて、次第に聞こえなくなつた。

炎に卷かれながら、一匹の甲虫はその薄羽を羽撃かせ、外の世界へ這い出ようと飛翔する。けれども、窓という窓は既に炎と瓦礫によつて押し潰されていた。屋敷も既に半分以上が崩れ去っている。間桐の魔術工房は閉鎖を免れない。

蟲の姿をした臓硯は、辟易した思いに駆られた。この程度で死ぬことはないし、バーサーカーも健在である以上、まだまだ幾らでも立て直せるとはいえ、拠点を潰されたのは些か堪える。

ふいに、どこからか声が響いた。

「虚しいものですわね。人の体を捨ててまで生きながらえた醜い嘘つきの末路が、このような幕切れだなんて」

人影はない。声だけが、屋敷の内側の空間に反響している。出どころは、臓硯にすらすぐにはわからなかつた。

「なんじゃ、まだ現界しておつたのか……あいも変わらず浅はかな娘よ。これより先、遠坂は間桐を襲撃した罪を問われ、桜には再び行き場を失う未来が待つておる。さて、幕を下ろすのは、果たしてどちらの方かのう」

いつも通りの、落ち着き払った声音で蟲は尊大に啜う。

結局の所、臓硯にはブラッドスタークと手を組んだ証拠などにもない。それに対し、時臣は堂々とこの屋敷に殴り込みをかけたのだ。協会は間違いなく遠坂を糾弾する。

金の粒子が、一箇所に集まった。黒い和服を身に纏った少女が、燃え盛る炎の中心に姿を現した。既に体の半分以上が透過し、質量を失っている。

「やっぱり、あなた様は最後の最後までそうやって醜く笑うんですね。ええ、その方が、わたくしにとって後腐れがなくてよいというもの」

「……お主、今更なにをする気じゃ」

魔力の流れが変わった。大気中の魔力が、清姫の体へと吸い寄せられている。

あちこちから、生き残った蟲が這い出てきた。地下にいたことで、時臣と黄金のキバに焼かれずに済んだ最後の生き残りの群れだ。その群れに紛れて、臓硯は飛んだ。

清姫は、どの蟲が臓硯の本体であるか、まるで見抜いているかのように臓硯だけを睨み据えた。

「なにをするか？ 決まっているでしょう。ますたあの……雁夜様の願いを遂げるため。ただそのためだけに、わたくしはここにいます。最初に喚ばれたそのときから、ずっと」

白銀の髪が、周囲から立ち上る魔力の余波でふわりと舞い上がり、揺蕩う。スマツシユとの戦いで失われた鉄扇はもうない。まるで喪服を連想させる黒い袖で口元を隠し、清姫は微笑んだ。

「ますたあが遺した思いを、誰かが継がなければならぬ……ならば、その役目はわたくしが。それがきつと、わたくしの命がまだここにある理由」

「死にぞこないのサーヴァント風情が、面白いことを宣いおる。然様なことを、このワシが許すと思うてか？」

瓦礫が吹き飛んだ。獣の咆哮をあげながら、黒と赤、二色の装甲を纏った仮面ライダーが姿を現す。

ブラッドの投擲したビートクローザーの刀身が、まだ実体を保っていた清姫の腹部を刺し貫いた。清姫の口から、おびただしい量の血液が吐き出される。けれども、清姫の瞳に宿った炎が揺らぐことはなかった。

「下賤な妖怪らしく、無様に逃げるかと思うたら……カカツ、身動きすら取れぬとは、拍子抜けもよいところよ」

「もはや……あなたがた、如きの……攻撃、など……避ける、必要すら……ありませんもの」

「茶番はもうよい。バーサーカー、そんな死に損ないの妖怪を縊り殺せ」

闇を纏った仮面ライダーブラッドが、臓硯の命を受けて清姫へとにじり寄る。

清姫はもう、動こうとすらしなかった。粒子となって消滅しはじめたその体で、殺意に満ちた鮮烈な微笑みを浮かべるのみ。

「嗚呼、ますたあ……鐘の音が、きこえます」

どこからか、重たく、鈍い鉄の音が聞こえてくる。

なにか大きな鉄が震え、響き、空間全体にその音が反響している。その音が鐘の音に聞こえることは、認めてもいい。だが、このような場所で鐘の音が聞こえるはずが――

「ま、まさか……お主ッ！」

清姫はもう、なにも言わなかった。微笑みをたたえたまま、静かに瞳を閉じる。

臓硯は慌てて飛び立ったが、もう逃げ場はどこにもない。この空間自体が、限定的な結界の内部へと落ちている。閉鎖された鐘の内部を再現した結界に。

「ば、ばかな……この、ワシが――ッ」

灼熱の炎が噴き上がった。火の手は、臓硯と同じようにこの鐘の外へ出る力をもたない。

清姫の最期の想い^{ほのお}が、なにかかも焼き払ってゆく。悪辣なる野望も、恋慕に焦がれた短く儂い想い出すらも。燃料となる酸素が燃えて尽きるまで、容赦なく、徹底的に、すべてを焼き尽くしていった。

とても寒い冬の夜、石壁に覆われた室内は冷え切っていた。吐息は白く濁り、そよ風ですら肌を刺すような痛みを伴う真冬の夜更け。けれども清姫の心には真夏の太陽のように熱い灯がともっていた。

痩せ細り、憔悴しきった青年の背を、そつと抱きしめる。冷たい風が吹き抜けていった。もう、寒さは感じなかつた。清姫が愛した青年も、そう感じてくれていたのだろうか。春が来たら、愛するひととふたりでどこか遠いところへいきたい。行くあてはないが、どこか、争いのないところへ。長い冬が終わったら、きつと。

なつかしい鐘の音をききながら、清姫は微笑んだ。

痛みも、苦しみも、哀しみも。もう、なにも感じない。

儂い夢を思い描き、最期に落とした涙のひとしずくは、燃え盛る炎に吞まれ、地に落ちる前に消えてなくなつた。

第29話「渋滞するアルゴリズム」

テレビで報道されている事件は、どこの局も戦場となった冬木新都の惨状についての話題で持ちきりだった。人知を超えた怪物によって齎される破壊と混乱は、平和な法治国家で生きる一般市民にとって、あまりにもセンセーショナルな事件といえる。

「ああ……やっってしまったな」

一通りチャンネルを回して状況を理解したキャスターは、沈鬱な面持ちで嘆息し、リモコンをテーブルに置いた。

全国ネットのテレビ画面に映し出されているのは、異形の怪人だけではない。火の手に巻かれた街で、瓦礫を飛び越えながら戦う赤と青の仮面ライダーと、その仲間と思しき白装束の少女。ふたりの勇姿が、ヘリコプターからの空撮映像で大々的に取り上げられている。

「あ、あああ、あの、大馬鹿者めがアアア……っ！」

ケイネスは片手で顔を覆うようにしながら、震える声でわなないた。戦兔が開発したドローンが送ってくる映像も、朝の情報番組で映し出されているものとはほぼ同じだ。画面の中のランサーは、嬉々とした表情で飛び跳ね、駆け回り、異形の怪人へ向けて槍

を振るっている。

ランサーの華のように美しい微笑みが、ケイネスの怒りに火をつけた。

「ケイネス・エルメロイ・アーチボルトはッ！　このような極東のちっぽけな魔術儀式に喜び勇んで首を突っ込み！　拳句、サーヴァントの手綱すら握れず、衆目に神秘を晒した愚か者である！　ああ、時計塔の連中が明日からどういう言い分で私を笑い者にするのか、目に浮かぶようだ……！　こんなことならば、聖杯戦争になぞ参加するのではなかった……ッ！」

「し、心中、お察しいたします……」

「黙れキヤスター！　貴様に私の心が理解できてたまるものかッ！」

ケイネスに怒鳴り散らされたキヤスターは、なにも言い返さず目線を伏せる。

「貴様ら仮面ライダーはまだよい！　スターク諸共、神秘とはなんら無縁の存在なのだ、それがいかに暴れ回り街の平和をかき乱したところで、我ら魔術師は知らぬ存ぜぬを押し通せばよい！　だがな、サーヴァントとなれば話が別だ！　それも、時計塔の看板を背負って戦陣に立つ私のサーヴァントとなればッ！　あの戯けはそういう状況判断もできないのか!?　ああ、出来ないものであろうな！　戦うことしか能のない、片田舎の戦国武将如きではッ!!」

「ああ、もう……さつきからうるさいわね、ケイネス。ちよつと上手く行かないからって

他人に当たり散らして……見苦しいったらありやあしないわ」

「……………」

ふいにかけられた声に、ケイネスははっとして振り返った。

ケイネスの表情を嘲笑うように、婚約者のソラウが腕を組んで佇立していた。思わぬ人物の割り込みに、さしものケイネスも口を噤んだ。ソラウの言葉には、激昂したケイネスをすら黙らせるほどの魔力があつた。キャスターはなにも言わず、ソラウに対し頭を下げていた。

「ソ、ソラウ……！　しかし、このままでは私の立場が危ぶまれる。そうなれば、婚約者である君とて無関係とは言えまい！」

「あのねケイネス……それがわかっているなら、そうやって無駄に当たり散らすよりも、少しでも有意義な対策を考えてほしいのだけど」

場の空気を読もうともせず、ソラウは氷のような視線をケイネスへと向ける。

「し、しかし……そうは言うがな、私の意思などもはや関係はないのだ……なにしろ、あのランサーは勝手に——」

「言い訳は聞きたくないわ。あなたがあの女の^{ランサー}手綱を握れていないのは、揺るぎようもない事実なのだから」

「う、うぐ……………」

凜冽なる女帝を思わせる嘲りが、ケイネスの息を詰まらせる。

「ねえ、ケイネス。確かに、今までの常識で考えれば、あなたの状況は十分絶望的といえるわ……だけど、今は非常事態でしょう？ 見ての通り、あれはもう、ただの魔術儀式の範疇を逸脱してるわ」

ソラウは視線だけをテレビの中で戦うビルドとランサーへと送りながら、変わらず凜とした声で言葉を続ける。最初と比べれば、幾らか棘は抜けて、柔らかい語調になっていた。

「エボルトだかなんだか知らないけど、そいつが復活したら、魔術世界どころか、この世界そのものが危ないんじゃない？ だったら、あなたがやることはひとつ。それを阻止して、聖杯を手に英国に帰ること……違つて？」

「ふむ……確かに、奥方の仰ることに一理ありますな。上手く事を運べば、協会から人理存続の立役者と認められ、次代の英雄と謳われる未来も夢ではない。或いは……
グランドクラス冠位指定の栄光すら恣ほしままにできるやも」

低く、唸るような声で口を開いたキヤスターが、ソラウの言葉を引き継いだ。慎重に言葉を選びながら、ちらりちらりと視線をケイネスへと寄越しながら。

またしてもケイネスをおだてて乗せるつもりであろうことは明白であったが、ケイネスはその未来を一瞬、幻視した。そうすると、もう、ケイネスの表情から最前までの情

けない焦りの色は消えてなくなっていた。

「冠位グランドか……ふむ。なるほど。確かに、そういう未来もないとは言い切れぬな……まあ、

此度のような事件がなくとも、私はいずれその称号を得ることではあろうが」

ソラウはまた、嘲るように笑った。

「私は知ってるわ。あなたは時計塔の風雲児……本気を出せば、できないことなんてなにもないってことを。だから、もう情けない声を出すのはやめて。なにより、あなたの決断には私の将来もかかってるってこと、忘れて貰っては困るわ」

瞬間、ケイネスは衝撃に打たれたように目を見開き、固まった。

「そ、それは……私を励ましてくれるというのか、ソラウ」

「そうとつてくれて構わないわ。だから、私に恥をかかせないでね、ケイネス」

ソラウは、ケイネスの瞳をじっと見つめ、小さく微笑んだ。ケイネスにとつて、その効果は覲面だった。漢として、ここで立ち上がりぬわけにはいかないと、そう強く感じ入った。

「——フ、この程度のことです取り乱すなど……私もどうかしていたな。よかろう、ロード・エルメロイの名にかけて、聖杯戦争の裏に潜む野望を必ずや打ち砕いてみせようではないか」

「おお、その意気です、ケイネス卿。御身の未来を守るためならば、このキャスター、協

力を惜しむつもりはありません。必ずや、その手に聖杯と栄光を約束してみせましょう」

「ふん、あいも変わらず口の回る男だな、貴様は」

キャスターは不敵に笑った。その調子のよさに呆れを抱く反面、ケイネスにしても、存外に悪い気分ではなかった。

今日までキャスターの口車に乗って戦い続けてきた。その結果、戦力は増強し、あのセイバーの打倒すらも現実的な目標として視野に入るところまで迫っている。間違はなく、追い風が吹いている。

ケイネスは念話のパスを開いた。

「ランサーよ。まずは戦場となった冬木を鎮圧し、スタークに追い討ちをかけることが寛容と見た。雑魚の相手などそこそこに、貴様は本体を探し、これを討ち果たせ！」

ケイネスの号令に、キャスターが続く。

「聞こえるか、マスター。スタークかルーラー、どちらかを討てば、この戦いは終わる。本体の搜索は小回りの効くランサーに任せて、マスターは可能な限りその場に怪人どもをひきつけるんだ」

ケイネスとキャスターは互いに顔を合わせ、微かにふ、と頬を緩めた。

ソラウは戦闘そのものに興味はないらしく、これ以上口を挟むこともなく、自室へと

戻っていった。

知性のないゲンムの群れをフルボトルバスターで叩き伏せながら、ラビットタンクスパークリングへの強化変身を果たしたビルドが広間の中心へと躍り出る。ランサーは、その人間離れした脚力ひとつで上空に跳び上がると、空を舞うスマツシユを一撃で叩き落として、ビルドの背後へと着地した。

量産されたゲンムとスマツシユ、そしてバグスターにされてしまった民間人の群れに囲まれながら、ビルドとランサーは互いに背中を合わせて武器を構えた。

「聞こえましたか、戦兔」

「ああ。スタークはともかく、ここで宝具を発動してるルーラーは必ず近くにいるはずだ……どこかで、俺達の戦いを見てる。任せていいか、お虎さん」

肩越しに振り返ると、ランサーはにんまりと満足げに破顔していた。

「ええ、任せられました。そなたも、斯様な雑兵どもに足元を掬われないように！」

「一言多いんだよ、お前。もういいからとっとと行け！」

フルボトルバスターをバスターキャノンへと変形させ、高出力のエネルギー弾を発射する。ランサーは面白そうにくすぐすと笑みを浮かべると、地を蹴った。純白の霊衣は瞬時に掻き消えた。あとにはランサーが巻き起こした風だけが残った。

「さて、それじゃあ調整したてのビルドのスペック、存分に発揮させて貰うとしますか！」

バスターキャノンから光弾を立て続けに発射しながら、ビルドは駆け出した。標的は、ゲムムとスマッシュだけだ。バグスター戦闘員からの攻撃は回避しながら、ビルドは眼前にいたゲムムと一気に距離を詰める。

ゲムムの反応は鈍い。すぐさまフルボトルバスターをバスターブレードへと変形させ、強力な一太刀を浴びせる。同時に発生した大粒の泡が、インパクトバブル衝撃波を伴って破裂する。一瞬遅れて、大きくのけぞったゲムムは爆発四散した。

すかさず左右から別のスマッシュが襲いかかってくる。ビルドはひとまず左のスマッシュに狙いを定め、地を蹴った。脚部装甲から発生した小粒の泡が弾け、ビルドは一気に加速する。またたく間に敵の間合いに飛び込んだビルドは、スマッシュの体を袈裟懸けに斬り裂いた。

右のスマッシュは、既にビルドの間合いに飛び込んでいた。
「ハッ！」

ビルドの右足が、迫りくるスマッシュの胸部に突き刺さった。

足裏に仕込まれたキヤタピラが高速回転し、敵の鋼鉄の装甲を削り取る。同時に溢れ出した大量の泡が爆発を伴って弾け、スマッシュの体躯を大きく吹き飛ばした。

「これで決まりだー！」

取り出したガトリングフルボトルを装填し、大剣は再び大砲へと姿を変える。シリンドーに、ガトリングのクレストが浮かび上がった。

『FULL BOTTLE BREAK!!』

砲口が光を放つ。発射された無数の弾丸は、大空を支配する猛禽類のように自在に空を駆け、それらすべてがゲナムとスマツシユのみを狙って襲撃していった。被弾箇所から溢れ出たバブルが、爆発を伴って弾けてゆく。

十秒ほどで、被弾したスマツシユの凡そ半数は強制的に変身を解除され人間の姿へと戻ったが、残りの半数は上手くガトリングから逃れ、自らの意思で撤退していった。

意識を失って倒れ伏した被害者たちに、新たに湧き出したゲナムが迫る。

「あーあー、やっぱ本体叩かないとダメかー」

ビルドの仮面の下で戦兎は嘆息した。今のフルボトルブレイクによって一旦は数を減らしたゲナムも、また新たに地面から湧き出るようにして増殖を続けている。これはキリがない。

一方で、バグスターはまるで生きた人間に引き寄せられるゾンビのように、スマツシユにされていた被害者たちへとにじり寄る。

「はいはいストップストップ、近付くんじやないよー！」

バグスターの一人を背後から羽交い締めにし、投げ飛ばす。見渡せば、バグスターは広間のあちこちで意識を失った民間人に接触しようとしていた。

「(ト)う(ト)うときは——」

スパイダーボトルの蜘蛛の力でまともて拘束するのが手っ取り早い。そう考えてボトルを取り出した、その刹那だった。

空から急降下してきたのは、真紅の外套を見に纏った弓兵だった。

「——お前……ッ、アーチャー!?!」

ちらりとビルドに一瞥を寄越したアーチャーは、間髪入れずに手にした剣をバグスターへと突き刺した。やめろ、と叫ぶ間すらなかった。

絶句するビルドをよそに、剣を突き立てられたバグスターの傷口から、紫色をした魔力の輝きが、真紅の放電の糸を伴って溢れ出る。魔力の発光はたちまちくらみ、またたく間にバグスターを飲み込んだ。

「そのひとになにをした!?!」

アーチャーは、言葉を返そうとはしない。振り返ろうとすらしなかった。

一瞬ののち、輝きが収まったあとには、バグスターの姿はなくなっていた。代わりに、ひとりの男がふらりと姿勢を崩してその場に倒れ込んだ。バグスターに姿を変えられていた被害者の人間が、元の姿を取り戻したのだ。

「えーっ、なんでー!?!」

アーチャーは言葉返すことなく、表情のひとつすらも動かさずに、手にした短剣をきわめて雑に放り投げた。

危なげなくそれを受け取ったビルドは、投げ渡された短剣をしげしげと眇める。さながら雷雲を駆け抜ける稲妻のように大きく歪曲した、紫色の刃を持つ短剣だった。

「これは……?」

「警戒すべき全ての符——せいぜい使いこなしてみせろ、正義のヒーロー」

「……お前、今度はなにを企んでる」

アーチャーは背を向けたまま、僅かに首を回して一瞥を寄越した。まるで嘲笑うように頬を緩めると、無言のまま地を蹴り、空へと舞い上がった。

追いかけるようかとも考えたが、今はアーチャーの相手をしている場合ではない。ルブレイカーを強く握り締めたビルドは、今まさにウイルスを感染させようと迫るバグスターの群れ目掛けて駆け出した。

雑居ビルの屋上で、戦場となった新都の街並みを見下ろしながら、切嗣は肺の奥にわだかまつた煙をふうと吐き出した。

街の人々が未知のウイルスに感染し、化け物へと姿を変えていく。思い出したくもな

い過去の再現を見せつけられているようで、切嗣は心中穏やかではいらなかった。煙草の減りが平時よりも激しい。

“アーチャーめ、勝手なことをしてくれる”

この地獄のさなか、アーチャーが仮面ライダーに接触する様は眺めてはいた。

あの男は、ウイルスの宿主たるゲンムがサーヴァントであることを知った上で、感染源と被害者との間に存在する魔術的な繋がりを断ち切る兵装を仮面ライダーに託したのだ。

“——サーヴァントの宝具を無効化する武器、か”

切嗣は、徐々に己が引き当てたサーヴァントの性質に気付きつつあった。

あれは投影魔術の一種と見て間違いない。任意の魔術兵装を投影し、その贗作に強化魔術を施して武器として扱う。とりわけアーチャーの投影魔術は制度が高く、本来の英雄が用いていた宝具の能力までコピーしてしまえるものなのだろう。

そんなことができるのは、戦士でも英雄でもない。

“あの男は、魔術師だ”

切嗣の中で、それは既に確信へと変わっていた。

投影魔術と強化魔術によって製造された武器は、シャドウランサーの『魔術効果を無効化する槍』に太刀打ちできなかつた。強化魔術による恩恵を失ったハリボテが、神秘

を秘めたサーヴァントの武器とかち合えば、破壊されるのは当然のことわりだからだ。

「だが、だとしてもサーヴァントの宝具すらコピーする魔術師なんて、聞いたことがない。そんなやつが本当に存在するの？」

黙考のさなか、ふいに、背後に気配を感じた。

こういうとき、切嗣の行動は早い。思考をすかさず中断し、一切の無駄なく懐からキャレコ短機関銃を抜いた切嗣は、一秒とかけずに背後に迫る第三者へとその銃口を突きつける。

果たして、切嗣の背後に立っていたのは、仮面ライダーゲンムであった。そいつは、白と赤のオッドアイでじいっと切嗣を見据えている。量産されたゾンビ個体でないことは明白だった。

「衛宮切嗣。私はスタークの討伐を命じたはずだが……こんなところで、君はなにをやっているのかな」

「そのスタークの姿が見えないんじゃないだろうか。それとも、こんな益のない泥沼の戦場に、自ら足を踏み込んで行けというのかい？ ……はっ、冗談じゃない」

銃口を突きつけたまま、切嗣は薄ら笑みを浮かべた。

ゲンムもまた、ほう、と小さく吐息を漏らして、笑った。

「君は、追加の令呪が欲しくはないのか」

「生憎と、僕は端からそんな胡乱なものに頼っちゃいけないでね」

「——ンだったら貴様にイ！ 令呪の使い時というものを教えてやるウウウー」

ゲムムが咆哮するが早いのか、その影からどす黒い闇が溢れ出した。影の中から、獲物を求めてゾンビが這い出てくる。二体、四体、八体と、またたく間に仮面ライダーゲムムは数を増やしてゆき、そのいずれもが、切嗣の退路を断つように周囲を取り囲んでいた。

相手がサーヴァントでは、起源弾も意味をなさない。小さく舌打ちをした切嗣は、愛用の短機関銃のトリガーを引きながら、数歩交代して間合いを測る。ゲムムたちは、その身にサブマシンガンの斉射を受けたところでびくともしない。

「Time 固 有 時 制 御 alter—double 二 倍 速 accelerate！」

攻撃が通用しないと判断した切嗣の行動は早かった。唱え慣れた詠唱を短く紬ぎ、自身を加速した時の中へと入門させる。

一気にゲムムの脇をすり抜け、撤退しようと考えての行動だった。量産されたゾンビでは追いつけない、サーヴァントの感覚すら凌駕する超加速で切嗣は駆け出す。

『COSMIC コズミック CHRONICLE クロニクル』

加速した時の中で、聞こえるはずのない電子音を聞いた。

量産されたゲムムたちを率いていた本体が、加速した時の中、弾かれたように地を

蹴った。

「——ッ!?!」

「絶対神たるこの私がアアア……いまさら時間操作ごときに遅れを取るとでも思ったのかッ、この間抜けめエエツ!! ヴェアアアアハハハハアツ!」

ほぼ反射的にキヤレコ短機関銃の銃口を向けるが、無駄だ。加速しているのは切嗣だけで、弾丸は切嗣から離れると同時に通常の時の流れに戻る。それでは、加速状態のゲンムには届かない。

「ヴェアアアツ!」

「く……っ」

切嗣のキヤレコを叩き落としたゲンムは、加速中の切嗣の首根っこを掴み上げた。同時に固有タイムアルター時制御の効力が切れて、通常の時間の流れに戻る。刹那、世界からの修正力が一気に体にのしかかる。全身の毛穴が開き、玉のような汗がどつと吹き出る。

「宇宙の力は『時の概念』すら歪めるのだ……この私を甘く見たな、衛宮切嗣ウ」

「はあ……っ、は……っ……」

全身に酸素が行き届いていない。感覚が鈍る中、体は酸素を求めているというのに、首根っこを掴み上げられているものだから、呼吸すらままならない。苦痛に目を細め、切嗣はゲンムを睨んだ。

「安心したまえ、殺しはしないさ。だが、君たちアインツベルンには少しばかり借りがある。ゲームマスターに歯向かった罪、ここできつちりと精算させて貰おうじゃないか」
滔々と、歌い上げるようにゲムムは笑った。

聖杯戦争開幕直後のアインツベルン城での戦いのことを指しているのだろう。逆恨みもいいところだ。

業腹だが、ここは令呪でアーチャーを呼び戻すべきか、そういう考えが脳裏をよぎった、その時だった。

「でやあああああッ!!」

耳をつんざくような裂帛の叫び声とともに、凄まじい速度で放たれた槍の一撃が、上段から振り落とされる。ゲムムは咄嗟に切嗣を突き放した。

地べたを一回転して起き上がった切嗣が見たのは、ゲムムに槍を突きつけて構える女武将の、風に舞う白銀の長髪だった。

「どこの誰かは存じませんが、窮地ピンチとお見受け致しました。かよわき衆生の危機に颯爽参上するこの私……! これぞ、毘沙門天の導きなり!」

満面の笑みで槍を高速回転させたランサーは、周囲を取り囲むすべてのゲムムに対して大見得を切り、構えを取った。もはや真名を隠すつもりもないらしい。

「ランサーアア……貴様ア、このゲームマスターに歯向かうことがなにを意味するか、わ

かっているのだろうか!?」

「ゲームマスターだかなんだか知りませんが、いつの時代であれ、無辜の民を苦しめるよ
うなならず者は見過ごせません! よって、そなたの悪逆……この毘沙門天が成敗致し
ます!」

切嗣は理解した。こういう状況に陥ったとき、ランサーは人の話を聞くタイプではな
いのだろう。誰の返答も待たず、ランサーはぶんと音を立てて槍を振り回し、一気呵成
に飛びかかった。

一瞬遅れてゾンビがランサーに襲いかかるが、一騎当千の英霊を止めるにはあまりに
も動きが鈍すぎる。横合いから掴みかかってきた一体目のゲムムを横薙ぎに薙ぎ払う
と、反対方向から迫りくる二体目のゲムムの喉元に、槍の柄を力強く突き立てて昏倒さ
せる。瞬間間に本体のゲムムの間合いに飛び込んだランサーは、その足元を薙ぎ払うよ
うに槍を振るった。

「ぐう、おのれエ!」

「はあああああッ!!」

攻撃の速度が、あまりにも違いすぎる。ゲムムが剣を取り出したときには、すでにラ
ンサーの槍が上段から振り下ろされていく。苦し紛れに上段からの一撃を受け止めた
ゲムムだったが、その直後、ランサーの飛び蹴りがゲムムの胸部装甲に突き刺さった。

ゲムムを蹴り飛ばしたランサーは、ぐるりと空中で一回転すると、着地と同時に再び槍をぶんぶんぶんぶんぶんぶんと必要以上に振り回して見得を切った。

「おのれエエエ、このゲームマスターに楯突くとは、なアアたる不遜ソソッ！」

ゲムムの叫びに応えるように、地面から無数のゾンビが湧いて出る。ゾンビの群れは、本体であるゲムムを庇うように整列し、ランサーとの間に壁をつくった。四体、八体、十六体と瞬く間に増えたゲムムは、隙間なく密集し、それぞれが威嚇するように腕を突き出して蠢いている。

「……まさしくゾンビだな。趣味の悪い宝具だ」

「同感です。雑兵がいかにも増えようと私にかかれれば蹴散らすことなど雑作もないのですが、こども数が増えると……流石に少し、鬱陶しいですね」

切嗣は、戦国武将を名乗る女を横目に見遣った。

言葉を返す気にはならなかったが、ランサーもさして返答を待っている様子ではなかった。

「ここは一先ず撤退しますか。私一人ならどうとでもなるのですが、そなたが近くにいては、どうにも槍を振るいにくい」

襲い掛かってきたゾンビの数体を蹴散らしながら、ランサーは切嗣に寄り添った。ランサーにとって、切嗣は依然護衛の対象なのだろう。

言い知れぬ不快感が総身を駆け巡る。切嗣は返答を返さず、無言のまま短機関銃の砲口をゲナムへと向ける。

そのとき、何処からともなく声が響いた。

「——このピンチ、どうやら主役がいねえと始まらねえようだな！」

刹那、突風が巻き起こった。自然の風ではない。泡を孕んだ、人為的な風だ。風はゲナムが吐き出した瘴気を吹き払い、そのゾンビの装甲に泡を叩きつけるように吹き荒れる。前列にいたゾンビは装甲を爆ぜさせ、動きを鈍らせた。

ランサーが嬉々として叫ぶ。

「これは……もしやー！」

「二人のピンチに颯爽と駆け付ける、自意識過剰な正義のヒーローさ」

切嗣の眼前に、絵巻物や漫画で見えるような煙の「絵」が、どろんと音を立てて姿を表した。煙はすぐに晴れ、どこからともなく姿を表したのは、赤・青・白の仮面ライダートリコロールカラービルドだった。左手には紫と黄色の忍法刀、右腕には赤の大剣を構えている。

ヒーローという言葉に空々しさを覚えながらも、切嗣は節目がちにビルドに視線を送った。ビルドも切嗣に一瞥を寄越したが、すぐに間に和装の少女が割って入った。

「まあ、私としては助けなどはまったく不要だったのですが。それはそれとして、下はもうよいのですか、戦兎」

「ああ、とつくに片付けた。つっても、スマツシユは勝手に撤退していったけどな……で、そんなことより、あいつがルーラーの本体ってことでもいいのか、お虎さん」

「どうやらそのようです。非常に厄介な宝具をお持ちのようで……なにか策はありますか、天才物理学者殿？」

ビルドの仮面の下で、桐生戦兎がふつ、と笑う息遣いが聞こえた。

「当然。ルーラーには、ちょーつと痛い目見てもらう必要がありそうだ」

「ほごくなよ桐生戦兎オ！ この数のゲムをオ、ドオウやって処理するつもりだア！」
「お生憎様、こっちの勝利の法則はとつくに決まってるんだよ！」

言いながら前に出たビルドは、前方から迫ってきたゲムを蹴り飛ばして嘯いた。蹴られたゲムの装甲で泡が弾けて、後方の仲間とともに数メートル後方へ吹き飛んだ。人ひとり分の空間を確保したビルドは、両手のひらを軽くはたいて、ベルトのレバーを一気に回転させる。

『Ready Go!』

電子音とともに空高く跳び上がったビルドが、空中で右足を突き出した。

数学で用いられる計算式と、筒状の立体図形が空中に姿を現す。立体図形は、中心に向けて狭まり、ねじれ、その内部はワームホールとなって、筒の上下口から周囲の物質を吸い寄せる。

ゾンビの群れは、ビルドが生み出したワームホールが発生させる強力な引力に逆らえず、纏めて凶形の内部へと吸引されていった。

「な、なにイイイ!？」

『Sparkling Finish!!』

ビルドの右足に集約された輝きが、赤と青の輝きを放つ。輝きは弾ける泡を生成しながら、ビルドは空中を滑る流星のように凶形の上部口へと突入した。

ワームホールの内部は、ビルドが生成した『デイメンション・バブル』の影響で、空間が歪んでいる。数十体に及ぶゲンムは、その全てがワームホールの中心たる零地点で圧縮されていた。

凶形内部へと飛び込んだビルドの必殺のキックが、その中心を穿った。赤と青の衝撃波は泡となって、烈風とともにワームホールの出口から吹き出した。

「ぬおおおおおおおッ!？」

その泡のすべては、出口付近にいたゲンム本体へと殺到する。ゲンムは両腕で頭を庇ったが、全身に吹き付ける泡のすべてが爆発を引き起こすので、もはや防御のとりようがない。胸元のライダーゲージが一気に低下してゆく。

「ハアアアアアアアアアアアアアッ!!」

凶形の出口から最後に排出されたのは、未だライダーキックの姿勢のまま右足を突き

出したビルドだった。

蹴りが、ゲムムの胸部装甲に直撃する。同時に、赤と青の衝撃波が拡散し、ゲムムは装甲を爆発させながら一気に吹っ飛んだ。がしゃアンと大きな音を響かせてビルドのフェンスに激突したゲムムは、フェンスを大胆にひしゃげさせながらも、どきりと地べたに転がった。

『Over gauge』

空中に文字が浮かび上がった。ゲムムの胸元の青色のライダーゲージがゼロになり、青の菱形アイコンが消え去った。

「ぐっ……う、うおおあああああッ!!」

ゲムムは、怒りとも悲しみともつかない叫びを上げて、コンクリートの地面を力まかせに殴りつけた。一拍ほどの間を置いて、ふらりと立ち上がると、無言のまま変身を解除する。現れた檀黎斗は、何事もないかのように薄ら笑みを浮かべていた。

「ふう……なるほど、君たちの考えはよくわかった。報酬の令呪は必要ないと、そういうんだね」

誰も、無言のまま答えようとはしない。ランサーとビルド、次にビルドと切嗣がそれぞれ顔を見合わせる。

一瞬ののち、全員を代表して回答したのは、先頭に立つビルドだった。

「そういうことらしいぞ」

「いいだろう。私に勝利したことに免じて、今回の不敬は許してやる。しかし、スタークの討伐だけはなにがなんでも成し遂げてもらうぞ。どっちみち、スタークがいる限り、正常な聖杯戦争の運営は不可能なのだからなア！」

黎斗は、両手でジャケットの襟を正すと、くるりと踵を返した。黎斗が霊体化して消えたあとには、もはやゾンビの群れは一体も残されてはいなかった。

燃え落ちてゆく間桐の屋敷を眺める一同の顔には、一様に疲労が色濃く刻まれていた。額に深く皺を刻んだ時臣も、その手を握り締めて不安げに屋敷を眺める桜も、もはや立っていることすらままならず尻もちをついて足を投げ出している万丈も、みながみな、疲れ切っている。ネロに至っては、既に霊体化して表に出てこようとすらしない。

「終わったな」

「いや、始まりだよ。私と、私の家族は、ここから始めなければならぬ」

万丈は、地べたに深く座り込んだまま、時臣の顔を見上げた。疲労は隠しきれないものの、同時に、いつになく晴れやかな表情をしているように万丈には思われた。それが嬉しくて、万丈は笑った。

「そりゃ結構なこった。あんたなら、きつとやり直せるよ」

にっとう歯を見せて笑う万丈に、時臣のみならず、桜もおおずとおおずと微笑み返した。

はじめて会ったとき、仄暗い地下の蟲蔵で、自分の意思をなくし、ただ嬲られるだけしかできなかった少女が、こうして子供らしく微笑んでくれている。それが万丈には嬉しかった。

できることなら、雁夜にも桜の笑顔を見せてやりたかったが、それを口にして時臣や桜の笑顔を陰らせるのも憚られたので、万丈はあえて雁夜の話題を口に出すことはしなかった。

「で、遠坂さん。あんたこれからどうすんだ」

「此度の聖杯戦争は終わつたが、遠坂家当主としての戦いはこれからが本番だ。なに、失つたものばかりではない……次の十年に向けて、じっくりと準備を進めていくさ」

「懲りねーな、あんたも。もう二度と凛と桜を泣かせるんじゃないぞ」

「ふ、努力はしよう」

それが時臣なりの冗談なのだ気付いて、万丈はふつと失笑した。

ちようどそのとき、正門前に一台の車が停車した。万丈の時代ではとうに見なくなつた型式の、時代を感じさせる高級外国車だ。運転席の扉を開けて、中から姿を表したのは、時臣の弟子である言峰綺礼だった。

綺礼は間桐の敷地に足を踏み入れて数歩進むと、燃え落ちてゆく屋敷に視線を送つ

て、目を細めた。けれども、それきり興味を失ったように時臣に向き直り、頭を下げる。

「導師、お迎えに上がりました」
マスター

「ありがとう、綺礼。君にも、苦勞をかけるね」

「いえ、そのようなことは」

凡そ感情を感じさせぬお辞儀を受けて、時臣は薄く微笑み、踵を返した。

桜は、すっかりと時臣の手のひらを握り締めたまま、決して離そうとはしなかった。

「それじゃあ、万丈くん。私はもう行くよ……新都の方でも、朝から由々しき問題が起こっているようですね。まずはその後始末に尽力しなければならぬ」

「せっかく聖杯戦争が終わったつてのに、あんたも大変だな」

「ふ……そうだな。当初の予定とは大きくはずれてしまったが、それでも聖杯戦争に参加したものとして……果たさねばならぬ義務はある。今はもういない璃正さんの分まで、私がやらねばならない」

万丈は、そうか、と一言つぶやき、空を仰いだ。

難しい話はわからないが、娘たちを救い出した上で、時臣が必要なことだというのなら、そうなのだろう。そこに口出しをするつもりはない。

「なあ、万丈くん。いつかすべてが終わったら、またうちの屋敷に顔を出してくれるかい」

「えっ?」

「今回の勝利は、君の活躍あつてのものだからね……改めて、感謝の気持ちを贈らせてほしいんだ」

思いもよらぬ時臣からの申し出に、万丈は目を丸めた。

旧友である璃正神父を殺され、必勝の覚悟をもつて召喚したセイバーを失い、令呪すら使い果たしたことで再起すら叶わなくなった時臣が、それでもこの結末を『勝利』と表現したのだ。出会った頃の時臣からは考えられない心境の変化だった。

立ち上がった万丈は、綺礼に導かれて去つてゆく時臣の背中を見送つた。手を引かれて歩く桜も、一瞬振り返ると、おずおずと頭を下げて頬を緩めた。万丈は、桜に向けてにつこりと破顔し、手を振つた。

ほんの一分ほどで、綺礼の車は見えなくなつた。誰もいなくなつた間桐の庭園で、万丈はひとり、空を見上げた。

「雁夜……お前も、死ぬほどつらい思いしながら、頑張つてたんだよな」

桜が救われたこと、また笑つてくれるようになったこと、雁夜が知つたらどう思うだろうか。万丈には、結局のところ、雁夜のこととはよくわからなかつた。雁夜がなにを求めて命を懸けていたのかも、今はもう、わからない。

だけでも、万丈にとつての雁夜は、苦しんでいる少女のために命を懸けた男だった。

それだけで、十分だ。それ以上のなにも知る必要はない。

“お前のことは絶対エ忘れねえ。あとのことは俺らに任せて……お前はゆっくり休め”

ここにはもういない雁夜と、あの健気な少女の声が、薄く聞こえた気がした。

間桐の屋敷からやや離れた小高い丘に、舞弥は車を停車させていた。望遠鏡を覗き込むと、既に屋敷は赤々と燃え盛り、白煙が空に向かって伸びているのが見える。

人払いの結界も既に解除されている様子だった。術者である間桐臓硯が死んだからだろう。程なくして、消防隊が現地に駆けつけるだろうことは予測がついた。

「セイバーとバーサーカーが脱落した、か……」

遠坂時臣が言峰綺礼の用意した車に乗って去っていったことは確認している。令呪がまだ残っているのかどうか、それ次第で暗殺の必要性は変わってくるのだろうが、ひとまずは目下最大の敵と称されていたセイバーの脱落を喜ぶべきだろう。

「さて、次はこの陣営を落とす？ キャスターか、ランサーか、それともライダーか？ おっとオ、ぜんぶ同じ陣営だったな」

「ツ!?!」

突如としてかけられた声に振り返ると、真紅の装甲を身に纏った男——ブラッドス

タークが、舞弥の車にもたれ掛かって手を振っていた。

戦場で育った舞弥が、ここに至るまでスタークの気配すら感じなかった。音もなく背後を取られたその事実には、ぶわっと嫌な汗が吹き出てくるのを感じた。

「まあそう硬くなるなよ。この姿で会うのは初めてだが、知らねえ仲でもないだろう？」
務めてフランクに呼びかけながら、スタークは悠然と歩を進める。

舞弥はすかさず懐からキャレコ短機関銃を抜いて、構えた。

「おいおい、そんなモンが威嚇になると思ってるのか」

スタークが地を蹴った。躊躇している暇はない。キャレコのトリガーを引き、弾丸の嵐を浴びせるが、スタークの装甲には風穴ひとつ開けられない。硬い金属音だけが響いて、弾丸ははじかれるばかりだった。

瞬く間に舞弥の間合いに飛び込んできたスタークは、舞弥のキャレコを叩き落とし、腹部に重たい拳の一撃を叩き込んできた。

「う……ッ」

強烈な痛みが腹部から感覚を奪う。体がくの字に折れ曲がった、その隙を突いて、スタークは舞弥の髪の毛を乱暴に掴み上げる。

「お前からアインツベルンが俺の周りをコソコソ嗅ぎ回ってたこと、気付いてないでも思ってたのか」

嘲笑うような声音に、舞弥は返す言葉を持たず、無言を貫いた。

「ハツ……まあいい。お前にはせいぜい、俺のために役立つて貰おうじゃねえか」

「なに、を……」

「俗に言う『人質』つてやつさ」

「そうか。ならば、彼女は渡せないな」

聞き慣れた低い声が響くと同時に、白の黒の夫婦剣が独楽のように高速回転しながら、スタークへと迫る。スタークは咄嗟に舞弥を突き放し、スチームブレードで一投目の白の剣を受け止めた。しかし、二投目の黒の剣は対処が間に合わず、スタークの仮面を大きく傷つけた。

血飛沫の代わりに火花を舞い上げて、スタークは地べたを転がった。

「いよいよ全ての陣営を敵に回して自棄にでもなったか？　コウモリを続けるのも楽ではないな、ブラッドスターク忍び寄る者」

「アア……生憎と、俺アヘビで通ってた。コウモリは俺じゃない」

傷つけられた仮面を抑え、スタークは立ち上がった。くつくつと笑みを浮かべながら、真紅の外套を風に靡かせて立つアーチャーへと向き直る。

トランスチームガンを構えると、その銃口から光弾を連続で発射しながら駆け出した。アーチャーは、手にした夫婦剣で光弾の尽くを撃ち落とし、スタークの到来を待ち

受ける。

「大した反射神経だ！　だが、こいつはどうだア!?」

アーチャーの間合いに飛び込んだスタークの右腕に装着された伸縮ニードルが伸びる。けれども、相手は英霊だ。子供騙しが通用する相手ではない。腕ごと白の剣で払い除けると、黒の剣でスタークの胸部装甲を袈裟懸けに斬り裂いた。

「うおおっ!？」

大きく仰け反ったスタークに、追撃の二刀を連続で叩き込む。スタークは、アーチャーの動きにまるで反応しきれてはいない。一方的に攻撃され、火花を噴き上げながら後退するしかなかった。

「はあくああ、英霊つてのは流石にやるねえ……今日までできる限りお前らとは当たらねえようにしてたんだが、こいつはとんだ計算違いだ」

「策士策に溺れるとはよく言ったものだ。その過ちは、せいぜいあの世で悔やむんだな」
「はん……悪いがア、俺はまだあの世に行く気はないんだよオ！」

スタークにトドメを刺そうと駆け出したアーチャーを阻むように、闇の粒子が一箇所に寄り集まった。粒子は黒の騎士甲冑をかたちづくったが、その甲冑もすぐに闇に呑まれ、赤と黒の装甲へと変質した。

黒いコブラのマスクを装着した地球外の仮面ライダーが、そこにはいた。

「なんだとッ!？」

スタークを庇うように姿を表した仮面ライダーブラッドは、どこからともなくビートタローザーを精製すると、その剣を振るってアーチャーの剣と打ち合った。ブラッドの猛攻は凄まじく、二刀流をもってしても、捌き切るのは難しかった。

「ッ!!」

ブラッドの反応速度は、英霊と比べてみてもなんら遜色するものではない。赤い残像を残して超高速でアーチャーに躍りかかるブラッドには、さしものアーチャーも苦戦を強いられていた。

「よオし、いい調子だ。今度は裏切るんじゃねえぞオ」

ブラッドに呼びかけながら、スタークは悠然と舞弥に歩み寄る。

鋼鉄すら砕くスタークのパンチを腹部に受けただけあって、舞弥は上手く身動きを取れることもできずにいた。

自分に乗ってきた車に乗り込もうとしたが、それもままならず車体に寄りかかっていた舞弥の首筋を、スタークは手刀で軽く叩いた。その一撃で意識を刈り取られくずおれた舞弥を、スタークは腕の中に抱え込む。

「ッ、待て、貴様!」

「ああ、安心しろよ。殺しはしないさ……ま、お前ら次第だけどなあ」

アーチャーは憎々しげにスタークを睨め付けるが、ブラッドの猛攻に晒されている今、下手に動くことも出来はしない。

ブラッドは、真正正銘の英霊だ。円卓最強ランスロットなのだ。英霊にすら選ばれなかったスタークとは、わけが違う。

「さて、アーチャー。聖杯戦争もいよいよ大詰めだ。残された時間、せいぜい仲間たちと悔いのないように過ごしな」

「……どういいう意味だ」

「そのまんまの意味だよオ」

ブラッドに応戦しながら、アーチャーは苦し紛れに剣を投擲したが、それがスタークに命中する頃には、既に頭部の煙突からもうもうと吹き出した黒煙によって、スタークの姿は掻き消されていた。放たれた剣は、ただ、なにもない煙幕を切り裂き、散らしただけだった。

冬木新都から、怪人の群れが消え去った。同時に、警官隊や消防隊、救急隊が退去して押し寄せてきた。空にはヘリコプターが行き交っている。

屋上からひとまず室内に入った戦兔は、ページュのコートのポケットに手をつっ込んだまま、壁に寄りかかった。尖った視線だけを切嗣へと向けて。

「あんた……アーチャーのマスターだろ。あんなところでなにしてたんだ」

ランサーも既に気付いていたのだろう、特段驚くような素振りも見せず、無言のまま切嗣の出方を伺っている。切嗣が少しでも怪しい動きを見せれば、風よりも疾く動いて、その動きを撃肘できる。そういう間合いに彼女はいた。

「俺はアーチャーから、こいつを預かった」

戦兔が取り出したのは、紫の刃持つ短剣——ルールブレイカーだ。

この刃でゾンビバグスターにダメージを与えれば、ルーラーの宝具にのる呪縛から人々を解き放つことができる。けれども、なぜそんなものをアーチャーが寄越してきたのかかわからない。

「正直、俺はあんたたちを信用してない。助けてくれたことには礼を言うが、裏に何か罠があるんじゃないかと疑わずにはいられない」

「それは、僕の意思じゃない。アーチャーが勝手にやったことだ」

「アーチャーが……?」

あのとき、ルールブレイカーを寄越した直後のアーチャーの言葉は、今も戦兔の耳の奥に深くこびりついている。

——せいぜい使いこなしてみせろ、正義のヒーロー。

冬木ハイアットではじめてアーチャーと戦ったとき、たしかに戦兔は自らを正義の

ヒーローであると名乗った。それを覚えていて、戦兔を煽ったのだろうか。アーチャー陣営に関する情報が余りにも少なすぎて、どうにも判断がつけられない。

「その剣は君たちにくれてやる。その代わりといつてはなんだが、こちらからもひとつ要求がある」

「うわ、そつちから要求とは、ずいぶん大きく出てくれますね。自分がこれまでなにをしてきたか、覚えてます？」

戦兔は片手でランサーを制した。余計な口を挟むな、と目線だけで告げる。

ケイネスを二度も殺されかけていることを思えば、ランサーが抱く不信感も理解はできるが、今は話を進めることの方が先決だ。

戦兔の反応を肯定と捉えた切嗣は、再び口を開いた。

「今しがた、アーチャーから連絡が入った。僕らの仲間がスタークに人質に取られたらしく」

戦兔とランサーは、静かに視線を交わして、次の言葉を待った。

「君たちに、停戦協定を申し入れたい。期間は、仲間を奪還し、スタークを討伐するまで。それが叶うまで、僕らは君らの陣営の人間に一切手を出さないと誓おう」

もう一度、戦兔とランサーは顔を見合わせた。

車内に流れるラジオのニュースは、どれも冬木新都で起こった怪人たちによるテロ行為のことで持ちきりだった。犠牲者の数や、行方不明者の数が伝えられる。これは、正当なる聖杯戦争として、あつてはならない大事件だ。

「やれやれ……少しくらい休みたかったのだがね。正真正銘、私の戦いはここからが本番になりそうだ」

後部座席で揺られながら、時臣は苦笑した。

隣の桜は、すうすうと寝息を立てている。あの地獄のような間桐の屋敷から脱出することができて、どっと気疲れが押し寄せてきたのだろう。時臣は、愛しい娘の額を優しく撫で梳いた。紫色になってしまった髪の毛が、さらさらと揺れる。

ちらと、バックミラー越しに運転席の綺礼と目が合った。

「……綺礼。聖堂教会のスタッフは」

「冬木に配置されていたスタッフなら、その殆どが現在音信不通です。おそらく、大半が既にスタークの手にかかったものかと」

「そうだろうな。でなければ、ここまで大々的に事件が報道されるわけがない」

時臣は、窓から外の景色を見上げた。新都の方向を見上げれば、上空が白く霞んでるのがわかる。ビル火災による白煙だ。

やらなければならぬことが山積みだ。だが、やれない気はしない。セイバーとキ

バットが、万丈たちが、時臣に大切なことを教えてくれた。娘たちの未来のため、次の十年のため、こんなところでへこたれるわけにはいかない。

「綺礼……お父上が亡くなられたばかりだというのに、君には無理をさせる」

「いえ……私などには勿体ないお言葉です。寧ろ、無理をしているのは導師の方でしょう。セイバーを失ったばかりだというのに」

「私のことはいいんだ。今回の戦いは、決して失うばかりではなかった……寧ろ、私にとつて実りあるものだったと認識している。だから、なにひとつとして、後悔はないだ」

言ってから、時臣は窓ガラスに映った自分の朗らかな表情を見て、はっとした。

自分はこうして前を向くことができたからいい。だが、綺礼はどうか。敬愛する父親を失い、サーヴァントを失い、気丈に振る舞ってはいるものの、精神的には参っているのではないか。

師として、綺礼のためにできることをしてやりたい。

「なあ綺礼。我々の聖杯戦争は終わったが……私は、どうか今後とも、亡きお父上のように、君もまた遠坂との縁故を保っていつてほしいと思っている」

「それは、願ってもないお言葉です」

期待した通りの返答に、時臣は笑みを深めた。

「——君に、私から贈りたいものがあるんだ。聖杯戦争には敗退してしまったが……ひとつのけじめとして。これからの我々の未来を祝して」

かねてから、いつか手渡そうと思っただけと用意していた家宝がある。果たして、それを受け取ったとき、綺礼はどんな顔をしてくれるだろうか。少しは、喜んでくれるだろうか。

綺礼は時臣にとって、血の繋がらない家族のような存在といっても過言ではない。その綺礼が喜ぶと顔を想像して、時臣は微かに頬を緩めた。

第30話「凍りついたメモリー」

テレビから流れてくる臨時ニュースを聞き流しながら、戦兎は暗澹たる面持ちで深く息を吐いた。視界の隅では、万丈が感情の赴くままに拳を柱に打ち付けているのが見える。

いつまた怪人たちに街が襲われるかもわからない今、不要不急の外出は極力控えるようにと、繰り返しニュースキャスターが伝えている。結局、この世界でも戦兎たちの世界と同じように、一般人が巻き込まれるかたちになってしまった。

傍らにいたキャスターが、戦兎の吐息に込められた意図を汲み取るかのように口を開いた。

「今回の一件で、スタークという存在の危険性が浮き彫りになったことは言うまでもない。これ以上街に被害が及ぶ前に、早々にスタークの居所を探り当て、これを撃破する必要がある」

「そんなことはいちいち貴様に言われるまでもない。またぞろ今回のような乱戦を引き起こされて、市政の連中に神秘を晒されてはたまったものではないからな」

ケイネスは尖った視線を容赦なくランサーへ向けて突き刺した。ランサーはにこや

かに微笑みを浮かべたまま、軽く小首を傾げてみせた。

「せっかくセイバーの野郎をブツ倒して、やっとの思いで桜も救ったつてのに、その矢先にこれかよ……！」 結局子供が安心して外に出れねえんじや意味ねえじやねえか！」

「ああ。だが問題はスタークだけじゃない。神を自称するルーラー……あの仮面ライダーゲンムも倒さねえと、被害者は増える一方だ」

一呼吸ほどの間において、戦兎は懐から大きく歪曲した短刀を取り出した。テーブルに置かれた紫色の宝具に、全員の視線が集中する。

「これは、アーチャーから預かった宝具だ。こいつを使えば、ルーラーの宝具でゾンビに変えられた人間をもとの姿に戻すことができる」

「待て桐生戦兎。貴様まさか、あの度し難い外道どもと手を組んだのか……？」

ケイネスの声のトーンが、僅かに低くなつた。額に、薄く青筋が浮かんでいる。ランサーは珍しく瞳を閉じて、静観を決め込んでいる様子だった。

「……いや、まだ組んでない。返事は待ってもらつてるが、同盟を申し出てきたのは向こうだ。今は聖杯戦争を棚上げにしても、一刻も早くスタークとルーラーを倒す必要がある」

「たわけ、そんなことは言われずとも分かっていると云つておろうが。で、貴様は……？ そのために、あのような下賤な魔術使いどもと、この私に肩を並べて戦えと……そう

言いたいのか？」

戦兎とケイネス、ふたりの視線が真つ向からぶつかり合う。今、目を逸らすことは自分の意見を折ることと同義だ。ケイネスの恪気を真正面から受け止めながら、未だ返す言葉を探っている最中の戦兎に、ケイネスは畳み掛けるように怒号を飛ばした。

「二度ならず、二度までも！ 薄汚い手段でこの私を亡き者にしようとしたあやつらと手を組みたいと。そう言いたいのか、貴様は？」

「ケイネス……あんたの気持ちはわかる。俺だつて、あいつらのことは未だに信用しきれちやいない。だが、少なくとも、アインツベルンはルーラーの拠点を既に割り出しているつて話だ。殴り込むなら、戦力は多いに越したことは——」

「なにを貴様は血迷つたことを言っているのだッ！ 奴らは手段を選ばぬ外道、少しでも隙を見せれば我らの寝首をかこうとすることは明白であろうが！ その程度の戦略眼も持たぬ無能なのか、貴様は!？」

一理ある、どこるか完全にケイネスの言う通りだと戦兎は内心で思う。アインツベルン陣営を信用することに依るリスクの大きさは、戦兎にも分かつている。それでも、あの土壇場で、少なくとも衛宮切嗣マスターの意思を無視してでも民間人を守るために動いたアーチャーの真意を確かめてみたいと、そう思っている自分がいることもまた事実だった。

戦兎からしてみれば、かつて敵だった間柄の相手と肩を並べて戦うことは、今更新鮮

なことではなくなっていた。

「おい、ちよつと待て。そのアインなんとかってのはどういうやつらなんだ」

「卑劣な手段を用いて、二度も我が主^{ケイネス殿}を罠に嵌めてくれた陣営です」

「悪いやつらじゃねえかッ!!」

ランサーの簡潔な回答に、万丈は目を剥いて叫んだ。そういえば、万丈はまだアインツベルン陣営との面識がなかったことを戦兔は思い出す。

ふいにヴァイオリンの旋律がきこえてきた。その場の全員が、ささやかな風が吹いたような錯覚を覚えた。まるで、心地よい風が澄んだ音色を運んできたかのように。

「……^{ネロ}渡の演奏だ」

ぼつりと、戦兔がその名を口にした。

ネロは今朝の戦いによる魔力消費があまりにも大きすぎるため、しばらく奥の部屋で休ませている。姿は見せていない。だが、ラボ全体を包み込むような優しい旋律は、この場の固く緊迫した空気をほぐしてゆく。そうさせるだけの魔力が、ネロの演奏にはあった。

ケイネスはバツが悪そうに咳払いをした。

「ここは一旦落ち着いて、状況を纏めよう。我々が争つてもなんの利も得られない」

言いながら、キャスターがどこかからホワイトボードを引っ張り出してきた。そこに

は、簡素ながらも各陣營の相関図が纏めて記されている。

ルーラーと、スターク陣營。孤立するアーチャー陣營と、ランサー・キャスター・ライダー同盟。それぞれの趨勢が、わかりやすく図で描かれていた。

「さて、ランサー。君はこの状況、此度のアインツベルンの提案について、どう思う」

「どうと問われましても。私はただ、ケイネス殿の差配に従うのみです。ですが、まあ……仮に彼奴らと戦うことになったとしても、私は負けませんよ」

ランサーはいつにも増してにこやかに、清々しいほどに朗らかに笑った。それだけで、戦兔の身をゾツとするような悪寒が駆け巡った。アインツベルン陣營に対するランサーの心象は、もはや確認するまでもない。

ケイネスは深く嘆息した。

「逆に問おう。キャスター、貴様はアインツベルンとの同盟をどう考えるのだ」

「私は……逆に此度の同盟こそ好機なのでは、と考えています」

「ほう？　面白い、貴様の考えを話してみろ」

視線には相変わらぬ僅かな怒りが含まれてはいるものの、明らかにキャスターと会話するときの方が物腰が柔らかい。

小さな会釈に次いで、キャスターはホワイトボードに記された相関図を指して語り出した。

「彼らは今、仲間をスタークに奪われ、ただでさえ少ない戦力を大きく削がれています。我々に協力を要請してきたことから鑑みるに、もはやなりふり構ってられない状況とみえる」

ホワイトボードに描かれたアーチャー陣営の囲いの線の中には、衛宮切嗣、久宇舞弥、アイリスフィール・フォン・アインツベルンと、かの陣営が持てる戦力名が記されていた。キャスターの知る限り、まともに戦えるのは、基本的には衛宮切嗣と久宇舞弥のふたりだけらしい。

一方、水性マーカーで描かれたスターク陣営の囲いの中には、言峰綺礼の名と、仮面ライダーブラッドの名が記されている。目下、考えられるスターク陣営の所持戦力だ。

「一方、スターク陣営には、クローズマグマをも窮地に追い込んだ仮面ライダーブラッドがいる。アーチャー一騎で、スタークとブラッドのふたりを相手取りつつ、人質を奪還することはあまりにも無謀にすぎる。それくらいは衛宮切嗣にも理解できているはずだ」

「では、アインツベルンが申し出た同盟に他意はなく、我らを貶める気概など微塵もないと、そう言い切れるのか？」

キャスターは、ゆるくかぶりを振った。

「残念ながら。しかし、彼らが助力を求めていることは紛れもない事実。その点におい

て、此度の交渉は我らの方が一枚上手だと言つても過言ではありません。そこで、私に考えがあるのです」

「——ああ、なるほど。貴様の考え、読めたぞキャスター」

ケイネスは、我が意を得たりとばかりにいと笑みを深めた。

「セルフ・ギアス・スクロール自己強制証明……術者の魔術刻印を通して、その死後の魂までも縛り付ける、この世で最も容赦のない呪術契約。ソレを用いて、こちらから逆に要求を突きつけてやろうと、貴様はそう言いたいのだろうか」

「……、さすがはケイネス卿。ご明察の通りです。内容は、同盟の破棄後に至るまで、我らエルメロイ陣営に与する者に危害を加えようとする一切の企てを、金輪際起こさぬこと。決着は、正面からのサーヴァントの一騎打ちによつてのみ果たし得る。それを最低限の条件として突きつけてやればよいのです」

「ほう、虎の子のギアスを『危害を加えぬこと』に費やすのではなく、あくまで『一切の企てを禁ずる』ことに使うか。これは……なかなかどうして。相変わらず貴様は面白いことを思いつく男だ」

キャスターは僅かに視線を伏せ、そのまま頭を垂れた。

「ええ……何しろギアスで縛ることが出来るのは、衛宮切嗣ひとりですから。悪しき企てそのものを封じてしまわぬ限り、その同盟者……例えば、せつかく救い出した久宇舞

弥に寝首をかかれるようなことになりかねない。そのような未来を許すわけにはいきませんまい」

「ふん、よかろう。確かに貴様の考えは理に適っている。この状況を逆に利用し、今後の立ち回りをより盤石なものにしようというその姿勢……気に入った。貴様にはこれまでの功績もある。よって、此度の同盟の差配は貴様に委ねよう、キャスター」

「よいのですか？ ケイネス殿」

ランサーが目を丸めてケイネスの顔を覗き込んだ。口元は相変わらず笑んでいるが、どこかつまらなさそうに見えるでもない。

「よい。私が望むのは、あくまで正道なる聖杯戦争。そして、純然たる魔術の競い合いによつて得られる完全勝利のみ。魔導を貶めたアインツベルンの蒙昧どもは許しがたいが、それで我が願いが叶うならば、多少の些事は水に流してやるとしよう」

「ケイネス殿タがそう仰られるなら……魔術のことはとんとわかりませんが、ええ、わかりましたとも！ そういうことならば、このお虎さんも一肌脱ぎましよう！」

ランサーは気持ちよさそうに笑った。じめついた後ろ暗さを感じさせない、カラっとした夏の砂浜を思わせる笑みだった。その一声で、緊張した場の空気が一気に弛緩する。

「よし、話は纏まったな。では、アインツベルン陣営との会談には私とマスター、そして

ランサーの三名で挑もうと思う。それまでにケイネス殿には自己強制証明を仕上げて
セルフ・ギアス・スクロール
いただきたい」

「それは容易いが、私は直接赴かずしてよいのか？ 君たちに交渉を任せつきりでは、陣
営を纏める将としての示しがつくまい」

「同盟を無事締結させるまでは、衛宮切嗣にあなたを引き合わせるつもりはありません。
すぐにアーチャーとの決着を付けるわけでもなし、わざわざ危険を犯して会いに行く必
要もありません」

ふむ、と小さく唸ったケイネスは、納得した様子で頷いた。

「その代わりと言ってはなんですが、ケイネス卿とライダーには、また別の役割を頼みた
いのです」

「なに、別の役割だと？」

「えっ、なに、俺も？」

ケイネスに続いて、万丈が上ずった声をあげた。

「ええ。孔明の策に抜かりなく……お二人にしか任せられない役割です。どうか、快く
引き受けていただきたい」

全員揃っての作戦会議を終えてやや時をおいて、キャスターと戦兔は、工房の最奥の

余った一室へと立ち寄った。アルターエゴ・ネロの私室として割り当てられた部屋だ。

ヴァイオリンの音色が、ドアの向こうから漏れ聴こえている。キャスターがノックをしようとする、まるでその指から逃れるように、ひとりでに戸が開いた。歓迎と受け取ったふたりは、そのまま部屋に踏み込む。

部屋の奥には、サテン生地で作られた真紅の幕がかけられていた。その中心に、幕と同じ色の座面を、金の縁で彩られた簡素ながらも豪華なつくりの椅子が置かれている。そこに、ネロは座っていた。

「え……なんか俺の部屋より豪華じゃない？ 気のせい？」

キャスターの背後からひよつこりと顔を出した戦兔が、ネロの部屋を見て声を震わせた。

「椅子をひとつ、置いただけですよ」

「いやどつから持ってきたんだよこんな高そうな椅子」

ネロは——渡はなにを考えているのか判然としない緩やかな笑みを浮かべたまま、答えようとしない。当の戦兔も既に椅子に興味はないらしく、ずかずかと室内に上がり込むと、我が物顔で室内を物色しはじめた。

キバットのために天井から吊るされた止り木を指先でつつきながら、戦兔は僅かに声のトーンを落として言った。

「今朝は、一緒にいられなくて悪かったな。またこんなに魔力を消耗させちまって」
「いえ……それが、僕が喚ばれた理由ですから」

渡の霊基が既に大幅に損傷していることは、マスターの戦兎の目を持つてすれば一目瞭然だった。キバエンペラーは、セイバーを討ち果たすため、マスターである桐生戦兎から供給される魔力だけでは賄えない部分を、自分の霊基から捻出したのだ。平気で見られるわけがない。

「マスターの令呪のサポートもなしに聖剣を抜刀したとあれば、君にかかる魔力消費も甚大だったろう。ともすれば、君の霊基が消滅していたかもしれない状況の中で……本当によくやってくれた。その後、霊基の具合はどうだ」

「しばらく休めば、また戦えるようになります。それに、僕にはまだ役目が残ってますから……それを果たすまでは、消えるわけにはいきません」

「ふむ。その役目のため……星の天敵との決戦のために、抑止力は君に聖エクスカリバー剣を託した、ということか」

キヤスターの問いに対し、渡は静かに目を伏せた。

「エクスカリバーの担い手は、今は座にいません。今もこの電脳世界に囚われたままです。僕は、彼女を解放して、座に還さなければならぬ」

「……ちよつと待てアルターエゴ。それは、かの騎士王もシャドウサーヴァントとして

この世界を彷徨っている、ということか!？」

短い問答で、明らかに顔色を変えたのはキャスターだけだった。戦兎も、渡も、この場にいる誰しもが、あのアーサー王の苛烈な戦い方を直接見てはいない。その恐ろしさを、誰も知らない。

「騎士王の魂は、あのシャドウバーサーカーのように彷徨ってはいません。囚われてるんです。抑止力の手すら届かない、深い牢獄に」

「牢獄……?」

「ええ。抑止力がかろうじて回収できたのは、この聖剣だけでした」

どこからか取り出した黄金の魔皇剣を掲げて、渡はその刀身を目を細めて見上げた。セイバーが持っていたものと同じ、透き通るようなクリスタルの刃を備えた魔剣だ。刃は、周囲の光源を集めて、プリズムのように煌めいている。今はその魔皇剣に、聖剣の権能が取り込まれているのだという。

渡は、なにを考えているのかいまいち読み取れない無表情のまま、その大きな瞳を戦兎へ向けた。

「遠からず、騎士王は目覚めます。そのときに備えて、僕は少しでも力を蓄えなければなりません。だから、マスター……そのときがきたら、迷わずに僕を喚んでください。それが、僕に与えられた使命ですから」

やおら振り向いて渡に向き直った戦兎は、わざとらしく口元を歪めてみせた。

「お前の、じゃねえだろ」

「……え？」

「わかつてねえな。お前の使命ってことは、俺たちの使命でもあるんだよ。ってか、さつきからひとりでカツコつけすぎ」

鳩が豆鉄砲を食ったような面持ちで、渡は返す言葉をなくして固まっている様子だった。

「だから、あんまりお前ひとりが背負い込み過ぎると、主役の俺が目立たねえって言うんだよ。ちったあ空気読んで貰わねえとこーまーるーの」

「ふむ……一理あるな。最近ただでさえライダーに定番を食われがちだったマスターとしては、これは確かに看過できる問題ではあるまい」

「うるさいよ！　ってかえつ、なに、お前そんなふうに思ってたワケ？　市街地であれだけの数のゲムを華麗にやつつけて見せたヒーローで主役の俺を捕まえて？」

そこから先の会話は、特に意味のあるものではなかった。戦兎が喚いて、キャスターが聞き流す。それだけの、くだらない談笑だった。

ふいに、渡が笑った。平時の無表情とはまた違う、無邪気な子供のはにかみを思わせる笑みだった。渡の少女のようなあどけない顔立ちには、感情を押し殺した無表情ポーカーフェイスよ

りも、純粋な笑顔の方が似合っているように思われた。

渡の、どこか優しい視線が、再び戦兎へと注がれる。

「——ありがとう、マスター。では、そのときが来たら、一緒に戦ってくださいか」
「そんなこと、今更聞かれるまでもねえよ。ってか、ヒーローの俺が、重要な戦いだけ人任せにできるわけじゃないでしょうが」

ふと、視線を感じた。天井付近からの視線だ。振り返った先にキャスターが見たのは、戦兎がつついて遊んでいた止り木に逆さにぶら下がっているキバットバットⅢ世の姿だった。

親が子を見守るような面持ちで、キバットは目を細めて笑った。その傍らでは、タツロットが小さな羽をばたばたと羽ばたかせて浮かんでいる。

「くうく、俺たちの渡が、気付けばサーヴァントなんてよくわかんねえモンになっちゃまって、一時はどうなることかと思ったが、どうやらない仲間に恵まれたようで、安心したぜ〜！」

「ええ、ええ。ここまで見守ってきた甲斐がありましたねえ。あの渡さんが、こんなに立派になって……!! きつともう、渡さんはひとりでも大丈夫! 私も感無量です〜!!」
「タツちゃん、今夜はお赤飯だ! お赤飯買いに行くぞ〜!」

キバットとタツロットに二体は、狭い部屋の天井付近を所狭しと飛び回って喜びを表

現している。

ちようどそのとき、開けっ放しの扉から、ランサーと万丈のふたりが続けて顔を出した。

「おやおや、なにやら楽しそうな気配を感じて来てみれば。いったいなんの話をしてるんです?」

「つてうおおおおおッ、ちっちゃいコウモリとドラゴンが喋つてんぞ!!　どーーなつてんだこりゃ!」

「いやお前それはさすがに今更すぎ」

戦兎のツツコミは至つて冷静だった。万丈はキバットとタツロットと戦兎とを順繰りに指差して必要以上に叫んでいる。どこから飛び出してきたクローズドラゴンは、空中でタツロットとともに体を揺らし合つて、なんらかのコミュニケーションをとつていた。二体の小竜は、早くも意気投合している様子だった。

そのかましい様子を眺めていると、キャスターの口から溜息が漏れた。

“彼らに世界の命運が委ねられているだなど……まったく、頭が痛くなる思いだな

”
呆れを通り越して、乾いた笑みが溢れる。こうしていると、今夜にも聖杯戦争の趨勢を決める会談が行われようとしていることが、まるで夢のように感じられる。だけれど

も、負ける気はしなかった。

所属も生まれもなにもかも異なる仲間たちが、時代を越えて、ひとつの目的のために集まっている。全員で力を合わせれば、どんな困難も乗り越えられるはずだと、キャスターは珍しく、無根拠にそう思えた。

その後、緊張感なく騒ぎ立てる一同を怒鳴りつけるべくケイネスが額に青筋を刻んで乗り込んできた。だけれども、誰もケイネスを煙たがったりはしなかった。その空気が、キャスターには心地よかった。

切嗣が買い取った屋敷は、既に人が日常生活を送るには十分すぎるほどに整備が行き届いていた。そのうちの一角は、半ば切嗣の武器庫として利用されている。武器弾薬を詰め込んだ棚に四方を囲まれた部屋の中心で、ひとり黙々と武器の手入れに勤しんでいた切嗣の背に、アーチャーの声がかかる。

「らしくないな、マスター。仮面ライダーなどという胡乱な連中と手を組もうなどと」
言葉を返そうとは思わなかった。返す必要がない。なにも聞こえていないかのよう
に、切嗣は愛銃であるトンプソン・コンテNDERの手入れを続ける。

「私の見立てでは、マスターはああいう手合いを毛嫌いしているものと思っていたが」
切嗣の手が、止まった。

「お前に僕のなにがわかる」

「わからないさ、なにも。だが、少なくとも私はああいう手合いは得意ではない。苦手と
いってもいい。私がそうである以上、マスターはもつとだろうと邪推しただけさ」

肩越しに、切嗣はちらと一瞥をやった。

「だったら、お前は どうして 奴らに力を貸した。僕はそんな命令をくだした覚えはない」
「勝手な行動は詫びよう。あまりに見ていられない状況だったのね。だが、あれで仮
面ライダーに恩を売れたなら安いものだろうよ。なにしろ、マスターは組むのだろう？

あの正義のヒーローたちと」

振り返った切嗣が見たのは、アーチャーの自嘲だった。切嗣に対する嘲りでないこと
はわかる。アーチャーは時折、こうしてなにかを知っているような気配を感じさせるこ
とがある。

「お前は、僕になにを隠している」

「……別段企みがあつて己を秘しているのではないさ。マスターが望むならば、私はた
だの武器となって、並み居る敵の尽くを塵殺してみせる。そこに嘘はないよ」

「だったら答えてもらおうか。お前は、どこの誰だ。なぜ、僕の召喚に応えた。いい加
減、自分の記憶の断片くらいは思い出せたんじゃないのか」

コンテナーの銃口を、至近距離からアーチャーの眉間に向ける。本気で引き金を引

くつもりはない。けれども、引いてしまいたいという気持ちの片隅にあった。

或いは、アーチャーが正義感を振りかざす騎士道の英雄であったなら、はじめから分かり合えるはずもないと切り捨て、無視を決め込むこともできただろう。だけれども、アーチャーはそうではない。切嗣の武器であると宣い、切嗣の武器として振る舞い、その癖切嗣の心に一步踏み込んでこようとする。そこに、切嗣はあの言峰綺礼にも似た底知れぬ気味の悪さを感じていた。

「自分から口にできないなら、僕が言つてやる。お前は、弓兵なんかじゃない。魔術師だ。それも、投影魔術と強化魔術にのみ突出した、偽物の英霊……いわば、フエイカー魔術師も言つたところか」

アーチャーは観念した様子で笑った。

「フエイカー贗作者とは、言い得て妙だな。なるほど確かに、私はマスターの言う通りの存在だろう。だが、だとしたらなんだ？ 弓兵だろうと魔術師だろうと、人を殺すための武器としての質に変わりはあるまい」

切嗣は内心で舌を打った。アイリスファイルはアーチャーと対話をするべきだと語つたが、当のアーチャーがこの態度では、対話どころではない。アーチャーがなにを考えているのかが読めず、自分の戦略にこのような不確定要素を織り込まなければならぬことそのものが、切嗣にとって大きなストレスだった。

「……いいだろう。結局のところ、僕はお前を使う以外に道はない。だったら、お前にはとことんただの武器になつてもらおう。……だが、これだけは答えてもらおうぞ、アーチャー」

アーチャーは無言のまま、切嗣を見据えていた。その沈黙を肯定と受け取った切嗣は、コンテNDERを突きつけたまま、問うた。

「お前はかつて、僕に尋ねたな。僕が聖杯に託す願いはなんなのか、と」

「ああ、訊いたな。覚えているとも」

「なら今度は僕が問おう。お前の望みはなんだ？ お前はいつたい、なにを求めて聖杯に願いを託す」

どこの英霊かは知らないが、アーチャーが英霊である限り、必ず願望は存在するはずだ。でなければ、人理の影法師たるサーヴァントはわざわざこの世に召喚されたりはしない。

真正面から突きつけられた猜疑心の刃を前に、アーチャーは、なんでもないことのように口を開いた。

「聖杯に興味はないよ。奇跡なんてものは、この世界のどこにも存在していないんだ」
切嗣は、そつとコンテNDERの銃口を下ろすと、アーチャーに背を向けた。

ライフルの入ったアルミケースを握りしめ戸を開いて、廊下へ出た。廊下には、アイ

リスフィールがいた。切嗣とアーチャーの会話がつつぬけだったことは、驚いたアイリスフィールの顔色を見れば察しがつく。

「切嗣……っ」

「アイリ。僕はこれからキャスター陣営との会談に出かける。アーチャーは置いていくから、君はこの屋敷から出ないように。庭には結界とトラップを仕掛けているから、今はこの屋敷がこの街で一番安全な場所なんだ」

「え、ええ。わかったわ……いつてらっしやい、切嗣」

「ああ。それじゃあ、またあとで」

いま手元に残された唯一の拠り所に、切嗣は務めて優しく微笑みかける。それきり振り返ることなく、切嗣は足早に歩き去ってゆく。くだらない問答に割いてしまった時間を取り戻すように、約束の場所へと急ぐ。

切嗣の背中を見送ったところで、アイリスフィールは腰から一気に力が抜けるのを感じた。姿勢を崩して、ふらりとよろける。成人女性の平均よりもずっと軽いはずの体が、まるで鉛でも詰め込まれたように重たく感じる。

受け身すら取れずに倒れかけたアイリスフィールの背を、アーチャーがささえた。褐色肌の無骨な手のひらが、アイリスフィールの額から溢れ出した汗をぬぐう。

「アイリスフィール……、体調が優れないのか」

「ええ、ちよつと……ね。そんなことより、アーチャー……切嗣は、もう行つたかしら」
「ああ、もう姿は見えないが……まさか君は、この不調を切嗣に隠しているのか」

汗ばんだ顔をくしやりと歪めて、アイリスフィールは不器用に笑った。

「今、たくさんの重圧に押し潰されそうになっているのは、切嗣の方だから……余計な心配を、かけたくないの」

平時はニヒルな笑みを浮かべているアーチャーの表情に浮かんだ狼狽を見て、アイリスフィールはそれを『可愛い』と感じた。赤の他人のはずなのに、そんな感情が湧いて出るのは我ながら不思議な感覚だった。

「ああ。やつぱりあなた、切嗣とどこか似てるのよね。普段は無理して強がっているけど、本当は真面目で優しいところ、とか」

「こんなときに冗談を言っている場合か……!」

らしくない怒声を聞き流して、アイリスフィールはゆっくりとその場に座り込んだ。アーチャーは床に片膝を立てて視線の高さを合わせてくれた。深く息を吐くと、アイリスフィールは務めて柔和に微笑んだ。

「心配しないで、アーチャー……私がこうなることは、最初から織り込み済み。だって私は、聖杯の『器』に……『ヒト』としての機能を与えてつくられたホムンクルス。脱落

したサーヴァントの魂を取り込んで、元の『モノ』に戻ろうとしているだけの話……：…
らなかつたわけじゃ、ないでしょ」

アーチャーは答えない。ただ、目を伏せるだけだった。

「やっぱり、知ってたのね……：…私のこと」

「……：…知っている、とは言い切れんな。察しはつくが、それだけだ」

「そう」

アイリスフィールは、アーチャーのことをなにも知らない。

どこの誰が、どうして切嗣の事情に首を突っ込もうとしているのかなど、想像もできない。だけれども、アーチャーが敵でないことだけは理解できる。敵は、こんな顔をしていない。

「切嗣はああ言っていたけどね……：…今朝の戦いであなたがしたことを、私は悪いことだとは思わないわ。たとえそれが彼の思惑から外れることだとしても……：…あなたがしたことは、人として当然のことだと思う。うん、ずっと城から出たことすらないような女に、当然なんて言われても説得力はないと思うけど……：…たぶんね」

アーチャーは押し黙ったまま、喋ろうとしない。続く言葉を待っている様子だった。

「だから、あなたは胸を張って、自分が信じたものを守ればいい。切嗣ができなくなってしまうことを、あなたがやればいい。今は、切嗣が召喚したのがあなたでよかつたっ

て、思うのよね」

「アイリスフィール……、なぜあなたはそうも私を買い被る。自分の記憶すら曖昧で、目的すら不明瞭なサーヴアントなど、傍らに置くにはあまりにリスクが大きすぎるだろうに」

「あなたがどこの誰であるのかはわからないわ。だけど、少なくとも、あなたは切嗣を知ってる。たぶん、私のことも……ねえアーチャー。記憶喪失って、嘘なんでしょ？」

「……これはまた、飛躍したな。なにを根拠にそう思う」

「根拠なんてないわよ。でも、見てればわかるわ。ううん、最初は本当だったのかもしれない。だけど、あなたの振る舞いは……見ず知らずの他人にしては、あまりにも不自然なんだから」

切嗣に対する、こころを押し殺したような態度。アイリスフィールに対する、とまどいにも似た距離感。それらすべてが、アイリスフィールに確信めいたものを予感させる。

或いは、誰にも語れぬ心の傷を抱えた英霊かもしれない。或いは、切嗣と似た境遇を辿って、地獄を見た英霊かもしれない。ほんとうのところはわからないが、なにかがあるのは間違いない。

「——私が今、こうして人間の真似事を続けていられるのは、本当に奇跡のような時間な

の。一緒にいられる時間だって、きつともう、そんなに多くはないわ」

「だろうな。たとえどれほど濃密な時間を過ごしたとて、ともにいられるのは聖杯戦争の間だけだ……サーヴァントの身である以上、それはずっと肝に銘じてきたつもりだった」

「少なくとも、私はその聖杯戦争を……あなたと切嗣の戦いを最後まで見届けることは、きつと無理。その前に、この体は『ヒト』としての機能を失うわ」

聖杯戦争の果てに、切嗣がつくる争いのない世界を見てみたいとは思う。思うが、それは絶対に叶わぬ夢だ。

だからせめて、少しくらいの我儘は許されてもいいはずだと、アイリスフィールは思う。

「だから、私が私でなくなる前に……教えて、アーチャー？ あなたがなにを願って戦うのか。どうして英霊になってまで、切嗣の喚び声に応えたのか……あなたの秘密は、この胸にしまい込んだまま、人として生きた思い出として持っていくから」

今度は、いたずらを思いついた少女のように笑ってみせる。

アーチャーははじめ大きく目を見開いたが、数瞬の沈黙ののち、呆れた様子で深い諦念の溜息をついた。

「——いいだろう。私の負けだ……どうやら私は、あなたには敵わないらしい」

ほんの少しだけ、アーチャーの顔に刻まれた陰が薄れたように見えた。非情な現実の前に荒みきつた瞳の奥に残る、微かな童心のきらめき。

やはり似ていると、アイリスフィールは改めて思った。

薄明かりに照らされた仄暗い一室で目を覚ましたとき、舞弥は己の不覚を呪った。

英国様式のアンティークチェアに座らされ、その背と脚に縄で体を縛り付けられている。無理に立ちあがろうとすれば、椅子ごと倒れるのが関の山だろう。

四方はひやりと冷気を孕んだ石壁に囲まれており、室内の気温は低い。けれども、殺風景な部屋というわけでもなかった。ランプや棚をはじめとする調度品には、やはり英国様式の拘りが見て取れる。棚には、高価な酒がずらりと並んでいた。

首を回して辺りを観察すると、室内の二人がけのソファに男が寝転んでいるのがわかった。男は舞弥を視線を合わせると、悠然と座り直し、軽く片手を掲げた。

「よお、舞弥。目覚めの気分はどうだ」

石動惣一が、丸縁のサンングラス越しの瞳を細めてにいと微笑んだ。

こういう状況で敵に余計な情報を与えることは下策であることは舞弥も理解している。だから、なにも言葉を返さない。舞弥はただ射るような眼光で睨み返す。

「こいつはずいぶん嫌われちゃったもんだな」

石動は呆れ半分、嘲笑半分といった様子でわざとらしく嘆息してみせた。

私を人質にしても無駄だ、切嗣は動かない、と。無言のまま睨み返すことで、言外に己の意思を表明する。それで殺されたとしても、切嗣の足を引つ張るくらいならその方がいい。

ふいに、木製のドアがぎいと軋みをあげて開かれた。

室内に入室した言峰綺礼は、舞弥に冷たい一瞥こそ寄越したものの、別段騒ぎ立てるふうでもなかった。石動は軽く「よっ」と挨拶するが、綺礼が取り合う様子はない。けれども、ふたりの間の空気感を見れば、組んでいることは明白だった。おそらく、この場所は冬木教会の地下室だろう。

「——人質か。あの衛宮切嗣の前に、どこまで意味があるものかな」

「意味ならあるさ。こうしてお前への手土産になった。そうだろう？」

「……相変わらず趣味の悪い冗談を言う男だ」

「はっ、趣味の悪さじゃお前に勝てねえよ」

石動は再び両手を頭の後ろで組んで寝転がった。脚はソファの肘置きから大胆に外に投げ出している。

地下室の主たる綺礼は、椅子に縛り付けられたまま身動きひとつ取れない舞弥の前に、歩み寄り、舞弥の頭上に影を落とした。成人男性にしては大柄な綺礼の体躯が、ラ

ンプの光を遮っている。

「問うぞ、女。おまえと衛宮切嗣はどういう関係にある」

舞弥は答えない。なにも聞こえていないように沈黙した。

「おまえは、衛宮切嗣をどこまで理解している」

その問いは、あまりにも状況に即していなかった。聖杯戦争に関することでも、アイツベルン陣営の戦力に関することでもなく、綺礼はただ、衛宮切嗣という個人を知ろうとしている。

己の利益を度外視した、純粹なる執着心。その異質さが、舞弥に切嗣が感じている不安の片鱗を感じ取らせた。

「それとも、ただ衛宮切嗣に使役されるだけの哀れな駒か」

おそらくその言葉に挑発の意図はない。ただ、舞弥とは認識があまりにもズレている。この男は、衛宮切嗣という人間のこころを欠片も理解していない。そんな男に、少しでも切嗣の情報を漏らしてやりたくはない。

舞弥は視線を上げ、その研ぎ澄まされたナイフのような切れ長の瞳で綺礼を睨んだ。

いつそ、ここで舌を噛み千切った方が後腐れがなくていい。

「……………」

綺礼の大きな手が、舞弥の頬を挟み込むように鷲掴みにする。まるで舞弥の思考を呼

んだかのようなタイミングだった。

人間離れたした握力が舞弥の輪郭を押し潰さんばかりの勢いで圧迫する。舌を噛むどころか、顎に力を入れることすらできなかつた。

「無駄だ、女。おまえの考えなど容易に想像できる。おまえが私の問いに答える気がないことも」

だからもう、興味を失ったとでも言わんばかりに。綺礼は表情ひとつ変えずに、ゴミを見下すような瞳を舞弥へと向ける。

次の瞬間、舞弥のみぞおちを強烈な衝撃が襲った。一瞬遅れて、鈍い痛みが全身を駆け巡り、舞弥のあらゆる感覚を痺れが支配していった。綺礼の発勁が、舞弥の急所に打ち込まれたのだ。

おそらく、肋骨の一本や二本はへし折れている。全身を襲う痛みと痺れと脱力感の中、かろうじて意識を保っていた舞弥が聞いたのは、綺礼とスタークの短い会話だった。「無駄な時間を使った。私を喜ばせたいなら、次は衛宮切嗣を確実に引きずり出す舞台でも用意しておくのだな」

「これから用意するんだよ。安心しろ綺礼。衛宮切嗣は必ず動く……俺が動かしてやる」

部屋の扉に手をかけていた綺礼は、そこで立ち止まり、振り返った。前のめりに座り

直した石動が、嘗めるような視線を向けて、頬を釣り上げていた。

綺礼には、久宇舞弥の利用価値がわからない。衛宮切嗣が、自分と同じ人でなしだとするならば、人質ひとりを解放するために死地へ飛び込むような愚を犯すとは思えない。けれども、石動が口だけの男でないことは、綺礼もまた理解している。

「そうか。ならばせいぜい、おまえの脚本が上手く回ることを祈っておいてやる」
「必ず上手くいくさ。俺とおまえが手を組めば、な」

石動は、緩く片手を掲げてみせた。合図を受けて、地下室の薄暗がりには赤黒い粒子が集まっていく。赤と黒の装甲を纏った仮面ライダーが、主人の命令を待つマリオネットのようにぼうつと姿を表した。

「餞別だ。こいつも連れてけよ」

ただそこにいるだけで、ブラッドから濃密な魔力の波濤が押し寄せてくるのを綺礼は感じた。間桐臓硯が長年に渡って溜め込み、醸成したものだ。だが、それも徐々に摩耗し、すり減りつつある。魔術師ですらない石動惣一のもとにいたのでは、ブラッドは新たに魔力を供給することはできないからだ。

綺礼は踵を返し、石動に向き直った。

「私がおまえを裏切るという可能性を考えないのか？」

「上等じゃねえか。おまえにやられるなら、俺は本望だよ」

石動はにっこり人懐っこい笑みを浮かべた。

そうか、と一言返すと、綺礼は膨大な数の令呪が刻まれた腕を掲げる。短い詠唱に次いで、契約の文言が紡がれる。令呪が輝いた。魔力のパスが、綺礼と繋がってゆく。

仮面シヤドライダーウバブラッドバーサーカーは、うちに秘めた魔力こそ膨大であれ、その本質は揺れる灯火のように不完全な存在であることを綺礼は悟った。まともな霊格を持っていない。まさしく、影のような存在といえる。

「礼を言う気はないぞ、石動」

「おう、せいぜい使い潰してやってくれ」

綺礼は地下室の扉を締めた。扉に遮られる最後の瞬間まで、石動は不敵な笑みを浮かべていた。

意図はわからないが、使えるものはすべて使う。そして、必ず衛宮切嗣に辿り着いてみせる。そう強く心に誓い、綺礼は冷たい石造りの地下道を進む。

遠坂時臣との約束の時間は、もう、すぐそこまで迫っていた。

第31話 「裏切りのアサシネイト」

衛宮切嗣の申し出に応じるための最低条件としてキャスターが指定したのは、新都のオフィス街に位置する冬木センタービルの屋上に、指定の時間、切嗣ひとりで来ることだった。

キャスターとランサーという、ふたりのサーヴァントを引き連れた桐生戦兔を前に、切嗣は心中で乾いた笑みを零した。

“大した歓迎だな”

ランサーは獲物を前にした獣を思わせる瞳を爛々と輝かせて圧を放っているし、キャスターに至ってはもはや全身から発奮する魔力の波濤を隠す気すら見られない。既にこの場に諸葛孔明の奇門遁甲が張り巡らされていることは明白だった。人払いの結界も張られているようなので、見ず知らずの一般人が紛れ込んでくることはなさそうだ。

真冬の冷たい風が、切嗣のくたびれたコートの手を揺らす。切嗣は、武器の詰め込まれたアタッシュケースをそつと床に置いた。今の切嗣は、正真正銘の丸腰だった。

キャスターが、先頭に立つ。

「アインツベルンが招来せしマスター、衛宮切嗣。まずは約束通り、ひとりでのこの場に参加

じたこととお見受けする。我らの要求に応えてくれたこと、感謝の言葉もない」

「こちらこそ、会談にに応じてくれたことに感謝する。言つても信じてもらえないだろうが、今夜僕は君たちと争うつもりで来たんじゃない」

互いに慇懃に言葉を交わすが、場の空気は張り詰めたままだ。当面緩む気配はない。

「僕からの要求はひとつだ。檀黎斗と石動惣一……そして、言峰綺礼。この三人を確実に始末するまで、君たちと同盟を組みたい」

「聖杯戦争がこのような有り様を呈している以上、それは願つてもない申し出だ。しかし、生憎と我らエルメロイの陣中に、あなたの言葉を信ずるものはいない。その理由は、もはや語るまでもあるまいな？」

「理解している。自分のやったことだからね」

表情をびくりとも動かさず、切嗣は淡々と認めた。

「……今が戦時中であることを踏まえ、こちらにも必要以上にあなたを責めるつもりはない。しかし、信頼できない相手に背中を預けるには、それなりの誠意を見せてもらう必要がある」

「そつちからも要求があることは、僕としても想定の内だった。単刀直入に言つてくれ」

「話が早くて助かる。こちらから要求することはふたつだ」

「聞こう」

「ひとつ。我々エルメロイを敵対者としてみなすのは、件の三名をすべて排除した後、それまでの間、我々に牙を剥くようなことは絶対にしないこと」

「いいだろう。もうひとつは？」

「……ふたつ。以後聖杯戦争が終結するまでの間、衛宮切嗣には我らに対する奇襲・騙し討ちははじめとする一切の卑劣な企てを禁ずる——そういう約定であれば、こちらにも応じる用意はある」

「なるほど……落とし所としては妥当だな」

戦兎もランサーも、キャスターの要求に口を挟もうとしない。つまり、これが向こうの陣営の合議の結果ということだろう。

キャスターは、懐からひと巻きの羊皮紙を取り出した。自己強制証文だ。セルフギアス・スクロール差し出されたそれを粛々と受け取り、描かれた図版と記号の羅列に目を通す。

内容は、いま語られたとおりのものだった。東縛術式の対象は、衛宮切嗣。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトならびにソラウ・ヌアザレ・ソフィアリの両人を対象とした、殺害、傷害の意図を含む行為及び、一切の企てを永久に禁則とする。

「確認した。証文には、不備も抜かりもない」

これが衛宮切嗣を対象に、殺害と傷害のみを禁ずるだけの証文であれば、まだ穴を突

くこともできただろう。切嗣の息のかかった第三者に仕事を任せれば事足りる話だからだ。しかし、企てそのものを封じられるのであれば、そういう策に出るわけにもいかない。

記された血の署名は、既に明確な魔力を湛えて脈動している。ケイネスの血だ。切嗣が認めれば、ここにはいないケイネスと呪術契約を結ぶことになる。

「それでも譲歩に譲歩を重ねた結果であることを理解してほしい。我がマスター、桐生戦兔に対する攻撃は禁じていないし、そもそもサーヴァント同士の一騎打ちであれば禁則事項に触れることもない。我々は、一切の騙し討ちを排除した聖杯戦争において競い合おうと提案しているだけだ」

「えっ、ちよつと待てよ。その証文に俺、含まれてないの?」

一歩後ろで静観していた桐生戦兔が上ずった声をあげた。切嗣は、静かに首肯する。「いいだろう。どのみちこの状況で僕に選択肢はない。だが、この約定を呑むからには、徹底して敵の排除に協力してもらおう。檀黎斗、石動惣一、言峰綺礼……この三名の排除が最優先だ。構わないな」

「ねえちよつと待って、無視しないで」

「無論、我々もそのつもりでいる。その三名はいずれも聖杯戦争そのものの敵と見て相違ない。まずは正常なる聖杯戦争を我々の手に奪い返す。その点においては、互いに合

意するところのはずだ」

「ねえ」

「賢明な判断だ」

切嗣は手渡された羊皮紙に自らの魔力を通させた。ケイネスとの間に、決して違約しようのない取り決めが交わされる。これでもう、衛宮切嗣はその魔術回路ある限り、たとえ命を差し出そうとも、永久にケイネスに危害を加えることはできなくなった。呪術契約の成立だ。

務めて優しく微笑みながら戦兔の肩を二度三度と叩くランサーを横目に見ながら、切嗣は提案する。

「それじゃあ、早速だがキャスター。まずは石動に拐われた僕らの仲間を奪還するため、計略を練りたい。石動の居場所については、僕に心当たりがある」

「いいだろう。あなたにとつて、此度の約定の本懐が久宇舞弥であることは察しがついている。不平等な証文^{ギアス}を呑んでもらった手前、こちらも協力を惜しむつもりはない」

「……」丁寧に舞弥の素性まで暴いているのか。大したものだな、策士孔明」

味方となったはずの男に、切嗣はそれでも苦虫を噛み潰したような表情を向ける。いずれ敵に回ることが確定している以上、情報戦においてこれほど厄介な相手はいない。叶うならば、こういうサーヴァントは自分の手で引き当てたかった。

「で、スタークの居場所に心当たりがあるってのはどういふことだ、切嗣」

「僕と舞弥の見立てでは、石動は言峰綺礼と組んでいると考えてまず間違いない。少なくとも言峰綺礼の居場所は分かっている以上、そっちに狙いを定めれば、必ずあの男にも行き当たるはずだ」

戦兔の質問に答えると、今度は横合いからランサーが入ってくる。

「ちよつと待ちなさい。言峰綺礼といえば、聖堂協会の人間でしよう。檀黎斗と石動惣一がそもそも敵対しているというのに、あの男はその両名と裏で繋がっていると？」

「……そう言ってるんだ」

己の華々しい真名を誰憚ることなく名乗り、笑って戦いに挑む銀髪の女に、切嗣は必要最低限の言葉とともに冷徹な眼差しを向ける。

キヤスターは片手を顎へ添えて、ふむ、と低く唸った。

「言峰綺礼が腹に一物抱えていることは、我々も理解している。あなたがたアインツベルンは、既にそこが繋がっていると見ているのだな」

「……話が見えねえな。スタークに殺された監督役の神父は、その言峰綺礼の父親のはずだ。そいつがなんで、父親を殺したやつと手を組むんだよ」

「僕は過去に一度、あの男と接触したことがある。少なくとも、まともな論理感に当て嵌められるような男じゃなかった」

あの夜、長い戦いの果てに切嗣が得た答えを知りたいと、ただそれだけの理由でこの聖杯戦争に参加したのだと、あの男は確かにそう言った。

言峰綺礼は、聖杯の奇跡などどうでもいいのだ。遠坂とは戦う理由が根本から違う。利益を度外視した人間は、ときに切嗣にも読めない行動を取ることがある。だから、恐ろしい。

「——お生憎様、そつちから綺礼に仕掛ける必要はない。探されるまでもなく、こつちから出向いてやったぞオ」

ふいに、老獺さを滲ませた男の声が響いた。この場の全員が反射的に体を強張らせる。

気付けば、切嗣らの周囲を取り巻くように、赤黒い煙幕が渦巻いていた。一分の間もなく、煙幕はこの場の全員を逃すまいと展開されている。

煙幕の中から姿を現したのは、無数のスマツシユ軍団だった。総勢五十にも迫るスマツシユの群れが、切嗣らを取り囲むように佇立している。そして、並み居るスマツシユの群れの、その先頭に立つのは、くすんだ深紅に煌めく鎧を纏った蛇男だった。

「……スタークウウツ!!」

戦兔が、真つ先にその名を叫んだ。ビルドドライバーを取り出し、構えを取る。一瞬遅れて、ランサーも剣呑な眼差しをスタークへ向け、手元に魔力の粒子を手繰り寄せた。

巨大な鉾が精製される。

「チャオ、戦兎……ま、そう身構えるなよ、今日は戦いにきたんじゃない」

「ふざけるなツ……これだけの民間人をスマツシユにしておいて、今度はなにを企んでる！」

「ああ、企みは企みだが、今回はおまえらと同盟を結びにきたんだよ」

「な……ツ」

軽々しく放たれたその言葉に、その場の全員が絶句した。戦兎は怒気を孕んだ双眸で睨み付け、キャスターは瞳目に動きを止め、ランサーは笑顔のまま、切嗣は無表情で。反応はまちまちだが、みな一様に言葉を失った。

日付が変わり、街の灯りが消え始めたころ、綺礼は通い慣れた洋館へと足を運んだ。遠坂の屋敷といえば、綺礼にとっては学び舎といっても相違ない、馴染み深い場所でもあった。

「ようこそ綺礼、待っていたよ」

遠坂時臣の顔色には、明確な疲れの色が見て取れた。今朝の一戦から、おそらく休むことなく新都での騒乱の終息のため奔走していたのだろう。綺礼はまず、師弟の礼に則って、敬愛する恩師に深々と頭を下げた。

時臣は快く朗らか微笑むと、綺礼をソファへ座るようにと促した。

「今朝はありがとう。桜を禅城の屋敷に送ってくれたこと、感謝するよ。これで私も後顧の憂いなく動くことができる」

「いえ、むしろ、その程度のことではかお力になれず、導師マスターには申し訳なく思っています。導師こそ、今日は長い一日だったことでしょう」

「フ、正直ね。聖杯戦争に負けたことはまだいい。大変なのは、後処理の方だ。新都であれだけの騒ぎになってしまった以上、同じタイミングで焼け落ちた間桐家もなにか関係があるんじゃないかと騒ぎになっていてね。可能な限り抑え込みはしたが、教会が機能していない今、まだまだ手が回っていない状況だ」

「父が存命であれば、導師の力になるべくその辣腕をふるっていたことでしょう。私にできることは、あまりに少ない」

伏し目がちに嘆く綺礼を宥めるように、時臣は微笑んだ。

「それは違うよ綺礼。璃正さんの死は確かに哀しいが、君はまだ生きています。それだけでも、今は喜ぶべきだろう。私は、君という弟子を得られたことを、誇りに思っている。今回の聖杯戦争が終わったら、君には兄弟子として凜の指導に当たって貰いたい……そう思えるほどに」

「それは、願ってもないお言葉です」

綺礼の返答に満足気に頷いた時臣は、テーブルの片隅に用意してあった黒壇の細長い箱を差し出した。

「……導師、これは」

「開けてみたまえ。これは君個人に対して、私からの贈り物だ」

促されるままに箱を開けた綺礼が見たのは、一振りの瀟洒な短剣だった。

——お前の師匠……遠坂時臣は、もうすぐお前に家宝のアゾット剣を渡すことになっている。

「……ッ」

刹那、石動の言葉が脳裏に蘇る。石動が予言した通りの未来が、いま目の前に迫っている。それは、綺礼の思考を一瞬停止させるには十分すぎる威力を秘めていた。

目を見開いたまま動きを止めた綺礼の、その反応の意味を履き違えた時臣は、さも喜ばしそうに微笑んだ。

「アゾット剣だ。当家伝来の魔術礼装でね、魔術を充填しておけば礼装としても使える。君が遠坂の魔導を修め、見習いの過程を終えたことを証明する品だ」

綺礼は短剣を手にとって、じいっと見つめた。英雄パラケルススが用いたとされる宝剣を精巧に模したレプリカだ。まさしく、家宝と呼ぶに相応しい精密な造形だった。

——お前はこれから、自分の愉悦のためだけに敬愛する恩師を殺し、そのサーヴァン

トを奪い取る。

——この世界は所詮過去に起こった聖杯戦争を再現しただけの仮想世界。言峰綺礼なんて人間は、現実世界じゃとうの昔に死んじまってんだからな。

走馬灯のように、あの日の石動の言葉が脳裏を駆け巡る。では、この世界で生きている綺礼は、いったいなんだというのか。目の前で微笑んでいる男は、綺礼が追い求めた魔術師殺しは、この聖杯戦争は。

すべて、つくりものだというのか？

「……………」

石動の言葉には、なんの根拠もない。すべてただの妄言で、石動がアゾット剣のことを知れたことにも、なにか裏があるのかもしれない。綺礼の理性はそう考えるべきと訴えているが、しかし、心がついてこない。

あらゆる感情が消え去った綺礼の面持ちも、時臣の目には感激に極まっているものと映ったのだろう。時臣は微笑みのまま、また領いた。

「我が師よ……至らぬこの身に、重ね重ねのご厚情。感謝の言葉ありません」

「君にこそ感謝だ、綺礼。君は私にとつて家族も同然だ。君がいてくれるなら、遠坂の未来は明るい。だから、綺礼……どうか、これからも私のそばにいてくれないか。そして、ともに凜と桜を導いて欲しい」

「お任せください。不肖ながらも、ご息女については責任をもつて見届けさせていただきます」

「ああ、君ならそう言ってくれると思つていたよ。ありがとう、綺礼」

「——ええ。ご息女については、ですが」

刹那、時臣の背後の闇が蠢いた。誰にも気配を感じさせることなく、音もなく、暗殺者の刃が時臣の首筋へと突き立てられる。

その刃を阻んだのは、鉛色に輝く水銀の壁だった。せり上がった水銀が、アサシンの刃を阻み、鞭のようになつてその身を遠ざける。時臣は、別段驚いたふうでもなかった。

瞠目したのは、綺礼だけだった。

「……綺礼。私は、君を信じていたかつたよ」

時臣の表情に浮かぶ色は、失望よりも、悲しみの方が大きかつた。ぎこちない動作で視線を伏せる。瞠目した時臣は、深く、震える息を吐き出した。

開け放たれたドアから入室してきたのは、綺礼にとつても見覚えのある人物だった。

「よもやあれほど信じた愛弟子に裏切られようとは、虚しいものよな、トオサカ。なるほど貴様という男は、よほど人が好かつたのであろうよ」

嘲笑うように笑みを深めながら、後ろ手を組んだケイネスが入室する。引き連れられ

るかたちで、万丈龍ライイダー我もともに姿を現した。

長い青髪を後ろで結わえたアサシンの女は、即座に飛び退ると、綺礼の眼前で、主を庇うように短剣を構えた。現れたふたりを敵対者と認め、目的を暗殺から主人の保護に切り替えたのだろう。

万丈は腹部にビルドドライバーを精製しながら、その双眸に確かな熱を灯して怒鳴った。

「テメエのことはキャスターから聞いた。放っておけば遠坂さんが危ない、つてな……けどよ、それを伝えても、この人は、それでもおまえのことを信じたと言って言った。それを、テメエは……ッ！」

「フン、一々くだらぬ感情を語るのはよせ、ライダー。私としては、冬木の管理セカンドオーナー者に恩を売れるならば、その他はなんでもよいのだ。むしろ、これで貸しがひとつできたと思えば、こういう結果もまあ、悪くはあるまい」

「……なるほど。孔明の罠に嵌められたのは私の方だったということか」
綺礼は込み上げる笑いを抑えられず、くつくつと喉を鳴らした。

いかな諸葛孔明といえども、今まで誰にも理解されなかつた綺礼の思考を読んで、事前に時臣に護衛をつけることなどできるわけがない。知っていたのだ、あの男は。これから起こる未来の出来事を、あの石動と同じように。

「綺礼……」

苦しそうな表情で硬く瞑目していた時臣は、開眼すると同時に、その熱い眼差しを綺礼へと向けた。

「夕刻ごろ、彼らが尋ねてきたときは何事かと思ったよ。いきなり『綺礼が私を裏切る』だなどと聞かされても、信じられるわけがなかった。だが、それでも万丈くんの顔を立てて、私はこうして君を招いた。……その結果が、これか」

時臣は、どうやらまだ綺礼を信じているようだった。というよりも、信じたいという感情の方が強いのだろう。決して浅からぬ情の籠もった、縋るような目で、時臣は綺礼を見る。

「らしいといえ、らしい。けれども、この状況で未だに現実を受け入れられないその愚かしさゆえに、遠坂時臣は聖杯戦争に負け、今またこのような無様な状況に追い込まれているのだ。さしもの綺礼も、いよいよもって愛想が尽きる思いだった。

「導師よ……あなたは、ついぞ私の心に気付くことはなかった」

「いつたい、なにが気に入らなかつたんだ。私は、君を心から愛していた。家族だとすら思っていた……それなのに」

「ええ、私もです。私も、あなたを愛していました。嘘偽りなくね」

「ならば何故ッ！」

「これが私の本性です。愛したものを壊さずにはいられないのです……そう、父にそうしたように」

時臣はさも絶望に打ちひしがれたかのような面持ちで絶句した。

その間拔けな表情が、綺礼には心地よかった。父を殺したときにはついぞ味わえなかつた興奮が、体のうちから沸き起こる。

「そう、か……璃正さんも、君が」

「我が師よ。あなたも、これから父の後を追うことになるのです」

気が動転してまともに言葉を返せないと時臣を嘲笑うように、綺礼は口角を釣り上げる。

時臣の代わりに前に出たのは、ケイネスだった。

「貴様の本性などどうでもよいわ。どうせ貴様は我らに誅され、ここで無様に死ぬのだからな。……だが、それよりも私には、令呪によって散ったはずのアサシンがまだ存命している絡繰りの方が気になる。貴様、いったいどのような仕掛けを用いた？」

「簡単な話だとも。令呪による自害を強いる前に、ただひとりだけ生き残るようにと、別の令呪を使って最も優秀なアサシンを保護しておいたのだ」

言葉の一部分を強調して、綺礼は眼前で構える女アサシンに視線をやった。

次いで、カソツクの袖を捲る。手の甲から、腕までびつしりと刻まれた数え切れない

ほどの令呪が衆目に晒された。ケイネスも、時臣も、揃って瞠目した。いまや綺礼の体には、檀黎斗をも上回る数の令呪がストックされている。

「——果てしない求道の日々に終止符を打つ。それが、私とこのアサシンの望みだ。そのためならば、どのような手段を用いることも厭いはしない」

「綺礼様マスター。このような者らと、これ以上言葉を交える必要はありますまい」

「ふ、そうだな……おまえの言う通りだ。アサシン、我が忠実なるしもべよ」

たつたひとり生き残ったアサシンは、綺礼にとつて唯一の理解者といえた。

当初、いつかは綺礼を出し抜こうとしていた女は、それでも求道者として自分と同じ苦しみを背負い戦う綺礼の言葉を信じてくれた。

たとえ非道な令呪による命令で無数に存在する自我を切り捨てることになったとしても、願いの成就のために立ち上がった綺礼に、この女は忠誠を誓うと言ってくれた。

こうして時臣の寝首をかき、すべてのサーヴァントとマスターを屠る瞬間が来ることを、アサシンはずっと、ずっと、長い間、心待ちにしていたのだ。

マスターとして、その想いに報いる必要がある。綺礼は強く、そう思った。

「……ア、」

アサシンの胸元から、どす黒い闇に包まれた大剣がそびえていた。

「え………？」

一瞬遅れて、アサシンの口元から、ごぼ、と音を立てて真紅の液体が零れ落ちる。

アサシンの心臓部を背後から貫いた刀身には、血のように赤い葉脈が隅々まで根を張っている。霊体化を解いた仮面シヤドライダーウバブラッドが、宝具と化した刃の刺突で、アサシンの急所をたしかに貫いたのだ。

致命傷だ。がくりと膝から崩折れたアサシンの髑髏の面が、かつんと音を立てて地に落ちる。はじめて見た女の素顔は、存外にその辺りにいるただの女と、そう大きな違いはなかった。英霊だろうと人間だろうと、死は平等に訪れるということの証左だった。

「な……、ぜ」

「呪詛を以て命ずる。バーサーカーよ、そいつを喰らいつくせ」

「ッ!!」

綺礼の腕に刻まれた呪詛が一際眩い輝きを放った。

呪詛による強制力を得たブラッドは、獣のような咆哮を響かせて、全身から赤黒い闇を放出する。すべてを悟ったアサシンはすかさず短剣ダイクを投げ飛ばすが、それよりも、地球外生命体の力を内包した闇がアサシンを飲み込む方がはるかに早かった。

最後の意趣返しとして放たれた短剣を、綺礼はなんの苦もなく裏拳で弾いた。短剣は、地に落ちる前に闇に溶けるように消えた。

「ア、アサシンが……」

「——喰われた、だと」

万丈の言葉を、ケイネスが引き継ぐ。ふたりとも、青い顔でそこに残ったただひとりのサーヴァントを見つめている。

不安定だった魔力の流れが、今までよりもより強固なものとなっているのを感じる。綺礼の迷惑通り、不完全なシャドウサーヴァントは、本物のサーヴァントの霊基を喰うことで、その芳醇な魔力源を丸ごと取り込んだのだ。

「テメエ……やりやがったな」

「ああ、やったとも。それがどうかしたかね、ライダー」

「そいつは……アサシンは、テメエの仲間だったんじゃねえのか!」

「君の認識は間違つてはいない。ああ、ともに聖杯を獲ると誓った同士だった」

「じゃあなんでッ! なんで……こんなことするんだよ!?!」

「私が、そういう人間だからだよ」

アサシンが最後に見せた顔を思い出し、綺礼はほくそ笑む。

敬愛する恩師を裏切り、信頼を寄せるしもべを裏切り、他者から向けられるあらゆる情を裏切った。自らのうちから込み上げる愉悦を認めることが、こんなにも心地よいことだと、綺礼はいまはじめて知った。

シャドウバーサーカー——裏切りの騎士ランスロットは、静かに項垂れてマスターで

ある綺礼の指令を待っている。かつて綺礼になんの答えも示してはくれなかった『仁義』や『道徳』とまるで無縁のこの意思なき人形こそ、綺礼のサーヴァントには相応しい。

「——やつらを始末しろ、バーサーカー。誰一人として生きては帰すな」

綺礼の短い命令に、ブラッドは雄叫びを上げて応える。

もう、綺礼の暴挙を止められるものは誰もいない。

スタークは指先にライフルのトリガーをぶら下げて、悠然とした歩調で戦兎へ歩み寄る。

「聞こえなかったのか？ 俺は同盟を組もうと言ったんだ。檀黎斗をブツ潰すためのな」

「ふざけるな……ッ！ おまえのために、いったいどれだけの人が苦しんだと思ってる！」

「生憎だが、俺は死人は出しちゃいない。スマッシュに改造したただけだ。ほっときやどんどん感染していく悪質なウイルスをばら撒いた、あのマッド野郎よりよっぽどマシだろう」

「そういう問題じゃないんだよッ！」

「いよいよビルドドライバーを腹部に装着した戦兔を諫めるように、スタークが声を張った。

「俺と組むならッ！——スマツシユに変えた民間人、全員まとめて解放してやる。……今日はそのためにこいつらを連れてきたんだ。ま、ほとんど聖堂教会の人間だな」

「……ッ、そんな言葉、信じられるか！」

「信じないのは勝手だが、組まないなら連中の命の保証はない。俺の合図ひとつで、こいつらは一斉に自爆する。そういうふうに住掛けを施した。当然、俺が死んでも、ボンッ……だ」

「おまえ……ッ」

スタークの親指が、背中越しにスマツシユの群れを指した。スマツシユの群れは、整列したまま微動だにしない。スタークの意のままに操られている。下手な言動に出ることはできない。

誰も即座に言葉を返さないことを確認してから、スタークはさらに言葉を続ける。

「そもそも俺がこんな真似しなくちゃならなくなったのは、お前らがこぞつて俺の敵に回ったからだ。サーヴァント全員対、俺ひとりなんてフェアじゃねえだろ。だが、おまえらが味方につくなら、こんな雑魚どもはお呼びじゃない。当然、舞弥も解放してやつ

てもいい」

怒鳴り返そうとした戦兎を遮るように、切嗣が一步前へ出た。

「おまえの口車に乗って、人質が本当に解放されるという保証は？」

「少なくともここにいるスマッシュどもはこの場で全員解放してやる。ただし、舞弥は檀黎斗を倒したあとだ。おまえに民間人の人質が意味を成さねえってことは分かりきってるんでねえ」

「……檀黎斗を倒せば、次に僕らの標的になるのはおまえだ。そのとき、おまえが再び舞弥を楯に僕を揺する可能性に、考えが及ばないとも思ったのか」

スタークはさもつまらなさそうに笑った。

「くだらないことを聞くなよ切嗣。おまえはいざとなったら舞弥すら見捨てられる……：そういう男だ。だったらそもそも、俺の要求なんぞまともに取り合う必要もない。だが、それでも俺の話に耳を傾けている以上、おまえも感じてるんだろう？ ——たとえ俺と手を組んでも、檀黎斗をブツ潰すだけのメリットってやつを！」

切嗣は、無言のままスタークを睨めつける。

あらゆる感情を押し殺し、ただ殺意のみを表面化させて。

「なら、こちらからもひとつ条件を提示させてもらおう」

「いいだろう、言ってみろ」

「言峰綺礼を始末しろ」

「……なんだと?」

鬼気迫るほどの剣幕で、切嗣はスタークを睨み据える。

言峰綺礼を排除できるなら、手段は選ばない。そういう意図がありありと滲み出ている。

「言峰綺礼を始末したのちに檀黎斗を倒し、アインツベルンの城を奪い返す。おまえを倒すのはその後だ、ブラッドスターク」

「なにを言い出すのかと思えば……、断る。おまえにそんなことを決める権利はない」

「なら交渉は決裂だな。舞弥は殺せばいい。……もつとも、その瞬間、僕がおまえに従う義理もなくなるがな」

切嗣はまるで感情を感じさせないポーカーフェイスで、淡々と続ける。

「僕に人質が通用しないだつて? ああ、おまえの言うとおりだ。見ず知らずの人間がどうなるうが知ったことじゃないし、僕にはいつでもおまえを仕留める用意がある。だが、おまえはここにいるスマッシュを戦力に動員することはできないし、自爆させることもできない。そんなことをすれば、そこにいる正義のヒーロー御一行はおまえを許さないだろうからな」

切嗣は嘲笑うようにふんと鼻を鳴らして、戦兔たちを顎で指した。

スタークのエメラルドグリーンのパイザーが、切嗣を舐めまわすように見つめる。

「もう一度言うぞ、スターク。言峰綺礼を始末しろ。それが呑めないなら、この同盟はありえない」

「ハッ……なるほど。いいねえ、面白いじゃねえか！ 流石は泣く子も黙る魔術師殺しだ、気に入った！ おまえの要求、呑んでやるよ」

あつさりと首肯したスタークに、切嗣は胡乱な眼差しを向ける。

戦兔も、ランサーも、キャスターも。誰もスタークの言葉を信じていない。それを悟ったスタークは、自嘲気味に笑った。

「信用ないねエ……せっかく俺がその気になったつてのに」

「当たり前だ。おまえの言葉を、俺達が素直に信用すると思ってるのか」

「おいおい、そつちから要求しておいて、随分な言い草だな……ま、心配せずとも、成功すりやおまえらの標的がひとり減る。失敗してもひとり減る。おまえらに損はない。そうだろうオ？」

戦兔と切嗣は、互いに顔を見合わせた。

「……ただし！ 俺が綺礼を始末するのは、みんなで檀黎斗の城に乗り込んだあとだ」
「どういう意味だ」

「俺たちがインツベルン城に乗り込めば、綺礼も間違いない姿を現すだろう。今やあ

いつは檀黎斗の側近みたいなモンだからな。出てきたなら、あとは正面から叩き潰せばいい……その役目は、俺が引き受けてやる」

「もしもおまえが裏切つたら……？」

「そのときはアーチャーにおれを始末させればいい。……いや、もうアーチャーだけじゃねえな。戦兔に万丈、おまけにランサーとアルターエゴもか……これだけの戦力を纏めて敵に回すのは、流石の俺も御免被りたいんでね」

「……いいだろう。そういう約束なら、おまえとの同盟を認めてやってもいい」

切嗣の返答に、戦兔は瞠目した。

スタークからの要求など、確実に裏があるに決まっている。

「おい、いいのかよそんな簡単に……！」

「僕らの持てる総戦力で檀黎斗を叩く。たとえ罠だとしても、残る全サーヴァントを同時に敵に回すことの意味は、あの男が誰よりも理解しているはずだ」

「切嗣……」

戦兔は、正直言っただけでひいていた。

長年片腕としてもに戦ってきた舞弥を失って、正常な判断力が鈍っているのではないかと疑わずにはいられない。上手く事を運べば、件の三人を纏めて倒すことができるかもしれないという事は戦兔とて分かっている。それでも、戦兔は即断できずにい

た。

人質さえ取られていなければ、ここではつきりと断ることもできただろう。口惜しいことだが、スタークの根回しの良さに歯噛みする思いだった。

ふいに、キヤスターが戦兎の肩に手をおいた。

「マスター。どちらの選択を取つても、後悔はさせない。私の持てる力の限りを尽くすことを、約束する」

「キヤスター……」

「戦兎。進むべき道を決めるのはいつだって、今を生きるそなたらです。私たちサーヴァントは、ただその道行きを見守るのみ……そなたの選んだ道であれば、私もまた、あらゆる敵を討ち滅ぼして、道を切り拓くことを約束いたしましょう」

キヤスターに続くように、ランサーが微笑んだ。

結局のところ、どうあつても戦兎には人質を見捨てることはできない。その気持ちを推し量つた上で、ともに道を進んでくれるというふたりの言葉が、今の戦兎にはなによりも心強く感じられた。

「いい仲間たちじゃねえか。泣かせるねえ……で、おまえはここまで背中を押されてもまだ悩んでるのか」

スタークは、指先に引つ掛けて弄んでいたライフルを雑に放り投げると、戦兎の目前

まで歩み寄り、その顔を覗き込んだ。

「いいか戦兎オ。どのみち、檀黎斗を倒さねえ限り、街の人々は解放されない。そして、ここには檀黎斗を仕留めるだけの戦力が揃っている……！　なら、なにを悩む必要がある!?　俺との確執なんざ、今は棚に上げておけ！　おまえに選択肢はないんだよオ！」

スタークの怒号を合図に、周囲を取り巻くスマツシユの群れが一斉に顔をあげた。無数の無機質な瞳が、戦兎ただひとりを射抜くように見つめる。戦兎にはそれが、助けを求める人々の視線のように感じられた。

硬く瞑目した戦兎は、肺に溜まった空気を吐き出した。

「……わかった。おまえの要求を呑む。その代わり、今すぐみんなを解放しろ！」

戦兎の怒号とタイミングを合わせるように、キャスターとランサーも戦兎の傍らに並び立つ。ふたりとも、それぞれスタークを睨むように佇立していた。

スタークは満足した様子でこくこくと頷いた。

「ああ、それでいい。賢い判断だ。これで、契約は成立だな」

スタークが軽く手を掲げると、スマツシユの群れは一斉に糸の切れた人形のようにその場に倒れ伏した。身を包んでいた鋼鉄の鎧が霧散する。みな、一樣に人間としての姿を取り戻した。みんな、意識を失っている。中には子供や老人の姿もあった。

戦兎の拳に、自ずと力が籠められる。手のひらに、爪が深く食い込む。戦兎の心を樹

酌したのか、キャスターが再び肩を優しく叩いた。

「決戦は明朝、場所はアインツベルン城だ。道案内はその切嗣にでも頼むんだな」

大きく伸びをしたスタークは、床に放り投げられていたライフルを拾い上げると、振り返らずに歩き出した。

もうもうと立ち込める煙幕が、スタークの身を包む。罪のない大勢の民間人だけを残して、スタークはいずこかへと消えた。

赤黒い炎を纏ったブラッドの拳が、冗談からクローズマグマの胸部装甲へと振り落とされた。接触すると同時に、爆炎が吹き上がる。膝を折ったのは、クローズマグマの方だった。

「う、おおおおおおおッ?!」

下方から掬い上げるようなブラッドのアップパーが、クローズマグマの体を天井目掛けて跳ね上げる。マグマを吹き出しながら宙へ待ったクローズマグマ目掛けて、今度は強烈な後ろ回し蹴りが叩き込まれた。赤黒く燃える魔力の輝きは、クローズマグマの体のくの字にへし折るような形で吹き飛ばした。

「が、あ……っ」

「????????」

屋敷の壁を突き破って廊下へと放り出されたクロースマグマを前に、ブラッドは咆哮する。

綺礼は、動こうともしなかった。ただ、ブラッドの猛攻を見て、ほくそ笑むだけだ。

「なにをやっているのだ、ライダー!? いいようにやられているではないか!」

「う、るせエ……! こいつ、前よりも強くなつてやがんだよ……!」

戦闘が始まる前は、隅々まで整理の行き届いていた屋敷の惨状は、今や見る影もない。棚と壁はあちこちが粉々に粉砕され、部屋のあちこちから火の手が上がりに始めている。圧倒的な力を持つ暴風雨が、この狭い部屋で激突したのだ。そして、折れたのは片方だけだった。

ブラッドの装甲には傷一つ見られない。臓硯秘蔵の刻印虫をふんだんに注ぎ込まれ、サーヴァントを丸ごと取り込んだ湖の騎士は、もはや規格外の強さを誇っていた。

「遊びもほどほどにしておけバーサーカー。これでは間桐の屋敷の二の舞だ!」

ブラッドは、マスターである綺礼の命令に大しても聞く耳持たず吠え猛るだけだった。けれども、言葉とは裏腹に、綺礼の頬は愉悅に歪んでいるように見える。

時臣も、ケイネスも、もはや祈るような面持ちでクロースマグマを見守るしかできなかった。

「くツ……うおおおおおらあああああッ!!」

燃え盛るマグマのジェットを噴射させて、瞬時に流星を思わせる速度を叩き出したクローズマグマは、室内で待ち受けるブラッドへと一直線に突っ込んだ。弾け飛んだ溶岩の欠片は、ケイネスの水銀がすべて受け止め、弾き返していた。

ブラッドの間合いへと飛び込んだそのとき、クローズマグマが見たのは、両者の間に割って入るかたちで現れた第三者の影だった。

「な……ッ」

漆黒のドレスを、黒光りする甲冑で覆い尽くした小柄な少女。陽光を受けて煌めく金の稲穂のような髪が、ふわりと揺れる。目元は黒のバイザーで覆い隠されているため、表情は伺い知れない。

「——うおッ!?!」

今度は、強烈な威力をもったなにかが、横合いからクローズマグマを打ち据えた。成すすべなく吹き飛ばされていく中で、万丈は、自分が今、あの少女が持つ黒い西洋剣の一撃を受けて弾き飛ばされたことを悟った。

どん、と大きな音を立てて、クローズマグマの装甲が壁に叩きつけられ、そのまま落ちる。一瞬遅れて、みしみしと柱が軋む音が響いた。

少女は、ブラッドへと斬りかかっていた。

「——」

ブラッドの動きが、一瞬止まった。そこへ、少女の黒剣が上段から振り下ろされる。漆黒の魔力を漲らせた西洋剣は、無防備なブラッドの装甲を大きく袈裟掛けに斬り裂いた。

「…………ツ!」

数歩後退ったブラッドへと、黒の少女は猛烈な勢いで攻撃を仕掛ける。その攻撃速度たるや、クローズマグマの比ではない。軽やかな動きで、しかし鋼鉄すら砕かんばかりの威力を秘めた一撃が、間断なくブラッドへと叩き込まれる。両者の剣が激突するたび、衝撃が屋敷を揺らす。

「ちつ…………くしょオ、なんだってんだよ、いったい」

起き上がったクローズマグマは、よろめく体に鞭打つて、時臣とケイネスのふたりへと歩み寄った。

「おい、なんかよくわかんねえけど、ここは一時撤退すんぞ!」

「待ちたまえ、撤退といつても、いったい何処にツ」

「ライダー、貴様まさか、トオサカを我が工房に——」

「うるせエ黙ってろ! 舌噛むぞ!!」

もはや有無を言わせる隙すら与えず、クローズマグマはふたりを両脇へと抱え込んだ。すかさず、背中のスラスタから勢いよくマグマを噴き出す。

「待て……ッ！」

綺礼は小さく舌打ちし、すかさず黒鍵を投げ飛ばすが、もう遅い。いかな黒鍵といえども、超高熱のマグマの前には無力だ。赤熱した溶岩の奔流が、黒鍵を飲み込み、跡形もなく溶かす。

ふたりのマスターを抱えたクローズマグマは、追尾すら許さぬ速度で窓を突き破ると、月明かりで僅かに白んだ星空に、微かな白煙の軌跡を描いて飛び去った。

第32話「レゾンデートルの祈り」

絶え間なく響く剣戟音に次いで、激しい轟音と振動が波となって押し寄せる。衝撃が巻き起こるたび、壁は軋み、屋敷は揺れて、窓ガラスは片端から粉々に粉砕されてゆく。ほんの数分前までは手入れの行き届いた屋敷だった。時臣の細かな気配りの行き届いた、瀟洒な豪邸だった。今はもはや瓦礫と砂埃に覆われて、視界すらもおぼつかない戦場の只中となっている。

「???」

獣の咆哮とともに繰り出される剣戟の嵐を、黒の甲冑を纏った小柄な少女が捌き、いなしてゆく。仮面ライダーの装甲を纏ったシャドウバースーカーとの体格差は一目瞭然だったが、それをものともしない技量が少女にはあった。

少女の持つ黒の剣が、闇を纏って、昏く輝く。剣戟の合間に、流れるような動作で圧倒的な威力を秘めた魔力を放出する。それが着弾するよりも先に、少女は既に次の斬撃を繰り出していた。並大抵のサーヴァントでは対処すままならない連撃に、しかしブラッドは的確に対応してみせる。

最初の魔力放出を、ほんの僅か身を屈めてやり過ごしたブラッドは、続く一太刀を下

方からビートクローザーで跳ね上げる。ブラッドが回避したことで受け止めるものがいなくなった魔力の斬撃は、部屋の天井を屋根裏ごと吹き飛ばし、戦場を夜空のもとに晒した。

攻めあぐねているのはブラッドも同じだ。少女の足元を払おうと振り抜かれた剣の一撃は、ほんの僅かに地を蹴った少女に容易く躲かれ、今度はブラッドの首を狙った剣が横合いから急迫する。

「——ッ」

ほんの僅かに体を逸らして、襟の装甲で剣を受けたブラッドは、少女の胴体を両断しようとして横薙ぎの一撃を振り放った。少女は即座に突き出していた剣を引いて、ブラッドの一撃を受け止める。少女の華奢な体は、仮面ライダーの豪腕で放たれた一撃を受けて、軽々と吹き飛んだ。

「Au——rrrrr！」

好機とばかりに、ブラッドは跳んだ。音よりも早く、風となって、粉塵を巻き上げながら、空中に真紅の残像を描いて追撃を仕掛ける。

「甘い」

空中で両者の剣が激突する。地に脚がつくよりも早く、十を越える剣戟が交わされる。

暴力的な衝撃波が突風を巻き起こし、ソファも、テーブルも、柵も、シャンデリアも、なにもかもが原型を留めぬ程に刻まれる。

上段から放たれたブラッドの刺突が、床へと突き刺さった。少女が身を翻して回避したために、膨大な魔力を秘めたビートクローザーの一撃が、床を穿ったかたちだ。床の亀裂はまたたく間に広がった。ブラッドは、剣を引き抜くと同時に次の攻撃を受け止めた。

「A u r r r r r r ……ッ!!」

少女の重たい一撃を受け止めるべく床を踏みしめたブラッドだったが、すぐにその態勢は崩れ去る。床が、音を立てて崩壊したからだ。

一瞬がら空きになった胴体に、すかさず少女は剣による刺突を仕掛けるが、ブラッドもさるもの。赤黒い魔力の波濤が、ブラッドの背部装甲でたなびくマントを舞い上げた。重力の方向が変わる。ブラッドの体が、少女の眼下からすり抜けるように飛び上がった。

今度はブラッドが上段から大剣による一撃を叩き込んだ。

「……………ッ」

大穴の空いた床から階下へと落下しながら、それでも少女は崩落してゆく瓦礫のひとつを蹴り、輝く闇を纏った剣を振りかぶった。刹那、両者の剣が衝突し、闇が炸裂する。

衝撃波は瓦礫を細切れにまで粉碎し、視界を覆い尽くすほどの粉塵を発生させた。

粉塵の中、両者揃って階下へと落ちてゆく。二階からではもうなにも見えないが、高い金属の激突する音だけが、幾重にも重なって響いていた。

「——まさしく、厄災の嵐だな」

絶えず揺れ続ける屋敷の二階で、ただひとり佇む影が独りごちる。綺礼は、ふたりの英霊が空けた大穴から下方を覗き込んだ。

視界すら覆い隠す粉塵の中、真紅に煌めく閃光と、漆黒に輝く昏闇が、鮮やかな軌跡を描いてぶつかり合っている。舞い散る火花と、魔力の衝撃波が空中に華を咲かせるたび、瓦礫が飛び交い、階下の内装が破壊されてゆく。時折放たれる黒の極光が、壁や天井を消し飛ばして、夜空へ舞い上がっていくのが見えた。

これはもう、並のサーヴァント同士の争いではない。単騎で容易く一国を滅ぼせるだけの力を秘めた英霊が、この狭い屋敷の中でしのぎを削っている。寸前まで呑気していた綺礼も、流石に撤退した方がよいのではないかと思ひ始めていた。

やがて、砂埃がおさまった。

もともとは屋敷のホールだった場所で、ふたりの英霊は仮面越しに睨み合う。互いに、第三者からではその顔色は伺えない。少なくとも、少女にもブラッドにも、傷らしい傷は見受けられない。これだけの破壊を引き起こしながら、両者未だに一撃たりとも

致命傷を叩き込めていないのだ。

「……A r r r……t h u r……ッ!!」

怨嗟の叫びとともに、ブラッドがその身に纏った闇が渦を巻き、手にした剣を包み込んだ。

剣を覆い隠す暗雲が晴れたとき、最前までビートクローザーだった武器は、今はもう、まったたくべつの形状へとその姿を変えていた。

近未来の機構を備えた機械仕掛けの刀剣が、より鋭利な刃を備えた、無骨で、鋭利な、古くから伝わる伝説の剣へと――。

「――無毀なる湖光を抜いたか」

ぼつりと呟いた少女は、手にした剣の切っ先を静かに降ろす。

ブラッドの持つ魔剣は、少女の黒い西洋剣とよく似たかたちをしている。どちらも、人ならざる者の手によって鍛えられた魔剣だ。

月下に煌めく湖面のように鮮やかな照り返しを魅せる魔剣を構えて、ブラッドは低く唸った。

無毀なる湖光には、竜属性に対する特攻効果がある。

それが眼前の少女にとって明確な驚異となるうことを、ブラッドは――ランスロットは狂化の呪いを受けながらもたしかに理解していた。アサシンの霊基を取り込んでか

黒く輝く闇を纏った魔剣と、同じく闇を孕みし堕ちた聖剣とが激突する。

互いの魔力が炸裂し、爆風が巻き起こる。周囲の瓦礫を粉々に破碎しながら吹き飛ばす爆炎の中、ブラッドは魔力の熱をもものともせず騎士王へと飛び掛かった。

漆黒の大剣がぶつかり合い、もつれ合い、溢れ出した魔力は、いよいよもって屋敷の天井を丸ごと消し飛ばした。夜空へ向けて天高く、どす黒い極光が柱となつて伸びる。

光はすぐにおさまったが、ブラッドの猛攻は終わらない。

「Au——rrrrrrrrッ!!」

無^ア毀^{ロン}なる湖^ダ光^{イト}の刀身が、赤黒い闇のオーラを纏つて煌めいた。

怒涛の勢いで繰り出される連撃の嵐を、騎士王はやはりその剣で受け流してゆく。それでも攻勢に立っているのはブラッドだ。騎士王の脚が、少しずつ後退している。幾度目かの激突で、ブラッドはとびきりの魔力を秘めた一撃を上段から叩き込んだ。

「——ッ」

黒塗りの聖剣で、無^ア毀^{ロン}なる湖^ダ光^{イト}の一撃を受け止める。

異変は、一瞬遅れて騎士王を襲った。無^ア毀^{ロン}なる湖^ダ光^{イト}とかちあつた箇所、真紅の閃^キ光^ズが刻まれている。直感的に危機を悟った騎士王は、聖剣を投げ捨て、飛び退った。聖剣の内側から溢れ出した真紅の魔力光が、聖剣を粉々に粉碎し、その破片すらも呑み込んで消滅させた。

「????????????
ッ!!」

ブラッドは、本来光の奔流^{ビーム}として放たれるはずだった圧倒的な魔力量を、あえて放出せずに、対象を斬りつけると同時に解放した。結果、膨大な魔力は切断面の内側で炸裂し、ゼロ距離で対象を消し飛ばす必殺の一撃と化したのだ。

勢いそのままに、武器を失った騎士王の間合いへ踏み込む。必殺の輝きを宿した魔剣で、無防備な騎士王の甲冑を袈裟懸けに切り裂こうとした、その時だった。

「——ッ」

騎士王の手元に、闇が集まった。ふたたび精製された黒塗りの聖剣が、ブラッドの魔剣を受け止める。同時に、いま精製したばかりの聖剣に真紅のキズが奔る。騎士王は、その甲冑で守られた脚で、ブラッドの胴体を蹴り飛ばしていた。

ブラッドを突き放し次第、即座に聖剣を手放した騎士王だったが、十分な間合いを取るには圧倒的に時間が足りていない。結果、真紅の魔力の炸裂は、至近距離から騎士王を呑み込んだ。

轟音を響かせて、魔力が爆裂する。あらゆるものを焼き尽くす超高压力の魔力光が、かろうじて原型を留めていた屋敷の壁と柱をも消し飛ばした。

煙幕と粉塵に遮られて、なにも見えなくなつた。

「????????????
ッ!!」

「????????????」

それでも、ブラッドは吠える。

騎士王は生きている。この程度で、かの騎士王を倒せるわけがない。そう、本能が訴えかけている。

もうもうと立ち込める煙幕が晴れたとき、予測の通り、騎士王は二本の脚で地を踏みしめ、漆黒の聖剣をぶんと振るって悠然と構えていた。ただし、目を覆っていたバイザーは既になくなっていて、胸部を覆う騎士甲冑も、粉々に砕け散っていた。竜特攻の魔力爆発を至近距離で受けた代償だ。

「——アロンドナイトオーバーロード縛鎖全断・過重湖光……よもやバーサーカーに身をやつしながら、そこまでやるのはな」

よれていた騎士王のドレスは、瞬時に元のなめらかな絹の質感を取り戻した。その上から傷ひとつない甲冑を纏い、少女は何事もなかったかのように冷ややかな眼差しでブラッドを見据えた。その瞳に、疲労の色は見えない。

ダメージを与えられていないわけではない。どのようなダメージを与えても、瞬時に回復されているのだ。今の騎士王は、それだけ膨大な魔力の源と直接繋がっていると証明された。

騎士王は——セイバーオルタは、仮初の聖剣を握りしめ、眼前の敵を見据える。

第四次聖杯戦争において、バーサーカーのクラスで喚ばれたサーヴァントは、たしかにこの腕の中で息絶えた。今はここにはない聖剣で心臓を穿たれ、狂うほどに焦がれた騎士王の腕のうちで、かの騎士は逝ったのだ。

あのとき、かの騎士が口走った今際の言葉も、はつきりと覚えている。

だけれども、今となつては、それも遠い昔の出来事のように感じられた。

——湖の騎士。サーランスロット 私に断罪を、理想を求めらばそれでいい。貴公には、私に剣を

向ける権利がある”

セイバーオルタは、無尽蔵に供給される魔力の噴射を得て、強く地を蹴った。

無限に精製される偽りの黒聖剣を振り上げ、その刀身に漆黒の魔力の輝きを滾らせ
て。

瞬間的に弾丸もかくやという速度で加速したセイバーオルタと、ブラッドの剣が激突する。乱反射して溢れ出した魔力が、周囲の物質という物質を片端から粉碎し、消し飛ばしてゆく。絶え間のない剣戟のさなか、セイバーオルタは眼前の憤怒の化身に、熱の籠もらぬ凪いだ眼差しを向ける。

“ 円卓最強の騎士よ。我らが夢見たランスロット卿よ。貴公が己の罪を裁いてくれと願うなら——”

疑似聖剣に宿った魔力の闇が、かがやき爆発的に膨れ上がる。

瓦礫を蹴って、セイバーオルタは跳んだ。

“いいだろう。その暴れ狂う怒りの形相を仮面で隠しているうちに。望み通り、その首を貫うでしょう”

音速にも届かんばかりの速度でブラッドの間合いへと踏み込んだセイバーオルタが、その剣を振り抜いた。当然、ブラッドも魔剣を構えるが、速度がまるで違う。直感的に、攻勢に転じることは不可能であると悟ったのだろう、剣を構えて防御の姿勢を取ったブラッドに、情け容赦なく聖剣の一撃を叩き込む。

ガイン、と鈍い音が高らかに響いた。一瞬遅れて、圧倒的な出力によって生じた衝撃波が、ブラッドの姿勢を崩した。突風が、瓦礫の山を方々へ吹き飛ばした。

剣技で勝るランスロットに対し、ただただ圧倒的で、暴力的な、桁外れの出力を味方につけたセイバーオルタの反撃がはじまった。

まだ新調したばかりのい草の匂いに包まれた和室に、いま、この聖杯戦争に関わるほぼすべての人員が揃っていた。部屋の中央に置かれた長テーブルを挟むように、片側には桐生戦兎とキャスター、ケイネスが。向かい合うかたちで衛宮切嗣と遠坂時臣、そして万丈龍我が座っている。

会合の場所を衛宮の屋敷に選んだのは、意外にも衛宮切嗣本人だった。ゆくゆくは敵

となることが明白なエルメロイの工房を使うわけにもいかず、かといって遠坂の屋敷も実質的に選択対象外である以上、周囲の目を気にせず会議に打ち込める場所はもはや切嗣の屋敷以外にないという判断だった。

みながみな、互いに隙を見せぬようにと警戒し睨みを利かせあっていることは顔色を見ればひと目でわかる。それでもこのような場を設けたのは、明日のアインツベルン城への襲撃を前にした作戦会議のためだった。

ただひとり、時臣だけは平時の余裕に満ちた表情を崩してはいなかった。あくまで優雅に、悠然と構えている。

「よもや戦時中に、こうしてすべてのマスターが一堂に会することになるとはね。かねてより話には聞いていたが、なるほど聖杯戦争とは思いつ通りにゆかぬものだ。過去三度に渡って行われた儀式がいずれも失敗に終わったことも領ける」

「だが、少なくとも過去の聖杯戦争には、檀黎斗も、エボルトもいなかった」
「言峰綺礼も、な」

戦兎の言葉を引き継いだ切嗣に、時臣は沈鬱な面持ちを向ける。

綺礼がシャドウバースーカーを操り、時臣に牙を剥いたことは、もはやこの場の全員が知っている。切嗣が警戒した通り、いまや言峰綺礼は全員にとって共通の敵となっていた。

「言い訳をするつもりはないが、綺礼が己の個人的な理由で君たちに接触していたことは、私にとつても完全に慮外の出来事だった。彼の心の闇に、師である私がもう少し早く気付けていれば……」

「遠坂さんは悪くねえ。裏切つたあの野郎がぜんぶ悪いに決まつてる。野郎、今度会つたら俺がブツ潰してやる……!」

鼻息を荒げて、万丈は自分の手のひらに拳を打ち付けた。

キヤスターが、時臣へと向き直つた。

「遠坂氏——まずは此度の聖杯戦争において、貴方の領地を荒らしたことについて、謝罪をさせていただきたい。貴方がすべての令呪を失い、聖杯戦争への参加権を失つた以上、我々としてもこれ以上冬木の龍脈を占有する理由はない。差し当たつては、我々が篡奪した龍脈の支配権を返還したく思うのだが」

「なに、戦時中の判断だ、別段気にしていないよ。むしろキヤスター、君の見事な手腕には感心さえ覚えたほどだ。こうして平和的に龍脈を返還してくれることも、私にとつてはありがたい話でもある……今は、君が礼を失せぬ男であつたことを知れただけで十分だ」

時臣の微笑みに、キヤスターは小さく頭を垂れて応えた。そのまま、時臣は全員の顔色を伺いながら言葉を続けた。

「君たちには、命を救われた恩がある。キャスターの知略と、ロード・エルメロイの助けがなければ、私の命はなかった。ライダー……万丈くんに至っては、我が娘ともども、重ね重ね助けて貰ってばかりいる。聖杯戦争が終われば、必ずやこの恩に報いたい」

「当然だ。でなければわざわざ助けてやった意味がなかるようよ」

「いやあ、俺はべつに？ 礼とかそういうのはいいってどうか？ 見返りを期待したら、やっぱそれは正義とは言えねーし？」

ふんぞりがえって鼻を鳴らすケイネスも、存外に満更でもなさそうだった。頬が明らかに緩んでいる。万丈に至っては、あからさまに上機嫌そうに相好を崩し、後ろ髪を掻いている。どこかで聞いたような言葉をにやけ顔で言う万丈に、戦兔は呆れて失笑した。

「……はいはい、話を戻すぞ。明日の決戦の件だが、こっちの陣営には仮面ライダーが三人と、サーヴァントが二人。それから、一応スタークのやつも、今回に限っては味方についてくれるって話だ。……ま、ひとりどうにも信用できねえやつが混じってるが、戦力としては申し分ない。やるからには、最低でもここで檀黎斗と言峰綺礼は絶対に倒したいところだが」

「そのことだけだよ、戦兔。シャドウバースーカーの相手は、俺にやらせてくんねえか」身を乗り出した万丈を、戦兔は冷静な眼差しでじつと見つめる。

「おまえ、シャドウバーサーカーに手も足も出なかったんだろ」

「だからこそ次は負けらんねえんだよ！ 野郎は、臓頭が遺した最後の置き土産だ。本当なら、間桐の屋敷で、俺があいつをブツ倒さなきゃならなかった」

「万丈、おまえが責任を感じてるのなら、それはお門違いだ。あの戦いで、俺たちはセイバーを倒し、桜の救出にも成功した。それだけで、成果は期待値を遥かに越えてる」

「俺が言ってるのは、そういうことじゃねえんだよ！」

万丈の怒号に、室内の空気がしんと静まり返る。全員の視線が、万丈へと集中する。

「あいつは……雁夜は何度も言ってた。臓硯を倒して、桜を救いたい、つてよ。でも、俺はそんなあいつを守ることはできなかつた……見殺しにしちまつた！ だから、せめて、雁夜がやり残したことは俺が果たしてやりてえんだ！」

「……勝算はあるのか」

「次は負けねえッ！ クローズマグマの全力で、今度こそ野郎をブツ倒す！」

戦兎は俯き、はあああ、と、特大の溜息を落とす。

「そういうのは勝算って言わねえんだよ、ばーか」

「うつせえな、そんなモンいちいち考えて戦ってられつか！ だいたい、筋肉つて付け

……」

「——万丈。シャドウバーサーカーはおまえに任せる」

「……………」

万丈の言葉を遮って告げられた結論に、誰よりも瞠目したのは万丈だった。

思わず言葉を詰まらせた万丈に、戦兎は務めていつもどおりの調子で笑いかける。

「その代わり、絶対に勝て。負けたら、今後一生、おまえには俺の引き立て役のポジションで働いてもらうぞ」

「……へっ、だったらなおさら負けらんねえな。その引き立て役が真の主役ってんじや、戦兎が余計目立たなくなっちまうモンな！」

「はいはい、言ってる」

勝算はなくとも、信頼がある。なにより、こうなった万丈はもはや誰の言葉も聞かないことを、戦兎はこの場の誰よりも理解している。今やまっとうなサーヴァントと同等の力を得たというシャドウバースーカーを、万丈がひとりで引き受けてくれるのである。その分こちらも戦力を分散させやすい。

「言峰綺礼はスタークが引き受けるって話だが、どうにもきな臭い。誰か監視をつけられるなら、そうしたいところだが」

「ならば、その役目は私が引き受けよう」

声と同時に、襖が勢いよく開いた。現れたのは、赤い外套のアーチャーだった。手にした盆には、お茶と、人数分のコップが乗せられている。その後ろから、ケイネスと

もに屋敷に退避してきたソラウが顔を見せた。

アーチャーがテーブルに置いた盆から、真つ先に戦兎と万丈が自分のコップを取った。残りは誰も取ろうとしなかったので、アーチャーが茶を注いでから各々の眼前に置いた。

ケイネスは、胡乱な眼差しでコップに継がれた薄茶色の液体を睨んでいる。

「……毒など入っておるまいな」

「くだらないことを気にする男だな。いかな私といえど、決戦前に身内の戦力を削るほど愚かではないよ」

「私はずつと見張ってたから大丈夫よ、ケイネス。毒なんて入れる隙はなかったわ」

ソラウの弁護を聞いてもなおアーチャーと切嗣を睨むケイネスを尻目に、万丈は既に出された茶をごくごくと喉を鳴らして飲んでいた。あつという間に一杯目を飲み終わり、誰に許可を取ることもなく、二杯目を勝手に注ぎ始める。

ふ、と失笑したのは時臣だった。万丈に続いて、時臣もコップを口に運ぶ。続くように、ソラウも注がれた茶を口にする。その後も、なにも異常は起こらなかった。

「ふふふ。こうしていると、戦国の世を思い出しますねえ」

どこからともなく現れたランサーが、空席の座布団に腰掛けた。

「私が生きた世でもそうでした。日頃戦場いくさばで命を削り合う間柄でも、茶会でそのような

無料を働く慮外者はおりません。茶の席で会ったなら、ひとりの風流人として振る舞うべし……ええ、これぞ日の本に生まれた民の心。まあ、私には心とかよくわかりませんけど」

「ええい、よくわからないのであれば黙っているランサー！」

「あッ、ところで、アーチャーがかの者の監視役を務めると言うのなら、私もお供いたしたく思うのですが。勿論、裏切るような素振りを見せれば、スタークもろとも、私がその弓兵を殺しますので」

笑顔のまま告げられたその言葉に、戦兔は背筋が凍るような悪寒を覚えた。冗談で言っているのではない。ランサーは、本気で情け容赦なくアーチャーを切り捨てるつもりでいる。

アーチャーはいつも通りのニヒルな笑みを浮かべて、鼻を鳴らした。

「なるほど、たしかにこれでは下手な動きはできないな」

「案ぜずとも、味方である限りは鋒は向けませんよ。寧ろ、奴らには無数の雑兵ゲンムが味方しているはず。そなたが言峰との戦いと、スタークの監視に集中する限りにおいて、私はその雑兵どもを、ただの一匹たりとてそなたらの戦場に通しはしません」

「それは心強い限りだな」

乾いた笑みを零すアーチャーに、ランサーはにつこりと微笑みかけた。

徐々に方針が決まりつつある。戦兎は頷いた。

「なら、檀黎斗ゲレンムの相手は俺が。この世界でルーラーと戦うなら、クラス補正の影響を受けないビルドが一番相性いいからな」

「了解した。では、私はマスターとともに進軍しよう。私が戦場にいれば、それだけで我がスキルの恩恵は自陣全体に働く。いざとなれば奇門遁甲の援護も惜しむつもりはない」

そこで、ケイネスが声をあげた。

「待て、まだ不確定要素はある。先程の戦いで、シャドウバーサーカーへと襲いかかったあの黒いサーヴァントは……」

「——騎士王です」

ケイネスの言葉を遮るように、今度は渡ネロが姿を表した。かのキングと同じ、黒装束に真紅のマントを身に纏って。

ランサーが、余っている座布団をネロの眼前に敷いた。無言のまま、座布団を叩いて微笑む。ネロは一瞬困惑した様子だったが、諦めたように座布団に腰を降ろした。誰に言われるでもなく、折り目正しい正座で座っていた。

「……騎士王の相手は僕が務めます。この戦いで、彼女を悪しき呪縛から解き放つ」

「へへ、なーんかカッコつかねえな」

けらけらと笑う万丈の言葉を無視して、切嗣は口を開いた。

「話は纏まったな。サーヴァントたちがアインツベルン城に殴り込むなら、僕はこの屋敷でアイリスフィールの護衛に専念したい。この状況で、守りをすべて攻めにつき込むのは危険だからね」

「待て、勝手に話を進めるな。アイリスフィールだと……？ 誰だそれは」

「アイリスフィール・フォン・アインツベルン……衛宮切嗣の奥方にして、聖杯の器。小聖杯をその身に秘めたホムンクルス、と説明するのが、最も端的でわかりやすいか」

切嗣の代わりにケイネスの問いに回答したのは、キャスターだった。切嗣に説明を任せるよりも、その方が話が早いと判断してのことだろう。

「……やはり、アイリりのことも調べがっていたか。大した諜報能力だな、諸葛孔明もつとも、今更驚く気にもなれないけどね」

「お褒めに預かり光栄至極……などという冗談はさておき、聖杯の器に護衛が必要なのは紛れもない事実。ここは遠坂氏とケイネス卿にも、衛宮切嗣とともに護衛の任に就いて頂きたい」

「ふむ……それは別段構わないが、彼はそれで納得するのかな」

「……」
「ここまで静かに話を聞いていた時臣が、切嗣へと眼差しを向ける。

「僕としては、それで構わないよ。この屋敷で君たちに下手な行動をさせる気はないし、

護衛なら多いに越したことはないからね」

「随分と簡単に信じてくれるのだね。我々が聖杯の器を篡奪するという可能性もあるだろうに」

「そんな可能性ははなから考慮に入れていない。正義のヒーロー気取りの彼らがそんなことをするとは思えないし、遠坂とケイネスに関して、動けない女性に乱暴を働くような真似を容認するような男でもないことは調べがっている」

「ふ、なるほど。大した観察眼だ。流石は悪名高い魔術師殺し、といったところかな……しかし、動けない女性というのは？」

時臣の問いに、切嗣は僅かに目を伏せた。ごく短い逡巡に続いて、口を開く。

「——彼女は既にセイバー、アサシン、バーサーカーの魂を取り込んで、無機物としての器に戻りつつある。今はまだヒトとしての生命活動を保ってはいるが……あと一騎でもサーヴァントが落ちれば、おそらく」

切嗣は続く言葉の口にしようにとはしなかった。けれども、誰もそれ以上の説明を求めることはなかった。

現状、この屋敷には生き残ったすべてのマスターと魔術師殺しが揃っている。屋敷自体も切嗣が仕掛けた無数の罠によってトラップハウスとなっている以上、原状の冬木において、最も安全な場所は間違いなくこの衛宮邸であるように思われた。

昨日まで互いに殺し合っていた人間が、今はみなひとつのテーブルを囲んで、一緒にお茶を飲んでいる。その光景が、戦兎にはどこか心地よく感じられた。その戦兎の思いを汲み取ったかのように、万丈が言った。

「——早く戦争なんて終わらせて、こうしてみんなで笑い合える日が来りやいいのにな」
「なに言ってるんだよ万丈。俺たちはそのために戦ってるんだろ」

「へっ……それもそうだな。とつととルーラーもエボルトもぶつ倒して、こんな戦争も終わらせてよ……今度は凜や桜も一緒に、みんなで上手い飯でも食おうぜ！」

あつけらかんと笑ってみせる万丈の言葉に、みな一様に毒気を抜かれて目を丸めた。少し遅れて、ランサーが磊落に笑う。呆れた様子で、ケイネスも笑った。時臣は、もう慣れたとでも言わんばかりにさも優雅に頬を緩め、茶を啜っている。

戦兎は、切嗣に向き直った。苦笑混じりの微笑みを向ける。切嗣は、まるで戦兎から逃げるように視線を逸らした。

——泣いている女の姿が、脳裏に焼き付いて離れない。

美しい顔はやつれ、葛藤にさいなまれ、女は声を押し殺して涙を流す。

自らの行いを悔いて。

自らの選択を恥じて。

すべての咎を背負わされた女は、永遠に涙に暮れ続ける。

誰もが、彼女を指差し、不貞の妻だと、裏切りの王妃だと罵った。

彼女を娶った理想の王が、そもそも男ですらなかつたことなど知りもしない蒙昧も
が、かの王の華々しい伝説に目をくらまされ、彼女をなじる。

ギネヴィアは、女として生きることすら許されなかつた。

それでも彼女は理想の王を信じ、その王政を支えることを望んだ。ランスロットも同
じだ。ふたりで、アーサー王にどう仕えるべきなのかと日夜語り合つた。

ランスロットは、はじめから王妃を奪おうだなどと考えていたわけではない。ただ、
彼女を救いたかつた。日に日に悩み、やつれていく王妃を気遣ううちに、結果としてそ
ういう結果をもたらしてしまつたのだ。

のちに裏切りの王妃と呼ばれたギネヴィアは、ランスロットと禁断の恋に堕ち、城を
抜けたあとも、アーサー王がいるであろう方角へ向かつて毎日のように謝り続けてい
た。

その思いは、ランスロットも同じだつた。国を、円卓をふたつに割つてしまつたラン
スロットだが、それでも王に対する忠誠は変わらなかつた。

だからこそ、ランスロットはかの王に糾弾してもらはなかつた。

王妃を連れ去つた盗人よと責め立て、その矛先を向けてもらはなかつた。

必ず貴様を捉え、斬首してやると仕掛けてもらいたかった。

だがかの王は、ただの一度たりともランスロットを責めなかった。

円卓を追われたあと、ランスロットと形式上の戦は交えたが、それも他への示しがつかなかったからこそその苦渋の決断であり、王の本意ではなかった。

ランスロットこそは、武勇に優れ、忠節に厚く、諸人のみならず精霊にまで祝福された理想の騎士である。そのランスロットが選んだ選択であれば、そこに間違いなどあるはずがない、と。

決して許されてはならない裏切りを犯した騎士に、かの王は最後まで高潔な友誼で応えようとした。

これでは、かの王を恨むことも、憎むこともできないはしない。

ギネヴィア彼女の流した涙は、無念は、向かう先すら失ったのだ。

かの王の判断を、民は称賛するだろう。

美しい心を持った、清廉にして公正なる無謬の王だと語り継ぐことだろう。だがそれは、ランスロットにとって、おぞましいなにかに見えた。

義に篤く情に流されず、ただの一度も過ちを犯さなかった理想の王だなどと。

これは、そんな美談で済ませていい話ではない。

それこそ、かの王への侮辱だ。断じて認めるわけにはいかない。

——その思いが、ランスロットを狂わせた。

「Aアアア——tthhurツツツ!!」

無毀なる湖光を振り上げたブラッドが、音にも及ぶほどの速度で跳ぶ。狙いはただひとつ、眼前の王の首だ。

セイバーオルタが、正面から地を蹴り突つ込んでくる。魔剣の一撃を振るうが、それよりも早く、ブラッドの頭上をどす黒い闇の魔力が過ぎ去ってゆく。頭をかがめなければ、今頃あの斬撃刃に首が飛ばされていただろう。

一瞬ののち、互いに互いの間合いの内側へと踏み込んだ。

魔剣と堕ちた聖剣がかち合う。同時に、聖剣から放たれた圧倒的な魔力の奔流が、魔剣を弾き返した。一瞬がら空きになった胴体に、再び闇の魔力を漲らせた斬撃が迫る。

「Aアアアアア——ツツ!!」

痺れる腕を無理矢理駆動させて、真紅の魔力光を纏った魔剣で防御の姿勢を取った。

同時に、魔剣をへし折らんばかりの勢いで、強烈な魔力の塊が叩き付けられた。ブラッドひとりだけを焼くだけでは済まなかった余剰魔力が、波濤となって夜空へ放出される。

ブラッドの体が吹き飛んだ。背部のベクターマントですぐに重力を制御しようとする。

ベクターマントで重力を操作し、本来技を放てるはずのない姿勢からそのまま抜刀する。

「……むッ」

さしものセイバーオルタもこれには僅かに眉根を寄せた。けれども、ブラッドの攻撃は当たらない。セイバーオルタの反撃も、ブラッドには当たらない。互いに至近距離に捉えながら、余人にはもはや光の軌跡しか捉えることのできない速度で剣を交差させる。

ブラッドの剣戟に應えるためには、セイバーオルタも毎度聖剣に魔力を漲らせるわけにはいかない。そんな余裕はない。気付けば、周囲には再び激しい剣戟音が響いていた。

両者の間を、月明かりを受けてちらりと光の筋が見える。溢れ出た魔力の煌めきと、鉄と鉄がぶつかり合う火花だけが、空中に無数に咲いていた。今、この剣の筋を見切っているのは、ここにいるふたりだけだ。誰にも邪魔されない決闘が、そこにはあった。

息を呑む剣戟の嵐の只中であって、騎士王の玲瓏な貌かんぼせはなお陰ることを知らない。

かつてあらゆる希望と祈りを一身に背負って剣を摂った王は、いま、ただ目の前の獣を狩るただけに、機械のように剣を振っている。

——その顔を、絶望に歪ませたい。

かつて貴様を輝かせるためだけに費やされた涙を。

貴様のために心を摩耗し、死んでいった者たちの嘆きを。

今こそ、濁流のように押し寄せる恩讐の思いを叩き付けるべく、星の驚異と成り果てた騎士は漆黒の剣を振り抜いた。

ブラッドには見えていた。

度重なる剣戟の末に、セイバーオルタの剣の軌道が。その癖が。

いよいよもって回避不可能な必殺の一撃が、雨のように降り注ぐ騎士王の剣の合間をぬって、その首へと迫る。

「」

寸前。剣が、止まった。

ほんの少しでも力を込めれば、無^ア毀^{ロン}なる湖^ダ光^{イト}の刃が騎士王の白い首筋を寸断するだろう。だけれども、その最後の一撃を振り抜くことが、ランスロットにはできなかつた。

セイバーオルタの聖剣が、ブラッドの首元に触れている。

あと、ほんの少しでも騎士王がその手に力を込めれば、ブラッドの首は容易く飛ぶだろう。

互いの剣が、互いの首へと迫り、しかし——そこから先は、動かない。

——違う。

ブラッドは、全身を痙攣させながら、数歩後退した。頭を抱え、獣のような呻き声を漏らす。

セイバーオルタも、静かに剣を降ろした。そこに、最前までの殺意は感じられない。当然だ。先に殺意を失ったのは、他ならぬランスロットの方なのだから。

——私は、理想の騎士王に裁いてほしかったのだ。

目の前にいる漆黒の少女は、違う。

盟友と信じて背中を預けた円卓の騎士に殺気の刃を向けられて、顔色一つ動かさぬ冷徹なる女王ではない。

すべておまえのせいだと。凜冽なる怒りの矛先を向けてほしかったのは、目の前の墮ちた騎士王ではない。

ブラッドの全身を、赤黒い闇が覆う。

魔剣が、消え去った。次に、ブラッドの装甲が消える。

姿を表したのは、黒い長髪を揺らして、恨めしげに騎士王を睨むひとりの男だった。

「——そうか。貴公が求めた剣は、私ではないのだな」

セイバーオルタの顔を、ふたたび黒のバイザーが覆った。聖剣が、闇の粒子となって消える。もう、戦う理由はどこにもない。湖の騎士に選ばれなかった王は、黒のスカートをふわりと舞い上げて踵を返した。

「それもいいだろう。……死に理由はない。貴様も己が犯した罪とは無縁の戦場で、その生命を終えることもあろう。以降はそういうものとして扱わせてもらう」

ランスロットは、両腕を弛緩させた。全身から力が抜けてゆく。

ぱち、ぱち、ぱち、と。後方から、掌を打ち鳴らす音がきこえてくる。

「我が最強の騎士王、セイバーオルタのデータは十分取れた。性能実験としては上々だ

……ふん、シャドウバーサーカーも、随分と面白い玩具に育ったようだね」

檀黎斗が、さも満足げに手を叩いている。

隣に並び立った仮初のマスターの腕に輝く無数の令呪のうち一画が、真紅の輝きを放つ。

「——令呪を以て我が傀儡に命ず。バーサーカーよ……以降はセイバーオルタと協力し、王城を守る騎士としてその剣を執れ」

宣告に次いで、令呪が燃え尽きるように散った。

先の戦闘中も、綺礼が幾度となく令呪によるエンチャントを行っていたのだろう。燃費の悪さでは他の追隨を許さないランスロットが、ライダーシステムを使った上でここまで戦えた絡繰りの答えが、それだ。

「A……rrrr……っ」

——それならば、それでいい。

この怒りの矛先を向けるべき相手がいるのであれば、今はそれだけで十分だ。混濁する意識の中で、ランスロットはさほど熱心にでもなくそう思った。

ひんやりとした土壁に囲まれた土蔵の片隅に、静かに魔力を脈動させる魔法陣があった。その上に仰向けに横たわるようにして、アイリスフィールは胸元で手を組んでいる。既にヒトとしては死にているに等しいが、魔法陣の上にいれば、まだ幾らかはヒトらしく振る舞える。

採光窓から差し込む微かな月明かりを遮るように、アーチャーの顔が視界に入った。どこか不安げに表情を陰らせて、アイリスフィールの顔を覗き込んでいる。

「……アーチャー？」

「ああ。切嗣の代わりに、今後の方針を報告しようと思つてね」

アーチャーは、アイリスフィールの傍らに座り込んだ。

身を振ろうとするが、上手く行かない。ついさつき、いよいよ本当のアサシンの魂がアイリスフィールの中に格納されたばかりだ。目覚める前よりも、体が重く、自由が効かない。

「無理をするな、アイリスフィール。あなたは動かなくて構わない」

「なら……、お言葉に甘えちゃおっかな」

アイリスフィールは、務めていつもどおりに微笑もうとした。上手く微笑むことができてくるかは疑問だが、少なくとも、アーチャーはくすりと笑んでくれた。

「……明朝、アインツベルンの城を取り返しに行く。おそらく、大きな決戦になるだろう。また、サーヴァントが脱落するかもしれない」

「そう。じゃあ……もうすぐ、なのね」

なにか、とは言わない。

アーチャーはただ、小さく頷いた。

「その間、この屋敷は、マスターと遠坂時臣、そしてロード・エルメロイの三人で護衛につくそうだ」

「あら……ずいぶん、にぎやかになったのね」

「ふ、まったくだ」

くすりと、アイリスフィールは微笑んだ。アーチャーも、笑った。

「少なくとも、明日は切嗣がそばにいてくれる。なにも心配はいらない」

「ええ……心配なんか、してないわ。最後には、切嗣が勝つって、信じてるから」

九年前、初めて切嗣と出会ったときから、アイリスフィールはそう信じていた。

その瞬間から、自分がいずれ聖杯となって消えることも、覚悟している。思いの外、アイリスフィールの心は凧いでいた。

この局面へ来て、切嗣がアイリスフィールの前に姿を表さない理由も、アイリスフィールにはわかつている。覚悟を、鈍らせたくないのだろう。その思いを、アイリスフィールは尊重するつもりでいた。

「……それもまた、困った結果に繋がるのだがね。もつとも、この世界ではどうか知らんが」

アイリスフィールは、アーチャーから聞いた未来を思い出した。

血の繋がらない息子が生きた未来で起こった、惨憺たる悲劇の歴史を。

「でも……きつと、大丈夫。だって……切嗣には、あなたがいるから」

「あまり期待をしてくれるな。ここから先の未来は、私にもわからないのだから」

アイリスフィールは、体を横たえたまま、緩くかぶりを振った。

「どんな未来が来ても……あなたはきつと、正義を貫く。そうでしょう、アーチャー」

「……アイリスフィール」

否定でも肯定でもなく、アーチャーは曖昧に名前を呼ぶ。

切嗣も、アーチャーも、根底にあるものは同じだ。だから、信じられる。たつたひとつの思いを糧に、いざとなれば心を燃やして立ち向かうことができる男たち。そんな親子にこそ、アイリスフィールは未来を託すことができる。

「お願い、アーチャー。いつかそのときがきたら、あなたが切嗣を支えてあげて……も

う、切嗣の隣に立てない、私の代わりに」

アーチャーは、無言のまま、しばしアイリスフィールの顔を覗き込んだ。

アイリスフィールは、ただ静かに微笑むだけだ。やがて、根負けしたように、アーチャーは微かに微笑んだ。

「わかった。約束しよう、アイリスフィール……切嗣は、私が守る」

その言葉を聞いただけで、もう、十分だった。

これから先、アイリスフィールがいなくなつたとしても、切嗣にはアーチャーがいる。誰よりも深く、切嗣を理解してくれる、唯一の息子が。

震える指先を動かして、アーチャーの無骨な指を探し当てる。ほとんど力の入らなくなつた指で、それでも精一杯、アーチャーの手を握つた。

「——ありがとう、アーチャー」

もう、目を開けているのも億劫になりつつあつた。聴覚も、随分と鈍っているよう感じられる。

アーチャーがなにごとかを言つた気がしたが、アイリスフィールにはもうわからな
い。だが、別段哀しいとも思わなかつた。ともに過ごした時間は短くとも、アイリス
フィールにとつての自慢の息子が、こんなときにどんな反応を示すのかなど、容易に想
像がつく。

アイリスフィールは微かに吐息を吐き出して、緩く微笑んだ。

徐々に東の空が白み始めた。鬱蒼と茂る森林に、少しずつ陽の光が差し込む。

朝の訪れを知らせる小鳥たちのさえずりに混じって、ザツ、ザツ、と。乾いた土を踏みしめる足音が鳴り響く。

ひとときわ高いものみの大樹のその枝に、乱雑に脚を投げ出して仰臥していたブラッドスタークは、常人では踏み入ることすらできない魔術師の領域に踏み込んでくる勇者たちの存在を認めた。

先頭を歩く桐生戦兎の腰には、既にビルドドライバーが巻かれている。

すぐ隣を歩く万丈龍我も同様にベルトを巻いて、掌に拳を打ち合わせている。

その背後に、すう、と静かに光が降り積もった。白銀の髪を靡かせて、純白の衣を纏ったランサーが、悠然と笑みを浮かべて歩を進める。

少し遅れて、硬いブーツが土を踏みしめる音が重なる。腰に黄金の剣を提げた黒衣のサーヴァントが、その少女のような瞳でまっすぐ前を見つめ、三人と肩を並べる。

五人目は、少し控えめに距離を取って、その真紅の外套を外気に晒した。白髪の弓兵の鷹の目が、誰よりも早く木の上に寝転がったブラッドスタークを見咎めた。

「チャオ、待ちくたびれたぜ」

木から飛び降りたブラッドスタークは、危なげなく着地すると、先頭を行く戦兔に向かって手を掲げた。拳を交差させるくらいのコミュニケーションを期待してのことだったが、戦兔はそれを無視して進む。

誰も、スタークに視線すら寄越してはくれない。会話をする気がないという意味がありと透けて見える。

「……あいかわらずつれないねえ。ま、いいけどよ」

ひとり自嘲しながら、六人目の戦士が戦兔らの行軍に参加した。

目前には、今はもう「檀」と描かれた黄金の幕を垂らされた白亜の城が見える。

これを、檀黎斗との最後の戦いにする。この場にいる全員の心は、その一点においてのみ一致していた。

第33話「終わりのクロニクル」

開け放たれた窓の向こうから、朝のひんやりした風が城内へと入り込んでくる。綺礼は目を細めて、朝の日差しに照らされた森林地帯を見下ろした。もうすぐ、アインツベルンの森を抜けて、敵が攻め込んでくる。この城は戦場になる。

表情をびくりとも動かさぬまま、綺礼は視線を下げた。手のひらの中には、一本のフルボトルが握られている。今朝、教会の地下室のテーブルに置き去りにされていたものだ。誰が置いていったのかは、考えるまでもない。

綺礼は深く瞑目し、肺にわだかまった空気をふうと吐き出する、静かに振り返った。

「ルーラー、この場所が戦場になる前に、おまえにひとつ問いたい」

檀黎斗は、ソファに腰掛けたまま視線だけを綺礼へと寄越した。

「それは、私を神と知った上での質問か」

「そうだ。この世界の創造神たるおまえに、この世界の人間として問いたい」

「いいだろう。今更隠し事をする必要もない。神への質問を許可してやる」

黎斗はさも上機嫌そうに鷹揚と頷いた。

「おまえが真なる創造神であるならば、この世界を望み通りに創り変えることもできた

はずだ。それでもなお、私という悪性を是としたその真意を問いたい。聖杯戦争を破綻させる癌でしかないこの私を」

「なんということはない。確かに君は聖杯戦争から見ればウイルスといつても過言ではない存在だ。悪性データと言いつてもいい。だが、だからこそ私は君に『ジョーカー』としての役割を期待したのさ」

「ジョーカー？」

「ああ。君もスタークも、私にとつては面白い駒だった。それだけの話さ」

「なるほど。私が懐いた葛藤も、父の死も、すべてはおまえのゲームを盛り上げるためのスパイスでしかなかった、と」

「否定はしない。その結果として、君は恩師を出し抜き、セイバーダークキバにも匹敵するサーヴァントを従えるに至った。これは、正史ではあり得なかった活躍ぶりだ。これから君がどう動くのか、私はその行末を見届けたいとすら思い始めている」

「そうか。それは恐れ入る」

なにも面白くはないが、綺礼は小さく笑った。

なるほど、この世界にも神は実在したのかもしれない。だが、それは幼き日の綺礼が思い描いた神などでは断じてなかった。

世界の外側からサイコロを振って、盤上の駒を動かそうとしている人間がいる。綺礼

は駒だった。璃正も、時臣も、すべて眼の前の男の駒でしかなかった。それだけの話だ。ふいに、城内の警報がけたたましく鳴り響いた。鐘の音でもサイレンでもない、電子的なアラート音だ。いよいよ敵が間近まで迫っていることを示している。

「——いいだろう。駒は駒らしく、己の仕事に専念するでしょう」

「期待しているよ、言峰綺礼」

心の通わぬ笑みを交わし合い、綺礼は部屋を出た。

黎斗が綺礼になにを期待しているのか、あえて問う気にはならなかった。

長い森林の迷宮を抜けて開けた場所に出ると、今度は白と黒の装甲を身に纏った仮面ライダーの群れが待ち受けていた。地面に生じた闇から、意思を持たないゲンムの群れが次から次へと湧き出てひしめき合い、アインツベルンの庭園を隙間なく埋めていく。

軍勢の先頭に立って戦兎らの進軍を出迎えたのは、言峰綺礼だった。およそ感情を感じさせることのない瞳にただ殺意だけを込めて、綺礼は戦兎らを睨め付ける。

「おまえ……言峰綺礼か」

「いかにも。対面するのはこれで二度目になるな、桐生戦兎」

戦兎がはじめて綺礼を見たのは、あのスターク討伐宣言の夜だった。ただ言われるままにアサシンを自害させた無気力な姿と比べると、目の前にいる男が放つ殺気はあまり

にも鋭く研ぎ澄まされている。

その殺意の視線が、今度はキャスターへと向けられた。

「そしてキャスターも。私が懐いた導師への殺意を見抜き、事前に駒を動かしたその差配、見事だった。称賛に値する。叶うならば、いつたいどのような策を用いたのかご教示願いたいところだが」

「残念だが、貴様に答えてやる義理はないな」

にべもない返答と同時に、キャスターの周囲に八卦炉型のビットが展開される。いつでも砲撃できるように、ビットには既に魔力が充填されている。

綺礼はちらりとスタークへと視線を送った。スタークは友達に挨拶でもするようなフランクさで「チャオ」と手を振るだけだったが、その肩にはライフルが担がれている。いつでも戦闘態勢に入れる状態であることは明白だった。

綺礼の背後にわだかまるゲムムの群れも、戦兔の後ろで構える万丈やランサー、アーチャーも、互いに今にも飛びかからん勢いで殺気を発奮させている。それを食い止めているのが、先頭に立つ戦兔と綺礼だった。この場の全員が、号令の瞬間を待ち望んでいる。

「つたく、この空気……どうやら互いに引き下がるわけにはいかねえようだな」

「そのようだな」

戦兎がビルドドライバーを構えると同時に、綺礼もまた両腕を交差させ、懐から黒鍵を取り出した。

腹部にビルドドライバーを精製しながら隣に並び立った万丈は、隠すことのない敵意を真正面から綺礼にぶつけて睨めつけた。

「おい、シャドウ野郎はどこだ」

「心配せずとも、戦闘がはじまればじき姿を表すさ」

「へッ、そうかよ………だったら、とつとと昨日の借りを返させてもらうぜ！」

戦兎の腰にあてがわれたビルドドライバーの帯が、ひとりでに戦兎の腰に取り付いた。ラビットタンクスパークリングを取り出し、そのプルタブを起こす。万丈も、マグマナツクルにボトルを装填して、構えを取った。

「——行くぞ、万丈」

「おうッ！」

示し合わせたように、二人は同時に互いの変身アイテムをベルトへと叩き込んだ。

二人の声が戦場に響く。

「変身ッ！」「変身ッ！」

赤、青、白、三色のビルドと、マグマの鎧を身にまとったクローズが戦場に並び立った。それが開戦の合図だった。

変身完了するや否や、黒鍵を携えた綺礼が斬り掛かってくる。フルボトルバスターで受け止めながら、戦兎はビルドの装甲を通じて、綺礼の膂力に内心で舌を巻く。

「こいつ、なんツて重さだ……！」

それでも両手で構えたフルボトルバスターをぶんと振り抜き、綺礼を弾き返す。入れ替わりに、彼方から弾丸のような速度で赤と黒の仮面ライダーが飛来した。シャドウバーサーカー、仮面ライダーブラッドだ。

「ツらあアア！」

力任せに振り下ろされたブラッドの剣を、クローズマグマは燃え盛る溶岩で造った龍の手甲で受け止める。魔力の突風が、溶岩の熱を孕んで周囲に吹き付ける。すぐに龍の手甲に亀裂が入った。

「ッ!!」

そのまま剣を振り抜く。クローズの手甲が砕かれ、燃える溶岩の装甲に強烈な太刀の一撃が叩き込まれた。マグマを噴出しながら吹っ飛んでゆくクローズに、ビルドは振り返り叫んだ。

「ッ、万丈オーソーッ！」

歴然たる戦力差だった。クローズは庭園の木に背を打ち付け、しかし崩折れることなく二本の足で大地を踏みしめ、その龍の仮面をビルドへと向ける。

「戦兔オ、ここは俺に任せて先にいけ！ 最初っからそーいう約束だったろー！」

「万丈……おまえッ」

「大丈夫だ、俺は負けねエ……ここで野郎をブツ潰すッ!!」

再び飛び込んできたブラッドに対し、燃え盛る炎の剣を精製したクローズが応戦する。派手な金属音とともに、熱を帯びた魔力の衝撃波が周囲の木々や草花を焼き払う。

「……つたく、しよーがねえな。ここは任せたぞ、万丈」

ビルドはもう、振り返ることをやめた。目前には、殺到するゲーム軍団が見える。その数は目算でも百を越えていることは明白だった。一人で相手取るには少々骨が折れる数だ。それでもフルボトルバスターを構え直し、駆け出そうとしたところで、空中に浮かぶ無数のビットから放たれるレーザーがゲーム軍団を迎撃した。

「無限に湧き続ける敵をまともに相手取る必要はない。消耗戦に持ち込まれれば、こちらが不利になる。ここは段取り通りに行くぞ、マスター」

キヤスターが言うが早いか、空に暗雲が立ち込め始めた。雲の隙間から、巨石が降り注ぐ。諸葛孔明の宝具、石兵八陣だ。

降り注いだ大量の石が、ゲームの軍団を分断するように壁を造ってゆく。アインツベルンの庭園は、瞬く間に巨石の壁で隔たれた迷路となった。けれども、ビルドの眼の前に広がる一本道だけは、まっすぐにアインツベルンの城へと続いている。

綺礼も、クロースも、既に壁の向こうにいる。魔力的な認識障害がかかっているのか、壁の向こうの声や音は一切聞こえない。

城へと続く一本道に再び視線を向けると、狭い道を、増殖を続けるゲンムが埋め尽くしていた。

「うっわ、ここ抜けなきゃなんないの？ 普通にダルいな……！」

「あつははは！ ご安心を。この程度の雑兵、どうということはありませんよ」

ビルドの傍らに金の粒子が降り注ぐ。降り積もった粒子は槍を構えた銀髪の武将をかたちどった。霊体化を解除したランサーは、いつも通りの満面の笑みに明確な殺意を滾らせて、目のゲンム軍団を睨めつける。

「約束の通り、有象無象はこの長尾景虎が引き受けましょう！」

「おまえ、いつの間に霊体化を……ってはやっ！」

ランサーは戦兎らの返答など求めてはいなかった。戦兎が言い終えるよりも早く、ランサーは銀の風となってゲンム軍団へと正面から突っ込んでいた。

目にも留まらぬ速度で一体目のゲンムの胸部装甲を袈裟懸けに切り裂いたランサーは、そのゲンムが地面に倒れるまでの一瞬の間にひらりと身を翻し、二体目、三体目のゲンムを一撃で薙ぎ払う。

十秒とかからずに、ゲンムの群れに隙間が出来た。ゲンムの増殖よりも、ランサーに

よる撃破数の方が圧倒的に上回っている証拠だった。

「城までの道は私がつくりませす！ そなたらは大将首をツ！」

「言われなくともそのつもりだつての！」

「感謝するぞ、ランサー！」

鬼神のような勢いでゲムをなぎ倒してゆくランサーを後目に、戦兎とキャスターは開けたばかりの道を走り抜けてゆく。もはや、二人の後を追おうとするゲムはいない。誰一人として、ランサーから意識を逸らす余裕が与えられなかったからだ。

みすみす戦兎とキャスターを見逃したとて、綺礼にはさして狼狽する様子も見られなかった。二人の動向には特に関心を払うこともなく、綺礼は周囲を取り囲んだ石の壁を見渡している。

ライフルを担いだスタークもまた、さして周囲に興味を示すことなく、石の壁にもたれ掛かって、空にかかった暗雲を眺めていた。

「おいおい、いいのか綺礼。あいつら城に進むつもりだぞオ」

「万事問題はない。私はやつらを、敢えて見逃したのだから」

「敢えて見逃したア？ ハンツ、相変わらず趣味が悪いねエ！」

綺礼は微かに笑っていた。なぜ笑うのかなど、考えるまでもない。ここで足止めする

よりも、進んだほうが地獄だと分かっているからだ。

声を弾ませてライフルを構えたスタークは、すかさず光弾を発射する。それらが着弾するよりも早く、両手の黒鍵を巨大化させた綺礼は、放たれた光弾を叩き落とした。

爆風が巻き起こる。視界を埋める爆煙を引き裂いて、人間離れた速度で綺礼はスタークの間合いへと飛び込んで来た。

「おっとオー！」

トランスチームライフルを両手で盾代わりにし、振り下ろされた黒鍵の一撃を受け止める。両手が塞がっているスタークには、次の一撃に対応するすべがない。けれども、スタークはそれを理解してなお、余裕の態度を崩すことはなかった。

綺礼が次の一手に移るよりも先に、気配なく背後に飛び込んだアーチャーが、横薙ぎに剣を振り払った。

「——ッ!!」

間違いなく、綺礼の首を狙った軌道だった。常人離れた反射速度で身を屈めた綺礼は、最低限の動作でアーチャーの一撃を回避すると、振り返りざまに黒鍵を投げ飛ばした。

アーチャーの双剣が閃いた。キーン、と金属音が石壁の迷路に反響する。黒鍵が地面に落ちるよりも遙かに早く、綺礼は次の黒鍵を精製し、アーチャーの間合いの内側へと

飛び込んでいた。

「ッ」

令呪によって得られる魔力で爆発的な加速を得た綺礼の連撃と、人間を超えた歴戦の英霊たるアーチャーの双剣が乱舞し、空中に無数の火花を散らす。互いに一步も引く様子はない。

「俺を忘れるなよ、綺礼」

スタークのライフルから放たれた光弾が、煙幕をたなびかせて綺礼へと向かう。弾丸が綺礼の間合いに入ると同時、アーチャーの攻撃を弾き返した勢いで飛び退いた綺礼だったが、スタークの弾丸は綺礼を追尾して空中を走る。

追いつがる弾丸を叩き落とし、その爆発で生じた衝撃を利用して、綺礼は大きく飛び退って、いったんふたりから距離を取った。

「……ふたりがかりか。私も随分と過大評価をされたものだ」

「卑怯だなどと言ってくれるなよ、神父。ここで確実におまえを始末させてもらおう」

「ふ、それが衛宮切嗣の意思か？ 私も嫌われたものだな」

「ああああ、心中お察しするよオ、綺礼」

嘲笑と同時に銃声が響く。スタークが弾丸を放った。

「おまえに同情される謂れはない」

「はっ、こいつは嫌われたモンだ！」

皮肉とともに放たれた弾丸を叩き落とし、綺礼は再び跳んだ。スタークはライフルを剣と銃に分割し、飛び込んできた綺礼の黒鍵をスチームブレードで受け止める。ほぼ同時に脇の下で構えたトランスチームガンの引き金を引く。光弾が至近距離で炸裂し、綺礼は吹き飛んだ。

空中にいる綺礼へと飛びかかったアーチャーが上段から双剣を振り下ろすが、綺礼もさるもの。空中で軌道修正すらできない状況ながらも、アーチャーの双剣を黒鍵でいなし、しかしその衝撃はしつかりと受け止め、あえて地面に叩き落された綺礼は、ごろごろと転がってアーチャーの間合いから抜け出した。

起き上がった綺礼の腹部の布は、焼け焦げていた。けれども、スタークの光弾は貫通してはいなかった。ケブラー繊維と教会特性の防護呪符によって裏打ちされた僧衣を貫通させるには、些か威力が足りていない。

綺礼は、無表情のまま黒鍵を構え直した。

喜びも悲しみもなく、ただ迷いのない殺意だけを漲らせたその瞳を見て、スタークはくつくつと喉を鳴らした。

「——ああ、なんてツラして戦いに挑んでやがるんだ、おまえは」

はじめて会ったときと比べて、明らかに綺礼の悪辣さは悪化している。

ほんの数日前は自分の在り方にすら迷う求道者だった男が。きつと、今の綺礼こそ、本来あるべき姿なのだろう。

やはり、ここで落とすのは惜しい。そういう思いが、スタークの心の奥底からふつつと湧き上がってくる。これからも綺礼のそばで、歪み始めたその道行きを眺めていた。その欲望の行き着く先を、この目で見届けたい。

込み上げる欲望を堪えながら、スタークはトランスチームガンの引き金を引いた。三者による戦闘が、ふたたび幕を開けた。

城の正門を抜けてエントランスホールへとたどり着いたところで、ビルドの足は止まった。窓から降り注ぐ陽光と、戦兎らの頭上で煌々と輝くシャンデリアが、真紅の絨毯を明るく照らしている。

その絨毯の真ん中にぼつんと黒い剣が突き立てられていた。

漆黒のドレスを身に纏った華奢な少女が、剣の柄に両手を乗せて佇立している。

その異様さに、戦兎はすぐに気付いた。空気が、ひりついている。息を呑むほどの威圧感が、おのずと体を重くする。発生源が、この空間の中心に立つ少女であることは明白だった。

「マスタ―」

「……どうした、キャスター」

キャスターの声が、ほんの少しだけ、上ずっているように感じられた。

眼鏡越しのキャスターの瞳は、眼前の黒の少女を食い入るようにつめたまま離さない。明らかな脂汗が、キャスターの額に浮かび始めている。戦兔はすべてを察した。

「そうか、あいつが」

「——騎士王です」

戦兔の言葉を引き継ぐように、ネロの声が響いた。金の粒子がひとつのかたちをつくり、アルターエゴの霊体化を解除させる。

黄金の剣を掲げた黒衣のサーヴァントが姿を表すと、騎士王がぴくりと反応を示した。それから、ゆっくりと黒の聖剣を持ち上げ、その切っ先をビルドらへと向ける。

「貴公らに恨みはない。ただ、この城に踏み込んだ不幸を呪うがいい」

それが、宣戦布告だった。

セイバーオルタ
騎士王が跳躍する。すかさず黄金の魔皇剣を構えたネロが、黒の聖剣の一撃を受け止める。

黒のバイザーを至近距離から睨めつけるネロの顔を、ステンドグラスが覆った。魔皇力の波紋を周囲へ波打たせながら、ネロの姿は瞬く間に黄金のキバの鎧に覆われた。

「ハアッ！」

キバエンペラーの魔皇剣に、黄金の魔力が漲った。同時に、セイバーオルタの聖剣に赤黒い魔力が迸る。互いの魔力がぶつかりあい、もみ合い、一秒後には凄まじい衝撃波となつてエントランスホールを震撼させた。

パリン、と音を立てて天井のシャンデリアとありとあらゆる窓ガラスが粉々に粉砕される。すかさず障壁を張ってくれたキャスターのおかげで、ビルドに傷はない。もともと黄金の鎧をまといつているキバエンペラーも無傷だ。けれども、セイバーオルタの絹のドレスはこの一瞬でずたずたに引き裂かれていた。

「——ッ、ばかな」

最初に声を上げたのは、キャスターだった。

セイバーオルタのドレスが、瞬時に修復されてゆく。頬についたかすり傷もすぐにかき消えて、もとのなめらかな肌の質感を取り戻す。なによりも異質だったのは、魔力の充填速度だった。

キバエンペラーが再び魔皇剣に魔力を充填するよりも先に、既にセイバーオルタの黒聖剣には第二撃を放つたための魔力が装填されていた。魔力の供給が、あまりにも早すぎる。

「く……っ！」

「卑王鉄槌——ッ！」

ほんの一瞬で、キバエンペラーの放つファイナルザンバット斬にも匹敵する魔力を充填しきった黒聖剣が、輝きを失った魔皇剣をかち上げた。同時に炸裂した赤黒い魔力光が、至近距離からキバエンペラーを飲み込む。

暴力的な魔力の奔流は、構わずセイバーオルタをも飲み込み、顔面を覆うバイザーを吹き飛ばした。けれども、その自傷ダメージすらも、一秒とかわからず回復し、元通りのバイザーを再生成する。

「なんだ、アレ……！」

「魔力充填が早すぎる！ まさか……ッ」

キバエンペラーを黒聖剣の宝具の一撃で吹き飛ばしたセイバーオルタのバイザーは、ビルドへと向けられた。ターゲットが切り替わった瞬間だった。

フルボトルバスターを構えるビルドの肩を、キヤスターが掴む。

「待てマスター！ あのセイバーはおそらく、大聖杯から直接魔力供給を受けている。まともにやり合えば勝ち目はないぞ……！」

「はア!? ンだよソレ、無限湧きするゲンムよりタチ悪くない!?」

既に無傷となったセイバーオルタが、弾丸すら止まって見えるほどの速度で飛び込んでくる。ビルドの反応速度を遥かに超えて懐に飛び込んだセイバーオルタが、ビルドの装甲に聖剣の一撃を叩き込んだ。

「ッ!？」

刹那、炸裂。

ゼロ秒で充填された膨大な魔力の塊が、ビルドの装甲表面で炸裂する。黒の輝きは、ビルドを呑み込むだけに飽き足らず、遙か後方の柱と壁を大きく穿ち、消滅させた。

もうもうと立ち込める煙の中を、セイバーオルタだけがゆうゆうと歩く。

「――」

無言のまま、セイバーオルタは再び剣を構えた。

爆煙を引き裂いて、真紅の魔皇力の斬撃が飛来する。避けようともせず、セイバーオルタはファイナルザンバット斬の輝きを真正面から斬り裂き、打ち破った。

巨大な翼が爆煙を吹き飛ばす。黄金の翼竜と化したキバエンペラーが高速で地表を滑空し、翼の刃をセイバーオルタへと打ち付ける。きいん、と音を響かせて、聖剣で弾き返すと、翼竜は空中で身を振ってもとのヒト型へと戻った。

再び真紅と黄金の魔力をザンバットソードの刀身に滾らせて、キバエンペラーはセイバーオルタと剣を打ち合わせ、叫んだ。

「マスターッ! 聞こえているなら、どうか先へ進んでください……! ルーラーさえ倒せば、この戦いは終わる!」

セイバーオルタは即座に聖剣に魔力を充填し、再びゼロ距離で宝具を放つ。しかし、

今度はキバエンペラーも刀身に滾らせた魔力を放出することで相殺を測った。互いの魔力が反応し合い、再び大爆発を起こす。地べたがめくれ上がり、壁が崩れ去る。轟音を響かせ、城が揺れる。

再び視界を爆煙が覆い尽くす中、戦兎は顔を煤だらけにしながら起き上がった。セイバーオルタの一撃で変身は強制解除させられたが、キャスターが防御力にバフをかけるスキルを発動してくれていたお陰で、最悪の事態だけは避けられた。

「はぁ……はぁ……」

胸元の衣服が大きく切り裂かれ、そこから血がにじみ出ている。ビルドの装甲とキャスターのスキルのたまもので、骨までは達していないが、それでもそれなりの苦痛だった。

ベルトから、過度なダメージに耐えられず火花を吹き出しているスパークリングボトルを引き抜き、足元に投げ捨てる。ボトルが内包していた成分が内側で暴走し、スパークリングボトルだったものは粉々に砕け散った。

ふらつく体を、キャスターが支える。

「大丈夫か、マスター」

「……行くぞ、キャスター。俺たちは先に進む」

セイバーオルタと剣をぶつけ合うキバエンペラーを後目に、戦兎は苦渋の決断を下し

た。

シャドウバーサーカーを万丈ひとりに任せるとも、セイバーオルタをネロひとりに任せることも、戦兔の本意ではない。けれども、誰かがそれをやる必要がある。

戦兔には、戦兔にしかなできないことがある。

「ゲンムに対して、もつとも相性がいいのは俺のビルドだ。俺が、この戦いを終わらせる」

もうもうと立ち込める煙の中を、戦兔は進む。

戦兔に勝利の希望を託し、今もなお強大な敵と剣をぶつけ合う仲間たちを思うと、胸の傷などなんでもなないように思われた。この程度の傷は、立ち止まる理由にはならない。

「付き合おう、マスター」

胸の傷の痛みが、僅かに軽くなった。キャスターが得意とする生体調整の魔術で、傷口の止血が行われたためだ。

上階へと続く階段を登りながら、戦兔は手の甲に刻まれた令呪を輝かせる。煌々ときらめく魔力の光が、煙に覆われた視界を赤く照らす。ちらと振り返ったとき、セイバーオルタと剣を切り結びながら、キバエンペラーは小さく頷いた。

「ネロ……俺がゲンムを倒すまで、絶対に倒れるんじゃないぞ。魔力なら、好きだけ」

れてやる……!」

一緒に戦うと約束した仲間にも、マスターとしてしてやれることはあまりにも少ない。それでも、これで少しでもキバエンペラーが本来の力を発揮できるなら、残り二画しかない令呪の片方を費やすことに、なんの躊躇いも感じない。

セイバーオルタはすぐに戦兔の行動に気が付き、キバエンペラーの魔皇剣を弾き上げて、己の聖剣に闇の魔力を充填させた。だが、赤黒く輝く宝具の輝きが解き放たれることはなかった。

「——ッ」

眩い真紅の輝きを纏った魔皇剣が、上段から振り下ろされる。一撃に込められた魔力の総量でいえば、最前までのそれとは段違いであることは明白だった。

セイバーオルタは戦兔への攻撃を即座に中断し、振り下ろされた魔皇剣の一撃に備えた。再び互いの魔力が激突し、衝撃と閃光があたりを覆った。

城の最奥に位置する玉座の間に、鼻歌が響く。

玉座に深く腰掛けた檀黎斗が眺めているのは、空中に浮かんだホログラムのモニターだった。迷路と化した戦場で戦う面々の映像や、エントランスホールで戦うふたりのサーヴァントのリアルタイム映像が同時に映し出されている。

手元のテーブルに置かれたノートパソコンには、緑色のガシヤットを接続した機器がケーブルで繋がれていた。パソコンの画面には、ガシヤット完成までの進捗率を示すゲージが表示されている。もうすぐ百パーセントに達しようとしていた。

「どこまでも愚かな連中だ。なんの策もなしに殴り込んで、最強のラスボスであるこの私に勝てると本気で思っているのだから」

得意げにほくそ笑んで、膝の上で組んでいた足を組み替える。

そのとき、部屋の扉が開け放たれた。廊下の向こうから不躰に飛び込んできたのは、他ならぬ桐生戦兎と英霊キャスターのふたりだった。眦を決して黎斗を睨めつけるふたりを、黎斗は嘲笑を浮かべたまま冷徹な目で見下した。

「ようやく来たか。待っていたよ、桐生戦兎」

軽く手をかざして、空中に浮かぶホログラムモニターを消す。

手すりに両腕を乗せて、重い腰を上げた檀黎斗の腹部には、既にゲームマドライバーが装着されていた。両の手のひらには、白と黒のガシヤットがそれぞれ握りしめられている。

「ルーラー……檀黎斗。悪いがここで決着をつけさせてもらう」

『MAX HAZARD ON!!』

戦兎は懐から取り出したハザードトリガーのスイッチを押し込み、腹部のビルドドラ

イバーへと差し込んだ。

以前ゲナムを敗北へと追いやったスパークリングボトルが、既にセイバーオルタによる一撃で粉碎されていることを、黎斗は知っている。

「今更そんな暴走スイッチに頼るとは……ふふん、ラスボスを前に万策尽きて血迷ったか？ 桐生戦兎」

「……俺をここにたどり着かせるために、今も戦ってるバカなやつらがいる。自分よりも強いつてわかりきってるのに、それでも真正面から挑んでいく、どうしようもないバカたちが」

戦兎は、笑った。けれども、その笑みが自棄になった笑みのようには、黎斗には見えなかった。

「救いようがないな……そのバカどものために、暴走のリスクを犯してでも私を倒すか？」

「違う。ハザードトリガーは暴走装置なんかじゃない。おまえを倒して、みんなであのラボに帰る……！ これは、その明日をビルドするための力だ！」

次に戦兎が取り出したのは、これまで黎斗が見てきたどのボトルとも形状の異なる、棒状のボトルだった。それを軽く降って、真ん中で折りたたむ。縦長だった一本のボトルが分割され、二本分のボトルへと変形する。それを、ビルドドライバーへと叩き込ん

だ。

『RABBIT and RABBIT!』

兎をかたどった真紅の紋章がふたつ、ベルトの前面に投影される。

黒鉄色の鑄型が、戦兎を前後から挟み込むかたちで姿を表した。

『Are You Ready?』

「変身ッ!」

戦兎は決然と構えを取り、ベルトのレバーを回転させた。

どこからかやってきた赤いウサギ型のロボットが、その体をバラバラに分割し、暴走形態であるはずの黒のビルドの表面に装甲として取り付いた。

『オーバーフロー!』

『紅のスピーディジャンパー!』

『ラビット・ラビット!』

『ヤベェイ! ハエェイ!』

メタリックレッドにきらめく装甲をその身にまとい、仮面ライダービルドは、未だかつて黎斗が見たことのない形態への強化変身を果たした。

仮面ライダーダークキバにすら追いつがったオーバーフローを最初から起動して変身するその形態が、従来のビルドとは一線を画すスペックであることは、黎斗にもわか

る。

「おもしろい……！　ンならばその力ア、ラスボスであるこの私が試してやろうッ！」
 黎斗もまたガシャットのボタンを押し込み、それをベルトへと装填した。

「グレードエックスゼロ……変身ッ！」

眼前に現れたゾンビのホログラムウインドウを突き破ったとき、檀黎斗の姿は白と黒の仮面ライダーへと変わっていた。

庭園で無限に湧き続ける量産型のゲンムとは違う、本物のグレードエックスゼロだ。
 ゲンムは、ラビットトラビットとなったビルドと、互いに間合いを計り合う。

互いが互いに絶好の間合いを見出した一瞬の刹那、ふたりの仮面ライダーの刃が激突した。

迷路と化した庭園の一角に、開けた場所があった。

ほんの数分前までは美しく手入れの行き届いた緑の庭園だったその場所は、既に一面が火の海と化している。木々は燃え、地面は抉られ、無骨な土色を呈している。

英霊がぶつかり合うにはあまりにも狭い空間の中を、燃え盛る龍が駆ける。八匹の溶岩龍が、たったひとりだけの獲物を喰らわんと、その顎門を開けて襲いかかる。

「ッ!!」

??????????

力任せに振るわれた漆黒の聖剣が、最初の一匹目の頭を叩き潰し、溶岩を爆裂させる。飛びかかる溶岩すら意に介さず、仮面ライダーブラッドは二撃目の聖剣を振り払った。放たれた衝撃波が、二匹目の溶岩流を真つ二つに引き裂き、またも爆裂させる。

「うおおおおおらあああああッ!!」

今度は、龍とともに燃える炎の仮面ライダーが破竹の速度で飛び込んできた。背中のスラスタからマグマのジェットを噴射させ、燃え盛る炎を振り上げて間合いに飛び込んでくる。

ブラッドは、血のような赤の葉脈で覆われた黒の聖剣を振るい、最低限の動作でクローズの剣を弾き返し、閃いた刀身でクローズのマグマの装甲を斬り裂いた。同時に表面のマグマが爆発し、ブラッドの一撃による威力を減衰させる。

「——ッ!!」

だが、ブラッドには——ランスロットには見えていた。

爆発の合間を縫って、的確にクローズを殺すための剣の軌跡が。

マグマの炸裂によって再び間合いを取られる前に、目にも留まらぬ速度で二度三度とクローズの装甲に剣の攻撃を叩き込む。クローズの装甲表面に刻まれた真紅のキズが、光を放った。

刹那、装甲に刻んだキズを起点に、爆発的な魔力が膨れ上がった。ゼロ距離で聖剣の

魔力を解き放つ、ランスロットの必殺宝具——縛鎖アロンダイト全断・過重湖光オーバーロードだ。

クローズの装甲を中心に、周囲の巨石を跡形もなく消滅させるほどの魔力の輝きが爆裂した。

「う、おおおあああああ——ッ?！」

一瞬の絶叫。常人ならば生きていられるはずもない魔力爆発。

しかし、ランスロットは勝利を確信して剣を収めるような愚は犯さない。

爆煙が晴れたとき、火の海と化したクレーターの中心に、クローズマグマはいた。無様にも地べたに這いつくばって、それでもクローズは地面を殴りつけて立ち上がった。最前まで振るっていたビートクローザーは既に消し飛んでいる。

「……」

無言のまま歩み寄ったブラッドの剣が、再び閃いた。

赤黒い魔力の輝きを内包した剣の一闪が、クローズの鎧を斬り裂き、炸裂する。地面を浅くえぐりながら吹き飛んだクローズは、背中を巨石に打ち付けて止まる。脆くなっていた石が崩れ去り、クローズに重くのしかかる。

ここにいたるまで、既に何度となくクローズには致命傷ともなりえる一撃を叩き込んでいる。まともな兵士ならば立ち上がれるはずのない一撃を、何度も、何度も。

だが、それでも——。

「う、おお……おおおおッ！」

クローズは、立ち上がった。

のしかかる瓦礫を払い除けて、燃え盛る炎の男は立ち上がった。

既に武器もなく、体力も限界を越えているはずの男の闘志は、一秒前よりも確実に膨れ上がっている。ランスロットは、そこに燃え盛る太陽を幻視した。

「俺はもう、負けらんねェんだよ……！　ここで折れたら……今、この瞬間！　死ぬ気で戦ってるバカ野郎どもに、顔向けができねエツ！」

ふらつく足取りで前進し、周囲の炎を集め、溶岩龍の手甲を形作る。

ブラッドの動きが、止まった。混濁する意識の中で、ランスロットの脳裏をよぎったのは、かつてともに戦った太陽の騎士の姿だった。

「ッ!？」

「おおおおおおおおッ!!」

ブラッドの絶叫すら掻き消す裂帛の叫びを響かせて、燃える炎の男は駆け出した。

真正面から飛び込んできたクローズの腕を、聖剣の一撃で叩き落とし、逆にすくい上げるような軌道を描いて、魔力迸る聖剣をクローズの装甲表面に叩きつけた。再び、炸裂する。

吹き飛んだクローズは、巨石に激突し、崩折れた。

だけれども、それでもなお、立ち上がる。何度打ち据えても、何度叩き伏せても、何度でも、何度でも、クローズは立ち上がる。

この戦いは、まだ終わらない。そう簡単に終わらせることができる戦いではない。それを、ランスロットは妙に冴え始めた頭で思考する。

思考とは裏腹に、ランスロットの体は、徐々に重くなりはじめていた。

ビルドとゲンムの剣が激突するたび、幾重にも火花が舞っては落ちる。その繰り返しの中で、ふたりの仮面が肉薄する。

ゲンムの仮面の下で、黎斗は嗤った。

「愚かな男だ、貴様は仲間たちの力でここにたどり着けたと本気で思っているウー！」
「なに……！」

「貴様らが戦力を分散して攻め込んでくることをオ、こオの私が計算していないとでも思ったか、バカめエツ！」

「……っ！」

フルボトルバスターを振り上げて、ゲンムの大剣をかち上げる。

すかさず、キャスターが展開したビットからの支援砲撃がゲンムを襲った。

ゲンムは、放たれたレーザーを剣で打ち払いながら、地べたを転がって距離をとった。

「貴様は身をもって知るだろう……既に終わりのクロニクルは始まっていることを！」

「おまえ、なにが言いたい」

「既に貴様の仲間たちのもとには、最強のラスボスを完成させるための最後のピースが放たれているウー！ それを知りもせずこんなところまでノコノコとオ……だから貴様は愚かなのだ！ もはや何人たりとも、こオの私の計画を止めることはできないイ！」

ヴェエアハハハハハハハアツ！」

両腕を広げて高らかに哄笑を響かせるゲンムを前に、ビルドは再びフルボトルバスターを構え直した。

「だとしても。俺の仲間たちは、必ず乗り越えるさ」

「フン、天才物理学者の返答とは思えないな桐生戦兎オ！ これからなにが起こるのか知りもせず——」

「おまえこそ、知らないのか？」

「……なに？」

ゲンムの嘲笑を遮る戦兎の声に、さしものゲンムも笑いを止める。

ビルドはフルボトルバスターを緩くおろすと、己の指先で自分のこめかみをつついた。

「バカつてのは、ときに俺たち天才の想像を越えた奇跡を起こす。物理法則を覆す……！ それは、独りよがりな計算でしか物事を測れないおまえには、決して生み出せない力だ！」

ゲムムは最前までの狂ったような笑みを消し去り、深く息を吐いた。

「……フン。不愉快な男だ。いいだろう、ならばその行く末に待つ破滅を、身をもって知るがいい！」

ビルドの周囲の床に、闇が広がった。

そこから、無数の兵隊が湧き出てくる。仮面ライダーゲムムの装甲を身に纏ったゾンビの群れだ。

意思を持たず、本能だけで動くゾンビの群れが殺到する。ビルドは、フルボトルバスターを振り抜いて、最初に迫ってきた群れを纏めて薙ぎ払った。

「ラブアンドピースを胸に掲げて戦う限り、俺たちは絶望なんてしない」

ここまでともに戦ってきた仲間たちを胸に思い描き、誰にも見えない仮面の下で、戦兔は笑った。

ランサーによって撃破され、消滅したゲムムの数は、既に本人にもわからない。とにかく、溢れ出るゲムムを片っ端から倒し、打ち砕き続けた。戦兔との約束の通り、一匹

たりとも、戦兎達のあとを追わせることはしなかった。

事ここに至るまで、ランサーの鎧にも、そのきめ細かな肌にも、ただひとつの傷さえも見受けられない。意思を持たぬゾンビが何体群れたところで、一騎当千の英霊であるランサーに太刀打ちできるはずもないことは、火を見るより明らかだった。

「――」

ふいに、ランサーは槍を振るう手を止めた。

ゲムムの群れが、一斉に地べたの闇の奥へと姿を消してゆく。

代わりに、城の方向から現れたのは、黒と薄緑の装甲を身をまとったひとりの仮面ライダーだった。

仮面の意匠は、ゲムムとよく似ている。だが、ここまで無数になぎ倒してきたゲムムの群れとは、本質的に空気感が異なっている。

「そなたは……」

油断なく槍の切っ先を向ける。

緑のライダーは無言のまま立ち止まった。

およそ人らしい意識を感じない。殺意もなければ、敵意もない。意思のない人形と相対しているような違和感を、ランサーは覚えた。

「この期に及んで人形を差し向けてくるとは……この長尾景虎、随分とナメられたもの

です」

笑顔のまま吐き捨てるランサーに対し、薄緑のライダーは両腕で静かにベルトを叩いた。

『PAUSE』

巨石に阻まれた空間に、電子音が鳴り響く。

「——がつ」

なにかが起こったのかを理解するよりも先に、ランサーはその場に崩折れた。槍が手からすべり落ちる。地に膝を付き、喉の奥から這い上がる血をごぼごぼと吐き出して、前のめりに倒れ込む。全身の鎧は、既に碎けて散らばっていた。

地に顔をつけるのは、これが初めてだった。

「ばか、な——」

見開かれた瞳に、下手人たる仮面ライダーの後ろ姿が映る。

薄緑のライダー——仮面ライダークロノスは、既にランサーを見ていない。次の獲物を求めて、迷宮の奥へと消えていった。

第34話「ローグ新生」

かつての戦友が、地べたに這いつくばってこちらを睨めつけている。一騎打ちの果てに、ランスロットが太陽の騎士ガウエインを下したときの記憶だった。生前の、遙か昔の記憶だ。

決闘を申し入れてきたのはガウエインの方だった。許されざる不義の黒騎士を討つため、忠節の騎士は義憤の炎を燃やしてランスロットに勝負を挑んだのだ。

太陽の騎士は、陽の光のもとに聖者の加護を受け、絶対的な戦力差でもってランスロットを苛烈に攻め立てた。誰も、陽の光のもとでかの騎士を打ち破ることは叶わな

い。だが、それでも、最後に勝ったのはランスロットだった。

何度打たれ、攻め立てられても、ランスロットは立ち上がった。苦境に耐え、太陽の加護が消失する日没まで、決して戦いを投げなかった。

「Ga……ww——」

眼前に立ち塞がる燃える炎の男を見ているうちに、ランスロットはいつからか生前の友の姿を思い出すようになっていた。

何度斬りつけ、打ち据えても、クローズマグマは燃え盛る炎をまとって立ち上がる。拳を握りしめ、その胸に宿る灼熱の闘志をランスロットへ向けてくる。

立場は逆だが、生前のあの戦いを思い出さずにはいられない。

いつそ、なにも考えることのない狂戦士のままでいられたならよかった。

地球外生命の因子を取り込んだときからか、それともアサシンの霊基を取り込んだときからか。いつからかは判然としないが、ランスロットの霊基は、既に英霊バーサーカーとしての枠を逸脱していた。今は、刻一刻と思考がくつきりとした輪郭を持ち始めている。

こんなことならば『進化の因子』など取り込まないほうがよかった。ただ、狂戦士として意思もなく暴れているうちに、誰かに倒して貰った方がずっとマシだった。

騎士の誇りを捨てた己を自覚することが、こんなにも苦しいだなどと思ってもみなかった。

明らかに動きが鈍り始めた仮面ライダーブラッドの眼前に、再びクローズマグマが立つ。

「オイ、どうした……動きが、鈍ってんぞッ！」

ブラッドの反応が遅れた一瞬のすきをつけて、背中のスラスターからマグマを噴射して肉薄してきたクローズマグマの拳が、ブラッドの仮面を打ち据えた。

「——ッ!?!」

燃え盛る溶岩の手甲が炸裂し、確かな熱量が装甲を突き抜けてランスロットの肌を焼く。

クローズマグマの全身の装甲から、太陽フレアを思わせる炎が噴出した。常人ならばとつくに限界を超えているはずのコンディションに追い込まれてなお、クローズマグマの闘志は熱く燃えたぎっている。

「うおおおおおおらあああああッ!!」

咄嗟に聖剣アロンダイトを盾代わりに構えるが、その刀身を燃える溶岩の拳が殴りつけた。ガイイン、と鈍い音を響かせて、ブラッドの腕にまで痺れが伝播する。

燃える炎の拳は赤熱する灼熱の軌跡を描きながら、二度、三度とブラッドめがけて打ち込まれる。やがて、アロンダイトの守りがはじき上げられた。クローズマグマの炎のアップラーが、ブラッドの胸部装甲を打ち据え、炸裂した。

「Ga、aaaaaaa——ッ」

爆裂する溶岩フレアの熱に足元をぐらつかせながらも、ブラッドはアロンダイトを振り上げ、瞬時に魔力を漲らせたその刀身でクローズマグマの溶岩の装甲を縦一線に斬り裂いた。

その切り口から魔力が溢れ出し、再びクローズマグマの胸部で魔力と溶岩の輝きがは

じける。攻め込んできたはずのクローズマグマが逆に吹き飛ばされ、再び巨石に背中を打ち付けて崩折れた。

手応えでわかる。直撃だ。だがもう、ランスロットには、ただの直撃程度でこの一騎打ちが終わると思えなかつた。

「う、おおおおお……ッ！　まだ、だ……！　まだ、終わらねエエエッ!!」

クローズマグマは、火の海と化した地べたを殴りつけて立ち上がった。

心のどこかで「それでこそだ」と思う自分がいた。クローズマグマの不死身のタフネスに、ランスロットはもう、今更驚くことはなくなっていた。

アーチャーとスタークの動きに翻弄されながらも、綺礼はまだ己の動きに余裕を感じていた。アーチャーの動きはたしかに驚異的だが、令呪によるエンチャントを得れば対応することは容易い。スタークに関しては、一撃の威力は大きいかもしれないが、基本的なスペックはやはり人間の枠を逸脱していない。

これでは、綺礼を殺すには足りない。

「ハッ！」

背後から高速で迫り、綺礼の首を狙って振るわれたアーチャーの一刀を身を振って回避し、黒鍵を投擲する。アーチャーはすかさず黒鍵を叩き落とすが、そこへ攻め込んで

きたのはスチームブレードを構えて飛び込んできたスタークだった。

腕だけを振るって黒鍵で剣を打ち返すと、スタークはすでに脇腹にトランスチームガンを構えていた。それを認識したときには、既にボトルのエネルギーが充填された光弾が連射されていた。

「……ッ」

地を蹴って身を翻した綺礼は、光弾をかわしながらスタークの仮面を蹴り飛ばし、跳躍する。そこを狙って飛来したのは、アーチャーの放った弓矢の一撃だった。

「宝具か——ッ！」

光り輝く魔力を内包した矢の一撃には、さしもの綺礼も肝が冷えた。

アレはおそらく、綺礼を確実に捉えて炸裂するタイプの宝具だ。回避することに意味はない。万事休すかと思われたそのとき、下方から煙幕をたなびかせて高速で駆け上がってきたのは、スタークの放った光弾だった。

スタークのスチームショットは確実にアーチャーの宝具に狙いを定めて急迫し、綺礼に着弾する前に迎え撃った。同時に、炸裂する。綺礼はケブラー繊維で編み込まれた僧衣の袖で頭を庇う。爆発した魔力に煽られ、綺礼は吹き飛ばされる。

「……貴様」

「悪いなアーチャー。俺も綺礼を狙って撃つたんだが、どうやら間が悪かったらしい」

挑発的な笑みとともに紡がれた謝罪に、アーチャーが言葉を返すことはなかった。地べたを転がって受け身を取った綺礼に向かつて跳ぶ。そのときには既に体制を立て直していた。

再び、アーチャーの刀と黒鍵がぶつかり合う。そこからは、人間の限界を越えた超速度での相克が繰り返される。互いの剣が、光の軌跡だけを残して激しくぶつかり合う。ちらと視線だけをそらせば、スタークは再びライフルを構え、スチームショットの構えに入っていた。直感的に察する。今度の一撃は、間違いなくこちらを狙ってくる。

「チッ」

小さく舌を打ち、アーチャーの足元を払う。当然のように回避されるが、一瞬攻め手が緩んだのは間違いない。ほんの一瞬舞い込んだタイミングを逃すことなく、令呪によるエンチャントを得て威力を高めた一刀でアーチャーの刀を弾き返した。

即座に身を翻し、スタークの放ったスチームショットの弾丸を真正面から叩き落とす。同時に、煙幕が噴出し、この場の全員の視界を遮る。

“——来るか”

全員の視界がおぼつかない煙幕の中、スタークだけが蛇のように自在に動き、瞬く間に綺礼の懐へ飛び込んでくる。

振り下ろされたスチームブレードと、綺礼の黒鍵が激突する。互いの得物がせめぎ合

い、動きが止まったその瞬間、スタークは微かな声で囁いた。

「おい綺礼、いつまで遊んでるつもりだ？」

「なに」

「もう気付いてるんだろ、黎斗の遊びに付き合ったところで、おまえが満たされることはない」

「おまえには関係のないことだ」

スタークの剣を弾き返し、追撃に出ようとしたところで——煙幕が、吹き飛んだ。

超高密度の魔力の塊が空から飛来して、あたりを包む煙幕を引き裂いたのだ。

綺礼の目が捉えたのは、今まさにこの場を扶ろうと急迫する虹色の剣と、それを放つために舞い上がった赤い弓兵の姿だった。

“もろとも始末する気か”

綺礼は自嘲した。アーチャーは、既に綺礼とスタークの両方を敵とみなしている。

こどもも早くスタークを捨て駒にすることは意外といえば意外だが、その認識そのものが甘かったと自覚する。衛宮切嗣は、そういう男だ。

すかさず令呪によって臂力を跳ね上げて、綺礼はスタークのスチームブレードを弾き飛ばした。同時に、その襟首を掴み上げ、足首を払う。

身動きを封じられたスタークが——ほんの一瞬、嗤った。

「ああ、それでいい」

アーチャーの放ったカラドボルグの一撃が、スタークの胸部装甲に突き刺さり、炸裂した。暴力的な魔力の奔流が周囲の巨石をまとめて吹き飛ばすが、綺礼はもう逃げはしなかった。

スタークの身を盾にして、身を焼く魔力ダメージを令呪で即座に回復しながら、爆心地の中心でひたすらに耐える。

やがて爆発が収まったとき、綺礼の代わりにアーチャーの宝具ダメージを真正面から受け止め、力尽きたように崩折れるスタークの腹部を貫いたのは、綺礼の黒鍵だった。

「うおおおおおおおッ!!」

裂帛の叫びを響かせて、クローズマグマはブラッドの間合いに飛び込んできた。

振り下ろされたアロンダイトの一撃を肩の装甲で受け止めながら、同時に炎の拳をブラッドの仮面に叩き込む。矢継ぎ早に、燃える炎の蹴りがブラッドの腹部を蹴り飛ばした。同時に溶岩フレアが爆裂して、ブラッドの装甲を焼く。

「——っ!?!」

「ツらあああ!!」

数歩後退ったブラッドめがけて、マグマのジェット噴射で加速を得たクローズマグマ

の拳が、上段から振り落とされる。振り上げた剣と拳が激突し、魔力とマグマが噴出する。爆風が脆くなった巨石を吹き飛ばし、突風が周囲の火を巻き上げる。

「G a a a a a a a a a a ツ!!」

ブラッドは力いっぱいアロンドイトを振り払い、クローズマグマの拳を弾き返す。一瞬体制を崩したクローズマグマの腹部に、閃いた刀身の一撃を浴びせる。魔力と溶岩が吹き出して、またしてもクローズマグマは吹き飛んだ。

「——アアアアアアアツッ! まだだアアアアツ!!」

今度は、今までとは違った。

吹き飛ばされながら、クローズマグマはベルトのレバーを勢いよく回した。電子音声が鳴り響く。周囲の火がより集まり、燃える溶岩の八岐龍マグマライズドラゴンを形成する。龍の咆哮が大地を震わせる。

ブラッドに吹き飛ばされたクローズマグマは、スラストから噴射したマグマで体制を立て直すと、逆に巨石を蹴って、空へと飛び上がった。

いつの間にか、キャスターが呼び込んだ暗雲は吹き飛んでいた。空に燦然と輝く太陽の光が、ブラッドの視界を焼く。

「——ツ」

「うううウウツ……わアアアあああああああああアツ!!」

太陽を背に、燃え盛る炎の男は裂帛の絶叫を響かせて、その蹴り足をブラッドへと向けた。

炎のドラゴンが、クローズマグマの脚部へと収束してゆく。一瞬ののちには、クローズマグマは太陽よりも眩しく燃える、炎の流星と化していた。

“嗚呼、そうか——”

妙に冴えた頭で思考する。

意識とは裏腹に、獣と化した体は自然と動く。重たい剣を振り上げて、最後の魔力を捻出する。かりそめの主から膨大な魔力を吸い上げて、赤黒い魔力の輝きを宿した剣を構え——魔剣と化したアロンダイトと、極熱必殺ボルケニツクファイニツシュがぶつかりあった。

光が迸る。衝撃が、周囲に残った巨石を纏めて吹き飛ばす。

灼熱の炎と化したクレーターの中心で、クローズマグマの必殺のライダーキックは、アロンダイトごとブラッドの胸部装甲を穿った。そこから極熱のマグマが噴出し、周囲のすべてを焦土へと変えてゆく。

“——此度は、貴公の勝ちか”

聴覚は濁り、嗅覚は鉄の臭いで塞がれている。あらゆる感覚が消失してゆく中、ぼやけた視界にランスロットが認めたのは、空に輝く太陽と、それに負けないほど熱く眩い

火を放つ、燃える炎の男の姿だった。

クローズズマガマのライダーキックは、間違えようもなくランスロットの霊核を打ち砕いた。

最後の瞬間、もつと魔力を要求すれば、或いは打ち勝つこともできたのかもしれない。だが、それをするには、もう——この体が持たなかった。

本来ならばとつくに消失しているはずの霊基を、蟲による魔力と、地球外生命の因子、そしてアサシンの霊基でむりやり繋ぎ止めていたのだ。この体はすでに、人の子のそれではない。ただ壊し、喰らうだけの化け物だ。

誇り高き湖の騎士の剣技は、化け物の体にはあまりにも重すぎた。

体が光となって消失してゆく。霞ゆく視界の端に見える紅炎に、ランスロットはかつての友の勇姿を見た。

「私は王に、刃を向けた。狂気に身をやつし、騎士の誇りすら捨てて——」

自分にはもはや、願う資格すらない。そんなことはわかつている。だが、それでも。自分という存在が完全に消えてしまう前に、震える喉から、掠れた声を絞り出した。

「——王を、頼む。忠節の騎士……太陽の如き、炎の男よ」

その言葉が正しく届いたかどうか、もうわかりはしない。

それでもランスロットは願う。今もなお、悪しき呪縛に囚われたまま苦しむ王の救済を。

たったひとつの願いを残して、長らく囚われ続けていた騎士の魂は、今、ようやく解放された。堕ちた魔剣とともに、ランスロットの霊基は光の粒子となって、完全に消失した。

シヤドウバーサーカーが完全に消滅するのを見届けると、クローズマグマの装甲は消失した。とつくにライダーシSTEMの限界を越えたダメージを受けていたが、それでも根性で変身をもたせていたのだ。万丈は肩で息をしながら、天を仰いだ。

「しよーがねえな………テメエの願いも、俺が背負ってやるよ」

左の手のひらに右の拳を打ち付けて、焦土と化した庭園を、万丈は歩き出す。

まだ戦いは終わっていない。今も城内で戦っている仲間たちを、放っておくことはできない。ふらつく足取りで、それでも万丈は一歩ずつ前進してゆく。

崩れ落ちる石動惣一の体から、黒鍵を引き抜く。背中と腹部から鮮やかな赤を垂れ流し、どざりと落ちる石動を、綺礼は冷えきった氷の眼差しで見下した。

ごふ、と無様に咳き込んで、石動の口元からも多量の血液が吐き出される。焦点の定まらない視線を綺礼へと向けて、石動は笑った。

「ごぼツ、がふ……っ、これ、で……親父の仇は……討てた、な」

この期に及んで紡がれる軽口を聞き流し、綺礼は深く息を吐いた。

「今一度問おう。石動惣一、おまえは私になにを望む」

「やりたい、ように……やればいい。おまえの、悪性を……見せつけてやれよ」

最期ににと微笑むと、石動は静かに瞳を閉じた。

「——また会おうぜ、綺礼」

それが、真正正銘、石動惣一が遺した最期の言葉となった。

何人もの標的を処刑してきた綺礼にはわかる。疑いようもない、完全な死だ。アーチャーの宝具の直撃を受けた上で、黒鍵でトドメを刺したのだ。サーヴァントが相手であつても、確実に死ぬ。

そう間を置かず、石動の遺体は真紅の靄となつて消えた。カラン、と音を立てて、トランスチームガンが地に落ちた。

——上等じゃねえか。おまえにやられるなら、俺は本望だよ

あの地下室で石動が言った言葉は、或いは本音だったのかもしれない。

最初から、石動はこの結末を求めていたのかもしれない。取り留めのないことを考えて、それから綺礼は、自嘲した。

ちようど時を同じくして、シャドウバーサーカーから吸い上げられる魔力の反応が消

えた。あの仮面ライダークローズとの戦いに敗れ、消滅したのだろう。

くつくつと嗤いながら、綺礼は足元に転がるトランスチームガンを拾い上げた。

「そろそろ潮時だな」

冷徹な眼差しで油断なくこちらを伺うアーチャーに向き合うと、綺礼は懐から取り出した一本のフルボトルをトランスチームガンへと装填した。

決戦前夜、石動が地下室に置き去りにした紫色のフルボトルだ。

『B A T』

フルボトルの前面に、コウモリの紋章が浮かび上がる。

「蒸血」

綺礼はトランスチームガンを構え、引き金を引いた。

かつて生前の石動がそうしたように。

『M Y S T M A T C H！』

『B A T・B A・B A T』

『F I R E！』

軽快な電子音声とともに吹き出した煙幕が綺礼の体を覆い、僧衣の上から漆黒の装甲を装着させる。

ブラッドスタークと同じ、スチームシステムによって構築された、蝙蝠の鎧。暗く閉

ざされた煙幕の中、胸元に刻まれた蝙蝠のシルエットと、黄金のバイザーがひときわ眩く光を放つ。

綺礼は、蝙蝠の戦士——ナイトローグへの変身を果たしていた。

再び双剣を構え、次なる戦闘に備えるアーチャーを後目に、ナイトローグは頭部の煙突からもうもうと煙幕を噴出する。

綺礼の意図を察したアーチャーは、すかさず地を蹴り煙幕の中に飛び込むが、既にそこにナイトローグの姿はなかった。双剣を振るい、煙幕を切り裂くが、ナイトローグはどこにもいない。

逃げられた。そう思った次の瞬間、アーチャーは地を蹴り跳び上がった。

直前までアーチャーがいた地点が爆発する。空に舞い上がると同時に、アーチャーは新たな敵の到来を認めた。

「……やれやれ、また仮面ライダーか」

アーチャーの宝具でこの辺り一帯の巨石はすべて吹き飛ばされている。そうしてできた広場に、黒と緑の装甲を纏った仮面ライダー——クロノスが姿を現した。

空中で身を翻したアーチャーは、すぐさま弓矢を形成すると、投影魔術で精製した宝具の矢をつがえ、弦を引き絞る。それを放とうとしたその瞬間、クロノスは両手で力強くベルトのボタンを押し込んだ。

『PAUSE』<sup>ホー
ズ</sup>

「——ッ!?!」

空中にいた筈のアーチャーの姿勢が崩れた。全身に焼けるような痛みを感じる。まるで幾重にも銃弾で撃たれたかのような激痛の中、地に落ち行くアーチャーは見た。

——今しがた放った宝具が、誰もいない場所に着弾する瞬間を。

かろうじて受け身を取りながら地面を転がったアーチャーのすぐそばで、宝具が炸裂する。自分で放った魔力の炎に焼かれることにはならなかったが、それでもアーチャーはここへ来て初めて焦りを覚えた。額には脂汗が滲んでいる。

“なにが起こった……!?!”

クロノスは、一秒前とはまったく異なる場所で、悠然と佇立している。その手に握られたガシヤコンマグナムを見たとき、アーチャーはひとつの仮説を立てた。

“時を、止められたのか……?”

まつさきに思い浮かべたのは、衛宮切嗣が扱う固有時制御だ。^{タイムアルター}自分の時間を加速させて、周囲の時の流れから切り離す特殊魔術。だが、タイムアルターを使えば、即座に世界からの修正を受ける。時を止めるほどの能力を行使して、何事もなく戦闘を継続することなどできるのか——

「ッ」

疑問を振り払い、アーチャーは今度こそ油断なく、音のような速度で駆けた。

常人が反応できる速度を越えて、クロノスの懐へと飛び込む。なにもない場所からガシヤコンソードを精製したクロノスと、互いの剣を打ち合わせる。

幾重にも金属音を響かせて、両者の刃がしのぎを削る。ほんの数秒の相克ののち、クロノスの剣の守りを崩したのは、アーチャーの双剣だった。すかさず急所たる首筋を狙って剣を閃かせる。

対するクロノスは、既に体制を崩されている状態から、むりやりガシヤコンソードを割り込ませて、アーチャーの攻撃を受けた。防戦一方の、やぶれかぶれの戦法だ。まともな英霊ならば、これをやった時点で次に続く手がないことを知っている。だから、やらない。

——だが、この敵は違う。

アーチャーの読み通り、ガシヤコンソードは弾き飛ばした。だけれども、同時にその衝撃で後退ったクロノスに、数歩分とはいえ距離を取られてしまった。

まずい、と感じるよりも先に、クロノスは両手でベルトを叩いた。

『PAUSE』

「——っ!!」

次の瞬間、吹き飛ばされたのはアーチャーの方だった。

一度目のポーズは空中にいたからまだよかった。二度目は地上だ。銃撃だけでは済まない。

血反吐を吐きながら地べたを転がったアーチャーは、即座に自分のコンディションを認識する。おそらく、蹴りかなにかを受けたのだろう。肋骨と内蔵が破壊されている。霊核に届いていないことが不幸中の幸いだった。

すぐに切嗣から魔力を吸い上げ、体の修復に入る。立ち上がろうと試みるが、上半身の感覚がない。重たい疲労感が全身に伝播し、指を動かすことすらままならなかった。間違いない。この敵は、ノーリスクで時間を止めることができる。

時間停止の起動スイッチは、ベルトの二つのボタンだ。あれを押される前に仕留めれば、こちらにも勝機はある。そこまでは理解したが、しかしこの状況から逆転することは難しい。

一度霊体化し、戦線を離脱するべきか。

そう考えはじめたときだった。

「随分と……苦戦、しているようですねえ」

ザツ、と。土を踏み締める音がアーチャーの耳朶を叩く。

視線だけを動かして、声の主を捉える。銀髪のランサー、長尾景虎がそこにはいた。

肩の鎧は既に砕け散り、胸元には血のあとが色濃く滲んでいる。美しかった白装束を

土色に汚しながら、それでもランサーは喜色の笑みを絶やすことなく、クロノスを睨めつけている。

「ランサー！ その仮面ライダーは時間を——」

「口出し無用ツ！ そのようなこと、そなたに言われずとも分かっている！」

アーチャーの警告を遮って、ランサーは吠えた。

ぶんと槍を振り回し、構えを取る。深く息を吐いて、ランサーは眼前のクロノスを見据えた。

令呪を使って体力と魔力を回復させるべきだというマスターからの打診は届いている。だが、それをランサーは拒否した。全身に鈍い痛みを引きずったまま、ソラウから供給される魔力だけで這い上がり、この戦場まで己の足で歩いてきたのだ。

そしてケイネスは、それを許してくれた。

既に致命傷を負ったサーヴァントに、時を止める敵への反撃を許してくれたのだ。

ならば、二度目の無様を晒すわけにはいかない。その相貌に、剣のように鋭く輝く闘志を滾らせて、ランサーは槍の切っ先を突きつける。

「時の理すら乱す術とは、大したものです。ええ、まったく恐れ入りましたとも。……で、それだけです？」

槍の切っ先を向けられたクロノスは、しかしなにも言い返さず呆然とランサーを見据

えるだけだ。

おそらくクロノスは、自分が今なにを言われているのか、自分が置かれた状況すらも理解していない。己が虎に睨まれた獲物であるということを、理解できていない。

ゆえにランサーは、確信とともに叫ぶ。

「——そなたには、なにもない！ 戦を生き抜く心得も、勝利を渴望する魂すらも！ この長尾景虎、そなたのような木偶に敗れるほど堕ちてはおらぬッ！」

敵が時間を止めるならば、それよりも速く駆け抜けければいい。

空を駆ける飛燕の如く、この一撃に全身全霊をかけて、生道を切り拓くのみ。

「毘沙門天ぞ是にありッ！ 刮目せよ、これぞ軍神の一太刀なり……！」

腰を落とし、槍を低く構える。

感覚が研ぎ澄まされ、不要な情報はすべて断ち切る。

ここにあるのは、虎と、獲物。そのふたつだけだ。ほかになにも必要ない。

両手を掲げ、ベルトを叩こうとするクロノスを前に、ランサーは叫んだ。

「いざ、参るッ！」

刹那、ランサーの姿が掻き消えた。

音より速く、光のように鋭く。迷いのない一撃が、風のように吹き抜けた。

ほんの一秒にも満たない刹那のうちに、ランサーはクロノスの背後を取っていた。

一瞬遅れてベルトを叩くが、時間停止はもう、発動しない。ベルトはただ、火花を噴出させるだけだった。

「!? ———— ???」

ベルトを破壊され、時間停止能力を失ったクロノスは、困惑した様子で自分の両腕を眺めている。

慌てて振り返ったところで、ランサーの槍が、クロノスの胴体を貫いた。

クロノスの手がだらんと落ちる。装甲が消失するが、やはり中には誰も入ってはいない。緑色のピクセルデータの残像だけを残して、クロノスは消滅した。その残像も、やがて大気に溶けるように消えていった。

「フン。まあ、当然の結果といえよう」

作戦会議室と化した居間のテーブル上に設置されたモニターの映像を眺めながら、ケイネスは自慢げに鼻を鳴らした。

仮面ライダークロノスからの奇襲を受けた際、ケイネスは即座に令呪を切ってランサーを回復させようとした。けれども、それを拒否したのは他ならぬランサー本人だった。

令呪がなければ戦えないようなサーヴァントだと思われることは、私には耐えられな

いと、ランサーはそう言ったのだ。

少し前のケイネスならば、問答無用で令呪を切っていたことだろう。だが、今は違う。ここまでランサーはケイネスの期待に応え続けてきた。だから、少しだけ猶予を与えてもいいと思った。

「お見事です、ロード・エルメロイ。流石は戦国最強、上杉謙信とでもいうべきか」

「自分の祖国で戦っているのだ、これくらいはやってもらわねば困る。この程度、褒めるほどのことでもなからう」

あえてモニターを見ずに、自分の使い魔から送られてくる視覚情報のみで戦況を把握していた時臣の世辞を適当に聞き流しつつ、ケイネスはちらと切嗣に視線をやる。

切嗣のアーチャーもランサー同様にクロノスに重症を負わされていたようだが、当の切嗣はなんの迷いもなく一画目の令呪を切っていた。膨大な魔力リソースが送られ、アーチャーは既に回復して自力で立ち上がっている様子だった。

その判断をなじろうとは思わない。まっとうなマスターであれば、当然の対応だ。ケイネスとしても、やはり令呪による回復を行ったほうがいいのでは、と。そう思いつけたところで、ふいにランサーとの思考のパスが繋がった。

“あのう、ケイネス殿”

“……なんだ、ランサー。先程の戦闘はよくやったが方だが、まだ褒めてやるには早

いぞ。なにしろ、諸悪の根源たるルーラーはまだ残っているのだからな”

“ええ、ええ。それはもちろんですとも。で、ですね……そのためにもお願いがあるのですが”

“……なんだ、言ってみよ”

頭の中に直接響くランサーの声音が、わかりやすい猫なで声になった。

“あのですね。やっぱり令呪の回復とか、お願いしても……”

“なッ……”

周囲には気取られぬよう、淡々と念話を交わしていたケイネスの表情が、歪んだ。

“なんだ貴様は、あれだけ見栄を切っておいて!”

“まあまあ、かの者はもう討ち果たしましたし、私の有能さは証明できたということ

でひとつ!”

ケイネスは深く息を吸い込み、思い切り吐き出した。

手の甲に刻まれた令呪を輝かせ、この聖杯戦争が始まって以来、はじめての令呪を切る。同時に、ソラウを通じて、ランサーへと膨大な魔力が注ぎ込まれてゆく。

時臣も切嗣も、ケイネスの令呪が一画消費されたことには気がついた様子だったが、なにも言おうとはしなかった。マスターとしては、やはり当然の行動であると認識されたのだろう。しかし、それはそれとして、一度は令呪を切らないと宣言した自分が令呪

を切ることになったのは、それなりの恥じらいがあった。

ふいに、屋敷の外でなにかが爆発するような轟音が響いた。

全員が顔を見合わせる。誰よりも先に動いたのは、衛宮切嗣だった。

愛用のキャリコ短機関銃を掴んで、コートを翻して廊下に飛び出る。ケイネスと時臣も、すぐに追従した。

廊下を抜けて正面玄関を出たとき、真つ先に視界に入ってきたのは、入り口の扉を木端微塵に吹き飛ばされた土蔵だった。中には自分ひとりで身動きの取ることのできないアイリスフィールがいることを、全員が知っている。

一瞬ののち、土蔵の中から、破壊された入り口をくぐって姿を現したのは、最前の戦いで姿を消したナイトローグだった。その肩には、意識を失いぐったりと項垂れるアイリスフィールが担がれている。

「……言峰綺礼」

キャリコの銃口を向ける切嗣に対し、ナイトローグはその仮面の下で微かな笑みを零した。

「小聖杯の女は頂いていく」

「そんなことを、この僕が許すと思うのか」

「おまえの許可など求めていない」

切嗣は、キャリコの引き金に指をかけたまま、固まった。

今撃てば、ナイトローグは間違ひなくアイリスファイルを盾にするだろう。いずれ聖杯に成り果てる運命だとしても、自分の手で撃ち殺すことは憚られた。

固有時制御御で接近することも考えたが、確実にアイリスファイルを奪い返す算段がないうちに動くことは危険だ。言峰綺礼は、間違ひなくアイリスファイルの命をなんとも思っていない。

状況の悪さに、切嗣は奥歯を擦り合わせた。

「——なんだ、その顔は」

ナイトローグの仮面から、言峰綺礼の、低くくぐもった声が響く。

「なぜそんな顔をする？ 撃てばいいだろう、おまえが今までそうしてきたように」

ほんの数秒の沈黙が、何十倍にも長い時間のように感じられる。やがてその沈黙を引き裂くように、ナイトローグはひどく失望したような嘆息を落とした。

「おまえには失望したよ、衛宮切嗣」

やおら掲げられたトランスチームガンの銃口から、光弾が発射される。

咄嗟に飛び退いて回避するが、それが切嗣を殺すことを目的として撃たれた光弾でないことは明白だった。地べたを転がって光弾を回避し、再びキャリコの銃口を向けたときには、既にナイトローグとアイリスファイルの姿は煙幕に包まれていた。

煙幕の中に、ふたりの気配は感じられない。切嗣は、キャリコを握りしめた腕を力なく下ろした。

時臣も、ケイネスも、誰も切嗣を攻めようとはしなかった。

ふたりのマスターからは顔を背けたまま、切嗣は深く息を吸い込んで、伏し目がちに瞑目した。

この期に及んで、なぜ言峰綺礼がアイリスフィールの身柄を奪いに来たのか。これからやつはどこへ向かおうというのか。奪い返すためにはどうすればいい。今すぐにもアーチャーを呼び戻して、綺礼を追跡させるべきか。幾重もの自問自答が思考を駆け巡っていく。

「……まずは檀黎斗を倒すことを優先するべきではないかね」

時臣が、静かに口を開いた。

「ルーラーを撃破し、聖杯を奪還する。なんとすれば、一度解体してしまうことも視野に入れて構わない。綺礼の目的が聖杯だとすれば、黙ってはいられまい」

「同感だな。私としても、聖杯戦争に勝利したという実績さえあればそれでよい。このような片田舎で製造された聖杯などに、はなから期待は寄せておらぬ」

ふたりの言葉に、切嗣は内心で驚愕していた。その驚きを決して表情に出すことなく、静かに振り返り向き、ふたりの顔を見比べる。

切嗣がりサーチした事前情報によって考えると、ふたりがこんな発言をすることは完全なる想定外だった。

「——聖杯は僕が手に入れる。解体には賛成できない……だが、そのために檀黎斗の撃破を優先すべきだというのは、同意見だ」

必要最低限の意思疎通を図ると、切嗣は踵を返して屋敷へと引き返す。

仲間意識などというものは微塵もない。ただ、目下共通の敵が檀黎斗であることに変わりはない。あの男を始末すれば、残る問題は言峰綺礼ひとりだ。

ひとつでも多くの問題を解決するために創意工夫を凝らすのは当然のことだといえる。今は思考を切り替えて、そのために動く方が有意義だと判断した。

庭園を抜けて城の正門にたどり着いた万丈は、同じく激戦を切り抜けてたどり着いたアーチャーとランサーの姿を認め、立ち止まった。

ふたりとも、身に纏った霊衣のあちこちが裂け、布地に赤黒い血の痕が滲んでいる。外傷はそれほどでもないようだが、その姿を見れば、激戦をくぐり抜けてきたのである。うことは容易に想像がつく。

再び出会えた仲間たちに、万丈は片手を掲げ、微笑みで迎えた。

「よお、そつちも大変そうだなー！」

「いえいえ、別に大したことはありませんでしたよ。そちらこそ、シャドウバースーカールはどうしたんです?」

「当然、ブツ倒したに決まってるだろ!」

「そうですかそうですか、それは何より」

ランサーは上機嫌そうににこにここと微笑んだ。

一方、その少し後ろを歩くアーチャーは、特段なにも言おうとはしない。いつも通りの無愛想さだ。

「……ん?」

そこで万丈ははたと異変に気付いた。

庭園が迷路になって離れ離れになる前は、もう一人いたはずだ。

「おい、スタークの野郎はどうしたんだよ」

「奴なら死んだ。下手人は言峰綺礼だ」

「なっ……」

一瞬、自分がなにを言われたのか理解できなかつた。

絶句する万丈に、アーチャーは続ける。

「当の言峰綺礼は既に戦線を離脱した。黒い蝙蝠の鎧を纏った姿に変身して、ね」

「黒い蝙蝠って……ナイトローグかよ!? なんて言峰の野郎がッ!」

「それは私に問われても困る」

アーチャーに掴み掛からん勢いで迫る万丈だったが、そのとき、城内で轟音が響いた。一瞬遅れて、白亜の石壁が吹き飛び、赤黒い闇が空へ向かって突き抜けていった。ブラッドが放ったアロンダイトの魔力放出と酷似した、闇の輝きだった。

ランスロットの最期の言葉を思い出した万丈は、城の壁に開いた大穴から、中の様子を伺った。

漆黒の闇を纏った偽りの聖剣を振るって苛烈な攻勢に出るセイバーオルタと、真紅の輝きを放つ魔皇剣で応戦するキバエンペラーの姿がそこにはあった。

互いが剣を一振りするたびに、溢れ出した魔力の衝撃波が周囲の一切を薙ぎ払い、城を揺らす。

既にエントランスホールは本来の姿を留めてはいない。むき出しになった地面と、そのクレーターの中心で、ふたりの英霊が人間離れした相克を繰り返している。

「……まずいですね。押されていますよ、黄金の」

ランサーが、低く唸った。

キバエンペラーの魔皇剣も、間違いないくセイバーオルタにダメージは与えている。だけれども、ダメージを与えたそばから、即座に回復されている。

逆に、セイバーオルタがキバの鎧に叩き込んだダメージを、キバエンペラーは回復す

る術を持っていない。

一見互角のように見える相克だが、消耗しているのは明らかにキバエンペラーの方だった。このまま戦いが長引けば、負ける。

疑いようなもない事実には、万丈は居ても立つても居られなくなり、飛び出そうとしたところで——ランサーに腕を掴まれた。

虎のように鋭い瞳が、正面から万丈を射抜く。口元は笑っているが、目は笑っていない。

「どうするつもりです、ライダー」

「助けるんだよ！ このままじゃネロがやられちゃうだろうが！」

「なんの策もなしに飛び込むつもりならやめておけ。ふたりがかりで挑もうと、消耗戦になれば勝ち目はないぞ」

ランサーの意図を、アーチャーが引き継いで口にする。その冷静さが気に食わず、万丈はアーチャーの襟首を今度こそ掴み上げた。

「ならどうしろってんだよ！ このまま仲間を見殺しにしろってのか!?!」

「そうは言っていない。助けに入るつもりなら、確実にことを成せる方法を選べと言っている」

万丈は、深く息を吐きながらアーチャーの襟から手を離した。

少し落ち着いて考えれば、アーチャーの言っていることはわかる。ブラッドとの戦いで消耗している今、考えなしに戦いに飛び込んだところで、セイバーオルタの標的がひとり増えるだけだ。だが、かといってどうすればキバエンペラーを助けられるのかが、万丈には思いつかない。

自分の無力さに腹が立つ。万丈は歯を食いしばり、瓦礫を殴りつけた。

「……策がないわけではない。賭けに近い手段ではあるがね」

一拍の間を置いて告げられた言葉に、万丈は顔をあげる。

アーチャーは、その鷹のように鋭い眼差しで、冷静に戦場を俯瞰している。自棄になった様子でもなければ、希望的観測でものを言っている様子でもない。

「だったら教えろ、その方法！ 手遅れになる前に！」